

ペルシア語文化圏における「神への愛」
—テキストマイニングを用いたアッター
ルのスーフィー詩の分析—

“Love for God” in Persianate World: Analysis
of ‘Aṭṭār's Sufi Poems through Text Mining

石川喜堂

博士（地域研究）

学位申請論文

ペルシア語文化圏における「神への愛」
—テキストマイニングを用いたアッター
ルのスーフィー詩の分析—

“Love for God” in Persianate World: Analysis
of ‘Attār's Sufi Poems through Text Mining

石川喜堂

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

2023年

目次

| | |
|--|------------|
| 凡例 | 1 |
| 序論 | 3 |
| 第1章 アッターールのテキストに関する先行研究 | 6 |
| 第1節 先行研究の種類 | 6 |
| 第2節 文学理論 | 13 |
| 第3節 量的分析 | 17 |
| 第2章 ペルシア語文化圏におけるアッターールの詩 | 19 |
| 第1節 ペルシア語文化圏の形成と発展 | 19 |
| 第2節 スーフイズムの形成とペルシア語文化圏における発展 | 23 |
| 第3節 ペルシア詩の歴史と概要 | 25 |
| 第4節 ペルシア文化圏におけるアッターールの位置づけ | 31 |
| 第3章 テキストマイニングを用いたアッターールの詩の分析手法 | 32 |
| 第1節 3章、4章、5章の概略 | 32 |
| 第2節 分析対象 | 32 |
| 第3節 テキストマイニングの定義と手法の紹介 | 35 |
| 第4節 本論文におけるテキストマイニング手法の選択 | 38 |
| 第5節 分析手順 | 41 |
| 第6節 実行する分析の要約 | 43 |
| 第4章 アッターールのテキストに対するテキストマイニング | 44 |
| 第1節 本章の分析の概略 | 44 |
| 第2節 分析手法の詳細 | 46 |
| 第3節 分析結果と考察 | 48 |
| 第5章 アッターール以外のペルシア神秘主義詩と同時代のテキストとの比較 | 194 |
| 第1節 本章の分析の概略 | 194 |
| 第2節 分析方法と対象 | 195 |
| 第3節 分析結果と考察 | 195 |
| 第6章 分析結果のまとめと考察 | 297 |
| 結論 | 302 |
| 参考文献表 | 306 |
| 謝辞 | 318 |

凡例

1. () は直前の語の説明あるいは原語の転写を示す。
2. ペルシア語のラテン文字転写表記については、ペルシア語の元の発音を重視して、基本的に『新ペルシア語大辞典』に従う。ただし、子音については、LC 翻字規則に従うことで、ローマ字転写表記がどのアラビア文字に対応するか明確にした。

| | | | | |
|---|---------|--|---|----------|
| ا | a,e,o,ā | | ص | ṣ |
| ب | b | | ض | ẓ |
| پ | p | | ط | ṭ |
| ت | t | | ظ | ẓ |
| ث | ṯ | | ع | ‘a,‘e,‘o |
| ج | j | | غ | gh |
| چ | ch | | ف | f |
| ح | ḥ | | ق | q |
| خ | kh | | ک | k |
| د | d | | گ | g |
| ذ | ẓ | | ل | l |
| ر | r | | م | m |
| ز | z | | ن | n |
| ژ | zh | | و | v,ū,ou |

| | | | |
|---|----|---|--------|
| س | s | ه | h |
| ش | sh | ی | y,ī,ei |

ローマ字転写の対応表

- 19世紀以前に活躍した人物名のローマ字転写とカナ表記は『岩波イスラーム辞典』に従う。
例：フィルダウスイー (Firdawsī Ṭūsī)
- アラビア語で書かれている書物のローマ字転写も『岩波イスラーム辞典』に従う。
- アッタール及び他のテキストのローマ字表記は以下に統一する。
『神秘の書』 = *Asrār-nāme*
『神の書』 = *Ilāhī-nāme*
『災厄の書』 = *Muṣibat-nāme*
『鳥の言葉』 = *Manteq al-Ṭayr*
『四行詩集』 = *Mokhtār-nāme*
『詩集』 = *Dīvān*
『聖者列伝』 = *Tazkere al-Ouliyā'*
『忠言の書』 = *Pand-nāme*
『驚異の顕現』 = *Mazhar al-'Ajāyeb*
『ヒーラージュの書』 = *Hilāj-nāme*
『真理の園』 = *Ḥadīqeh al-Ḥaqīqeh*
『精神的マスナヴィー』 = *Masnavī Ma'navī*
- 欧文文献の表題において、ペルシア語テキストの転写方法は論文によって異なるが、元の文献を重視して変更を加えない。
- 欧文文献において、イラン出身の研究者の著者名は転写法の差異から異なる場合がある。本論文では、本来の名前がアラビア文字で書かれているイランの人物名の表記は、別人物と誤解されないように2.の法則に準拠して記述する。
例：×Ehsan reisi→○Eḥsān Ra'īs
- ヒジュラ歴を併記する場合には、「ヒジュラ歴/西暦」とする。

序論

本論文の主題と目的

本論文は、地域研究の一環として、ペルシア語文化圏¹を対象に、現代のイラン・イスラーム共和国にあたるホラーサーン地方で活躍した 12 世紀の詩人、ファリードウッディーン・アッタール (Farīd al-Dīn Muḥammad ‘Aṭṭār al-Nīshābūrī, d. 617/1221?) のスーフィー詩を分析する。アッタールのテキストは、スーフィズムという思想、文学の表現方法、文学理論の応用によって分析されてきた。これらの研究は主に定性的な分析に基づいている。一方、本論文は、計算機の演算処理の能力の向上によって可能になった、テキストマイニングを用いることで、定量的な分析を行う。

本論文の目的は二つある。

第一に、多変量解析に基づくテキストマイニングを行うことによって、アッタール研究の先人達が定性的な分析によって導き出した結論に対して定量的な根拠を与える。量的な根拠が与えられることによって、結論に対して客観性を持たせることが可能である。すなわち、学者間での定説の正しさの根拠や理由を異なる側面から提供できる。

第二に、ペルシア語を対象としたテキストマイニング用のソフトウェアを提供することによって、ペルシア語文化圏を対象とした研究全てに寄与する。ペルシア語に特化したソフトウェアの有効性を、本論文の分析を通して示した後、誰でも使えるようにオープンソースとしてコードを公開する。そうすることによって、アッタールの研究にかかわらず、電子化されたテキストが存在する場合、ペルシア語を研究に用いる研究者は定量的な分析を行えるようになる。さらに、オープンソースで提供することによって、ソフトウェアの開発を行いたい研究者同士がインターネット上でやり取りをし、ソフトウェア自体の精度や機能向上を常に実行できる。その最初のきっかけを、本論文が与えることを目指す。

分析する対象と地域

本論文が分析する対象は、12～13 世紀の詩人である。具体的には、前述したアッタールのテキストを分析しつつ、その周辺の詩人のテキストとの比較を行う。アッタールのテキスト、アッタールとともにペルシア神秘主義詩人として有名なサナーイー (Abū al-Majd Majdūd ibn Ādam Sanā’ī Ghaznavī, d. 525/1130?) とルーミー (Jalāl al-Dīn Muḥammad al Balkhī al-Rūmī, d. 672/1273)、アッタールと同時代に活躍しそのテキストにスーフィズムの要素も含まれていると先行研究で指摘されているハーカーニー (Afzal al-Dīn Badīl ibn ‘Alī Khāqānī Sharvānī, d. 595/1199?)、アッタールと同じ地域で活躍したが時期と主に取り扱うテーマが異なるアンヴァリー (Anvarī Abīvardī, 575/1189?) が対象である。地域としては、アッタールが現在のイランのホラーサーン州に位置しセルジューク朝 (1038-1308) の中心地であったニーシャープール、サナーイーが現在のアフガニスタンのガズニー州に位置しガズナ朝 (977-1186) の中心地であったガズナ、ルーミーが現在のトルコのコンヤ県に位置しルームセルジューク朝の中心地であったコンヤ、アンヴァリーがアッタールと同じくセルジューク朝の中心地であったニーシャープール、ハーカーニーが現在の

¹ マーシャル・ホジソンが、Marshall G.S. Hodgson, “The Bloom of Persian Literature Culture and Its Time,” in *The Venture of Islam, vol.2, The Expansion of Islam in the Middle Period*, Chicago: The University of Chicago Press, 1974, pp. 293-315 において論じた、ペルシア語が形成した文化圏のこと。第 2 章において詳細に論じる。

アゼルバイジャンのシャーマーキ地区に位置したシルバン・シャー朝（861-1538）の中心地であったシャーマーキでそれぞれ活躍した。現代において、彼らが活躍した場所はそれぞれ別の国であり公用語も異なるが、かつて詩の言語としてペルシア語が使われていた地域であり、詩のモチーフやスタイルの伝播もあった。

先行研究と課題の所在

アッターールのテキストに関する先行研究は、国内においてほとんどない。一方、欧米やイランにおいては、半世紀以上前からあり、現在に至るまで研究が盛んである。これらの先行研究は大きくわけて、五つに分類可能である。

1. 思想に関する研究
2. テキストの構造に関する研究
3. 受容史に関する研究
4. 象徴に関する研究
5. 刊本や写本の真贋・信頼性に関する研究

すなわち、1.スーフイズムを含めたアッターールの思想がどのようなものであったか、2. テキストがどのような構成や構造になっているか、3. テキストやアッターール自身が他の時代や場所においてどのように受け入れられていったか、4. どのようなモチーフや伝統的な象徴がアッターールのテキストに関して使われていたか、5. アッターールの著作のうちの偽作と真作の分類、信頼のおける写本はどのようなものであるかの研究がそれぞれ行われている。

さらに、近年、文献学的な従来の研究手法とは異なる、ロシア・フォルマリズムや構造主義や物語論などの、いわゆる文学理論を用いた分析がアッターール研究の泰斗であるキャドキャニーをはじめ、アッターール研究において一定数行われ、2. のテキストの構造に関する研究において新たな視座を与えている。

しかし、従来の研究も文学理論を用いた研究も、一点において共通点を持つ。これらの研究は、論に対して数量的にその根拠を示さない質的な分析を行う研究である。質的な分析は、テキストに対する深い読みに基づいた成果を蓄積した。一方、量的な分析はアッターール研究において十分になされてこなかったのが現状である。その理由として、大量のデータやテキストを扱う量的な分析が近年の計算機の処理速度によってはじめて可能になったからである。人文系、特にペルシア語文献のテキストを対象にした定量分析は、国内、イラン、欧米でも十分な数がない。ある場合でも、包括的には分析されてこなかった。しかし、量的な分析は、従来の研究を否定するのではなく、全ての研究の根拠に量的な証拠を与えることによって、各論がより強固になる点において有益である。本論文は、まだ十分に発達していない量的な分析をアッターールのテキストに対して包括的に行うことで、今後のアッターール研究の発展に寄与することを目指す。

本論文の問い

本論文で答える問いは一つである。テキストマイニングを使ったアッターールのテキストの量的な分析は、既存の研究の主題や研究課題に対してどこまで答えることが可能かである。具体的にいえば、さらに以下の二点に分類できる。

1. 量的な分析は、定説にどこまで根拠を与えることができるか。
2. 量的な分析は、従来の方法では解明できないことを、明らかにすることができるか。

1.は、アッタールのテキストの偽作の問題に関する従来結論に対して、根拠を与えることを期待できる。

2.は、アッタールのスーフイズムの主題が「神への愛」とそれに伴う苦痛であり、幾つかの苦痛を表す単語があるという主張に対して、詳細な分析を可能にする。すなわち、テキストごとに苦痛を表す単語が、どのような割合で使われていて、アッタールのテキストの中でも、使用方法にどのような差異があるのか明らかにすることが期待できる。

方法論

地域という観点をペルシア語文化圏と広く取りつつ、その領域の中で活躍したアッタールのテキストとその周辺のテキストを、多変量解析を使ったテキストマイニングで分析する。さらに、ペルシア語を扱った研究の方法論の発展にも寄与するために、開発したペルシア語用のソフトウェアを通じて分析を行い、その有効性を示す。

本論文の構成

構成配下の序論、結論、先行文献リストを除くと、以下の6章からなる。

1章 アッタールのテキストに関する先行研究

アッタールの先行研究の分類と傾向を記述し、最後に量的な分析と本論文の可能性について示唆する。

2章 ペルシア語文化圏におけるアッタールの詩

アッタールが活躍したペルシア語文化圏の定義と広がり、その領域におけるスーフイズムと詩の発展について記述する。

3章 テキストマイニングを用いたアッタールの詩の分析手法

本論文で使うテキストとテキストマイニングの手法、テキストマイニングの一般的な手法、各国のテキストマイニング研究の動向について記述する。

4章 アッタールのテキストに対するテキストマイニング

3章で記述した、テキストマイニングの手法をもとに、アッタールのテキストにおける「神への愛」とそれに伴う苦痛、真偽問題について論じる。

5章 アッタール以外のペルシア神秘主義詩と同時代のテキストとの比較

3章で記述した、テキストマイニングの手法をもとに、アッタール以外の詩人のテキストを分析対象とし、最後にアッタールのテキストとの比較を行う。

6章 分析結果のまとめと考察

4章と5章の分析結果から、明らかになったことをまとめて、考察する。

第1章 アッターールのテキストに関する先行研究

第1節 先行研究の種類²

アッターールの詩作に関する研究の方向性は五種類に大別できる。(1) アッターールの思想に関する研究、(2) アッターールのテキストの構造に関する研究、(3) アッターールやそのテキストがどのように受容されてきたかについての受容史の研究、(4) アッターールのテキストに使われている用語が象徴としてどのように用いられてきたかについての研究、(5) アッターールの刊本や写本に関しての真贋・信頼性の研究である。(3) (4) は、アッターール及びそのテキストを研究の中心に置くというよりは、むしろ、(3) アッターールの思想やテキストがどのようにイスラーム世界とヨーロッパに受け入れられてきたかということ、(4) アッターールのテキスト内で使われる用語がイスラーム神秘主義、もしくはより一般的な宗教学的な文脈において象徴としてどのような意味を持つかということに焦点を当てている。故に、これら二つは(1) アッターールの思想に関する思想研究、(2) アッターールのテキストの構造に関する研究とは異なる。

また、これらの研究における研究手法としては、歴史的な背景を中心にして分析する立場と、テキストの分析を中心とする立場の二つに大別できる。

以上が、アッターールの詩作に関する研究の主な方向性、研究手法である。しかし、上記は厳密に峻別されるわけではない。多くの研究は特定の立場に根差しつつも、複合的な立場も取っている。たとえば、後述の、アッターール研究の古典であるヘルムート・リッターの『精神の大海 (Das Meer der Seele)』はアッターールの思想をテキストの分析を中心に研究する立場を取りつつ、歴史的な背景の分析で論を補っている。また、思想に関する研究と比べれば比重は少ないが、アッターールのテキストの構造について、歴史的な背景を中心にして分析している³。

以下、主要な先行研究を紹介する。

(1) 思想に関する研究

アッターール研究において最も重要な文献の一つは、ヘルムート・リッターの『精神の大海』である。この研究はバディー・アル・ザマーン・フォルザーンファルの『アッターールの作品の説明・批評・分析 (Sharḥ-e Ahvāl va Naqd va Tahlīl-e Āsār-e Sheykh Farīd al-Dīn 'Aṭṭār Nīshāpūrī)』とサイド・ナフィースィーの『アッターールの生涯と作品についての研究 (Joste-jū dar Ahvār va Āsār-e Farīd al-Dīn 'Aṭṭār Nīshāpūrī)』と並ぶアッターール研究における古典のひとつである。『精神の大海』においてリッターは『神秘の書 (Asrār-nāme)』、『神の書 (Ilāhī-nāme)』、『災厄の書 (Muṣibat-nāme)』、『鳥の言葉 (Manteq al-Ṭayr)』のテキストに登場する物語や思想を主題ごとに並べ直して、アッターールの思想について論じる。彼は、序文において、歴史的な背景を中心にして分析する立場を取らず、あくまでアッターールのテキストを中心にして分析する立場を採ると述べている⁴。実際に、彼は分析においてアッターールのテキストから多々引用する。一方で、彼は引用した言葉を解釈する際には、アッターールがどのような人物や思想の影響を受けていたのかということも示している。すなわち、アッターールがどのような文脈に位置付けられていたということを示すことによって、歴史的な背景からの分析も取り入れている。なお、『精神の大海』で分析されたアッターール

² 先行研究の分類に関しては拙論、石川喜堂「アッターールにおける先行文献サーベイと今後の研究の展望」『イスラーム世界研究』9巻（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター）、2016に基づきつつ、最新の研究動向を反映している。

³ Hellmut Ritter, *Das Meer der Seele: Mensch, Welt und Gott in den Geschichten des Farīd al-Dīn 'Aṭṭār*, Leiden: E. J. Brill, 1955.

⁴ *Ibid.*, pp. 32-33.

の思想を補遺する論文として“Philologika XV”がある⁵。この論文において、リッターはサナーイーやガザル形式の詩においてイランで最高峰の詩人と見做されてきたシャムスディーン・ハーフィズ（Hāfiẓ Shīrāzī, d. 792/1390?）とアッターールの比較を通してアッターールのテキストの構造についても言及している。また、この論文は、アッターールが使った用語と、最も後世に影響を与えたスーフィー思想家であるイブン・アラビー（Muḥyī al-Dīn Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn ‘Alī ibn al-‘Arabī d. 638/1240）が使った用語が異なるという現代のアッターール研究にも通じる知見を示している⁶。

リッターの『精神の大海』に対する批判としては、セイイェド・ホセイン・ナスルの「スーフィーの伝統におけるアッターールの位置づけについての諸観察（“Some Observations on the Place of ‘Attār within the Sufī Tradition”）」がある。リッターの研究を受けて、彼は、アッターールが受け継いだスーフィーの思想にリッターが指摘していない思想があることを述べ、アッターールにおいてそれら伝統的なスーフィーの思想が総合されていることを主張した⁷。さらに、アッターールが受け継いだと思われるスーフィズムの伝統に関して言及する⁸。この論文は、アッターールの思想における研究の未開拓な部分がまだあることを示唆するものとして極めて重要である。

一方、アッターールの思想の独創性を重視する立場としては、ヘルマン・ランドルトの「アッターール、スーフィズム、イスマーイール主義（“‘Attār, Sufism and Ismailism”）」がある。リッターとナスルはアッターールの思想が他の人々の思想をどのように受け継いだかということに着目している。ランドルトは、アッターールの思想は、アッターールが唯一会ったことがあるとされるスーフィズムの思想家でありクブラヴィー教団に属していたマジドウッディーン・バグダーディー（Majd al-Dīn Baghdādī d. 616/1219）の哲学批判の系譜とイスマーイール主義の考えを変容させつつ受け継いだものであり、アッターールは哲学批判を含む独創的な哲学を打ち出していると主張する⁹。はっきりとした形でアッターールの思想における独自性を主張し論じた研究はそれまでになく、重要な研究である。

なお、アッターールの思想に関する研究において最も多く主題になってきた要素は「神への愛」と「苦痛」である。リッターは『精神の大海』においてそれらについて 200 頁以上を費やして論じた¹⁰。スーフィズムの研究者アンネマリー・シンメルはアッターールの思想が苦痛や悲しみが基調になっていることを「苦痛の声」という形で表現している¹¹。レイリー・アンバルは人が変容するために愛や苦痛がアッターールにおいて重要であることを主張した¹²。ストーン・ルシアンは神への愛とそれに伴う苦痛に基づいてアッターールの『鳥の言葉』の谷の描写がなされていると説明した¹³。イランの学術論文検索サイト SID に 2000～2020 年に掲載された、アッターールの思想に関する論文においても、苦痛と「神への愛」についての研究はそれぞれ 8 件ずつあり、最もよく取り扱われているアッターール思想の要素である¹⁴。

⁵ リッターが執筆した *Philologika* のシリーズはアッターール研究において様々な知見を与えてくれる重要文献である。

⁶ Hellmut Ritter, “Philologika, XV. Farīd al-Dīn ‘Attār III,” *Oriens*, vol.12, no.1/2, 1959, pp. 1-88.

⁷ Seyyed Ḥossein Naṣr, “Some Observations on the Place of ‘Attār within the Sufī Tradition,” *Colloquio italo-iraniano sul poeta mistico Fariduddin ‘Attār*, 1978, pp. 5-20.

⁸ *Ibid.*, pp. 11-12.

⁹ Herman Landolt, “‘Attār, Sufism and Ismailism,” in Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *‘Attār and the Persian Sufī Tradition: The Art of Spiritual Flight*, London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 3-26.

¹⁰ Hellmut Ritter, *Das Meer der Seele: Mensch, Welt und Gott in den Geschichten des Farīd al-Dīn ‘Attār*, pp. 304-574.

¹¹ Annemarie Schimmel, *Mystical Dimensions of Islam*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1978, pp. 305-306.

¹² Leilī Anvar Chenderoff, “Without Us, from Us We’re Safe: Self and Selflessness in the *Dīvān* of ‘Attār,” *op. cit.*, pp. 241-254.

¹³ Stone Lucian, “Blessed Perplexity: The Topos of Ḥayrat in ‘Attār’s *Manteq al-Ṭayr*,” *op. cit.*, 2006, 95-111.

¹⁴ 愛を主題にしている論文は① Rasūlī Moḥammad Reẓā and Kīvmarsī Parīsā, “Bar-rasī-ye Mafhūm-e ‘Eshq az Dīdgāh-e Robert Sternberg dar Ḥekāyat-e Sheykh Ṣan ‘ān ‘Attār va Namāyesh-name-ye Fāntazī Sheyṭh

(2) テキストの構造に関する研究

アッタール研究において構造に関する研究の重要性を指摘したのはディック・デーヴィスである。彼は「理論的な枠組みとしての旅 (“The Journey as Paradigm: Literal and Metaphorical Travel in ‘Attār's *Manṭiq al-Ṭayr*”）」において、既存の研究がアッタールの持っていた思想の研究に重点を置きすぎていることを述べ、アッタールが著したテキストの構造に関してはほとんど注意を払ってこなかったことを指摘する¹⁵。その後、デーヴィスはアッタールの『鳥の言葉』を取り上げて、アッタールが物語全体の構造に注意を払い、読者をスーフィズムの真理に誘うために同じ構造を繰り返し登場させるということを行っているとして主張する¹⁶。デーヴィスのこの論文はアッタールにおけるテキスト構造に関する研究の先駆的なものとして意義のあるものである。

デーヴィスの後登場した構造に関する研究で示唆する箇所が多いもののひとつは、タキー・プールナムダーリヤーンの「アッタールの物語の構造的な研究 (“Structural Study of ‘Attār's Tale”）」であろう。デーヴィスは『鳥の言葉』の全体の構造について論じたが、プールナムダーリヤーンはアッタールの他の韻文テキストである『神の書』と『災厄の書』を比較し、それぞれの構造がどのようなものであるかをこの論文で明らかにした¹⁷。

前述した二つの構造に関する研究は、物語内において類似する構造や全体の構造からテキストの特徴を分析する研究である。一方、ファーテメ・ケシャーヴァルズの「鳥たちの飛

Şan‘ān Moḥammad Ḥosein Meymandī Nezhād,” *Adabīyāt-e ‘Erfānī va Oštūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e Fārsī)*, vol.15, Number 54, 2019, 109-133; ②Rasmī Sakīne and Hāshimī ‘Arqatū Seyyed ‘Alī, “Pīvand-e ‘Eshq va Zībāyī dar Āsar-e ‘Attār Nīshābūrī,” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.12, no.1, 2019, pp. 85-102; ③Salīmī Kūchī Ibrāhīm and Qāsemī Eshfahānī Nikū, “Bar-rasī-ye Bīnāmtānī-ye Haft Vādī-ye Eshq-e *Manṭeq al-Ṭayr*-e ‘Attār dar ‘Mard Nīm-tanah va Mosāferash’ az Āndre Shadīd,” *Pazhūhesh-e Adabīyāt-e Mo‘āser-e Jahān (Pazhūhesh-e Zabān-hā-ye Khārejī)*, vol.24, no.2, 2019, pp. 411-431; ④‘Abbāsī Zahrā, “Este‘āre-ye Mafhūmī ‘Eshq va Khūshe-hā-ye Ma‘nāyī-ye Mortabet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliyā’-e ‘Attār*,” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.12, no.2, 2018, pp. 117-146; ⑤Rūzātiyān Seyyede Maryam and Madanī Fāṭeme al-Sādāt, “Bar-rasī va Muqāyese-ye Janbe-hā-ye Ta‘līmī Do Mahfūm-e Ensāf va ‘Eshq dar *Tazkere al-Ouliyā’* va *Manṭeq al-Ṭayr*-e ‘Attār,” *Pazhūhesh-e Adabīyāt-e Nāme-ye Adabīyāt-e Ta‘līmī*, vol.9, no.33, 2017, pp. 61-90; ⑥Mokhtārī Masrūre, “Ābeshkhor-hā-ye Fekrī Shāh Dā‘ī Shīrāzī dar Sorūdān-e Maṣnavī *Chahār Chaman* (Radd-e Pāy-e Haft Shahr-e ‘Eshq-e ‘Attār dar *Chahār Chaman*),” *‘Erfān-e Eslāmī (Adyān va ‘Erfān)*, vol.14, no.53, 2017, pp. 57-81; ⑦Jalālī Shījānī Jamshīd, “Aql va ‘Eshq dar Naẓar-e ‘Attār Nīshābūrī va Najm al-Dīn Rāzī,” *Khodāyī Nāme*, vol. 1, no.1, 2012, pp. 41-61; ⑧Zakariyāyī Kermānī Īmān, “Jost va Jūy-e Haft Vādī-ye ‘Eshq-e ‘Attār dar Banāy-e Khāne-hā-ye Khodā,” *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāt-e Fārsī*, no.7, 2006, pp. 1-20.

苦痛を主題にしている論文：①Sangchūlī Samāne, “Darmān bī Dardān: ‘Dard’ Yekī az Nou-āvarī-hā-ye ‘Attār,” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 214-226; ②Ghafārī Solmāz, “‘Onsor-e Dard dar Āsar-e ‘Attār (*Manṭeq al-Ṭayr*, *Mušibat-nāme*, *Ilāhī-nāme*, *Asrār-nāme*, *Dīvān*),” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 262-277; ③Kār-āmūz Fathīye al-Sādāt, “Dard, ‘Atr-e She‘r-e ‘Attār (Bar-rasī-ye Touṣīfī-ye Mafhūmī-ye Dard dar *Manṭeq al-Ṭayr*-e ‘Attār Nīshābūrī, bā Erā‘e-ye Namūne-hāyī Chand az Sāyer-e Āsar-e Vey),” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no. 47, 2019, pp. 249-270; ④Karīm Pasandī Kūrs, “Mahfūm-e Dard az Dīdgāh-e ‘Attār,” *‘Erfān-e Eslāmī (Adabīyāt va ‘Erfān)*, vol.10, no.37, 2013, pp. 81-94; ⑤‘Alī Pūr Ne‘mat Allāh, “Dard-e ‘Ārefāne dar Āsar-e ‘Attār Nīshābūrī,” *‘Erfānīyāt dar Adab-e Fārsī (Adab va ‘Erfān (Adabestān))*, vol.52, no.2, 2010, pp. 62-79; ⑥Esfandiyār Sabīke, “‘Onsor-e Ghāleb-e ‘Dard’ dar *Mušibat-nāme*, Yekī az Mokhtaṣṣāt-e Sabkī ‘Erfān-e ‘Attār,” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.3, no.4, 2010, pp. 207-228; ⑦‘Ābedī Majīd, “Dard-e ‘Attār (Negāhī be Dar va Chashm-andāz-hā-ye Lafzī va Ma‘navī Ān dar Āsar-e ‘Attār Nīshābūrī),” *Adabīyāt-e Fārsī*, vol.5, no.24, 2009, pp. 36-51; ⑧Nik Rūz Yūsof, “Bar-rasī-ye Mafhūm-e ‘Erfānī dar She‘r-e ‘Attār,” *Kāvesh-nāme-ye Zabān va Adabīyāt-e Fārsī (Kāvesh-nāme)*, vol.9, no.17, 2008, pp. 209-247.

¹⁵ Dick Davis, “The Journey as Paradigm: Literal and Metaphorical Travel in ‘Attār's *Manṭiq al-Ṭayr*,” *Edeviyāt*, vol.NS4, 1993, p. 174.

¹⁶ *Ibid.*, p. 175.

¹⁷ Taqī Pūrnamdāriyān, “Structural Study of ‘Attār's Tales”, *An Anthology of Iranian Studies/Majmū‘e-ye Maqālāt-e Moṭa‘āt-e Īrānī*, vol.1, 1991, pp. 1-31.

行—アッターールの『鳥の言葉』において霊的存在を活気づかせる詩的なもの（“Flight of the Birds: The Poetic Animating the Spiritual in ‘Attār's *Mantiq al-Ṭayr*”）」のように物語の中に含まれる重要なモチーフに着目し、伝統的なモチーフの使われ方に着目しつつテキストの構造について論じる研究も登場する¹⁸。ヴォイチェフ・スカルモウスキーは、谷やアッターールの名前自身にも着目した¹⁹。

近年、文学理論を用いたアッターールのテキスト研究が増加している。2014年に、アッターール研究において文学理論を用いることの意義を示した研究が登場し、アッターールに応用できる文学理論が紹介されている²⁰。2000～2020年にSID²¹に掲載されたアッターール関連の論文241件の内26件が文学理論を用いたものであり、フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure, d. 1913）やロマン・ヤコブソン（Roman Osipovich Jakobson, d. 1983）の理論を用いた構造主義文学批評、ジェラルド・ジュネット（Gérard Genette, d. 2018）の物語理論、アルジルドス・ジュリアン・グレマス（Algirdas Julien Greimas, d. 1992）の意味論などを応用した文学理論が主である²²。特に二項対立構造がよく研究されており、七つの

¹⁸ Fāteṃe Keshāvarz, “Flight of the Birds: The Poetic Animating the Spiritual in ‘Attār's *Mantiq al-Ṭayr*,” *op. cit.*, 2006, pp. 112-134.

¹⁹ Wojciech Skalmowski, “The ‘Seven Valleys’ of ‘Attār,” *Orientalia Lovaniensia Periodica*, vol. 23, 1992, pp. 281-302; *Id.*, “Five Ghazals of ‘Attār,” *Orientalia Lovaniensia Periodica* 29, 1998, pp. 127-144.

²⁰ Amīr Ismā‘īl Āzar, *Ilāhī-nāme-ye ‘Attār: Dar Nazariye-ye Neshāne-ye Ma‘nā-shenāsī-ye Ālzhīr Goremas va Shakl-shenāsī-ye Zherār Zhenet*, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014.

²¹ Scientific Information Database の略称。学術大会、学術雑誌、学術出版の検索やメタデータへのアクセス、該当論文などのダウンロードができるイランの科学データベース。

²² ① Adlparvar Leilā, Safar ‘Alīzāde Mojtābī, and Pūrrastam Roqayye, “Neshāne-shenāsī-ye *Khosrou-nāme-ye ‘Attār Nīshābūrī*,” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 172-186; ② Zabīhī Sārā and Razī Aḥmad, “Taḥlīl-e Ertebāt-e Torā-matnī ‘Hamyāyesh-e Parandegī’ Nūshṭe-ye Pītar Sīs bā *Manṭeq al-Ṭayr-e ‘Attār*,” *Adabīyāt-e Fārsī* (‘*Olūm-e Ensānī al-Zahrā*’), vol.12, no.22, 2020, pp. 85-115; ③ Khoshhāl Dast-jerdī Ṭāher and ‘Arab Ja‘farī Moḥammad-ābādī Mahdī, “Bar-rasī-ye Mashrab-e ‘Erfānī-ye ‘Attār bā Kār-baste-ye Taqābol-hā-ye Do-gāne,” *Pazhūhesh-e Nāme-ye ‘Erfān*, vol.11 no.21, 2019, pp. 15-33; ④ Majīdī Fāteṃe and Abvīsānī Fāteṃe, “Eshkāl-e Taqābol-hā-ye ‘Erfānī dar Ghazaliyāt-e ‘Attār,” *Pazhūhesh-nāme-ye ‘Erfān*, vol. 11 Number 21, 2019, pp. 169-186; ⑤ Qāsemī Shahīn, “Bar-rasī-ye Jāyegāh-e Revāyat-shenav-hā va Angīze-ye Rāvī dar *Ilāhī-nāme-ye ‘Attār Nīshābūrī* (Bā Takyah bar Nazariyah-ye Ertebāṭī Rūman Yākobson),” *She‘r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: ‘Olūm-e Ejtemā‘ī va Ensānī)*, vol.11, no.3, 2019, pp. 89-104; ⑥ Ḥayātī Abdolrezā, Mozaḥfārī ‘Alī-rezā, and Ṭolū‘ī Āzar Abd-ollāh, “Revāyat-shenāsī-ye Chand Tamsīl-e Moshtarak dar Āsār-e Sanāyī va ‘Attār va Moulānā bar Pāye-ye Nazariye-ye Zherār Zhenet,” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.13, no.1, 2019, pp. 1-38; ⑦ Esfāndiyār Sabīke, Ḥasan Ābādī Maḥmūd, and Sha‘bān Zāde Maryam, “Etteḥād-e Taqābol-hā-ye Do-gāne Dar Sāyah-e ‘Tabaddol’ va ‘Tasāwī’ dar *Maḥnavī Ilāhī-nāme-ye ‘Attār*,” *Adabīyāt-e ‘Erfānī va Ostūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e Fārsī)*, vol.14, no.53, 2019, pp. 83-119; ⑧ Esfāndiyār Sabīke, Ḥasan Ābādī Maḥmūd, and Sha‘bān Zāde Maryam, “Estefāde-ye Vīzhe-ye ‘Attār az Taqābol-hā-ye Do-gāne va Tafāvot-e Ān bā Mafhūm-e Shenākhte shode-ye Taqābol-hā-ye Do-gāne dar Olgūy Gharbī va Balāghat-e Sonnatī,” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.11, no.4, 2018, pp. 43-64; ⑨ Ṭeifī Shīrẓād and Sheykh Al-Eslāmī Moḥammad, “Naqd-e Neshāne: Ma‘nā-shenākhtī-ye Dāstān-e Sheyḥ Ṣan‘ān dar *Manṭeq al-Ṭayr* (Bā Takye bar Neẓām-hāt Goftmānī),” *Pazhūhesh-nāme-ye Naqd-e Adabī va Balāghat*, vol.6, no.1, 2017, pp. 33-50; ⑩ Moḥsenī Gardgūhī Fāteṃe, “Taqābol-hā-ye Do-gāne dar Ghazaliyāt-e ‘Attār,” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.10, no.2, 2017, pp. 249-267; ⑪ Rūzātiyān Seyyede Maryam and Madanī Fāteṃe al-Sādāt, “Bar-rasī-ye Beinā-matnī-ye Ḥekāyat-e Moshtarak-e *Tazkere al-Ouliyā* va *Manṭeq al-Ṭayr-e ‘Attār Nīshābūrī*,” *Adab-e Fārsī (Dānesh-kade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī, Dāneshgā-ye Tehrān)*, vol. 7, no. 1, 2017, pp. 95-112; ⑫ Bāmshkī Samīrā and Shamsī Pārsā, “Māyegān-shenāsī-ye Taṭbīqī dar Partovī-ye Bāznamāyī-ye Adabī-ye Shakhshiyat-hā-ye Aslī dar Dāstān-hā-ye Shakhshiyat-e Mehvar-e Tā‘īs az Ānātūr Forāns va Sheyḥ Ṣan‘ān az ‘Attār,” *Naqd-e Zabān va Adabīyāt-e Khārejī (Pazhūhesh-nāme-ye ‘Olūm-e Ensānī)*, vol.14, no.18, 2017, pp. 29-57; ⑬ Ṭolū‘ī Āzar Abd-ollāh, Kūshesh Raḥīm, and Ṣamadī ‘Alī, “Rīkht-shenāsī-ye Tamsīl-hā-ye ‘Erfānī bā Takye bar Ash‘ār-e Sanā‘ī, ‘Attār va Moulāvī,” *Zabān va Adab-e Fārsī (Nashriye-ye Dānesh-kade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī-ye Dāneshgāh-e Tabrīz)*, vol.69, no. 233, 2016, pp. 55-69; ⑭ Ghafūrī ‘Effāt al-Sādāt, Pīrūz Gholām-rezā, Ḥaq-jū Siyābash, and Hāshemī Sohīlā, “Naqsh-e ‘Onṣor-e Goft va Gū dar Rābeṭe-ye Morīd va Morād bar Mabnāy-e Nazariye-ye Sāzande-gerā‘ī dar *Manṭeq al-Ṭayr-e ‘Attār*,” *Adabīyāt-e ‘Erfānī va Ostūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e*

論文が発表されている²³。文学理論を用いた研究は、アッタールのテキストの分析方法の幅を広げ、アッタールのテキスト分析において新たな見解を示している。

(3) 受容史に関する研究

アッタールの受容史に関する研究は、現在の一領域国家における受容を扱うものと、領域国家の枠を超えて扱うものの二つに分類できる。前者として、マレーシア、インドネシアにおける受容を特定の詩人を通じてみる研究がある²⁴。後者としては、特に広範囲に渡ってアッタールとそのテキストの受容を描いているクリストファー・シャックルの「西洋と東洋におけるアッタールの現出 (“Representations of ‘Attār in the West and in the East: Translation of the *Manteq al-Ṭayr* and the Tale of Shaykh Ṣan‘ān”)」がアッタールとそのテキストの受容の過程を研究した論文として重要である。彼は、西洋におけるアッタールの翻訳を時系列順に分析して、どのようにアッタールが西洋において受け入れられたかを論じている²⁵。また、東洋では原文でアッタールが長らく読まれているがゆえに、翻訳自体があまりされていなかったことを論じ、翻訳としてのアッタールが東洋でどのように受容されるようになったかを論じる²⁶。

他の主要な文献として、アッタールの思想がどのようにトルコで受け入れられてきたか、アッタールのテキストがモデルになっている絵画がどのように時代ごとに描かれているか、

Fārsī), vol.12, no.45, 2016, pp. 155-18; ⑮Rouhānī Mas‘ūd and ‘Enāyatī Qādiklāyī Moḥammad, “Taḳābol-hā-ye Do-gānah dar Ghazaliyāt-e ‘Attār Nīshābūrī,” *Zabān va Adabīyāt-e Fārsī (Majalle-ye Dāneshkade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī Dāneshgāh-e Khārazmī*, vol.24, no.81, 2016, pp. 201-221; ⑯Mosherī Fard ‘Atīye, Ghobādī Hosein-‘alī, Hosseinī Maryam, and Nīkūyī ‘Alī Rezā, “Kār-kard-e Taḳād va Taḳābol dar Zībāyī-shenāsī Taṣāwīr Ghazaliyāt-e ‘Attār, bar Asās-e Ārā’-e Jorjānī,” *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāt-e Fārsī*, no.41, 2016, pp. 51-81; ⑰Āzer Esmā‘īl, ‘Abāsī ‘Alī, and Āzād Vīdā, “Bar-rasī-ye Kār-kard-e Ravāyī-ye Do Ḥekāyat az *Ilāhī-nāme-ye ‘Attār* bar Asās-e Nazāriye-ye Goremas va Zhenet,” *Jostār-hā-ye Zabānī*, vol.5, no.4, 2014, pp. 17-43; ⑱Moḥammadi Feshārākī Moḥsen and Khodā-dādī Faḏl Allāh, “Maḳāyese-ye Sākhtār-e Dāstān dar Do Athar-e ‘Attār bā Takyah bar Do Olgūy-e Jadīd-e Sākhtār-gerā’ī Dāstān-nevīsī,” *Jostār-hā-ye Zabānī*, vol.4, no.3, 2013, pp. 179-202; ⑲Jalīlī Taḳviyān Moṣṭafā “Zabān-e ‘Elm’ va ‘Zabān-e Ma’ refat’ dar Nazār-gāh-e ‘Attār Nīshābūrī (Naqd-e Yek Khānesh),” *Naqd-e Adabī*, vol.6, no.23, 2013, pp. 171-190; ⑳Batlāb Akbar-ābādī Moḥsen and Razī Aḥmad, “Kār-kard-e Ravā’ī Neshāne-hā dar Ḥekāyat-e Rābe’ e az *Ilāhī-nāme-ye ‘Attār*,” *Matn-shenāsī-ye Adab-e Fārsī (Majalle-ye Dānesh-kade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī-ye Esfahān)*, vol.49, no.1, 2013, pp. 13-27; ㉑Rouhānī Mas‘ūd and Shūbkalāyī ‘Alī Akbar, “Taḥlīl-e Dāstān-e ‘Sheykh Ṣan‘ān’ *Manteq al-Ṭayr*-e ‘Attār bar Asās-e Nazāriye-ye Koneshī Goremas,” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar-e Gūyā)*, vol.6, no.2, 2012, pp. 89-112; ㉒‘Alī Zāde Khayyāt Nāṣer and Salīmīyān Sūnā, “Kānūn-e Revāyat dar *Ilāhī-nāme-ye ‘Attār* bar Asās-e Nazāriye-ye Zherār Zhenet,” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar-e Gūyā)*, vol. 6, no. 2, 2012, pp. 113-140; ㉓Ḥasanlī Kāvūs and Mojarrad Sānāz, “Sabk-shenāsī-ye Neshāne-hā dar Panj Ḥekāyat az *Muṣībat-nāme-ye ‘Attār Nīshābūrī*,” *She’r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: ‘Olūm-e Ejetmā’ī va Ensānī)*, vol.4, no.2, 2012, pp. 49-76; ㉔Rezā Aḥmad and Batlāb Akbar-ābādī Moḥsen, “*Manteq al-Ṭayr*-e ‘Attār va *Manteq Gofgūyī*,” *Matn-e Pazhūhī-ye Adabī (Zabān va Adab-e Fārsī)*, vol.14, no.46, 2010, pp. 19-46; ㉕Rezāyī Aḥmad, “Taḥlīl-e Dīdgāh-hā-ye ‘Attār-e darbāre-ye She’r va Moḳāyese-ye Ānhā bā Ārāy-e Montaqedān-e Adabī,” *Majalle-ye Takhaṣṣoṣī-ye Zabān va Adabīyāt-e Dānesh-kade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī-ye Mashhad (Dānesh-kade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī (Mashhad))*, vol. 40, no. 3, 2007, pp. 57-76; ㉖Enzābī Nezhād Rezā and Hejāzī Behjat al-Sādāt, “Aṣl-e Senkhīyat-e dar ‘Erfān va Hamānand-sāzī dar Ravān-shenāsī (bā Gozharī dar Andīshah-hāy ‘Attār va Moulavī),” *Nahrīye-ye Dāneshkade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī (Tabrīz)*, vol.48, no.197, 2005, pp. 35-54.

²³ 注 19 の研究の内③, ④, ⑦, ⑧, ⑩, ⑮, ⑯が二項対立の構造に関する論文。

²⁴ Lubis, H.M. Bukhari, “Farid Al-Din ‘Attar and Scholarly/Literary Works in Malaysia: Brief Remarks”, *The Gombak Review*, vol.1, no.2, 1996, pp. 133-142; 大形里美「現代インドネシアの詩と詩人～その2—アブドゥル・ハディ氏 (Abdul Hadi W.M.) の詩とイスラム神秘主義文学におけるシンボリズム (アッタールの鳥の諷諭の伝播)—」『社会文化研究所紀要』74号 (八幡大学社会文化研究所)、2014、33-67頁。

²⁵ Christopher Shackle, “Representation of ‘Attār in the West and in the East: Translation of the *Manteq al-Ṭayr* and the Tale of Shaykh Ṣan‘ān,” *op. cit.*, pp. 168-175.

²⁶ *Ibid.*, p. 173.

アッタールの物語を進める方法がイタリアに渡ってどのように近現代の作家に至るまで受け入れられてきたか等の研究がある²⁷。

(4) 象徴に関する研究

アッタールのテキストには「男と女」、「殉教者」、「狂人」、「ゾロアスター教」、「アレクサンドロス大王」などの言葉が繰り返すモチーフとして登場する²⁸。アッタールのテキストに登場するこれらの象徴に関する研究は、象徴がどのように形成され受け入れられていったかという受容史でもある研究と、カール・グスタフ・ユングの原型のような普遍的なシンボルについて言及する研究の二つに大別できる。両者は対立するわけではなく、一方が他方の論を補うことも多い。前者の主要な文献としては、レオナルド・レヴィゾーンの「ペルシアの解釈学の伝統におけるスーフィーの象徴主義—アッタールの秘境的な詩のパゴダの再構築— (“Sufi Symbolism in the Persian Hermeneutic Tradition: Reconstructing the Pagoda of 'Attar's Esoteric Poetics”)」がある。この論文では、アッタールのテキストに登場する「キリスト教徒の娘」や「ゾロアスター教徒」が、「ペルシア語文化圏」において後世にどのように解釈・受容されてきたかを論じている²⁹。後者の普遍的なシンボルについての研究は近年でもされていて、カール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, d. 1961) が提唱したアニマや原型に基づいた論が合計で 4 件ある³⁰。さらに、アッタール研究において、ユングの論は昔から注目されていて、1945 年に書かれたフリッツ・マイヤーの研究においても引用され

²⁷ トルコにおける受容については Berrin Uyar Akalin, “The Poets Who Wrote and Translated *Mantiku’l Ṭayr* in Turkish Literature,” *International Journal of Central Asian Studies*, vol.10, no.1, 2005, pp. 167-179、絵画の描かれ方については Yumiko Kamada, “A Taste for Intricacy: An Illustrated Manuscript of *Mantiq al-Ṭayr* in the Metropolitan Museum of Art,” *Orient: Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, vol.45, 2010, pp. 129-175、現代作家における受容に関しては Nor Faridah and Abdul Manaf, “The Influence of Farīd al-Dīn ‘Aṭṭār’s *Mantiq al-Ṭayr* (*The Conference of the Birds*) on Western Writers: From Chaucer to Peter Brook,” *Islamic Quarterly: A Review of Islamic Culture*, vol.46, no.iii, 2002, pp. 247-258 等の文献がある。

²⁸ 「男と女」については Franklin Lewis, “Sexual Occidentation: The Politics of Conversion, Christian-love and Boy-love in ‘Aṭṭār,” *Iranian Studies*, vol.42, no.5, 2009, pp. 693-723、「殉教者」については Sunil Sharma, “The Sufi-Poet-Lover as Martyr: ‘Aṭṭār and Ḥāfiẓ in Persian Poetic Traditions,” *Vision of Death and Meaningful Suffering in Europe and the Middle East from Antiquity to Modernity*, 2004, pp. 237-243、「狂人」については佐々木あや乃「ペルシア神秘主義説話文学にみる『狂人』—アッタール著『神の書 (Ilāhī-nāmah)』の場合」『総合文化研究』18号 (東京外国語大学総合文化研究所)、2015、66-81 頁、「ゾロアスター教」については Harry S. Neale, “The Zoroastrian in ‘Aṭṭār’s *Tazkere al-Ouliyā*,” *Middle Eastern Literature*, vol. 12, no.2, 2009, pp. 137-156、「アレクサンドロス大王」については John Andrew Boyle, “Popular Literature and Folklore in ‘Aṭṭār’s Mathnavī,” *Colloquio italo-iraniano sul poeta mistico Farīduddīn ‘Aṭṭār*, 1978, pp. 57-70.

²⁹ Leonard Lewisohn, “Sufi Symbolism in the Persian Hermeneutic Tradition: Reconstructing the Pagoda of Esoteric Poetics,” *op. cit.*, pp. 255-308.

³⁰ 元型：① Sākī Entezāmī Sayīde, Farahzād Malek Moḥammad, and Ḥoseinī Kāzerūnī Seyyed-aḥmad, “‘Arkey Tāyep va Mahfūm-e ‘Erfānī-ye Pol dar *Muṣibat-nāme-ye ‘Aṭṭār*,” *Erfān-e Eslāmī (Adiyān va Erfān)*, vol.15, no.60, 2019, pp. 254-273; ② Golīzāde Parvīn and Gobānchī Nasrīn, “Vā-kāvī Moqāyese-ye Kohan-e Olgūy-e Pīr-dānā dar Se Manzūme-ye *Manteq al-Ṭayr*, *Muṣibat-nāme* va *Ilāhī-nāme-ye ‘Aṭṭār* (bā Bayān-e Taqābol Pīr-dānā bā Mahfūm-e Ensān Kāmel dar ‘Erfān va Falsafah,” *She ‘r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: ‘Olūm-e Ejtemā’ī va Ensānī)*, vol.11, no.3, 2019, pp. 105-128; ③ Rūhānī Fard Ma ‘šūme, Māḥouzī Mahdī, and Oujāq ‘Alīzāde Shahīn, “Taḥlīl-e Maqām-e Toubē dar Ḥekāyat-e Pīr-zan va Malekshāh-e *Muṣibat-nāme-ye ‘Aṭṭār* bar Asās-e Kohan-e Olgūy-e ‘Bāz-gasht-e Qahramān’ Jouzef Kampbel,” *Erfān-e Eslāmī (Adiyān va ‘Erfān)*, vol.14, no.53, 2017, pp. 201-230; ④ Qashqāyī Sa ‘īd, “Bar-rasī Kohan-e Olgūy-e Sāye va Entebāq-e Ān bā Nafs dar Maṣnavī-hāy-e ‘Aṭṭār,” *Adabiyāt-e ‘Erfānī va Osṭūre-shenākhtī (Zabān va Adabiyāt-e Fārsī)*, vol.7, no.25, 2011, pp. 143-166.

アニマ：Aqrānī Argī Āzāde and Mashhūr Parvīn Dakht, “Ānimāy-e Ma ‘shūq dar Ghazal-hāy-e ‘Aṭṭār bar Pāyah-ye Naqd-e Kohan-e Olgūy-e Yūnq,” *Pazhūhesh-nāme-ye Adab-e Ghanāyī (Zabān va Adabiyāt-e Fārsī)*, vol.16, no.30, 2018, pp. 9-30.

ている³¹。また、普遍的なシンボルに言及したものとしてユングの元型論の一部を受け継ぐミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade, d. 1986) の論も引用される³²。

(5) 刊本や写本の真贋・信頼性に関する研究

刊本や写本の真贋・信頼性については (1) ~ (4) の研究の中で扱われることも多い。ここでは、刊本や写本の真贋・信頼性を研究の焦点とした論文を取り上げる。

1 点目は、シャフィーイー・キヤドキャニー『歴史の中のカラन्दル』 (*Qarandariye dar Tārikh*) の中のアッターールの項目である。ここで、アッターールがテキストを書いた年代に、カラन्दルという単語が人ではなく、場所のみを示していたことを指摘する³³。すなわち、アッターールの写本の中で、カラन्दルという単語が人の意味で使われているものは、カラन्दルが人をもさすようになってから書かれたものであることが推測される³⁴。

2 点目は、ジョウヤー・ジャハーンバクシュが書いた「『鳥の言葉』のテキスト構成の基準 (“Textual Correction Norm of Manteghotteyr”)」である。彼は現存する『鳥の言葉』の刊本の問題点を挙げ、先人が行ってきた『鳥の言葉』の様々な編纂方法を列挙しつつ、根本的には、『鳥の言葉』を編纂する唯一の方法はなく、複合的な方法を探ることを提案する³⁵。

上記で述べた研究以外のアッターールのテキストを扱った研究としては、アッターールの生涯とテキストについて分析したフォルザーンファルの『アッターールの作品の説明・批評・分析』とナフィースィーの『アッターールの生涯とテキストに関する研究』がある³⁶。フォルザーンファルの研究は、アッターールの名前の由来から始まり、父親と母親および家族がどういふ人か、クブラヴィー教団とアッターールの関係、アッターールの手によって真作であるテキストがどの時期に書かれたかなどを論じている。ナフィースィーの研究では、アッターールの生涯について論をまとめて、アッターールの著作とされていた 66 のテキストを精査し、本当にアッターールによって書かれた著作を 9 点であると特定する。現在では、フォルザーンファルが主張した『神秘の書』が書かれた時期について議論の余地があり、ナフィースィーが主張した 9 つすべてを真作であると断定することはできない。しかし、これらの研究は、伝承によってスーフィーとして語られたアッターールの生涯が事実と異なるものであり、仮託された偽書が多く存在するということを示したという点において、リッターと並んで最も重要な古典的な先行研究の一つである³⁷。

³¹ Fritz Meier, “Der Geismensch bei dem Persischen Dichter ‘Attār”, *Eranos Jahrbuch*, vol.13, 1945, pp. 283-353.

³² Taqī Pūrnamdāriyān, *Dīdār bā Sīmorgh: She’r va ‘Erfān va Andīshe-hā-ye ‘Attār*, Tehrān: Pazhūheshgāh-e ‘olūm-e ensānī va moṭāla‘āt-e farhangī, 2011, p. 65

³³ Shafī‘ī Kadkanī, *Qalandariye dar Tārikh: Degar-dīsīhā-ye Yek Īde’olozhī*, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2007, pp. 307-311.

³⁴ *Ibid.*

³⁵ Jouyā Jahānbaksh, “Textual Correction Norm of Manteghotteyr,” translated by Esmā‘īl Salāmī, *An Anthology of Iranian Studies*, vol.6, 2007, pp. 66-102.

³⁶ Badī‘ al-Zamān Forūzānfār, “*Sharḥ-e Ahvāl va Naqd va Tahlīl-e Āsār-e Sheikh Farīd al-Dīn ‘Attār Nīshābūrī*,” Tehrān: Enteshārāt-e Anjoman-e Āsār va Mofākher-e Farhang, 2018; Sa‘īd Nafīsī, *Joste-jū dar Ahvār va Āsār-e Farīd al-Dīn ‘Attār Nīshābūrī*, Tehrān: Ketān-forūshī va Chāp-khāne-ye Aqbāl, 1942.

³⁷ 他のアッターールの先行研究として重要なものとして、ザッリーンクープの『スィーモルグの翼の音』 (*Ṣadā-ye Bāl-e Sīmorgh: Darbāre-ye Zendegī va Andīshe-ye ‘Attār*) とプールナムダーリヤーンの『スィーモルグのビジョン』 (*Dīdār bā Sīmorgh*) がある。ザッリーンクープは『スィーモルグの翼の音』において、アッターールの生涯、思想、テキストについて記述している。示されている論の根拠が十分に示されず、既存の論の焼き回しの箇所も多いが、『王書』とアッターールのテキストにおけるモチーフ、アッターールとアンヴァリーの言葉の使い方の類似性など示唆に富む指摘も多い。プールナムダーリヤーンの『スィーモルグのビジョン』は彼の 10 個の論文から構成されている。前述の「アッターールの物語の構造的研究」、スィーモルグとジブリールのモチーフがどのようにアッターールの中で受容されていたか、アッターールのテキストにおけるアブー・サイードの役割、アッターールのスーフィズムについて、ユングやエリアーデの象徴に関する議論、イブン・スィーナーやスフラワルディーとの比較、サナーイーのテキストなどの先行するペルシア詩の議論を踏まえて包括的に記述している。

第2節 文学理論

前項(2)で触れたように、近年、アッタールの研究として文学理論を用いたものが増加している。文学理論をアッタール研究に応用した代表的な研究者はキアドキャニーである。1989年に出版されたキアドキャニー『詩の音楽 (*Mūsīqī-ye She'r*)』の中で、彼はロシア・フォルマリズムの「詩の言語」や「異化作用」という考え方に着目して、アッタールの言葉を芸術の言語と異なる日常言語とは区別している³⁸。さらに、近年、キアドキャニーの『スーフイズムの散文における詩の言語 (*Zabān-e She'r dar Nashr-e Sūfiye*)』において、ロシア・フォルマリズムの理論を用いて、アッタールをはじめとしたスーフイーの言葉がどのような範疇の言葉かを明らかにしようとした。神学や哲学の言葉は理性的な言葉であり、共有でき、変わらない意味を持っているのに対して、スーフイーと芸術の言葉は感情に基づき、人によってその意味を変えるものであるとキアドキャニーは論じた³⁹。この論文では、アッタールの『鳥の言葉』がスーフイーの言葉の例として挙げられている。また、芸術におけるロシア・フォルマリズムとフォルマリズムの理論と関係が深かったソシュールの言葉が引用されている⁴⁰。彼の諸論文は、ペルシア文学研究において文学理論を用いて論じるという新しい視点を提供し、発展させたという意味で先駆的なものであった。

文学理論を用いた近年の主な研究の例としては、アミール・イスマーイール『記号論におけるアッタールの『神の書』—アルジルダス・グレマスの意味論とジェラルド・ジュネットの形態学 (*Ilāhī-nāme-ye 'Aṭṭār: Dar Nazāriyah-e Neshānah-e Ma'nā-shenāsī Ālzhīr Goremas va Shakl-shenāsī Zherār Zhenet*)』がある。この本の中で、イスマーイールは文学理論の各理論と理論誌について100頁以上を使って概要を述べ、彼が用いる理論であるジュネットの物語論とグレマスの意味論を説明する⁴¹。その後、主にグレマスの「意味の四角形」⁴²を用いつつアッタールの『神の書』の構造を明らかにする⁴³。前述したキアドキャニーの著作は、文学理論を用いるという新しいペルシア文学の分析方法を示唆するという点において重要であった。一方、イスマーイールのこの研究は、実際に文学理論を用いてアッタールの著作にお

³⁸ 'Abd al-Ḥusayn Zarrīnkūb, *Ṣadā-ye Bāl-e Sīmorgh: Darbāre-ye Zendeḡī va Andīshe-ye 'Aṭṭār*, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2007; Taqī Pūrnamdāriyān, *Dīdār bā Sīmorgh: She'r va 'Erfān va Andīshe-hā-ye 'Aṭṭār*, Tehrān: Pazhūheshgāh-e 'olūm-e ensānī va moṭāla'āt-e farhangī, 2011.

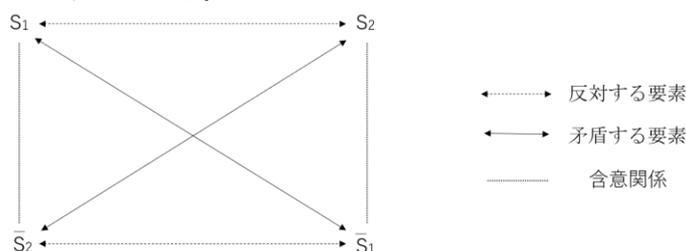
³⁹ Shafī'ī Kadkanī, *Mūsīqī-ye She'r*, Tehrān: Nashr-e Āge, 2010, pp. 3-29.

³⁹ *Id.*, *Zabān-e She'r dar Nashr-e Sūfiye*, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2013, p. 81.

⁴⁰ *Ibid.*, pp. 86-88.

⁴¹ Amīr Ismā'īl Āzar, *op. cit.*

⁴² 「意味の四角形」の図は以下である。



「意味の四角形」は意味作用の基本構造を表すモデルである。ある意味体系 S における要素を S_1 と置き、それに反対する要素を S_2 とする。次に、 S_1 と S_2 と矛盾する要素をそれぞれ、 \bar{S}_1 、 \bar{S}_2 とする。 S_1 の右に S_2 を配置して、 S_1 の下に \bar{S}_2 、 S_2 の下及び \bar{S}_2 の右に \bar{S}_1 を配置して各要素を線で繋ぐと四角形ができる。 \bar{S}_2 と \bar{S}_1 は、それぞれ S_1 と S_2 に反対し矛盾している。この四角形を使うことによって1要素から、言及されていない意味体系の要素について分析でき、テキストに言及されていないことを含め物語構造を分析できる

上記の意味の四角形の図についてはアルジルダス・ジュリアン・グレマス (赤羽研三訳) 『意味について』水声社、1992、157頁に登場する図を参考にしつつ著者が作成。この図の説明については、同書157-167頁の具体例を参照。

⁴³ *Ibid.*, pp. 135-266.

いて分析を行い、文学理論を用いる構造分析の有効性を示したという点において意義がある。

その他の先行研究では、前述したように、ソシュールやヤーコブソンの理論を用いた構造主義文学批評、ジュネットの物語論、グレマスの意味の四角形を使っている。特に、二項対立という構造主義の考え方がアッタールのテキストの分析において7件と最も多く使われていて、最も着目されている文学理論のトピックである。これらの文学理論を用いた研究は、アッタールのテキストの分析方法の幅を広げ、アッタールのテキスト分析において新たな見解を示している。

以下、文学理論の主要な考え方である(1) 作者とテキストの分離、(2) 読者論、(3) 物語論について概要を記述し、それらがどのようにアッタール研究において受け入れられてきたかを示す。(1) は全ての文学理論の基礎となり、(2) と(3) はそれから派生している。

(1) 作者とテキストの分離

文学理論の基本的な考え方に、作者とテキストの分離というものがある。この考え方は、象徴主義の議論において初めて論じられ、文学理論の黎明期には前述のロシア・フォルマリズムにおいて積極的に主張された⁴⁴。ロシア・フォルマリズムは作者とテキストを分離しない立場に批判を加えた。作者とテキストを分離しない立場とは、テキストを作者の思想や心理状況を反映した鏡とみなすものである。この立場においては、テキストは作者の中にしかないので、作者の思想や心理状況を特定するような伝記・伝承、歴史的背景などの外在的要因が重視され、テキストの分析も、それらの要因を通して行われる。ロシア・フォルマリズムはこれに対し、作者の心理状況や歴史的背景などの文学性ではない部分からテキストを分析していると批判した⁴⁵。

作者とテキストを分離してテキストそのものを分析するという立場は、ロシア・フォルマリズム以外でも新批評や構造主義文学批評など様々な文学理論に積極的に取り入れられていった。作者からテキストを解放する点においては、ロシア・フォルマリズムの批判者であったミハイル・バフチン (Mikhail Mikhailovich Bakhtin, d. 1975) においても変わりはない。バフチンはロシア・フォルマリズムを様々な方向から批判したが、問題提起自体は有益であると述べた。実際、バフチンは『ドストエフスキーの詩学』においてドストエフスキーによって書かれたテキストが「多声的」であるという前提にたちながら、テキストを作者の思想を反映する鏡としてみる立場を、テキストそのものを分析していないとして非難した⁴⁶。バフチン、読者という視点が欠如しているという点においてロシア・フォルマリズムを非難した受容理論、その他、後世の文学理論も、テキストを単純に作者の思想や心理状況から分析するようなことは行わない。

(2) 読者論

作者とテキストの分離が唱えられると、作者自身の意図については軽視されるようになった。新批評はテキスト以外の要素を余分な要素として、作者の意図を批評において追放した⁴⁷。構造主義文学批評においても、テキストの中に作者が入りこむ余地は残っていなかった。さらに、ロラン・バルト (Roland Barthes, d. 1980) は「作者の死」という論文の中で作者の死を宣言し、作者の死の後、テキストの解釈を生み出すものとして読者が誕生することを述

⁴⁴ Erlich Victor, *Russian Formalism: History-Doctrine*, The Hague: Mouton Publisher, 1955, p. 28.

⁴⁵ *Ibid.*, p. 8.

⁴⁶ Mikhail Bakhtin, *Problems of Dostoevsky's Poetics*, edited and translated by Carl Emerson. Minnesota: Minnesota Press, 1984, pp. 47-77.

⁴⁷ 川崎は、川崎寿彦『ニュー・クリティシズム概論』研究社、1964において、新批評という文学理論が一貫してこのような態度をとったわけではないということを指摘する。しかし、ブルックスが Cleanth Brooks, *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1947 において示しているように、他の要素からではなく、テキストをテキストとして検討するという態度をとっていたことも事実である。

べた⁴⁸。そして、エクリチュール⁴⁹が作者を抹殺した後では、正しい「解説」という行為はもはや必要なくなると主張した⁵⁰。バルトはオノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac, d. 1850) の短編喜劇の一つ『サラジヌ』の分析を行い、実際に、このテキストの新しい読みを提供する⁵¹。バルト自身は具体的な存在として読者自体を論ぜず、むしろ読者自身は多様な読みが収斂するような場をさしている⁵²。

その後、テキストを解釈する読者自身に焦点が当たるようになった。70年代を中心に、ロベルト・ヤウス (Hans Robert Jauss, d. 1997) やヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser, d. 2007) の受容理論が読者論として登場した。ヤウスの論によれば、読者はその時の理解度や経験に応じた期待の地平をもってテキストを読むことで、読者の期待の否定や他の経験が明白になり、読者もつ期待の地平は変容して新しく構築し直され、読者はテキストを受容する。つまり、テキストが及ぼす作用と、読者が持っている歴史的な経験や社会構造の相互作用によって、受容の仕方は変わる。ヤウスは、ある文学テキストの受容史は、その文学テキストの歴史の中での意味を明らかにすると主張する⁵³。一方、イーザーはヤウスと同様に作者とテキストの相互作用に言及しながら、受容史よりもそれが成り立つ意味構造に焦点を当てる。イーザーの論によれば、テキストは読者の持っていない経験を読者に提供することで、その経験を解釈するように読者を導く。読者はテキスト外の経験や理解をもとにしてテキストを読むので、テキストを加工しながら解釈を行う。このテキストと読書の相互作用は、テキストが提供する経験と読者が持っている経験が一致していない「空所」でおこり、「空所」を読む行為によって補うことがテキストと読者の相互作用である⁵⁴。

一方、言語そのものに内在する曖昧性から、読者がテキストを解釈することの曖昧性を指摘した議論をポール・ド・マン (Paul de Man, d. 1983) は展開している。すなわち、テキストとは言語で書かれたものであり、言語記号と指示対象の間にずれが生じることを指摘する⁵⁵。その点を根拠に、彼は読者が価値的に差異のない二つの解釈からひとつの解釈をつねに選び取らないということを述べ、読者がテキストの解釈に対する曖昧性を常に持っているということを明らかにする⁵⁶。

(3) 物語論

物語論は、物語の性質や形式、機能を研究するものである。物語論自体は、ロシア・フォルマリズムの『文学の理論』が翻訳によってフランスに伝わり、60年代に構造主義批評において論じられるようになったものである。また、アメリカでもウェイン・ブース (Wayne C. Booth, d. 2005) によって論じられている⁵⁷。物語論の「物語言説」に関わる議論は、作者や読者について読者論とは異なる見解を与えている。特に、『フィクションの修辞学』におけるブースの理論は、作者の修辞の重要性を説くことによって、作者の、ある点における復

⁴⁸ ロラン・バルト (花輪光訳) 「作者の死」『物語の構造分析』みすず書房、1979、89頁。

⁴⁹ ここで使用されるエクリチュールは、ジャック・デリダが唱えるように、パロールと対比されるものではない。作者の所有物である作品とは別の、自由な発想によって書かれたものという意味合いで使われている。詳細は、浅沼圭司「作者、その生と死：ロラン・バルトの所説をめぐって」美術美術史論集4輯1号、1984。

⁵⁰ ロラン・バルト、*op. cit.*、87頁。

⁵¹ Roland Barthes, *S/Z : Essai*, Paris: Seuil, 1970.

⁵² ロラン・バルト「作者の死」『物語の構造分析』、79-89頁。

⁵³ ハンス・ロベルト・ヤウス (饗田収訳) 「挑発としての文学史」『挑発としての文学史』岩波書店、1999、2-76頁。

⁵⁴ イーザーは、ヴォルフガング・イーザー (饗田収訳) 『行為としての読書』岩波書店、2005の全体を通して、読者とテキストの関係性についての議論が行われている。

⁵⁵ ポール・ド・マン (土田知則訳) 『読むことのアレゴリー：ルソー、ニーチェ、リルケ、ブルーストにおける比喩的言語』岩波書店2012、9-20頁。

⁵⁶ *Ibid.*

⁵⁷ Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, Chicago: Chicago Press, 1983.

権を示す⁵⁸。同時に、作者と読者の関係についても論じている。

ブースの本は、内在する作者であり読者という形で作者と読者について論じている。当時の文学論としてヘンリー・ジェイムズ (Henry James, d. 1916) やギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert, d. 1880) がテキストの中において作者の声を削いだる種の「客観性」を持った文学テキストを評価するのに対して、ブースは作者が行う修辞の技法という観点から作者の役割を主張する⁵⁹。例えば、それぞれの記述を短くしたり長くしたりすることによって、作者は読者に対するある種の効果を生み出そうとする。その修辞には、それによって効果を与える読者も同時に想定される。修辞の技法は読者に影響を与えるので、作者と読者について考慮しない文学テキストの規則というものは不十分であることを論じる。テキスト内に現れる修辞の技法の総和が作者であり、その修辞の技法によって効果を受ける対象者が読者であると説明する⁶⁰。テキスト内の修辞の技法から作者と読者を想定するので、作者と読者はテキスト内に存在する内在する作者と読者である。実在する作者や読者からテキストを俯瞰するわけではなく、テキストから作者と読者を想定し、修辞によって作者・テキスト・読者の関係性について論じる。また、作者に役割を与えているという点において、バルトの読者論やテキスト論とは異なる。

構造主義批評における物語論で最も著名なものはジュネットの『物語のディスコース』である。この本においてジュネットは物語内容と物語言説という区分を設け、物語の表現の構造である物語言説の重要性について論じる。物語内の表現としての時間、視点、距離を分類して構造的に表すことによって、物語がどのような構造になっているか明らかにした⁶¹。このジュネットによって示された物語構造の理論は後世に大きな影響を与え、アッタール研究においても頻繁に引用されている。アッタール研究に用いられるほかの構造主義文学批評は前述のグレマスの意味の四角形である。意味の構造に焦点を当てるというジュネットとは異なる方法で、彼は構造主義批評の物語論としてその考えを示している。

物語論を含む構造主義文学批評は、前述のポール・ド・マンによってテキストを固定的に構造に当てはめるという点において批判を受けている。例えば、言語の曖昧性という観点から、物語を構造に当てはめることができないという非難である⁶²。一方、ジュネットの構造主義の物語論をテキストマイニングや人工知能によって読み解こうという計算論的物語論が登場し、物語論と情報工学の知識を融合したポスト・ナラトロジーの方法も 2021 年に提案されている⁶³。

上記の文学理論の三つの考え方は、文学理論を用いたイランのアッタールの研究においても触れられてきた。しかし、受け入れられ方において差異がある。三つの内、最も受け入れられているのは物語論の考え方である。ジュネットやグレマスの物語論は様々な論文でその手法がほとんどそのままの形で使われていて、論文の数も多い。次に読者論については、テキスト論という形で間テキスト性を意識して他の文学との比較を論じた論文がある⁶⁴。しかし、全体として読者論を踏まえて論じられる論文数は比較的少ない。最後に、作者とテキストの分離を踏まえた論文であるが、全ての文学理論においてその考え方は根底にあるので文学理論研究の数とその数は同じになるはずである。しかし、イランのアッタール研究においては作者とテキストの分離の考え方はほとんど受け入れられない。前述の二項対立もスーフ

⁵⁸ *Ibid.*, pp. 109-116.

⁵⁹ *Ibid.*, pp. 137-138.

⁶⁰ *Ibid.*, p. 75.

⁶¹ ジェラルド・ジュネット (花輪光・和泉涼一訳) 『物語のディスコース：方法論の試み』 書肆風の薔薇、1985。

⁶² ポール・ド・マン、*op. cit.*、1-23 頁。

⁶³ 小方考『ポスト・ナラトロジーの諸相：人工知能の時代のナラトロジーに向けて 1』新曜社、2021、225-243 頁。

⁶⁴ Zabīhī Sārā and Razī Aḥmad, “Taḥlīl-e Ertebāt-e Torā-matnī ‘Hamīyāyesh-e Parandegī’ Nūshte-ye Pītar Sīs bā Maṭṭeq al-Ṭayr-e ‘Attār,” *Adabīyāt-e Fārsī* (‘*Olūm-e Ensānī al-Zahrā*’), vol.12, no.22, 2020, pp. 85-115.

イズムという思想があり、それを表す方法として使われていることがほとんどである。キャドキャニーの議論もロシア・フォルマリズムを踏まえていて、なおかつ前述の通り文学テキストを文学テキストから論じることにも主張しているにもかかわらず、アッタールという作者の個人的なスーフィーの経験を重視する⁶⁵。アッタールを用いた文学理論はスーフィズムの考えや作者のスーフィーとしての特殊な経験というものが前提にあり、テキストを検討する時は文学理論を用いるというものがほとんどである。イランにおけるアッタールのテキストの文学理論を用いた研究はスーフィズムという要素と切っても切れないものである。すなわち、イランにおける文学理論を用いたアッタール研究はスーフィズムをその根底に置きつつ、構造主義の文学理論を主に用いる傾向がある。スーフィズムを根底に置く解釈は、単純に文学理論を不適切に使用しているとも捉えられる。一方で、アッタール研究においては、その解釈の前提にスーフィズムを置く読みが共通認識としてある。すなわち、研究者を読者とするならば研究者間においてスーフィズムという共通の読みの前提がある。文学理論を用いる研究でも、用いない研究でも、アッタール研究において、作者が持っているスーフィズムという要素は自明のものとして認識される。

文学理論を用いた研究はアッタールのテキスト研究の幅を既存の研究から広げた。アッタールのテキスト分析に新たな視点が与えられ、新しい理論にもとづいて解釈されることで、既存の研究では明らかにされてこなかった構造が明らかにされた。一方で、イランにおける文学理論を用いた研究は作者とテキスト、ジュネットの言葉を借りるならば物語内容と物語言説が区別されていないので、スーフィズムを前提にした読みしかできないという欠点がある。作者の思想であるスーフィズムに読みを限定するならば、間テキスト性を用いた読みが難しくなる。比較をしたとしても、スーフィズムという観点を前提に修辞の使い方が異なるという結論になってしまう。たとえ、その結論が正確だったとしても、スーフィズムに関係しない修辞やブースが説明する内在する読者を見えなくしてしまう危険がある。他方、スーフィズムという前提を避け、文学理論からテキストを分析するという手法にも問題がある。文学理論は新しい視点や読みを提供するが、その読みが既存の読みに比べて優れた読みであることを証明することができない。なぜなら、既存の研究には歴史や思想などの外在的要因に基づいてテキスト内に読みの根拠が与えられているが、文学理論のみを用いた研究はその根拠を外在的要因に求めることができないからである。この問題はスーフィズムに基づいたアッタールの文学理論を用いた研究にもある。例えば、二項対立に関する論文は、二項対立という構造文学批評の理論をまず用いて、そこにスーフィズムという観点を付け加えるが、その文学理論でなければならない根拠は与えられていない。

第3節 量的分析

本論文では文学理論を用いたアッタールの研究と、用いない既存の研究の欠点を補い両者の論を補強するために、量的な観点からテキストを分析する。多くの文学理論を用いた研究と既存の研究は、数量的にその根拠を示しているわけではないという点において質的な研究である。質的な分析は、定量分析だけでは得られないようなテキストに対する深い読みを可能にした。アッタールを既存の方法で研究する研究者も文学理論を用いて研究する研究者も、それぞれの巨人の肩の上に立ち、各論を精査することによって、共通の認識に基づく読む方法を形成してきた。

しかし、定性的な根拠は共通認識を持っている読者や研究者間においては有効であるが、他の共通認識を持っている読者に対してその立場の優位性を示すことはできない。それぞれの主張が他の共通認識に比べて正しいことを示す基準もない。すなわち、誰しもが同じように納得し再現できる解説を示すことができない。それらの欠点を補うために、定性的な主張に対して、定量的な根拠を与えることを本論文では試みる。その方法によって、今まで行われてきた先行研究の論に対して数量的な根拠が与えられる。すなわち、既存の研究方法にも

⁶⁵ Shafī'ī Kadkanī, *Zabān-e She'r dar Nashr-e Süfīye*, Tehrān: Enteshārat-e Sokhan, 2013, pp. 89-90.

文学理論を用いた研究方法にも数量という共通の基準を与えることを実現する。

本論文では、既存の研究と文学理論を用いる研究のどちらにおいても重要なテーマを一つ取り上げる。それぞれの定性的な分析が、数的な根拠があるのか調査し、ある場合は根拠を示す。どちらにも取り組まれてきたテーマに絞る理由は、第一にそれぞれの分析方法の違いが明確になること、第二にテーマとして重要な可能性が高いことである。本論文ではテーマとして「神への愛」を選択する。「神への愛」は前述のとおり、思想研究において古典研究から近年の研究に至るまで積極的に研究されてきた。このテーマは、アッターールのテキストに対して文学理論を用いる研究でも用いない研究でも、同様に取り上げられてきた。それゆえに、テキスト分析における共通のテーマとして「神への愛」は適切なテーマであり、アッターール研究全体においても取り組むべき価値のあるテーマである。この分析においては、例えば、先行研究で指摘している「神への愛」の要素である苦痛が本当に重要であるのかを示す。定性的な分析に根拠を与えること、定性的な分析のみでは明らかにされてこなかったことを、定量的な読みによって明らかにすることが本論文の目的の一つである。

アッターールに関する定量的な分析は、いままで全く行われてこなかったわけではない。エントロピー分析により語彙の豊富さを調査することによって、アッターールと他の作者のテキストの特徴の差異を明らかにしようとした論文「イランの詩人たちの文体分析 (“A Stylometric Analysis of Iranian Poets”）」や、アッターールの詩の特徴を、色に関係する単語の頻度分析から明らかにしようとした「アッターール・ニーシャープーリーのマスナヴィーにおける、色の象徴の神秘的な作用 (“Kār-kard-e ‘Erfān-e Namād-e Rang dar Maṣnavī-hā-ye ‘Aṭṭār Nīshāpūrī”）」、それぞれの比喩表現の頻度から明らかにしようとした「アッターールの『イスラーム神秘主義聖者列伝』における愛を意図するメタファーと愛と関連する意味クラスタ (“Este‘āre-ye Mahfūmī-ye ‘Eshq va Khūshah-hā-ye Ma‘nāvī-ye Mortābet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliya’-e ‘Aṭṭār*”）」などの論文は定量的なデータを使ってアッターールの詩を分析している⁶⁶。しかし、これらの論文は特定のジャンルの単語の頻度分析のみ行う、若しくは、テキストマイニングで使われている多変量解析モデルの一部のみ使われている。例えば、エントロピー分析によって明らかになることは語彙の豊富さであるのに対して、アッターールがどのような単語を単体もしくは組み合わせて使う傾向があるのか明らかにできない。また、特定のジャンルの頻度分析は一部のジャンルの特徴しか明らかにできない。本論文では、テキストマイニングを用いた文学テキストの定量分析の方法を精査し、包括的にアッターールのテキストの特徴を明らかにする定量分析の方法を示して分析を行う。

⁶⁶ Sohrāb Rezāyī and Nasīm Kāshāniyān, “A Stylometric Analysis of Iranian Poets,” *Theory and Practice in Language Studies*, vol. 7, no.1, 2017, pp. 55-64; Seyyed Tarābī and Seyyed Ḥasan, “Kār-kard-e ‘Erfān-e Namād-e Rang dar Maṣnavī-hā-ye ‘Aṭṭār Nīshāpūrī,” *Erfān-e Eslāmī (Adiyān va ‘Erfān)*, vol. 15, no. 58, 2018, pp. 231-253; ‘Abbāsī Zahrā, “Este‘āre-ye Mahfūmī ‘Eshq va Khūshe-hā-ye Ma‘nāvī-ye Mortābet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliya’-e ‘Aṭṭār*,” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.12, no.2, 2018, pp. 117-146.

第2章 ペルシア語文化圏におけるアッタールの詩

第1節 ペルシア語文化圏の形成と発展

森本一夫は『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史—』において「ペルシア語文化圏」の存在を述べ、さまざまなペルシア語の文化が現在の国境を越えて中央アジア、南アジア、中国などに広がっていたことを指摘する⁶⁷。そして、共著者とともに様々な例証を示している。この「ペルシア語文化圏」という言葉をはじめに主張したのは、森本も書いているように、マーシャル・ホジソンである。ホジソンはアラビア語が形成した「アラビア語文化圏」と並ぶように、いわゆる新（近世）ペルシア語が、イスラームの広まった地域において、「ペルシア語文化圏」を形成していたことを指摘している⁶⁸。本節では新ペルシア語が形成したペルシア語文化圏がどのように形成され発展したか概略を説明する⁶⁹。

ペルシア語の変遷は三つの時代区分に分類できる。古代、中世、新ペルシア語期である⁷⁰。古代ペルシア語は主にアラム語と共にアケメネス朝で使われていた楔形の文字であり、碑文として現在残っている⁷¹。中世ペルシア語はサーサーン朝（226-651）で使われた言語であり、サーサーン朝の末期では唯一の書き言葉であったと指摘されている⁷²。サーサーン朝は651年にアラブ勢力によって完全に滅ぼされた。その約2世紀後に、ペルシア語文化圏を形成することになるアラビア文字を用いたペルシア語、いわゆる新ペルシア語が誕生した。この新ペルシア語の誕生経緯、文章語として広まった時期、中世ペルシア語との連続性は不明瞭であるが、イランの東方であるホラーサーン地方及びマー・ワラー・アンナフルで発展してきたことは間違いない。近藤は「ペルシア語文化圏の形成過程—ウタスの議論によせて—」において、新ペルシア語の発展を論じているボウ・ウタスの議論を用いて、同じく発展について論じているギルバート・ラザールの議論への批判をする。同時に新ペルシア語の形成過程に関するラザールとウタス両者の論の問題点を指摘する。前者がペルシア語をイラン民族の

⁶⁷ 森本一夫「はじめに」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史—』北海道大学出版会、2009、i頁。

⁶⁸ Marshall G.S. Hodgson, "The Bloom of Persian Literature Culture and Its Time," in *The Venture of Islam*. Vol.2, *The Expansion of Islam in the Middle Period*. Chicago: The University of Chicago Press, 1974, pp. 293-315.

⁶⁹ ホジソンが唱えたペルシア語文化圏の概念は常に修正が加えられ、発展してきた。この概念の発展を踏まえて、ナイル・グリーンが Nile Green, "Introduction," in Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*, Oakland: University of California Press, 2019, pp. 4-9 において指摘する以下の2点は重要である。

1. ブライアン・スプーナーとウィリアム・ハナウェイは *Literacy in the Persianate World* において、書き言葉としてのペルシア語が、ペルシア語の他文化との接触において常に重要な役割を果たしたと主張する。すなわち、話し言葉や非物質的な文化的コミュニケーションではなく、具体的な書物が、ペルシア語の受容やコミュニケーションにおいて大きな役割を果たしてきた。話し言葉を重視したバート・フラグナーの主張とは異なる両者のこの指摘は、ペルシア語と他文化や言語との接触を分析することにおいて重要である。
2. ペルシア語はユーラシア大陸に広がった言語ツールとして捉える。書き言葉としてのペルシア語の役割はムスリム、ムスリマ間においてのみあるわけではなく、他の宗教や文化との接触において相互に形成されたものである。それぞれの地域におけるペルシア語の役割を一般化して、他の地域においても当てはめることはできないので、常にその地域の文化との接触によって相互に形成されるペルシア語の役割を精査しなければならない。

⁷⁰ 近藤信彰「ペルシア語文化圏の形成過程—ウタスの議論によせて—」近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011、1-11頁; Prods Oktor Skjærvø, "Iran vi. Iranian Languages and Scripts (2) Documentation," *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/iran-vi2-documentation>, (accessed December 1, 2021).

⁷¹ Skjærvø, *op. cit.*

⁷² 近藤信彰、*op. cit.*、1頁。

ナショナルな言葉ととらえて中世ペルシア語と近世ペルシア語との連続性を無条件に主張しているのに対し、後者はリンガフランカとしてのペルシア語のイメージをあらかじめ投影していると近藤は説明する⁷³。結論として、この問題点は結局ペルシア語とは何かということに帰着することを指摘する。一方で、両者は最終的にイランの東方の言葉の影響を受けて、新ペルシア語が形成され発展してきたという結論は同様であることも指摘する。近藤が説明するように、ラザールが連続性を主張しつつも、新ペルシア語の形成が東方の異なった言語の影響を受けたことも主張するようになり、両者の主張が近づいている⁷⁴。結論として、新ペルシア語はソグド語などの現地語の影響を受けつつイランの東部であるホラーサーン及びマー・ワラー・アンナフルで形成されてきたという見解を出している。

8世紀、既にヘブライ文字で書かれたペルシア語が存在していたが、アラビア文字で書かれた新ペルシア語が文語として初めて登場するのは、サーマーン朝期(874-1004)である⁷⁵。ホラーサーンでのアッバース朝の反乱(747-50)の後、イランはアッバース朝(750-1257)の一部になったが、9世紀半ば以降、アッバース朝のカリフ制は徐々に軍事力と政治力を失った。そして、サッファール朝(861-1003)に勝利したサーマーン朝がホラーサーン及びマー・ワラー・アンナフルを支配した。このサーマーン朝において、イランとイスラーム文化が結び付き、イラン・イスラーム文化が開花した。ブハラにサーマーン朝の宮廷では、新ペルシア語が詩の言語として栄え、古代イランの叙事詩の伝統が収集され、歴史的および科学的なテキストがアラビア語からペルシア語に翻訳された。また、新ペルシア語を用いたイランの最も古い詩人は、9世紀後半にサーマーン朝の宮廷と、サッファール朝の宮廷で記録されている。さらに、アラビア語の書物のペルシア語への翻訳活動が、これらの宮廷において、積極的に行われている。一方で、文語としてはアラビア語が優勢であり、ペルシア語詩人が多く登場しても、文学においてすらアラビア語は使われつづけていた⁷⁶。

10世紀になると、サーマーン朝から独立したチュルク系の王朝であるガズナ朝(977-1186)がサーマーン朝を破り、サーマーン朝の支配地域であり文化の中心地であったホラーサーンを支配するようになる。ガズナ朝はサーマーン朝に引き続き新ペルシア語を用いる詩人を宮廷で支援し保護することによって、新ペルシア語の発展に大きく貢献した⁷⁷。ガズナ朝の王マフムード(Yamīn al-Dawla Maḥmūd ibn Sabktagīn Ghaznavī, d. 421/1030)は詩人の保護者として知られ、特に彼が行ったインド遠征は、同時代の詩人にとどまらず、アッターールをはじめとしたペルシア詩において著名なモチーフの一つとなった⁷⁸。

11世紀になると、最盛期にアナトリア西部と西のレバントからヒンドークシュ山脈まで広がる広大な地域を支配していたセルジューク朝(1038-1308)が新ペルシア語の広がりとしてペルシア語の成立に大きく寄与した。近藤はこの時期に、公文書や書簡などの散文を書くための文例集が編纂されたことに触れて、新ペルシア語が文語としての威信を獲得したことを示唆している⁷⁹。新ペルシア語はアナトリアをはじめとするセルジューク朝の支配地域に広がった。さらに、セルジューク朝はサーマーン朝、ガズナ朝と同様に詩人を保護し、詩の発展に寄与した。様々な詩が成立したこの時期は、ペルシア詩の一つの頂点ともいわれている。新ペルシア語は11世紀後半までに文学、行政、学術語として完全に発展

⁷³ *Ibid.*, p. 8.

⁷⁴ *Ibid.*, p. 9.

⁷⁵ アラビア文字ではなくヘブライ文字で書かれたペルシア語はサーマーン朝以前にも登場していた。矢島洋一「非アラビア文字表記新ペルシア語」、*op. cit.*、27頁。

⁷⁶ サーマーン朝とサッファール朝におけるペルシア語の発展については以下の文献を参照。Ludwig Paul, "Persian Language i. Early New Persian," *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/persian-language-1-early-new-persian> (accessed December 1, 2021).

⁷⁷ Jan Rypka, "History of Persian Literature up to the Beginning of the 20th Century," in Karl Jan (ed.), *History of Iranian Literature*. Dordrecht : D. Reidel Publishing Company, 1968, pp. 172-174.

⁷⁸ Farīd al-Dīn 'Attār, *Manteq al-Ṭayr*, edited by Šādeq Gouharīn, Tehrān: Sherkat-e Enteshārāt-e 'Elmī va Farhangī, 2015 165-166.

⁷⁹ 近藤信彰、*op. cit.*、9-10頁。

し、アラビア語の語彙を受け入れつつその形を作り、ペルシア語をもともと話していた地域の境界を越えて、中央アジアや北インドなど他の地域に拡大したことが指摘されている⁸⁰。

11世紀から19世紀にかけて、新ペルシア語は、西はアナトリア、東は中国、南はインドという広大な地域でイスラームの拡大と発展に大いに寄与し、同時にペルシア語及びその文化をこれらの地域に伝えた⁸¹。また、オスマン・トルコ語、チャガタイ・トルコ語、ウルドゥー語の形成にも寄与した⁸²。

インド亜大陸におけるペルシア語文化圏の広がり⁸³

ペルシア語は前述のガズナ朝のインド支配やその他のチュルク系王朝の影響によって伝わった。イギリスの植民地化まで、新ペルシア語はインド亜大陸で公用語・宮廷語として広く使用され、ムガル帝国（1526-1857）を含めインド亜大陸のいくつかのイスラーム宮廷で文化、学術、外交において使用されていた⁸⁴。

インド亜大陸では、ガズナ朝時代、ラホールを中心にペルシア文学が栄えた⁸⁵。ガズナ朝が減びると文化の中心はデリーに移った。そして、五つの王朝からなる、デリースルターン朝（1206-1526）及びムガル帝国期の7世紀の間、デリーにおけるペルシア語文化は発展した⁸⁶。デリースルターン朝を成立させたのは、新ペルシア語を使うチュルク系であり、イランの宮廷文化を持ち込み、ペルシア語を宮廷語・公用語として用いた。また、モンゴルの侵略後、多くの知識人層がホラーサーン地方からデリーに移り住んだこともあり、ペルシア語はさらに広まった。ただし、南アジアでのペルシア語の広がりには在来諸語の言語文化を排するのではなく、既存の言語文化に新たな言語文化を追加した⁸⁷。

デリーを含むパンジャーブ以外のインドにおけるペルシア語の広がり例の一つはベンガルである。ベンガルにあったベンガル・スルターン朝（1342-1576）は他のインドの王朝と同様にイランの王朝の行政制度をとりいれて、ペルシア風の宮廷文化をはぐくんだ⁸⁸。その有名な例として、ギヤースッディーン・アザーム・シャー（Ghiyās al-Dīn A'ẓāmshāh d. 813/1410）の治世についてハーフェズが彼の詩において言及しているという記述は有名である⁸⁹。

インド亜大陸におけるペルシア語の影響は、19世紀から、イギリス人が徐々に勢力を拡大すると弱まった。しかし、インド亜大陸がペルシア語文化圏の一部であったことは、インド亜大陸の言語への影響から、現在も観察可能である。ペルシア語の影響は、インド語群の一部の言語、特にウルドゥー語、パンジャーブ語、カシミール語、スィンド語の中に現れて

⁸⁰ *Ibid.*

⁸¹ Ludwig Paul, “Persian Language i. Early New Persian,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/persian-language-1-early-new-persian>, (accessed December 1, 2021).

⁸² Johanson, Lars, “Historical, Cultural and Linguistic Aspects of Turkish-Iranian Contiguity,” in Lars Johanson and Christiane Bulut (ed.), *Turkic-Iranian Contact Areas: Historical and Linguistic Aspects*. Harrassowitz Verlag, 2006, pp. 4.

⁸³ Jan Marek, “Persian literature in India”, *op. cit.*, 1968.の記述を基礎に置きつつ、他の文献を参照した。

⁸⁴ 真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」、*op. cit.*、205-231頁。

⁸⁵ Mario Casari, “India xiv. Persian Literature,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/india-xiv-persian-literature-in-india>, (accessed December 1, 2021).

⁸⁶ *Ibid.*

⁸⁷ Gavin R. G. Hambly and Catherine B. Asher, “Delhi Sultanate,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/delhi-sultanate>, (accessed December 1, 2021).

⁸⁸ Richard M. Eaton, N. H. Ansari and S. H. Qasemi, “Bengal,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/bengal>, (accessed December 1, 2021).

⁸⁹ 一方で、ティボー・デュバートは、ギヤースッディーン・アザーム・シャーの治世及びベンガル・スルターン朝において、従来主張されているほどには、ペルシア語が重視されてきたことを示す証拠は乏しいと指摘する。他方、宮廷ではなく、イスラームが浸透していない地域の宗教教育において役割を果たしてきたことを示唆する。Thibaut D’Hubert, “Persian at the Court or in the Village? The Elusive Presence of Persian in Bengal,” in Nile Green (ed.), *op. cit.*, pp. 93-112.

いることが指摘されている⁹⁰。

アナトリアにおけるペルシア語文化圏の広がり

ルームセルジューク朝（1077-1308）は、アナトリアにおいてペルシア語とペルシア文化の発展に寄与した。モンゴルの侵入により、ホラーサーンから逃れてきた知識人がアナトリアに移住することによりペルシア語の文化が広まった。公式の場ではトルコ語ではなくアラビア語やペルシア語が用いられ、政治的な安定もあってペルシアの詩人、作家、スーフィー、思想家が宮廷に集まるようになった⁹¹。

オスマン帝国（1299-1922）においても、ペルシア語は重要な地位を占めた。この帝国においてペルシア語が本格的に受容されたのは、コンスタンティノーブルの征服の時期、すなわち、15世紀にムラド2世（İkinci Murad, d. 855/1451）とその息子メフメト2世（İkinci Mehmet, d. 886/1481）の時代からである。彼らは、ペルシア語に特に関心を持ち、学者や文学者によるペルシア語とこの文化の研究・活用を奨励し支援をした⁹²。そして、オスマン帝国の支配層は積極的にアラビア語とペルシア語の言語と文化を積極的に宮廷に取り入れていった。ペルシア語の文法書や用語集の編纂が編まれるのと同時に、16世紀以降はペルシア語のスーフィー詩や神秘主義思想のテキスト、テキストに対する神秘的な解釈も好まれるようになった。宮廷におけるペルシア文化の受け入れ、文法書や用語集の編纂、テキストの神秘主義思想に基づく解釈は対立するものではなく、むしろ、ペルシア神秘主義詩はペルシア語の教育に積極的に用いられ、ペルシア語が紡いだ文化の受け入れを推進する機能を持っていた⁹³。例えば、16世紀、サーディー（Sa‘dī Shīrāzī, d. 690/1291 or 1292）の『薔薇園（Golestān）』などの文学テキスト、ジャーミーの『親交の息吹』などの神秘主義に関するテキストをトルコ語に翻訳したラーミー・チェレビー（Lâmiî Çelebi, d. 938/1532）のテキストは、ペルシア語や文学の教育に用いられてきた⁹⁴。さらに、アッタールの『忠言の書（Pand-nāme）』、サーディーの『果樹園（Būstān）』、ハーフィズの『詩集（Dīvān）』などのテキストも教育機関で読まれていたことが指摘されている⁹⁵。

オスマン帝国の中で、バルカン半島もペルシア語文化圏の形成において重要な位置を占めている。特に、19世紀にかけて、ボスニアのサラエヴォとモスタルにマドラサとテックが設立され、サーディー、ハーフィズ、ルーミーなどの詩がそれらの施設では教えられていた⁹⁶。バルカン半島におけるペルシア語の普及を示す事例として、ボスニア出身であり、オスマン帝国期にペルシア詩の注釈で有名となったアフマド・スーディー（Aḥmad Sūdī d., /1599?）が、幼少のころにペルシア語をマドラサで学んだという記録もある⁹⁷。また、ボスニアはペルシア詩の注釈者をはじめ、多くの知識人をオスマン帝国期に輩出している⁹⁸。

⁹⁰ P.N. Chopra, “The Impact of Islam in India,” in K.K. Kusuman (ed.), *A Panorama of Indian Culture*. New Delhi: K. M. Mittal, 1990, p. 87.

⁹¹ ルームセルジューク朝における、ペルシア語の普及については、Jamshīd Rūstā, “Bar-rasī-ye Zamīne-hā-ye Tārīkhī-ye Vorūd-e Zabān va Adab-e Fārsī be Qalam-rou-ye Selājeqe-ye Rūm,” *Adab va Zabān*, vol.18, no. 34, 2015, pp. 103-126; 井谷鋼造「トルコ民族の活動と西アジアのモンゴル支配時代」永田雄三編『西アジア史II』、2020、99-179頁を参照。

⁹² Murat Umut Inan, “Imperial Ambitions, Mystical Aspirations: Persian Learning in the Ottoman World,” *op. cit.*, pp. 76-77.

⁹³ *Ibid.*, pp. 88-89.

⁹⁴ *Ibid.*, p. 83

⁹⁵ *Ibid.*, p. 80.

⁹⁶ Alī-rezā Shād-ārām, “Bar-rasī-ye Seyr-e Zabān va Adabiyāt-e Fārsī dar Bālkān az Gozashte tā Konūn,” *Tārīkh-e Adabiyāt-e Pāyīz va Zemestān*, vol.9, no.2, 2016, p. 81.

⁹⁷ Murat Umut Inan, “Imperial Ambitions, Mystical Aspirations: Persian Learning in the Ottoman World,” *op. cit.*, p. 85.

⁹⁸ ボスニア出身の知識人については、Sabaheta Gačanin, “Persian Language as Vehicle of Islamic Cultural Memory in Ottoman Bosnia,” *Tarih İncelemeleri Dergisi*, vol.31, no.1. 2016, pp. 165-175 を参照。

中国におけるペルシア語文化圏の広がり⁹⁹

中国における初期のペルシア語の記録は、古代にまでさかのぼることが可能である。しかし、ペルシア語がある程度の役割を果たすようになったのは元（1271-1368）の時代である。中国のムスリムとムスリマのコミュニティには、西アジアからの多数のペルシア人とペルシア語話者がいて、元朝における行政と教育の言葉として、中国語、モンゴル語と並んでペルシア語は公用語として使われてきた。この時代に設立したイスラームの学校ではペルシア語が教えられ、卒業後はペルシア語の翻訳者として各機関で活躍した。また、この時期にペルシア語の書物の翻訳も多く行われた¹⁰⁰。

明の時代では、四夷館においてペルシア語の翻訳家が育てられ、翻訳も行われた。しかし、時代が進むと明でもイスラームを信奉する国との接触は減少して、ペルシア語の重要度は下がった。マドラサにおいては、ペルシア語でイスラームに関する教育が行われていたが、時代が進むとアラビア語のみで教育する場所が増加した。

清朝になると、ペルシア語の重要性はさらに減少し、宮廷でペルシア語を知るものはほとんどいなくなった。一方で、17世紀後半にペルシア語の著作がムスリムの学者によって執筆され、ペルシア語のテキストの翻訳も行われていた¹⁰¹。

ロシアにおけるペルシア語文化圏の広がり

帝政ロシア（1721-1917）のムスリムにおいても、ペルシア語は広まっていた。特に、話し言葉としてのペルシア語ではなく、書き言葉としてのペルシア語は一定の役割を果たした¹⁰²。実際に、帝政ロシア期のムスリムは中央アジアのブハラへ留学し、彼らによって書かれたペルシア語の写本が多く残っている。ペルシア語で書かれているペルシア詩人のテキストやスーフィズムの文献もロシア帝国内のムスリムにおいて広まっていた¹⁰³。

帝政ロシアにおけるペルシア語の役割に関する研究は、他の地域と比較すると発展途上であり、今後の開拓が期待できる分野である。

第2節 スーフィズムの形成とペルシア語文化圏における発展

スーフィズムはアラビア語のタサウウフの訳語である。しばしばイスラーム神秘主義とも定義されてきた。しかし、東長が指摘するように、スーフィズム自体は神秘主義、道徳、民間信仰のすべてを含んだ複合概念であり、時代によってどの点が強調されるかは異なる¹⁰⁴。また、スーフィズムはイスラームと深く関わっていった、「イスラームの信仰と実践の強化」とも言われている。本節ではスーフィズムの形成とペルシア語文化圏における発展について概略を説明する¹⁰⁵。

⁹⁹ 中国におけるペルシア語の普及については EIr, “Chinese-Iranian Relations viii. Persian Language and Literature in China”, *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/chinese-iranian-viii>, (accessed December 1, 2021)を参照。具体的にペルシア語文化の何がどのように受け入れられたかについては、例えば、諫早庸一「ペルシア語文化圏における十二支の年始変容について--ティムール朝十二支考」史林（史学研究会）9巻3号、2008、496-527頁を参照。

¹⁰⁰ しかし、グレアム・フォードが指摘するように、元の時代、ペルシア語がリンガフランカとしてどこまで重要であったかについては、具体的な証拠に乏しいため学者によっても論の分かれ点には留意しなければならない。Graeme Ford, “The Uses of Persian in Imperial China: The Translation Practices of the Great Ming,” *op. cit.*, p. 113.

¹⁰¹ EIr, *op. cit.*

¹⁰² Alfrid Bustanov, “Speaking “Bukharan”: The Circulation of Persian Texts in Imperial Russia,” *op. cit.*, pp. 193-194.

¹⁰³ *Ibid.*, pp. 195-202.

¹⁰⁴ 東長靖『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳—』名古屋大学出版会、2013、32-47頁。

¹⁰⁵ スーフィズムの発展の歴史については Annemarie Schimmel, *Mystical Dimensions of Islam*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1975 を参照しつつ、前述の『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳—』を基礎においている。「ペルシア語文化圏」におけるスーフィズムについて

カール・W・エルンストによれば、スーフィズムの起源はムハンマド自身と彼の教友（サハーバ）である¹⁰⁶。教友のムハンマドへの忠誠を誓うことによって神への奉仕に身を投じる行為が、スーフィーのシャイフに対する忠誠の誓いを通してムハンマドへの忠誠の誓いを行い、神に近づく行為に繋がる。しかし、実際はアッラーの啓示に基づきつつも外来の思想の影響を受けながら9世紀なかごろに発展してきたと東長は指摘する¹⁰⁷。

スーフィーの起源となるような人々は、7世紀末から登場する禁欲主義者として知られている。禁欲主義者は神への恐れを持ち、欲望の節制を行った。その最初の人物は、アッターールの聖者伝にも登場するハサン・バスリー（Abū Sa‘īd Ḥasan ibn Yasār al-Baṣrī, d. 110/728）とされている。彼の著作は現在残っていないが、記録として彼は現世的な利益を捨てたことが記述されている。また、この時期活躍した、イブラーヒーム・イブン・アドハム（Abū Ishāq Ibrāhīm ibn Adham al-Balkhī, d. 156/777）は王位を捨てて、禁欲主義者となり、バルヒー（Shaqīq al-Balkhī, d. 194/810）などの初期のスーフィーを育てた。さらに、8世紀には現世・来世への欲求を断ち、神のみをひたすら愛す「神への愛」を実践したと言われているラービア（Umm al-Khayr Rābī‘a bin Ismā‘īl al-‘Adawīya al-Baṣrīya, d. 180/801?）が活躍し、禁欲主義とは異なるスーフィズムの思想的な萌芽を観察できる。

9世紀にはスーフィズムの主流な教えが成立し始める。一つはジュナイド（Abū al-Qāsim ibn Muḥammad ibn al-Junayd al-Khazzāz, d. 298/910）を代表とする「バグダード学派」が述べた教えであり、もう一つバスターミー（Abū Yazīd Ṭayfūr ibn ‘Isā al-Baṣṭāmī, d. 261 or 264/874 or 877）やハッラージュ（Abū ‘Abd Allāh al-Ḥusayn ibn Maṣṣūr al-Bayḍāwī al-Ḥallāj, d. 309/922）を中心とした教えである。前者はイスラーム法に準拠しつつスーフィズムの教えを展開した。後者は皮相的な教えには準拠せず、神の中に消滅することによって、神との合一を目指すファンナーを唱えた。後者は理性を逸脱するような冒険的言葉である酔語や、神のみを愛したとしてイブリースを尊重するような教えを唱えた。

10世紀に入るとスーフィズムの教義をまとめた書物が登場した。そのうちの代表的な書物の一つは、フジュウィーリー（Abū al-Ḥasan ‘Alī ibn ‘Uthmān ‘Alī al-Jullābī al-Ghaznawī al-Hujwīrī, d. 464/1072）の『隠されたものの開示（*Kashf al-Mahjūb*）』であり、ペルシア語で書かれた初めてのスーフィズムの教義に関する本である。また、アッターールの聖者伝のもととなった本の一つでもあると言われている。もう一つの代表的な書籍は、アラビア語で書かれたクシャイリー（Abū al-Qāsim ‘Abd al-Karīm ibn Hawāzin al-Qushayrī, d. 465/1072）の『クシャイリーの論考（*al-Risāla al-Qushayrīya*）』である。聖者伝とスーフィーの教義について書いてあるこの書物は、イスラーム世界で広まったスーフィズムの技術書の一つであり、また、スーフィズムの正当性及び優位性を示す書物でもある。11世紀にはアブー・ハーミド・ガザリー（Abū Ḥāmid Muḥammad ibn Muḥammad al-Ṭūsī al-Ghazālī, d. 505/1111）が『宗教諸学の再興（*Iḥyā’ ‘Ulūm al-Dīn*）』を書くことによってスーフィズムはスンナ派においてその地位を高めた。同時にこの書物をペルシア語に訳しわかりやすくした、『幸福の錬金術（*Kīmīyā-ye Sa‘ādat*）』もガザリーによって書かれた。

12世紀ごろから、タリーカ（Ṭarīqa）と呼ばれるスーフィーの集まりが設立しつつあった。タリーカは、カリスマ性を持った人物を中心にする人々の集まりであり、スーフィーの師を中心に儀礼・思想の実践を行った。タリーカに知識人層ではない民衆が参加することによって、スーフィズムは民衆において広まっていった。タリーカはモンゴルの侵略後、その中心地であったイラクが荒廃すると各地において発展し、イスラームやスーフィズムを広めるのに寄与した。

の記述は上記二つの文献に加えて Jan Rypka, *History of Iranian Literature*, in edited by Karl Jan, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1968 を参照した。

¹⁰⁶ Carl W. Ernst, “Tasawwuf (Sufism),” in Richard C. Martin, Said Amir Arjomand, Marcia Hermansen, Abdulkader Tayob, Rochelle Davis and John Obert Voll (ed.), *Encyclopedia of Islam and the Muslim World*, 2 vols. New York: Macmillan Reference USA, 2004.

¹⁰⁷ 東長靖、*op. cit.*、32-47 頁。

ペルシア語文化圏において、スーフィズムの萌芽はホラーサーンにおいてみられ、モンゴルの侵略まではペルシア語文化圏におけるスーフィズムの一つの中心地であった。ホラーサーン出身のスーフィー自体は多かったが、ペルシア語で書かれたスーフィズムの文献が登場するのは10世紀からである。最初期のペルシア語で書かれた文献はアブー・サイド（Abū Sa‘īd Faḏl Allāh ibn Abī al-Khayr Mihnā‘ī, d. 440/1049）が書いたスーフィズムに関するペルシア語の散文や詩であった。アブー・サイドはバグダード学派から非難されていたマラーマティーヤ（al-Malāmatīya）、前述のバスターミーやハッラージュの考えを統合したと言われている。また、彼はホラーサーンにおけるハーンカーやフトゥワ（Futūwa）の考えをスーフィズムに取り入れたともいわれている。11世紀になると、セルジューク朝の庇護のもとスーフィズムはホラーサーンを中心に発展していった。この時期に前述のアブー・ハーミド・ガザーリーやアンサールの導師を自称していたアブドゥッラー・アンサーリー（Abū Ismā‘īl ‘Abd Allāh Anṣārī, d. 481/1089）が活躍した。アンサーリーの散文詩の考え方の一部が、マスナヴィーで神秘主義詩を書いたサナーイーに受け継がれているという指摘もある¹⁰⁸。

ペルシア語文化圏において広まっていったスーフィズムの思想の一例は、「神への愛」である。ラービアによって実践されたその考えは、バスターミー、ハッラージュ、アブー・サイドに引き継がれ、セルジューク朝期にアフマド・ガザーリー（Aḥmad ibn Muḥammad al-Ghazālī, d. 520/1126）、ルーズビハーン・バクリー・シーラーズィー（Abū Muḥammad Ṣadr al-Dīn ibn Abī Naṣr Rūzbihān Baqlī Shīrāzī, d. 606/1209）のもと発展していった。また、アッターールも「神への愛」を主要なテーマに据えて詩作をしたこと¹⁰⁹。

モンゴルの侵入後は、ペルシア語文化圏に属していたスーフィーはインド亜大陸やアナトリアにタリーカやスーフィズムを広めていた。同時に、彼らが使っていたペルシア語を広めることに寄与した¹¹⁰。

第3節 ペルシア詩の歴史と概要

ペルシア語文化圏におけるペルシア詩は哲学、神学、スーフィズムなどの思想の伝播、文学と芸術の発展において特に重要な役割を果たしてきた。特に、ペルシア詩はアラビア詩の伝統や地域性を吸収しつつ、各地域における文学と芸術を発展させた¹¹¹。黒柳は『ハーフィズ詩集』の解説において「彼の詩人としての令名は生前からイランのみならず、インド、イラク、中央アジア、トルコ等ペルシア語文化圏に広く謳われていた」と指摘することで、ペルシア語文化圏においてハーフィズのペルシア詩が広まっていたこと示唆している¹¹²。本節ではペルシア詩の歴史、スタイル、詩形を概説する。その後、ペルシア詩において重要な役割を果たしてきた詩の種類とそれぞれが取り扱っているテーマについて説明する。

新ペルシア語で書かれたペルシア詩の系譜はサーマーン朝において始まった。近世ペルシア詩の父と呼ばれるルーダキー（Abū ‘Abd Allāh Ja‘far ibn Muḥammad Rūdakī Samarqandī, d. 328/940）を始め、アブー・シャクール・バルヒー（Abū Shakūr Balkhī, d. ?¹¹³）、アブー・ア

¹⁰⁸ Jan Rypka, “Avesta. Ancient Persian Inscriptions. Middle Persian Literature”, *op. cit.*, p. 41.

¹⁰⁹ アッターール「神への愛」をテーマについて論じた先行研究は前述のシンメルテキストを含め、多数ある。それらについては前章の先行研究レビューにおいて言及した。

¹¹⁰ スーフィズムがペルシア語の伝播に寄与したことについては、Alīreṣ Shād-ārām, “Bar-rasī-ye Seyr-e Zabān va Adabiyāt-e Fārsī dar Bālkān az Gozashte tā Konūn,” *Tārīkh-e Adabiyāt-e Pāyīz va Zemestān*, vol.9, no.2, 2016, pp. 69-90 と Mario Casari, *op. cit.* を参照

¹¹¹ ナイル・グリーンは Nile Green, “Introduction,” in Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*, Oakland: University of California Press, 2019, pp. 20-22 において、詩を含んだペルシア文学の他地域における受容について簡単に触れる。また、詩が他地域の教育や文学の発展に貢献したことは、上述の Murat Umut Inan, “Imperial Ambitions, Mystical Aspirations: Persian Learning in the Ottoman World,” *op. cit.*, pp. 76-77 等、同書の各チャプターで地域ごとに示される。

¹¹² ハーフィズ（黒柳恒夫訳）『ハーフィズ詩集』平凡社、2008、377頁。

¹¹³ 没年不明

ル＝ムアイヤド・バルヒー (Abū al-Mu'ayyad Balkhī, d. ?¹¹⁴) などの詩人が活躍した¹¹⁵。同王朝末期にはダキーキー (Abū Maṣṣūr Muḥammad ibn Aḥmad Daqīqī, d.366-370/976-981)が活躍し、彼を先達としてフィルダウスイー (Firdawsī Tūsī, d. 411 or 416/1020-1 or 1025-6) が 30 余年の歳月をかけてイランの民族叙事詩として最も名高い『王書 (Shāh-Nāme)』を編む¹¹⁶。この詩の中には、イランの神話や歴史伝承などが集められていて、そのモチーフはアッタールにおいてもしばしば引用される¹¹⁷。『王書』は前述のガズナ朝のマフムードに捧げられたが、フィルダウスイーが活着している間にはその価値は認められなかった。このマフムードは詩人の保護者として有名で、彼の宮廷にはウンスリー (Ḥasan 'Unsurī Balkhī, d. 431/1039-1040) をはじめとする詩人がたくさんいたと言われている¹¹⁸。前述したように彼のヒンドゥー征服を含めた事業はそれらの詩人たちによって伝えられる¹¹⁹。その後、セルジューク朝が力を持つようになると、スーフイーが社会において大きな役割を果たすようになる¹²⁰。そして、スーフイーが持っていた神秘主義思想を、韻文詩によって表現する両者の融合という新しい流れが生まれる。この方法は初め前述のアブー・サイドラによってロバーイーという詩形で行われた。後にサナーイーによってマスナヴィー形式で詩が読まれるようになった¹²¹。所謂、スーフイー詩の先駆者としては、後者の名前がまず挙げられる。その後、この分野では、サナーイーに続き、本論文で扱うアッタール、メヴレヴィー教団の創設者でもあるルーミーが登場する。また、セルジューク朝期にはサンジャル (Aḥmad Sanjar, d. 552/1157-8) の庇護のもと頌詩詩人として名高いアンヴァリーが登場する。世界的に著名なウマル・ハイヤム ('Umar Khayyām, d. 509-510/1131) やイスマーイール派詩人として著名なナーシル・フスロー (Nāṣir Khusraw al-Qabādiyānī, d. 465-470?/ 1072-7?) もセルジューク朝期の詩人である。近世ペルシア語詩文化の一大中心地は、ホラーサーンであったが、一方、コーカサス地域からハーカーニー (Khāqānī Sherbānī, d. 595?/1199?) やロマンス詩人として有名なニザーミー (Niẓāmī Ganjavī, d.606/1203?) が登場する¹²²。セルジューク朝が滅び 13 世紀を迎えると、前述したルーミーと道徳詩人であるサーディー (Sa'dī Shīrāzī, d. 691/1292?) が活躍した¹²³。そして、ティムール朝 (1370-1507) の時代になると、現代のイランにおいて最も著名とって差し支えない抒情詩人ハーフィズが登場し、その王朝のもとサマルカンドやヘラートにおいて文化が花開き、15 世紀のヘラートで最後の詩人の異名を持つジャーミー (Nūr al-Dīn 'Abd al-Raḥmān ibn Aḥmad Jāmī, d. 898/1492) が登場した¹²⁴。ジャーミー以来卓越した詩人が登場していないとかつて言われたが、現在ではその主張は疑問視されている¹²⁵。ジャーミーの後は、シーア派詩人や抒情詩人で詩人の王と呼ばれたサーイブ・タブリーズィー (Ṣā'ib Tabrizī d. 1080/1670) が活躍したサファヴィー朝期¹²⁶、古典詩への回帰運動が行われたカー

¹¹⁴ 没年不明

¹¹⁵ Jan Rypka, "History of Persian Literature up to the Beginning of the 20th Century", *op. cit.*: G. Lazard, "Abu'l-Mo'ayyad Balḳī," *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/abul-moayyad-balki>, (accessed December 1, 2021).

¹¹⁶ Jan Rypka, *op. cit.*, pp. 153-154.

¹¹⁷ 例えば、霊鳥スイーモルグやジャムシード王がアッタールの韻文に登場する。

¹¹⁸ Jan Rypka, *op. cit.*, pp.172-174.

¹¹⁹ *Ibid.*, 174.

¹²⁰ Ḥamīd Dabāsh, "Persian Sufism during the Seljuk Period." In Leonard Lewisohn (ed.), *The Heritage of Sufism*. Vol.1, *Classical Persian Sufism from Its Origins to Rumi (700-1300)*. Oxford: Oneworld, 1999, p. 153.

¹²¹ Jan Rypka, *op. cit.*, pp. 233-245.

¹²² *Ibid.*, pp. 210-213.

¹²³ *Ibid.*, pp. 250-253.

¹²⁴ *Ibid.*, pp. 263-288.

¹²⁵ Shafī'ī Kadkanī, "Persian Literature (Belles-Letters) from the Time of Jāmī to the Present Day," in G. Morrison (ed.), *History of Persian Literature from the Beginning of the Islamic Period to the Present Day*. Leiden: E. J. Brill, 1981, p. 133.

¹²⁶ この時代の詩作は、サファヴィー朝ではなく、インドのムガル朝で盛んに行われていた。サーイブもムガル朝でインド・スタイルの詩を学んでいた。Paul E. Losensky, "Ṣā'eb' Tabrizi," *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/saeb-tabrizi> (accessed December 1, 2021).

ジャーール朝をへて、ニーマー・ユーシージュ (Nīmā Yūshīj, d. 1379/1960) が古典的韻律から脱却するニーマー自由詩 (She‘r-e Āzāde Nīmāyī) ¹²⁷を築き現代ペルシア詩の時代が訪れる¹²⁸。現代詩が登場するまでのペルシア詩のスタイルは以下の三つに分類できる¹²⁹

ホラーサーン・スタイル

9世紀初頭から12世紀半ばにかけてホラーサーンとトランスオキシアナの詩人の間で流行したスタイルはホラーサーン・スタイルと呼ばれる。新ペルシア語の最初の詩はこのスタイルで書かれた。このスタイルの特徴は、二つの期間によって分類できる。サーマーン朝期とガズナ朝及びセルジューク朝期である。

1. サーマーン朝時代におけるホラーサーン・スタイルの詩の特徴は、「表現がシンプルで意味と内容が明快」なことである。すなわち、誇張した表現や技巧を示すより、内容を明確に示すスタイルである。この時代の詩の重要な様式はカスィーデとマスナヴィーであった。カスィーデにおいては頌詩、風刺詩、叙情詩、マスナヴィーでは、寓話、物語、神話などの叙事詩が語られていた。
2. ガズナ朝はサーマーン朝より、アッバース朝のカリフへ近づいたことにより、アラブの知的および文化的伝統を受け入れるようになった。その結果、ガズナ朝とセルジューク朝では、サーマーン朝のホラーサーン・スタイルが持っていた詩の単純さをある程度排除した詩が扱われるようになる。哲学、数学、医学、天文学、神秘主義など、さまざまなトピックが詩として使われ、アラビア語の単語や誇張表現も使用されるようになった。一方で、このスタイルにおいては、まだ、表現の単純さや内容の明確さは後世の詩と比較して失われていなかった。

イラク・スタイル

イラク・スタイルは、セルジューク朝の台頭とともに出現した。詩はホラーサーンとトランスオキシアナを中心としていたが、次第にイラクとアゼルバイジャンに広まっていた。この両地域で詠まれた詩のスタイルがイラク・スタイルと呼ばれている¹³⁰。

両地域を中心に発展したイラク・スタイルの特徴は、ホラーサーン・スタイルと比べて修辭が増え表現がより難解になり、内容が明確でなくなったこと、あらゆる分野の学問の知識が用いられて、詩作が行われたことである。

(1) アゼルバイジャンやコーカサス地域でのイラク・スタイル

アゼルバイジャンやコーカサス地域でのイラク・スタイルにおいて重視されたのは、美を体験する喜びであり、謎を解明する喜びでもある。そのために、あらゆるジャンルの知識が動員されて詩を難解かつ簡単に読めないものとした。この地域における、詩の主な読者は知識人であり、難解な表現から知識を用いて真の意味を見つけ出すことによって、謎を解明し、詩自体の美を見つけ出すことが重視された。また、ゾロアスター教やキリスト教徒との交流、

¹²⁷ 「新しい詩 (She‘r-e Nou)」と呼ばれる詩の一つで、詩句の長さを自由に決めるといふところに特徴がある。古典詩においては、韻律によって、詩の長さは決まっているが、このニーマーの詩では、詩人が自由に詩の長さを決める。

¹²⁸ ジャーミー以降のペルシア詩の発展の経緯については以下を参照。 Shafī‘ī Kadkanī, *op. cit.*; Jan Rypka, “Persian Literature of the 20th Century,” *op. cit.*, pp. 353-418.

¹²⁹ ペルシア詩のスタイルについては、以下の文献を参考にした。

Mozaffariyān ‘Alīrezā, “Vīzhegī-hā-ye Bonyādī-ye Sabk-hā-ye She‘r-e Fārsī,” *Tārīkh-e Adabīyāt (Pazhūhesh-nāme-ye ‘Olūm-e Ensānī)*, no.71/3, 2012, pp. 265-292; Jan Rypka, *op. cit.*, pp. 112-115; 佐々木あや乃「ペルシア文学における自然描写の発生とその展開—いわゆるサブケ・ホラサーニー派の詩人を中心に」『オリエンツ 35-2』、1992、56-71頁; Mario Casari, *op. cit.*; William L. Hanaway, Jr., “Bāzgasht-e Adabī,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/bazgasht-e-adabi> (accessed December 1, 2021).

¹³⁰ イラクで広まったスタイルとアゼルバイジャンで広まったスタイルはそれぞれを独立したスタイルとみなされることもある。しかし、本論文では、現在一般的な分け方に従って、両地域で出現したスタイルをまとめてイラク・スタイルとして論じる。

山岳地帯という地域性からイラクとは異なる文化に基づいて詩作が行われた。

(2) イラクやホラーサーン地域でのイラク・スタイル

イラクやホラーサーン地域でのイラク・スタイルにおいて重視されたのは、扱っているテーマや感情を最も美しい形で表現することである。アゼルバイジャンのスタイルとは異なり、詩自体の美しさではなく、表現したい内容が重視される。様々なジャンルの知識が引用されるが、それも、テーマや表現したい感情を美しく表現するという側面が強い。特に、愛というテーマはこのスタイルと相性がよく、愛を主題に扱う神秘主義詩人の多くやハーフィズなどがこのイラク・スタイルと言われている、詩を残している。このスタイルのもう一つの特徴として、詩を知識層や支配階級以外の階級においても広めたということがある。このスタイルの詩は難解だったが、難解さ自体に美しさを見出させるものではなく、詩のテーマである特定の感情を飾り立てて前面に出すことによって、使っている語彙の理解がなくても、聴衆を魅了した¹³¹。

インド・スタイル

インド・スタイルはいくつかの社会的、政治的、宗教的要因のために生まれた。サファヴィー朝の王たちはシーア派の宗教をイラン全土に普及させ、それを広めるための広範な宣伝を開始した。シーア派に対するサファヴィー朝の王たちの強い関心により、詩は宗教と宗教的宣伝の奉仕に使われるようになった。サファヴィー朝のスルターンたちは、頌詩や誇張表現を好まず、誇張と賞賛以外に何も提供することのなかった詩人たちを無視し、宮廷詩の文化は衰退した。

一方、サファヴィー朝で受け入れられなかった詩人たちは、インドの宮廷で受け入れられ、インド・スタイルを形成した¹³²。インド・スタイルの主な特徴は、複雑なテーマと前例のない解釈を探し、既存のスタイルにおいて、なじみの薄かった口語や市場の言葉を組み合わせ、市場、女性、子供、親族に関連する個人的な状況や感情を表現することである。また、誰も試みたことのないテーマの探求もこのスタイルの特徴である。このインド・スタイルによって、既存のホラーサーン・スタイルやイラク・スタイルには実現不可能であった表現を可能にした。一方で、詩の言語や美しいとされていた言葉や表現が他の言葉と同等に扱われることにより、詩と日常語の区別が難しくなった。

四つ目のスタイルとして文学回帰スタイルがある。サファヴィー朝を倒したカージャー朝の時代に、インド・スタイルへの非難があり、ホラーサーン・スタイルとイラク・スタイルへの両スタイルの古典詩への復古を求める動きがあった。そして、ホラーサーン・スタイルとイラク・スタイルの形式が復活し、この古典回帰を果たした詩のスタイルを文学回帰のスタイルと呼ぶ。このスタイルにおいて、詩人たちは新しい詩のスタイルを確立したわけではなく、過去の偉大な詩人の模倣を行った¹³³。

古典的なペルシア詩の詩形は、カスィーデ、ガザル、マスナヴィー、ロバーイー、ド・ベイティー、ケトゥエ、タルキーブ・バンド、タルジーウ・バンド、モサンマト、モスタザードなどがある。詩形によって、詠まれてきたテーマと内容も異なる。すなわち、テーマや目的に応じて詩形は選ばれ、詩は常に詩形に基づいて表現されてきた¹³⁴。

¹³¹ 山岳地域にはない、平野部での経済的な安定による明るさと、モンゴルの侵攻や政治的な抑圧によって起こる悲劇が、イラクにおけるイラク・スタイルの曖昧さを作っていることも、Możaffariyān ‘Alīreżā, *op. cit.*, pp. 270-276.によって指摘されている。

¹³² Mario Casari, *op. cit.*

¹³³ Hanaway, Jr, William L., “Bāzgasht-e Adabī,” *Encyclopaedia Iranica*, <https://iranicaonline.org/articles/bazgast-e-adabi> (accessed December 1, 2021).

¹³⁴ 詩形の記述については、Jalāl al-Dīn Homāyī, *Fonūn-e Balāghat va Şanā‘at-e Adabī*, Tehrān: Ahūrā, 2010 に基づきつつ、黒柳恒男『ペルシア文芸思潮』近藤出版社、1977を参照した。

カスィーデ¹³⁵

カスィーデによって詩人の力量が図れるとも言われている詩形であり、アラブからペルシアに導入された。長さは 15 対句以上で、最初の対句は半句が相互に押韻し、第二句以降は、後半の半句が最初の対句の後半の半句に押韻する。長さは詩人の気質や主題によって変化する。この詩の主題は、支配者や王に対する賞賛、祝祭に対する祝いの言葉、戦の勝利宣言、甘言や苦言、哀歌、追悼、倫理や社会に関する問題、神秘主義などである。伝統的な頌詩は開幕の言葉と以下の三つの部分からなっている。

- ・ナスィーブ (Nasīb) : 自然や風景描写 (アラブのものは砂漠を描写することが多いが、ペルシアのものは春や秋の祭りなどを描写し、恋や酒を飲むことへの喜びを表した。
- ・マクスード (Maqṣūd) : パトロンに対する称賛の言葉
- ・シャリーテ (Sharīte) : パトロンに対する祝福

最初のナスィーブの部分は省略できて、パトロンに対する称賛の言葉から詩を始めることにできる。また、同一の詩内で主題を変えることが、開幕の言葉を再度使用することでできる。

ガザル¹³⁶

ガザルは、伝統的なペルシア詩の一形態で、詩形はカスィーデと同じであるが通常 5~12 対句で記述される。カスィーデとは異なり、抒情詩・恋愛詩で主に用いられ、一つの詩は一つの主題しか取り扱わない。もともと、カスィーデのナスィーブが分離してガザルとなった。イスラーム神秘主義が後に、この詩でも取り扱われるようになり、詠まれる恋愛の対象を「神」に変えた。また、結びの対句に詩人の雅号が入れられるようになる。

マスナヴィー¹³⁷

古くから使われていた詩形で、長い物語や歴史内容を構成するために使用される。全ての対句は半句の脚韻が互いに押韻する。次の対句にも前の対句の脚韻で押韻することもできるが、好まれない。フィルダウスィーの『王書』は、マスナヴィーの形で書かれたペルシア文学で最も著名な詩の一つである。この詩形を使用する他のテーマで代表的なものはロマンス叙事詩とペルシア神秘主義詩であり、前者はニザーミー、後者はサナーイー、アッタール、ルーミーなどによって詩作された。

ロバーイー¹³⁸

ロバーイーは第 1、第 2、第 4 句の脚韻の全てが押韻する 4 行からなる詩形である。この詩形のテキストとしてウマル・ハイヤームのロバーイヤートが世界的に有名であるが、マスナヴィー体で書かれたペルシア詩の成立前、初期のペルシア神秘主義詩で積極的に用いられた詩形としても知られている。

ド・ベイティー¹³⁹

ダルヴィーシュであるバーバー・ターヒル (Bābā Tāhir, d. ?¹⁴⁰) が用いた二つの対句からなる詩形で、ロバーイーと同様に第 1、第 2、第 4 句の脚韻の全てが押韻する 4 行からなる。

ケトゥエ¹⁴¹

¹³⁵ Jalāl al-Dīn Homāyī, *op.cit.*, pp. 76-88.

¹³⁶ *Ibid.*, pp. 89-102.

¹³⁷ *Ibid.*, pp. 108-114.

¹³⁸ *Ibid.*, pp. 105-107.

¹³⁹ *Ibid.*, p. 107.

¹⁴⁰ 没年不明 (11 世紀ごろに活躍)

¹⁴¹ *Ibid.*, p. 104.

断片詩とも呼ばれる長さは2～5対句で、例外もあるが通常最大の対句数が15である。道徳、賛美、甘美な物語、風刺、哀歌などがある。カスィーデとは開句以外の場所と特徴が共通している。

モサンマト¹⁴²

通常3～6行からなり、最後の行以外の脚韻が互いに押韻する詩形。頌詩の一種でもあり、マヌーチェフル (Manṣūr Manūchifr, d, 421/1030?) が主に用いていた。

タルキーブ・バンドとタルジーウ・バンド¹⁴³

カスィーデ若しくはガザルの詩形と共通の特徴を持つ詩形で、二つ以上のガザル若しくはカスィーデの詩の間に繋ぎのような形で対句を挿入し、さらに、最後にも対句を挿入する。タルジーウ・バンドは詩の間にある対句と最後の対句は同じものを、タルキーブ・バンドは異なるものを使う。

モスタザード¹⁴⁴

ロバーイー、ガザル、断片詩の各半句の後に、半句と関係するが、韻律が合わない短い文を挿入する詩形。対象となる半句よりも、挿入される文は短い。

ペルシア詩におけるテーマは多岐にわたるが、ペルシア詩の発展に最も寄与した代表的なものとしては叙事詩、頌詩、スーフイー詩を上げる。

叙事詩

叙事詩はペルシア語文化圏において最も古い詩の一つであり、歴史、物語、伝承の記述に主に使われてきた。特に、最初期で有名なものは『王書』であり、そこに登場する人物、幻獣、英雄譚はモチーフとして多くのペルシア詩において使用され引用された。

頌詩

頌詩は君主へささげられる称賛の詩であり、ペルシア文学の中心が宮廷であったことに鑑みれば、ペルシア文学の発展において不可欠のものであり、詠まれてきた。実際に、ホラーサーン・スタイルにおける主要な詩は頌詩を中心とした宮廷詩であり、イラク・スタイルの詩を初期に作詩したのも頌詩詩人として最もペルシア文学において名高いアンヴァリーであった。頌詩において新しいスタイルが試みられたりすることによって、ペルシア詩は発展していった。

スーフイー詩

スーフイー詩の取り扱うテーマは聖者や神秘主義思想を含むスーフイズムであり、ペルシア詩において重要な役割を果たしてきた。スーフイー詩はセルジューク朝期に既存のペルシア詩と融合する形で確立した。スーフイー詩は多くのペルシア詩の表現やモチーフを受け継ぎつつ、スーフイズムという新しい解釈及びその用語を既存の詩に与えた。イラク・スタイルの発展とともに広がっていき、モンゴルの侵略後、詩の主要なテーマとして扱われるようになった。はじめ、このテーマを扱った詩はロバーイーという形で始まり、マスナヴィー形式という形でペルシア神秘主義詩として確立し、最終的にサーディーやハーフィズが作ったガザルにおいて取り入れられた。

¹⁴² *Ibid.*, pp. 114-119.

¹⁴³ *Ibid.*, pp. 119-141.

¹⁴⁴ *Ibid.*, pp. 142-144.

第4節 ペルシア文化圏におけるアッタールの位置づけ

本論文の分析対象である詩の作者、アッタールはホラーサーンのニーシャープールで活躍した詩人である。アッタールに関する記述がある伝承として最初期のものはアウフィー（Nūr al-Dīn Muḥammad ‘Aufī Bukhārī, d. 640/1242?）の『精神の精髓（*Lobāb al-Albāb*）』であるが、記述に乏しい。頻繁に参照されているものとしては、サマルカンディー（Dawlatshāh Samarqandī, d. 900/1495?）の『詩人伝（*Tazkere al-Sho‘arā*）』とジャーミーの『親交の息吹（*Nafahāt al-Ons men Hazrāt al-Qods*）』がある¹⁴⁵。しかし、不確かな情報を多く含んでいることが、指摘されている。キャドキャニー、ザッリーククーブもアッタールの人生について記述しているが、わかっていることは現在も少ない。確実なことはアッタールがニーシャープールで香料商を営みながら、スーフィー詩を書いたことと、他の多くの同時代の詩人とは異なり宮廷で詩を書かなかったことである。彼は、またモンゴルの侵略の時期に殺されたとも伝わっている。

彼の生涯のほとんどは謎に包まれているが、ホラーサーン・スタイルの詩人であったことがキャドキャニーによって指摘されている¹⁴⁶。彼の詩はホラーサーン・スタイルがイラク・スタイルと両立した時期に登場して、ホラーサーン・スタイルの詩人のようにペルシア語を主に用いて作詩されつつも、後期ホラーサーン・スタイル及び初期のイラク・スタイルのようにアラビア語のハディースの引用や聖者や預言者の話がテキストの中で使われる。アッタールが生涯をすごしたニーシャープールは当時のイランの文化の中心地の一つであり、マドラサや図書館もあった。彼がニーシャープールにおいてイラク・スタイルで取り入れられている、アラビア語のハディースや科学に触れたことは十分に推測できる。さらに、ニーシャープールを含むホラーサーン地方は13世紀までのペルシア神秘主義詩やスーフィズムの中心地の一つでもあり、前述したスーフィズムの思想の系譜を受け継いでいた可能性がある。

アッタールの詩はペルシア語文化圏において広く受け入れられた。彼の詩はインド亜大陸やアナトリアなどでも読まれていたことが明らかになっている¹⁴⁷。また、彼自身はタリーカの系譜に属し¹⁴⁸、スーフィズムの教師としてスーフィズムを庶民に広めた人物としても頻繁に語られている¹⁴⁹。以上に鑑みれば、アッタールと彼の詩の研究はペルシア語文化圏におけるスーフィーやペルシア詩の広まりを検討するうえで極めて重要である。

アッタールとアッタールの詩がどのように受け入れられて、それらがどのような意味を各地域において与えられたかを知るには、まずアッタールとその詩それぞれが持つ思想的又は文学的背景を理解し、それがアッタールやテキストの中でどのように確立されたかを検討しなければならない。その観点から、本論文のようなアッタールのテキスト自体を分析し、その特徴を特定する基礎研究は、受容に関する研究の基盤になり、重要である。

¹⁴⁵ アウフィー『精神の精髓』は Muḥammad ‘Aufī, *Lobāb al-Albāb: second part*, edited by E.G. Browne, London: E. J. Brill, 1903, 337-339、サマルカンディー『詩人伝』は Dawlatshāh Samarqandī, *Tazkere al-Sho‘arā*, Tehrān: Chāp-khāne-ye Khāvar, 1959 or 1960, pp. 140-144、ジャーミーの『親交の息吹』は Nūr-al-dīn Jāmī, *Nafahāt al-Ons men Hazrāt al-Qods*, Tehran, 1958 or 1959, pp. 599-600 のアッタールの記述を参照。

¹⁴⁶ Farīd al-Dīn ‘Attār, *Manṭeq al-Ṭayr*, edited by Shāfi‘ī Kadkanī, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014-2015, p. 13.

¹⁴⁷ Berrin Uyar Akalin, “The Poets Who Wrote and Translated *Mantiku ‘t Tayr* in Turkish Literature”, *International Journal of Central Asian Studies* vol.10, no.1, 2005, 167-179; Christopher Shackle, “Representation of ‘Attār in the West and in the East: Translation of the *Manṭeq al-Ṭayr* and the Tale of Shaykh Ṣan‘ān,” in Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *‘Attār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 168-175.

¹⁴⁸ J Spencer Trimmingham, *The Sufi Order in Islam*, New York: Oxford University Press, 1971, p. 56.

¹⁴⁹ J.T.P De Bruijn, “The Preaching Poet: Three Homiletic Poem by Farīd al-Dīn ‘Attār”, *Edeviyāt*, vol.9, 1998, pp. 85-100.

第3章 テキストマイニングを用いたアッターールの詩の分析手法

第1節 3章、4章、5章の概略

3章、4章、5章では第1章の第3節で示したように、文学テキストの定量分析の方法を精査し、包括的にアッターールのテキストの特徴を明らかにする定量分析の方法を示し、分析を行う。そのために、アッターールの研究において論じられてきた、(1) 真作と偽作の問題、(2) 「神への愛」とそれに伴う苦痛の表現を分析する主題として取り扱う。

3章では、テキストマイニングの分析対象となるアッターール及び他の詩人のテキストを示す。その後、テキストマイニングの定義や手法を説明し、対象となるテキストに対して適切な手法を選ぶ。最後に、分析手順を示す。

4章と5章では、3章で選んだ分析手順に従って、実際の分析を行う。4章においては、真作とされるもの、偽作とされるものの両方を含むアッターールのテキストを分析する。5章においては、アッターール以外の詩人のテキストを分析対象とし、最後にアッターールのテキストとの比較を行う。

第2節 分析対象

本論文で分析対象とするテキストは以下である。

1. アッターールの真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『詩集 (Dīvān)』、『四行詩集 (Mokhtār-nāme)』、偽作とされる『忠言の書』、『驚異の顕現 (Maḥzar al-'Ajāyeb)』、『ヒーラージュの書 (Hilāj-nāme)』
2. サナーイーの『真理の園 (Ḥadīqeh al-Ḥaqīqeh)』
3. ルーミーの『精神的マスナヴィー (Masnavī Ma'navī)』
4. アンヴァリーの『詩集 (Dīvān)』
5. ハーカーニーの『詩集 (Dīvān)』

1. アッターールのテキスト¹⁵⁰

アッターールの著作とされるテキストの分析により、アッターールの真作の特徴及び、真作と偽作の特徴の差異を明らかにする。ナフィースィーにより真作とされた9テキストのうち、現代の研究においても真作と認められている韻文『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『詩集』、『四行詩集』を分析対象とする¹⁵¹。偽作としては、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』を分析対象とする。

『神秘の書』：

22のテーマ別の章からなり、スーフィズムの各テーマについて物語を交えて、マスナヴィー一体で記述されたテキスト。約3300対句。

『神の書』：

王と6人の息子の対話で構成されている物語。王が息子たちに求めている対象を尋ね、息子がそれに答える。それぞれの答えに対して、王がその求めるものの価値のなさを論ずという対話を繰り返す。約6700対句。

¹⁵⁰ 韻文テキストの内、『鳥の言葉』、『神の書』、『災厄の書』、『神秘の書』はマスナヴィー一体で書かれていて、『神秘の書』以外は粹物語という形式をとっている。物語の中に入れ子構造のように物語があるという形式で、テーマとの関連がある。

¹⁵¹ これらのテキストは真作と知られているのみではなく、先行研究において分析対象とされてきた。

『災厄の書』：

探究者が神秘主義道の階梯を徐々に上がっていく物語。老師が探究者を旅に導き、探究者は、ジブリール（ガブリエル）から始まり、順に天使、超自然物・自然物・預言者を訪ねる。探究者の対話相手それぞれは、自分より優れたものがあることを探求者に諭し、次の旅先に行くように指示する。探求者は、この繰り返しにより、ムハンマドに至り、「貧困（*فقر*）」の神秘を知ると、魂の旅の描写が入り、物語が終わりとなる。約 7400 対句。

『鳥の言葉』：

最も著名なアッターールの著作。ヤツガシラに率いられた鳥たちが、帝王であるスィーモルグの玉座を目指す旅に出る物語。ヤツガシラと他の鳥たちとの対話が全物語の 2/3 以上を占め、鳥たちの言い訳や質問に対して、ヤツガシラが導き手としてそれぞれの質問に答える。最初は名前のある鳥たちとの対話、次に名前のない鳥たちとの対話があり、前者は特にそれぞれが求めている対象を体現している。旅の様子として、超えるべき 7 つの谷やスィーモルグの玉座などが示されているが、対話と比較すると割かれている分量は少ない。全体の分量は、写本によって前後するが、約 4700 対句。

『詩集』：

ガザル、カスィーデ、タルジーウ・バンド（以下、タルジーウと表記）を含んだ、アッターールの詩集。約 10300 対句。本論文では、他の詩人と区別するために、『詩集』は『アッターール詩集』と表記する。

『四行詩集』：

アッターールの四行詩集。約 2000 対句（アッターールによれば、約 6000 対句が、彼の手元にあった）。

『忠言の書』：

他の著作と比較して、物語という思想形式より思想内容を伝えることを重視したテキスト。スーフィズムに関する様々な教訓が語られる。アッターールのテキストかどうかについては議論の余地があり、イラン文学研究者のキャドキャニーはアッターールの著作ではないと述べている¹⁵²。約 850 対句。

『驚異の顕現』：

シーア派の思想的特色が現れていると見做されているテキスト。テキストの名前が第四代正統カリフにしてシーア派の初代イマームであるアリー（‘*Alī Ibn Abī Tālib d. 40/661*）の称号の一つ。アッターールがアリーに出会うエピソードや、アリーに関するエピソードが書かれている。本テキストが偽作であることについては研究者の間でほとんど一致している。一方、晩年の思想的変遷によってシーア派色の強いテキストとなったとする説もある¹⁵³。約 5600 対句。

¹⁵² Farīd al-Dīn ‘*Atṭār, Manteq al-Tayr*, edited by Shāfi‘ī Kadkanī, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014-2015, p. 37.

¹⁵³ Hellmut Ritter, “Philologika, X. Farīdaddīn ‘*Atṭār,*” *Der Islam*, vol.25, no.2, 1938, pp. 143-144.

『ヒーラージュ¹⁵⁴の書』：

ハッタージュの言葉について述べられたテキスト。ほとんどの研究者は共通見解として、本作は偽作であると考えている。約 7600 対句。

2.3. サナーイー、ルーミーのテキスト

以下、アッタールのテキストと他の詩人のテキストを比較分析することにより、アッタールのテキストの特徴を明らかにする。

まず、マスナヴィー体で書かれたペルシア神秘主義詩の比較対象として、サナーイーの『真理の園』とルーミーの『精神的マスナヴィー』を取り上げる。サナーイーとルーミーのテキストは、ペルシア神秘主義詩としてアッタールのテキストと同ジャンルに属し、先行研究においても比較されてきた。

『真理の園』：

マスナヴィー体で書かれた最初のペルシア神秘主義詩。精神的に完全なものである預言者やカリフたち、イマームや神の御業について語られる。また、神秘主義や形而上学に関するテーマが章ごとに寓話を交えて論じられる。約 12000 対句。

『精神的マスナヴィー』：

最も著名なペルシア神秘主義詩の一つ、かつ、最も著名なペルシア詩の一つである。寓話を交えて、様々な側面からスーフィズムについての教えや考えについて述べられている。約 26000 対句。

4. アンヴァリーのテキスト

さらに、アンヴァリーの『詩集』を比較対象として取り上げる。彼は頌詩詩人として著名であり、彼のテキストが取り扱うテーマや対象はアッタールのそれとは全く異なる。また、彼が活躍した地域はアッタールと同様にホラーサーン地方であるが、時期はアフマド・サンジャル (Aḥmad Sanjar, d. 552/1157-8) の最盛期と、没落後である。テーマと時期が異なるアンヴァリーとアッタールのスタイルについて類似点と差異を解析し、ペルシア詩に共通する用語や特徴を明らかにする。

『詩集』：

アンヴァリーの詩集。詩集の多くの部分を占める頌詩では、哲学や天文学の知識を使い、冗談を交えつつ君主への賛美を行っている。ガザルやロバーイーはスーフィズムも詩のモチーフにしていることが指摘されている¹⁵⁵。約 13000 対句。本論文では、他の詩人と区別する

¹⁵⁴ ヒーラージュは占星術の用語である。これとキャド・ホダーとの組み合わせで新生児の人生の長さや短さ、幸運や不運が占われた。昼と夜の運行の所有者（特定の時間に支配的な特定の惑星）、昼の月と夜の太陽、上昇している星の位置、幸運の部分（生まれたときの天体の配置図で幸運に当たる部分）、子供が生まれる前の星同士の接点と接近している部分のいずれかが、特定の条件下においてヒーラージュと呼ばれた。キャド・ホダーはヒーラージュの位置に決定的な影響を与える天体である。Nizāmī 'Arūzī, *Kollīyāt-e Chahār-maqāleh*, edited by Moḥammad Qazvīnī: Tehrān: Enteshārāt-e Eshraqī, 1948 or 1949, pp. 207-208.

さらに、ヒーラージュは「生命の泉」を表し、存在が生まれる物質的な原因である。一方、キャド・ホダーは存在の霊的な原因であり、これら二つの組み合わせによって、生まれた存在の質と量が決定する。'Alī-akbar Dekhodā, "Hilāj," *Loghat-nāme-ye Dekhodā*, edited by Moḥammad Mo'in and Ja'far Shahīdī, Tehrān: Mo'assese-ye Enteshārāt-e va Chāp-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1998 or 1999, p. 23609.

『ヒーラージュの書』では、ハッタージュをヒーラージュという言葉で韻を踏み、彼の名はヒーラージュを意味することが示される。ヒーラージュは真実の道や神秘主義道と同じように扱われる。Farīd al-Dīn 'Aṭṭār, *Hilāj-nāme*, https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh8_ (accessed August 15, 2023).

¹⁵⁵ Karamī Moḥammad Hosein and Dehqānī Nāhīd, "Rūy-kard-e Do-gūne-ye Anvarī be 'Erfān va Taṣavvof,'" *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāt-e Fārsī*, no.37, 2015 or 2016, p. 51

ために、『詩集』は『アンヴァリー詩集』と表記する。

5. ハーカーニーのテキスト

次に、ハーカーニーの『詩集』を比較対象として取り上げる。この詩人は、アッタールと活躍した年代が近く、テキストマイニングに関する先行研究¹⁵⁶で、『詩集』がアッタールのテキストと比較された。さらに、彼の詩にはアッタールのテキストと同様にスーフイズムのテーマが含まれていると指摘されている。

『詩集』：

ハーカーニーの詩集。天文学、医学、歴史、数学、言葉遊びが多用され、難解なペルシア詩の一つである。彼の詩は戦争などが原因で現存しないものも多い。約 17000 対句。本論文では、他の詩人と区別するために、『詩集』は『ハーカーニー詩集』と表記する。

第3節 テキストマイニングの定義と手法の紹介¹⁵⁷

本節では、本論文で用いるテキストマイニングの手法の選択（第4節）のため、テキストマイニングの手法について概説する。

1. 定義

テキストマイニングとはデータマイニングの一種である。データマイニングは、統計学、機械学習、データベースを用いて、データから隠れた情報を発見し、パターンを抽出する技術の総称である。データの対象は、画像データ、音声データ、テキストデータ等がある。テキストマイニングでは、テキストを文や単語単位に分け、出現頻度や共起関係などを集計し、データマイニングの手法を通じて定量的に分析する¹⁵⁸。

2. テキストマイニング手法の紹介と動向

テキストを定量的に分析する手法自体は、既に 19 世紀には計量文献学によって扱われており、統計的手法によってテキストの著者分析や時系列分析が行われてきた。その後、1950 年代以降、推測統計学が用いられるようになり、コンピューターの発展と統計ソフトウェアにより多変量分析が可能になった¹⁵⁹。テキストマイニングという用語は、1980 年代から使われ始め、90 年代後半から学術論文において出現頻度が増加するようになった。

2022 年 9 月現在において、テキストマイニングで使用される主な統計的手法は以下の通りである。多変量解析はテキストマイニングに用いられる統計学的手法として一般的なものである。また、ベイズ統計学によるトピックモデルも、テキストマイニングの主要な手法となっている。

多変量解析：

- 「主成分分析（Principal Component Analysis）」
多数の変数を少ない変数に集約して分析する方法
- 「因子分析（Factor Analysis）」

¹⁵⁶ Ming-Ming Yin, Moḥammad Rezā Maḥmūdī and ‘Abāsārī-zāde ‘Alī, “Analysis of Mystical Concepts in Khaghani’s Divan.”, *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 35, no.2, 2019, pp. 485–491.

¹⁵⁷ テキストマイニングの手法として比較的まとまっているものとして、以下の文献を挙げる。金明哲『テキストアナリティクスの基礎と実践』（テキストアナリティクス 1）岩波書店、2021。

¹⁵⁸ テキストマイニングの定義については、前述の金明哲『テキストアナリティクスの基礎と実践』（テキストアナリティクス 1）岩波書店、2021 や山内長承『Python によるテキストマイニング入門』オーム社、2018 を参照した。

¹⁵⁹ 上阪彩香・土山玄・孫昊・劉雪琴・李広微・入江さやか（金明哲・中村靖子編）『文学と言語コーパスのマイニング』（テキストアナリティクス 7）岩波書店、2021、17-18 頁。

多数の変数の背後にある要素（因子）を特定する方法

- 「多次元尺度構成法（Multidimensional Scaling）」
距離に基づいて、変数間の関係を可視化する方法
- 「クラスター分析（Cluster Analysis）」
変数間の類似度あるいは非類似度に基づいて、特定の共通点をもつ集まり（クラスター）を発見し分析する方法
- 「対応分析（Correspondence Analysis）」
クロス集計表などにおいて、相関性の高い項目同士が隣り合うように行と列の双方を並び替え、行と列からなるデータの特徴を図示する方法

ベイズ統計学：

- 「トピックモデル（Topic Model）」
テキストを複数のトピック（話題）から確率分布に従って生成されるものと仮定する。行列分解を用いた多変量分析手法では困難であった、文章におけるトピックの比率を明らかにし、分析する方法。

なお、テキストマイニング分野においては、上記の手法に加えて、テキストデータの可視化 (Data Visualization) が一般的となっている。主に使われる手法には共起ネットワークと Word Cloud がある。前者は、文章中に同時に出現する語句の相関を図によって可視化する。構成要素を点とし、点同士を線でつなげることによって、共起する頻度などをグラフとして表す。後者は、単語の出現頻度を図のサイズを変えることによって表現する。出現頻度の多い単語は大きく表現され、少ないものは小さく表現される。

3. 最新手法

テキストマイニングにおける新たな手法として、機械学習が注目されている。機械学習とは AI の一分野であり機械に学習させ、正しい推論結果を導きだそうとする。応用統計学とも呼ばれる。教師なし機械学習は既知のデータのパターン認識やクラスタリングに主に用いられるのに対して、教師あり機械学習は未知のデータへの予測に主に使われる。すなわち、前者は、主にデータの要約や次元削減をすることによって、そのデータが何を現しているのかを明らかにするのにに対して、後者は、機械に事前にデータを学習させることで、未知のデータがどのようなカテゴリーに属するか予測し分類する。教師なし機械学習の主な手法としては、非負行列因子分解 (Non-negative Matrix Factorization)、k-means 法、混合ガウスモデル (Gaussian Mixture Model)、LLE (Locally Linear Embedding)、t-SNE 法などが挙げられる。なお、機械学習分野の観点からは、前述の主成分分析や因子分析も、教師なし機械学習と分類される。一方、教師ありの機械学習の主な手法としては、線形判別分析、決定木、ランダムフォレスト法、サポートベクターマシン、k 最近傍アルゴリズム、ニューラルネットワークなどが挙げられる。

機械学習のニューラルネットワークを使ったテキストマイニングが現在特に注目されている。単語同士の前後の文脈を少量データから学習させて重みを更新することで、ベクトルの分散表現を獲得する推論ベースの手法 word2vec、深層ニューラルネットワークを用いた LSTM が主流である。さらに、2019年に登場した BERT¹⁶⁰や BERT と同様に Transformer ベースのモデルである XLnet はすでに多数の言語の学習データが公開済みであり、テキストの分類や質疑応答等で高い精度を出している。感情分析も近年流行している手法の一つであり、

¹⁶⁰ BERT は、Attention を用いた双方向の Transformer によって、従来の自然言語処理モデル LSTM の弱点、処理の時間を克服したモデルであり、自然言語処理の分野で最も注目を集めている分野でもある。このモデルの詳しい説明は以下の論文を参照。Jacob Devlin, Ming-Wei Chang, Kenton Lee, Kristina Toutanova, “BERT: Pre-training of Deep Bidirectional Transformers for Language Understanding”, *Proceedings of the 2019 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies*, voll, Association for Computational Linguistics, 2019, 4171-4186.

Twitter や SNS を対象にその発言の内容が肯定的か否定的か分類する¹⁶¹。

4. イランにおける現在の動向

イランのテキストマイニング分野では、情報学の分野で研究が進みつつ、経営学の分野へ成果が積極的に転用されている。トピックモデル、アンサンブル学習¹⁶²、共起ネットワーク、感情分析などを用いた分析が多い。一方、文学や詩の研究に使われることは他分野に比べて少ない。イラン文学の研究としてテキストマイニングを使っている研究には「ハーン・アル・エフワーンのナースィル・フスローへの帰属はどの程度正確なのか? (“How Accurate is the Ascription of *Khan al-Ekhwan* to Naser Khosrow Qubadiani?”)」、 「統計学とテキストマイニングは文学研究にどう応用できるか? (“How Statistics and Text Mining can be applied to Literary Studies?”)」、 「ディープラーニングによる歴史的・文学的テキストの著者推定 (“Authorship Attribution in Historical and Literary Texts by a Deep Learning Classifier”)」等がある。また、アッタールの研究としては「イランの詩人たちの文体分析 (“A Stylometric Analysis of Iranian Poets”)」と「アッタール・ニーシャープーリーのマスナヴィーにおける、色の象徴の神秘的な作用 (“Kār-kard-e ‘Erfān-e Namād-e Rang dar Masnavī-hāy ‘Aṭṭār Nīshāpūrī”)」がある。一方、クルアーンの解釈にテキストマイニングを使う研究はイランでも経営学ほどではないが、数が多い。例えば、「テキストマイニングによる聖クルアーンの頻出パターンが発見 (“Finding Frequent Patterns in Holy Quran Using Text Mining”）」、「イランにおけるクルアーンとハディースの知識構造のマッピング。共語分析 (“Mapping Knowledge Structure of Quran and Hadith Studies in Iran: A Co-Word Analysis”)」等がある¹⁶³。

5. 日本における現在の動向

世界的な傾向と同じく経営学、心理学、生物学、文学の分析に適用されている。文学に用いられるテキストマイニング手法の傾向としては、古典的な多変量分析やトピックモデルの方法も用いつつ、word2vec や BERT のようにディープラーニングを用いた研究が、世界と同じく登場している。しかし、前者の方法にしても後者の方法にしても、分析対象は日本文学、中国文学、欧米文学であり、アラブ文学やペルシア文学への応用はまだ十分になされていない。

また、樋口の開発した KH Coder や金の MTMineR などノーコードのテキストマイニングツールがあり、これらのツールを使った分析が日本のテキストマイニングを用いた研究の一部を形成している¹⁶⁴。

¹⁶¹ テキストマイニング以外のデータマイニングでは、音声や表情を AI で学習させることでその人の感情を分類する研究も行われている。テキストマイニングでは、感情表現についての辞書である極性辞書を使って、肯定的・否定的な用語を機械に教える。

¹⁶² 機械学習の手法で、精度が高くない分類器のモデルを複数組み合わせ、高い精度の分類器を作り学習させる手法。

¹⁶³ 文学テキスト：Ehsān Ra’īs, “How Accurate is the Ascription of *Khan al-Ekhwan* to Naser Khosrow Qubadiani?,” *Persian Literature (Faculty of Literature and Humanities)*, vol.8, no.22, 2019, pp. 121-139; Moḥammad Reżā Maḥmūdī and ‘Abāsārī-zāde ‘Alī. “How Statistics and Text Mining can be applied to Literary Studies?,” *Digital Scholarship in the Humanities*, vol.34, 2019, pp. 536-541; Ehsān Ra’īs and Hasan Maḥbūb Farīmānī, “Authorship Attribution in Historical and Literary Texts by a Deep Learning Classifier,” *Journal of Applied Intelligent Systems & Information*, vol. 1, no2, 2020, pp. 118-127.

アッタール：Sohrāb Reżāyī and Nasīm Kāshānīyān, “A Stylometric Analysis of Iranian Poets,” *Theory and Practice in Language Studies*, vol. 7, no.1, 2017, pp. 55-64; Seyyed Ṭarābī and Seyyed Hasan. “Kār-kard-e ‘Erfān-e Namād-e Rang dar Masnavī-hā-ye ‘Aṭṭār Nīshābūrī,” *Erfān-e Eslāmī (Adiyān va ‘Erfān)*, vol. 15, no, 58, 2018, pp. 231-253.

クルアーン：Akram Aslānī and Esmā‘īlī Maḥdī, “Finding Frequent Patterns in *Holy Quran* Using Text Mining,” *Signal and Data Processing*, vol.15, no.3, 2018, pp.89-100.; Ḥamīd Qāzī Zāde, Farāmarz Scheilī and ‘Alī Akbar Khāṣe, “Mapping Knowledge Structure of *Quran* and *Hadith* Studies in Iran: A Co-Word Analysis,” *Scientometrics Research Journal*, vol.4, no.8, 2018, pp. 101-122.

¹⁶⁴ 研究例

第4節 本論文におけるテキストマイニング手法の選択

本論文では、テキストマイニング手法として、主成分分析、階層的クラスター分析、共起ネットワーク、Word Cloudを選択する。主成分分析はテキストの特徴、階層的クラスター分析は要素同士の類似性、共起ネットワークは単語同士の共起関係、Word Cloudはテキストで用いられる単語の頻度を可視化するというそれぞれ異なる観点を提供する。

本論文で行う分析の目的は、既知のテキストの特徴の要約である。そのため、教師あり機械学習等の手法は用いない。

主成分分析を使う理由

多変量分析の一種で、先行研究においても使用頻度が高い。多数の変数を主成分と呼ばれる少数個の合成変数に削減することによって、データの特徴をわかりやすく示すことを可能にしつつ、アッタールのテキストの特徴を端的に要約することも可能にする。さらに、要素間の関係や、文章における要素である単語間の関係も端的に表せる。(図 1.1)。

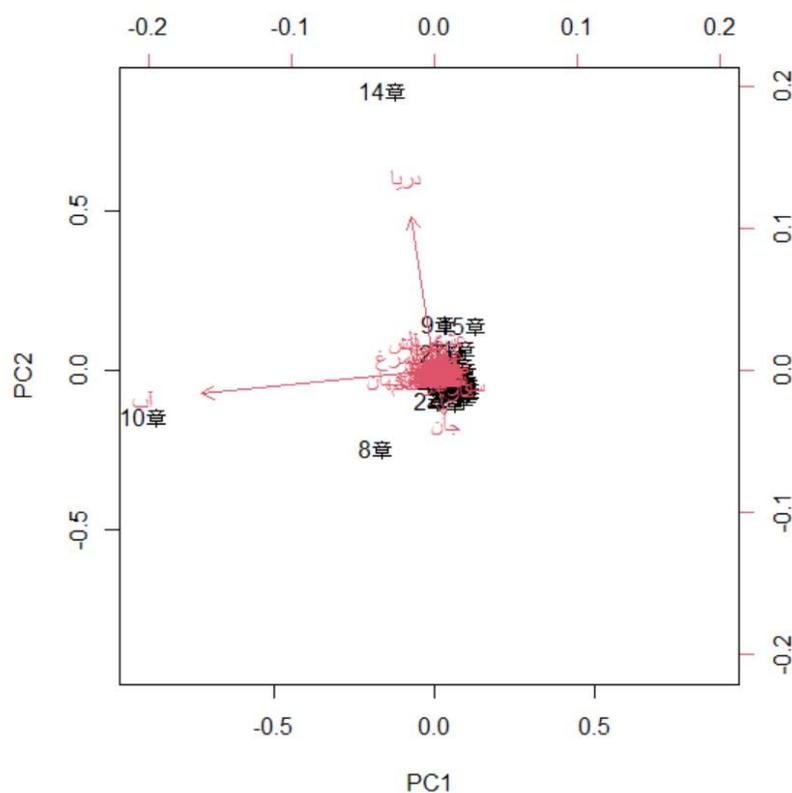


図 1.1 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.25347、PC2=0.12689)

階層的クラスター分析を使う理由

主成分分析は特徴の要約ができるが、テキスト内の全ての要素を網羅できるわけではない。

上坂彩香「アンサンブル学習モデルを用いた西鶴遺稿集の著者に関する検討」『行動計量学』45 巻 2 号 (日本行動計量学会)、2018、135-151 頁; 土山玄「『源氏物語』及びその補作における特徴語句抽出の試み」『情報処理学会研究報告』2020-CH-122 巻 3 号 (情報処理学会)、2020、1-5 頁; 中俣尚己「主成分分析を用いた副詞の文体分析」『計量国語学』32 巻 7 号 (計量国語学会)、2020、419-435 頁; 李広微・金明哲「統計分析からみた水村美苗著『続明暗』の文体模倣」『計量国語学』32 巻 1 号 (計量国語学会)、2019、19-32 頁等々がある。また、前述の上坂彩香、土山玄、孫昊、劉雪琴、李広微、入江さやか、*op. cit.*、17-18 頁にも研究事例が載っている。

KH Coder

KH Coder は様々な分野で使われていて、<https://khcoder.net/bib.html?year=all&auth=all&key=>に使用された研究の一覧が載っている。

階層的クラスタ分析は、変数間の類似度と非類似度を計算して、樹形図という形で類似する要素順に可視化する手法である。この手法は、クラスター数を決めずに全ての要素を図示できるので、主成分分析が持っている、情報の消失という欠点をカバーしつつ、使われている全ての単語から章の間の類似度を概観できる（図 1.2）。

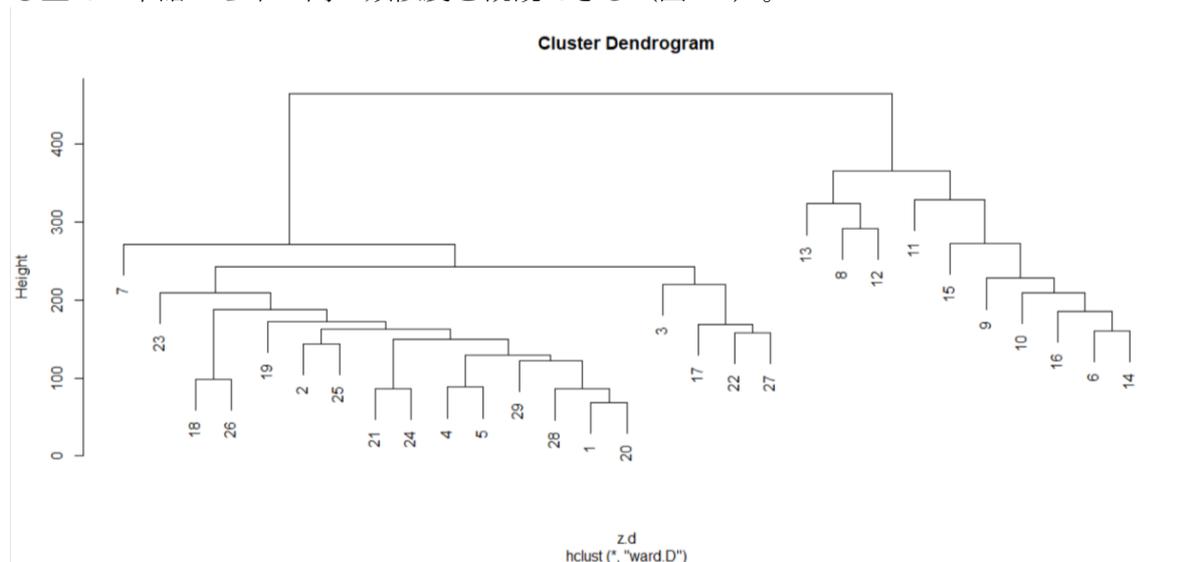
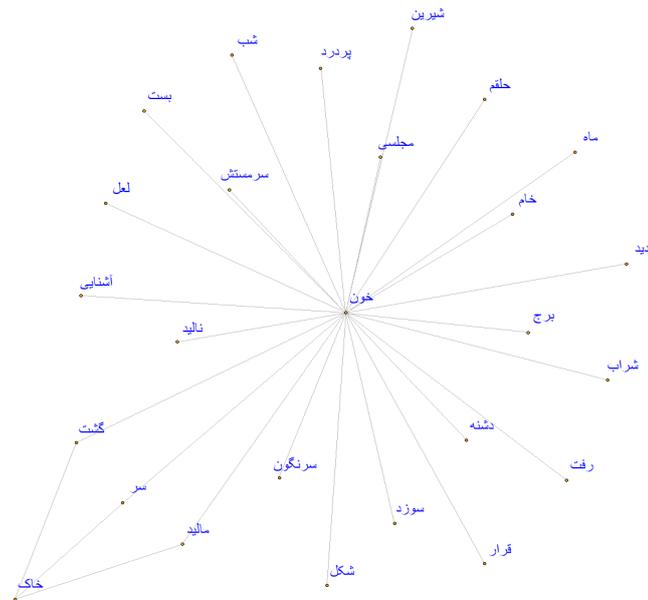


図 1.2 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の階層的クラスタ分析

共起ネットワークを使う理由

円と線によって、変数の共起関係を視覚化できる。具体的には、どのような単語同士が、文章や段落単位で同時に生じる傾向にあるかを可視化する。そうすることによって、主成分分析と階層的クラスタ分析とは異なる方法で、アッタールのテキストにおける変数間の関係を明らかにできる（図 1.3）。



correlation Threshold: 0.7
 図 1.3 『鳥の言葉』愛に関する単語の内、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の共起ネットワーク (重み¹⁶⁵=0.7 以上)

Word Cloud を使う理由

出現頻度の高い単語を大きく可視化できるので、それぞれのテキストにおいて頻繁に使用される単語を一目で概観できる。その結果、頻度という観点からテキストの解釈を容易にする。(図 1.4)

¹⁶⁵ 共起ネットワークにおいて、共起関係の強弱は重み (Weight) によって表される。二つの単語の重みは、以下の通りである。

$$\text{重み} = \frac{\text{対象とする二つの単語が共起する詩の合計値}}{\text{全ての単語を対象に、二つの単語同士が共起する詩の数の最大数}}$$

上記の式は、文章の長さが結果に著しい影響を与えることを避けるために採用している。重みが高いほど、分析対象とするテキストにおいて共起する頻度が高い。



図 1.4 『鳥の言葉』の最頻出名詞 50

第 5 節 分析手順

本節では、本論文におけるテキストマイニング手順を説明する。

一般に、テキストマイニングの手順は以下の通りである。

- ①テキストの電子化
- ②テキストのクリーニング
- ③形態素・構文・意味分析
- ④データの抽出
- ⑤データの分析

①テキストの電子化

テキストマイニングでは、PC 上の分析ツールを使うため、テキストを PC が読み取り可能な文字コードに変更する必要がある。その際、OCR や他の技術によって本や写本の画像データを電子文字コードに置き換えたり、公開されている電子テキストデータを用いたりする。

②テキストのクリーニング

電子化したテキストには不自然な記号、誤字、脱字、改行が頻繁に含まれるので、元のテキストに近づけるために文字を削除したり、適時修正したりする必要がある。二重カギカッコなど、分析する際にノイズになるような特殊文字も外す。

③形態素・構文分析

文を文節もしくは単語単位に切り分ける作業をする。文節に分ける作業は、構文分析と呼ばれる。文節単位の切り分けの情報、文節相互の関係の情報が取得できる。単語に分ける作業は、形態素分析と呼ばれる。文を単語単位に切り分け、そこに品詞情報を付与する。

④データの抽出

形態素・構文分析を行ったデータから、ツールなどを使ってデータを集計する。すなわち、テキスト、文、品詞の単位における単語頻度や、そもそもの文字数などのデータを集計する。単語の頻度を単純に数える手法は Bag-of-Words と呼ばれ、該当の単語があれば 1 を加える処理を行う。一方、単語の重要度を考慮する TF-IDF という手法もある。この手法では、「私」や「の」などの単語はどのような文章にでも登場する単語であり、頻度は高いが、文章の特徴を端的に表す単語として重要度は低いと考える。そこで、単語として特定の文書内で出現頻度が高くなり、他の文書での出現頻度が低いものの値を高く調整し、重要度で単語のデータを集計する。Bag-of-Words のみで集計するか TF-IDF も併用するかは分析対象のテキストや分析者の目的に応じる。

⑤データの分析

集めたデータを、多変量分析などの手法を用いて、特徴の分析や分類をする。最後に分析

や分類した結果を伝えやすい形で可視化する。

本論文においては、①テキストの電子化という点においては、既存の電子データを用いる。具体的には、先行研究でも用いられている、**Ganjoor.net** の電子化された書籍を用いる¹⁶⁶。電子化されたデータを、元データとして一旦 docx 形式で保存し、②テキストのクリーニングを行う。この時、テキストマイニングの邪魔になる特殊記号は削除し、単位ごとに段落を分け、さらに、それぞれ主成分分析と階層的クラスタ分析に用いるために章ごとに分けて txt 形式で保存し、共起ネットワークのために、一対句詩ごとに xlsx 形式で保存する。③形態素・構文分析のツールとしてソフトウェアを使う¹⁶⁷。このソフトウェアは著者が要件定義し、イランのエンジニアと共同で開発した。機能としては、R の **PersianStemmer** と **UDPipe** のライブラリを使うことによって、形態素・構文分析を行っている。**PersianStemmer** はペルシア語の語幹を抽出し、**UDPipe** はペルシア語のトークン化と品詞のタグ付けを行う。さらに、このソフトウェアは共起ネットワークの分析も機能として含んでいる。④頻度を示すために **Bag-of-Words** を使い、**Word Cloud** による可視化を行い、各章ごとに頻度の表を xlsx 形式でダウンロードする。この際、品詞の分類の判定に誤りがある場合は手作業で修正する¹⁶⁸。⑤分析については④で収集したデータを用いて、主成分分析、階層的クラスタ分析を R のライブラリによって行い、共起ネットワークを前述のソフトウェアの機能によって示す。さらに、Excel でグラフを作り、単語ごとの相対頻度¹⁶⁹を可視化する（図 1.5）。

¹⁶⁶ 引用元として、**Ganjoor.net** のデスクトップアプリケーションソフトウェアを使用した。2022年9月13日にインストールし、バージョンは2.95である。参考文献表においても上記のことを明記することで、データの透明性を担保する。さらに、**Ganjoor.net** の引用元は上記の通りであるが、本論文では引用の該当箇所を示すためブラウザ版のリンクを注で示す。

Ganjoor の引用元のデータは各 **Ganjoor** の電子テキストが掲載されている該当ページに記されている。ただし、引用元のデータのさらに元になる写本や刊本が示されていない場合がある。一方、本論文における定量的分析手法は、ビッグデータを用いる頻度分析、主成分分析、階層的クラスタ分析、共起ネットワークである。テキストのごく一部の単語の差異により分析結果が大幅に変わることは考えづらい。そのため、先行研究でも用いられている **Ganjoor** の電子データを使用するメリットが大きいと考えた。また、この理由により、既に電子データ化されているすべてのテキストについて写本・刊本を同定することは今回の解析には必要性が低いと判断した。将来的には、文献に詳しい研究者と共同してより精度の高いテキストデータを取得し、文献学方面での厳密性を高めることを考えている。

¹⁶⁷ この論文を提出後、オープンソースとして **github** でソフトウェアのコードを公開する予定である。さらに、簡単な特設 **web** ページを作りガイドラインを示す。無料で誰でも利用できるようにすることで、ペルシア語を用いたテキストマイニングの研究の発展に寄与できると考えている。さらに、様々な人の手に触れて改善を行うことによって、ソフトウェア自体の精度が高まることを期待する。

¹⁶⁸ 現在の品詞分類の不正解率は1割程度である。R のライブラリを使っているが、精度向上のため **Python** のライブラリも将来的に検討する予定。

¹⁶⁹ 分析の対象データには、頻度の絶対数を用いる方法と、各セルの値を合計単語数や Excel の各行の単語総数で割った相対頻度がある。本論文では、テキストの長さや章の長さ等が著しく異なる場合が多く、章ごとの単語の総数やテキストごとの単語総数が分析に影響を与える方法は避ける。それゆえに、各セルの値を行の単語総数で割った相対頻度を用いる。

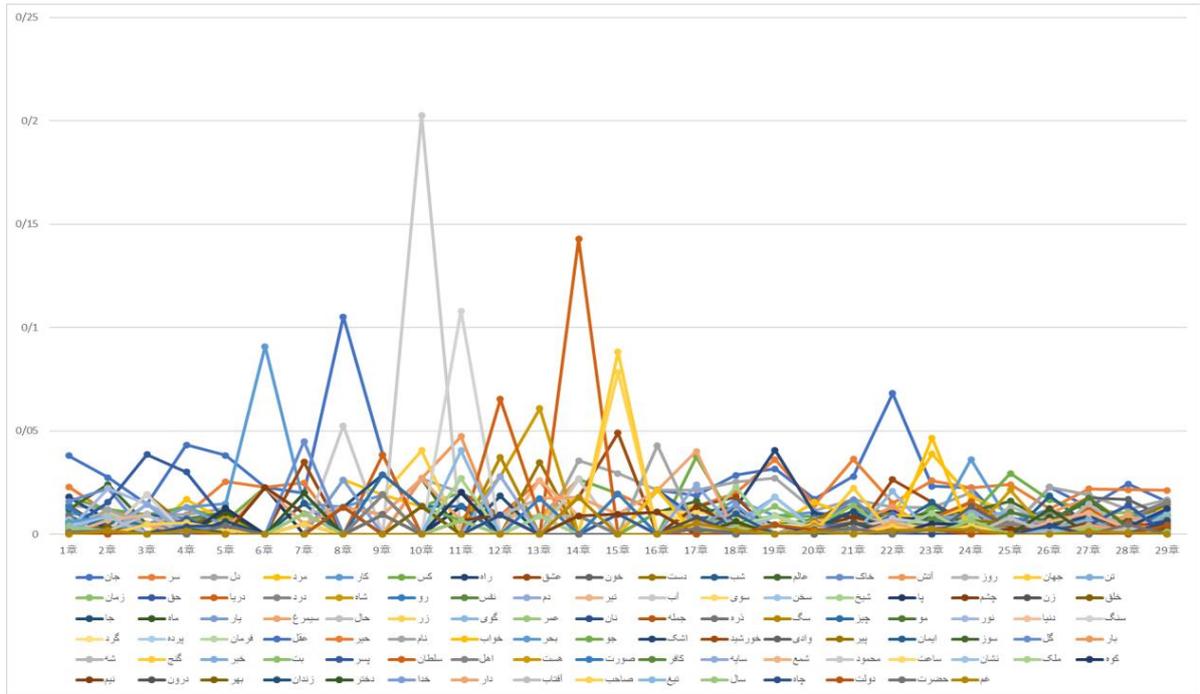


図 1.5 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の相対頻度

第 6 節 実行する分析の要約

頻度分析

頻度分析によってテキスト間の比較を行う。Word Cloud によって、比較対象の特徴がわかりやすいようにする。

各テキストの分析

頻度トップ 100 の単語を用いて、各テキストの特徴を主成分分析、階層的クラスター分析及び表の相対頻度により探索的に分析する。分析する観点として、「神への愛」に加え、「神への愛」に関連するいくつかの語句の相対頻度を示す表を作る。そこに、共起ネットワークによる分析も付け加え、それらの単語間の分析を行う。さらに、「神への愛」に関連する単語と共起する他の単語との組み合わせを共起ネットワークにより図示する。

テキスト間の分析

テキスト間の類似度や特徴を、主成分分析と階層的クラスター分析によって明らかにする。第 4 章では真作と偽作の特徴の差異を明らかにし、第 5 章では異なる著者のテキストの差異を明らかにする。

目的

これらの分析を行うことによって、アッタールと比較対象の詩人に関する各テキストの特徴やテキスト間の違いを定量的に示すことができる。その結果、先行研究の見解に対して新たな示唆を与える。さらに、ペルシア詩のテキストに対する単語間の関係や文章との関連に関する詳細な定量分析は著者が知る限りこれまでに無く、ペルシア詩の定量分析においても本論文は寄与する。

第4章 アッターールのテキストに対するテキストマイニング

第1節 本章の分析の概略

本章では、アッターールの真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集』、偽作とされる『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』に対し、以下の三つの分析を行う。

1. 単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用方法的分析
2. 神への愛とそれに伴う苦痛に関する分析
3. 真作と偽作についての分析

1. 単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用方法的分析

3章で言及したソフトウェアを使い、アッターールの各テキストの名詞の頻出単語を Word Cloud の図で示す¹⁷⁰。『アッターール詩集』の分析においては、詩集の中にガザル、カスィーデ、タルジーウが一つにまとまって収録されているが、それぞれ別のテーマであり関連性が見出せないため、これら三つをそれぞれ分析する¹⁷¹。Word Cloud によって最頻出名詞 50 を図示し、別表で単語名と頻度を示す¹⁷²。そして、頻度分析の観点から、各テキストの特徴と共通点を分析する。

その後、章の最頻出名詞 100 を用いて¹⁷³、主成分分析と階層的クラスタ分析を行い、各テキストにおける特徴的な章や各章の単語の使用方法的類似性を明らかにする。主成分分析から得られた定量的な結果に対しては、特徴的な単語について該当箇所のテキストを引用しつつどのように使用されているか解釈を加える。さらに、表で章ごとに単語の相対頻度も示すことによって、特徴的な章でどの単語がどの程度使われているのかを明らかにする。

2. 神への愛とそれに伴う苦痛に関する分析

上記の頻度分析や主成分分析と階層的クラスタ分析の手法は、テーマを絞らない探索的な分析である。本章では、これらの各手法に「神への愛」という観点を加える。具体的には、愛に関係する単語の相対頻度を、章ごとに表で示す。さらに、共起ネットワークを使うことによって、それらの単語の関係性や、共起しやすい別の単語も明らかにする。これらの手法

¹⁷⁰ 定量的な研究を含めアッターールの先行研究において取り上げられてきた品詞は名詞であり、特徴的な用語を判断する際、最も適切と判断したので分析対象として用いる。例えば、痛みの種類を名詞で表す Karīm Pasandī Kūrs, “Mahfūm-e Dard az Dīdgāh-e ‘Attār,” *‘Erfān-e Eslāmī (Adabiyāt va ‘Erfān)*, vol.10, no.37, 2013, pp. 81-94、愛の概念や隠喩を定量的に分析する際、主に名詞に注目している ‘Abbāsī Zahra, “Este‘āre-ye Mafhūmī ‘Eshq va Khūshe-hā-ye Ma‘nāyī-ye Mortabet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliya‘-e ‘Attār,*” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.12, no.2, 2018, pp. 117-146、二項対立として反対の名詞同士を対比させて論じる Khoshhāl Dast-jerdī Tāher and ‘Arab Ja‘farī Moḥammad-ābādī Mahdī, “Bar-rasī-ye Mashrab-e ‘Erfānī-ye ‘Attār bā Kār-baste-ye Taqābol-hā-ye Do-gāne,” *Pazhūhesh-e Nāme-ye ‘Erfān*, vol.11 no.21, 2019, pp. 15-33 がある。名詞がアッターールの研究において頻繁に取り扱われる理由としては、神に対する「愛」や「痛み」という名詞が研究対象とされてきたことが考えられる。さらに、特定の名詞が、ペルシア詩やスーフィー詩におけるその文章のテーマやモチーフを表すことが多々あるので、他の品詞ではなく名詞を分析対象として選ぶのが適切と考えられる。

¹⁷¹ 詩集は、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』に分け論じる。

¹⁷² 各テキストの最頻出名詞 50 は章末に付ける。

¹⁷³ 対象とするデータが少ないとデータが偏り、反対に多すぎると分析できないので、テキストマイニングの先行研究を参考にしながら最頻出名詞 100 語に絞った。なお、Word Cloud で図示する単語数を半分の 50 語に絞った。主要な単語やフレーズを強調すると共に、視覚的な混雑を避けることが目的である。

により、アッタールが用いる「神への愛」の特徴を明らかにする。

先行研究で指摘があるように、アッタールのテキストの特徴は、「神への愛」とそれに伴う苦痛である。ヘルムート・リッターは『精神の大海』において、200 頁以上を愛に関する議論に費やし、アンネマリー・シンメルはアッタールの詩の主題として愛に伴う苦痛を掲げている¹⁷⁴。さらに、アッタールの愛にともなう苦痛を主題に扱った研究は少なくともここ 20 年で 8 件ある¹⁷⁵。愛を主題に扱う研究においても、「神への愛」と「神への愛」に伴う苦痛の両方を論じる場合がある¹⁷⁶。「درد (dard)」という苦痛を表す言葉が「神への愛」の表現方法において重要であると見做されてきた¹⁷⁷。また、苦痛のみでなく、苦痛に関連する単語も重要であると主張する研究もある¹⁷⁸。アッタールにおける「神への愛」と苦痛の重要性は、これらの研究において自明である。しかし、これらの研究には問題点が二つある。一つ目は、「神への愛」に伴う苦痛を表す単語同士の関係が明らかにされていないこと、二つ目は、各テキストにおける「神への愛」及び苦痛を表す言葉の用いられ方が個別に明らかにされてこなかったことである。

例えば、「理性と愛に対するアッタール・ニーシャープーリーとナジュム・アル＝ディーン・ラージーの見解 ('Aql va 'Eshq dar Nazar-e 'Attār Nishāpūrī va Najm al-Dīn Rāzī)」では「神への愛」に関わるものとして「苦痛」を重視し、「苦痛」を表す言葉として「خون (khūn)」、「اشک (ashk)」、「آتش (ātesh)」を挙げる。その根拠として、「神への愛」に入った状態を『神の書』の一節から引用し、「一にخون (khūn)、二にاشک (ashk)、三 آتش (ātesh)」であると記述する¹⁷⁹。確かに、アッタール自身が「神への愛」や「苦痛」について言及し、「苦痛」が重要であるということも既存の先行研究、また、この『神の書』の一節からも明らかである。しかし、この先行研究において、個別のテキストにおける単語の使い方、単語同士の関係性は明らかにされていない。このことが明らかになれば、テキスト間における「神への愛」の表現方法の差異を示すことができる。さらに、苦痛によって表される「神への愛」の表現方法が鮮明になることで、アッタールの「神への愛」と他の詩人との比較を容易にし、ペルシア神秘主義詩における位置づけも明らかにできる。

本論文では、上記の頻度分析、主成分分析、階層的クラスター分析に共起ネットワークを加えて、先行研究が明らかにしてこなかった、単語同士の関係、テキストごとの使われ方を示す。具体的には、アッタールにおいて愛を表す単語である「عشق ('eshq)」、痛みを表す「درد (dard)」、前述の研究に記述されている痛みを表す単語「خون (khūn)」、「اشک (ashk)」、「آتش (ātesh)」、アッタールにおいて、「神への愛」の対義語として使われる「عقل ('aql)」の使用頻度や共起ネットワークを用いた分析を行う。さらに、上記の単語に加えて、悲しみや虚しさをも表現し、アッタールにおいて登場頻度が多い「خاک (khāk)」をこの分析対象に加える。「神への愛」および、苦痛に関する単語の頻度分析では、二種類の表を用意する。一つは頻出単語の上位 100 位のみを集めた相対頻度の表で、これにより頻度上位に入っている「神への愛」に関する単語を可視化する。もう一つは頻度の制限を設けず、全ての単語を含んだ表であり、これにより頻度の低い「神への愛」に関する単語を明示する。また、主成分分析と同様に、表での値が高い単語については、実際の文章からの引用を行い、文脈内での使用方法を具体的に示す。

共起ネットワークの分析では、まず二つの表を用意する。一つは「神への愛」に関する単語同士の共起関係を示す重みの表で、これを通じて「神への愛」に関する単語間の関係性や

¹⁷⁴ Annemarie Shimmel, *Mystical Dimensions of Islam*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1978, 305-306.

¹⁷⁵ 8 件の苦痛を取り扱った文献については、第 1 章の脚注 12 を参照

¹⁷⁶ Jalālī Shijānī Jamshīd, “‘Aql va ‘Eshq dar Nazar-e ‘Attār Nishābūrī va Najm al-Dīn Rāzī,” *Khodāyī Nāme*, vol. 1, no.1, 2012, pp. 41-61.

¹⁷⁷ ‘Ābedī Majīd, “Dard-e ‘Attār (Negāhī be Dar va Chashm-andāz-hā-ye Lafzī va Ma‘navī Ān dar Āsar-e ‘Attār Nishābūrī),” *Adabīyāt-e Fārsī*, vol.5, no.24, 2009, pp. 36-51.

¹⁷⁸ Jalālī Shijānī Jamshīd, *op. cit.*

¹⁷⁹ *Ibid.*, p. 50.

使用状況を詳細に把握する。もう一つは、「神への愛」と最も共起頻度が高い単語を強調する表で、これによりどの単語と特に頻繁に共起するのか、そして「神への愛」に関する単語同士の共起が他の単語とどれほど異なるのかを明示する。そして、最後に、これらの共起関係を視覚的に示すネットワーク図も併せて示す。

3. 真作と偽作についての分析

現在知られているアッタールのテキストのほとんどは偽作である。アッタールのテキストの数はクルアーンの章句の数になぞらえて 114 テキストと見做されてきたが、現在では否定されている。古典的研究では、リッターやナフィースィーの研究において真作と偽作の議論がなされてきた。リッターはアッタールによって書かれた著作を三種類に分け、それらの内、一種類の著作群はアッタールの思想的な変遷によってシーア派的な傾向が強いと説明する¹⁸⁰。ナフィースィーはリッターの取り上げたテキストのうち、第2のグループと第3のグループは別の作者によって書かれた可能性があることを指摘する¹⁸¹。彼は、アッタールの真作として『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『アッタール詩集』、『忠言の書』、『ホスローの書』、『四行詩集』、『神秘主義聖者列伝』を挙げる¹⁸²。これらの内、現在、確実に真作として認められているテキストは『鳥の言葉』、『神の書』、『災厄の書』、『神秘の書』、『アッタール詩集』、『神秘主義聖者列伝』のみである。ここに『四行詩集』を含めるか『忠言の書』を含めるかについては研究者によって意見が分かれる¹⁸³。現代のアッタール研究を主導してきたキャドキャニーは『四行詩集』は真作に含めるが、『忠言の書』は真作には含めていない。しかし、『忠言の書』が他の真作とどのように文体や表現が異なるかについては明確な根拠は挙げられていない。彼は『忠言の書』を文体の表現などが衰退した後世に、アッタールの名前に仮託して書かれたテキストであるとのみ主張している¹⁸⁴。

そこで、本論文では、テキスト間の比較として真作と偽作をテキストマイニングによって解析することによって、『忠言の書』が偽作かどうか定量的に判断する。具体的には、主成分分析と階層的クラスタ分析を用いることによって、特徴が同じテキストと、類似するテキストを図示し、その分析を通じて『忠言の書』の真偽問題についてテキストマイニングという観点から新たな示唆を与える。さらに、『忠言の書』に加えて明らかに偽作と判断されている『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』も同時に分析することによって、『忠言の書』ではない偽作が真作の特徴から乖離しているのか確かめる。これらの著作と『忠言の書』の異なる点も明らかにする。

第2節 分析手法の詳細

『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』、『四行詩集』については、頻度トップ 100 の名詞の相対頻度を章ごとに出力したデータを用いて、主成分分析と階層的クラスタ分析を行う¹⁸⁵。主成分

¹⁸⁰ Hellmut Ritter, "Philologika X. Farīdaddīn 'Aṭṭār," *Der Islam* 25, 1938, pp. 143-144.

¹⁸¹ Sa'īd Nafīsī, *Joste-jū dar Ahvār va Āsār-e Farīd al-Dīn 'Aṭṭār Nishābūrī*, Tehrān: Ketān-forūshī va Chāp-khāne-ye Aqbāl, 1942, pp. 145-146.

¹⁸² *Ibid.*, p.134

¹⁸³ 『四行詩集』については、真作に含む場合がほとんどである。Eve Feuillebois-Pierunbek, "Mystical Quest and Oneness in the *Mukhtār-nāme* Attributed to Farīd al-Dīn 'Aṭṭār," In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, p. 309.

¹⁸⁴ Farīd al-Dīn 'Aṭṭār, *Manteq al-Ṭayr*, edited by Shāfi'ī Kadkanī, Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014 or 2015, p. 37.

¹⁸⁵ 章の数と分け方は分析対象である Ganjoor.net に従う。章のタイトルの付け方は Ganjoor.net 内でもテキストごとに異なるが、分析における便宜上、本論文では順に 1 章、2 章、3 章・・・というように数字の並びに統一する。

分析の主成分の値は 80%を超える方が望ましいと一般的に言われているが、文学の分析の分野においては 25%前後まで示すことが先行研究で多いこと、主成分の数を増やすと分析にまとまりがなくなるので、先行研究に従い 25%前後を超えるまで示す。章単位にする理由は、詩ごとでは主成分分析と階層的クラスター分析の対象が膨大になるためである。また、テキストの特徴を知るためにも章ごとの特徴で分類するのが有効である。一方、共起ネットワークの分析においては、逸話や詩ごとに分析する。それは、章ごとに行うと、共起する回数が膨大になり特徴を掴みづらくなるからである。また、共起ネットワークは段落ごとに分析するのが通常だが、章ごとではなく逸話や詩ごとに分析するほうが、分量として従来の段落ごとの分析に近い。

『アッタール詩集』は詩集であるがゆえに、まとまりがあるものとして書かれたものではないので、章ごとの主成分分析と階層的クラスター分析は行わず、詩ごとの分析を共起ネットワークのみ行う。『四行詩集』に関しては、章立てがあり、章ごとにテーマが決まっているので『アッタール詩集』以外に適用する分析方法に準じる。

共起ネットワークのネットワーク図では、「神への愛」に関する単語を中心に、それとの共起関係にある他の単語とのネットワーク図を作成する。「神への愛」に関する単語の共起の重みは、テキストによって異なる。そこで、「神への愛」に関する単語のいずれかが最初に登場する最も高い重みのネットワーク図を始めに示す。0.7⇒0.6⇒0.5 というように、高い重みの値から低い重みの値に順になるような形で図を示す。重みが高い場合、出現する単語自体が少ないので、図として視認性が高い。反対に重みが低い場合、出現する単語が多くなるので視認性も低くなる。また、分析対象の単語が多数の場合、重みが高くても共起単語が増え、図の視認性が悪化する可能性がある。そのような場合、特定の「神への愛」に関する単語だけを取り上げて、その共起関係を示すネットワーク図を、同じ重みの次のページで別途示す。この手法を使い、最も高い重みから徐々に低い重みへと移行し、視認性が劣化する箇所まで図を提示する。

第3節 分析結果と考察

本節は、以下の分析結果と考察から構成される。

1. 各テキストに対する Word Cloud、頻度分析
 - 2-1. 『神秘の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-2. 『神の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-3. 『災厄の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-4. 『鳥の言葉』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-5. 『四行詩集』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-6. 『アッタール詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析
 - 2-7. 『アッタール詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析
 - 2-8. 『アッタール詩集—タルジウ』に対する共起ネットワーク分析
 - 2-9. 『忠言の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-10. 『驚異の顕現』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-11. 『ヒーラージュの書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析
 - 2-12. 各テキストの解析結果のまとめ
3. 全テキストに対する主成分分析、階層的クラスター分析

1. 各テキストに対する Word Cloud、頻度分析

Word Cloud

以下、アッタールの各テキストの名詞の頻出単語を Word Cloud で示す。



図 2.1 『神秘の書』の最頻出名詞 50



図 2.2 『神の書』の最頻出名詞 50

آب پیر سوی
 خون خاک حق شب دم درد
 خلق سر راه کار کس
 آتش شاه
 زره دل جان زمان چشم
 زن دست گرد
 تن سوی مرد تم جهان تیر
 زن عمر روز جمله عشق عالم
 گوی پا عقل سخن خدا حال رو زر

図 2.3 『災厄の書』の最頻出名詞 50

سگ نان ذره حال
 یار شب درد عشق دریا جز یا سر رو
 زمان دل کس شاه
 جمله جهان
 دنیا دست کار تلخ ماه
 دم نفس سر مرد سخن نور
 زرد خاک آتش مو راه جا
 سیرغ تن روز آب چشم تیر حق سوی

図 2.4 『鳥の言葉』の最頻出名詞 50

خلق عقل آب گرد چیز دریا به
 زلف روز آتش دل پا عالم
 زلف پرده جهان ذره تیر
 وجهه خون جان خاک تن جمله
 راه دم شمع سخن شیب ماه
 دست عمر کس گل لطفه مرد
 صبح جا خط لب مو

図 2.5 『四行詩集』の最頻出名詞 50

آفتاب رخ دم خاک درد شمع مرد
 دل کس عشق دریا
 روز عالم کار زن سخن
 زلف خون جمله خط
 آتش شان عطر سر جهان تن
 رخ ذره چشم گل راه خورشید دست ومان
 یزده یا بی جا عر نفس زمان

図 2.6 『アッターール詩集—ガザル』の最頻出名詞 50

جا گه نور سوی خلق زمین حق عطار
 آب روز چشم شب کار باد
 ذره خاک پا سر تیر آتش
 راه دست جان نفس عشق دم ماه
 پرده عقل خدا جهان سخن جمله
 خون روز عالم کس لب درد
 مو دریا هوا سحابه گل مرد زمان

図 2.7 『アッターール詩集—カスイーデ』の最頻出名詞 50

روح کف باد طشت میر شراب صوفی
 فلک دست عشق عقل عالم شهر
 جا بلبل خاک گل دل وجود دریا
 دم خودی جان نور کار شب
 معنی خدا سر جهان نام نقش
 خط خورشید نشان روز صفا
 سلطان سخن گنج جمال الله ساقی جام
 قیامت نی انص آدم گنر

図 2.8 『アッターール詩集—タルジュー』の最頻出名詞 50



図 2.9 『忠言の書』の最頻出名詞 50



図 2.10 『驚異の顕現』の最頻出名詞 50



図 2.11 『ヒーラージュの書』の最頻出名詞 50

頻度分析

真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』では「جان (jān)」、「سر (sar)」、「دل (del)」が各テキストの頻出単語トップ 5 に入っている。また、これらのテキストのうち、『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』では、「جان (jān)」が一番使われている名詞として登場する。一方、『アッターール詩集—ガザル』では、「جان (jān)」、「دل (del)」と続くが、三番目の最頻出名詞として「عشق ('eshq)」が入り、次に「سر (sar)」が続く。これは、ガザルという詩の性質上「عشق ('eshq)」を主題として扱うことが多いことが他の詩より多いことが推測できる。

これらのテキストに対して、偽作とされる『忠言の書』や『驚異の顕現』というテキストでは上図のように、「جان (jān)」、「سر (sar)」、「دل (del)」より「پسر (pesar)」や「معنی (ma'anī)」という単語の方が頻出単語である。他のアッターールのテキストにおいて「پسر (pesar)」や「معنی (ma'anī)」はトップ 100 にも入らない単語なので、他のテキストと単語の用い方が異なることが頻度の観点から明らかである。同じく偽作とされる『ヒーラージュの書』は、「جان (jān)」が最頻出名詞として登場する点において異なる。「حقیقت (haqiqat)」が二番目に使用されるが、「سر (sar)」が三番目に登場し、真作とされるテキスト同様に頻度が多い。

愛に関する単語として、「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」、「آتش (ātesh)」、「عشق ('eshq)」が、『神秘の書』における「درد (dard)」を除き、真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』においてトップ 50 に入っている。一方、「اشک (ashk)」は上記のテキストのみならず、本章でとりあげる、いかなるテキスト

のトップ 50 にも入っていない。さらに、偽作とされる『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』では一回も登場しない。従って、「اشك (ashk)」は、愛を表す際、真作においても偽作においてもアッタールが頻繁に使う単語ではないことが明らかである。一方、登場するテキストは真作とされているもののみである。愛に関する単語がトップ 50 に入っているテキストは以下の通りである。

- 「خون (khūn)」：『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』
- 「خاك (khāk)」：『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』、『アッタール詩集—タルジーウ』、『ヒーラージュの書』
- 「درد (dard)」：『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』
- 「آتش (ātesh)」：『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』
- 「اشك (ashk)」：全てのテキストで圏外
- 「عشق (‘eshq)」：『忠言の書』以外の全てのテキスト
- «عقل (‘aql)」：『災厄の書』、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』、『アッタール詩集—タルジーウ』

上記の結果から、以下の四点が指摘できる。

1. 「خون (khūn)」、「خاك (khāk)」、「درد (dard)」、「عقل (‘aql)」は『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』でよく用いられる（「خاك (khāk)」と「عقل (‘aql)」は『アッタール詩集—タルジーウ』でも使用されている）。
2. 「خون (khūn)」、「خاك (khāk)」、「آتش (ātesh)」は『アッタール詩集—タルジーウ』以外の真作でよく用いられる。
3. «عشق (‘eshq)」は『忠言の書』除く全てのテキストでよく用いられる。
4. «اشك (ashk)」は全てのテキストで頻度 50 位以内に入らない。

分析結果

愛と関連する単語のうち、「اشك (ashk)」は他の単語に比べて明らかに登場回数が少ないため、頻度の観点からは重要度が低い。一方、「خون (khūn)」、「خاك (khāk)」、「درد (dard)」、「آتش (ātesh)」、「عشق (‘eshq)」は頻度の観点からは高い。最頻出名詞の位置は真作とされるテキスト同士において類似する。その点において、偽作とされる『ヒーラージュの書』が真作のアッタールのテキストと類似している。具体的には、「حقیقت (haqīqat)」を除けば、「جان (jān)」と「سر (sar)」がトップに並ぶ点において、アッタールの真作とされるマスナヴィーの詩と近い。また、「خاك (khāk)」の登場頻度が真作とされるテキスト同様高い。一方、「خون (khūn)」と「درد (dard)」と「آتش (ātesh)」が最頻出名詞トップ 50 に入っていない。また、「اشك (ashk)」が一回も使われていない点において他の偽作とされるテキストと同様の特徴を持つ。結論として、頻度分析の観点から『忠言の書』、『驚異の顕現』は偽作の可能性が高いが、『ヒーラージュの書』の真偽は頻度分析の観点からだけでは判断できない。

| 神秘の書 | | 神の書 | | 災厄の書 | | 鳥の言葉 | |
|------|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|
| 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 |
| جان | 275 | جان | 479 | جان | 661 | جان | 405 |
| سر | 258 | دل | 455 | سر | 549 | سر | 304 |

| | | | | | | | |
|------|-----|------|-----|------|-----|------|-----|
| دل | 244 | سر | 446 | کار | 457 | دل | 251 |
| کار | 175 | مرد | 353 | دل | 347 | مرد | 201 |
| راه | 162 | راه | 313 | مرد | 347 | کار | 192 |
| جهان | 158 | کس | 297 | راه | 323 | کس | 181 |
| خاک | 150 | کار | 294 | جهان | 308 | راه | 172 |
| کس | 148 | جهان | 285 | روز | 293 | عشق | 135 |
| مرد | 148 | روز | 253 | عالم | 258 | خون | 133 |
| تیر | 125 | شاه | 244 | جمله | 243 | دست | 126 |
| عالم | 123 | تیر | 234 | زمان | 234 | شب | 119 |
| دم | 103 | خون | 219 | تیر | 233 | عالم | 115 |
| نور | 99 | دست | 218 | کس | 217 | خاک | 108 |
| چشم | 96 | زن | 208 | عشق | 217 | آتش | 104 |
| دست | 95 | زمان | 178 | حق | 213 | روز | 93 |
| دریا | 91 | حق | 177 | خاک | 209 | جهان | 87 |
| سخن | 83 | پا | 175 | دست | 195 | تن | 84 |
| روز | 83 | چشم | 167 | شاه | 191 | زمان | 84 |
| حق | 82 | دم | 164 | شب | 180 | حق | 83 |
| دنیا | 81 | عالم | 162 | خون | 177 | دریا | 75 |
| عشق | 79 | خاک | 161 | پا | 175 | درد | 81 |
| تن | 76 | آتش | 155 | سوی | 171 | شاه | 80 |
| شب | 75 | عشق | 149 | سخن | 162 | رو | 78 |
| عمر | 66 | ملک | 138 | ذره | 159 | نفس | 73 |
| جا | 65 | زبان | 132 | آتش | 154 | دم | 72 |
| پیر | 64 | جا | 124 | خلق | 154 | تیر | 70 |
| خون | 63 | چیز | 118 | آب | 153 | آب | 67 |
| گوی | 63 | شب | 116 | پیر | 142 | سوی | 63 |
| ذره | 60 | بهر | 105 | دم | 137 | سخن | 61 |
| بهر | 58 | درد | 102 | زن | 135 | شیخ | 59 |
| معنی | 57 | عمر | 102 | رو | 134 | پا | 57 |
| آتش | 57 | تن | 101 | درد | 131 | چشم | 57 |
| جو | 55 | گوی | 100 | عقل | 117 | زن | 56 |
| چیز | 53 | سخن | 100 | حال | 115 | خلق | 53 |
| خواب | 52 | ماه | 99 | خدا | 113 | جا | 49 |

| | | | | | | | |
|--------|----|------|----|------|-----|-------|----|
| سوی | 51 | نور | 95 | نفس | 113 | ماه | 48 |
| زمین | 50 | جمله | 95 | تن | 112 | یار | 48 |
| پا | 50 | پسر | 95 | دنیا | 112 | سیمرغ | 48 |
| زن | 49 | سوی | 92 | جا | 111 | حال | 47 |
| گه | 49 | آب | 91 | گوی | 111 | زر | 47 |
| پرده | 48 | حال | 91 | گرد | 103 | گوی | 47 |
| آب | 47 | نام | 89 | چشم | 101 | عمر | 46 |
| زر | 47 | خلق | 85 | نان | 94 | نان | 45 |
| باد | 47 | رو | 85 | عمر | 91 | جمله | 45 |
| نفس | 45 | پیر | 85 | زر | 90 | نره | 45 |
| راز | 42 | نره | 83 | دریا | 89 | سگ | 44 |
| خورشید | 42 | راز | 82 | راز | 86 | چیز | 43 |
| خدا | 41 | دنیا | 80 | سالک | 81 | مو | 41 |
| جمله | 39 | دوست | 78 | شیر | 79 | نور | 40 |
| دار | 39 | خانه | 77 | نام | 75 | دنیا | 39 |

図 2.12 『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』における最頻出名詞 50 の頻度

| 四行詩集 | | アッタール 詩集ーガザ ル | | アッタール 詩集ーカス イーデ | | アッタール 詩集ータル ジュー | | 忠言の書 | | 驚異の顯現 | | ヒーラー ユの書 | |
|------|-----|---------------------|------|-----------------------|-----|-----------------------|----|------|----|-------|-----|-------------|------|
| 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 |
| دل | 857 | جان | 1680 | دل | 181 | سر | 20 | پسر | 81 | معنی | 665 | جان | 1481 |
| جان | 663 | دل | 1592 | سر | 169 | جان | 16 | حق | 76 | سر | 565 | حقیقت | 1275 |
| سر | 513 | عشق | 1027 | جان | 140 | دل | 16 | کس | 60 | حق | 539 | سر | 973 |
| جهان | 309 | سر | 1016 | خاک | 106 | خاک | 14 | دل | 46 | راه | 419 | عشق | 605 |
| شمع | 300 | عطار | 677 | جهان | 94 | نور | 12 | خدا | 43 | جان | 416 | راز | 557 |
| کار | 270 | جهان | 569 | خون | 80 | عالم | 11 | مرد | 43 | شاه | 285 | دل | 478 |
| عشق | 266 | زلف | 508 | روز | 70 | جهان | 10 | کار | 37 | علم | 263 | تیر | 380 |
| خون | 237 | خون | 423 | دست | 68 | روز | 9 | جهان | 33 | دل | 257 | دم | 356 |
| روز | 219 | کس | 418 | نفس | 68 | نام | 9 | نفس | 31 | جهان | 244 | جمله | 336 |
| خاک | 209 | کار | 403 | دم | 63 | عشق | 9 | روز | 30 | گه | 213 | یار | 312 |
| دست | 208 | راه | 359 | کار | 61 | دست | 8 | دنیا | 29 | نور | 212 | شیخ | 287 |
| آتش | 208 | نره | 351 | کس | 60 | صفا | 8 | اهل | 27 | جمله | 196 | صورت | 284 |
| کس | 190 | دم | 348 | عمر | 60 | خودی | 8 | مردم | 23 | سخن | 194 | معنی | 280 |
| عمر | 174 | عالم | 348 | شب | 57 | خدا | 8 | ذکر | 23 | دنیا | 191 | راه | 267 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|--------|-----|--------|----|--------|---|--------|----|-------|-----|--------|-----|
| دم | 163 | دست | 348 | چشم | 57 | عقل | 7 | دوست | 22 | مظهر | 187 | دیدار | 250 |
| نفس | 155 | چشم | 327 | آب | 56 | باد | 7 | دار | 22 | عشق | 182 | جهان | 237 |
| شب | 146 | درد | 291 | روزه | 49 | دم | 6 | شیطان | 21 | جوهر | 176 | گوی | 232 |
| پرده | 144 | دریا | 271 | پرده | 48 | وجود | 6 | خلق | 21 | عطار | 172 | شاه | 212 |
| عالم | 142 | مرد | 250 | مو | 47 | حق | 5 | دشمن | 21 | مرد | 171 | کس | 206 |
| تیر | 136 | نفس | 230 | عالم | 46 | کف | 5 | سر | 20 | اهل | 169 | مرد | 202 |
| پا | 136 | خاک | 214 | عقل | 42 | خورشید | 5 | چیز | 20 | عالم | 161 | درون | 194 |
| راه | 134 | روز | 212 | راه | 41 | کار | 5 | آب | 19 | خدا | 159 | اناللق | 189 |
| گل | 134 | پرده | 203 | نور | 41 | جام | 5 | دست | 19 | مصطفی | 154 | زمان | 186 |
| زلف | 131 | پا | 202 | نره | 40 | سخن | 5 | جان | 18 | دین | 139 | نور | 182 |
| تن | 128 | زن | 199 | جمله | 39 | نشان | 5 | تیر | 18 | خلق | 123 | خدا | 180 |
| نره | 122 | آتش | 188 | سخن | 38 | روح | 4 | چارچیز | 18 | ایمان | 122 | سوی | 178 |
| چشم | 114 | گل | 175 | مرد | 37 | سلطان | 4 | بنده | 17 | راز | 117 | عالم | 171 |
| درد | 113 | شب | 173 | پا | 36 | نقش | 4 | بهر | 17 | مرتضی | 110 | وصل | 168 |
| چیز | 104 | آب | 173 | باد | 36 | جا | 4 | گرد | 17 | ملک | 107 | حق | 163 |
| غم | 100 | لب | 172 | خلق | 33 | طشت | 4 | برادر | 17 | زمان | 104 | دوست | 155 |
| دریا | 99 | خط | 168 | فلک | 33 | معنی | 4 | یاد | 16 | حیدر | 103 | دست | 148 |
| مرد | 92 | زمان | 167 | گل | 33 | شب | 4 | هوا | 15 | کس | 103 | پرده | 140 |
| مو | 85 | سخن | 165 | عطار | 33 | مهر | 4 | عمر | 15 | درون | 102 | گرد | 134 |
| آب | 78 | شمع | 163 | حق | 32 | شراب | 4 | علم | 15 | یار | 100 | صاحب | 131 |
| عقل | 77 | مو | 162 | ماه | 30 | بلبل | 4 | خواب | 14 | شه | 99 | نظر | 129 |
| لحظه | 77 | عقل | 161 | خدا | 29 | ساقی | 4 | حاصل | 14 | علی | 98 | جام | 127 |
| سخن | 76 | عمر | 159 | عشق | 28 | صوفی | 4 | جا | 14 | بهر | 96 | گه | 123 |
| جمله | 76 | غم | 157 | تن | 28 | جمال | 4 | جمله | 13 | تیر | 95 | قرآن | 123 |
| لب | 75 | خورشید | 155 | لب | 27 | نی | 4 | راه | 13 | طریق | 94 | خورشید | 122 |
| جا | 74 | جمله | 155 | سوی | 27 | گنج | 4 | پیشه | 13 | کتاب | 93 | کار | 120 |
| گه | 71 | نشان | 155 | آتش | 27 | شهر | 4 | صحبت | 13 | احمد | 92 | اصل | 116 |
| صبح | 70 | جا | 151 | سبحانه | 27 | خط | 3 | ترک | 13 | شیخ | 86 | خاک | 114 |
| ماه | 65 | تن | 149 | هوا | 26 | انس | 3 | عالم | 12 | نام | 81 | دنیا | 113 |
| گرد | 60 | آفتاب | 148 | دریا | 26 | قیامت | 3 | نعمت | 12 | کار | 80 | ع | 105 |
| باد | 60 | رخ | 147 | زمین | 26 | دریا | 3 | زبان | 12 | تن | 75 | نقش | 103 |
| زمین | 60 | گرد | 142 | گه | 26 | فلک | 3 | زن | 12 | محمد | 75 | جمال | 102 |
| خط | 59 | وصل | 129 | جا | 25 | قدر | 3 | خدمت | 12 | جام | 72 | گنج | 102 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|----|------|-----|------|----|------|---|-----|----|------|----|------|-----|
| خلق | 57 | زبان | 126 | شیر | 25 | الله | 3 | باد | 11 | گوش | 71 | جوهر | 102 |
| وجود | 56 | ماه | 124 | زمان | 25 | آدم | 3 | نان | 11 | صورت | 70 | سخن | 102 |
| زن | 56 | بوی | 115 | درد | 24 | گل | 3 | مال | 11 | روز | 70 | رخ | 101 |

図 2.13 『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスイーデ』、『アッターール詩集—タルジュー』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』における最頻出名詞 50 の頻度

2-1. 『神秘の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

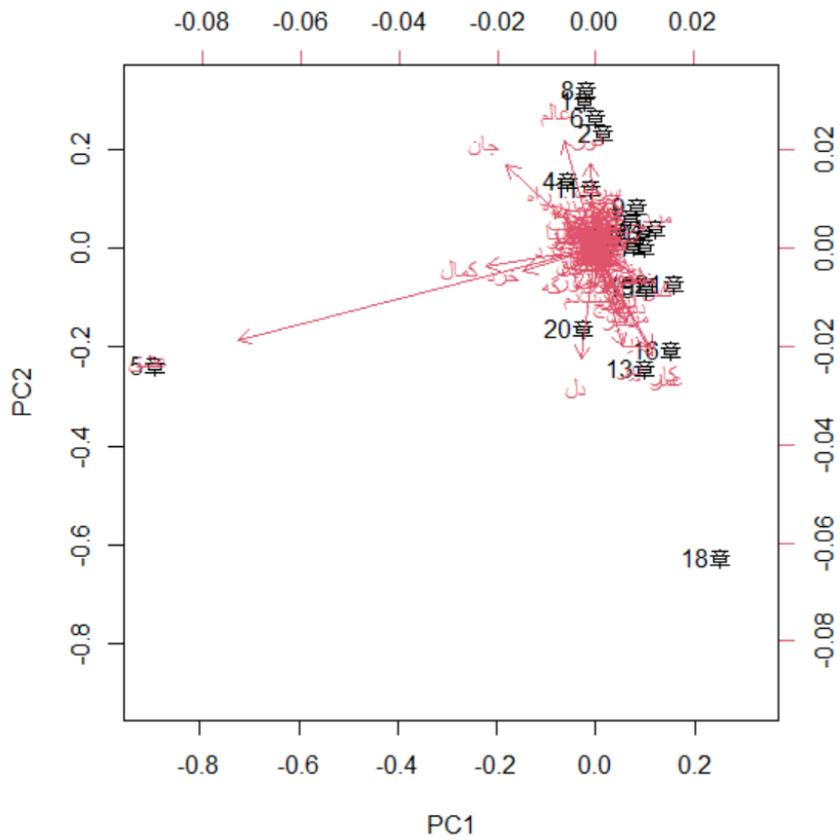


図 3.1 『神秘の書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.19375, PC2=0.13564)

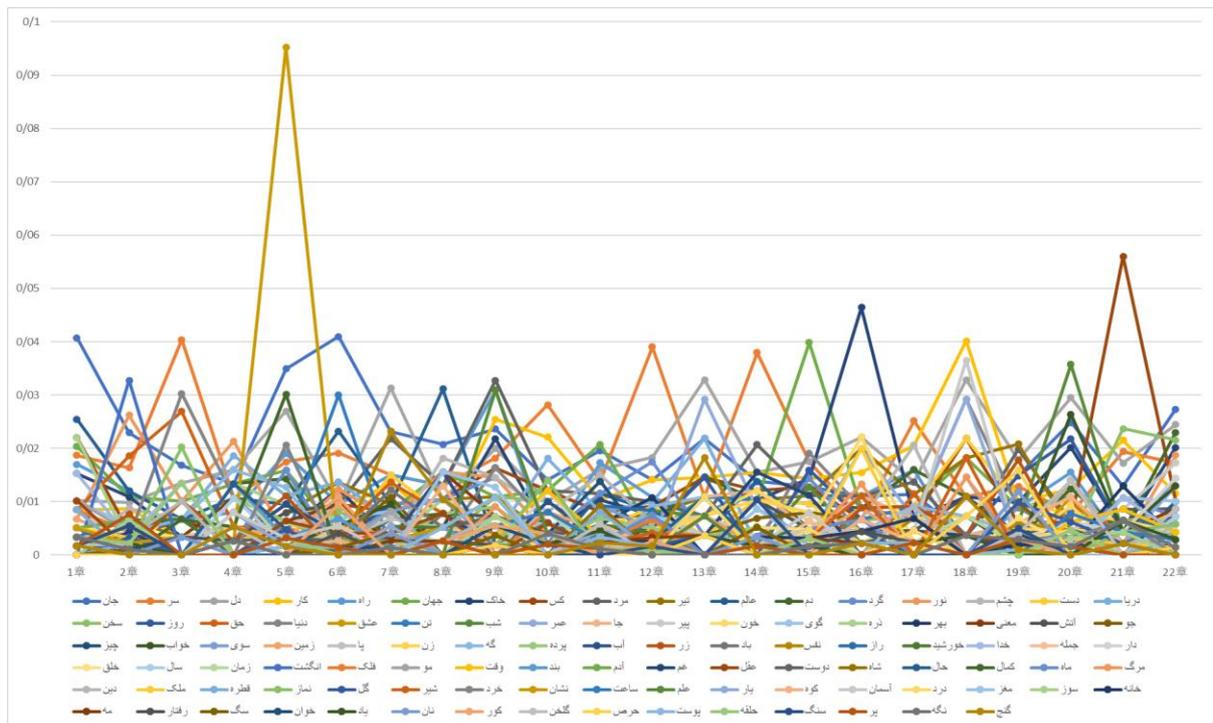


図 3.2 『神秘の書』最頻出名詞 100 の相対頻度

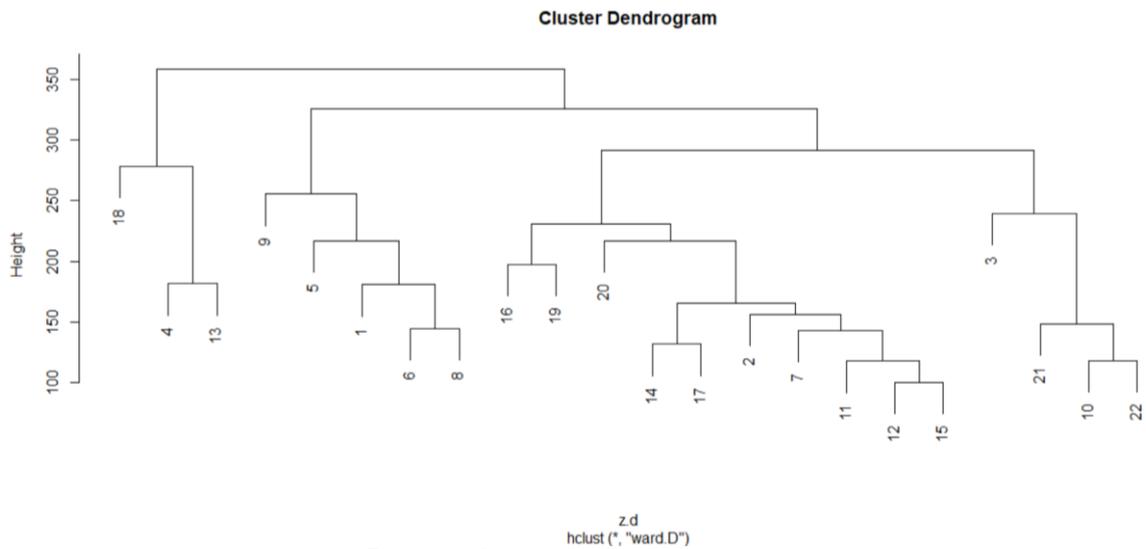


図 3.3 『神秘の書』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、第 5 章と第 18 章の特徴は他の章と異なる。それ以外の箇所は比較的共同の特徴でまとまっている。18 章は「پیر (pīr)」の相対頻度が一番高く、図 3.2 から「پیر (pīr)」と「عمر ('omr)」と「کار (kār)」が相対的に多く使われていることを観察できる。第 2 章、第 6 章、第 8 章では PC1 と PC2 において共同の特徴があり、「عالم ('ālem)」と「نور (nūr)」を同時に使う傾向を図 2.1 から読み解ける。

特徴語の使用方法

5 章は愛が主題の章である。「عشق ('eshq)」、すなわち愛は「کمال (kamāl)」という言葉と共に使われる傾向があり、原理や完全性に近いもの、求められるものとして扱われている。そして、動物、人間、神秘主義、愛する者等々にそれぞれの愛の完全性があるが、完全性がなく愛を求めない状態においては「何もない」ことが語られる¹⁸⁶。

(5 章)

心よ、一瞬、水と泥¹⁸⁷を解き放て
 愛の呼び声を、心の人々¹⁸⁸に捧げよ
 愛の光から、魂の蠟燭を照らせ
 愛する者 (恋人たち) から愛の詩篇を学べ
 (中略)
 全てのものは、愛において、状態を変化させている
 時間であれ、月であれ、年であれ
 動物の愛の完全性は食べることと情欲にある
 人間の愛の完全性は地位と力にある
 (中略)
 神秘主義の完全性は非存在の中にある
 愛する者たちの完全性は非存在の中で酔っていること
 (中略)

¹⁸⁶ 『神秘の書』の韻律はハザジュ体 (U — — — / U — — — / U — — —)

¹⁸⁷ 土 (ここでは泥) と水は人間を構成する要素

¹⁸⁸ 心を持っている人々で、探究者をさす。'Alī-akbar Dekhodā, "Ahl-e Del," *Loghat-nāme-ye Dekhodā*, edited by Moḥammad Mo'īn and Ja'far Shahīdī, Tehrān: Mo'assese-ye Enteshārāt-e va Chāp-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1998 or 1999, p. 3667.

最初から最後まで、捻じ曲がっている上に捻じ曲がっている
完全性がなければ、何もない上に何もない
完全性がなければ、それから、何を知るのか？
熱情がないことから、驚きの状態に留まり続ける¹⁸⁹

18 章は老年における悲しみ、その一つとして、世界に対する悲しみを主題の一つとして取り扱っている。

(18 章)

私の悲しみに満ちた世界は、多くのことを言った
私に背を向けた天は、[私の] 背を曲げた
私の悲しみはどのくらいまで拘束されているのか
私は行為において、消滅から来るものしか持たない¹⁹⁰

2 章、6 章、8 章は世界を照らす光である預言者や両世界についてこれらの章ではテーマとして扱われている。

(2 章)

世界はその光を保持し
アダムからアブドッラー¹⁹¹へ [その光が] 来た
それは多くの預言者を経てきた
全ての中から、宝石のように頭に落ちた¹⁹²

(6 章)

もし、そなたの体が光であれば、何であるか？
この世界のすべての粒も美しい乙女である
そなたの目に月のように光が来る時
なぜその全ての粒において美しい乙女が来ないのか¹⁹³

(8 章)

彼が世界の明るさを見る時
彼はどれほど驚いたか
(中略)
その暗闇から離れるとき
光に満ちた世界と結合する¹⁹⁴

階層的クラスター分析の結果、章は大きく以下の四つのクラスターに分類できる。

クラスター1: 4 章、13 章、18 章

クラスター2: 1 章、6 章、5 章、8 章、9 章

クラスター3-1: 3 章、10 章、21 章、22 章

クラスター3-2: 2 章、7 章、11 章、12 章、14 章、15 章、16 章、17 章、19 章、20 章

¹⁸⁹ Farīd al-Dīn 'Aṭṭār, *Asrār-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh5/sh1> (accessed August 14, 2023).

¹⁹⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh18/sh1> (accessed August 14, 2023).

¹⁹¹ 預言者ムハンマドのこと

¹⁹² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh2/sh1> (accessed August 14, 2023).

¹⁹³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh6/sh5> (accessed August 14, 2023).

¹⁹⁴ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh8/sh1> (accessed August 14, 2023).

クラスター3-1 と 3-2 が隣接し、この二つのクラスターを合わせたクラスターとクラスター2が隣接する。それら全てを合わせたクラスターとクラスター1が隣接する。

(2) 愛に関する単語について

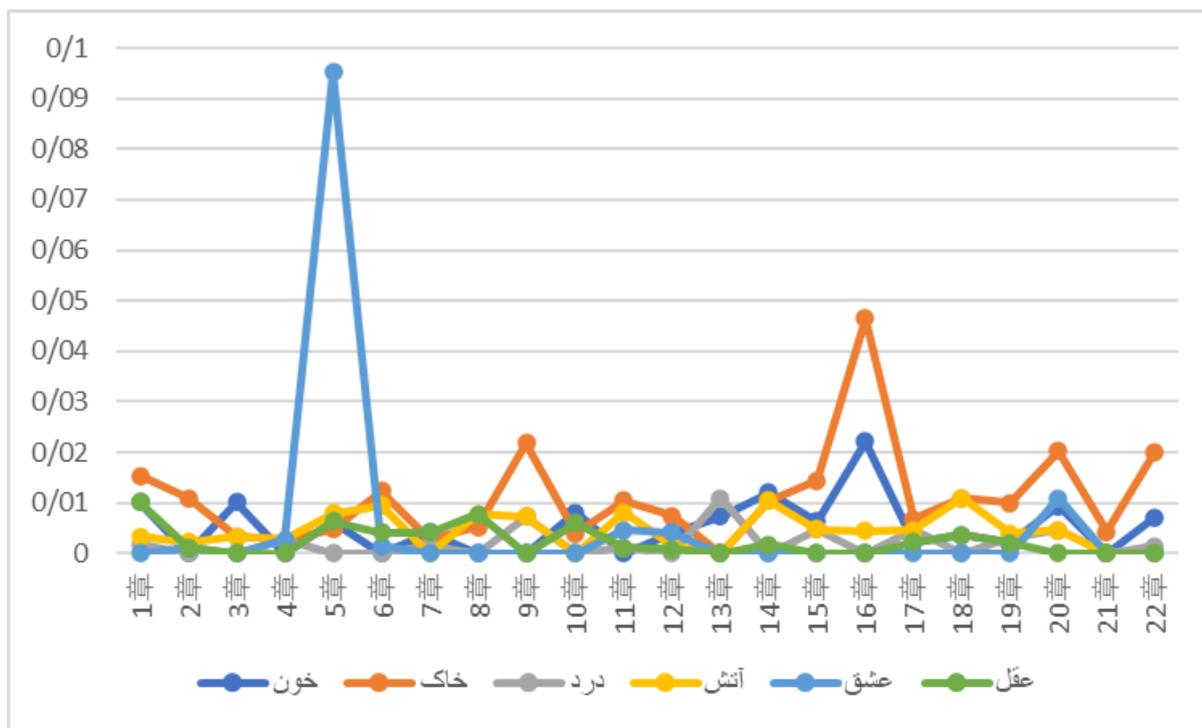


図 3.4 『神秘の書』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

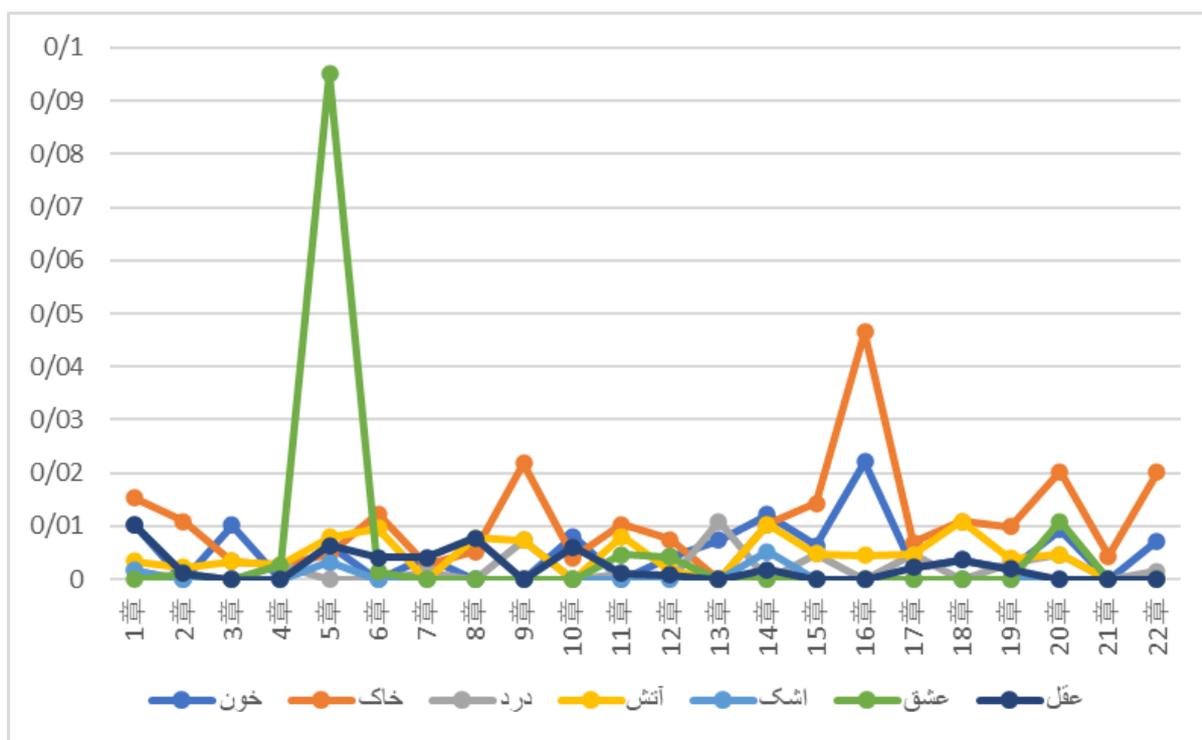


図 3.5 『神秘の書』愛に関する単語の相対頻度

図 3.4 から「عشق (‘eshq)」の比率が高い 5 章は、他の愛に関する単語の比率が相対的に低い。一方、9 章と 16 章では「خاک (khāk)」の比率が高い。また、16 章では「خون (khūn)」も頻繁に用いられる。20 章では、「خاک (khāk)」の相対頻度が最も高く、「عشق (‘eshq)」と「خون (khūn)」が続く。22 章も「خاک (khāk)」の相対頻度が最も高く、「خون (khūn)」が続く。

愛に関する特徴語の使用法

5章は前述の通り、「عشق ('eshq)」、すなわち愛が主題の章であり、原理や完全性に近いもの、求められるものとして扱われている。

9章は、「خاک (khāk) 」が人間の構成要素と死に関係するものとして扱われる。

(9章)

形式から死ね、土になるまで
さすれば、そなたが土になり、清浄になる
(中略)
もし土が純粋な本質がなければ
アダムの泥はどの土から来たのか¹⁹⁵

16章は、悲しみが主題である。下記の逸話の「خاک (khāk) 」は人間の構成要素又は比喻として使われ、この世が悲しみに溢れていることを表す。

(16章)

もし土の中から一握りの土を、そなたが掴むならば
その悲しみに満ちた土の物語を尋ねる
百の悲しみを伴って涙が、雲のように落ちる
それぞれの粒から、悲しみの声上がる¹⁹⁶

20章は愛の苦痛が主題であり、はっきりと愛と苦痛が結びついているという記述がある。「خاک (khāk) 」は苦痛や悲しみを表している可能性が高い。

(20章)

彼の眼が王の美しさを見たとき
震え、その場で倒れた
(中略)
王のこの言葉を聞いたとき、ダルヴィーシュは
土に倒れ、自身を失った
彼の目からは涙が雨のように流れ
彼は、プラタナスの葉のように震えた¹⁹⁷

22章は、「عشق ('eshq) 」ではなく、「خون (khūn) 」や「خاک (khāk) 」が、死や苦痛、悲しみ、愛の状態を表す表現として用いられる。

(22章)

もし、そなたにおいて、自身の杯の中に血があるなら、立ち上がって
私たちの土の上に血を流せ
私たちの死後も、誠実な親愛なる人たちは
私たちの土に多く話しかける

¹⁹⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh9/sh2> (accessed August 14, 2023).

¹⁹⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh16/sh3> (accessed August 14, 2023).

¹⁹⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh20/sh3> (accessed August 14, 2023).

彼らは心から私たちに語りかける
しかし、私たちの墓からは返事がこない
多くの人が血を飲んで、死んだ
痛みと苦難の中で土の下で眠った
今、私たちも血を飲み、死ぬ
痛みと悲しみの中で土の下で眠る¹⁹⁸

¹⁹⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/asrarnam/abkhsh22/sh6> (accessed August 14, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

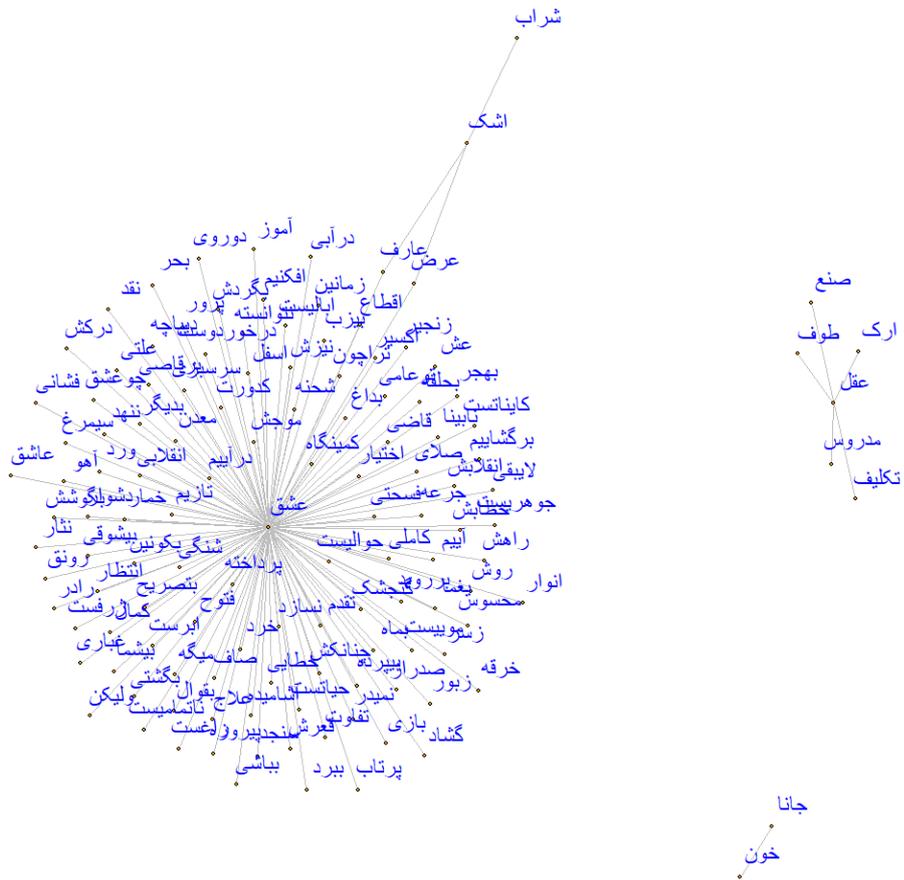


図 3.6 『神秘の書』愛に関する単語同士の共起関係

共に登場する単語としては「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」、「اشک (ashk)」と「عشق (‘eshq)」の重みの値が高いことから、共起する頻度が高い。また、「اشک (ashk)」と「عشق (‘eshq)」も重みの値が高い。

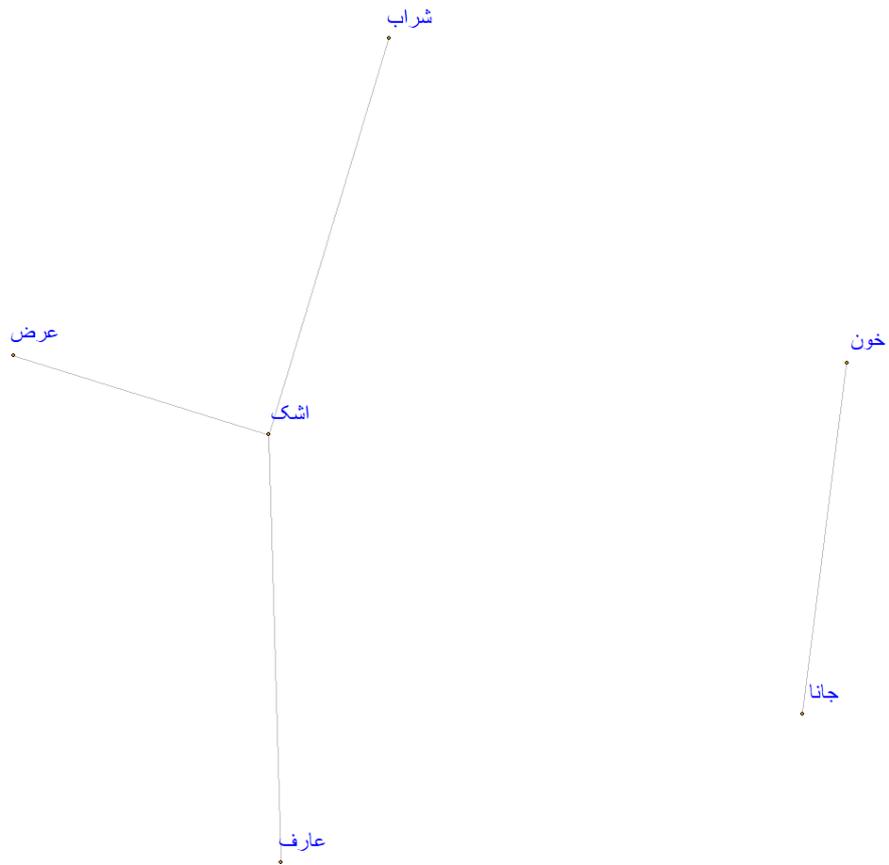
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | جانا | 0/74 |
| خاک | پاک | 0/63 |
| درد | شکسته | 0/49 |
| آتش | دوروی | 0/64 |
| اشک | عرض | 0/85 |
| عشق | آشامیده | 0/99 |
| عقل | تکلیف | 0/76 |

図 3.7 『神秘の書』愛に関する各単語と最も共起する単語

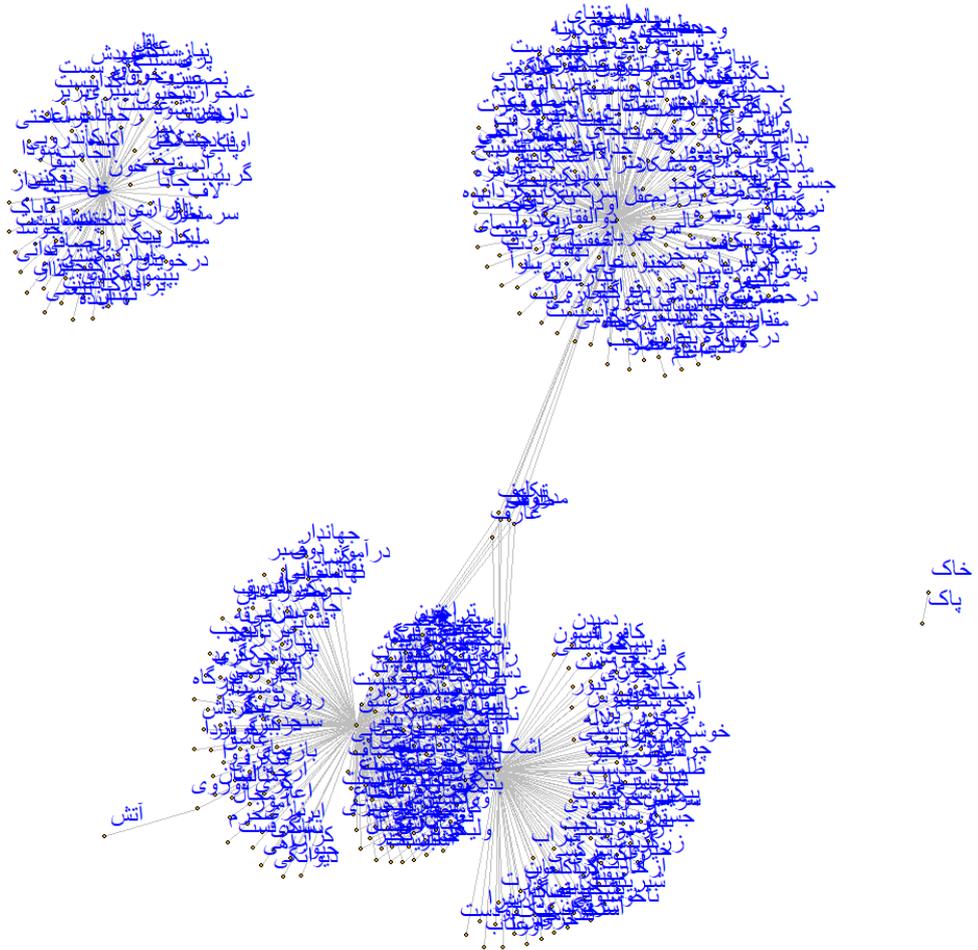


correlation Threshold: 0.7

図 3.8 『神秘の書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.7 以上)



correlation Threshold: 0.7
 図 3.9 『神秘の書』 愛に関する単語の内、「**عشق** ('eshq)」と「**عقل** ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み = 0.7 以上)



correlation Threshold: 0.6

図 3.10 『神秘の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.6以上）

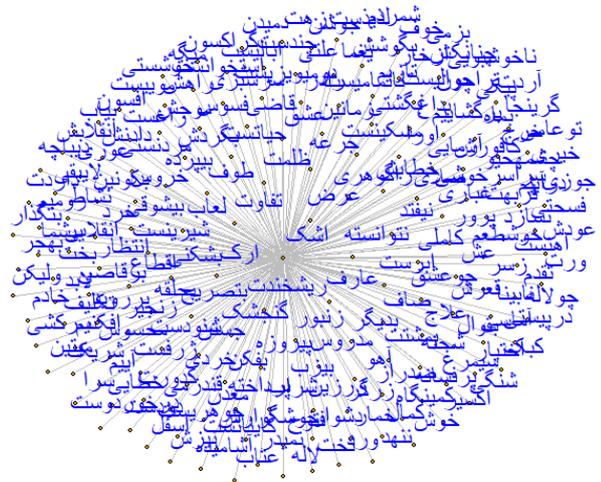


دوروی

آتش

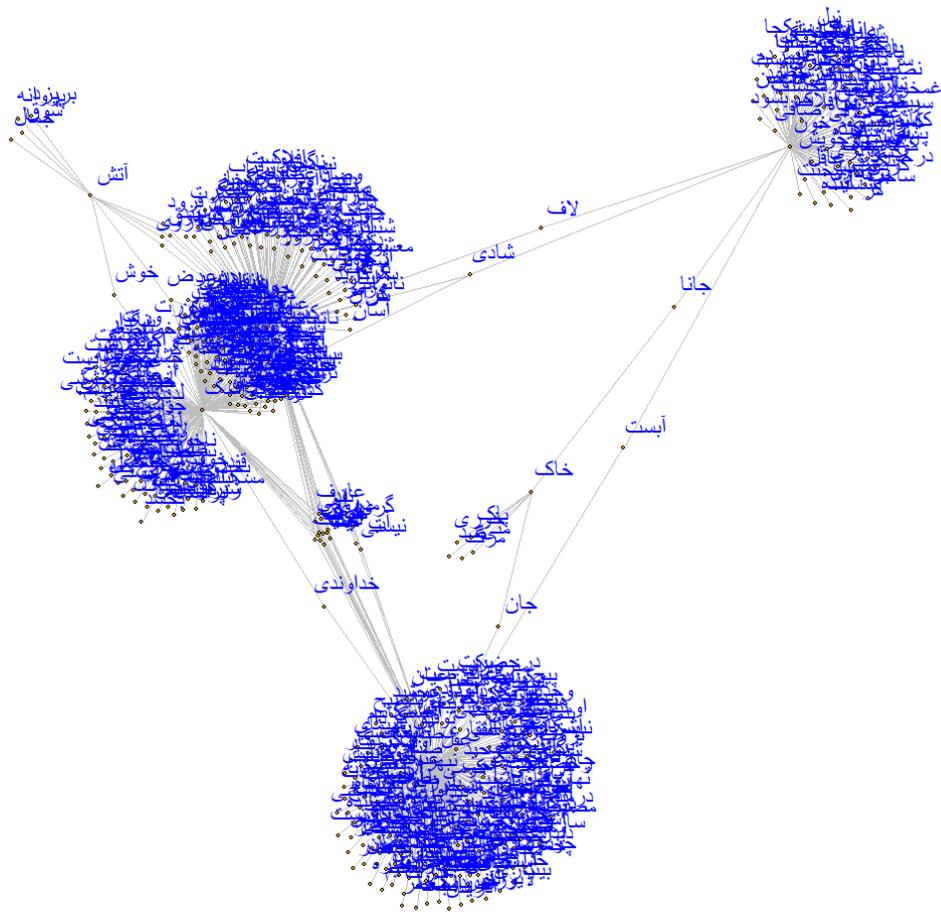
پاک

خاک



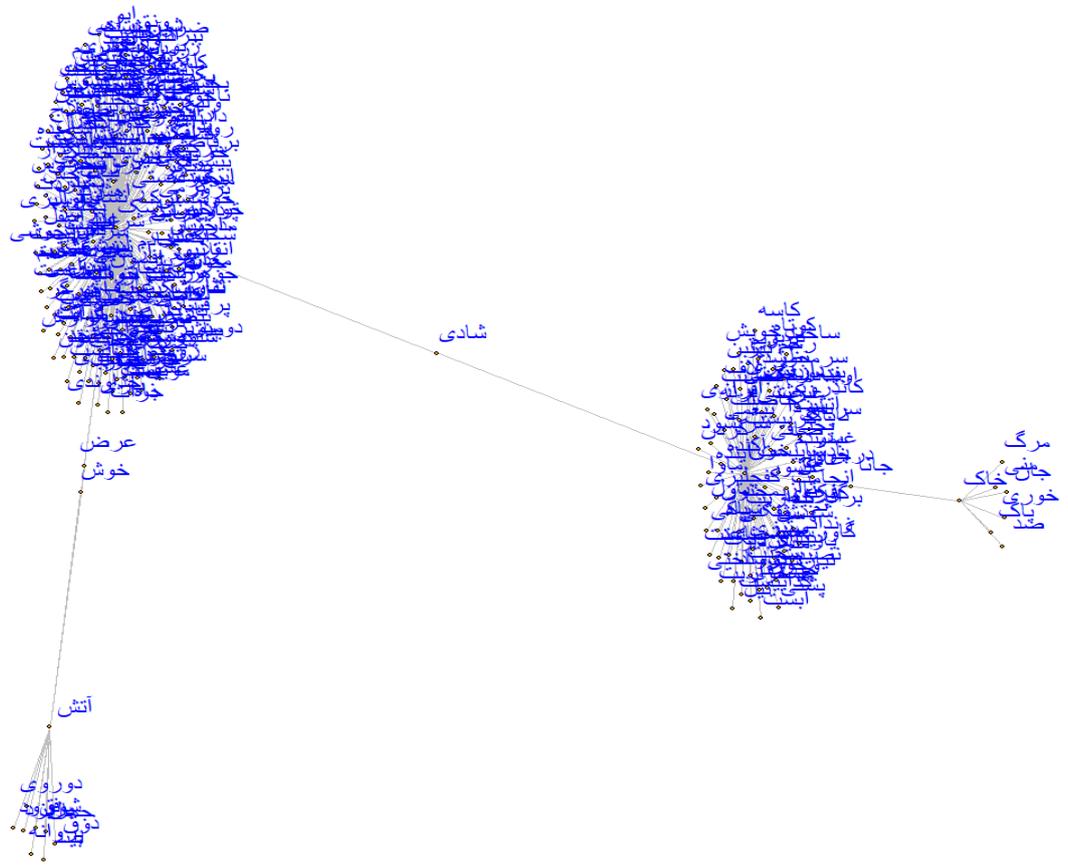
correlation Threshold: 0.6

図 3.11 『神秘の書』愛に関する単語の内、「عشق」(eshq)と「عقل」(aql)を除いた共起ネットワーク(重み=0.6以上)



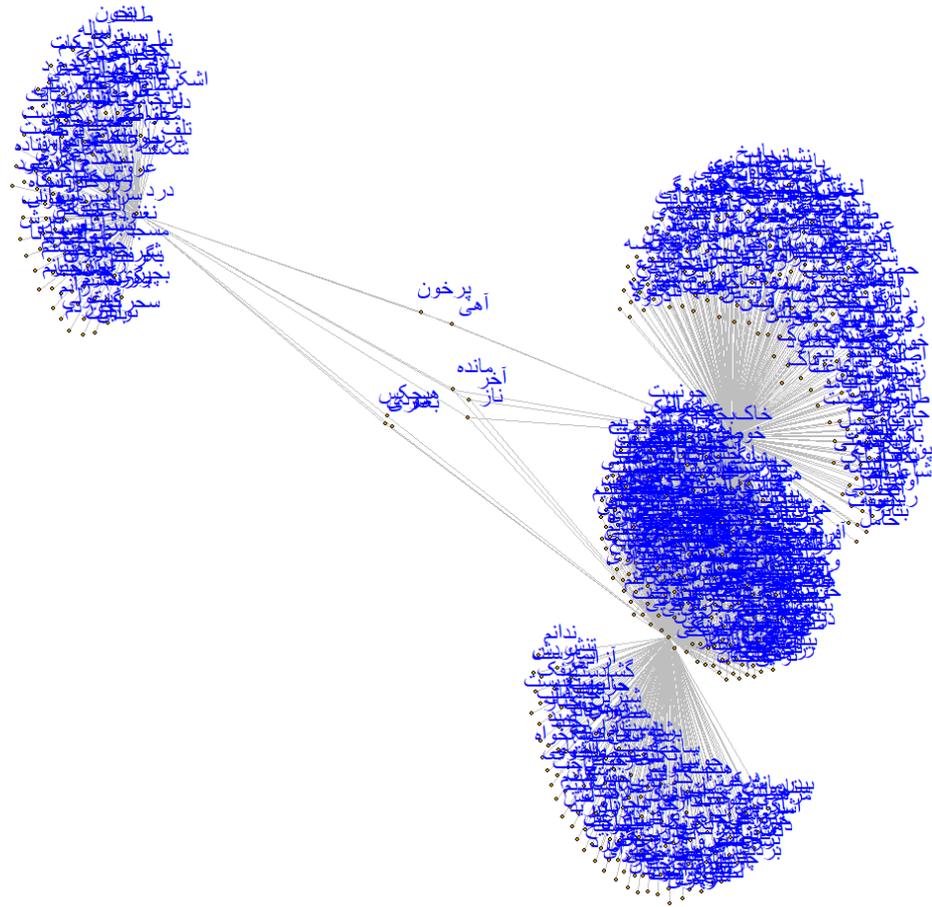
correlation Threshold: 0.5

図 3.12 『神秘の書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 3.13 『神秘の書』愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み = 0.5 以上)



correlation Threshold: 0.3

図 3.14 『神秘の書』 愛に関する単語の内「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」の共起ネットワーク (重み=0.3 以上)

重みが 0.7 の時、「عشق (‘eshq)」は様々な単語と共起している。「عشق (‘eshq)」と「اشک (ashk)」は、「عرض (‘arz)」や「عارف (‘āref)」という単語とそれぞれ共起する。さらに、「اشک (ashk)」は他の愛と関係する単語と異なり「شراب (sharāb)」という単語と共起する。「خون (khūn)」は「جانا (jānā)」とのみ共起し、「عقل (‘aql)」は「تکلیف (taklīf)」、「طوف (ṭauf)」と共起する。

重みが 0.6 の時、「خاک (khāk)」が初めて登場し、「پاک (pāk)」と共起する。「عقل (‘aql)」、「عشق (‘eshq)」、「اشک (ashk)」は「عارف (‘āref)」と「تکلیف (taklīf)」と共起する。さらに、「دوروی (do-rūy)」という単語は「عشق (‘eshq)」と「آتش (ātesh)」の両単語において共起する。

重みが 0.5 の時、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」がそれぞれ共通の単語と共起する。前者は、「جانا (jānā)」という言葉と共起し、後者では「شادی (shādī)」という言葉と共起する。また、「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」は「لاف (lāf)」と共起する。

重みが 0.3 の時、「درد (dard)」が登場し、「خاک (khāk)」、「خون (khūn)」と共に「مانده (mānde)」と共起する。

(4) 『神秘の書』まとめ

共起ネットワークにおいて、「خون (khūn)」は恋人を表す「جانا (jānā)」と共起し、共起する時の重みの値が高いため、愛との関係性が強いことが推測できる。さらに、「خاک (khāk)」も「خون (khūn)」と同様に「جانا (jānā)」と結びつくことから、愛するものとの関係が深いことが明らかである。また、「درد (dard)」と「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」は「مانده (mānde)」と共起することから、痛みとも関係する可能性が示唆されている。これらの単語が痛みと関係しているという観点は、「خاک (khāk)」が痛みを表し、愛と結びついている 20 章があること、「خاک (khāk)」における「خون (khūn)」の重みの比重が高いことから支持される。

共起ネットワークの結果から、「عشق (‘eshq)」は「اشک (ashk)」との結びつきが特に強いことも明らかになった。さらに、否定的に使われているが、「عقل (‘aql)」という単語も「اشک (ashk)」と「عشق (‘eshq)」と結びつきが強い単語である。しかし、否定的な意味で使われておることから、「عقل (‘aql)」は「عشق (‘eshq)」と「اشک (ashk)」と対になる言葉としてテキストにおいて記述される。

「عقل (‘aql)」は「عشق (‘eshq)」と共起する頻度が高い。一方で、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」も共起する頻度が高い。図 3.1 と図 3.4 から、5 章は愛に関する単語のうち「عشق (‘eshq)」の頻度が高い。そして、20 章では「عشق (‘eshq)」、「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」の相対頻度が互いに近づく。22 章では、「عشق (‘eshq)」ではなく「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」が主に愛の表現方法として使われる。ここから、「عشق (‘eshq)」によってのみ愛を語る方法、「عشق (‘eshq)」と他の愛に関する単語を組み合わせる愛に伴う痛みや愛を語る方法、「عشق (‘eshq)」の代わりに他の愛に関する単語を用いて愛に伴う痛みや愛を語る方法があると主張できる。

2-2. 『神の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

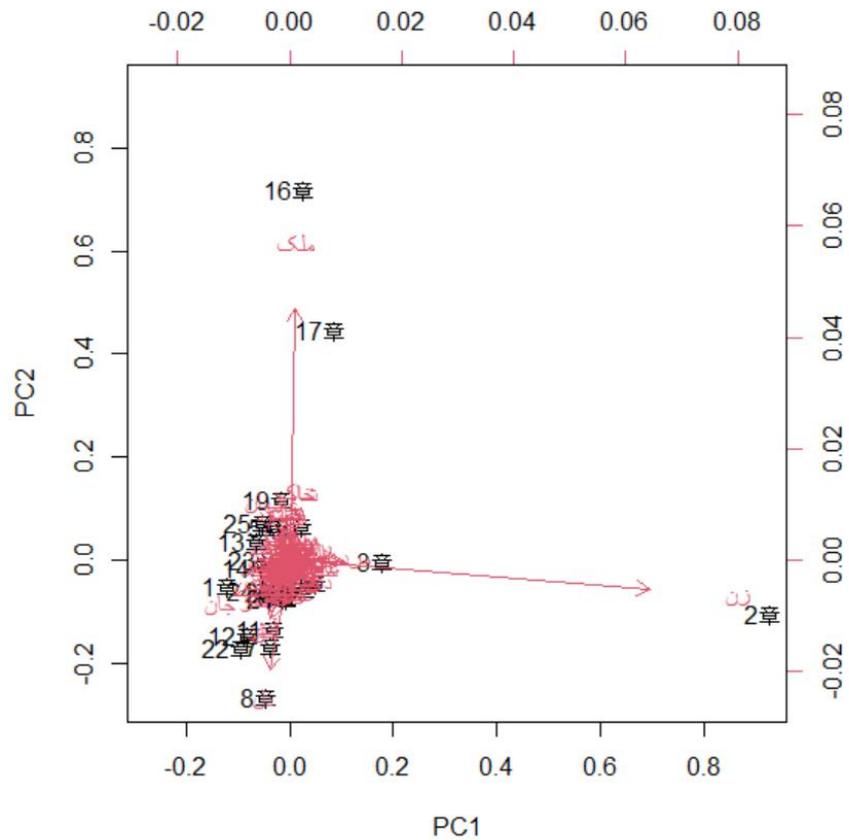


図 4.1 『神の書』 最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.1822、PC2=0.13739)

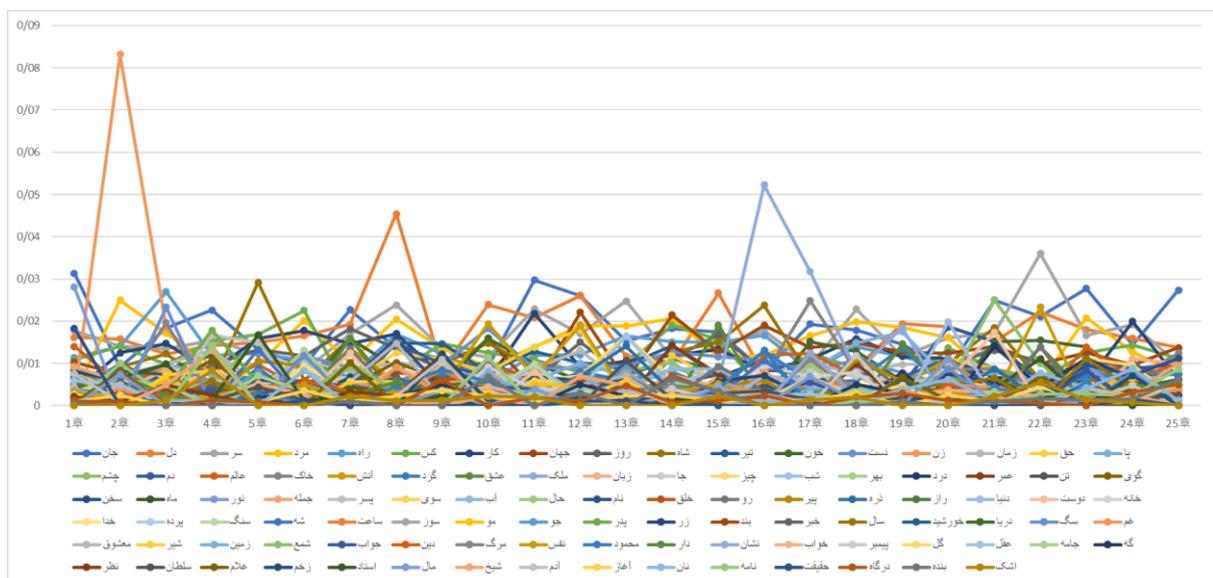


図 4.2 『神の書』 最頻出名詞 100 の相対頻度

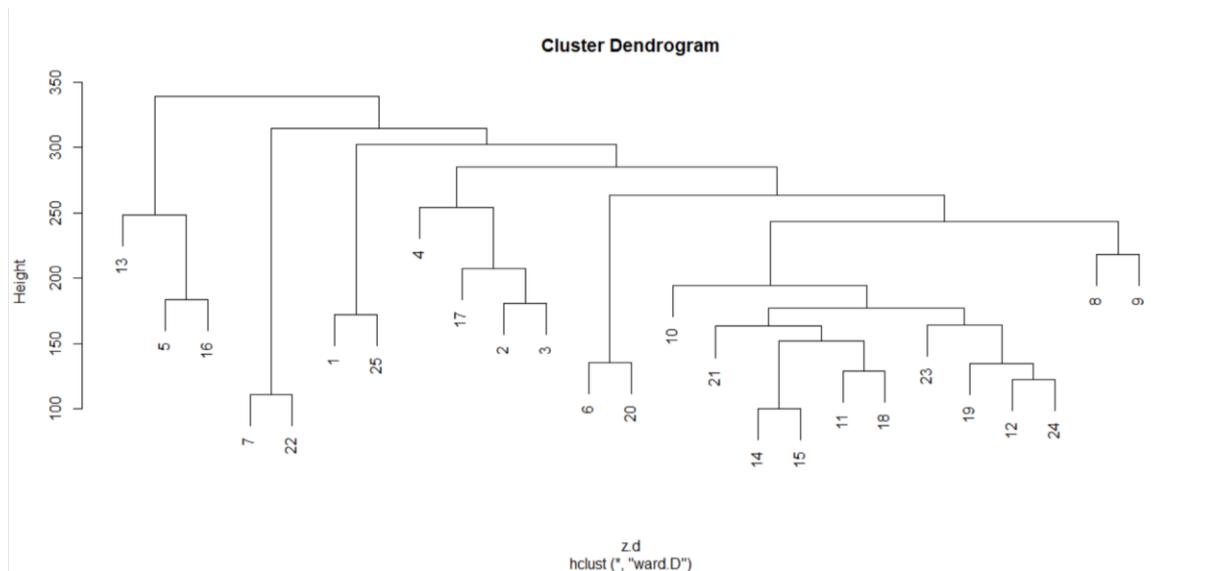


図 4.3 『神の書』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、第 2 章、第 16 章、第 17 章の特徴が他の章と異なる。第 2 章は「زن (zan)」という単語の相対頻度が高く、16 章と 17 章は、「مَلِك (molk)」という単語の相対頻度が高い。

特徴語の使用方法

2 章は『神の書』において二番目に長い逸話がある。神秘主義道の旅を、運命に翻弄されながら女「زن (zan)」が旅する描写で記述する¹⁹⁹

(2 章)

賢い王は彼女の状況を調査した
 彼女はこう言った。私たちは、大勢いました
 私たちは船に乗り、多くの道を
 絶え間なく横断した
 (中略)
 私はその女です、宗教に道を委ねている
 石によって、私は殺されず、死ななかつた
 神は、私を多くの苦痛から救いました
 自身の卓越性で、私をこの隅に導いてくれた²⁰⁰

16 章は、この世の王権についての話が主題であり、「مَلِك (molk)」という単語によって表されている。

(16 章)

そなたも良く知っているように、このような王国は
 そなたが維持しようとしても、消滅する
 そなたが王国で圧政を行うなら
 日々、一つのパンを食べる限り
 世界において、全てが妬みであり
 全ては、一握の土や風である

¹⁹⁹ 『神の書』の韻律はハザジュ体 (U — — —/U — — —/U — —)

²⁰⁰ Farīd al-Dīn ‘Attār, *Ilāhī-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh1/sh3> (accessed August 16, 2023).

風と土の王国によって、奢るな
破滅が生命と結びついている²⁰¹

17 章もテーマは王や王国というように 16 章と同様であり、「ملك (molk)」と「ملك (malek)」という言葉で表される。この世やこの世の王権の虚しさ、死、苦しみを表現するために、「خاك (khāk)」が使われる。

(17 章)

ここに王国も、所有者もない時
そなたの救済は、そなたの滅亡である
石は何十万年もその場にいるが
そなたは留まることができない

(中略)

世界の人々を見なさい
土の下に落ちるために、生まれてきた
全ての地面の土は黒い血である
スイヤーヴァシュのように冤罪である
そなたに知性があるならば、明らかに見える
一つ一つの粒から、百のスイヤーヴァシュの血がある²⁰²

階層的クラスタ分析の結果では、6 章、8 章、9 章、10 章、11 章、12 章、14 章、15 章、18 章、19 章、21 章、23 章、24 章のまとまったクラスタが一つあり、それに対して、二〜四つのまとまっている章のクラスタが階段のように隣り合う形になっている。

²⁰¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh15/sh2> (accessed August 16, 2023).

²⁰² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh4> (accessed August 16, 2023).

(2) 愛に関する単語について

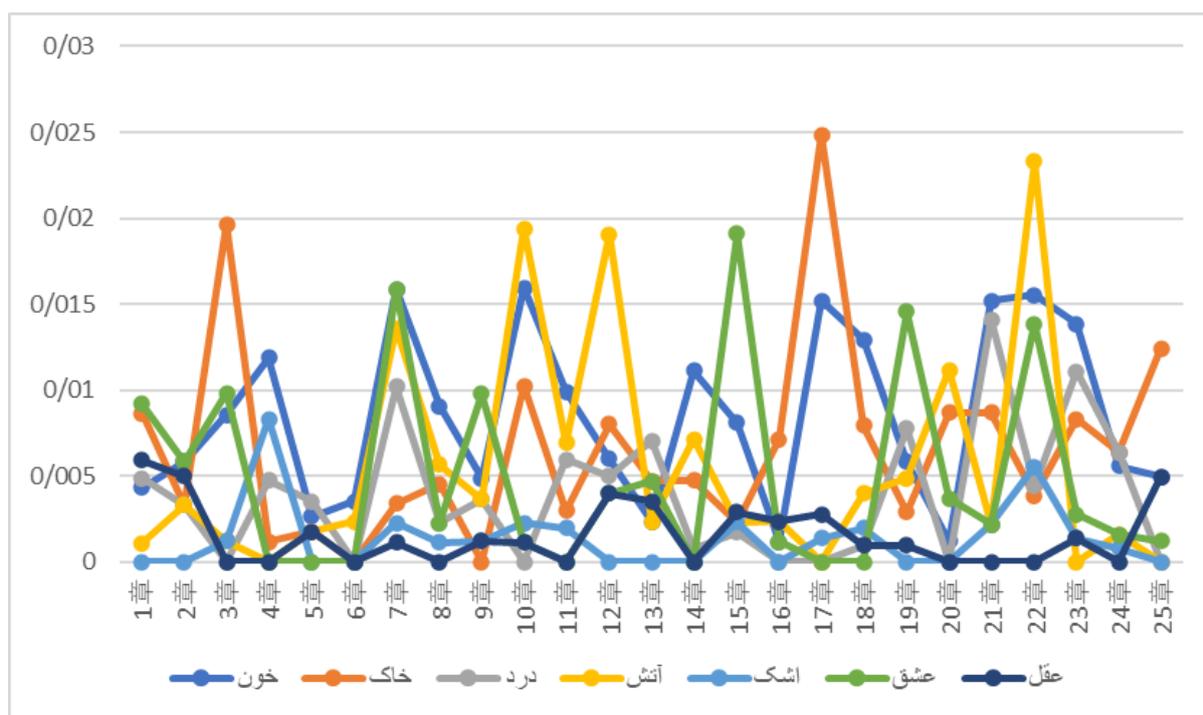


図 4.4 『神の書』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

図 4.4 から 3 章は「خاک (khāk)」の相対頻度が高いことが判明している。10 章は「آتش (ātesh)」と「خون (khūn)」が頻繁に用いられる。12 章は他の単語と比較して「آتش (ātesh)」の相対頻度が圧倒的に高い。15 章は、「عشق (eshq)」が 17 章は、「خاک (khāk)」が多く使用される。22 章は、「آتش (ātesh)」の相対頻度が全章で最も高く「خون (khūn)」と「عشق (eshq)」も頻度が多い。

愛に関する特徴語の使用方法

3 章は愛の障害として立ちほだかるものとして、土が描かれる。また、土を取り除くことに専念するという表現により、愛にのみ集中するという行為を表す。

(3 章)

[雌蟻が] 私に言った、この土の山を
 ここから取り除き、きれいにしてくれるなら
 私は、そなたとの間を別つ大きい石を
 どけ、そなたと一緒になる
 [雄蟻が言った] 私は、この仕事に専念している
 土を運ぶこと以外何も知らない²⁰³

10 章は「آتش (ātesh)」が物理的な火や悲しみを表すものとしても用いられる。また、同時に焼き煉瓦や燃えカスを生じさせる原因として描かれている。さらに、この章では、「خون (khūn)」が「خاک (khāk)」が同時に使われて、悲しみ、苦痛や死が表される。

²⁰³ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebksh2/sh5> (accessed August 16, 2023).

(10章)

最終的に、火がその世間を焼いたが
その白髪の老人 [の家] には何の損害もなかった
人々は彼女に言った、おお、苦痛でもがいている白髪の老女よ
どうしてこんな秘密を知っていたのか教えてくれ
その謙虚な老人はこう答えた
彼（神）は私の家か、私の心のどちらかを焼く
彼は、悲しみによって狂っている心を燃やしたので
結局、家を焼くことはしない²⁰⁴

(10章)

燃えカスは火に対して陽気に答えた
私が真っ黒なのは、火以外の誰かによってなのか？
そなたが私を明るさの中で焼いた
今、私を知らないというのか？
私は、このようにそなたによって悲惨に焼かれたので
慈悲を持って、自身の燃えカスを見守ってくれ
(中略)
そなたもこの悲しみから発火するなら
ここで焼かれた時、向こうでは焼かれない
焼かれたレンガは、地から生まれたものであるが
レンガは火でもある²⁰⁵

(10章)

心よ、この道で死んだら
一瞬で、神と生きるようになる
そなたが足から頭頂まで血で覆われたら
土の中、自身の血で溺れる
(中略)
その時、血と土から、そなたは清浄となる
血を飲み続け、土となる時に
そなたの仕事が涙と燃えるような苦痛以外の何ものでもないなら
彼の黒髪の影が、ある日、そなたに落ちる²⁰⁶

12章は「آتش (ātesh)」がゾロアスター教徒と関わり合い、神の道に反するものとして否定的に扱われつる。また、同じ逸話で、火は汚いものとしても扱われる。一方で、愛の状態
で心が高ぶることや愛する者の光のように肯定的にも表されている。

(12章)

80年間、火を崇拝して
不正と酔いつぶれることを常にしていた
そのゾロアスター教徒の名はシャムウーンとして人々に知られていた
蝋燭（シャムウ）のように、常に火の前に頭を垂れていた
(中略)
そなたが火に利益を見たと思っても

²⁰⁴ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh11> (accessed August 16, 2023).

²⁰⁵ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh12> (accessed August 16, 2023).

²⁰⁶ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh8> (accessed August 16, 2023).

実際は火から煙を見ただけということが分からないのか²⁰⁷

(12章)

彼はその妖精のようなアヤズの顔を見た
浴場の壁全体が彼の [赤い] 顔が [反射することで]、火
で満たされているように [赤くなっていた]

(中略)

王は彼の美しさを頭から足まで見ると
自らの魂を彼の各部分に捧げようと思った
彼の心はフライパンに落ちた魚のようになり
その火によって、その浴場の中に落ちた²⁰⁸

15章は、生命の水に関する問答が行われる章である。一方で、愛についての逸話や助言が多く登場し、「عشق ('eshq)」が多く使用されている。

(15章)

愛と心の話は驚くべきもので
この両者は互いに結びついている
愛と心から来る話は命をかけたもの
そなたは、おそらく絞首台の上で語るだろう。その場は、
そういう所である²⁰⁹

(15章)

もし、愛する者として誠実でなければ
そなたは自身以外の誰をも愛していない
以下のものであったら、恋人への愛は完全である
人生が、直ちに、真珠を散らす如きように流れ
そなたの愛される者によって、そなたの絵画における秘密が語られるな
らば
その瞬間が始まったかのように、そなたが知るようになる
ときに²¹⁰

17章は、前述の王権について論じた章であり、前出の通り王権やこの世の虚しさ、死、苦しみを表現するために、「خاک (khāk)」が使われる。また、血も苦痛や殺しを現すのに「خون (khūn)」が使用される。

(17章)

墓地を見よ、さすれば、そなたは苦痛を見る
世界の女性や男性を、そなたは見る
全ては土と血に取り残され
内部で外から道はない²¹¹

²⁰⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh11/sh15> (accessed August 16, 2023).

²⁰⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh11/sh8> (accessed August 16, 2023).

²⁰⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh14/sh11> (accessed August 16, 2023).

²¹⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh14/sh10> (accessed August 16, 2023).

²¹¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh5> (accessed August 16, 2023).

(17 章)

王がこの状況を知ると、以下のことを伝達させた
乱心したものよ、
私の王国を出るように命じたではないか？逆らうのか？
自らの血を流したいのか？と問うた²¹²

22 章は、作中で最も長い逸話を取り扱った章である。愛するものの感情が「آتش (ātesh) 」
と「خون (khūn) 」で表される。

(22 章)

私は、この火によって時を過ごした
地獄が私から百の炎を欲するほどに
この私の涙で、二つの世界が完成した
審判の日まで、水の中で、泥だらけにした
この血で天の道を閉じていて
天輪が血で回る水車になった
愛おしい人の塵によって
一つの涙で、地上に水を縛り付けた
私の心を燃やす幻想の絵を除いて
私はこの火ですべての絵を焼き尽くす
そなたが、私の生命の血をすっかり戴いた
親愛なる者よ、飲んでください
今、火と涙と血の中で
私はこの世界から死体として去って行きました²¹³

²¹² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh6> (accessed August 16, 2023).

²¹³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh21/sh3> (accessed August 16, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

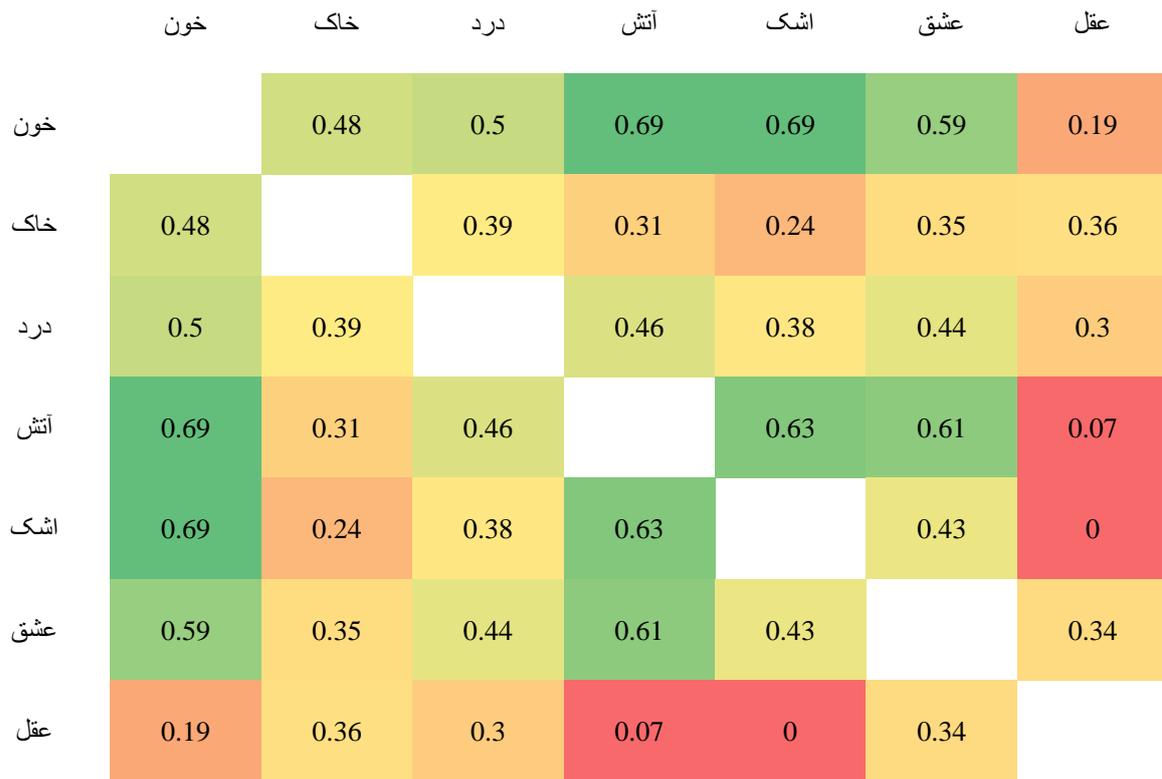
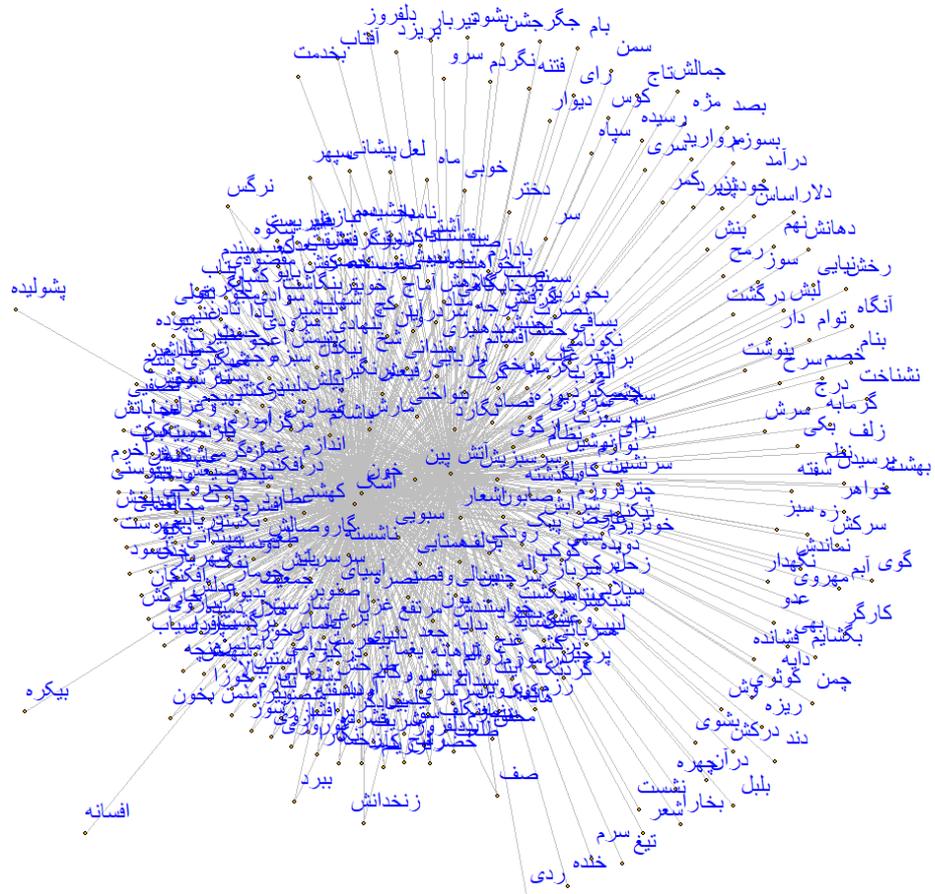


図 4.5 『神秘の書』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」が「عقل ('aql)」以外の愛に関する単語に対して高い重みの値をもっていることから、これらの単語は高い頻度で共起する。特に、「خون (khūn)」は「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」との数値が他の単語に比べて高い。「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」も、互いに重みの値が高く、両単語と「عشق ('eshq)」も高い頻度で共起する。一方、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」は「عقل ('aql)」と共起することがほとんどない。また、「خاک (khāk)」において、重さの値の最大値が0.55ということから「خون (khūn)」と高い頻度で共起していることが判明している。

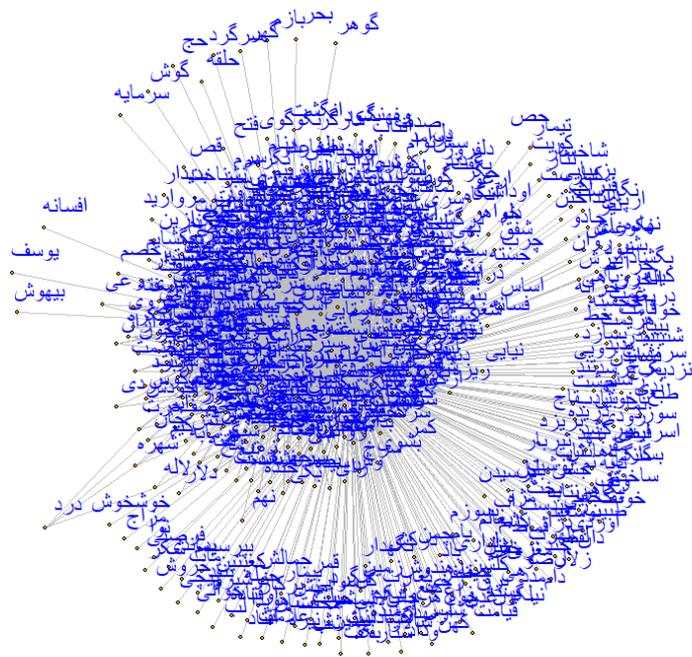
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | بخون | 0.76 |
| خاک | صفای | 0.55 |
| درد | لاله | 0.66 |
| آتش | بنوشت | 0.91 |
| اشک | بیکره | 0.89 |
| عشق | فسانه | 0.84 |
| عقل | بیج | 0.65 |

図 4.6 『神の書』愛に関する各単語と最も共起する単語



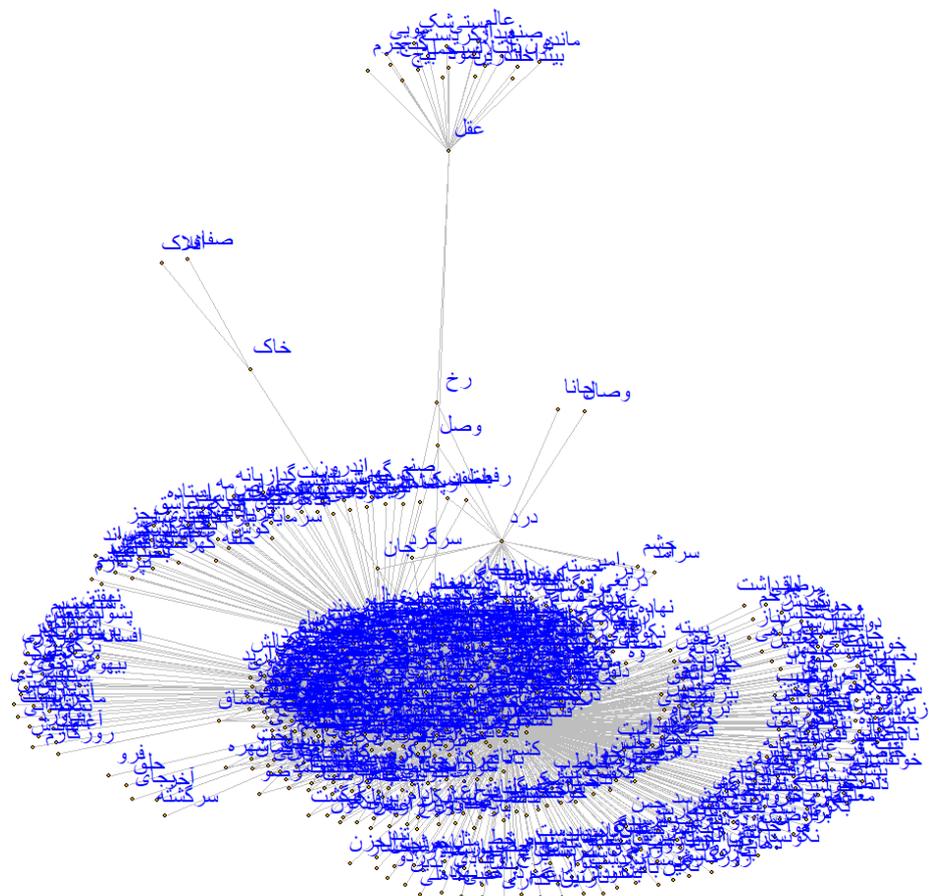
correlation Threshold: 0.7

図 4.8 『神の書』 愛に関する単語の内、「 عشق ('eshq) 」と「 عقل ('aql) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.7以上)



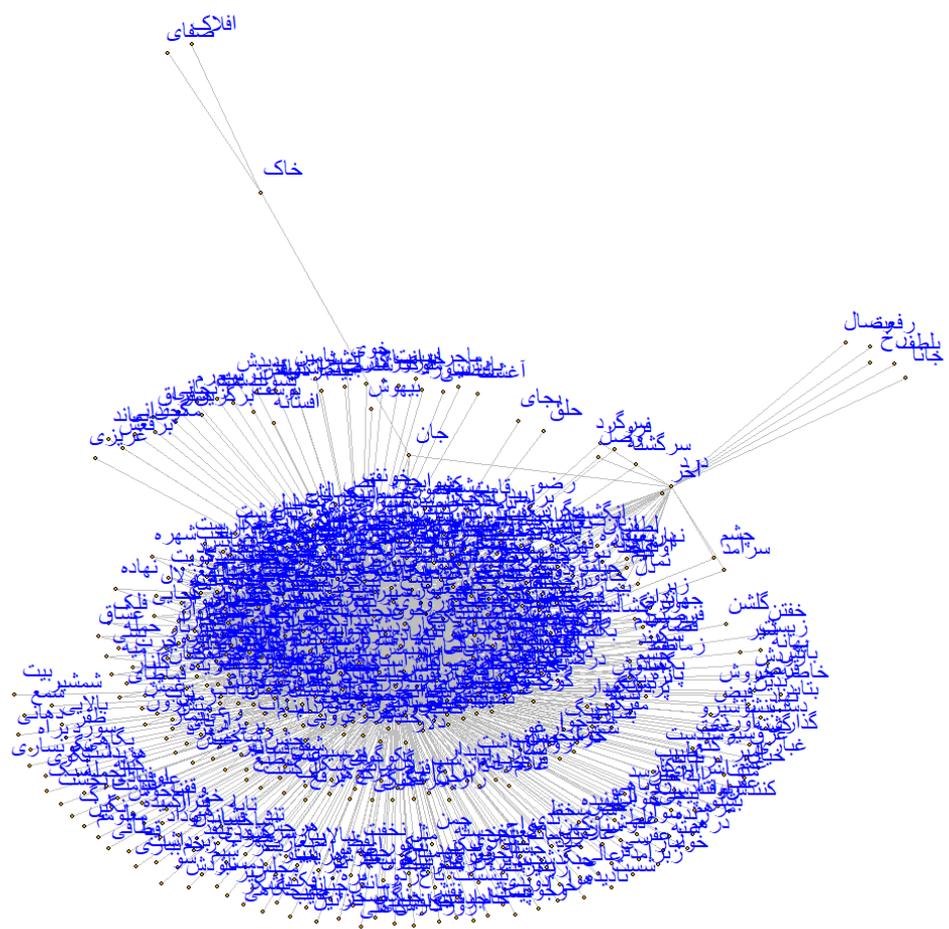
correlation Threshold: 0.6

图 4.9 『神の書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 4.11 『神の書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5以上)



correlation Threshold: 0.5

図 4.12 『神の書』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.5以上)

重みが 0.7 の時、「خون (khūn) 」と「آتش (ātesh) 」と「اشک (ashk) 」の全てが、非常に近い位置で隣接していることから、互いに共起する単語が類似し、共起する頻度も高いことが明らかである。これらの単語と「عشق ('eshq) 」は、「نیایی (niyāyi) 」という単語と共起する。

重み 0.6 の時、「عشق ('eshq) 」、「آتش (ātesh) 」、「اشک (ashk) 」と「درد (dard) 」は「لاله (lāle) 」や「جان (jān) 」と共起する。「لاله (lāle) 」はチューリップを意味し、赤い花は血、愛や痛みに関係する単語である。

重み 0.5 の時、「خاک (khāk) 」が登場して「خون (khūn) 」、「آتش (ātesh) 」、「اشک (ashk) 」と共に「جان (jān) 」と共起する。また、「عقل ('aql) 」と愛に関する他の単語は「رخ (rokh) 」とそれぞれ共起する。

(4) 『神の書』まとめ

共起ネットワークの結果から、「خون (khūn) 」、「آتش (ātesh) 」、「اشک (ashk) 」が同時に登場し、これらの単語の結びつきが特に強いテキストである。

また、これらの単語は、22 章内の最も長い逸話において登場し、佳人が愛の内に死んでしまう表現として共に使われる。この逸話から、これらの単語が『神の書』において、「神への愛」とそれに伴う苦しむと関係する単語であることが明らかである。10 章でも「خون (khūn) 」や「خاک (khāk) 」や「آتش (ātesh) 」が悲しみ、苦痛や死を表すものとして使用されている。

このテキストの他の主題はこの世の権力についての虚しさであり、第 16 章と第 17 章において、「خاک (khāk) 」を使って表される。また、「زن (zan) 」が特徴語として登場し、女性を主人公とした長い逸話が 2 章にあるのもこのテキストの特徴である。

2-3. 『災厄の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

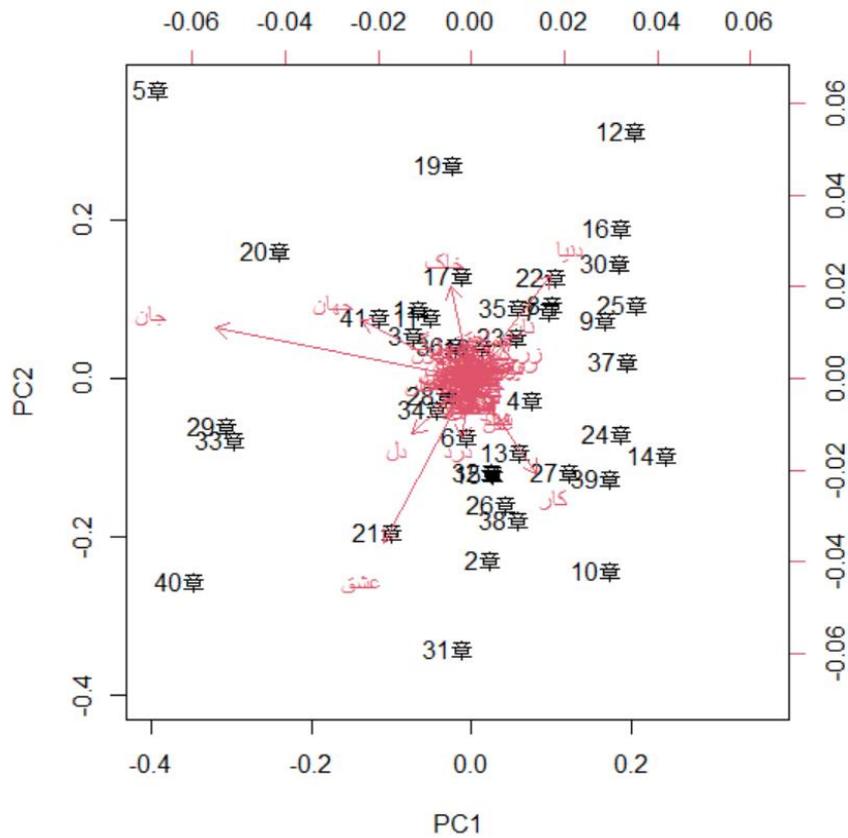


図 5.1 『災厄の書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.10941、PC2=0.08298)

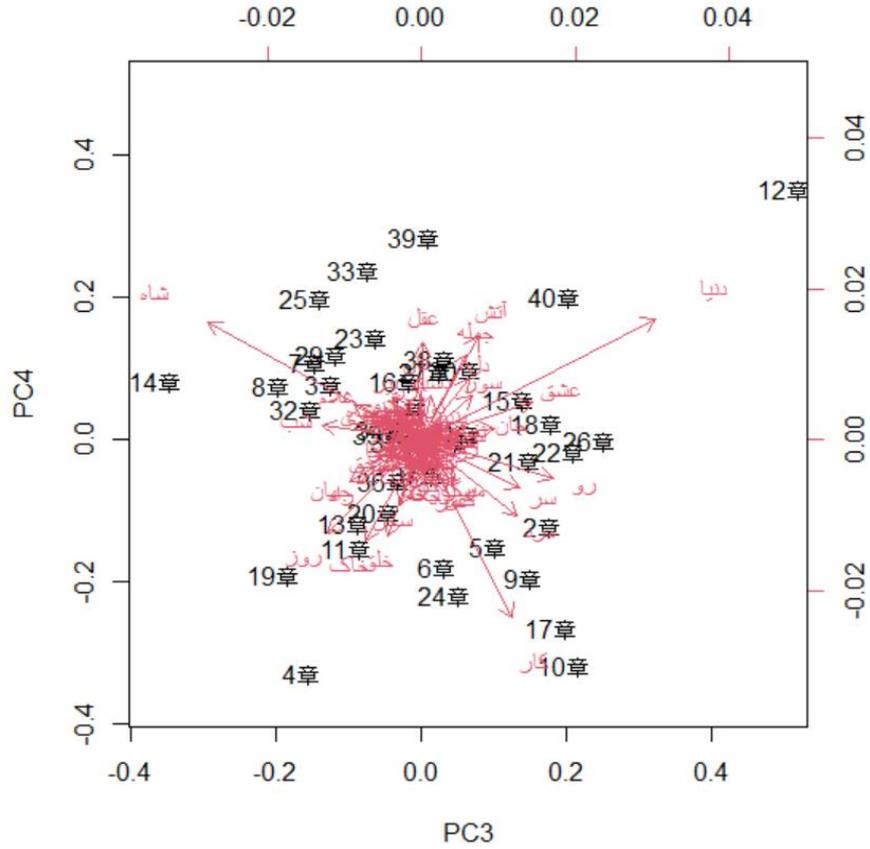


図 5.2 『災厄の書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC3=0.07951、PC4=0.06182)

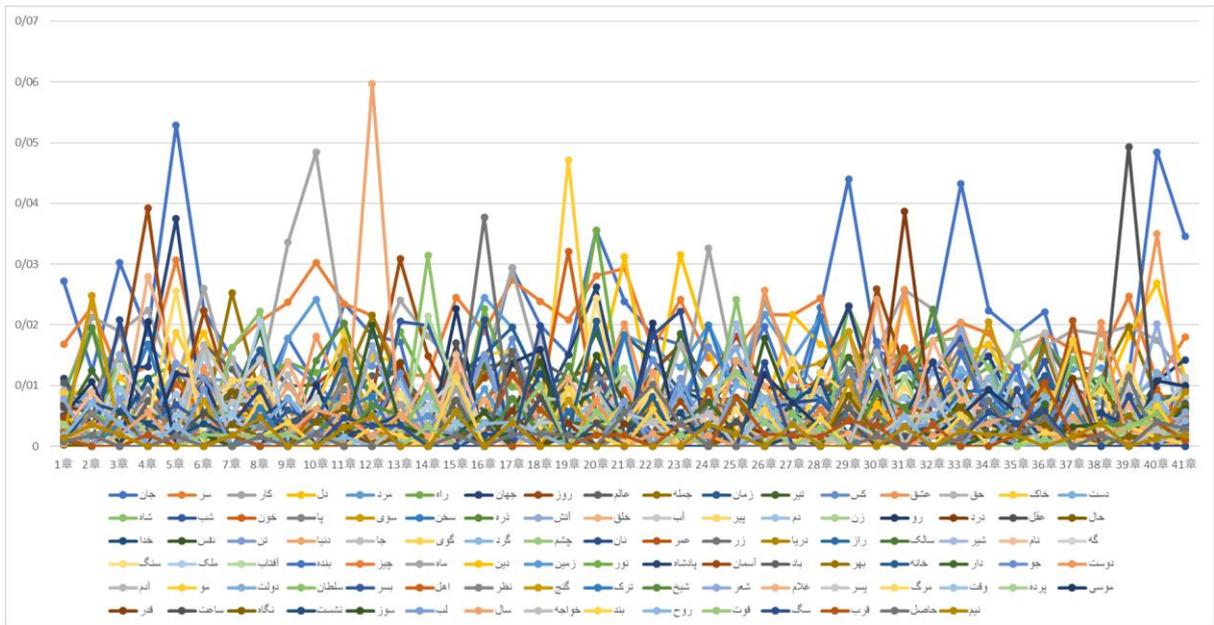


図 5.3 『災厄の書』最頻出名詞 100 の相対頻度

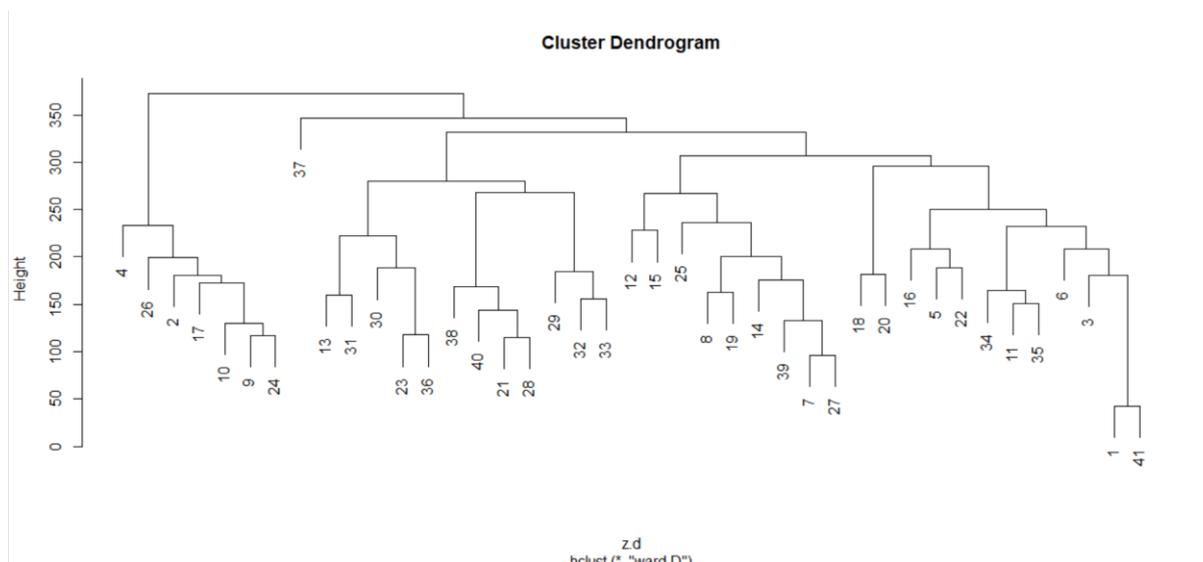


図 5.4 『災厄の書』最頻出名詞 100 の階層的クラスタ分析

主成分分析の図は章の位置が「جان (jān)」と「عشق (‘eshq)」の相対頻度によって左右されることを示している。5 章、20 章、29 章、33 章、40 章は「جان (jān)」の相対頻度が高く図の左に偏っている。反対に「جان (jān)」が出現しない 12 章や 14 章が主成分分析の図において反対側に位置している。「عشق (‘eshq)」の相対頻度が相対的に多い 40 章は左下、少ない 5 章は左上に位置している。そして、5 章、20 章、29 章、33 章、40 章では、章が進み毎に「عشق (‘eshq)」の相対頻度の値が高くなる。

特徴語の使用方法

5 章は、神秘主義道を突き進む旅人が死の天使であるアズラーイールのもとにたどり着いた場面であり、この世の虚しさや死についてひたすら述べられる。一方、この章では愛については語られない。²¹⁴

(5 章)

アズラーイールはこの返答を聞いた時
 そなたは真実を語った [と言った]。彼 (旅人) はアズラーイールの顔を見た
 アズラーイールは言った。「そなたが私の痛みを知るなら
 なぜ、私からこのようなことを求めるのか
 (中略)
 私が体から取り出した魂のために
 私自身の魂の血を流している
 (中略)
 誰かが死に、土の下に行ったら
 誰もが彼に対して安らぎ、解放されたと言った
 彼らは死を黄金の鍋蓋とみなしている
 そなたの死を体の安らぎとみなしている²¹⁵

²¹⁴ 『災厄の書』の韻律はラマル体 (— U — — / — U — — / — U —)

²¹⁵ Farīd al-Dīn ‘Attār, *Muṣibat-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbksh4/sh1> (accessed August 15, 2023).

20章は神秘主義道を突き進む旅人が宝の山の前に立つ場面であり、宝の山がただの石であり価値がないことが語られる。

(20章)

探求者は宝の山の前に立ち
言った、おお、宝石を育む者よ
腰帯の宝石の球で飾られたものよ
そなたは金と鉄の両方の剣を持っている
(中略)
一つの石である私から、そなたに何が必要か？
石による何ものによっても、そなたに明らかにならない²¹⁶

29章は神秘主義道を突き進む旅人が貧困者と話す場面であり、恋に落ちる逸話において愛の状態が語られる。

(29章)

探究者は顔の色の革を血で染めた
彼は貧困者に会いに行った
(中略)
私たちは驚愕の海で溺れ
足から頭まで、後悔の泉に来た
時に欲求、時に欲望の中に留まり
媚と必要性の悲しみの中で死ぬ²¹⁷

(29章)

愛する人は不耐症である方が良い
心は稲妻のようで、目は雲のよう
そしてもし、愛の中で一時的に耐え忍ぶならば
彼は愛する人ではなく、愛される者から遠くなる²¹⁸

33章は神秘主義道を突き進む旅人が、ムーサー（モーセ）の前で話す場面であり、自身を捨てて愛のために生きることが説明される。

(33章)

ムーサーは彼に言った、「燃えた者よ
そなたは一つの燃えている火を見てきた
(中略)
まず自身の存在に飽き飽きしろ
そして、非存在への愛のため行為しろ²¹⁹

²¹⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh19/sh1> (accessed August 15, 2023).

²¹⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh28/sh1> (accessed August 15, 2023).

²¹⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh28/sh4> (accessed August 15, 2023).

²¹⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh32/sh1> (accessed August 15, 2023).

40章は「神の愛」によって心が奪われた旅人の状態を示している個所であり、「عشق (‘eshq)」と「دل (del)」という単語によって、心にある愛という感情が貴重であることを表している。

(40章)

老師は彼に言った、心は愛の海であり
その波は愛の熱狂の宝石で満ちている
愛の苦痛はあらゆる心の薬となる
愛なしにはどんな困難も解決されない
愛を心の中に見よ、心を隠れた魂の中に見よ
何百もの世界が、何百もの世界の中の何百もの世界の中に
ある²²⁰

階層的クラスター分析の結果、章は大きく以下の三つのクラスターと 37章に分類できる。

クラスター1: 2章、4章、9章、10章、17章、24章、26章

クラスター2: 13章、21章、23章、28章、29章、30章、31章、32章、33章、36章、38章、40章

クラスター3: 1章、3章、5章、6章、7章、8章、11章、12章、14章、15章、16章、18章、19章、20章、22章、25章、27章、34章、35章、39章、41章

クラスター3と2が隣り合っていて、この二つのクラスターを合わせたものと37章が隣り合っていて、クラスター3と2と37章を合わせたものが、クラスター1と隣あっている。

²²⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh39/sh1> (accessed August 15, 2023).

(2) 愛に関する単語について

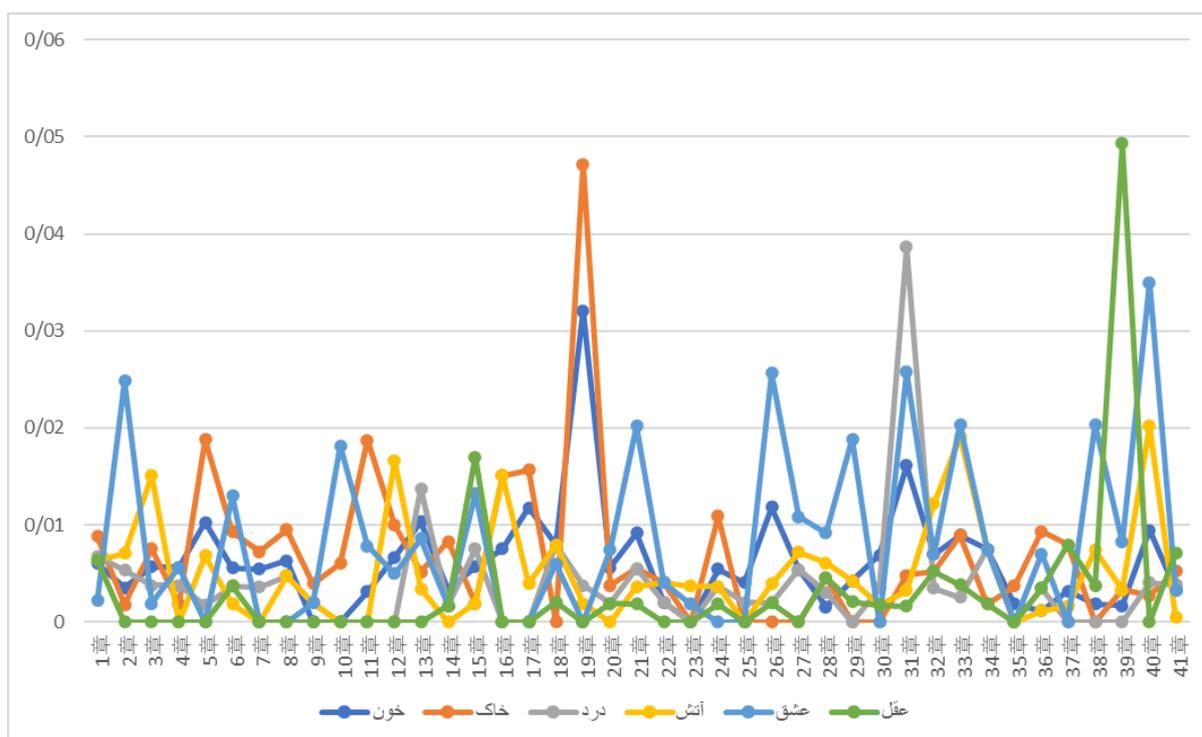


図 5.5 『災厄の書』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

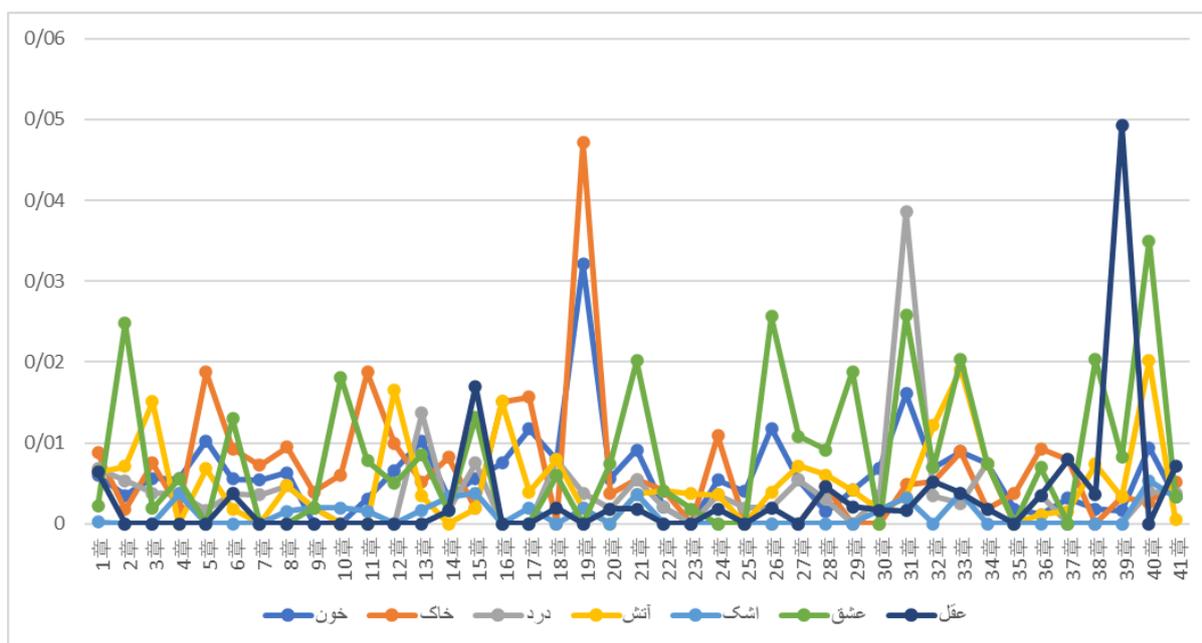


図 5.6 『災厄の書』愛に関する単語の相対頻度

19 章は「خاک (khāk)」の相対頻度が高く、「خون (khūn)」が続く。31 章は「درد (dard)」の相対頻度が高く、「عشق (‘eshq)」が続く。39 章は「عقل (‘aql)」の相対頻度が圧倒的に高く、40 章は前述のように「عشق (‘eshq)」と「دل (del)」が心にある愛という感情の貴重さを表し、「عشق (‘eshq)」と「دل (del)」という単語が頻繁に使われる。

愛に関する特徴語の使用法

19 章は、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」が死んでいる状態と、愛の状態であること

も示している。

(19章)

その土がないところには、埃はない
その清浄さがないところには、土はない
その魂をもたないところには、清浄さがない
恋人がいないときは、魂がない
以下を知れ、そなたが歩みつづけるなら
何も知らず、血の中に居続ける
(中略)
一腕の血から、清浄な土はない
墓地であるから、頭から足まで土である²²¹

31章はノアについて述べている章で、愛の痛みが「ندى」によって表されている。

(31章)

老師は彼に言った、ノアは靈魂の安息
神が彼の名を哀悼 (nouḥe) からノア (nūḥ) と名付けた
災厄の中、働く男であった
昼夜、その労苦が彼にあった
このそなたの仕事の苦しみが現れない限り
この痛みの物語は聞くことができない
息子よ、そなたが男になりたいなら
息子よ、痛み以外に治療法はない²²²

39章は「عقل ('aql)」が否定的なニュアンスではなくて、超えられていくものでありつつ、比較的ニュートラルな意味で使用されている。「عقل ('aql)」を否定的に使用する場面の多いアッタルのテキストにおいては珍しい箇所である。

(39章)

理性は真実の認識において完璧であるが
心や魂はそれよりも更に完璧である
もし、そなたに完璧な愛があるはずならば
心によってしか、このヴェールはそなたに開かれない
(中略)
老師は彼に言った、知性は神の通訳者であり
天と地における公正なカーディーである
彼の判決は全存在に浸透しており
彼の判決は難事の鍵である²²³

²²¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh18/sh5> (accessed August 15, 2023).

²²² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh30/sh1> (accessed August 15, 2023).

²²³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh38/sh1> (accessed August 15, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

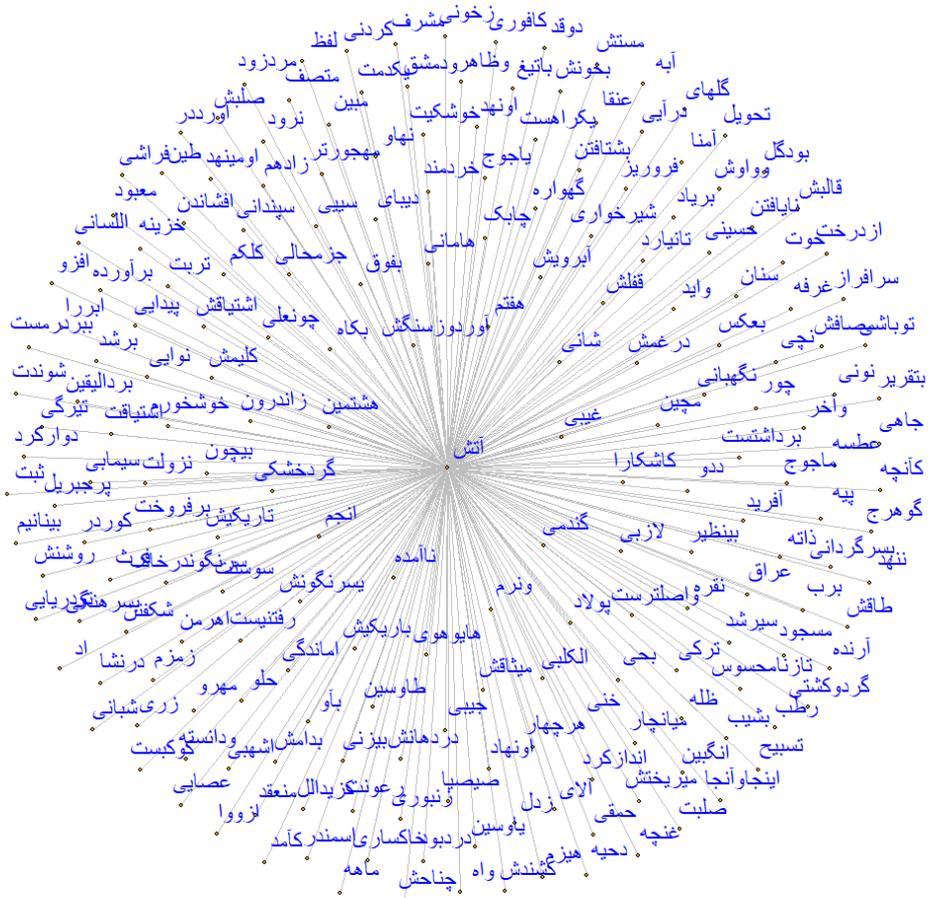


図 5.7 『災厄の書』愛に関する単語同士の共起関係

共に登場する単語としては「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は互いに高い重みの値を出している。また、「خاک (khāk) 」が「آتش (ātesh) 」に対して相対的に高い値を出している。「اشک (ashk) 」と「عشق (‘eshq) 」も重みの数値は低くない。反対に他の単語同士は低い値を出している。

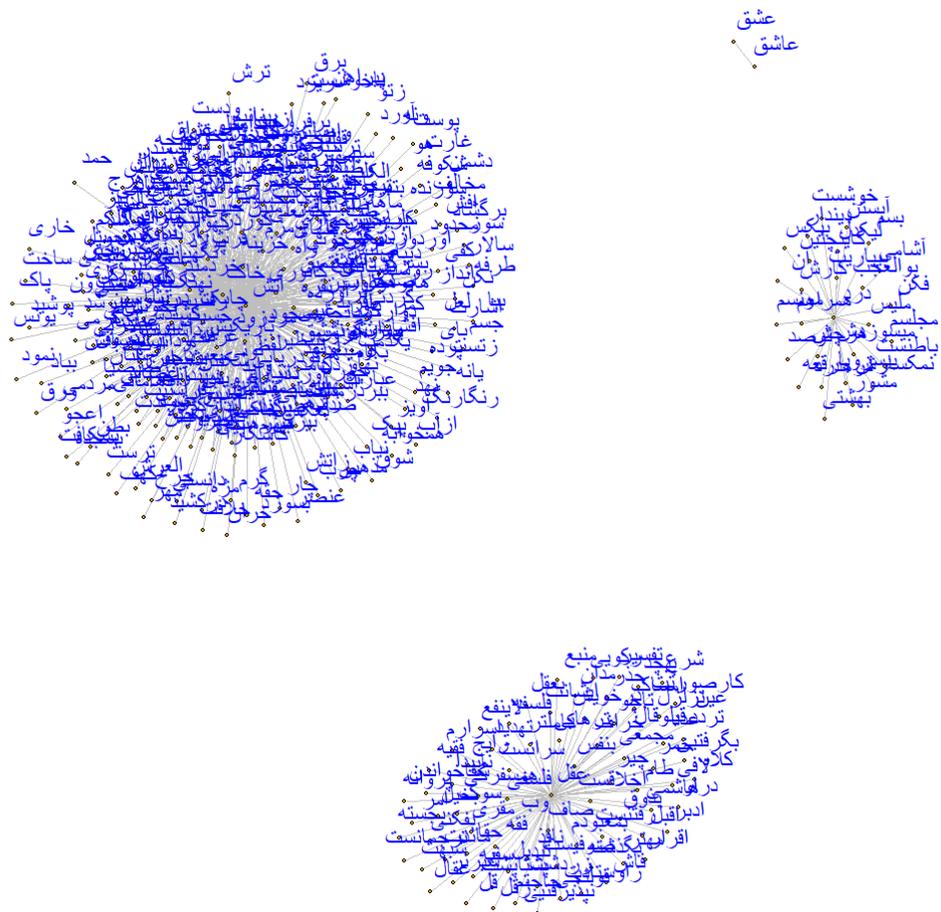
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | معجون | 0.47 |
| خاک | پاک | 0.59 |
| درد | آشامی | 0.7 |
| آتش | آبرویش | 0.71 |
| اشک | تلخ | 0.5 |
| عشق | عاشق | 0.51 |
| عقل | فلسفی | 0.61 |

図 5.8 『災厄の書』愛に関する各単語と最も共起する単語



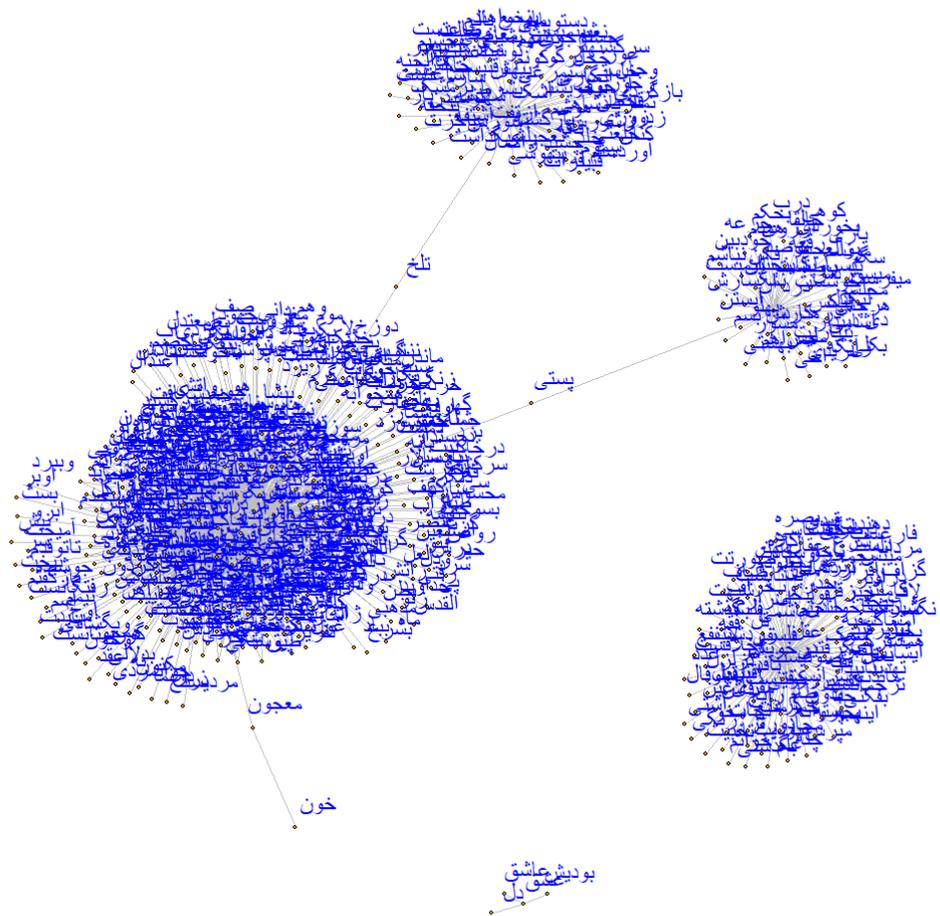
correlation Threshold: 0.7

图 5.9 『災厄の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.7以上)



correlation Threshold: 0.5

図 5.11 『災厄の書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.4

图 5.12 『災厄の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4以上)

重みが 0.7 の時、愛に関する単語は「آتش (ātesh) 」のみ登場する。

重みが 0.6 の時、「درد (dard) 」と「عقل ('aql) 」が登場する。

重みが 0.5 の時、「خاک (khāk) 」が「آتش (ātesh) 」の近くに位置する。また、「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」は他の愛に関する単語と共起する単語はなく、「خاک (khāk) 」、 「آتش (ātesh) 」は共起する単語が同じである。

0.4 の重みの時、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」において「معجون (ma'jūn) 」が、「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」において「تلخ (talkh) 」が、「درد (dard) 」と「خاک (khāk) 」において「پستی (pastī) 」が共起する。

(4) 『災厄の書』まとめ

『神秘の書』同様に「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」の共起する重みの値が高い。すなわち、頻繁にこれらの単語が共起することが明白である。「خاک (khāk) 」は四元素の土としても扱われるが、「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」が共起するとき、「معجون (ma'jūn) 」と共起し、愛の状態を示すことがある。さらに、「درد (dard) 」と「عشق ('eshq) 」はノアのエピソードにおいて結びつくことから、「苦痛」と「神への愛」はこのテキストにおいても密接な関係を持つ。また、「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」が同時に登場する 19 章は、『神秘の書』22 章同様「عشق ('eshq) 」の相対頻度が比較的少なく、「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」が「عشق ('eshq) 」の代わりに「神への愛」の表現方法として使われている。

主成分分析の結果から、「جان (jān) 」が使用される箇所では、物語が進み毎に「عشق ('eshq) 」の相対頻度が高まる傾向にあることが明らかになっている。さらに、他のテキストと異なる特徴として、「عقل ('aql) 」という言葉が『神秘の書』のように否定的ではなく、ニュートラルな単語として頻繁に用いられている。

2-4. 『鳥の言葉』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

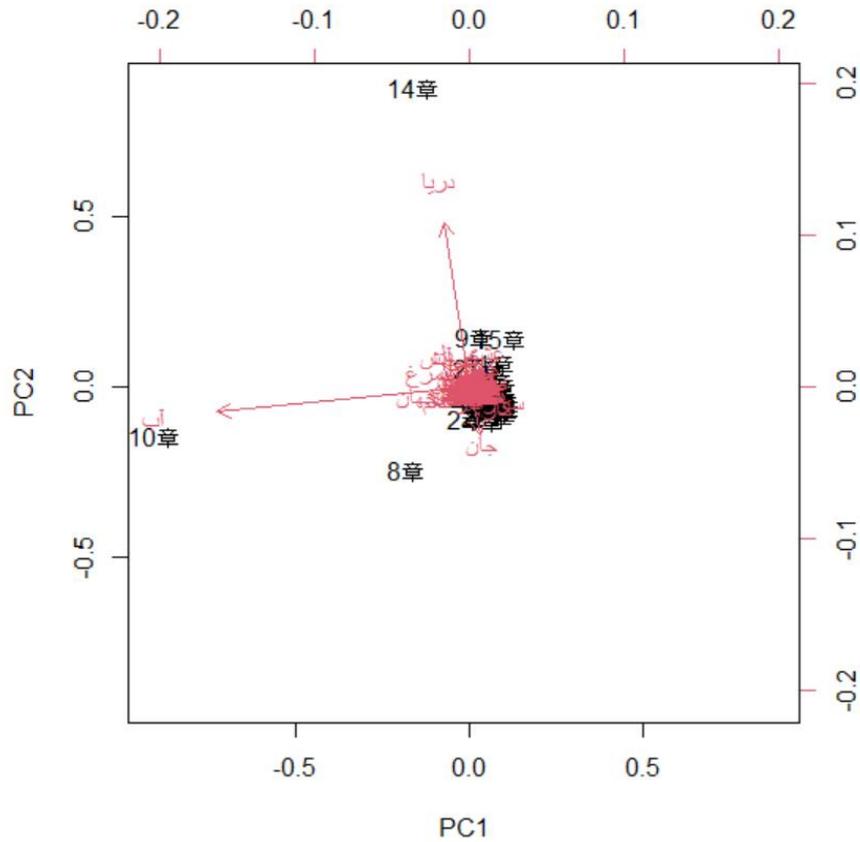


図 6.1 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.25347、PC2=0.12689)

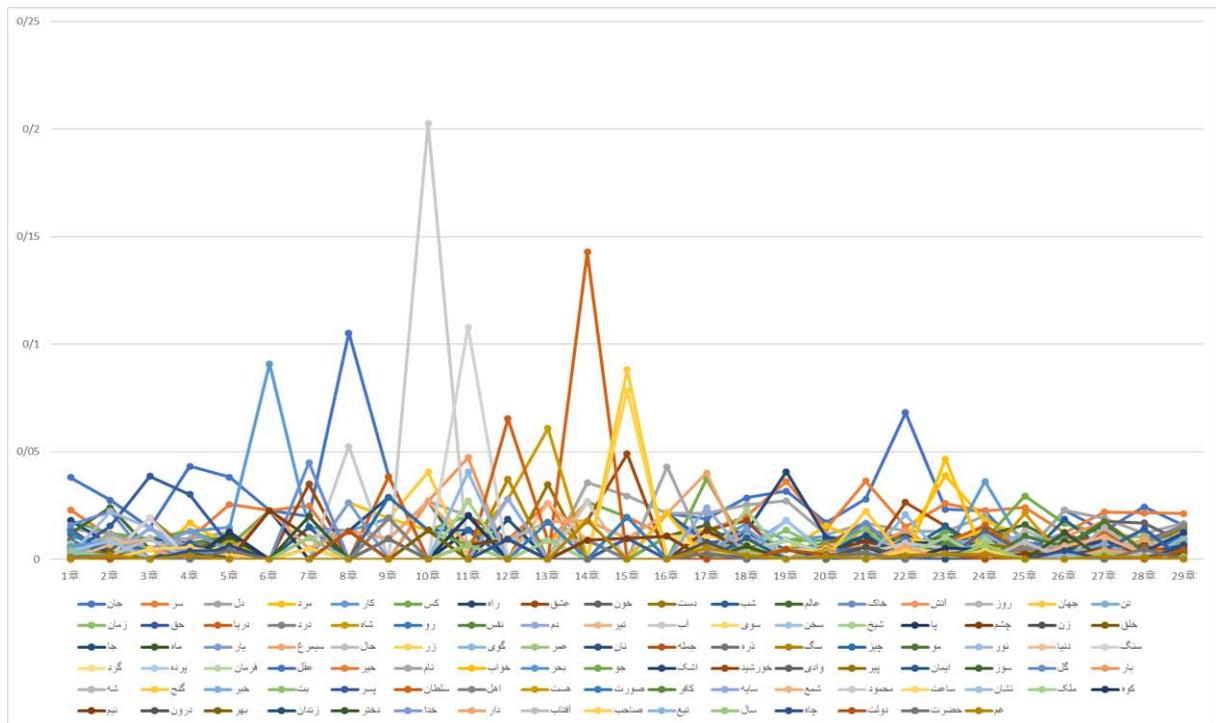


図 6.2 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の相対頻度

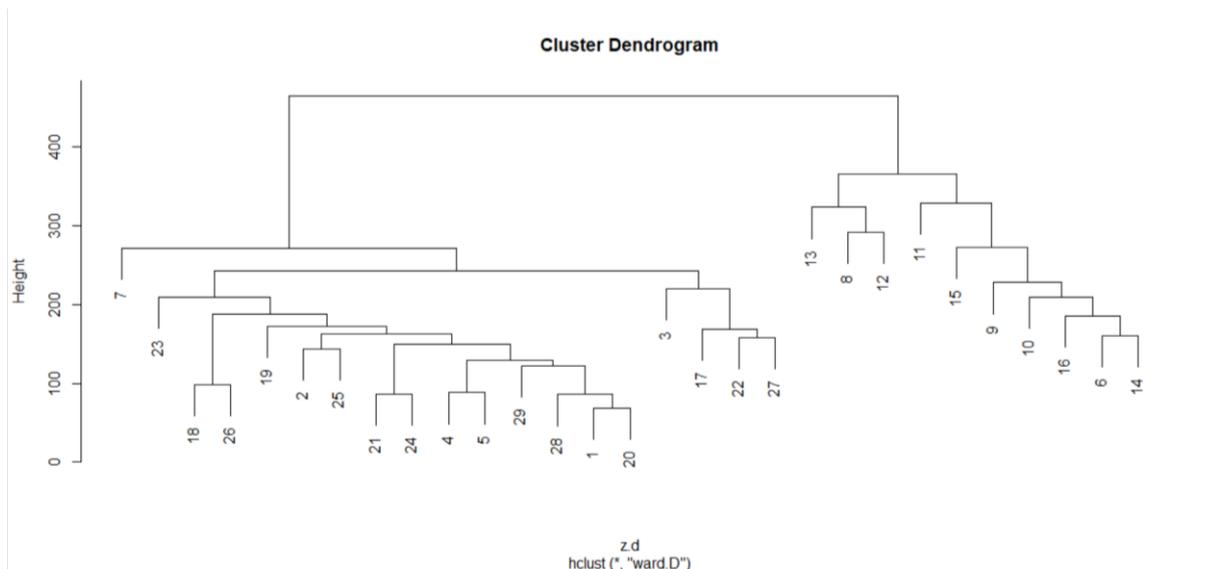


図 6.3 『鳥の言葉』最頻出名詞 100 の階層的クラスタ分析

主成分分析の結果、10 章と 14 章は、特徴において他の章と異なる。10 章は「آب (āb)」が、14 章は「دریا (daryā)」という単語が多く使用される。

特徴語の使用方法

『鳥の言葉』には二つの対話が登場し、一つ目の対話において、別々の対象を愛する鳥が登場する。そして、それぞれの鳥が愛する対象について語った後、鳥たちの導師ヤツガシラによって、その対象が否定される。他の章でもそれぞれの愛する対象が語られているにも関わらず、「آب (āb)」と「دریا (daryā)」のみが特徴において他の章から外れていることは、『鳥の言葉』において、水や海が比喩を用いずストレートに表現されていることを表す。

10 章において登場するアヒルは、愛する対象が「آب (āb)」、すなわち水である。そして、この章では、アヒルが水の清い性質を強調した後、ヤツガシラによって水が否定的に扱われる²²⁴。

(10 章)

全ての存在は、常に水によって生きている
 このような者たちが、水から手を洗う（関係を清算する）
 ことはできない
 私はどこでこの谷を渡る道を知らうか？
 私はスィームルグと飛ぶことができないからだ
 水の頂が全てである者が
 どうやってスィームルグから満足を得ることができるのか？
 ヤツガシラは彼に言った、水で楽しんでいるものよ
 そなたの魂の周りの水は火のようになった
 水の中で、そなたは楽しく眠った
 水の一滴が来て、そなたの名誉を連れ去った²²⁵

²²⁴ 『鳥の言葉』の韻律はラマル体 (— U — — / — U — — / — U —)

²²⁵ Farīd al-Dīn ‘Attār, *Manteq al-Ṭayr*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/bat/sh1> (accessed August 15, 2023).

14章も大海を表す、「دریا (daryā)」がヤツガシラによって10章の「آب (āb)」と同様に否定的に扱われる。

(14章)

私にとって、海のアだけで十分だから
私の頭の中には、このような情熱で十分
今、私は海のア以外何も望んでいない
私はスィームルグのアに耐えることができない、お許し
を！
水の一アが本質である者が
どうやって彼と結びつけるのか？
ヤツガシラが言った、おお、海について知らない者よ
海はワニと生物でいっぱい
時に、その水は苦く、時に、しょっぱい
時に、それは静かで、時に、荒れ狂っている
それは変化し、永続しない
時に消え、時に再び現れる²²⁶

階層的クラスタ分析の結果では、まとまったクラスタを二つに分類できる。

クラスタ1: 1章、2章、3章、4章、5章、7章、17章、18章、19章、20章、21章、22章、23章、24章、25章、26章、27章、28章、29章

クラスタ2: 6章、8章、9章、10章、11章、12章、13章、14章、15章、16章
すなわち、トップ100語の使い方として二つのパターンが示されている。

²²⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/bootimar/sh1> (accessed August 15, 2023).

(2) 愛に関する単語について

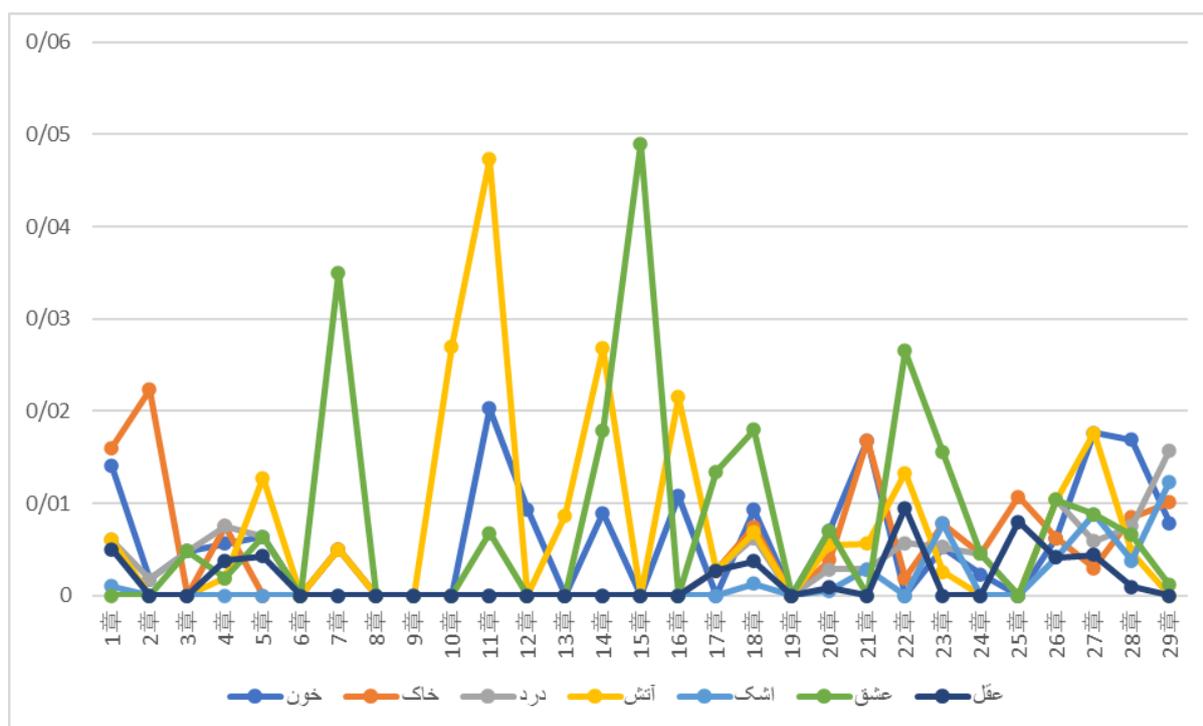


図 6.4 『鳥の言葉』 愛に関する単語の相対頻度 (頻度 100 位以内)

2 章は「خاک (khāk)」、7 章は「عشق (‘eshq)」の相対頻度が高い。11 章では「آتش (ātesh)」の相対頻度が高く、「خون (khūn)」が続く。14 章は前述の通り「دریا (daryā)」が特徴語の章であり、この箇所では「آتش (ātesh)」が愛に関する単語として一番使用される。15 章は「عشق (‘eshq)」のみ愛に関する単語として用いられない。

22 章は「عشق (‘eshq)」という単語の頻度が高く、それに「آتش (ātesh)」が続く。さらに、「عقل (‘aql)」が他の章と比べて多く用いられる。

愛に関する特徴語の使用方法

2 章はムハンマドへの賞賛に関わる章であり、「خاک (khāk)」が預言者に対する謙遜や、人の起源として使用されている。

(2 章)

誰の手もそなたの鞍の革帯に届かず
 それ故、私たちはそなたの土の土である
 そなたの土は、そなたの清浄な友となり
 世界の人々もそなたの土の土となった
 土でないものは、そなたの友ではない
 彼は、そなたと親しい者たちの敵である²²⁷

7 章はサヨナキドリが愛を語る場面である。ヤツガシラはサヨナキドリの薔薇への愛を外形へ執着した愛であるとして否定する。一方、「عشق (‘eshq)」を使用するサヨナキドリの愛の描写はヤツガシラが行う神秘主義の愛の状態と類似する。

(7 章)

²²⁷ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/naat/sh2> (accessed August 15, 2023).

恋に狂ったサヨナキドリが、酔っ払いながら入ってきた
愛の完全さ故、存在も非存在もなかった
彼は何千もの鳴き声に意味を持っていた
それぞれの意味の下に、世界の秘密を持っていた
(中略)
愛が私の魂を圧迫した時
大海のように私の魂は興奮した
私の興奮を見るものは、気を失い
素面でも、酔ってしまう²²⁸

11章では、宝石「گوهر (gouhar)」を愛しているヤマウズラが登場する。この章では、宝
石=石として扱われ、石は「سنگ (sang)」という単語で否定的に使われる。

(11章)
宝石の本質は何か？色を付けられた石である
そなたは石への熱情で、このように心が鉄のままである
色がなければ、それは一つの石だ
色の中にあるものは、石なし（価値なし）である
香りがある者は、色を求めない
なぜなら、[真の] 宝石を求める者は、一つの石を求めな
いから²²⁹

一方で、ヤマウズラが宝石への愛を語る時、「آتش (ātesh)」と「خون (khūn)」という
愛に関する単語が同時にかつ肯定的に使用される。ここで、「آتش (ātesh)」は心の感情が
高ぶったことを表す。そして、「خون (khūn)」は小石を砕く（小石を血にする）という表
現によって、殺しを表す単語として使用される。

(11章)
宝石への愛が私の心に火を付けた
この良い火が私の成果として十分だった
この火の暑さが現れるとき
私の内部で小石を血とする
(中略)
心は、百の悲哀を伴った困難で疲れている
なぜなら、私の宝石への愛は山に縛られているから
宝石以外のすべてのものを親しくする者は
その物の所有は過ぎ去ってゆく
宝石の王国は永遠に維持される
その魂は常に山と一緒にある²³⁰

14章は前述の通り「دریا (daryā)」に関する章であり、「آتش (ātesh)」が愛の苦痛や火
の表現として用いられる。

²²⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/bolbol/sh1> (accessed August 15, 2023).

²²⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/kabk/sh1> (accessed August 15, 2023).

²³⁰ *Ibid.*

(14 章)

そなたは、なぜ喪服を纏っているのか？
火もないのに、なぜ湧き立っているのか？
(中略)
私は唇が乾いて、茫然としている
愛の火のため、私の水は湧き立っている²³¹

15 章は財宝「گنج (ganj)」という単語が否定的かつ頻繁に用いられる

(15 章)

ヤツガシラは彼に言った、「財宝への愛に酔っているものよ、
そなたの手に財宝があるとしましょう
その宝物の上で、自分が死ぬことを思え
何も得ず人生が過ぎ去ることを思え
宝物と金への愛は不信仰から来る
金を偶像として崇拝する者はアーザル²³²である²³³

22 章は、神秘主義の途中にある愛の谷の描写であり、「عشق ('eshq)」を説明するのに「آتش (ātesh)」が用いられる。すなわち、愛の状態が、火で燃えている状態で表されている。一方、「عقل ('aql)」は愛が来た時、訳に立たないものとして否定的に表される。

(22 章)

この後、愛の谷が現れる
そこに辿り着いた者は、火に溺れる
この谷で、人は火だけ伴え
そして、火でない者は、その生が楽しくあつてはならない
(中略)
ここでの愛は火で、理性は煙
愛が来ると、理性はすぐに逃げる
理性は愛の熱狂の中、師ではない
愛は理性の行為では生まれぬ²³⁴

²³¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/bootimar/sh2> (accessed August 15, 2023).

²³² アブラハムの父で偶像崇拝者

²³³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/koof/sh1> (accessed August 15, 2023).

²³⁴ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/vadi-eshgh/sh1> (accessed August 15, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

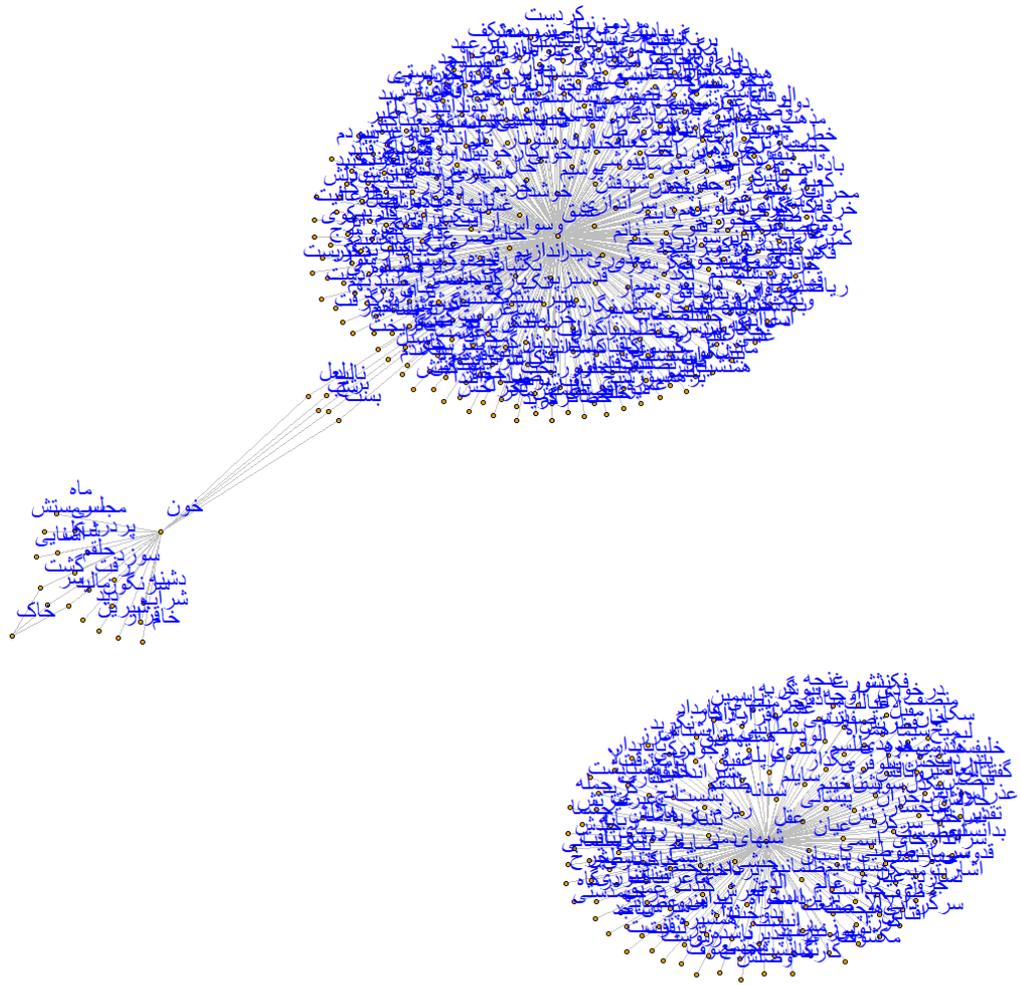


図 6.5 『鳥の言葉』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は互いに共起する頻度が高い。「خاک (khāk)」と共起する単語において「خون (khūn)」の重みが最も高い。また、「خون (khūn)」と「درد (dard)」も共起する頻度が高い。さらに、「خاک (khāk)」と「عقل (‘aql)」、「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」と「عشق (‘eshq)」も比較的共起しやすい単語同士である。

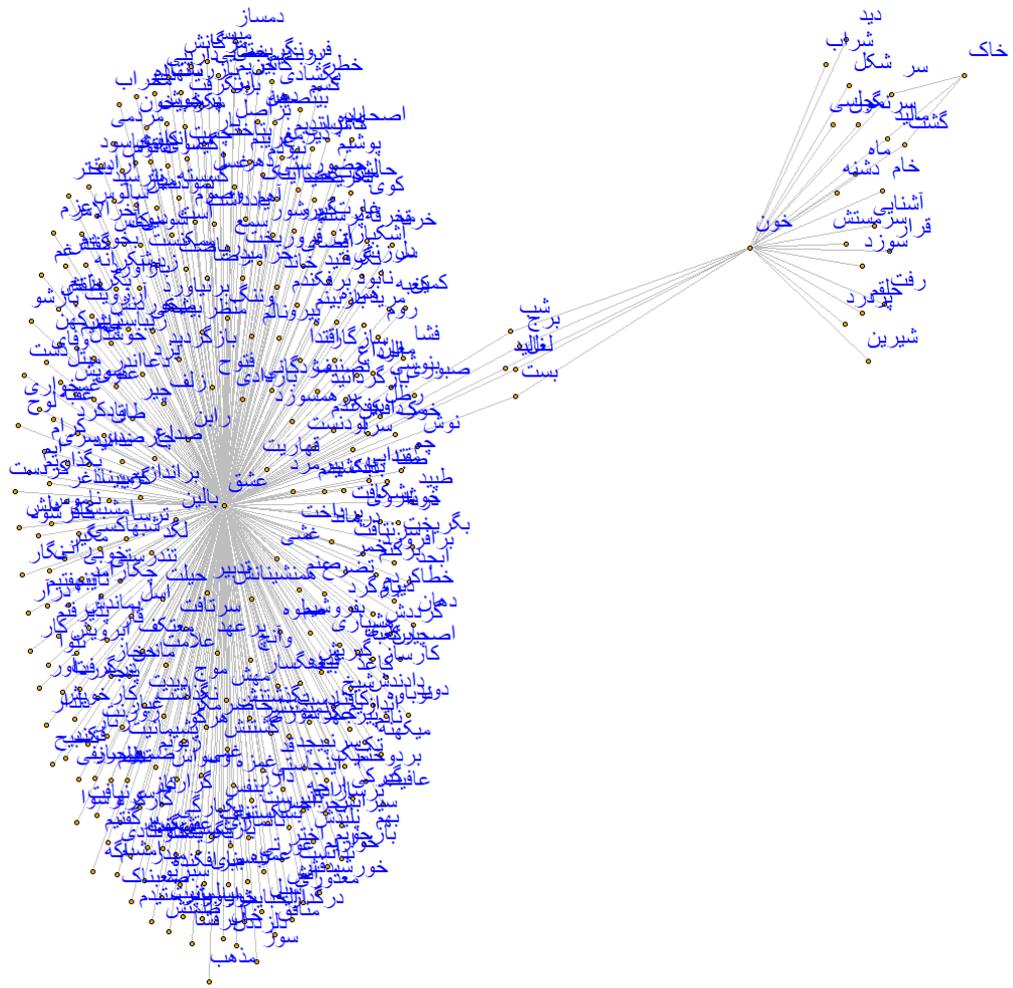
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | سوزد | 0.8 |
| خاک | خون | 0.68 |
| درد | سوزد | 0.68 |
| آتش | فشا | 0.66 |
| اشک | بگریستی | 0.67 |
| عشق | زلف | 0.83 |
| عقل | عیان | 0.81 |

図 6.6 『鳥の言葉』愛に関する各単語と最も共起する単語



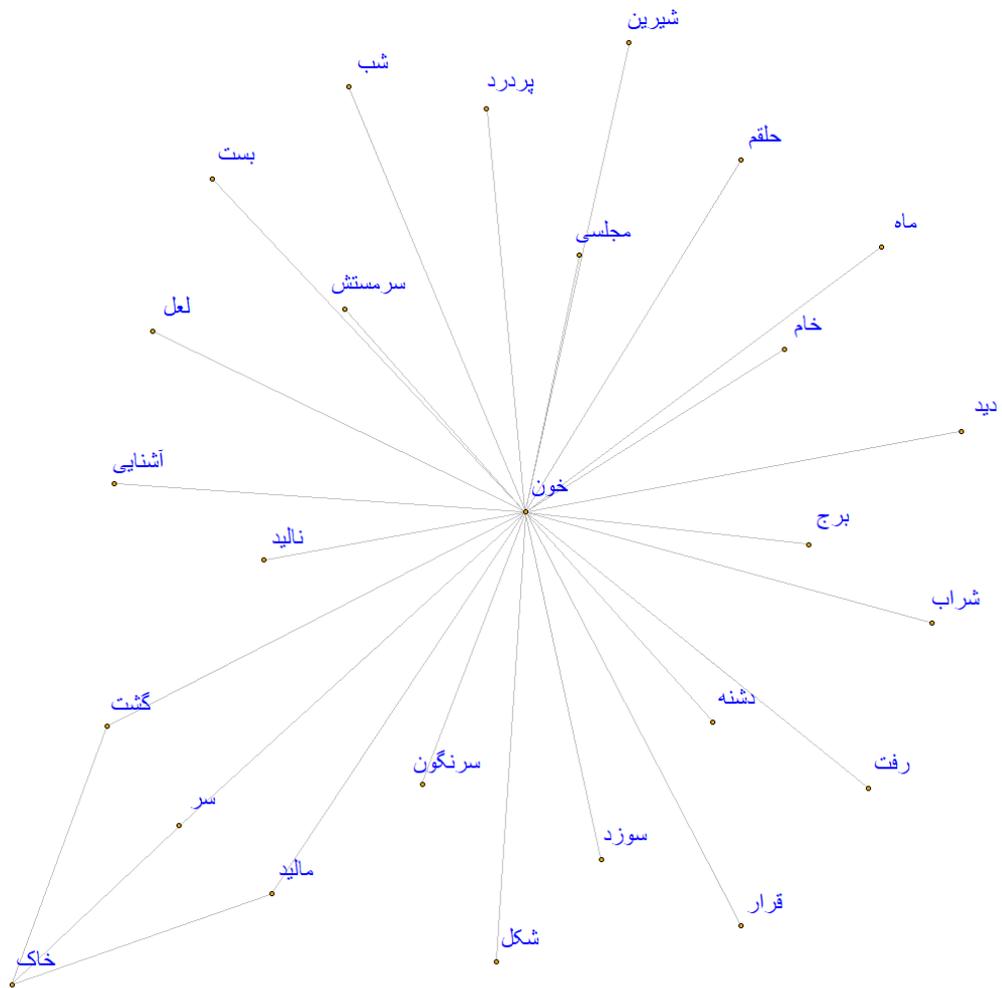
correlation Threshold: 0.7

図 6.7 『鳥の言葉』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.7以上)



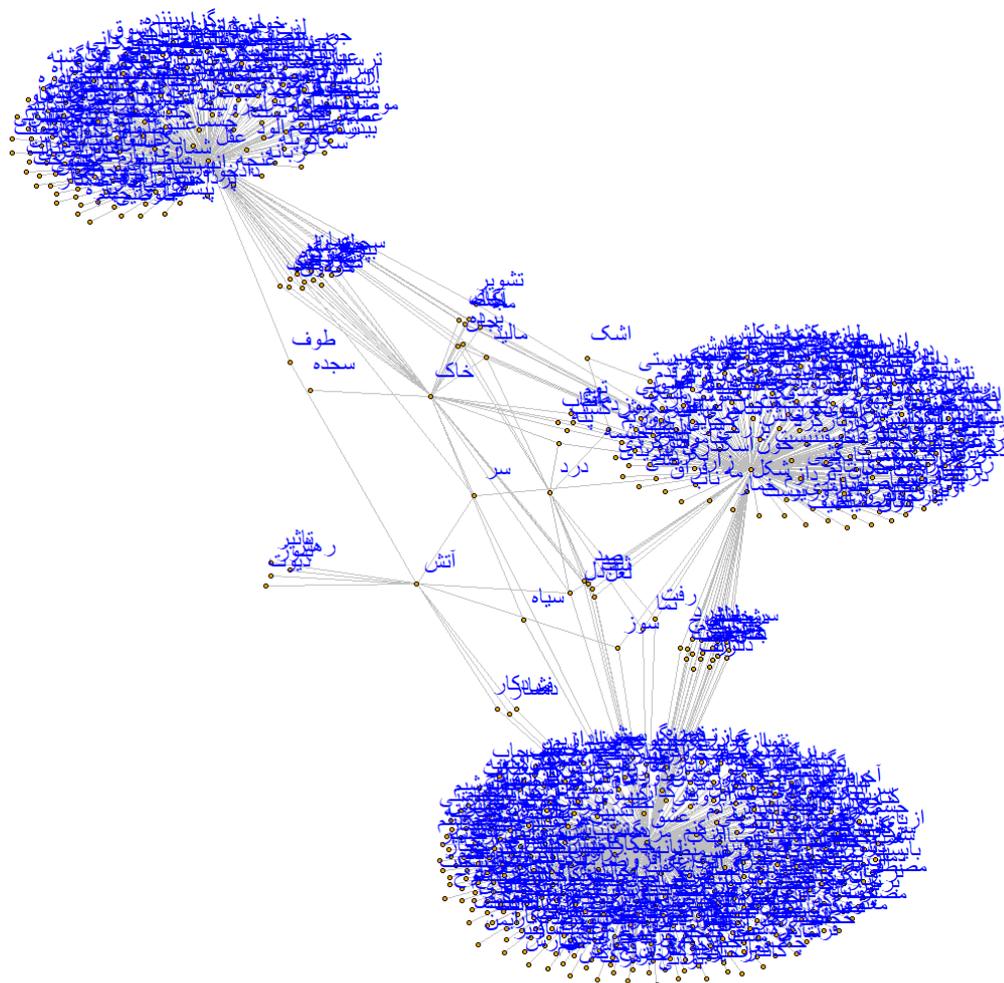
correlation Threshold: 0.7

図 6.8 『鳥の言葉』愛に関する単語の内「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.7以上)



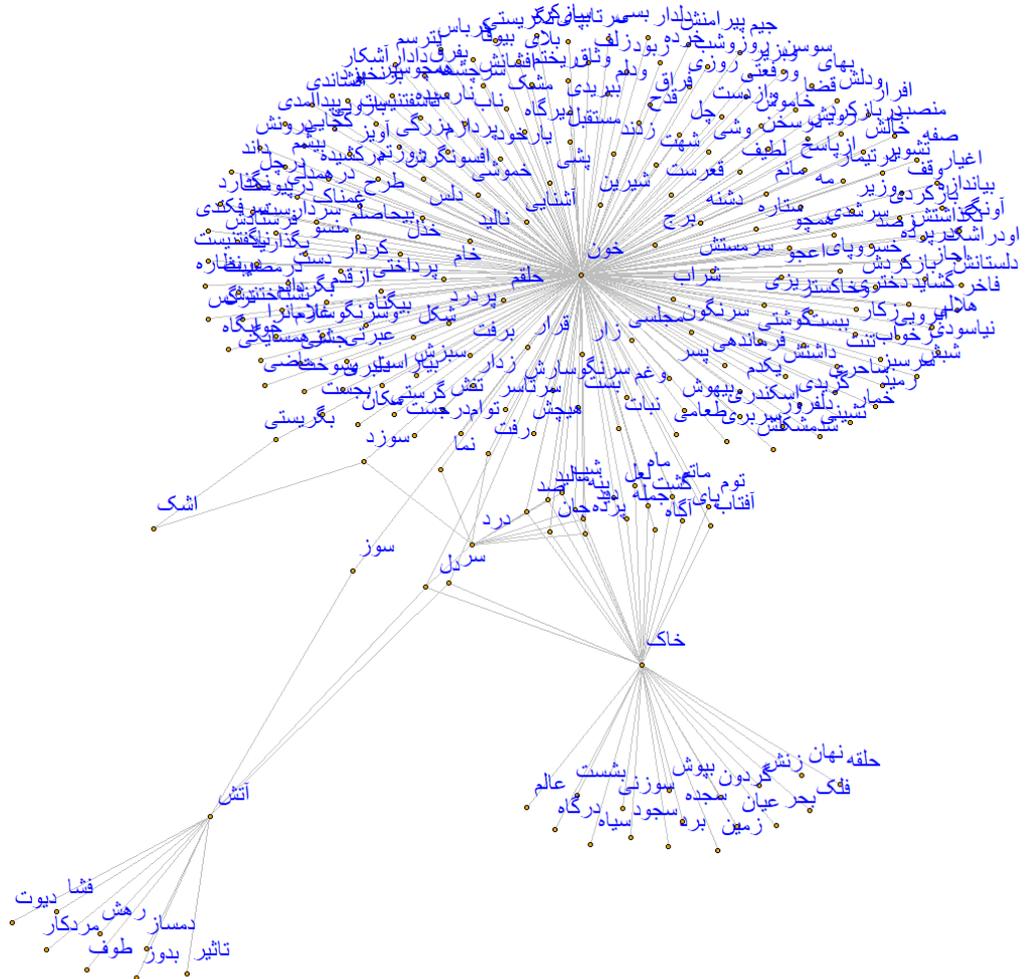
correlation Threshold: 0.7

図 6.9 『鳥の言葉』愛に関する単語の内、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の共起ネットワーク (重み=0.7 以上)



correlation Threshold: 0.6

図 6.10 『鳥の言葉』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6以上)



correlation Threshold: 0.6

図 6.11 『鳥の言葉』愛に関する単語の内、「 عشق ('eshq) 」と「 عقل ('aql) 」を除いた共起ネットワーク (重み = 0.6 以上)

重みが 0.7 の時、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は、「سر (sar) 」や「گشت (gasht) 」及び苦しむことを表す「مالید (mālīd) 」と共起する。「خون (khūn) 」と「عشق (‘eshq) 」は「شب (shab) 」や「برج (borj) 」と共起する。

重みが 0.6 の時、「خون (khūn) 」と「درد (dard) 」と「اشک (ashk) 」は「سوزد (sūzad) 」と共起する。また、「آتش (ātesh) 」は「سوز (sūz) 」と共起し、「عشق (‘eshq) 」も「سوز (sūz) 」と共起する。

(4) 『鳥の言葉』まとめ

「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は苦しみと関係している割合が高い。それは、「خون (khūn) 」が「درد (dard) 」と共起する頻度が高いこと、「عشق (‘eshq) 」と「خون (khūn) 」と「آتش (ātesh) 」が「سوز (sūz) 」や「سوزد (sūz) 」と共起することで身を焦がすような愛の苦しみを表現していることから明白である。「خون (khūn) 」と「درد (dard) 」が、他の愛や苦痛に関する単語と共起する頻度が高く、典型的な愛と痛みが結びついているテキストであることを示唆している。

他の特徴としては、10 章、14 章、15 章のそれぞれの鳥たちとの対話、22 章の愛の谷描写において表現されているように、「عقل (‘aql) 」、 「آب (āb) 」、 「دریا (daryā) 」、 「گنج (ganj) 」を「神への愛」の対極にあり否定されるべきものとして頻繁に用いる。一方、否定される愛の対象を語る場合でも、11 章のヤマウズラのように、「神への愛」を表現する方法と類似する方法で表現する場合がある。さらに、7 章のサヨナキドリのように、外形への愛と否定されながら、「عشق (‘eshq) 」を使用する愛の描写はヤツガシラが行う神秘主義の愛の状態と類似する。

2-5. 『四行詩集』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

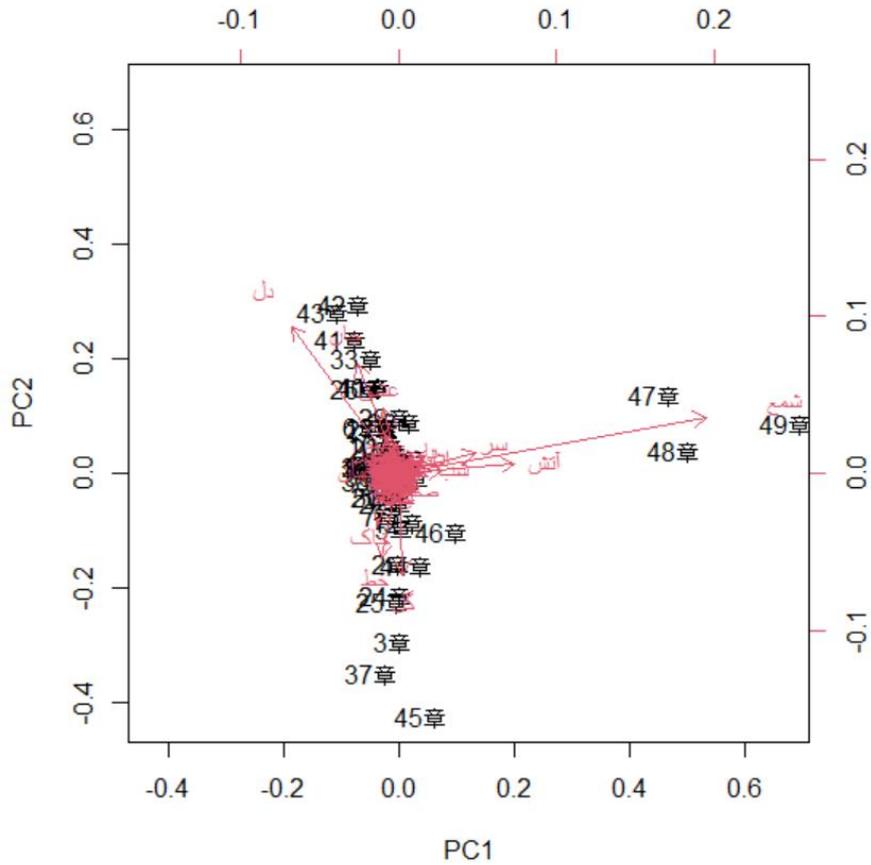


図 7.1 『四行詩集』最頻出名詞 50 の主成分分析 (PC1=0.20713、PC2=0.10653)

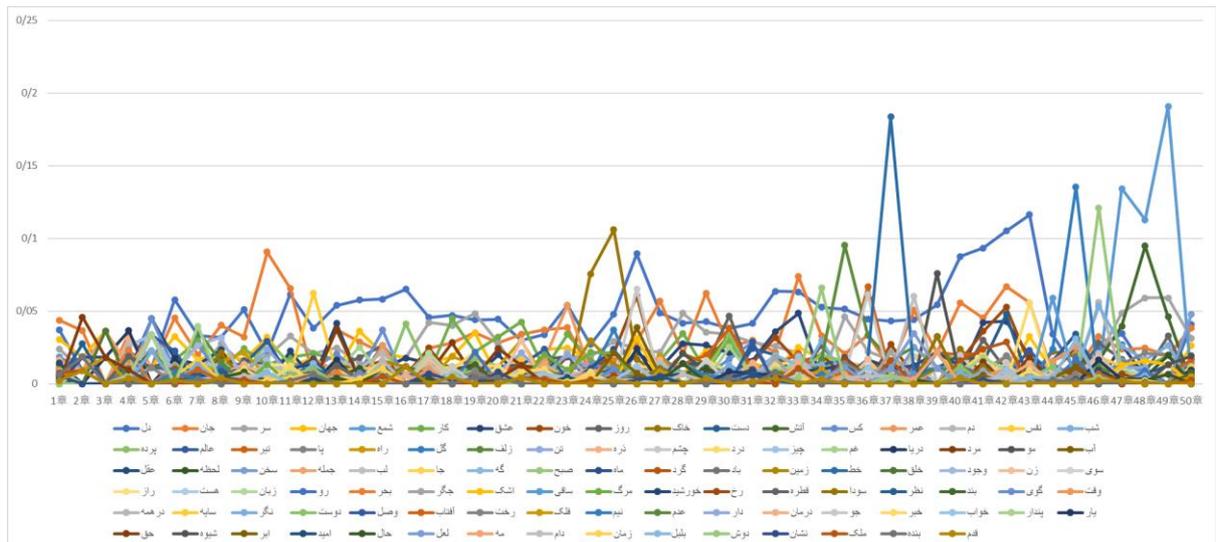


図 7.2 『四行詩集』最頻出名詞 100 の相対頻度

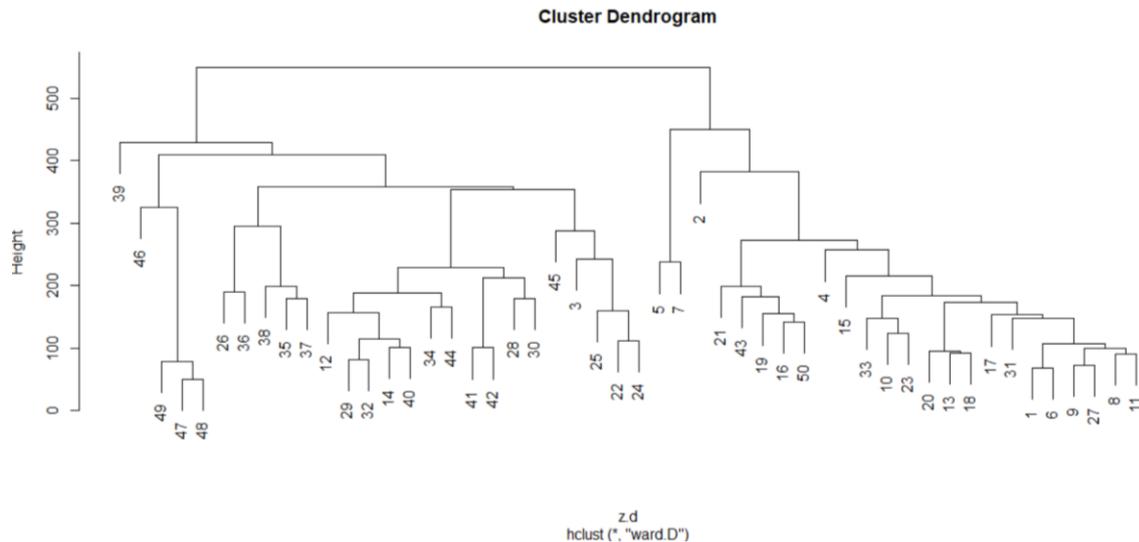


図 7.3 『四行詩集』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、47 章、48 章、49 章は、特徴において他の章から異なる。これらの章は、全て蠟燭を表す「شمع (shamʻ)」が特徴語として用いられている。

特徴語の使用方法

47 章と 48 章は蠟燭を表す「شمع (shamʻ)」と燃えることを表す「سوز (sūz)」が同時に使用される。これらの単語によって、蠟燭が燃えている様子を愛によって苦しんでいる者の比喩として用いる²³⁵。

(47 章)

私の魂と心よ、そなたの霊的指導者の魂と心を伴って
愛によって、次々にそなたの場所に到達する
そなたは私の蠟燭、私はそなたの蛾となった
燃えてのみ、私はそなたの足に頭を垂れる²³⁶

(48 章)

蠟燭が来て、言った。全ての瞬間、燃やされている
私の頭から足先まで、絶えず、燃やされている
私が泣き、深く苦しんでいることが見られた時
それによっていかなる利益もなく、燃やされている²³⁷

49 章では上述の単語に加え、火に向かって飛び一体となる蛾の話が 47 章や 48 章に比べて増える。その結果、蝶や蛾を表す「پروانه (parvāneh)」が蠟燭の火で燃やされる様子によって、「神への愛」や合一の境地を表す場面が増える。

(49 章)

蛾が蠟燭に言った、頭が燃えているものよ、
瞬間毎に、私を異なる方法で燃やしてください

²³⁵ 『四行詩集』に使われている韻律は、通常の四行詩に使用される韻律である。

すなわち、(—U—U—/—U—U— (U—U—) /—U—U— (—) —)

²³⁶ Farīd al-Dīn ʿAṭṭār, *Mokhtār-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb47/sh12> (accessed August 18, 2023).

²³⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb48/sh26> (accessed August 18, 2023).

私の行為において、いかなる秘密も明らかにならないなら
そなたの行為の秘密において、わずかしが燃えていないこ
とが明らかになる²³⁸

階層的クラスタ分析の結果では、クラスタを二つに分類できる。

クラスタ1: 3章、12章、14章、22章、24章、25章、26章、28章、29章、30章、32章、34章、35章、36章、37章、38章、39章、40章、41章、42章、44章、45章、46章、47章、48章、49章

クラスタ2: 1章、2章、4章、5章、6章、7章、8章、9章、10章、11章、13章、15章、16章、17章、18章、19章、20章、21章、23章、27章、31章、33章、43章、50章

²³⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb49/sh1> (accessed August 18, 2023)

(2) 愛に関する単語について

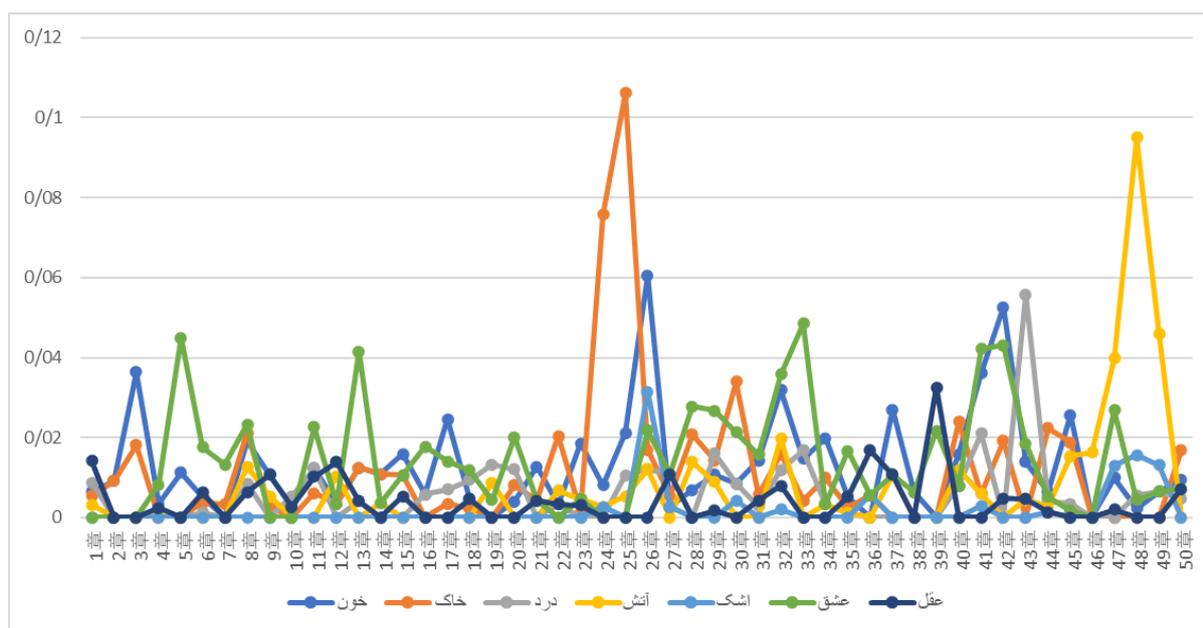


図 7.4 『四行詩集』 愛に関する単語の相対頻度 (頻度 100 位以内)

24 章、25 章は「خاک (khāk)」の相対頻度が全章において最も高い。26 章は「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」の相対頻度が全章において最も高い。33 章は、「عشق (eshq)」の相対頻度が高い。42 章は「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の相対頻度が高く、43 章は他の章に比べて圧倒的に「درد (dard)」の頻度が高い。48 章は「آتش (ātesh)」の相対頻度が全章において最も高く、47 章と 49 章も同様に「آتش (ātesh)」の相対頻度が高い。

愛に関する特徴語の使用方法

24 章と 25 章は、「خاک (khāk)」の相対頻度が高く「زمین (zamīn)」や「گل (gel)」と共に用いられつつ、「مرگ (marg)」などの死と関係する言葉とも頻繁に用いられる単語が同時に使用される理由として、章の主題が死と関係する悲しみであることが挙げられる

(24 章)

どれだけ自分の死によって嘆くつもりか？

それよりも、自分の考えから清められる方が良い。

最初、そなたは一滴の水でした

そして最終的には、一握みの土になる²³⁹

(25 章)

私は言った、生涯、そなたの愛らしい姿を見ている

今日、しかし、どのようにして、そなたを土の中で見るのか

土の中で眠っている心よ、それは私の心を血にした

そなたをこのように見ることになることを、どのように私は知るのでしょいか？²⁴⁰

²³⁹ Ibid., <https://ganjooor.net/attar/mokhtarname/bb24/sh17> (accessed August 18, 2023).

²⁴⁰ Ibid., <https://ganjooor.net/attar/mokhtarname/bb25/sh23> (accessed August 18, 2023).

26章は「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」が泣くことや悲しみに関連する単語として用いられる。例えば、「خون (khūn)」は「چشم خون (cheshm-e khūn)」で、赤を表すと同時に、悲しみや苦痛を表している。

(26章)

いつまで、血の目（赤くはれた目）から涙を流し続けるのか
私の頭上を、百の量の涙が通り過ぎていった
そなたによって、私の心に、一つの痛みが留まった
百の涙の海によって、いつ清算されるのか²⁴¹

33章は、「عشق ('eshq)」が「神への愛」や原理への愛を表している。

(33章)

最初、そなたへの愛があまりにも多くの甘さを撒き散らしているため
永遠に全世界が甘さを求める
私が見つめ、探し求めるもの全て
そなたのルビーの唇の甘さを、正しく持つと言われている²⁴²

(33章)

恋人よ、そなたへの愛の悲しみで、私は倒錯している
私は魂から、そなたを求めている
そなたは、魂を放棄し、自由になれと言う
しかし、そなたが私の魂の中にいるので、それを引き裂く
ことができない²⁴³

42章は恋している人の痛みを表している章である。ここでは、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」によって、死ぬことの状態や人間の構成要素が表されている。また、「خون (khūn)」は血や恋人への愛や情熱や葛藤、さらに愛の痛みや愛の原因を表している可能性もある。「خاک (khāk)」は、愛する対象に対する謙遜を、「そなたの土」という表現によって示している可能性がある。

(42章)

最終的に、私の血は、それが流れるところの土であり
最終的に、土に反発する血を伴う
私の心の血の中に入るな、私はそなたの土である
土の手の平の血から、何が出現するのか²⁴⁴

43章は、愛の痛みについて「درد (dard)」を使用して表されている

(43章)

私は心を愛の痛みに魅了され

²⁴¹ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb26/sh22> (accessed August 18, 2023).

²⁴² Ibid., <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb33/sh3> (accessed August 18, 2023).

²⁴³ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb33/sh38> (accessed August 18, 2023).

²⁴⁴ Ibid., <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb42/sh1> (accessed August 18, 2023).

自分の本性の街を後にした
秘密と困窮を両方混ぜたとき
その時、私は血の上で、心の治療を始めた²⁴⁵

47章、48章、49章では、蝋燭が燃えている描写や蛾が蝋燭と一体になる描写によって、愛により苦しんでいる様子が表されている。「آتش (ātesh)」は火を表し、蝋燭や蛾と一緒に使用される。

²⁴⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/mokhtarname/bb43/sh8> (accessed August 18, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

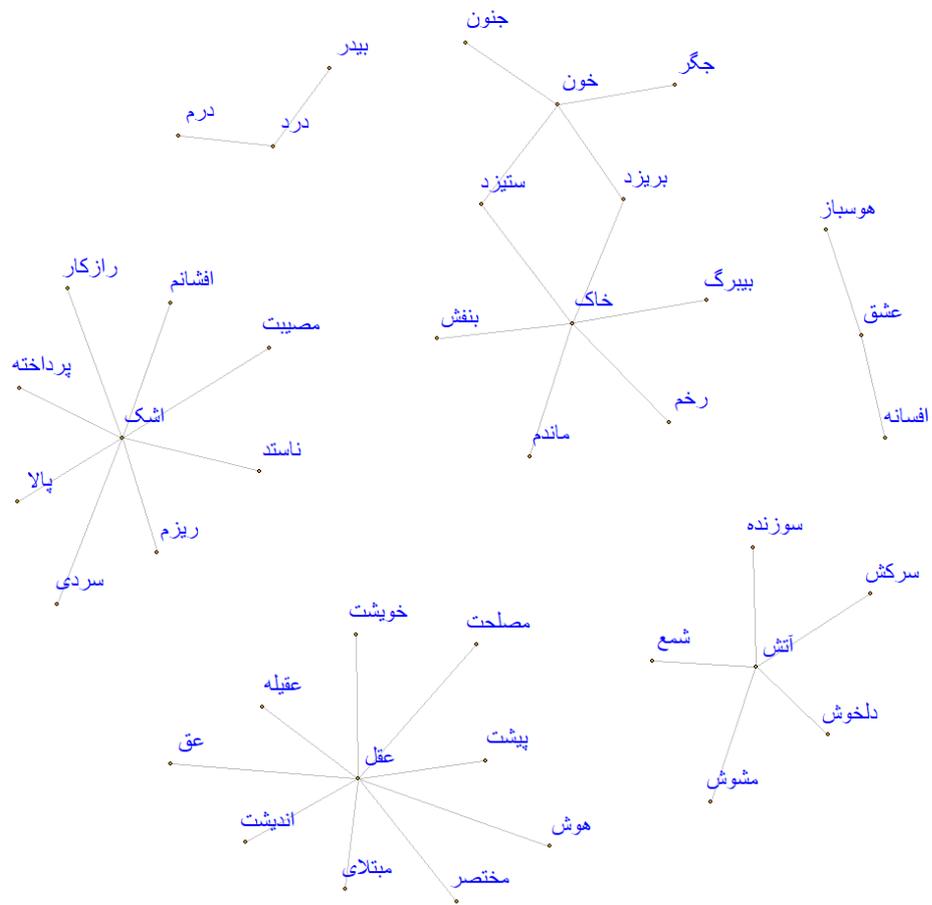


図 7.5 『四行詩集』 愛に関する単語同士の共起関係

『四行詩集』は四行詩で構成されているので、図 7.5 の数値から明らかなように、詩ごとの共起頻度は極めて少ない。一方、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」は相対的に重みの値が高く、頻繁に共起する。

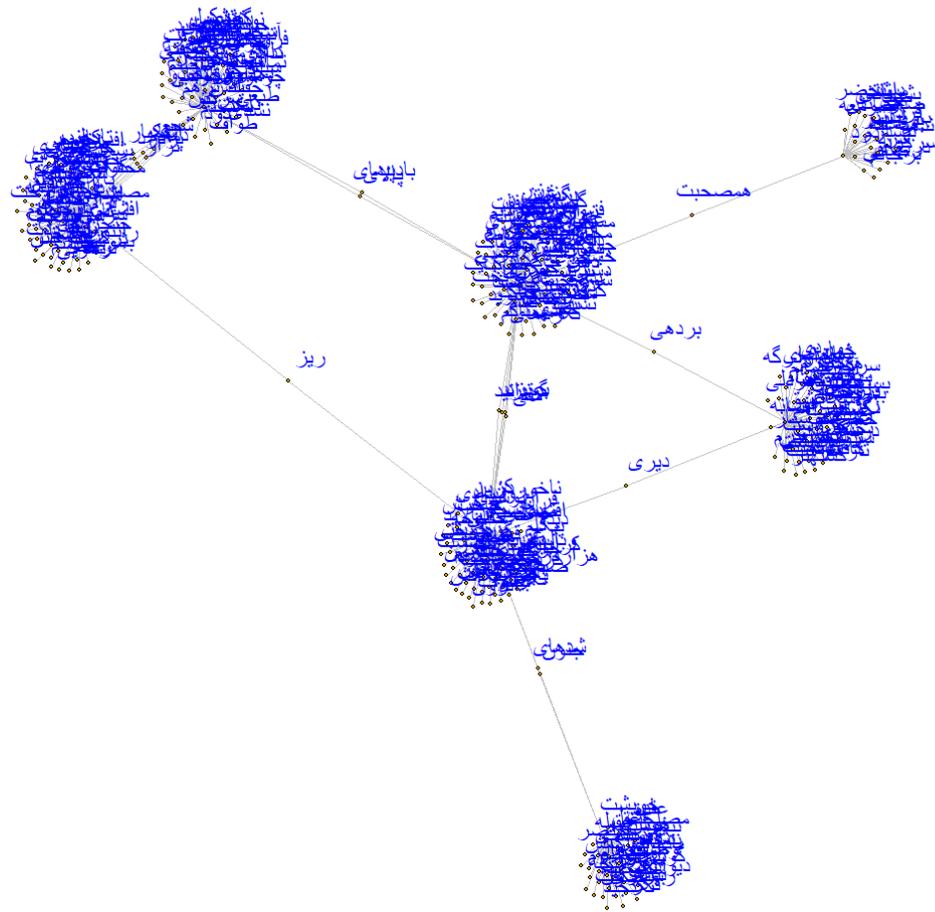
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | جگر | 0.24 |
| خاک | بریزد | 0.22 |
| درد | درم | 0.36 |
| آتش | شمع | 0.35 |
| اشک | پالا | 0.38 |
| عشق | هوسباز | 0.22 |
| عقل | اندیشنت | 0.4 |

図 7.6 『四行詩集』 愛に関する各単語と最も共起する単語



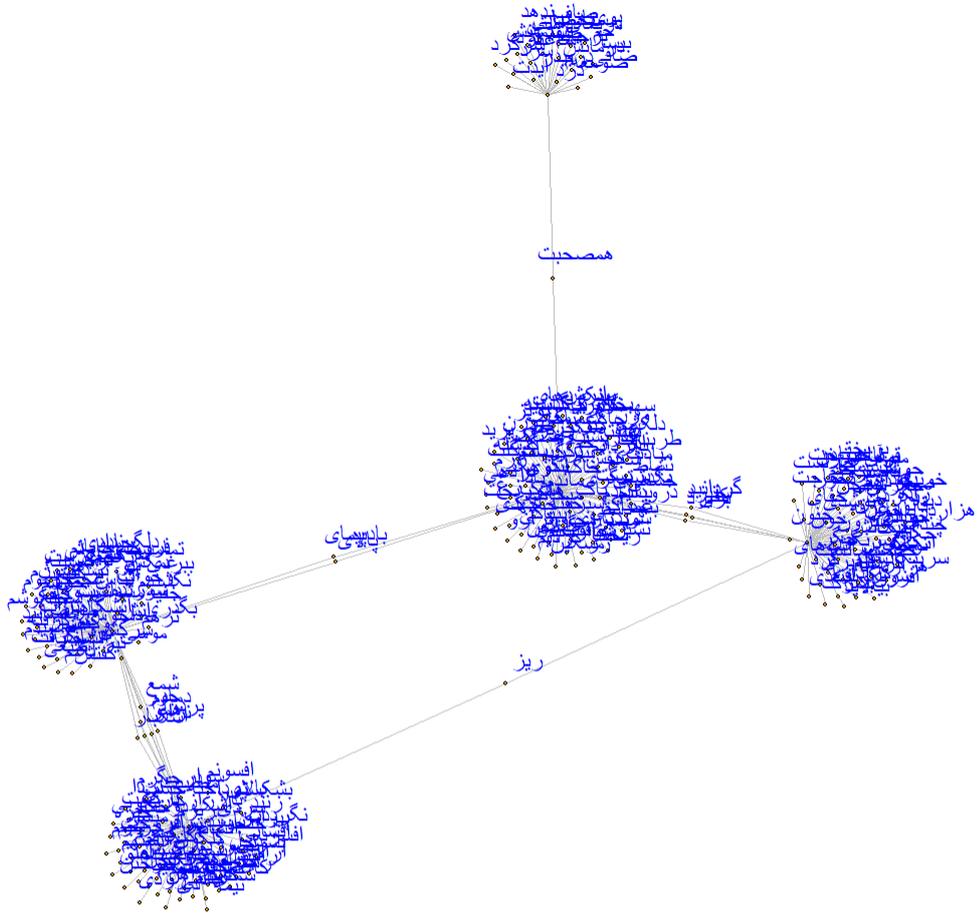
correlation Threshold: 0.2

図 7.7 『四行詩集』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.2 以上)



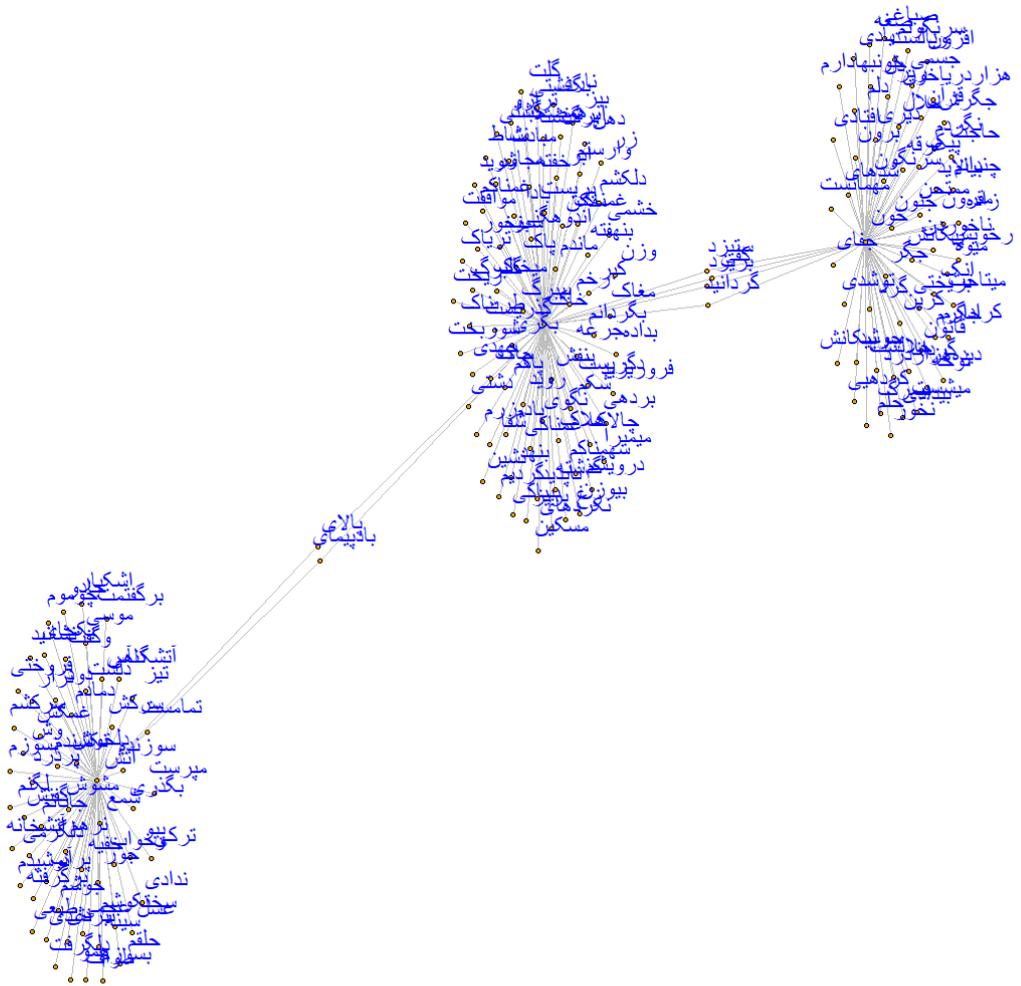
correlation Threshold: 0.1

図 7.8 『四行詩集』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.1 以上）



correlation Threshold: 0.1

図 7.9 『四行詩集』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み = 0.1 以上)



correlation Threshold: 0.1

図 7.11 『四行詩集』 愛に関する単語の内、「**خون (khūn)**」、「**خاک (khāk)**」、「**درد (dard)**」の共起ネットワーク (重み=0.1以上)

重みが 0.2 の時、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は涙を流すことに関係する「ریزد (rīzad)」と共起する。

重みが 0.1 の時、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」は「ریز (rīz)」と共起する。「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は「پر درد (por-dard)」と「شمع (sham‘)」と共起する。「پالای (pālāy)」と「بادپیمای (bād-peimāy)」は「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」と共起する。また「همصحبت (ham-ṣoḥbat)」と「خاک (khāk)」と「درد (dard)」が共起する。

(4) 『四行詩集』まとめ

共起のパターン自体は少ないが、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は相対的に共起する頻度が高い。これらの単語と「اشک (ashk)」は「ریزد (rīzad)」と「ریز (rīz)」と共起することから、血を流し、涙を流す表現で痛みを表し、「神への愛」と関係する。また、火蛾の比喻から、「آتش (ātesh)」も愛に関係する単語として使用される。さらに、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は同時に共起する単語として「سوز (sūz)」を持つので、前者この二つ単語は痛みを表す可能性が高い。

47 章、48 章、49 章において、「آتش (ātesh)」の相対頻度が特に高く、蛾や蠟燭と共に登場することで、物理的な火と愛によって燃えている状態、すなわち苦しんでいる状態も表されている。また、26 章と 42 章から「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」も死や苦痛、愛の状態、色、人間の構成要素であることが示されている。

2-6. 『アッターール詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク分析

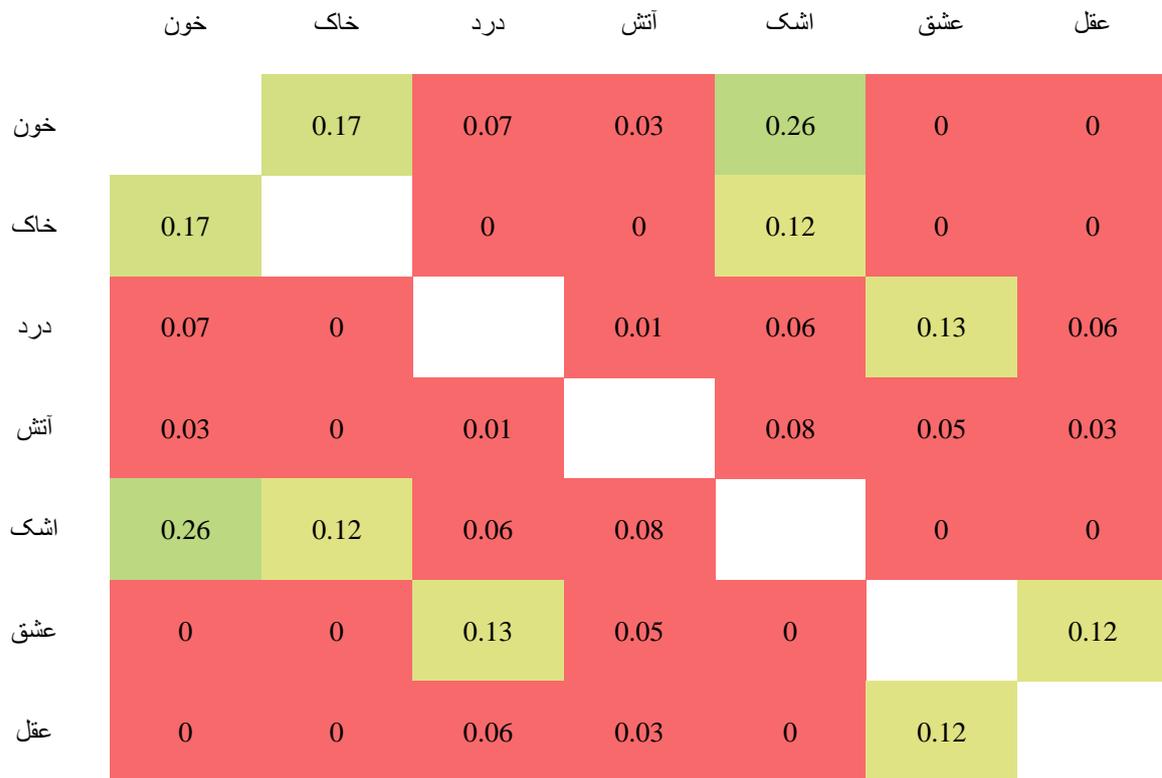
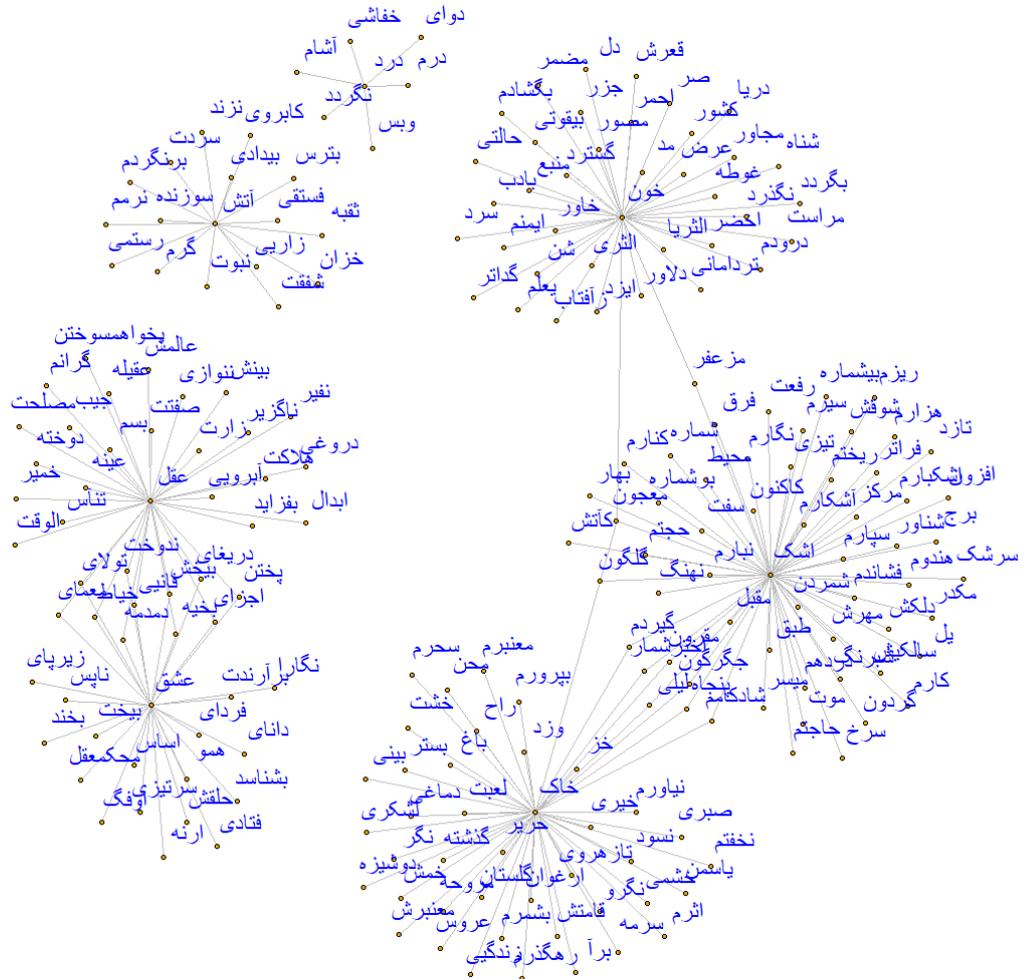


図 8.1 『アッターール詩集—ガザル』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」において「اشک (ashk)」の重みの値が高く、共起しやすい。また、「خاک (khāk)」において「خون (khūn)」の値が高い。反対に、「اشک (ashk)」において、全単語との重みの数値と比較すると「خون (khūn)」の値は高くない。

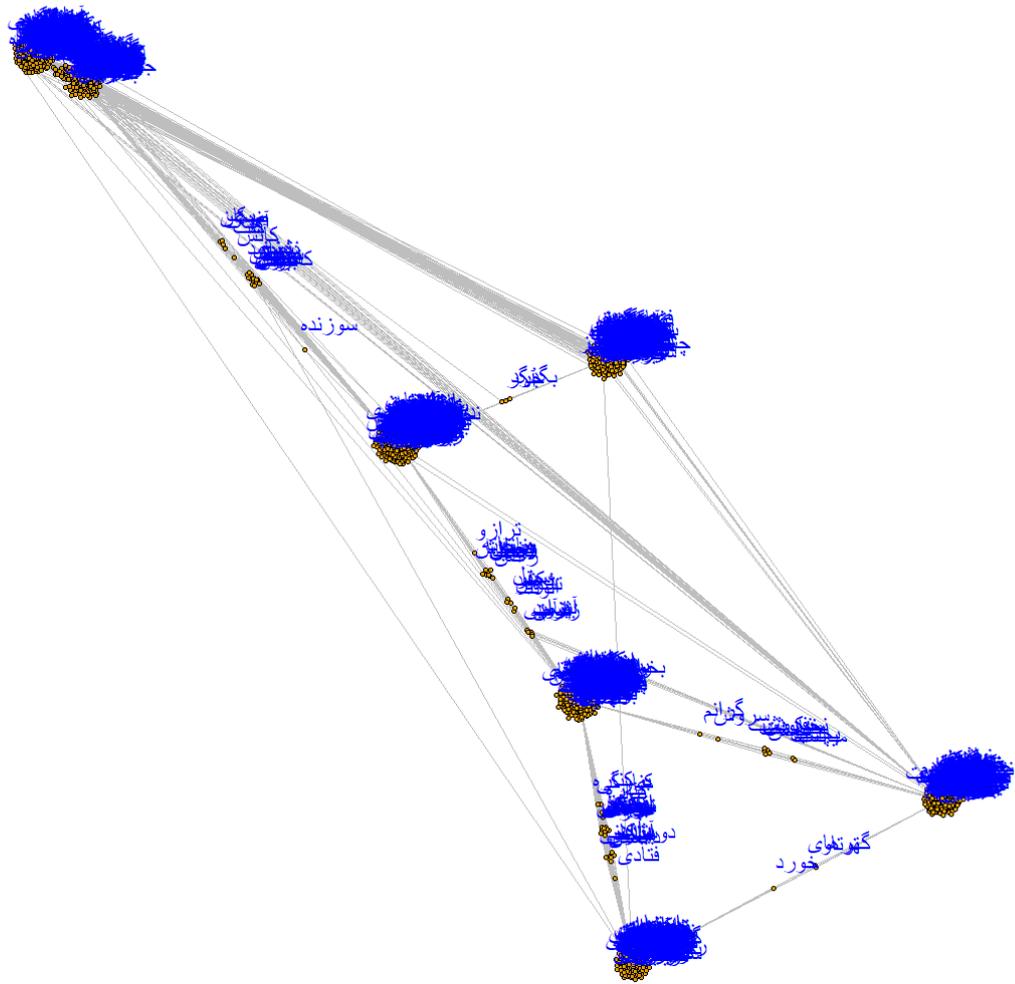
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | احمر | 0.34 |
| خاک | ارغوان | 0.25 |
| درد | درم | 0.41 |
| آتش | رستمی | 0.24 |
| اشک | شمردن | 0.6 |
| عشق | هوسباز | 0.22 |
| عقل | أبرویبی | 0.3 |

図 8.2 『アッターール詩集—ガザル』愛に関する各単語と最も共起する単語



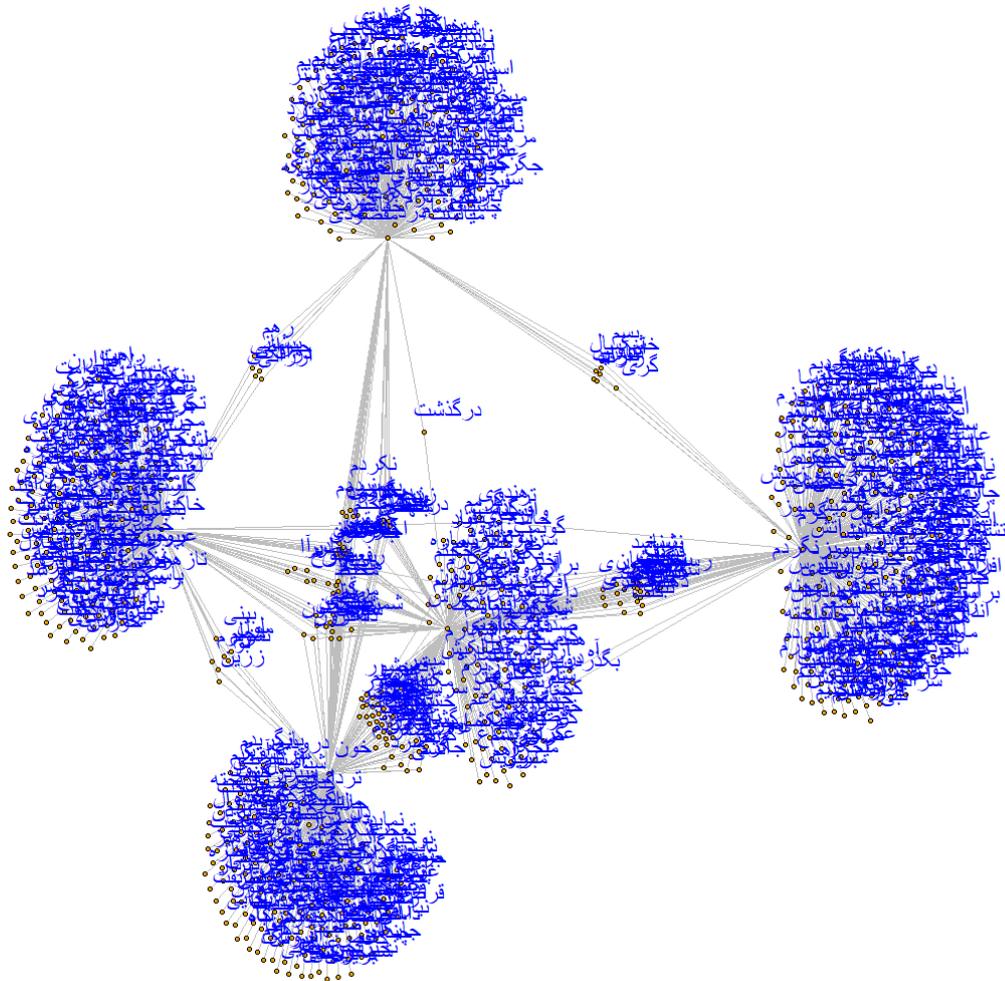
correlation Threshold: 0.2

図 8.3 『アッタール詩集—ガザル』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.2以上)



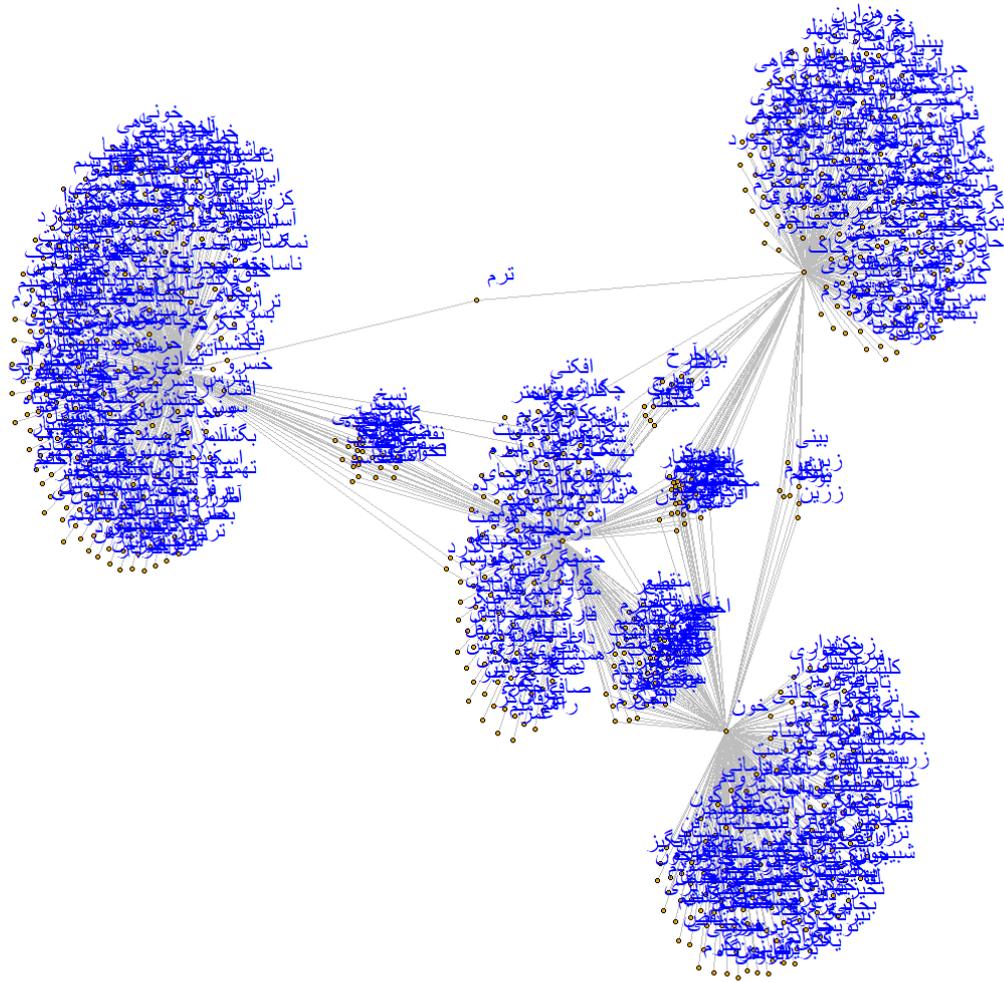
correlation Threshold: 0.1

図 8.4 『アッタール詩集—ガザル』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.1以上)



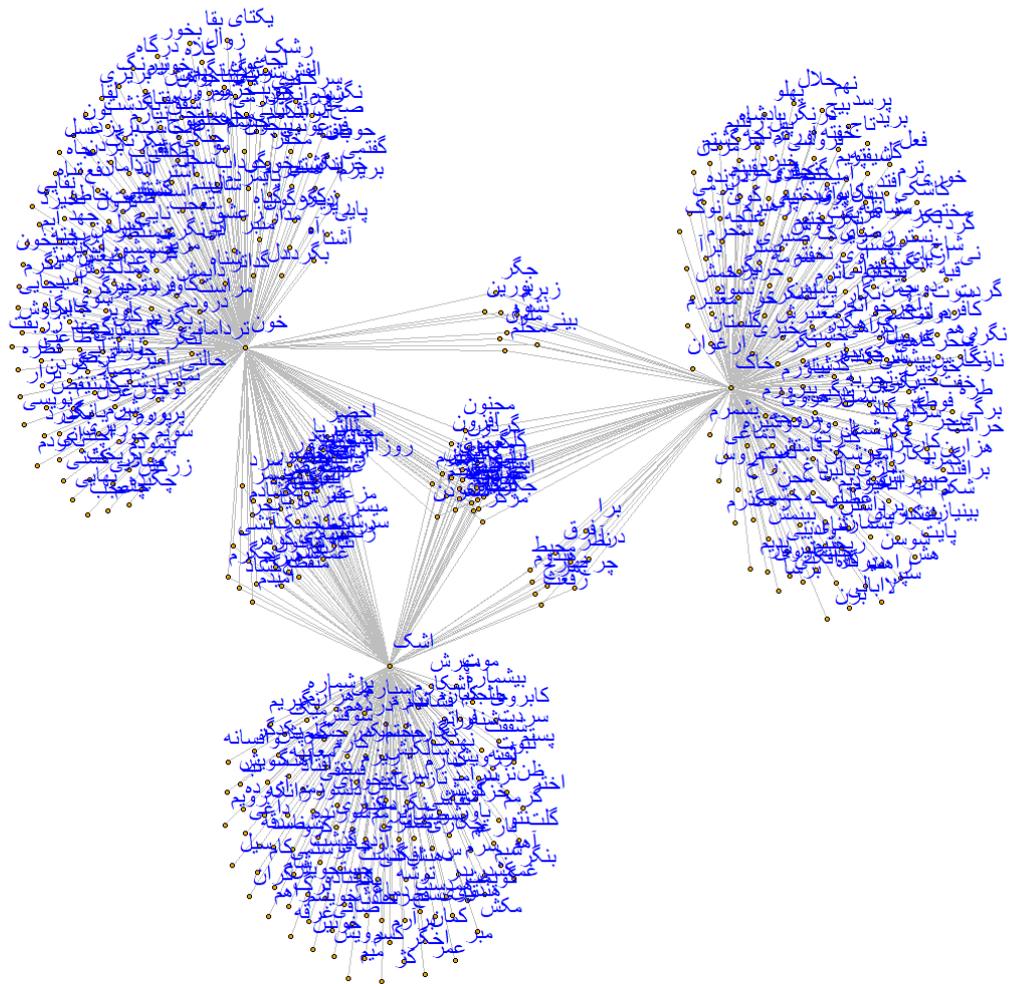
correlation Threshold: 0.1

図 8.5 『アッターール詩集—ガザル』愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.1 以上)



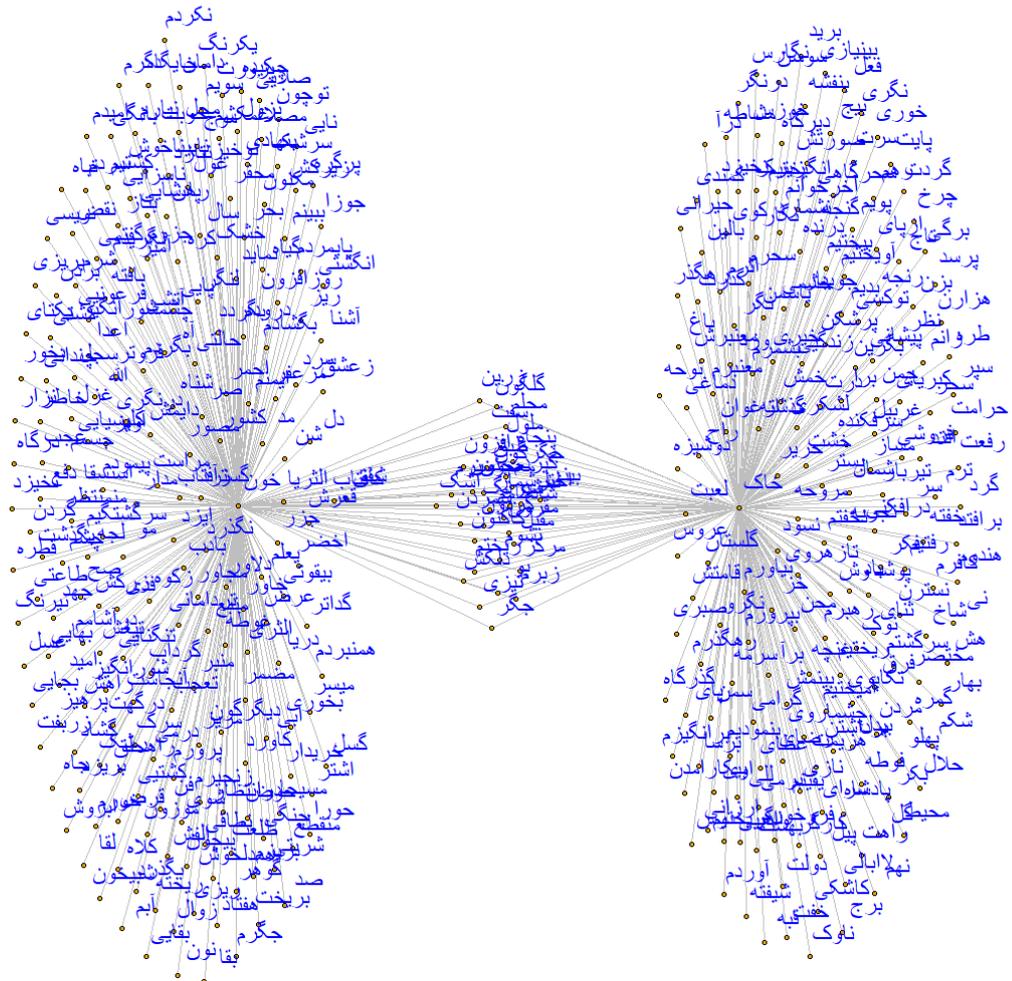
correlation Threshold: 0.1

図 8.6 『アッタル詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「 عشق ('eshq)」、「 عقل ('aql)」、「 درد (dard) 」を除いた共起ネットワークの共起ネットワーク (重み=0.1以上)



correlation Threshold: 0.1

図 8.7 『アッタール詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」、「عقل ('aql)」、「درد (dard)」を除いた共起ネットワークの共起ネットワーク (重み=0.1以上)



correlation Threshold: 0.1

図 8.8 『アッタル詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「**خون** (khūn)」、「**خاک** (khāk)」の共起ネットワーク (重み=0.1 以上)

重みが 0.2 の時、「مزعر (moza‘far) 」は「خون (khūn) 」と「اشک (ashk) 」と共起する。「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は愛に狂ったものを表す「مجنون (majnūn) 」と共起する。「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」は共起する言葉が複数あり、そのうちの一つは肝臓や悲しみを表す「جگر (jegar) 」である。「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」は「خياط (khayyāt) 」と共起する。

重みが 0.1 の時、「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」は「جگر (jegar) 」と共起し、「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」は「ترم (taram) 」と共起する。「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」は「مجنون (majnūn) 」と共起する。

(2) 『アッताल詩集—ガザル』まとめ

「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」は「مجنون (majnūn) 」と共起していることから、愛と関係している単語である可能性が高い。「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」も悲しみを表す「جگر (jegar) 」とも関連していることから、「神への愛」に伴う痛みと関係している可能性は高く、「神への愛」を表す痛みが表現されている。

2-7. 『アッターール詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク分析

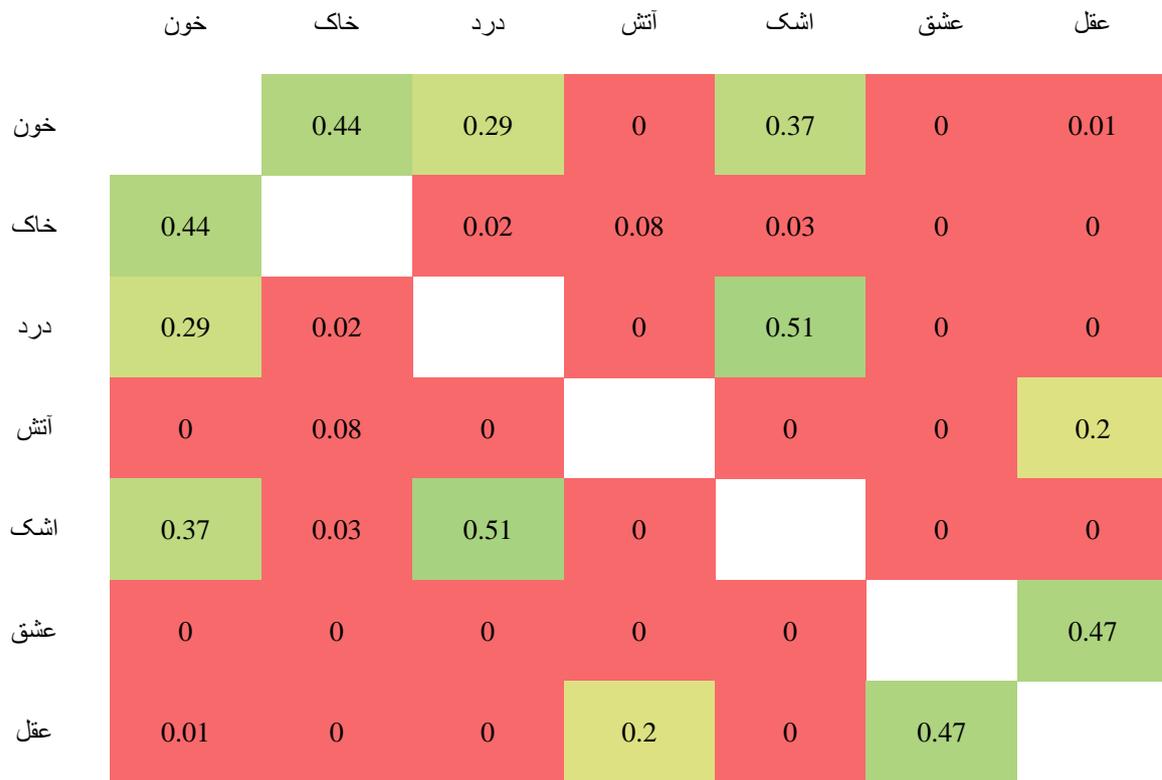
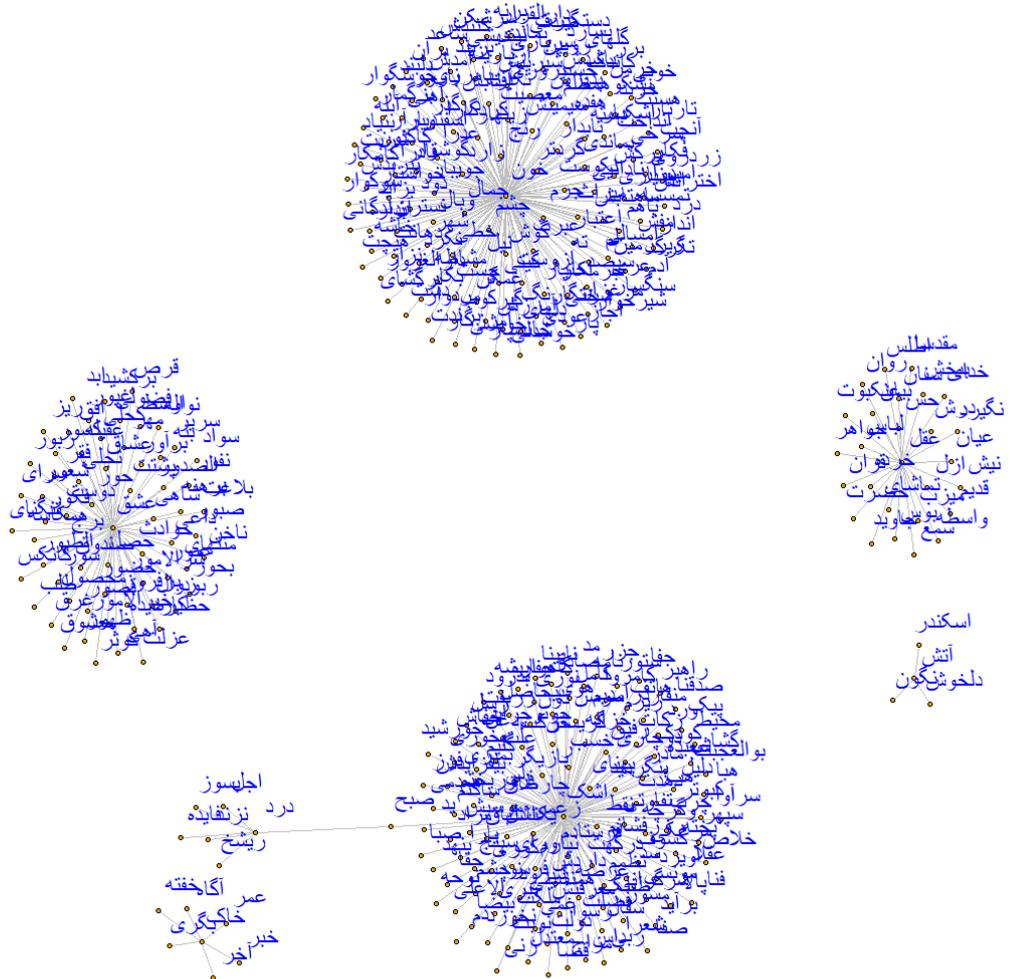


図 9.1 『アッターール詩集—カスィーデ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」において、「خاک (khāk)」の重みの値が高いことから、共起する頻度が高い。「اشک (ashk)」は重みの値において、「خاک (khāk)」に続く。また、「درد (dard)」と「عشق (‘eshq)」、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みの値も高い。

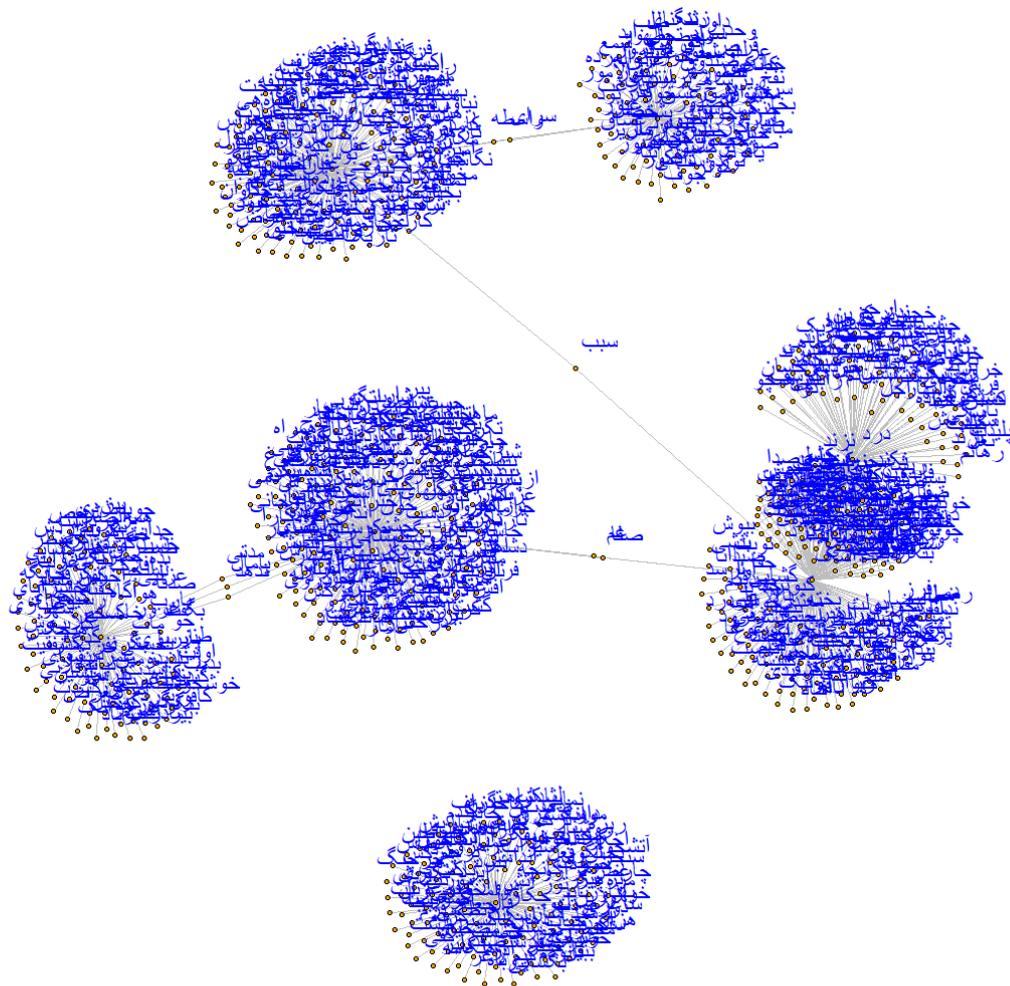
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | چشم | 0.83 |
| خاک | خبر | 0.73 |
| درد | ریشخ | 0.73 |
| آتش | دلخوش | 0.71 |
| اشک | آویزد | 0.9 |
| عشق | افق | 0.84 |
| عقل | بوس | 0.74 |

図 9.2 『アッターール詩集—カスィーデ』愛に関する各単語と最も共起する単語



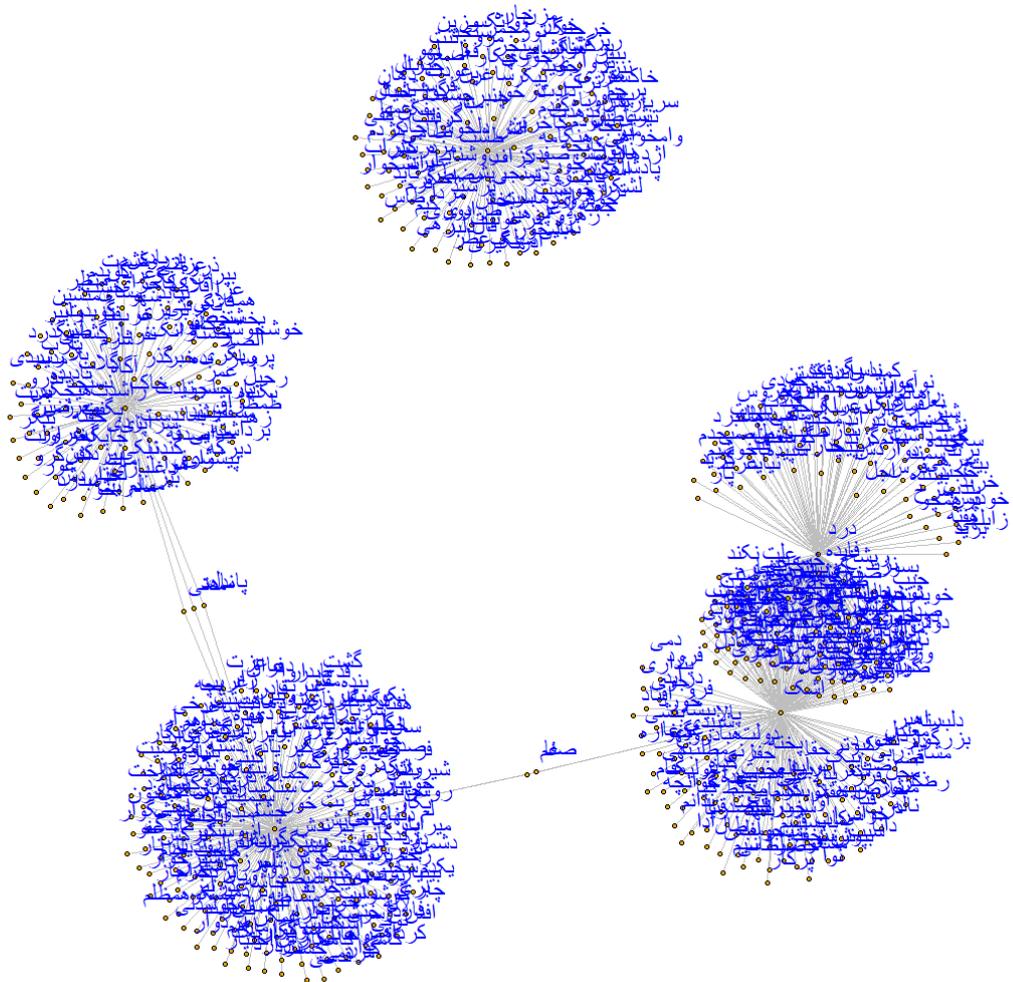
correlation Threshold: 0.6

図 9.3 『アッタール詩集—カシーデ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 9.4 『アッターール詩集—カスィーデ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.5 以上）



correlation Threshold: 0.5
 図 9.5 『アッターール詩集—カスィーデ』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」、「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワークの共起ネットワーク (重み=0.5 以上)

重みが 0.6 の時、「اشک (ashk) 」と「درد (dard) 」は「صبح (ṣobh) 」と共起する。重みが 0.5 の時、「اشک (ashk) 」と「خون (khūn) 」は「صفا (ṣafā) 」と「غم (gham) 」と共起する。「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」は「واسطه (vāseṭe) 」、「سرای (sarāy) 」と共起する。「عقل (‘aql) 」と「اشک (ashk) 」は「سبب (sabab) 」と共起する。「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」は「پامال (pāmāl) 」、「مدتی (moddatī) 」と共起する。

(2) 『アッターール詩集—カスィーデ』まとめ

「خاک (khāk) 」と「خون (khūn) 」、「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」の重みの値が高い。また、「اشک (ashk) 」と「خون (khūn) 」が悲しみを表す「غم (gham) 」との重みの値が高いことから、前者二つの単語が悲しみや苦痛と結びついている。さらに、「درد (dard) 」と「عشق (‘eshq) 」の重みの値が高いことから、「神への愛」と苦痛が結びついている可能性が高い。

2-8. 『アッタール詩集—タルジーウ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク分析

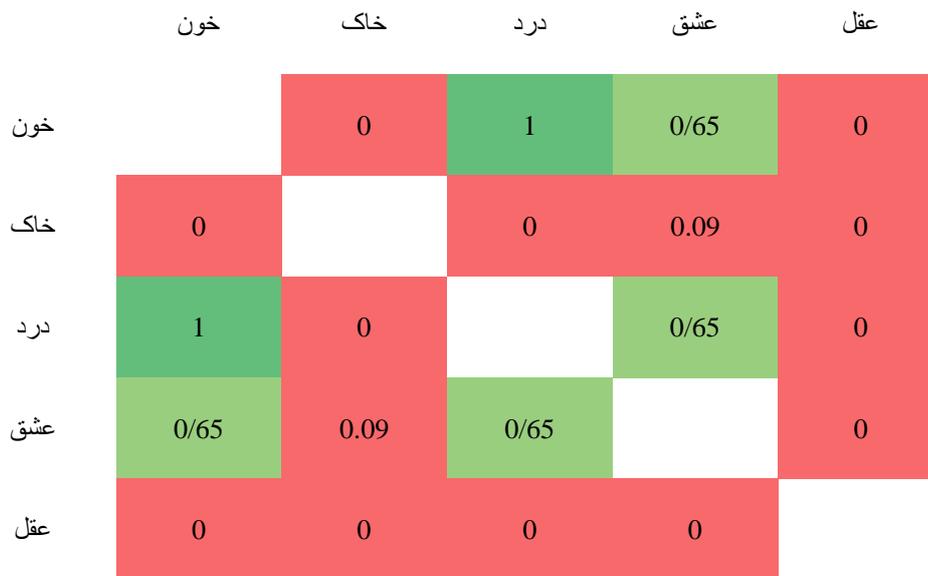
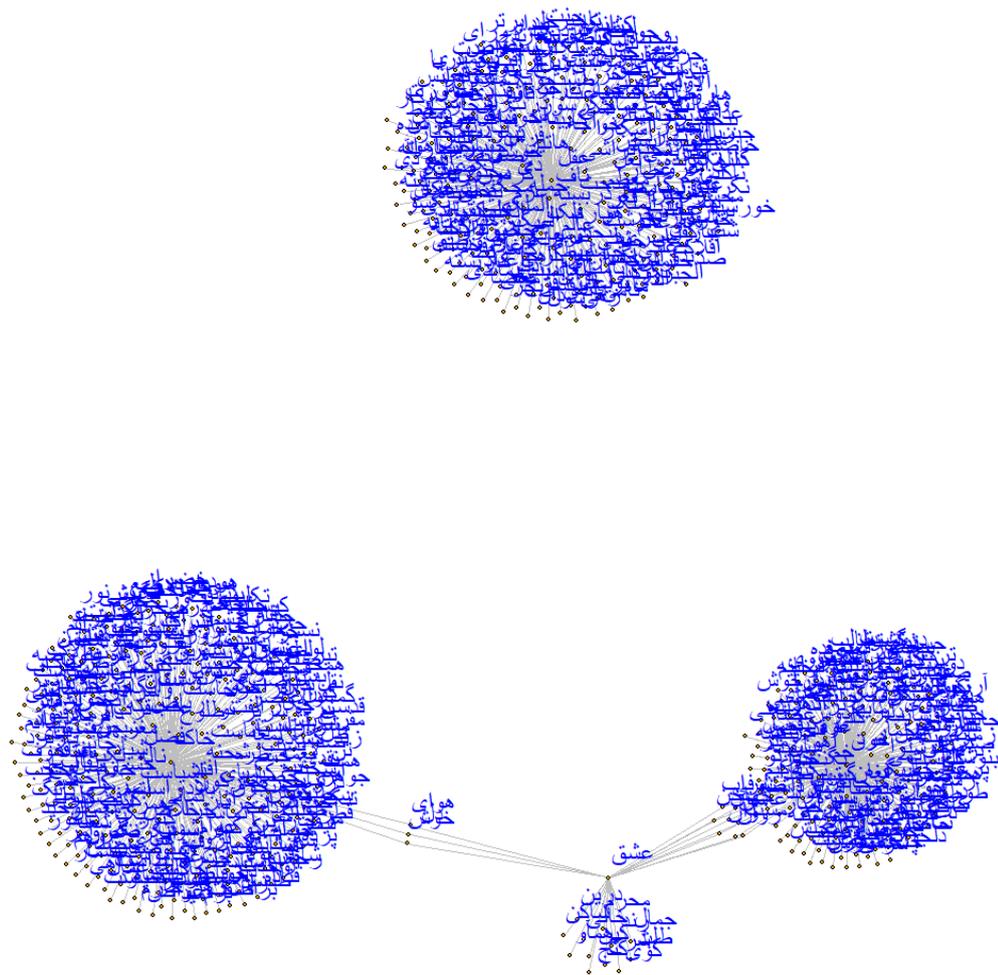


図 10.1 『アッタール詩集—タルジーウ』愛に関する単語同士の共起関係

「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」は登場しない。タルジーウは三つの詩しか含んでいないので、全体的な重みの値が高い。この中で、重みが 1 であることから「خون (khūn)」と「درد (dard)」は必ず共起する。「عشق (‘eshq)」と「خون (khūn)」も重みの値が高い。

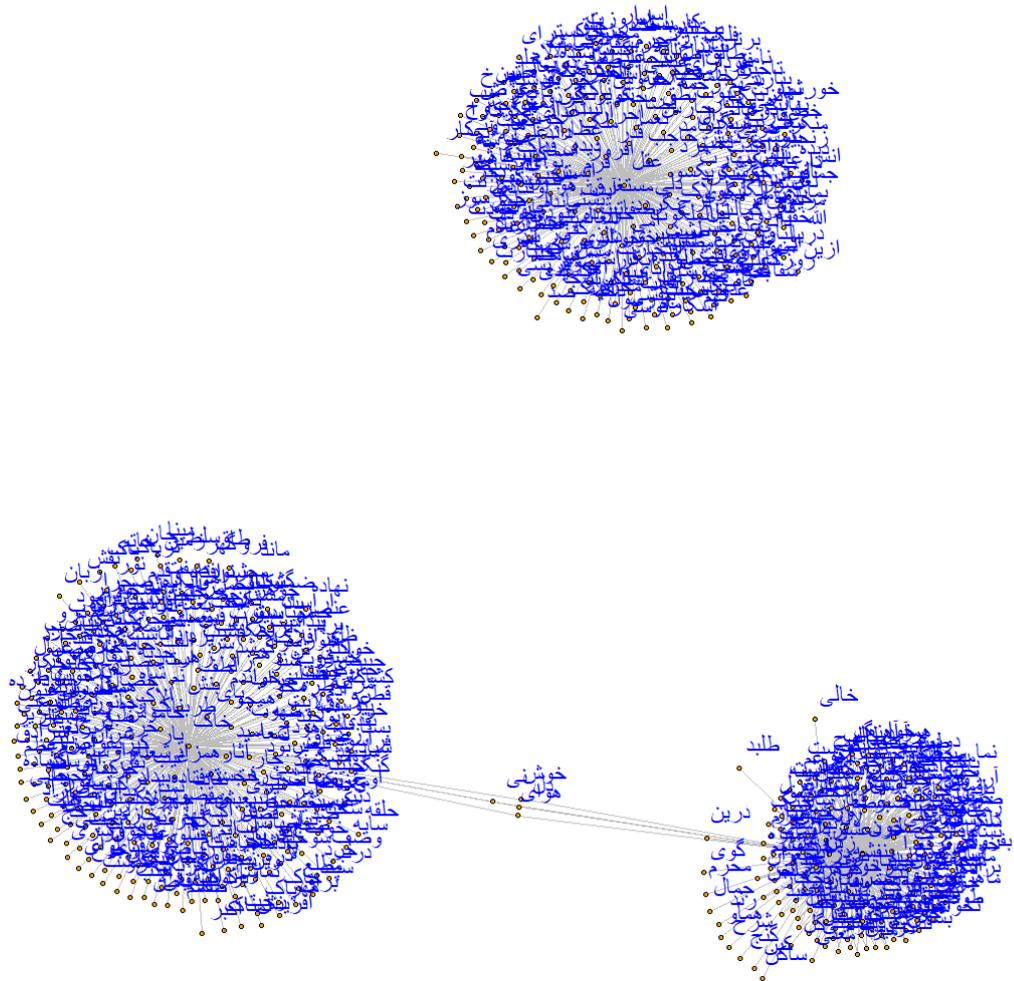
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | آرزوی | 1 |
| خاک | باد | 1 |
| درد | آرزوی | 1 |
| عشق | سخن | 0/99 |
| عقل | آبستن | 1 |

図 10.2 『アッタール詩集—タルジーウ』愛に関する各単語と最も共起する単語



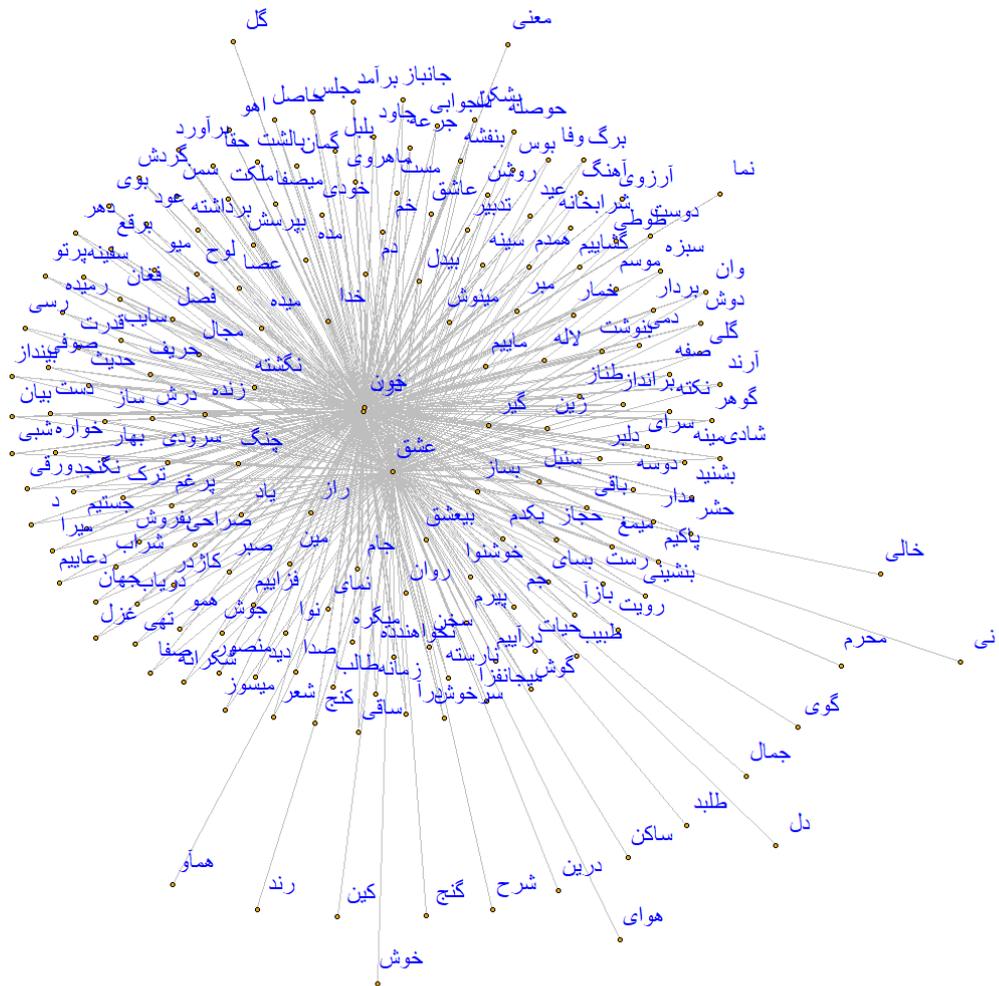
correlation Threshold: 0.7

図 10.3 『アッターール詩集—タルジーウ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.7以上)



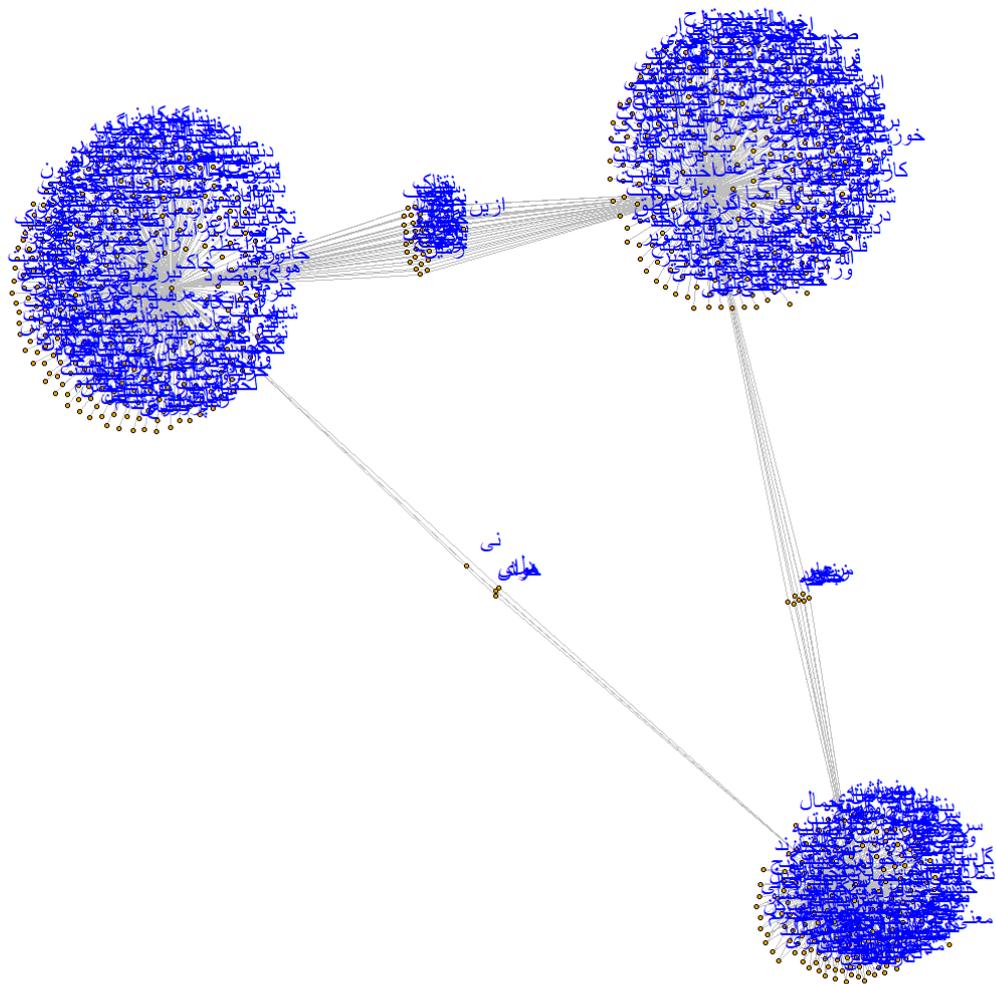
correlation Threshold: 0.6

図 10.4 『アッターール詩集—タルジーウ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.6以上）



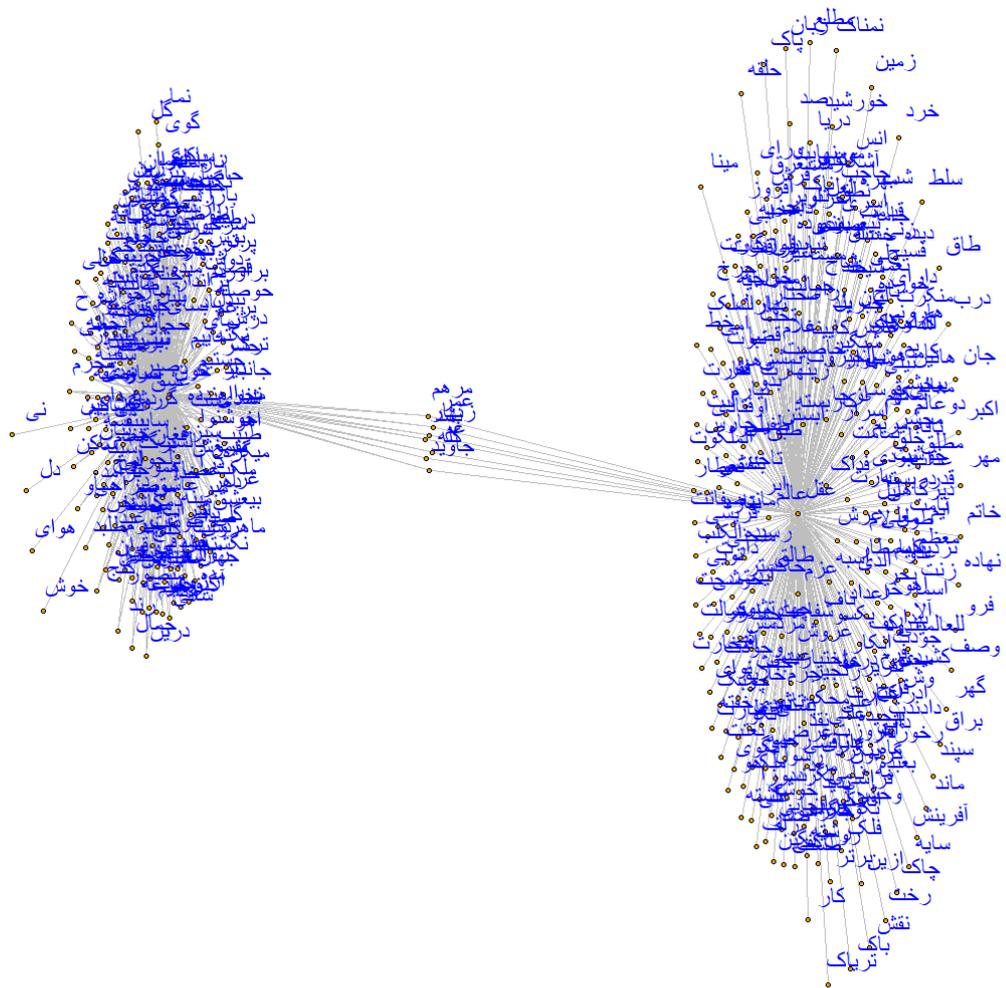
correlation Threshold: 0.6

図 10.5 『アッタール詩集—タルジーウ』 愛に関する単語の内、「**خون (khūn)**」、「**عشق ('eshq)**」、「**درد (dard)**」を対象とした共起ネットワーク (重み=0.6以上)



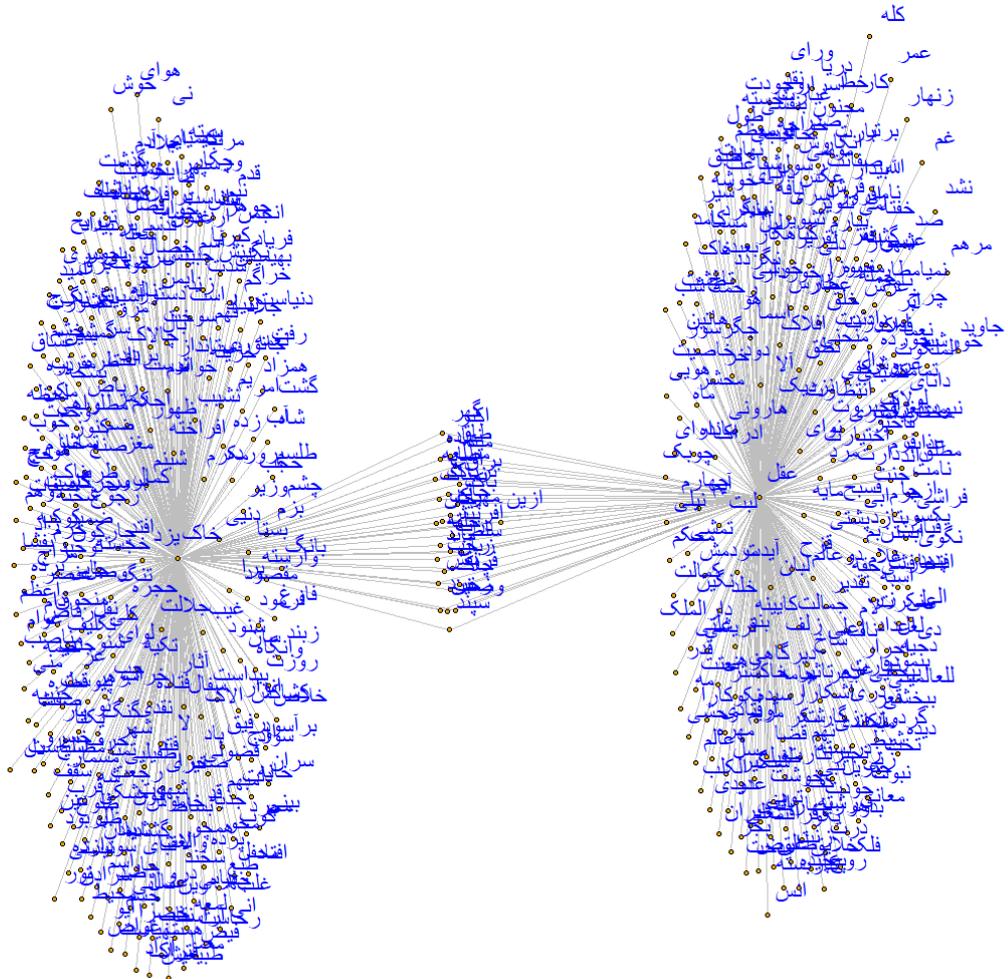
correlation Threshold: 0.5

図 10.6 『アッターール詩集—タルジウ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 10.7 『アッターール詩集—タルジ—ウ』 愛に関する単語の内、「**خون (khūn)**」を除いた共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 10.8 『アッターール詩集—タルジュー』 愛に関する単語の内、「**خاک** (khāk) 」と「**عقل** (‘aqil) 」の共起ネットワーク (重み=0.5 以上)

重みが0.6の時、「خون (khūn)」と「درد (dard)」は、共起ネットワークの図上で重なっている。「عشق ('eshq)」もそれらの単語と非常に近い箇所に位置する。また、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は「دل (del)」等の単語と共起する。

重みが0.5の時、「عقل ('aql)」は「خون (khūn)」と「جاوید (jāvīd)」や「عمر ('omr)」と共起する。「خاک (khāk)」は、「سپند (sepand)」と「چاک (chāk)」等と共起する。

(2) 『アッタール詩集—タルジーウ』まとめ

「خون (khūn)」と「درد (dard)」が図上で重なり、「عشق ('eshq)」も非常に近い箇所にあることから、これらの単語同士、共起する他の単語はほとんど同じである。故に、愛は苦痛を伴い、「خون (khūn)」は愛に伴う痛み表現として使用される。

2-9. 『忠言の書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

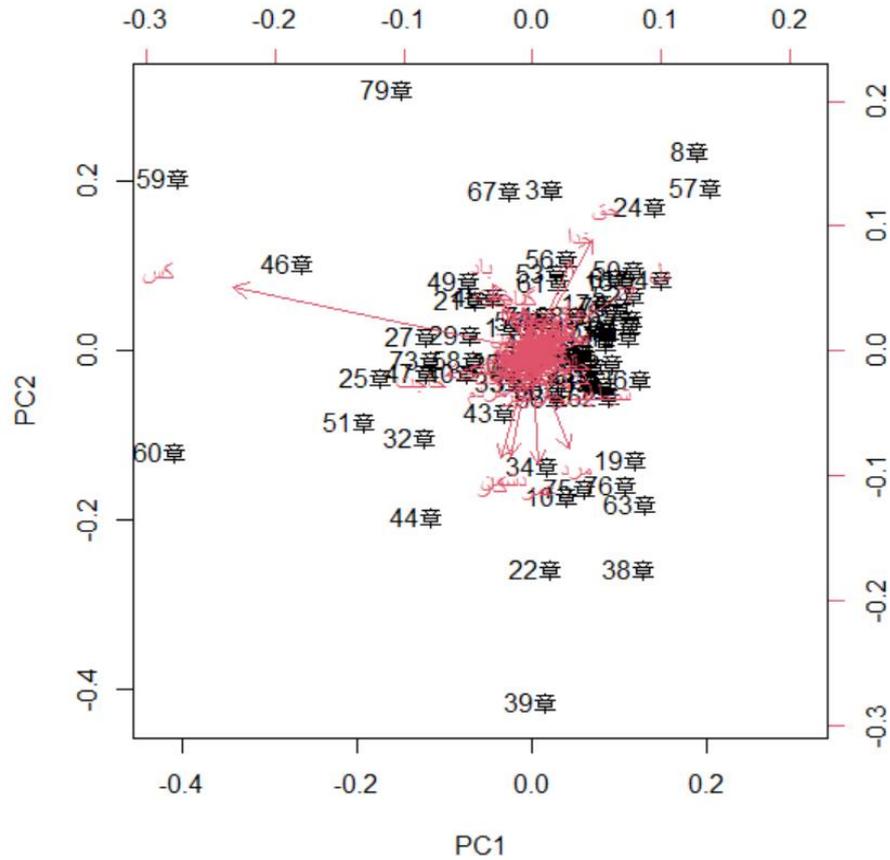


図 11.1 『忠言の書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.07865、PC2=0.06172)

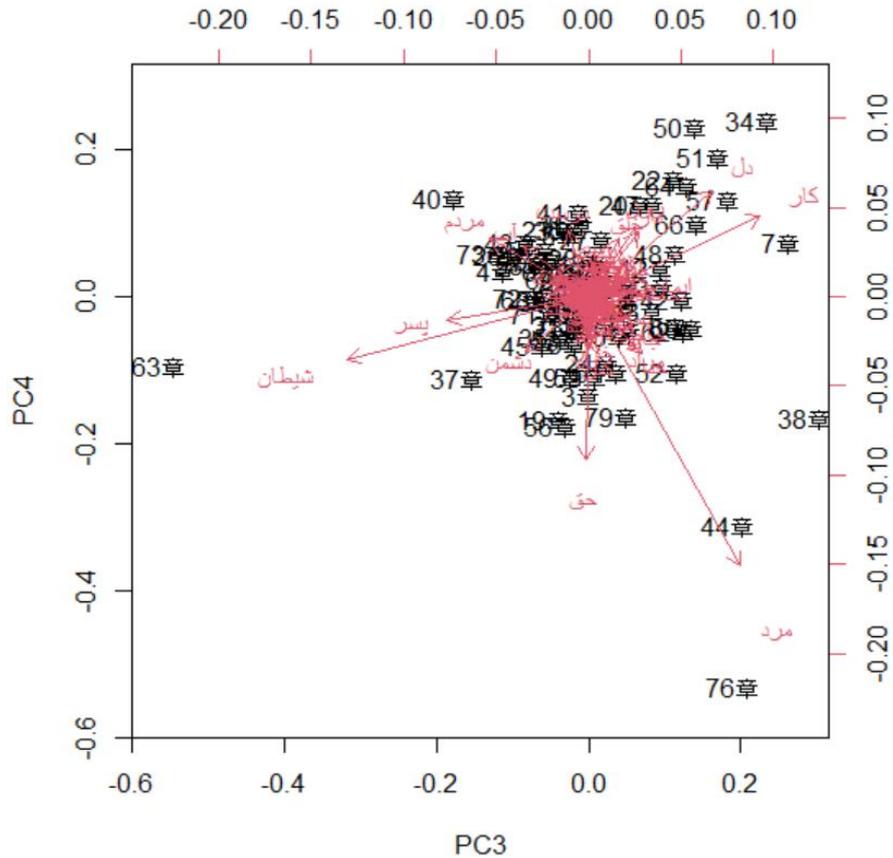


図 11.2 『忠言の書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC3=0.05527、PC4=0.05262)

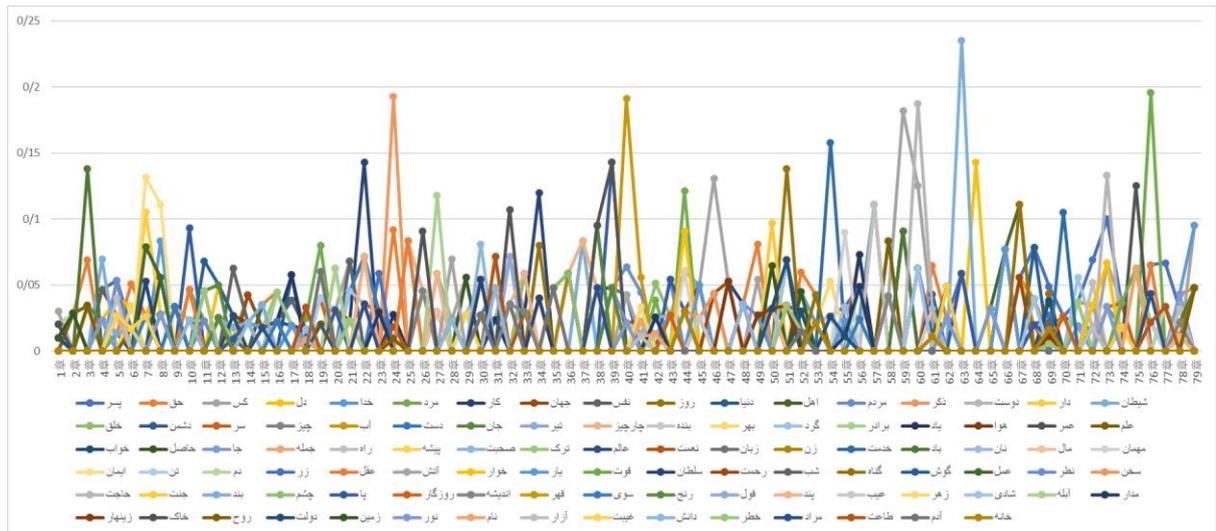


図 11.3 『忠言の書』最頻出名詞 100 の相対頻度

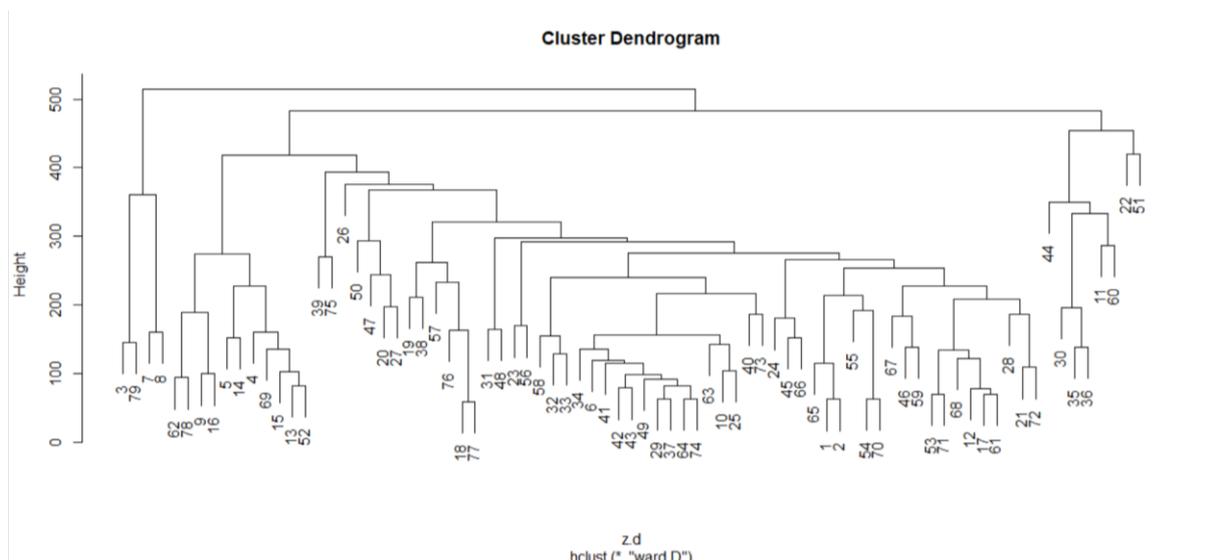


図 11.4 『忠言の書』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析 PC1、PC2 の結果、39 章、59 章、60 章、79 章は、特徴において、他の章と異なる。39 章は、「*عمر* ('omr)」という単語の頻度が高く、59 章は「*كس* (kas)」、60 章は「*حاجت* (hājat)」という言葉が使用される。79 章は「*خدا* (khodā)」や「*كس* (kas)」等の言葉が使用されている。

主成分分析 PC3、PC4 の結果から、63 章と 76 章は、特徴において、他の章と異なる。63 章は「*شیطان* (sheytān)」という言葉の使用頻度が高く、76 章は「*مرد* (mard)」という言葉が他の章より多用される。

特徴語の使用方法

39 章は、「*عمر* ('omr)」が人生として扱われ、人生を奪う行為として敵への恐怖などが語られる²⁴⁶。

(39 章)

その五つの中の一つは、高齢での困窮
 次に、孤立。そして、長い苦しみ
 死んだ者に目を向けるものは誰でも
 その人の寿命は間違いなく短くなる。息子よ
 五番目は、敵への恐怖と不安
 これらが、確かに人生を損なわせる
 敵たちを恐れる者
 彼の行動は毎瞬間、異なる²⁴⁷

59 章はケチな男の特徴について説明する。

(59 章)

ケチにおける特徴が三つある
 友よ、そなたに話します、それを覚えてください
 まず、乞食を恐れる
 そして、飢えの災難にも震える

²⁴⁶ 『忠言の書』の韻律はラマル体 (— U — — / — U — — / — U —)

²⁴⁷ Farīd al-Dīn 'Attār, *Pand-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh39> (accessed August 18, 2023).

道中で親類や知人に会った時
彼は風のように通り過ぎ、挨拶をする
彼の財産から誰も利益をない
彼の食布から、わずかな馳走しか得ない²⁴⁸

60章では、必要なこと「حاجت (hājat)」は容貌に優れている者やスルターンから求めるべきであることが説明される。

(60章)

醜い顔からは必要なものを求めるな
それを、良き顔を持つ者から求めよ
信者によって、そなたに何か仕事が生じたら
そなたはできる限り、彼の必要としていること叶えなさい
自分の欲求をスルターン以外の人から求めるな
求めるときは、門番からはそれを求めるな
(中略)
敵たちの死を喜ぶな
他の人の前で、誰かに公正さを振りかざすな²⁴⁹

79章は『忠言の書』の締めめの詩であり、この本の忠告を守る読者に神の慈悲があると記述される。

(79章)

これらの忠告を守るものは誰でも
神は両世界で、彼に恩寵を与えるでしょう
だが、これらの戒めを守らなければ
彼は、疑いなく神から遠ざかる
(中略)
その者の魂に神の恩寵がありますように
これらの忠告を熱心に読む者に²⁵⁰

63章は人間のクシャミや鼻血やアクビなどの行為が「شیطان (sheytān)」の仕業と記述される。

(63章)

人々がクシャミをした時
それは間違いなくシャイターンの仕業である
鼻血もシャイターンが原因であり
それは明らかに人間の敵である
アクビも悪魔の仕業である
息子よ、彼の策略に油断するな²⁵¹

²⁴⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh59> (accessed August 18, 2023).

²⁴⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh60> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh79> (accessed August 18, 2023).

²⁵¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh63> (accessed August 18, 2023).

76章は「مرد (mard)」で男を表し男とはいかなるものかという説明がある。

(76章)

男らしさとは何か、良き息子よ、知っておけ
まず、姿が見えない時も神を恐れること
罪を犯す前に許しを求めるのが男
彼には服従が罪よりも多い

(中略)

息子よ、男たちと交際しなさい
そうすれば、そなたは神の卓越性を目の当たりにする
真実の男たちと認識される者は
敵の欠点を口にしない
なぜなら、真実の男は敵たちを滅ぼすことを望まないから
人々の悲嘆に対して悲しみで満ちている²⁵²

階層的クラスター分析の結果、章は大きく以下の四つのクラスターに分類できる。

クラスター1: 3章、7章、8章、79章

クラスター2-1: 4章、5章、7章、13章、14章、15章、16章、52章、62章、69章、78章

クラスター2-2: 1章、2章、6章、10章、12章、17章、18章、19章、20章、21章、23章、24章、25章、26章、27章、28章、29章、31章、32章、33章、34章、37章、38章、40章、41章、42章、43章、45章、46章、47章、48章、49章、50章、53章、54章、55章、56章、57章、58章、59章、61章、63章、64章、65章、66章、67章、68章、70章、71章、72章、73章、74章、75章、76章、77章

クラスター3: 7章、11章、22章、30章、36章、44章、51章、60章

クラスター2-1 と 2-2 は隣り合っていて、最も大きなクラスターを形成する。この二つのクラスターを合わせたものとクラスター3が隣り合っていて、クラスター2-1、2-2、3を合わせたものとクラスター1が隣あっている。

²⁵² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh76> (accessed August 18, 2023).

(2) 愛に関する単語について

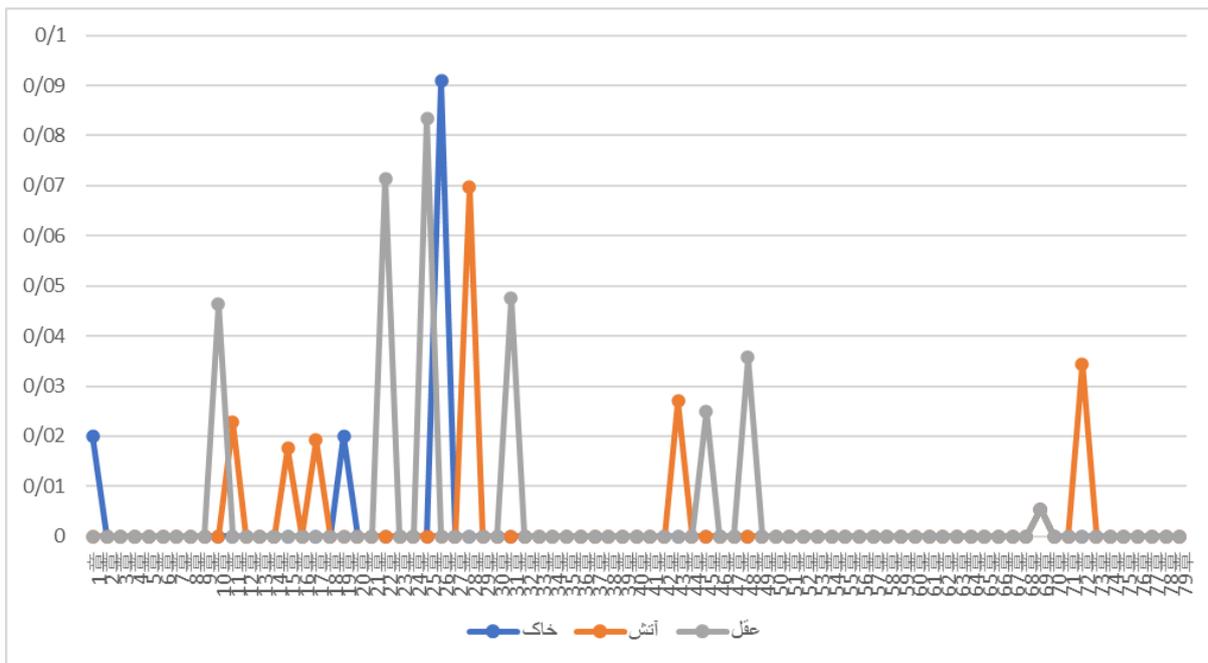


図 11.5 『忠言の書』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

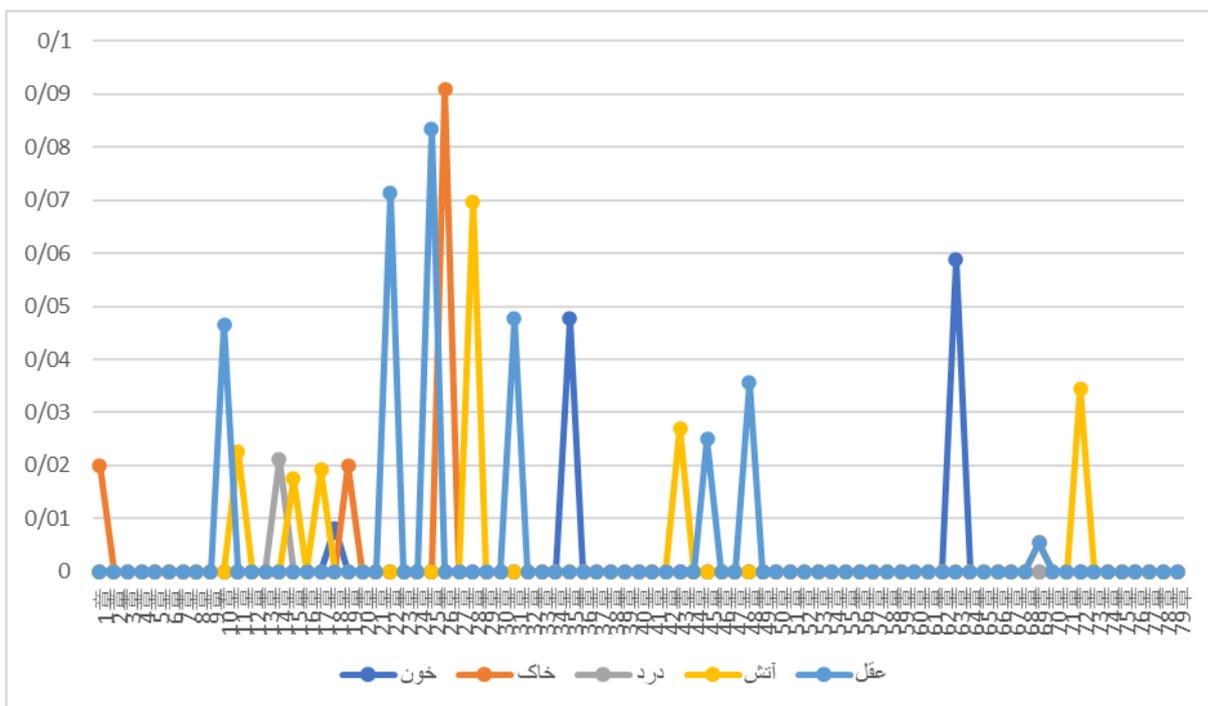


図 11.6 『忠言の書』愛に関する単語の相対頻度

愛に関する単語のうち頻度が 100 位以内に入っているものは、「**خاک (khāk)**」と「**آتش (ātesh)**」と「**عقل (‘aql)**」しかない。「**خون (khūn)**」は全体で三回しか使用されず、「**درد (dard)**」は一回しか用いられない。さらに、「**اشک (ashk)**」と「**عشق (‘eshq)**」は一回も使用されない。この結果から、ほとんどの愛に関する単語は、このテキストに登場する頻度が少ない。

愛に関する単語の内、「**عقل (‘aql)**」は 10 章、22 章、25 章や 31 章において主に用いられる。「**خاک (khāk)**」は 26 章において、「**آتش (ātesh)**」は 28 章、43 章、72 章において主に

用いられる。

愛に関する特徴語の使用方法

「عقل ('aql)」は理性を表し 10 章、22 章、25 章、31 章において肯定的に用いられる。理性は良いものであり、知識や分別にとって役立つものとして描かれる。

(10 章)

知ること、理性、知性を持つ者は
理性と知識のある人々を尊重する
兄弟よ、そなたが完成された知恵を持つなら
人々に柔和で甘い言葉を語れ²⁵³

(22 章)

親愛なる者よ、理性と知識がある者全ては
四つのことから遠ざかるべきだ
自分の仕事を不適切な者と共に放棄しない
適切でない場所で人々に実行させない
理性があるなら、悪い行為を望むな
これらのことから離れた時、軽率なことをするな²⁵⁴

(25 章)

全ての人に良い四つのことがある
親愛なる者よ、これをそなたに伝えるから、覚えておいて
ほしい
まず、公平であるべき
そして、自身の理性によって知るべき
忍耐をもって接近することだ
人々への尊重を適切にすることだ²⁵⁵

(31 章)

理性なしの知識は無力である
理性のない者たちの前で座るべきではない
知恵なき知識は有害である、息子よ
知識は鳥で、理性は翼だ、息子よ
知識を持ちながら理性のない者は
理性の道から逸れてしまう²⁵⁶

26 章は、怒りや妬みから自由になることが主題であり、「خاك (khāk)」は死や、感情が落ち着いている状態の比喩として用いられる。

(26 章)

愚痴や興奮を捨て、金のように純粋になれ
土になる前に、土になれ
食欲を捨て、節制しろ

²⁵³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh10> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁴ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh22> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh25> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh31> (accessed August 18, 2023).

最後に、死について考えろ²⁵⁷

28章では、些細なものに見えるが、無視すると危うい物が四つ紹介される。四つの内の一つが「آتش (ātesh)」であり、敵という単語とともに登場し否定的な意味で使われる。さらに、悪いことの比喩として「آتش (ātesh)」が使われて、鎮火しなければ、大惨事になる可能性が高いことが示される。

(28章)

一つ目は敵、別のもの (二つ目) は火
[三つ目は] 心が不快になる病気
(中略)
少しの火の粒が燃え上がれば
それで一つの世界が燃えるのを見よ²⁵⁸

43章や72章でも抑圧や悪いものの象徴として「آتش (ātesh)」が使われる。

(43章)

貧者に良い談話を話すことは
絹で覆われた火よりも価値がある²⁵⁹

(72章)

貧者よ、圧制者の方から逃げろ
貧者よ、そなたが、鋭い火で焼かれないように
圧政者との交際は火のようだ
なぜなら、彼らは人々を苦しめ、短気で、反抗的だからだ
²⁶⁰

²⁵⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh26> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh28> (accessed August 18, 2023).

²⁵⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh43> (accessed August 18, 2023).

²⁶⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/pandname/sh72> (accessed August 18, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

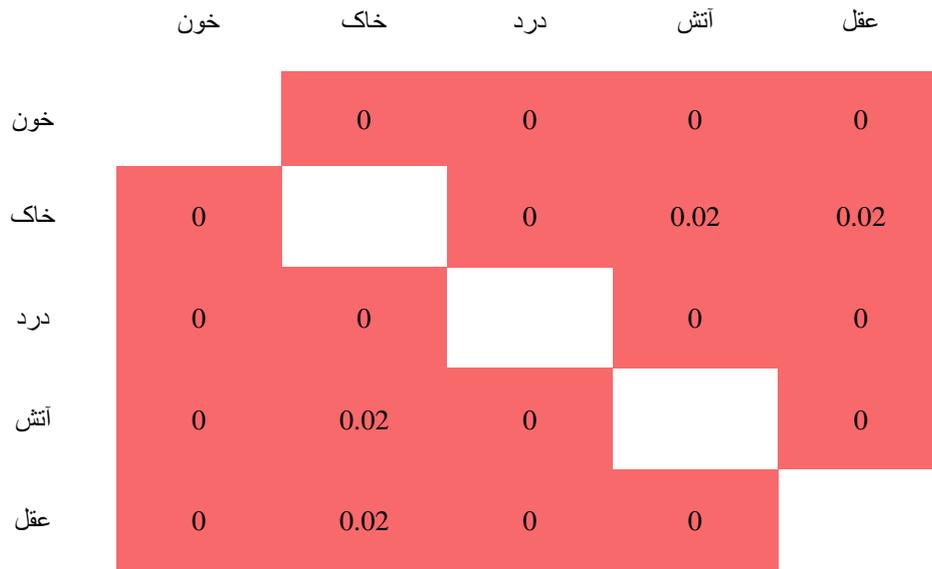
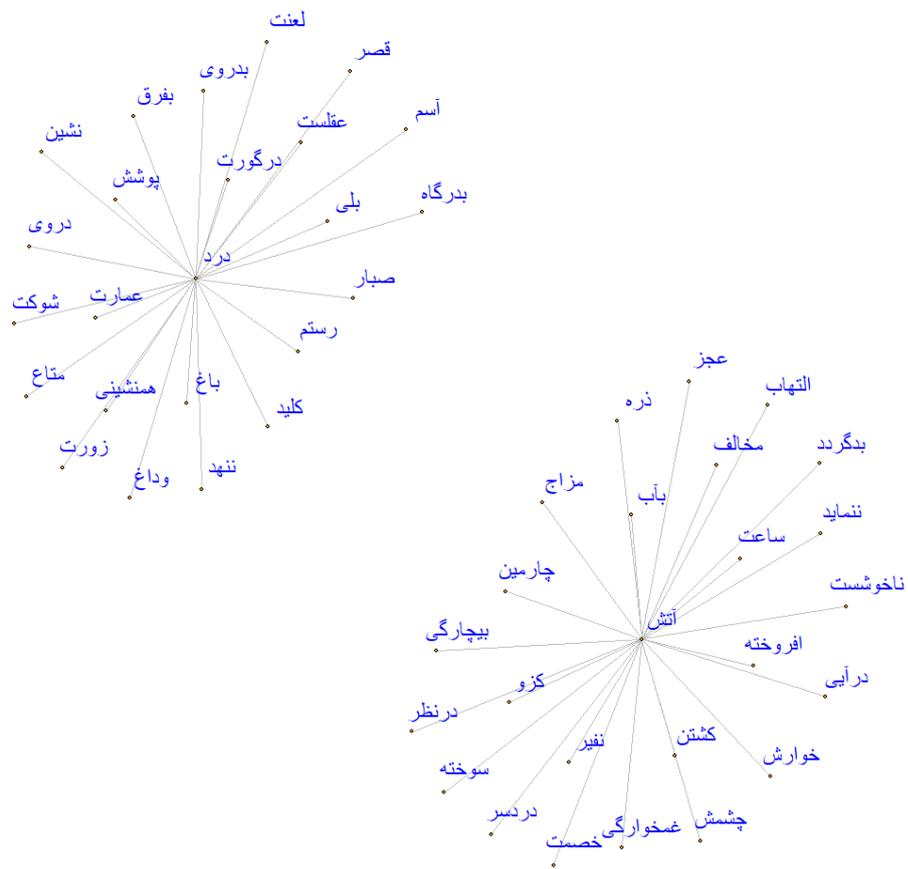


図 11.7 『忠言の書』愛に関する単語同士の共起関係

愛に関する単語において、共起するものはほとんどない。明らかに一つ一つの章が短く、章当たりの単語数が少ないことも原因である。しかし、図 11.8 からそれぞれの愛に関する単語と最も共起する単語の重みの値が大きいことから、それが最も大きな原因ではない。むしろ、他のテキストと比べ「آتش (ātesh)」や「عقل ('aql)」の用法が異なること、「عشق (eshq)」が他テキストと異なり単語として出現しないことを原因と考える方が妥当である。

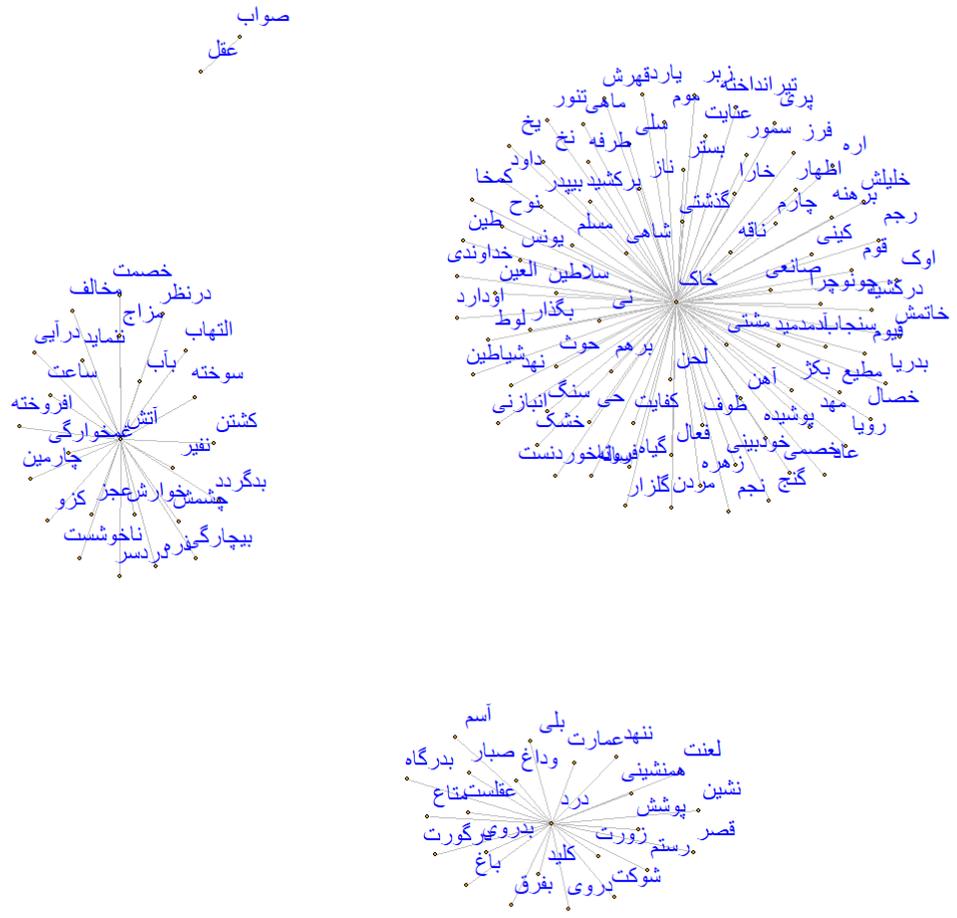
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | آشام | 0/57 |
| خاک | خشک | 0/66 |
| درد | باغ | 1 |
| آتش | افروخته | 0/71 |
| عقل | صواب | 0/6 |

図 11.8 『忠言の書』愛に関する各単語と最も共起する単語



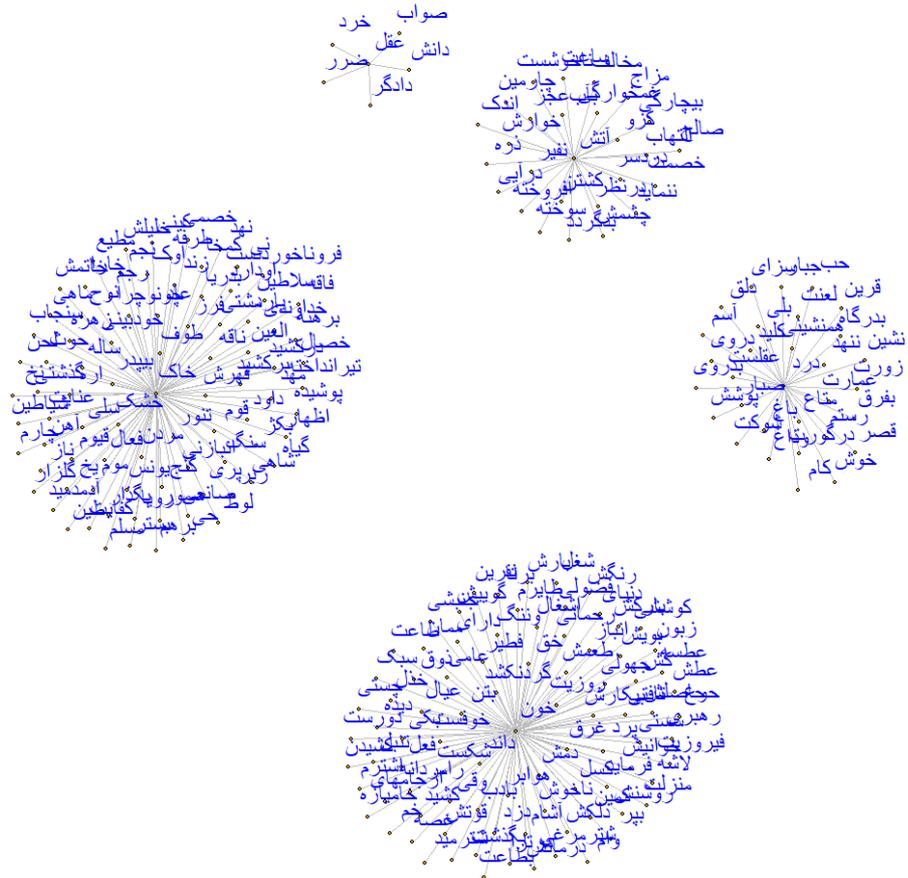
correlation Threshold: 0.7

図 11.9 『忠言の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.7以上）



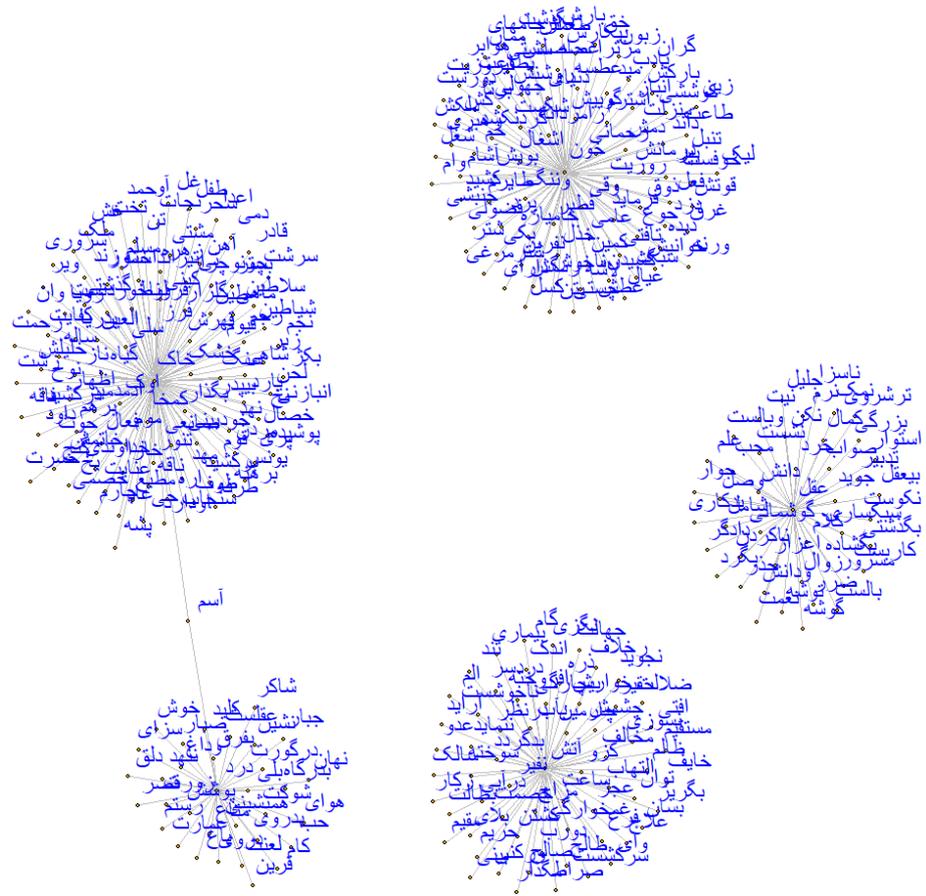
correlation Threshold: 0.6

图 11.10 『忠言の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 11.11 『忠言の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.4

図 11.12 『忠言の書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4 以上)

前述したように、アッタルの他テキストと異なり、愛に関する単語が互いに結びつくことがなく、さらに、単語間で同様に共起する単語が「خاک (khāk)」と「درد (dard)」と共起する「آسمان (āsemān)²⁶¹」しかない。故に、これらの単語同士の関係は他のテキストに比べて薄く、これまでに分析していたテキストとは異なる特徴を明らかに持つ。

(4) 『忠言の書』まとめ

全体として愛に関する単語同士のつながりが弱い。他のテキストで、苦痛に関する単語として肯定的に扱われていた「آتش (ātesh)」は、このテキストでは否定的に扱われている。

一方、他のテキストで否定的もしくはニュートラルに扱われる「عقل ('aql)」という単語は肯定的に扱われる。故に、使用単語と用い方が、他のアッタルのテキストと明らかに異なる。さらに、敵への恐怖や、ケチさなど他のテキストでは主題に扱われないものも、主題として扱われる。

²⁶¹図 11.12 では「آسم (āsem)」と記載されているが、共起ネットワークが ān を複数形と認識して起こった不具合である。

2-10. 『驚異の顕現』に対する (1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

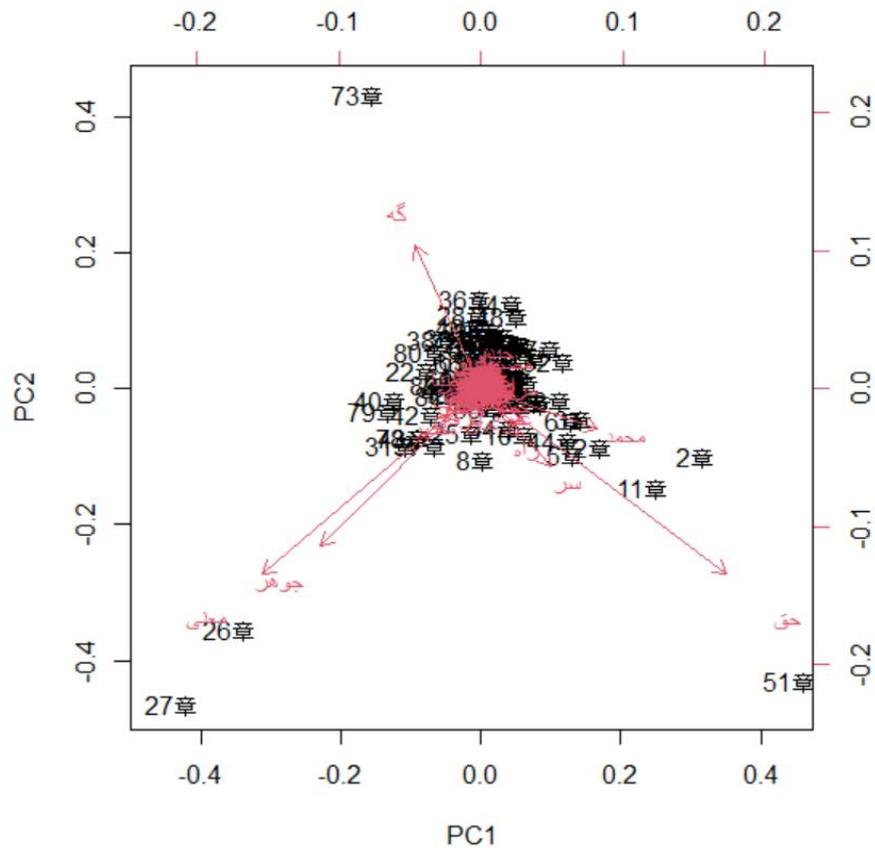


図 12.1 『驚異の顕現』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.12034、PC2=0.10132)

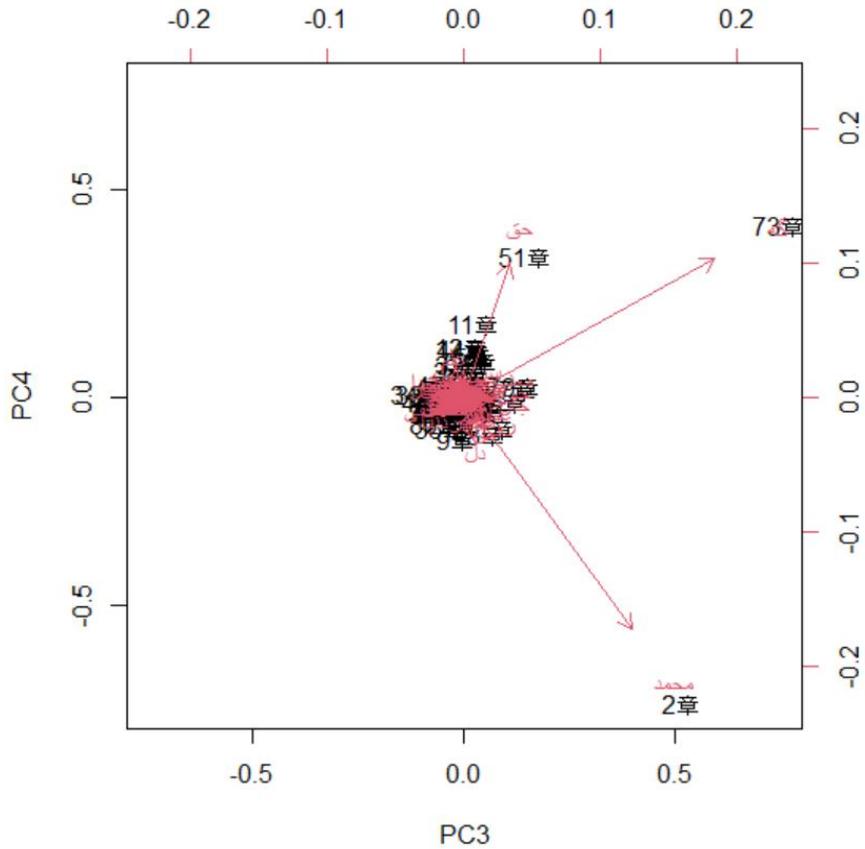


図 12.2 『驚異の顕現』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC3=0.08311、PC4=0.07913)

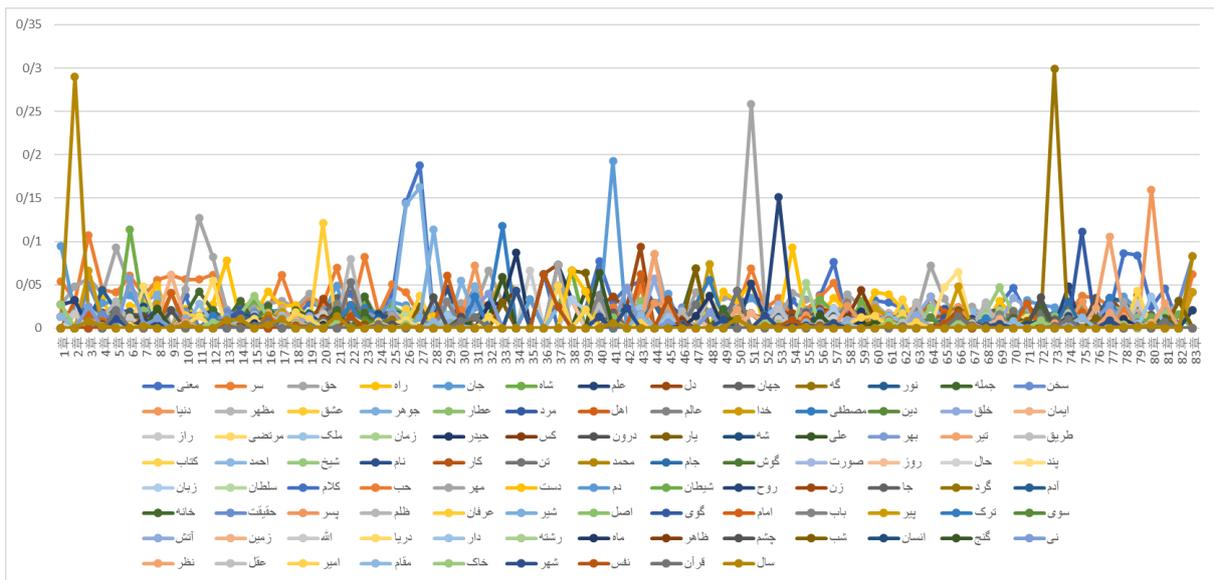


図 12.3 『驚異の顕現』最頻出名詞 100 の相対頻度

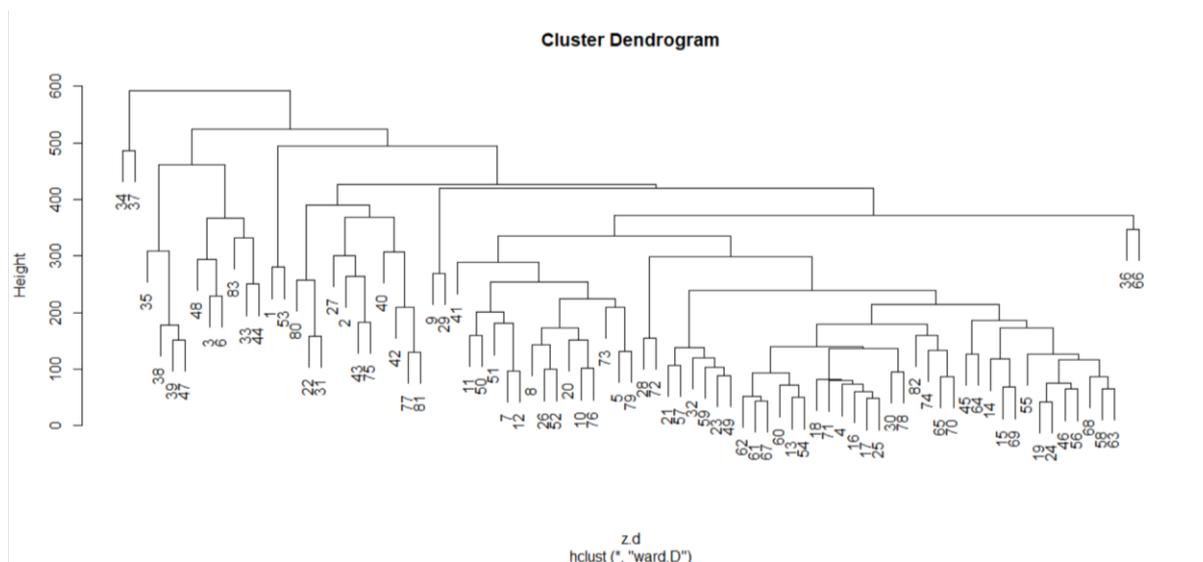


図 12.4 『驚異の顕現』 最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析 PC1、PC2 の結果、26 章、27 章、51 章、73 章は、特徴において、他の章と異なる。26 章と 27 章は「جوهر (jouhar)」と「معنى (ma'anī)」という単語の頻度が高い。27 51 章は、「حق (haq)」が比較的多く登場し、73 章は「گه (gah)」頻繁に使用される。

主成分分析の PC3、PC4 の結果から、2 章、51 章、73 章は、特徴において、他の章から外れている。51 章、73 章は上述の通りである。一方、2 章は「محمد (muḥammad)」の名前が登場し、頻度が他の単語に比べて高い。

特徴語の使用方法

26 章は本質について議論し、本質とは愛のことであると主張する。その際、本質という単語「جوهر (jouhar)」と意味を表す「معنى (ma'anī)」という単語が共に用いられる²⁶²。

(26 章)

愛とは何か、世界の神秘の意味である
 これらの意味を、魂の中で知れ
 私の本質の内部で、その愛が隠された
 しかし、私は外面において、それを明らかにする²⁶³

27 章も、26 章同様に「معنى (ma'anī)」と「جوهر (jouhar)」が共に用いられ、自身の精神の本質とは何かをシーア派のイマームを用いた様々な表現で表している。

(27 章)

私の意味の本質は、サーディク自身である
 それは、神秘主義道の知識に熟達している
 私の意味の本質は、カーズィムである
 意味として、決意と決心である²⁶⁴

51 章は、「حق (haq)」が、真実こと唯一求めるべきものであると説明される。

²⁶² 『驚異の顕現』の韻律はラマル体 (— U — — / — U — — / — U —)

²⁶³ Farīd al-Dīn 'Aṭṭār, *Mazhar al-'Ajāyeb*, <https://ganjooor.net/attar/ma/sh26> (accessed August 18, 2023).

²⁶⁴ *Ibid.*, <https://ganjooor.net/attar/ma/sh27> (accessed August 18, 2023).

(51章)

私は真実の他には何も見ない
なぜなら、彼は、私たちにこの区別を授けたから
真実が言ったこと全てを、私は実行した
真実以外のものを、私は全て破壊した²⁶⁵

73章は、神の様々な側面を表す章であり、それが、時に何々であれという形で「گ (gah)」を各詩の冒頭部分におくことで表している。

(73章)

時に海となり、波を打つ
時に男と女の間に入る
時に花となり、時に庭のサヨナキドリとなる
時に酒となり、時に酔った者の酔いとなる²⁶⁶

2章は、章全体にムハンマドの名前が登場し、彼の性質について語られる。

(2章)

そのムハンマドは、預言者たちの終わりであり、最良の使者
そのムハンマドは、両世界の主の光
そのムハンマドは、聖法の神秘の倉庫
ジブリール（ガブリエル）は彼の軍隊のために鎧を纏った²⁶⁷

階層的クラスター分析の結果では、まとまったクラスターが一つあり、それより小さいクラスターが連なり階段のようになっている。すなわち、4章、5章、7章、8章、10章、11章、12章、13章、14章、15章、16章、17章、18章、19章、20章、21章、23章、24章、25章、26章、28章、30章、32章、36章、41章、45章、46章、49章、50章、51章、52章、54章、55章、56章、57章、58章、59章、60章、61章、62章、63章、64章、65章、66章、67章、68章、69章、70章、71章、72章、73章、74章、76章、78章、79章、82章から構成される一つの大きなクラスターに、類似するクラスターが隣接し、階段状に連なっている。

²⁶⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh51> (accessed August 18, 2023).

²⁶⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh73> (accessed August 18, 2023).

²⁶⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh2> (accessed August 18, 2023).

(2) 愛に関する単語について

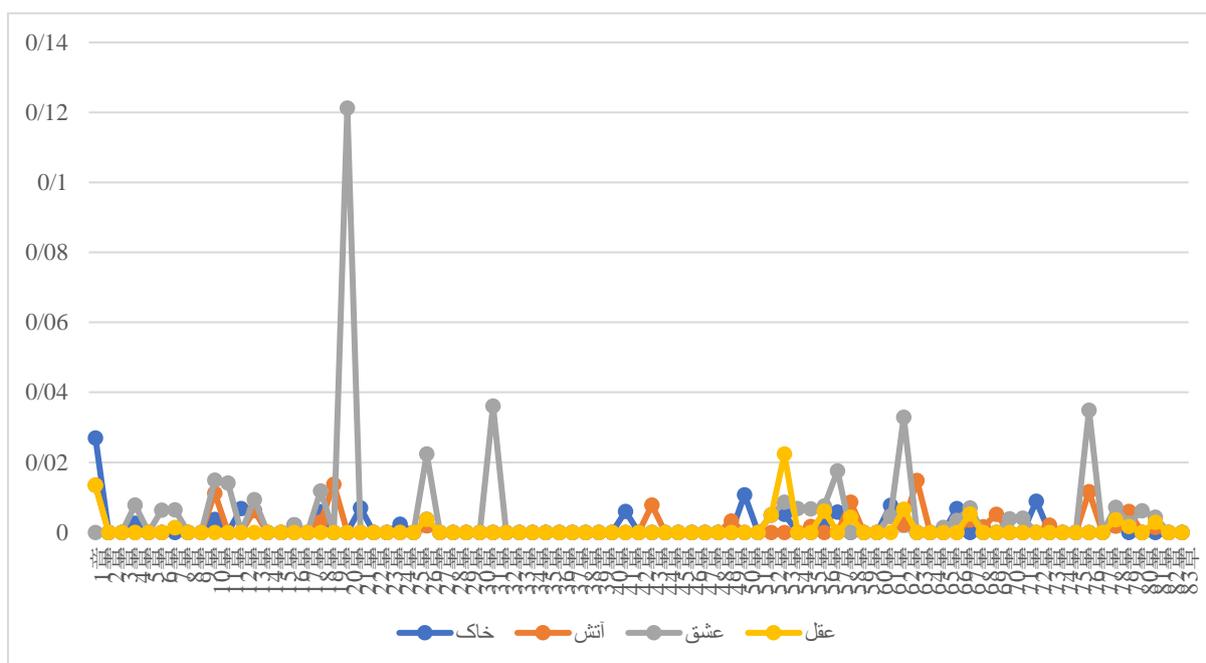


図 12.5 『驚異の顕現』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

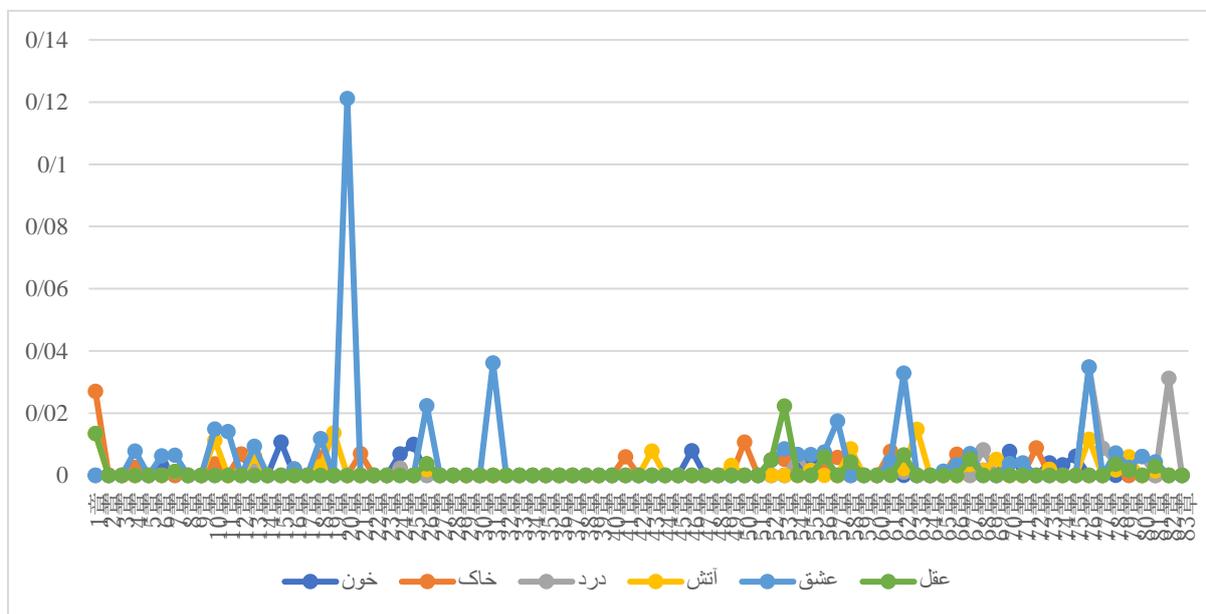


図 12.6 『驚異の顕現』愛に関する単語の相対頻度

「**خون (khūn)**」と「**درد (dard)**」はこのテキストにおいて、100位以内に入る単語として登場せず、「**اشک (ashk)**」は一回も登場しない。

20章で用いられる「**عشق (‘eshq)**」の相対頻度が他の章に比べて高い。31章、62章、76章でも愛に関する単語の中で「**عشق (‘eshq)**」の頻度が高い。53章では「**عقل (‘aql)**」の相対頻度が全章において最大となる。

愛に関する特徴語の使用方法

20章で用いられる「**عشق (‘eshq)**」の相対頻度が他の章に比べて高い。この章ではナースィル・フスローが登場し、彼の求める対象としての「**عشق (‘eshq)**」と比喻を用いた愛の性質の描写がある。

(20 章)

ナーシル・フスローは真理を追った
人々の間から去っていった
彼の友は一つの洞窟であり、その洞窟は暗かった
彼は真理の光と火によって、行為を行っていた
そなたも去り、行為において神のごとき男らしさを持って
自分の存在を赤の他人にせよ
愛のスルターンの顕現をそなたが見るなら
愛の証明を、そなたはこの世に示す
愛とは何なのか、心のスルターンのキブラである
愛とは何なのか、心の空間のカアバである
愛とは何なのか、そなたの目的地であり目的である
愛はそなたの崇拜であり信仰の対象である²⁶⁸

31 章は「عشق (‘eshq)」がアリーから来ることを記述している。

(31 章)

私が愛の支配地に到達すると
私の耳に愛の叫びが聞こえてきた
私の愛の「おお、おお」はアリーから来る
なぜなら、彼はアフマド (ムハンマド) の知識の中にいる²⁶⁹

62 章は逸話の後、ムハンマドやアリーが神の代理者であることが述べられる。その後、「عشق (‘eshq)」が「神への愛」を表すものとして使用される。

(62 章)

彼への愛が、私の魂から現れ
彼の愛が私の信仰全てになった
そなたが男であれば、彼の愛の道を選べ
さすれば、この世と宗教の中で幸福になる²⁷⁰

76 章では、「عشق (‘eshq)」と「درد (dard)」がそれぞれ愛の対象であるユースフ (ヨセフ)、ユースフに対する愛の痛みを持っているヤアクーブ (ヤコブ) というように、登場人物の愛の痛みの表現として使用されている

(76 章)

そなたは、ユースフと共にあり、以下のような哀れなヤアクーブである
ユースフから離れて喪に服している
悲しみのあばら家の内に行き
ユースフともに小さい井戸に捕らわれた
そなたが、ヤアクーブとして魂が親愛なるものになった時

²⁶⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh20> (accessed August 18, 2023).

²⁶⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh31> (accessed August 18, 2023).

²⁷⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh62> (accessed August 18, 2023).

より良いものよ、ユースフとして親愛なる王国が与えられた

(中略)

そなたは、アイユーブ（ヨブ）に痛みと忍耐を与えた
結果、彼の痛みへの治療を与えた
彼にとってそなたへの痛みが治療である
信仰において、そなたへの愛の印がある
そなたはイルミヤー（エレミヤ）に愛の杯を与え
ユーシャア（ヨシュア）から愛の名声を得た²⁷¹

53章では「عشق（‘eshq）」と「عقل（‘aql）」が肯定的に使われる。

(53章)

理性を伴う者は、全て敬虔である
この不幸は、疑いなく愚かさから来る
誰においても、知性を同行者にするならば
月から魚まで、彼は見る
(中略)
知識と謙虚さと共に理性は同棲した
ワイン、酒場、そして恋人も同棲した
私と酒場から、愛が出てきた
それは、意味の王国に案内する
それは魂に言った、来て、私たちは飛び立とう
この身体の弊衣を完全に、私たちは破り捨てよう
立ち上がれ、一緒に意味のワインを私たちは飲もう
そして、意味の王国へ私たちは進む²⁷²

²⁷¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh76> (accessed August 18, 2023).

²⁷² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/ma/sh53> (accessed August 18, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

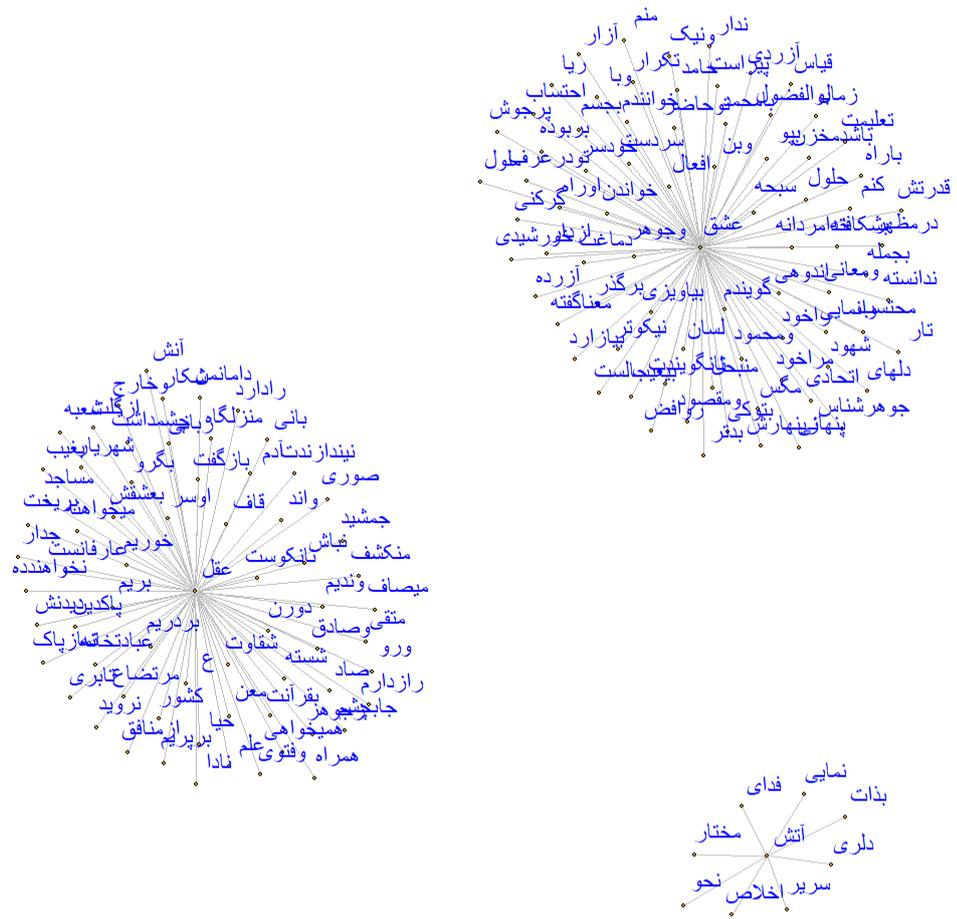


図 12.7 『驚異の顕現』愛に関する単語同士の共起関係

「خاک (khāk)」において「عقل ('aql)」との重みの値が高く、共起頻度が高い。他の愛に関する単語同士の重みの値は、それぞれが最も共起する単語の重みの値と比較すると低い。また、「خون (khūn)」は真作とされるアッタールのテキストと異なり、他の愛に関する単語と共起することがほとんどなく、共起する単語も、わずかに、「درد (dard)」のみとなる。

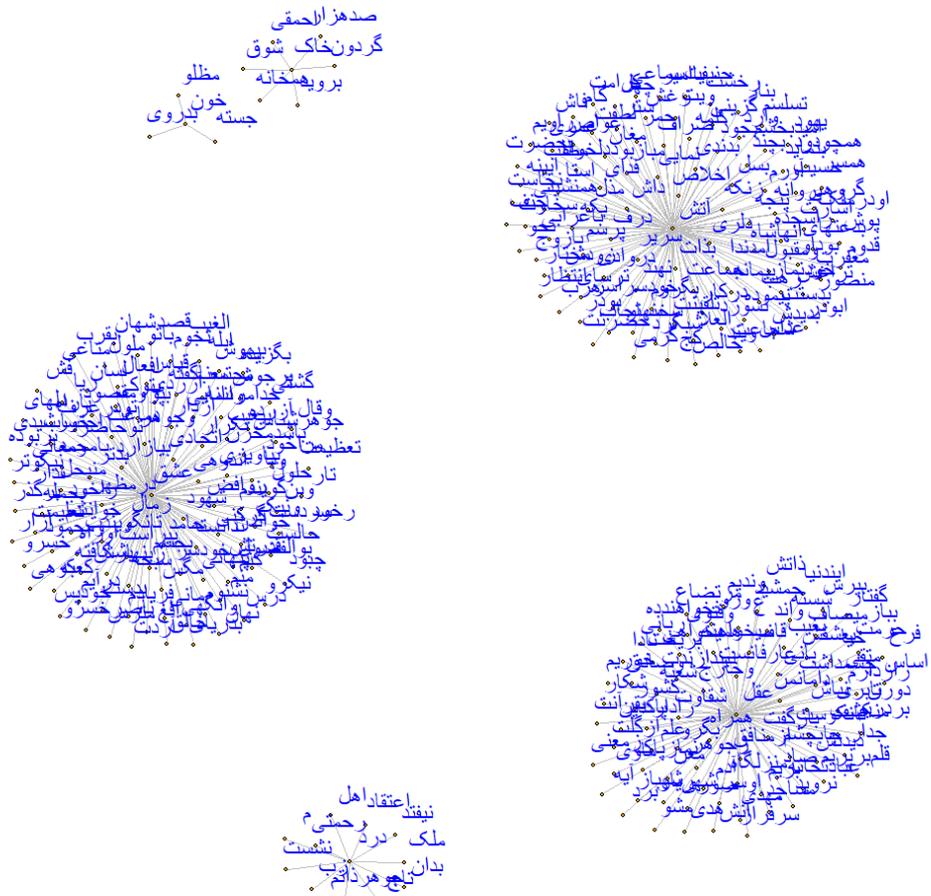
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | بدروی | 0/62 |
| خاک | احمقی | 0/62 |
| درد | نیفتند | 0/69 |
| آتش | اخلاص | 0/83 |
| عشق | آزرده | 0/88 |
| عقل | علم | 0/89 |

図 12.8 『驚異の顕現』愛に関する各単語と最も共起する単語



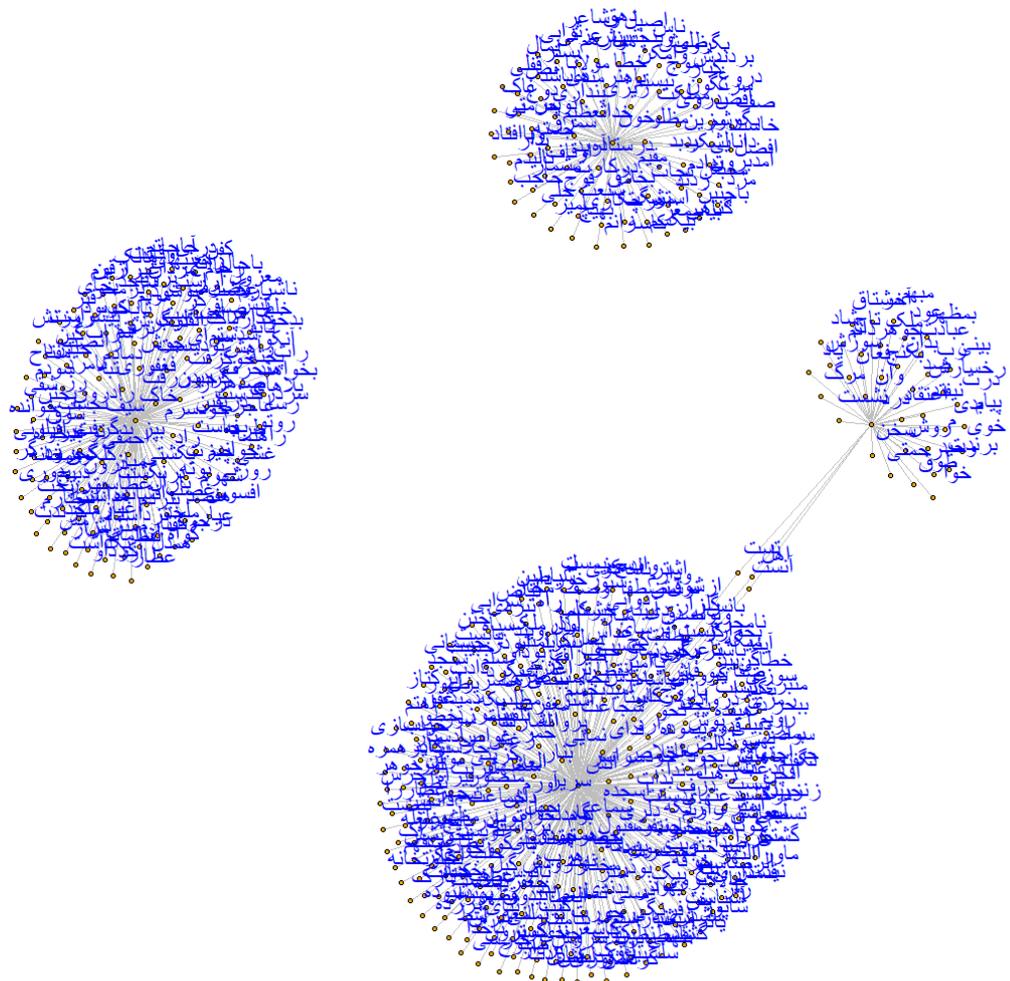
correlation Threshold: 0.7

図 12.9 『驚異の顕現』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.7以上)



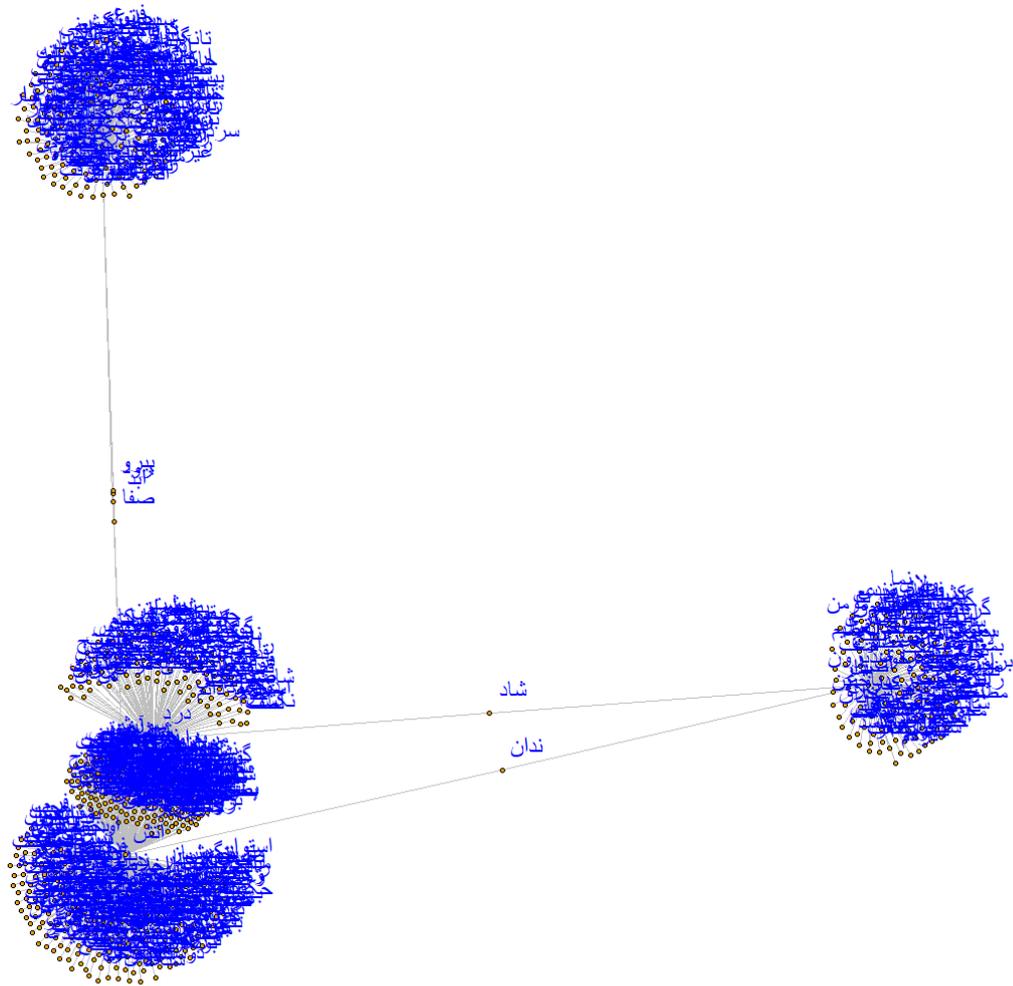
correlation Threshold: 0.6

図 12.10 『驚異の顕現』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6以上)



correlation Threshold: 0.5

図 12.12 『驚異の顕現』愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.4

図 12.13 『驚異の顕現』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.4以上）

重みが 0.6 の時、愛に関係する単語同士が共起する単語はない。

重みが 0.5 の時、「خاک (khāk) 」と「عقل (‘aql) 」、「عقل (‘aql) 」と「عشق (‘eshq) 」、「درد (dard) 」と「آتش (ātesh) 」において、それぞれ共起する単語が登場する。

重みが 0.4 の時、「خون (khūn) 」と「درد (dard) 」は「شاد (shād) 」と共起する。また、「آتش (ātesh) 」と「خون (khūn) 」は「ندان (na-dān) 」と共起する。「درد (dard) 」と「خاک (khāk) 」は、「صفا (ṣafā) 」と「ابد (abad) 」と共起する。

(4) 『驚異の顕現』まとめ

他のアッタールのテキストと異なり「خون (khūn) 」と他の愛に関する単語が共起することがほとんどない。

また、「جوهر (jouhar) 」が愛と密接にかかわるものとして登場する。さらに、ナーシール・フスローが 20 章で登場し重視される。これらの点は、他のアッタールのテキストとされるものと異なる。

2-11. 『ヒーラージュの書』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

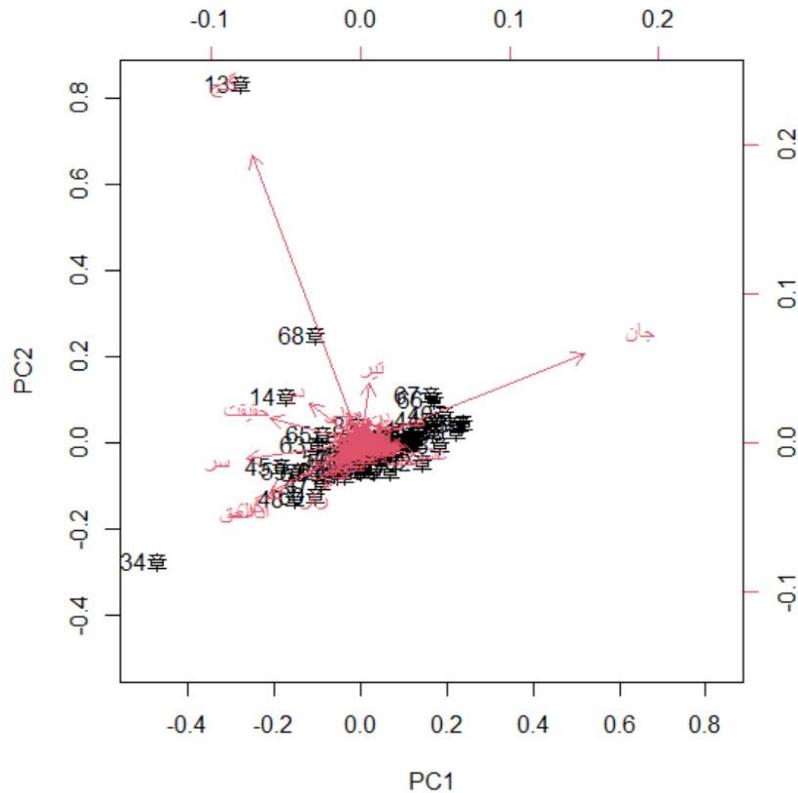


図 13.1 『ヒーラージュの書』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.13657、PC2=0.13066)

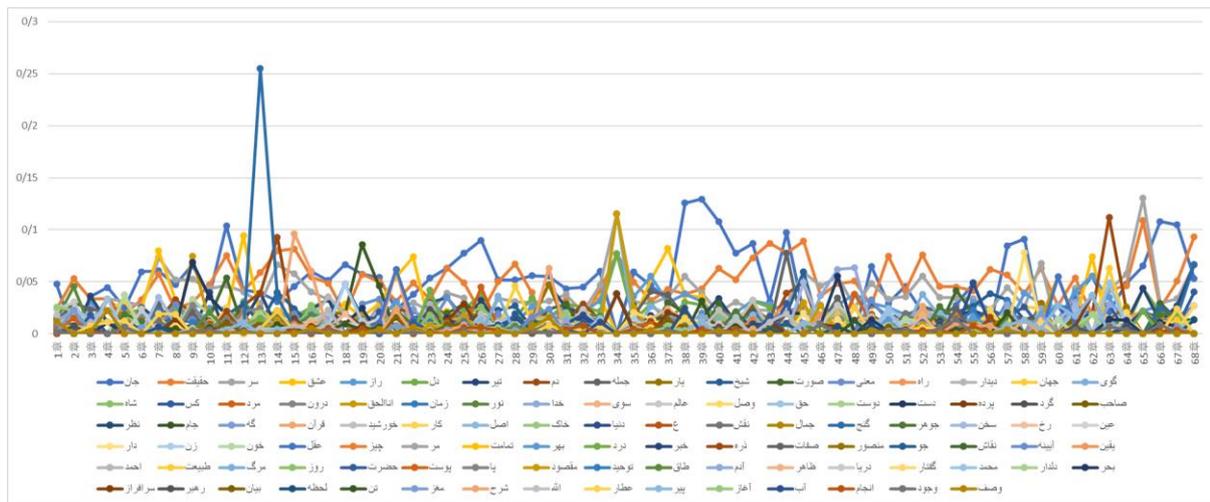


図 13.2 『ヒーラージュの書』最頻出名詞 100 の相対頻度

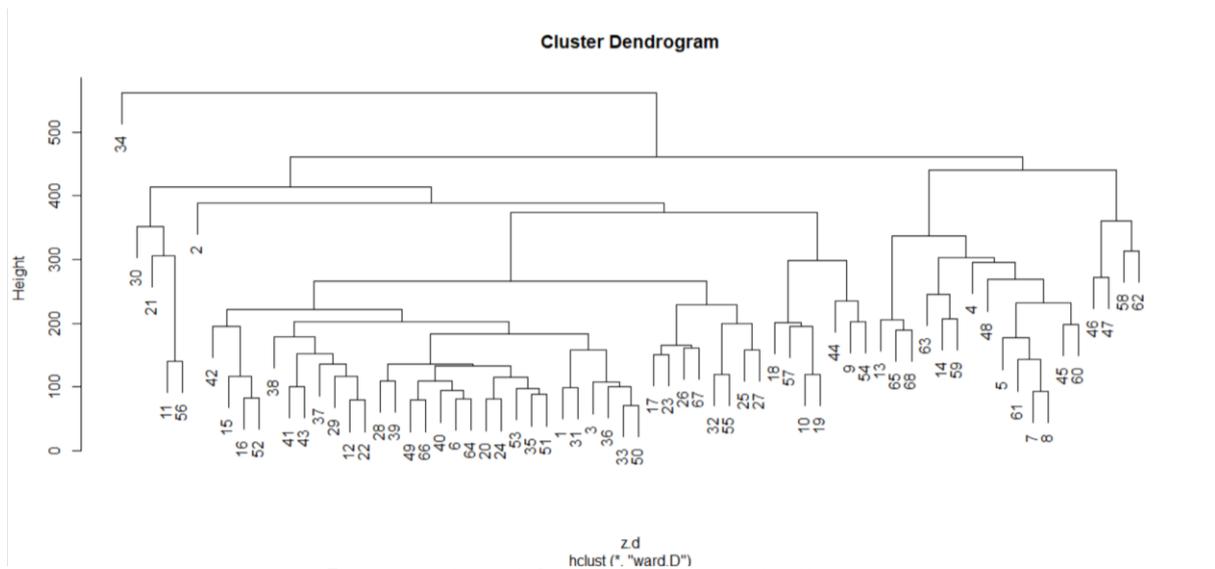


図 13.3 『ヒーラーजूの書』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、13 章、34 章、68 章は、特徴において、他の章と異なる。13 章は「گنج (ganj)」の相対頻度が他の章より高く、34 章は「انا الحق (anā al-ḥaq)」の相対頻度が他の章より高い。そして、68 章は「حقیقت (ḥaqīqat)」と「گنج (ganj)」を合わせた相対頻度が他の章より高い（「حقیقت (ḥaqīqat)」単体は他の章でも頻繁に登場する）。

特徴語の使用方法

13 章において、「گنج (ganj)」は「神への愛」において探究すべきものの比喩として用いられる。「神への愛」は、愛の中や苦しみの中で見出されるもので、「انا الحق (anā al-ḥaq)」の境地であることが明言される²⁷³。

(13 章)

ここで、この財宝の上で私は食べる
 疑いなくここで、痛みを持っている
 この財宝の上で私は再び食べる
 私は、ここで愛を繰り返す
 (中略)
 この瞬間を、ここで知っている者は
 ここに、愛する者以外いない
 その瞬間によって、真実の瞬間を知っている
 確かに、マンスール (ハッラーजू) は「私は真実です
 (anā al-ḥaq)」とおっしゃっている²⁷⁴

34 章は、ハッラーजूが「انا الحق (anā al-ḥaq)」と叫ぶ状態について、シブリーが尋ねる章である。

(34 章)

なぜ「انا الحق」という言葉を時々言うのか
 今、私に、絶対的な秘密を説明してください
 ここで、そなたが言うことは聖法ではない

²⁷³ 『ヒーラーजूの書』の韻律はハザジュ体 (U — — — / U — — — / U — —)

²⁷⁴ Farīd al-Dīn ‘Attār, *Hilāj-nāme*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh13> (accessed August 18, 2023).

この発言により、そなたは何を求めているのか²⁷⁵

68章は、マンスールが、真実から来る宝であることが「حقیقت (ḥaqīqat)」と「گنج (ganj)」で表され、このテキスト自体も真実について明かすものであると説明される。

(68章)

そなたのいかなる財宝も、明らかに残っていない
そなたにとって、魂のマンスールが友との出会い
そなたにとって、マンスールが真実からくる財宝
今日、そなたの視力があるとき、私で彼を見よ²⁷⁶

階層的クラスター分析の結果では、1章、3章、6章、12章、15章、16章、20章、22章、24章、28章、29章、31章、32章、33章、35章、36章、37章、38章、39章、40章、41章、42章、43章、49章、51章、52章、53章、64章、66章からなる大きなクラスターが一つある。それが、17章、23章、25章、26章、27章、32章、55章、67章からなるクラスターと隣り合う。その二つのクラスターは9章、10章、18章、19章、44章、57章と隣り合い、さらにそれらを合わせたクラスターが初めに2章と、次に11章、21章、30章、56章からなる小さなクラスターと、さらに、図の右にある比較的大きなクラスター、それら全てを含み最終的に隣り合うもの全てを合わせたクラスターは34章と隣り合う。

²⁷⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh34> (accessed August 18, 2023).

²⁷⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh68> (accessed August 18, 2023).

(2) 愛に関する単語について

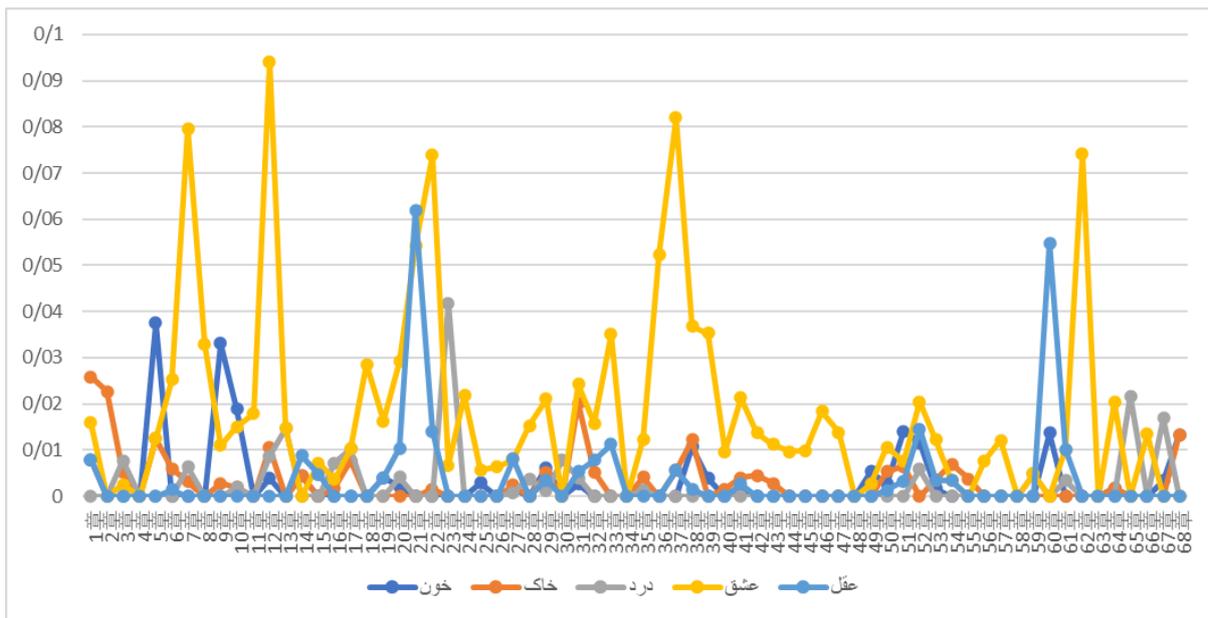


図 13.4 『ヒーラーजूの書』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

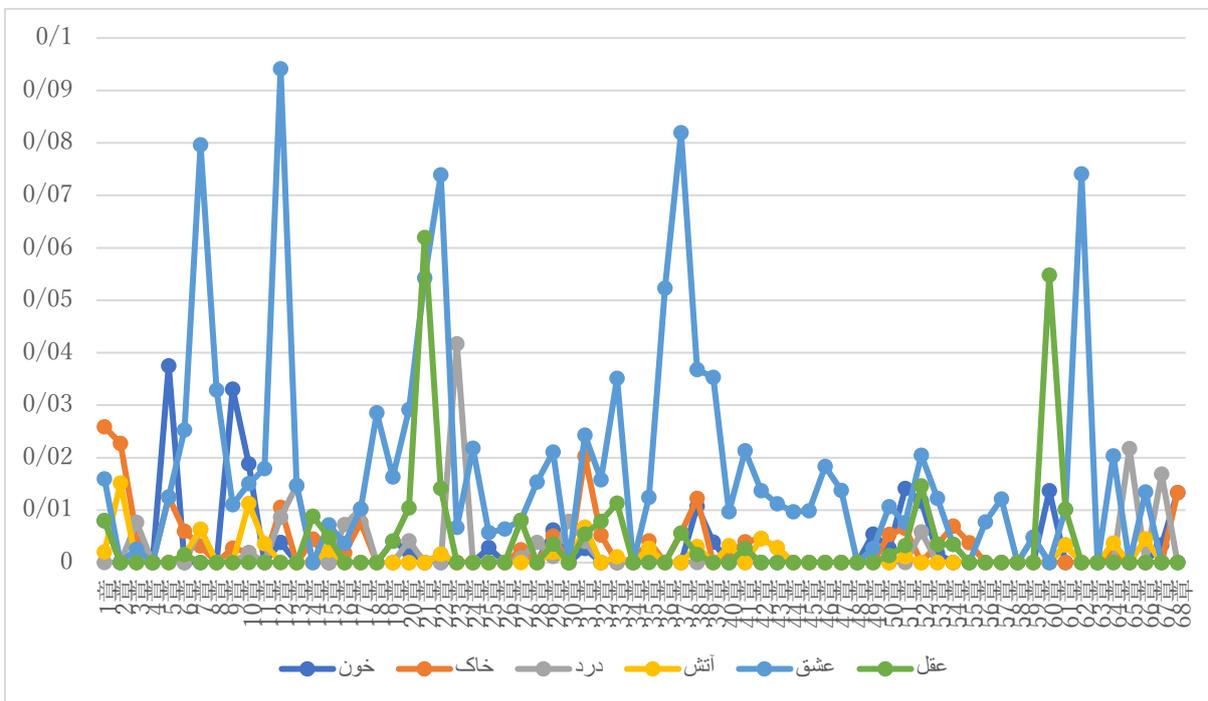


図 13.6 『ヒーラーजूの書』愛に関する単語の相対頻度

「神への愛」に関する単語の内「اشك (ashk)」はこのテキストにおいて登場しない。

7 章、12 章、22 章、37 章、62 章は「عشق ('eshq)」の相対頻度が他の「神への愛」に関する単語より高い章である。そのうち、12 章は「عشق ('eshq)」の相対頻度が全章の中で最も高い。21 章は「عقل ('aql)」の相対頻度が全章において最も高い。

愛に関する特徴語の使用方法

7 章は、愛の中に消滅する「神への愛」の道を説きつつ、アッタールの言葉が「神への愛」と関係することと、「神への愛」の体現者としてのハッラーजूについて説明する。

(7章)

愛の真実を知り、消滅せよ
その消滅の実体から存続の実体となれ
愛の真実で友への導き手がやって来て
そなたから友まで [の距離] は髪の毛一本ほどもない
(中略)
その言葉が痛みに満ちているならば、それは愛の言葉であり
この言葉の真実是不死である
もし男が [神の] 道を繰り返すなら
絶えず、アッタールに耳を傾ける
(中略)
私はハッラージュの秘密が明かされた
彼の名をヒーラージュの愛の中で示した²⁷⁷

12章では愛の状態と、愛=真実であることが説明される。

(12章)

愛から来た一つの瞬間が、生きている者たちである
その瞬間、全てのものが隠された秘密である
愛が来る一つの瞬間が、そなたの存在の中にある
その瞬間によって見よ。そなたの出会いがある
(中略)
神秘主義道の師よ、私は愛より良いものを見たことがない
愛より良いものは存在しない
ここで愛より良い真実を、私は見たことがない
愛の中に、そなたの視力の視力がある
ここで、愛をマンスールのよう知るようになれ
隠されたものから、そなたはマンスールのように現れよ²⁷⁸

22章は、愛と理性の関係を表している。理性は有益であるが、愛が来るときには、理性から離れて、愛と共にいるべきであると説明される。

(22章)

世界の秩序は明らかに理性による
ここには、理性から成功を得た者は
最終的に行為において案内を得る
彼において、魂の神秘が明らかになる
理性に留まるな、そなたが道の男ならば
さもなければ、ここで減少する
理性に留まるな、愛と一緒に自身があるならば
ここで、愛は画家を表す²⁷⁹

37章は、愛の状態について語る。また、ハッラージュの状態を愛の中にある状態である

²⁷⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh7> (accessed August 18, 2023).

²⁷⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh12> (accessed August 18, 2023).

²⁷⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh22> (accessed August 18, 2023).

と説明する

(37 章)

私にとって、財宝によってあるこの場所と共に、愛がある
私は言葉の世界から自由になる
私は魂と頭と心で、愛を持っている
その道を探せ、そなたが到達するかもしれない
(中略)
私は愛であり、私はここで真理である
神秘主義道の師よ、私は絶対の秘密をそなたに語った²⁸⁰

62 章は、愛の状態で困惑している様子を説明する。

(62 章)

そなたは最終的に誰なのか、マンスールとは誰か
このそなたの顔の前で、光は何なのか？
友よ、ここで、そなたは私を消し
今宵、そなたは愛の中に姿を現した²⁸¹

21 章は「عقل ('aql)」が主題である。「عقل ('aql)」が機能を果たす条件について説明する。この章において、「عقل ('aql)」はイスラーム法と関係する場合にその機能を果たすことが説明される。

(21 章)

探究していて、彼は真実を探している
理性は聖法の中に留まっている
最後、彼に対してその戸が開けば
彼には愛によって神秘が明らかになる
もし、彼がコーランから、全体において、理性を導くならば
確実に、苦痛と苦しみから外にでる
もし、彼がコーランから、恋人を導くなら
一つのものを見る、全てが恋人の隘路の中にあることを
(中略)
理性の記述から、言われることが多く私にある
私において、友をみることが目的である
愛の記述から、私はいつも言う
私は言う、一種類から百色の秘密を据えろ²⁸²

²⁸⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh37> (accessed August 18, 2023).

²⁸¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh62> (accessed August 18, 2023).

²⁸² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/attar/hylajname/sh21> (accessed August 18, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

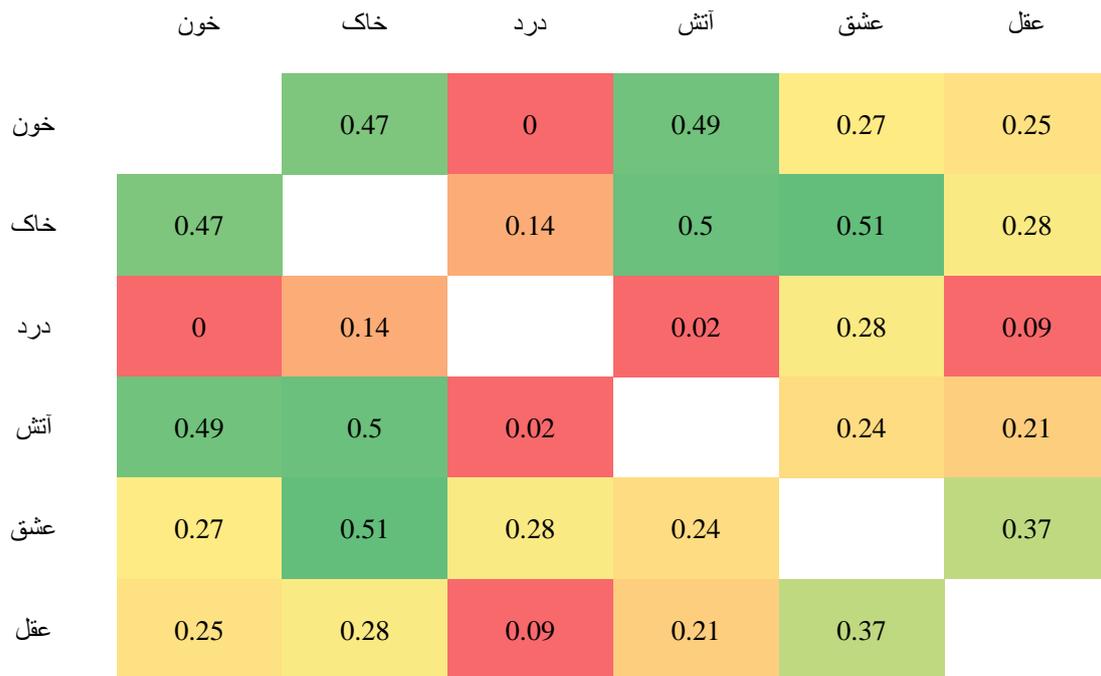
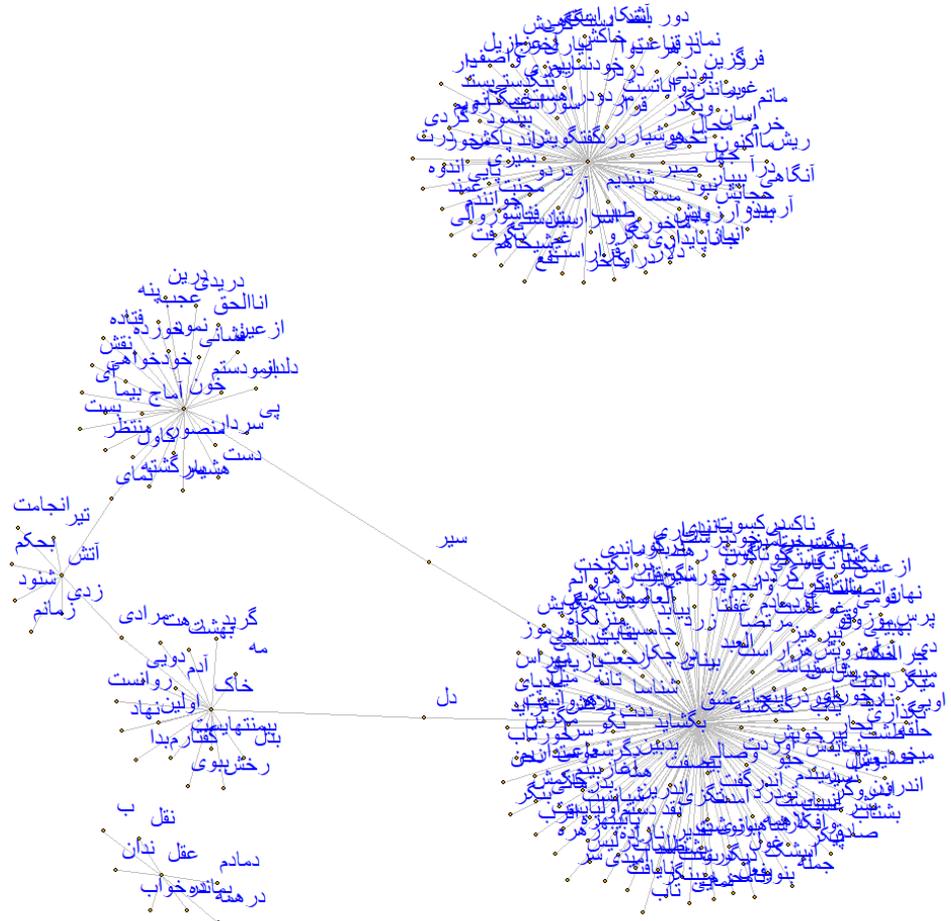


図 13.7 『ヒーラージュの書』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」は「خاک (khāk)」、「آتش (ātesh)」との重みの値が高く、共起する頻度も高い。「خاک (khāk)」は「خون (khūn)」、「آتش (ātesh)」、「عشق (‘eshq)」との重みの値が高い。「عقل (‘aql)」と「عشق (‘eshq)」も互いに比較的高い重みの値を記録している。

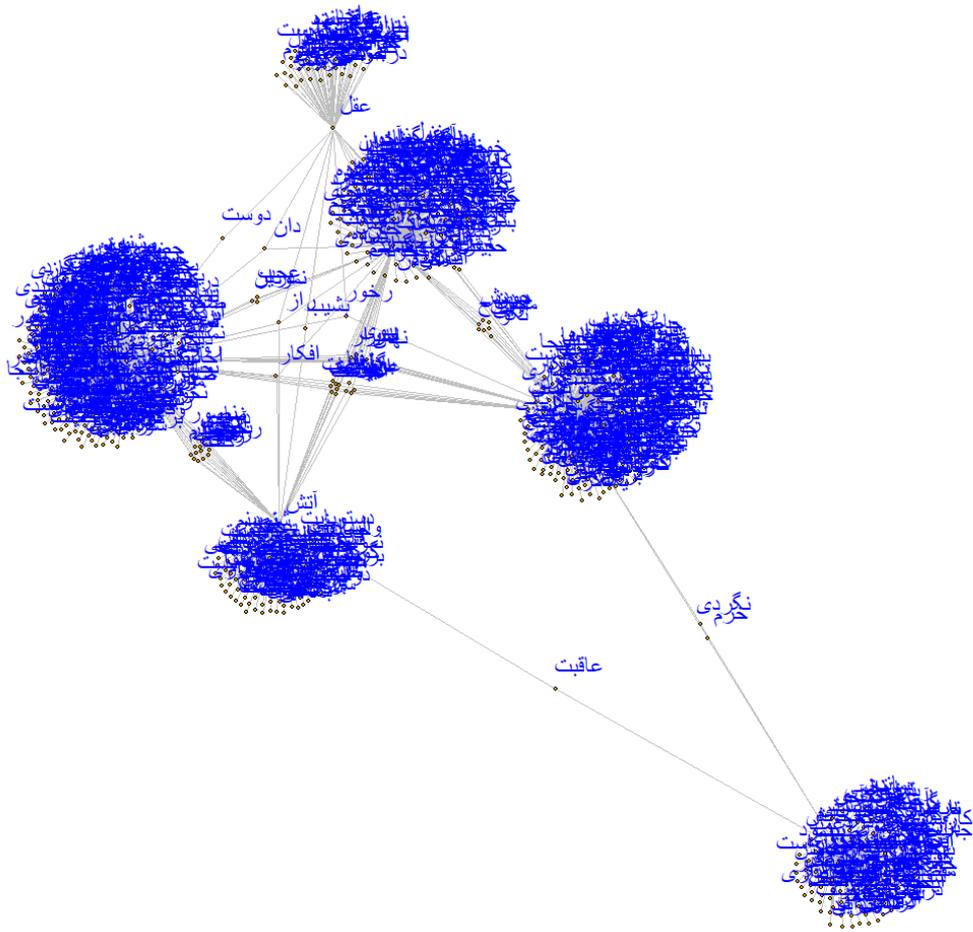
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|------------|------|
| خون | فشانى | 0.77 |
| خاک | بیمنٹھایست | 0.71 |
| درد | دوا | 0.81 |
| آتش | مرادى | 0.63 |
| عشق | قلب | 0.77 |
| عقل | درخواب | 0.69 |

図 13.8 『ヒーラージュの書』愛に関する各単語と最も共起する単語



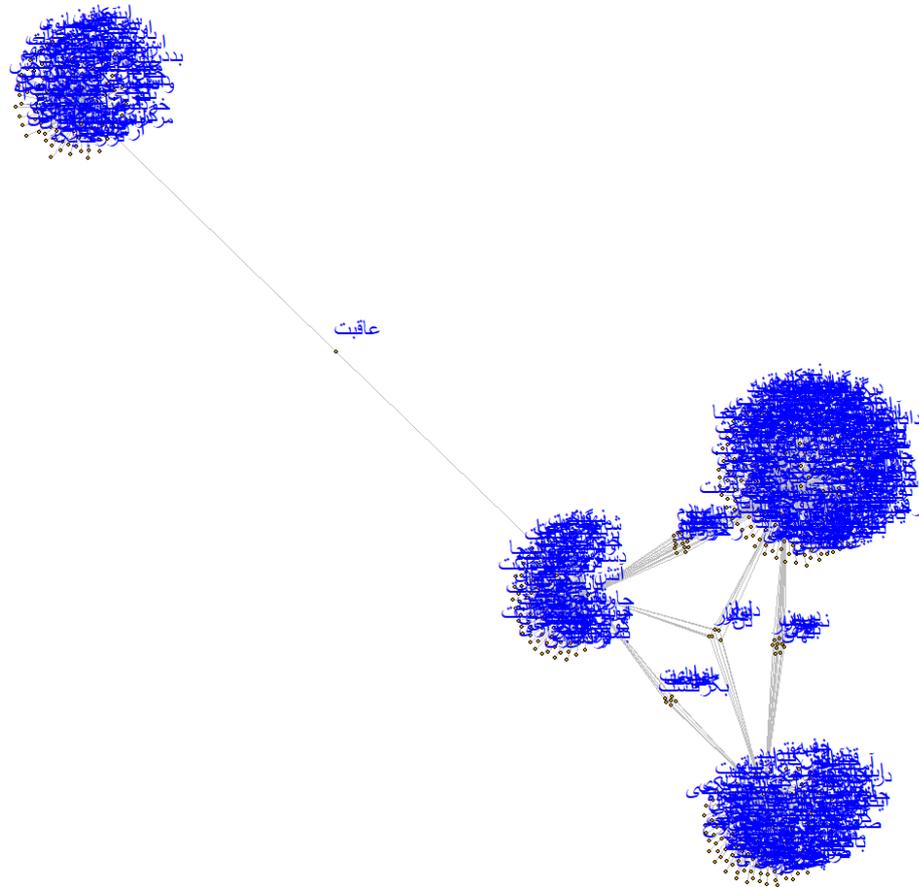
correlation Threshold: 0.6

図 13.10 『ヒーラーजूの書』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.6以上)



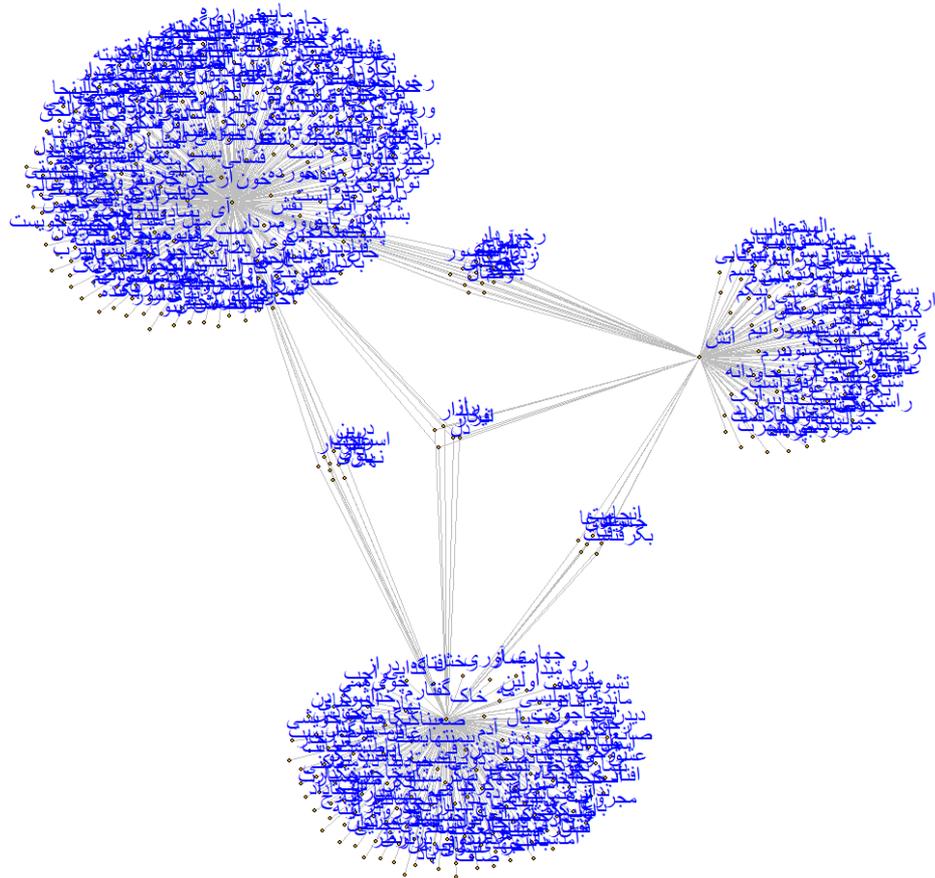
correlation Threshold: 0.5

図 13.11 『ヒーラージュの書』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 13.12 『ヒーラージュの書』愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.5 以上)



correlation Threshold: 0.5

図 13.13 『ヒーラーズの書』愛に関する単語の内「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」の共起ネットワーク (重み=0.5以上)

重みが 0.7 の時、愛に関係する単語同士が共通で共起する単語はない。

重みが 0.6 の時、「عشق (‘eshq)」と「خون (khūn)」は「سير (sīr)」と、「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」は「نمای (namāy)」と、「آتش (ātesh)」と「خاک (khāk)」は「مرادی (morādī)」と、「خاک (khāk)」と「عشق (‘eshq)」は「دل (del)」とそれぞれ共起する。

重みが 0.5 の時、「درد (dard)」と「آتش (ātesh)」は「عاقبت (‘āqebāt)」と共起する。

(4) 『ヒーラージュの書』まとめ

共起ネットワークにおいて「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値が高いのはアッタールの真作とされるテキストと同様であり、愛に関する単語の使い方も類似している。

しかし、テキストで使用される登場人物や「انا الحق (anā al-ḥaḳ)」と「حقیقت (ḥaḳīqat)」の登場頻度が明らかに他のテキストと異なる。また、「گنج (ganj)」を指すべきものの比喩として、積極的かつ肯定的に使用されることも、他のテキストにない特徴である。

2-12. 各テキストの分析結果の考察

分析結果から、以下の四つの観点において、テキスト間における「神への愛」の表現方法の差異を見出せる。

1. 愛に関する単語同士の共起関係（特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係）
2. 愛に関する単語の相対頻度と用い方
3. 「神への愛」を表現する方法
4. 「神への愛」における「عقل ('aql)」の位置づけ

1. 愛に関する単語同士の共起関係（特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係）

真作とされるテキストと『ヒーラージュの書』において「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の共起する頻度が相対的に高く、それ以外の偽作とされるテキストにおいては低い。

一方、「خون (khūn)」が「خاک (khāk)」以外の愛に関する単語と共起する頻度は、真作とされるテキストごとに異なる。

『神秘の書』では、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の共起関係の重みの値が、他の愛に関する単語同士の値より高いので、これら二つの単語が、他の単語より「神への愛」に伴う痛みを表すのにセットで使われている可能性が高い。一方、『神の書』では、「خون (khūn)」は、「خاک (khāk)」より「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」との重みの値が高く、それらの単語は共起する語も共有している。『災厄の書』では「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の共起関係の重みの値が『神秘の書』と同様に高く、二つの単語同士がより密接な関係にある。『鳥の言葉』では「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」との値が他の愛に関する単語より高いが、「خاک (khāk)」のみでなく、「عقل ('aql)」、「آتش (ātesh)」、「عشق ('eshq)」等の言葉の重みも高く共起しやすい。

以上のことから、「神への愛」に伴う痛みを表す各単語は、テキストごとに表される頻度は異なり、組み合わせを変えることによって表現方法を変えている。すなわち、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」によって、「神への愛」に伴う苦痛を表す方法が重視される『神秘の書』と『災厄の書』に対して、「خون (khūn)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」の組み合わせが重視される『神の書』、満遍なく他の愛に関する単語と共起する『鳥の言葉』が特徴として、それぞれ区別できる。愛に関する単語同士の共起関係は、真作とされる各テキストにおいて異なる。

2. 愛に関する単語の相対頻度と用い方

相対頻度の高い単語は、テキストによって異なる。しかし、愛に関係する単語が真作とされるテキストでは、満遍なく高い頻度で出現している。反対に、偽作とされる『忠言の書』や『驚異の顕現』では出現回数が少ない。さらに、これらのテキストでは、肯定的な意味で使われていた単語が、否定的に使われ、否定的に使われていた単語が、反対に肯定的に使用されるなど異なる。一方、偽作とされる『ヒーラージュの書』では、肯定と否定において、真作とされているテキストと同じような形で愛に関する単語が用いられる。しかし、このテキストにおいて、「انا الحق (anā al-ḥaq)」という単語や「حقیقت (ḥaqīqat)」という単語が「神の愛」を表す単語と共起する点において、他の真作とされるテキストと明らかに異なる。

3. 「神への愛」を表現する方法

「神への愛」を表現する方法は三種類ある。(1) 「عشق ('eshq)」のみで語る方法、(2) 「عشق ('eshq)」と他の愛に関する単語を組み合わせる方法、(3) 「عشق ('eshq)」以外の愛に関する単語のみで愛を表現する方法である。『神秘の書』においては、5章は(1)を、20章は(2)を、22章は(3)の方法を主に取っている。『災厄の書』は(2)と(3)の方法を主に取っている。『神の書』では、「خاک (khāk)」と「عشق

「eshq）」又は「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」が同時に使われることが多く (2) の方法を主に取っている。『鳥の言葉』も15章を除けば、『神の書』と同様に「عشق (‘eshq)」と他の愛に関する単語が共に使用されるため (2) の方法に近い。

4. 「神への愛」における「عقل (‘aql)」の位置づけ

「عقل (‘aql)」はアッタールの多くのテキストにおいて否定的に扱われている。もしくは、イスラーム法に準拠している場合のみ、「عقل (‘aql)」をアッタールは肯定的に取り扱うとされてきた²⁸³。しかし、分析した結果、「عقل (‘aql)」が否定的に扱われることは『災厄の書』においては必ずしも当てはまらず、当該テキストにおいてニュートラルな単語として頻繁に扱われる。一方、他のテキストにおいては、否定的に扱われている。しかし、否定的に扱われつつも、「عقل (‘aql)」は「عشق (‘eshq)」の反対のものとして頻繁に用いられる。共起ネットワークの分析結果から、「عشق (‘eshq)」において、「عقل (‘aql)」は共起する頻度が比較的高いことも判明している。故に、「عشق (‘eshq)」とセットで使用される表現として、アッタールのテキストは「عقل (‘aql)」を使用する。また、偽書とされている『忠言の書』では、明らかに他のテキストと異なり、イスラーム法関係なく、無条件に肯定的なものとして扱われる。

共起ネットワークによって、愛に関する単語がどのように他の愛に関する単語と関係しているか明らかになった。「خون (khūn)」が恋人を表す「جانا (jānā)」と共起し、「خون (khūn)」、「اتش (ātesh)」、「درد (dard)」が燃やすことを表す「سوز (šūz)」と共起する。そこから、「خون (khūn)」が愛に関係する単語であり、火や痛みを伴う単語であることも類推できる。また、痛みを表す単語が「عشق (‘eshq)」と共起することから、痛みと愛が関係することが示唆される。愛に関する単語以外では、「عشق (‘eshq)」、「اتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」、「درد (dard)」が「لاله (lāle)」と共起することから、チューリップを表す「لاله (lāle)」が愛や痛みとも関係する単語であることも明らかにされた。

²⁸³ Jalālī Shījānī Jamshīd, *op.cit.*, pp. 46-47.

3. 全テキストに対する主成分分析、階層的クラスター分析

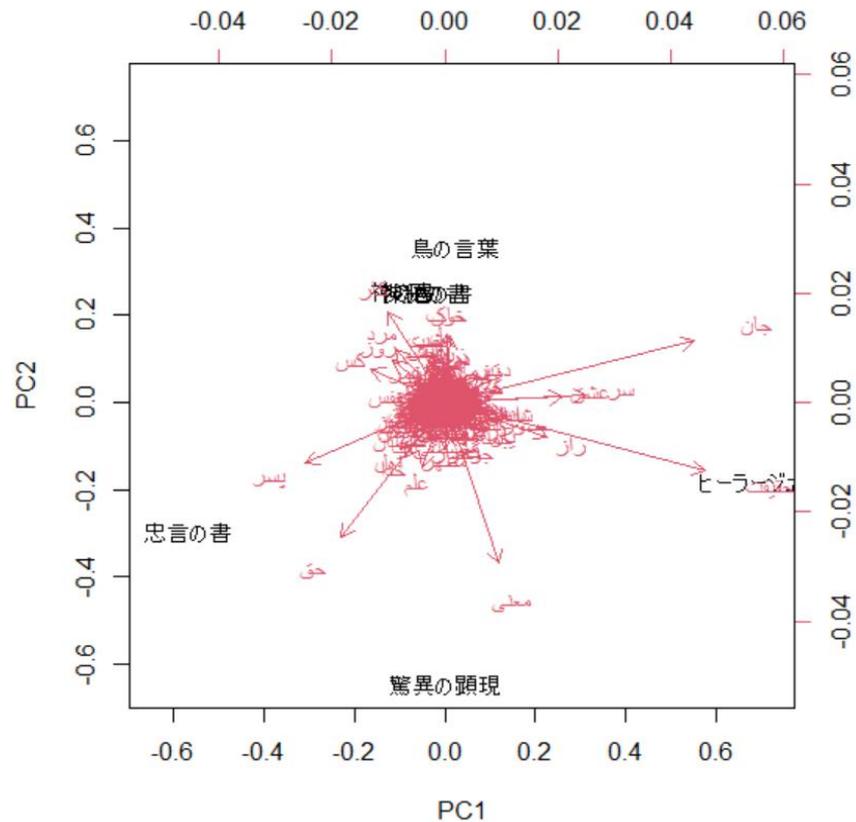


図 14.1 『神祕の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラーの書』の最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.4664、PC2=0.25799)

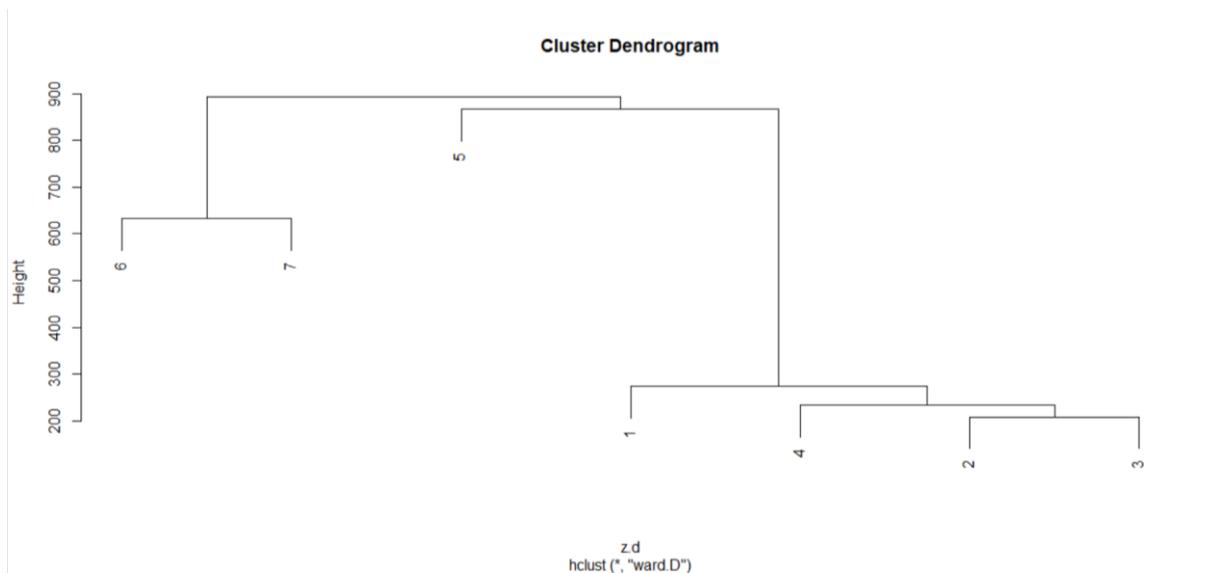


図 14.2 『神祕の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラーの書』の最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

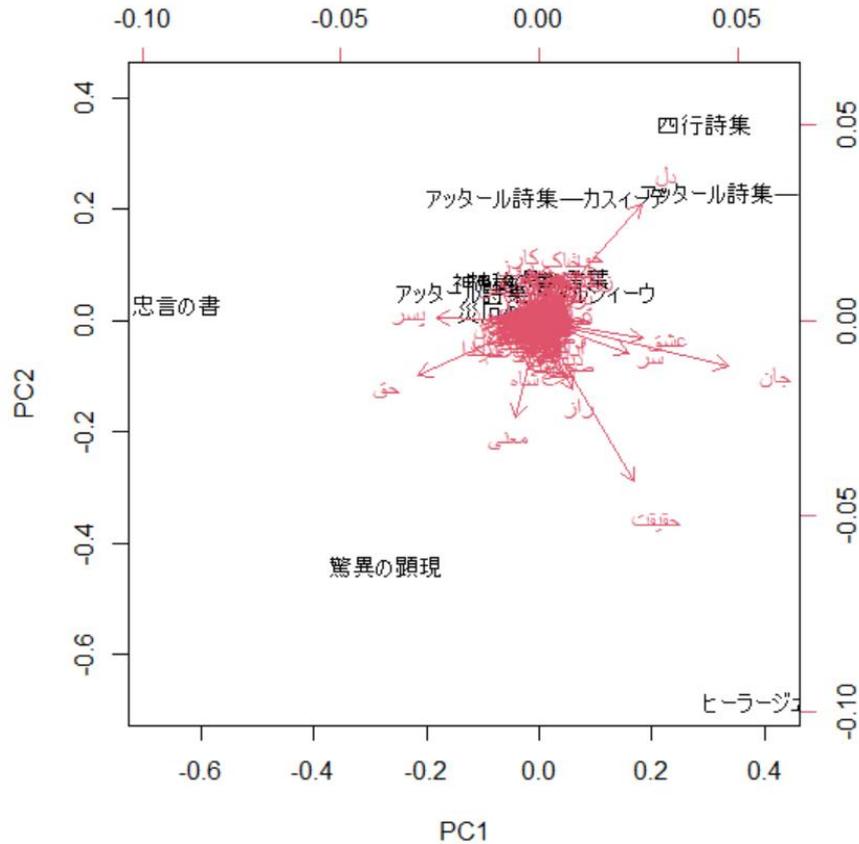


図 14.3 『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』の最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.31130、PC2=0.25276)

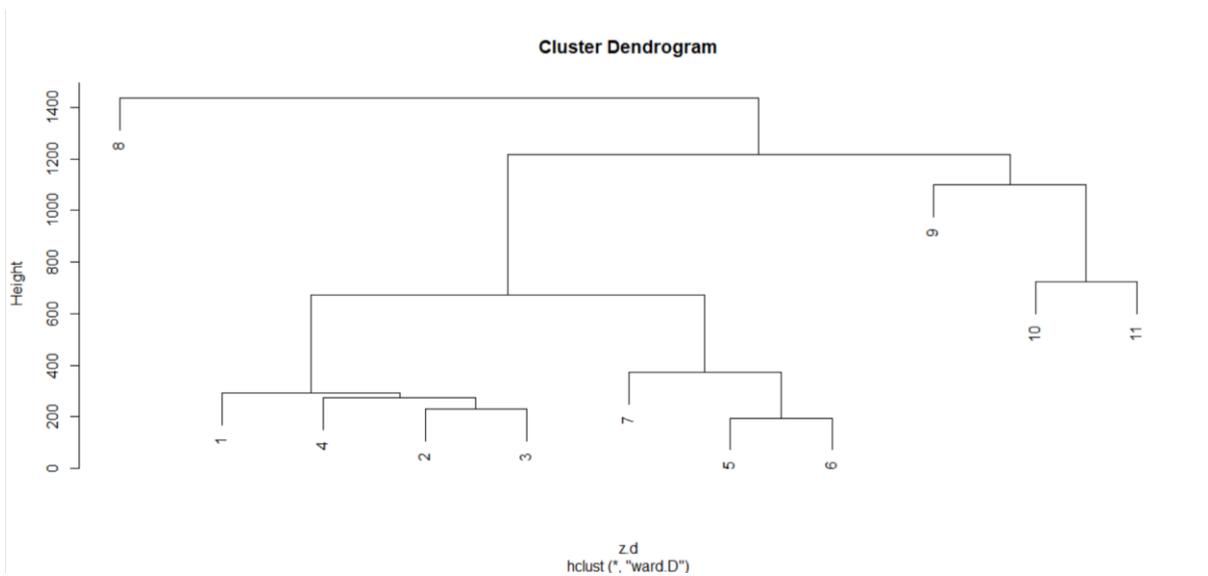


図 14.4 『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』の最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析²⁸⁴

²⁸⁴ 1=『神秘の書』、2=『神の書』、3=『災厄の書』、4=『鳥の言葉』、5=『四行詩集』、6=『アッターール詩集—ガザル』、7=『アッターール詩集—カスィーデ』、8=『アッターール詩集—タルジーウ』、9=『忠言の書』、10=『驚異の顕現』、11=『ヒーラージュの書』

図14.1と図14.2は真作と見做されているマスマヴィーのテキスト群『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』と、偽作と見做されているテキスト群『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』をそれぞれ主成分分析と階層的クラスタ分析に掛けたものである。図14.3と図14.4は、それらに加えて、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』を加えて、再度主成分分析と階層的クラスタ分析に掛けたものである。

主成分分析では、真作とみなされてきたテキストと、偽作とみなされてきたテキストの差異がはっきり現れている。すなわち、主成分分析では、真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』と、偽作とされる『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』とは明らかに特徴が異なる。

一方、階層的クラスタ分析の結果は主成分分析の結果と異なる。図14.2では『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』が同じグループであり、偽作とされる『忠言の書』と『ヒーラージュの書』及び『驚異の顕現』がそれぞれこのグループと異なるグループを形成している。図14.4では『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』が同じグループに対して、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』が別グループを形成し隣あっている。また、『忠言の書』と『ヒーラージュの書』及び『驚異の顕現』がこれとは別グループを形成していて、真作と偽作が区別されている。しかし、主成分分析の結果と異なり『アッターール詩集—タルジーウ』は真作と異なるグループを形成している。

階層的クラスタ分析の結果と主成分分析の結果が異なる理由は、主成分分析がアッターールのテキストにおいて端的な特徴からマッピングしているのに対して、階層的クラスタ分析はテキスト間での全ての単語の使われ方を計算しているからである。階層的クラスタ分析の結果は、使用されている単語全ての類似度や距離に基づいて計算されている。それゆえに、他のテキストと比べ登場する単語数が少ない『アッターール詩集—タルジーウ』が、主成分分析と違い、階層クラスタ分析において真作から離れた箇所にある。しかし、別グループになっているので、偽作とされるテキストとは類似していない。

両分析の検証結果により、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』は、他のアッターールの真作とされるテキストとは明確に異なる単語の特徴を持っていることが明白になった。さらに、偽作の中でも『忠言の書』と他の二つのテキストの特徴は異なることも明らかになった。現在まで論争が続いている偽作と真作論争は、本論文における定量的な分析結果に基づくと、キャドキャニーの『忠言の書』を偽作におくという主張がより確実であるという結論となる。さらに、『忠言の書』と他の二テキスト自体にも差があるので、前者と後者二つのテキストの作者は異なるか、一作者において大幅な思想的な転向があった可能性が高い。

第5章 アッターール以外のペルシア神秘主義詩と同時代のテキストとの比較

第1節 本章の分析の概略

本章では、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集』（『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』）、『ハーカーニー詩集』（『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』²⁸⁵）に対し、以下の二つの観点から分析を行う。

1. 単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用方法の分析
2. 「神への愛」とそれに伴う苦痛に関する分析

1. 単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用方法の分析

4章同様に、ソフトウェアを使い、各テキストの名詞の頻出単語を Word Cloud の図で示す。Word Cloud では視認しやすい最頻出単語 50 を図示し、別表で単語名と頻度を示す²⁸⁶。そして、頻度分析の観点から、各テキストの特徴と共通点を分析する。

その後、『真理の園』と『精神的マスナヴィー』のデータを対象に主成分分析と階層的クラスタ分析に掛け、各テキストの特徴的な章や各章の単語の使用方法の類似性を明らかにする。この時、第4章と同様に最頻出名詞 100 の相対頻度を表で章ごとに示すことによって、特徴的な章でどの単語がどのように使われているのかを明らかにする²⁸⁷。

2. 神への愛とそれに伴う苦痛に関する分析

アッターールとの比較という観点から、第4章同様に、「神への愛」とそれに関わる単語の各テキストにおける用い方を分析する。愛に関係する単語の相対頻度を表で章ごとに示し、共起ネットワークを通して、それらの単語の関係性と、共起しやすい単語を明らかにする。

愛やそれに関する単語は、サナーイーやルーミーに関する研究においても、言及される²⁸⁸。そして先行研究は、「神への愛」に触れつつ、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」のそれぞれの使用方法について論じる²⁸⁹。

アンヴァリーやハーカーニーに関する先行研究は、彼らが持っているスーフィズム的要素について論じる。その際、スーフィズムの要素として関わる単語として「عشق (‘eshq)」が扱われる。ハーカーニーに関する一論文では、「عشق (‘eshq)」と他の単語の組み合わせに着目し、スーフィズムの要素とそうでない要素を分類する。アンヴァリーに関する一論文で

²⁸⁵ 第4章のアッターールの詩集同様に、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』に分けて、論じる。

²⁸⁶ 各テキストの最頻出単語 50 は章末に付ける。

²⁸⁷ アンヴァリーとハーカーニーのテキストは詩集であり、章ごとに分けるのが難しいので、主成分分析と階層的クラスタ分析は行わない。

²⁸⁸ 例えば、Ziyāyī Anvar, “Taqābol-e ‘aql va ‘eshq dar *Maṣnavī-ye Moulānā va Ḥadīqeh-ye Sanā’ī*,” *Andīshehā-ye Adabī*, vol.2, no.42, 2011 or 2012, pp. 119-140; Javāheriyān Hamīd and Āzar-peivand Ḥosein. “Gerye dar motūn-e nazm-e ‘erfān (Sanā’ī, ‘Atṭār, va Moulānā),” *Nazm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.3, no.14, 2021 or 2022, pp. 1-17; ‘Askarī ‘Alī, “Ta’bīrāt va eṣṭelāḥāt-e Moulānā az ‘aql dar *Maṣnavī Ma’navī*,” *Peik-e nūr: ‘olūm-e ensān*, vol.3, no.5, 2007 or 2008, pp. 33-45 等がある。

²⁸⁹ Ziyāyī Anvar, *op. cit.*, pp. 119-140.

は、彼のテキストにおける、スーフイズムを否定する側面とスーフイズム的な表現を用いる側面の両方を説明する。その際に、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」という言葉に着目する²⁹⁰。また、このアンヴァリーの論文は、スーフイー詩的な表現技法の影響が 12 世紀に生きた詩人にあること、スーフイーではなくても、表現技法として採用されることを主張する²⁹¹。

本章で扱う愛に関する単語は、第 4 章と同様に「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」、「عشق ('eshq)」、「عقل ('aql)」である。これらの単語を分析することを通して、アッタールのテキストにおいて使用された「神への愛」を表す単語が、他の作者のテキストでどのように用いられるか明らかにする。さらに、アッタールの「神への愛」の表現との差異も同時に明らかにする。

最後に、アッタールのテキストを含めた全てのテキストの類似度を主成分分析と階層的クラスタ分析によって行う。そして、上記の七つの愛に関する単語のテキスト間における相対頻度を明らかにし、テキスト間の愛についての表現の差異を示す。

第 2 節 分析方法と対象

第 5 章は第 4 章の分析方法を踏襲する。すなわち、サナーイー『真理の園』とルーミー『精神的マスナヴィー』においては、単語の相対頻度を章ごとに出力したデータを用いて、主成分分析と階層的クラスタ分析を行う²⁹²。第 4 章と同様に成分分析の主成分の値は 25% 前後まで示す。主成分分析と階層的クラスタ分析は章ごとに分析を行い、共起ネットワークの分析は、逸話や詩ごとに分析する。

アンヴァリーとハーカーニーの『アンヴァリー詩集』と『ハーカーニー詩集』は第 4 章と同様に主成分分析と階層的クラスタ分析は行わず、詩ごとの分析を共起ネットワークのみ行う。共起ネットワークでは、前述の愛に関する単語のみを対象とする。

第 3 節 分析結果と考察

本節は、以下の分析結果と考察から構成される。

1. 各テキストに対する Word Cloud、頻度分析
- 2-1. 『真理の園』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスタ分析、共起ネットワーク分析
- 2-2. 『精神的マスナヴィー』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスタ分析、共起ネットワーク分析
- 2-3. 『アンヴァリー詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析
- 2-4. 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析
- 2-5. 『アンヴァリー詩集—マクタア』に対する共起ネットワーク分析
- 2-6. 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』に対する共起ネットワーク分析
- 2-7. 『ハーカーニー詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析
- 2-8. 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析
- 2-9. 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』に対する共起ネットワーク分析

²⁹⁰ ハーカーニー：

Ming-Ming Yin, Moḥammad Rezā Maḥmoudī and 'Abāsārī-zāde 'Alī, "Analysis of Mystical Concepts in Khaghani's *Divan*.", *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 35, no.2, 2019, pp. 485–491.

アンヴァリー：

Karamī Moḥammad Ḥossein and Dehqānī Nāhīd, "Rūy-kard-e Do-gūne-ye Anvarī be 'Erfān va Taṣavvof," *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāte- Fārsī*, no.37, 2015 or 2016, pp. 27-53.

²⁹¹ *Ibid.*, p. 51.

²⁹² 4 章と同様に、テキストの各章のタイトルは 1 章、2 章、3 章・・・というように数字の並びに統一する。

- 2-10. 『ハーカーニー詩集—タルキーブ』に対する共起ネットワーク分析
- 2-11. 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』に対する共起ネットワーク分析
- 2-12. 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』に対する共起ネットワーク分析
- 2-13. 各テキストの解析結果のまとめ
- 3. 全テキストに対する主成分分析、階層的クラスター分析、愛に関する単語の相対頻度

1. 各テキストに対する Word Cloud、頻度分析

Word Cloud

以下、アッタールの各テキストの名詞の頻出単語を Word Cloud で示す。



図 15.1 『真理の園』の最頻出名詞 50



図 15.2 『精神的マスマヴィー』の最頻出名詞 50



図 15.3 『アンヴァリー詩集—ガザル』の最頻出名詞 50



図 15.4 『アンヴァリー詩集—カシイーダ』の最頻出名詞 50



図 15.5 『アンヴァリー詩集—マクタア』の最頻出名詞 50



図 15.6 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』の最頻出名詞 50



図 15.7 『ハーカーニー詩集—ガザル』の最頻出名詞 50



図 15.8 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』の最頻出名詞 50



図 15.9 『ハーカーニー詩集—ケトウエ』の最頻出名詞 50



図 15.10 『ハーカーニー詩集—タルキープ』の最頻出名詞 50



図 15.11 『ハーカーニー詩集—タルジウ』の最頻出名詞 50



図 15.12 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』の最頻出名詞 50

頻度分析

『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』において、「جان (jān)」、「سر (sar)」、「دل (del)」は各テキストの再頻出単語トップ5に入る。また、これらのテキストのうち、『真理の園』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』では「دل (del)」が最頻出名詞である。

『真理の園』は、他のテキストに対して「عقل ('aql)」の頻出単語内での順位が特に高く、使用頻度の割合を表す上記の Word Cloud は、「عقل ('aql)」の用いられ方が、他のテキストと異なることを明白にする。

『アンヴァリー詩集—ガザル』と『ハーカーニー詩集—ガザル』では「عشق (‘eshq)」がテーマと合致することもあり、頻出単語のトップ5番目以内に入る。

『精神的マスナヴィー』において、他のテキストに比べて「حق (ḥaq)」の順位は高い。

『アンヴァリー詩集—カスィーデ』において、王を表す「ملك (malek)」や世界を表す「جهان (jahān)」の順位は他のテキストと比較して高い。

ハーカーニーの詩集のうち、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』は詩人自らの名前を頻繁に用いる。また、ハーカーニーの他の詩集である、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジュー』において、「صبح (ṣobḥ)」の頻度は非常に高い。先行研究においても、ハーカーニーの表現方法としての「صبح (ṣobḥ)」は着目されてきた²⁹³。

愛に関するそれぞれの単語がトップ50に入っているのは以下のテキストである。

「خون (khūn)」：『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、ハーカーニー詩集の全て

「خاک (khāk)」：全てのテキスト

「درد (dard)」：『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』

「آتش (ātesh)」：『アンヴァリー詩集—ガザル』以外の全てのテキスト

「اشک (ashk)」：『ハーカーニー詩集—タルキープ』のみ

「عشق (‘eshq)」：『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジュー』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』

「عقل (‘aql)」：『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』

上記の愛に関する単語の頻度から、①「خون (khūn)」と「درد (dard)」は『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』において、頻繁に使用される。②「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は『真理の園』、『精神的マスナヴィー』において頻繁に使用される。一方、ハーカーニーとアンヴァリーの詩集においては、『アンヴァリー詩集—ガザル』以外、50位以内に入っているものとそうでないものがある。③「خاک (khāk)」は全てのテキスト、「آتش (ātesh)」は『アンヴァリー詩集—ガザル』以外の全てのテキストに使われている。④「اشک (ashk)」は『ハーカーニー詩集—タルキープ』以外の全てのテキストで頻度50位以内に入らない。

分析結果

「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は『真理の園』と『精神的マスナヴィー』と『アンヴァリー詩集—ガザル』においてのみ両方50位以内に入っている。さらに、『真理の園』と『精神的マスナヴィー』において、「عقل (‘aql)」の順位が『アンヴァリー詩集—ガザル』や他のテキストより高い。故に、「عقل (‘aql)」が肯定的にせよ否定的にせよ主要なテーマであると推測できる。

²⁹³例えば、Mashhūr Parvīn Dokht, “Māh va Khorshīd dar She’r-e Khāqānī”, *Adabīyāt Fārsī (‘Olīm-e Ensānī al-Zahrā)*, vol.21, no.5, 2009 or 2010, pp. 74-89 がある。

『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』は、使用頻度トップ 50 に入っている愛に関する単語がほとんど同じであり、表現が類似していることが推測できる。ただし、『アンヴァリー詩集—ガザル』のみ、「آتش (ātesh) 」ではなくて、「عقل ('aql) 」の使用頻度が 50 位以内に入り、異なる特徴を持つ。その理由から、先行研究が指摘するように、これらのテキストにおいて、アンヴァリーにおけるスーフイズムの要素としての「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」が使用される。一方、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』とこれらのテキストは愛に関する単語の使い方という観点からは類似しているが、『ハーカーニー詩集』の頻出単語は、「خاقانی (khāqānī) 」や「صبح (shobh) 」など、明かに他のテキストとは異なる。

| 真理の園 | 精神的マ スナヴィー | | アンヴァ リー詩集 —ガザル | | アンヴァ リー詩集 —カスイ ーデ | | アンヴァ リー詩集 —マクタ ア | | アンヴァ リー詩集 —ロバー イー | | ハーカー ニー詩集 —ガザル | | ハーカー ニー詩集 —カスイ ーデ | | ハーカー ニー詩集 —ケトウ エ | | ハーカー ニー詩集 —タルキ ーブ | | ハーカー ニー詩集 —タルジ ーウ | | ハーカー ニー詩集 —ロバー イー | | |
|------|---------------|------|----------------------|--------|----------------------------|--------|---------------------------|-------|----------------------------|------|----------------------|--------|----------------------------|------|---------------------------|--------|----------------------------|-------|----------------------------|-------|----------------------------|--------|-----|
| | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | 単語 | 頻度 | |
| دل | 872 | جان | 1579 | دل | 473 | باد | 624 | جهان | 170 | دل | 182 | دل | 674 | سر | 697 | دل | 218 | سر | 89 | صبح | 117 | دل | 176 |
| سر | 605 | دل | 1095 | جان | 308 | جهان | 531 | دست | 148 | روز | 110 | جان | 484 | دل | 683 | سر | 162 | جان | 88 | جان | 98 | جان | 78 |
| جان | 580 | سر | 1067 | عشق | 250 | ملك | 442 | روز | 148 | جان | 97 | سر | 305 | جان | 520 | آب | 159 | باد | 79 | دل | 88 | خاقانی | 70 |
| عقل | 573 | حق | 1004 | سر | 180 | دست | 430 | باد | 128 | دست | 83 | عشق | 282 | خاك | 395 | جان | 120 | صبح | 66 | جهان | 85 | سر | 62 |
| مرد | 571 | آب | 941 | كار | 177 | تير | 366 | دل | 109 | شب | 81 | خاقانی | 209 | صبح | 381 | دست | 109 | خاك | 61 | آسمان | 83 | آتش | 55 |
| جا | 464 | زن | 838 | دست | 144 | روز | 329 | سر | 105 | جهان | 81 | دست | 170 | آب | 380 | خاك | 96 | دل | 60 | سر | 76 | آب | 43 |
| دست | 422 | رو | 814 | غم | 122 | فلک | 259 | كس | 103 | غم | 52 | خون | 163 | دست | 367 | خاقانی | 95 | جهان | 56 | شاه | 70 | لب | 39 |
| جهان | 400 | دست | 704 | جهان | 113 | روزگار | 258 | بنده | 95 | گل | 51 | آب | 146 | كعبه | 312 | جهان | 92 | دست | 49 | باد | 58 | عشق | 38 |
| تير | 396 | چشم | 656 | روز | 90 | قدر | 255 | فلک | 94 | سر | 50 | زلف | 146 | فلک | 296 | كس | 84 | فلک | 46 | روز | 46 | دست | 38 |
| ملك | 377 | عقل | 655 | انوری | 88 | دل | 242 | تير | 86 | كار | 41 | جهان | 137 | شاه | 288 | فلک | 78 | آسمان | 46 | ملك | 45 | شب | 36 |
| آب | 349 | نور | 645 | كس | 88 | سر | 240 | سخن | 77 | عشق | 36 | كار | 135 | آتش | 286 | زر | 71 | خون | 41 | نیغ | 42 | روز | 36 |
| راه | 332 | بهر | 599 | پا | 86 | آسمان | 236 | ملك | 76 | عمر | 34 | چشم | 131 | ملك | 280 | عمر | 64 | شاه | 40 | دم | 40 | ماه | 32 |
| روز | 325 | دم | 584 | يار | 83 | آفتاب | 219 | خاك | 76 | ملك | 33 | غم | 129 | جهان | 278 | سخن | 62 | آتش | 40 | زر | 40 | فلک | 32 |
| كار | 314 | مرد | 581 | تير | 82 | شب | 211 | خدا | 74 | پا | 32 | كس | 127 | شب | 258 | روز | 61 | چشم | 35 | خون | 38 | درد | 31 |
| شاه | 307 | تن | 560 | وصل | 80 | خاك | 208 | جان | 73 | چشم | 32 | آتش | 121 | خون | 255 | دوست | 59 | آب | 34 | شب | 38 | غم | 31 |
| دين | 290 | جهان | 549 | زلف | 75 | آب | 205 | آسمان | 72 | تير | 31 | لب | 120 | چشم | 242 | شاه | 57 | پدر | 33 | زبان | 38 | چشم | 28 |
| سوی | 286 | روز | 539 | هجر | 74 | دولت | 203 | پا | 71 | وصل | 30 | روز | 112 | باد | 234 | ملك | 57 | روز | 33 | زن | 37 | خون | 28 |
| خلق | 280 | كس | 524 | شب | 71 | جان | 192 | شب | 71 | آب | 29 | خاك | 111 | روز | 233 | چشم | 57 | نیغ | 32 | فلک | 34 | زلف | 27 |
| خدا | 275 | تير | 521 | عمر | 62 | چرخ | 170 | آب | 69 | فلک | 29 | شب | 107 | زر | 227 | آفتاب | 55 | شب | 30 | عالم | 34 | گل | 26 |
| عالم | 270 | خدا | 505 | خون | 58 | كس | 166 | دولت | 68 | باد | 28 | دم | 105 | دم | 210 | دولت | 54 | ملك | 29 | خاك | 32 | تب | 25 |
| كس | 269 | شير | 498 | چشم | 58 | سپهر | 161 | كار | 65 | خون | 28 | پا | 102 | ماه | 183 | دم | 54 | چرخ | 27 | آفتاب | 32 | خاك | 25 |
| سخن | 263 | جمله | 486 | روزگار | 54 | جود | 161 | زمانه | 64 | كس | 27 | باد | 92 | كس | 172 | كار | 50 | راه | 26 | زمان | 32 | تن | 24 |
| بهر | 257 | جو | 474 | درد | 53 | سخن | 157 | قدر | 63 | درد | 26 | درد | 90 | پا | 161 | شب | 50 | آفتاب | 25 | شه | 31 | رخ | 23 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|------|-----|-------|----|--------|-----|--------|----|--------|----|-------|----|--------|-----|-------|----|-------|----|-------|----|--------|----|
| حق | 249 | شاه | 457 | رخ | 46 | زمین | 157 | خواجه | 63 | دام | 25 | وصل | 85 | تیغ | 155 | زبان | 48 | عشق | 22 | دولت | 31 | جهان | 23 |
| پا | 247 | گرد | 452 | زمانه | 44 | پا | 148 | عمر | 59 | آتش | 24 | عمر | 85 | چرخ | 151 | تن | 48 | جگر | 22 | جا | 30 | سخن | 22 |
| باد | 242 | راه | 444 | غم | 43 | خدمت | 148 | خدمت | 58 | خاک | 23 | صبح | 80 | خراسان | 149 | نام | 45 | زر | 22 | دست | 29 | پا | 20 |
| تن | 242 | خاک | 443 | حسن | 39 | زمانه | 147 | عالم | 55 | ماه | 23 | زر | 70 | زن | 149 | خون | 45 | پا | 21 | آتش | 28 | یار | 20 |
| چشم | 242 | کار | 442 | باد | 39 | جاه | 144 | شعر | 50 | هجر | 21 | دوست | 69 | آفتاب | 146 | آتش | 44 | دم | 19 | چشم | 25 | سایه | 17 |
| خرد | 239 | آتش | 441 | آب | 37 | ماه | 143 | نام | 49 | گرد | 21 | گل | 68 | آسمان | 145 | خانه | 43 | دندان | 18 | نشان | 25 | راه | 17 |
| علم | 235 | شب | 386 | ماه | 37 | سایه | 142 | دین | 47 | زلف | 21 | جو | 68 | تن | 144 | درد | 43 | نام | 18 | ظفر | 24 | کس | 16 |
| زن | 229 | خلق | 377 | گل | 33 | کار | 141 | جود | 47 | دم | 19 | جا | 68 | عید | 144 | چرخ | 42 | غم | 18 | مملکت | 23 | وصل | 16 |
| خانه | 228 | عشق | 374 | سخن | 31 | بنده | 139 | آفتاب | 43 | عالم | 18 | عالم | 68 | زبان | 143 | بهر | 41 | درد | 17 | جام | 22 | باد | 16 |
| خاک | 217 | مر | 371 | راه | 31 | عالم | 136 | روزگار | 42 | یار | 17 | یار | 66 | خوان | 143 | عقل | 40 | ماه | 17 | عمر | 21 | خورشید | 16 |
| نفس | 207 | پا | 366 | زمان | 31 | حکم | 127 | سپهر | 42 | چرخ | 16 | راه | 61 | زمین | 138 | باد | 40 | بهر | 17 | چرخ | 21 | زن | 16 |
| گرد | 193 | زمان | 354 | دوست | 29 | شیر | 127 | مرد | 41 | غم | 15 | زن | 58 | شیر | 137 | سوی | 39 | دولت | 17 | خوان | 20 | کار | 15 |
| عشق | 191 | صورت | 345 | حال | 27 | چشم | 126 | سایه | 40 | زمین | 15 | زبان | 58 | نام | 136 | دشمن | 37 | جام | 17 | لب | 19 | مو | 15 |
| عمر | 184 | گوش | 340 | عقل | 27 | عمر | 125 | عقل | 40 | جمله | 14 | دام | 56 | گل | 132 | همت | 37 | زمین | 17 | هوا | 19 | عمر | 15 |
| آدم | 183 | شه | 334 | خاک | 27 | تیغ | 121 | چرخ | 40 | خورشید | 14 | سخن | 55 | رنگ | 131 | عالم | 37 | خط | 17 | ماه | 19 | مه | 14 |
| آتش | 179 | خانه | 296 | دم | 26 | نام | 120 | سال | 40 | تن | 14 | سنگ | 52 | عمر | 130 | جا | 36 | رنگ | 16 | آب | 19 | شمع | 14 |
| گل | 179 | زر | 294 | گه | 26 | آتش | 119 | زمین | 40 | دولت | 13 | آسمان | 51 | سخن | 129 | مه | 36 | جا | 16 | کار | 19 | صبح | 13 |
| شب | 174 | چونک | 294 | مه | 26 | خورشید | 117 | آتش | 36 | سایه | 13 | بوی | 50 | مه | 129 | آسمان | 35 | نفس | 16 | کوه | 17 | تیغ | 13 |
| روح | 160 | گوی | 293 | زر | 26 | ابر | 117 | زمان | 36 | فراق | 13 | تن | 50 | بهر | 128 | گنج | 35 | زبان | 16 | آخست | 17 | دم | 13 |
| دوست | 157 | زمین | 287 | تن | 25 | زبان | 110 | نفس | 34 | رنگ | 13 | مهر | 49 | عالم | 127 | زن | 35 | زمان | 16 | دهان | 17 | مرد | 12 |
| جمله | 154 | سخن | 283 | رنگ | 25 | خدا | 109 | شراب | 33 | کام | 12 | هجر | 48 | جا | 126 | نان | 34 | کمر | 16 | پا | 17 | مرغ | 12 |
| تیغ | 150 | جا | 276 | کوی | 24 | عقل | 101 | معنی | 33 | خواب | 12 | جگر | 48 | کار | 124 | مرد | 34 | اشک | 15 | دریا | 17 | جو | 11 |
| ماه | 148 | نفس | 269 | خبر | 24 | جا | 99 | ماه | 33 | زمانه | 12 | مرد | 48 | دولت | 124 | دهر | 34 | عالم | 15 | رنگ | 16 | هجر | 11 |
| صورت | 147 | وقت | 268 | بند | 24 | فتنه | 96 | انوری | 32 | عهد | 12 | رنگ | 48 | لب | 122 | شیر | 34 | نقش | 15 | سوی | 16 | نفس | 11 |
| حکم | 147 | خواب | 267 | نام | 24 | زمان | 95 | چشم | 32 | شاه | 11 | سایه | 48 | عقل | 120 | کعبه | 33 | قدر | 15 | عشق | 16 | چرخ | 11 |
| یار | 147 | باد | 266 | لب | 24 | خون | 94 | جا | 32 | عید | 11 | فلک | 46 | مرد | 117 | پا | 31 | کار | 15 | تن | 15 | زر | 11 |
| نور | 144 | خون | 264 | عالم | 24 | شاه | 93 | خانه | 32 | راه | 11 | جام | 46 | نان | 116 | خدا | 31 | لب | 14 | بهر | 15 | لعل | 10 |

図 15.13 『真理の園』、『精神的マスマナー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキーブ』、『ハーカーニー詩集—タルジーウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』における最頻出単語 50 の頻度

2-1. 『真理の園』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

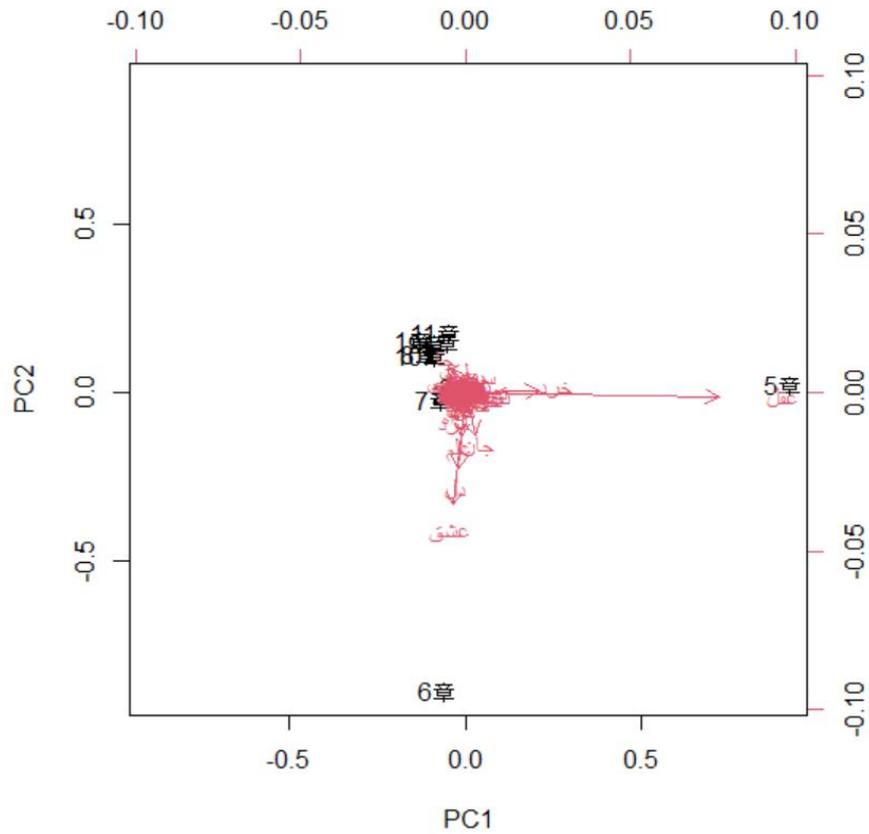


図 16.1 『真理の園』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.51579、PC2=0.19848)

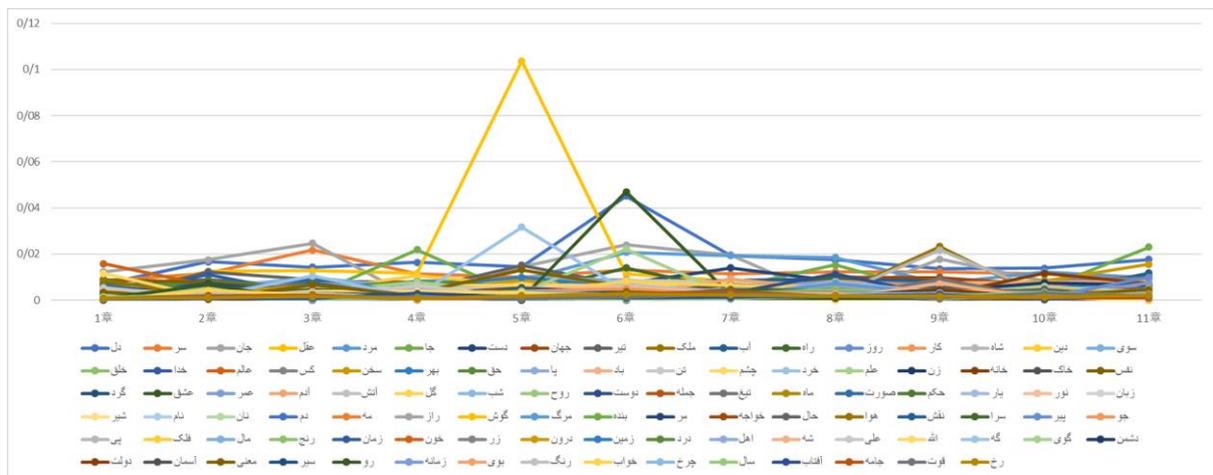


図 16.2 『真理の園』最頻出名詞 100 の相対頻度

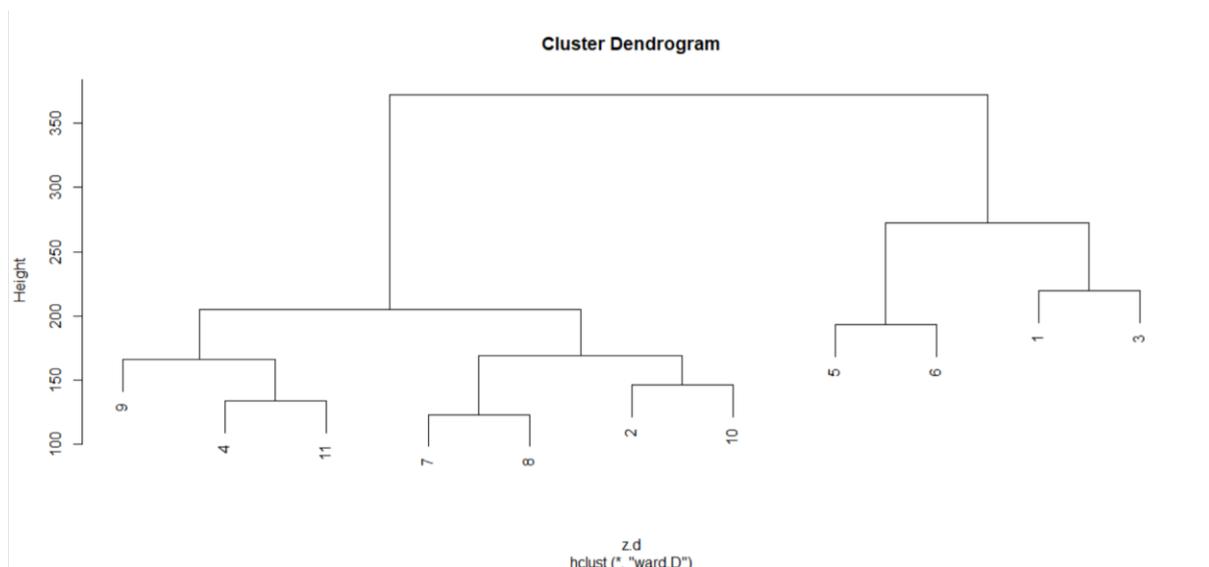


図 16.3 『真理の園』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、5章と6章は、特徴において他の章と異なる。5章は「**عقل**（‘aql）」の相対頻度が高く、6章では「**عشق**（‘eshq）」の相対頻度が最も高い。

特徴語の使用方法

5章の主題は理性であり、理性を表す「**عقل**（‘aql）」の相対頻度が高く、共に登場する言葉としては知恵を表す「**خرد**（kherd）」がある。ここで「**عقل**（‘aql）」は比較的肯定的なニュアンスで用いられる。具体的には、真実へと導く導き手として扱われ、「**خرد**（kherd）」と同様に知恵の意味に近い形で用いられる²⁹⁴。

(5章)

天の下、善と悪である者全て
 知恵が作物の収穫者である
 太初の永遠の王宮から、それがやって来るとき
 知識と行動が正しくなる
 彼の手には物事の鍵
 彼の存在には命令の方法が結びつく
 (中略)
 国勢と宗教の正しい状態のために
 理性の目は最初に将来を見通す
 理性はそなたにすべてを示す
 何が去り、何があり、何が来るのか
 (中略)
 太陽の東は、太初の永遠の理性
 その西は偉大で全能の神
 遠くを見通す者はこの意味を理解する
 その戸において無知がない知恵によって²⁹⁵

²⁹⁴ 『真理の園』の韻律はハフィーフ体(— U — — /U — U — / — —)

²⁹⁵ Majdūd ibn Ādam Sanā’ī, *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh04/sh2> (accessed August 18, 2023).

また、5章は、魂を表す「نفس (nafs) ²⁹⁶」も共に使われ、「عقل ('aql)」と「نفس (nafs)」は父と母のようなもので、この二つに従うべきであることが説明される。

(5章)

優美なる世界の父と母は
語る方法を知る魂と、高貴な理性である
この二つの高貴な偶数によって、奇数は存在するな
この二つの根本において、両親に逆らう者になるな
それらに常に仕えろ
この二つの宝石は、それをされることに値する
(中略)
親愛なる父と母は
理性と魂において英知を持っている
それらは大空と柱の根源を与え
それらは魂の世界の代理人である
これら二つの身体は身体の原因である
これら二つの靈魂は靈魂の理由である²⁹⁷

第6章の主題は「علم ('elm)」であるが、「عشق ('eshq)」も同時に主題である。前述の通り、後者の相対頻度が最も高く前者より多い。前者は、宗教の知恵として論じられるのに対して、後者は、信仰と不信仰を超越した愛として論じられる。しかし、前者が後者によって直接否定されることはなく、前者も比較的肯定的に扱われる。

(6章)

知識は神の戸へ導く
それは富、肉欲、地位の方へとは導かない
知っていることを行為にもたらし
その後、そなたは、行為の中で新しい知識を求める
まず寛容が必要、その後知識が必要
知識によって得たら、寛容と共に求めよ
(中略)
知識は、人を天国へと導き
無知は、人を地獄へと連れて行く
知識は恩恵と優美の証拠であり
知識と親しくなるものは、祝福される²⁹⁸

(6章)

不完全な理性には宗教と不信仰があるが
愛は宗教と不信仰のどちらであるか？
宇宙における、部分と全体であるものは
愛の道においては、橋のアーチである
(中略)
愛が導き手で者の前では

²⁹⁶ アッターールの著作においては、「肉欲」を表す言葉として否定的な意味で多用される。例えば、Farīd al-Dīn 'Aṭṭār, *Mantegh al-Ṭayr*, <https://ganjoor.net/attar/manteghotteyr/ozr-morghhan/sh16> (accessed August 18, 2023).

²⁹⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh04/sh4> (accessed August 18, 2023).

²⁹⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh1> (accessed August 18, 2023).

信仰と不信仰はどちらも彼の戸の帳である²⁹⁹

6章は、同時に「عقل ('aql)」では捉えられないものとして「عشق ('eshq)」を論じている。この章は「عشق ('eshq)」が「عقل ('aql)」より優れ、「عشق ('eshq)」があるところ、「عقل ('aql)」は役に立たなくなることも主張する。

(6章)

存在としての理性、肉欲、自然
愛の面前でそなたは全てが何であるかを知っている
肉欲は一つの絵であり、理性は一人の絵師である
性質は一つの埃であり、愛は一人の掃除人である
理性が絵と結びついた時、肉欲を消す
愛が顔を見せたとき、性質は死ぬ³⁰⁰

(6章)

愛が神秘を語る世界では
理性はその世界において、密告者である
そなたが留まる、そなたの理性が明らかな間
そなたはヤマウズラのように、愛は鷹のようだ
心の道を選び真理を探究する者たちは
理性を残骸と見なす³⁰¹

階層的クラスター分析の結果では、大きなクラスターが2つあり、さらにそのうちの一つのクラスターが二つのクラスターに分かれている。

クラスター1-1: 4章、9章、11章
クラスター1-2: 2章、7章、8章、10章
クラスター2: 1章、3章、5章、6章

ここから、トップ 100 語の使い方として三つのパターンがあることが示されている。

²⁹⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh9> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh11> (accessed August 18, 2023).

³⁰¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh10> (accessed August 18, 2023).

(2) 愛に関する単語について

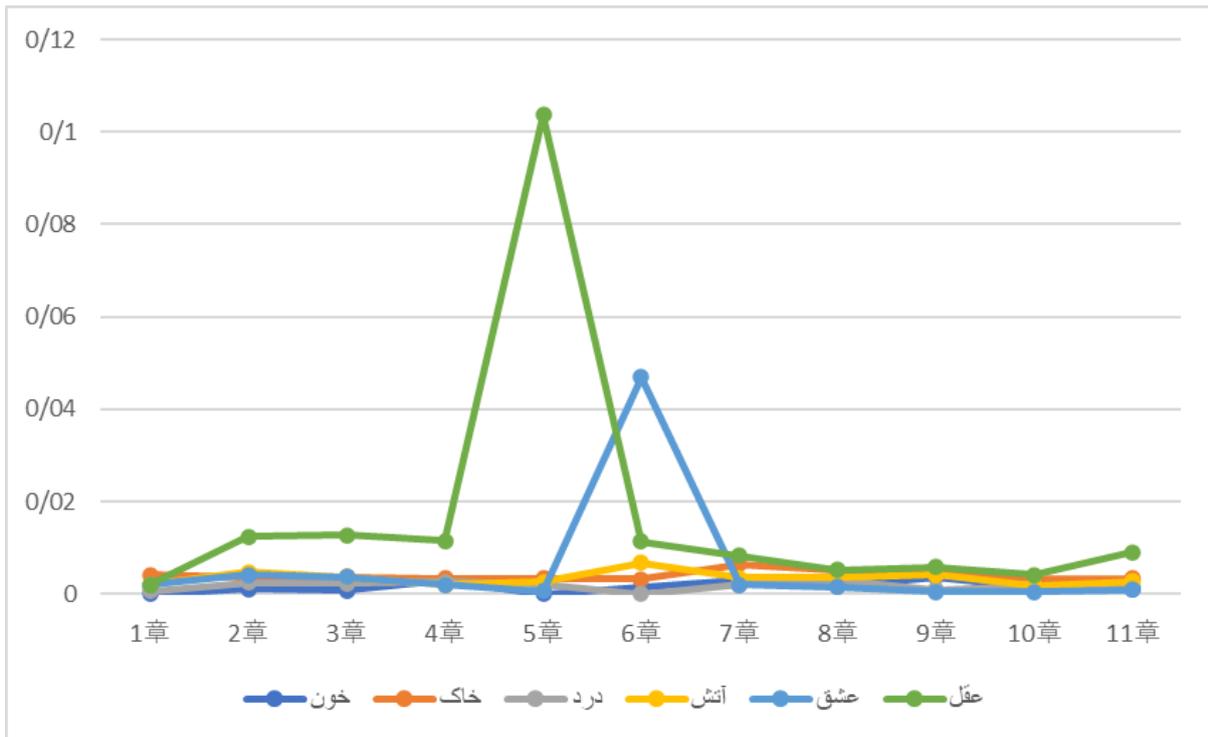


図 16.4 『真理の園』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

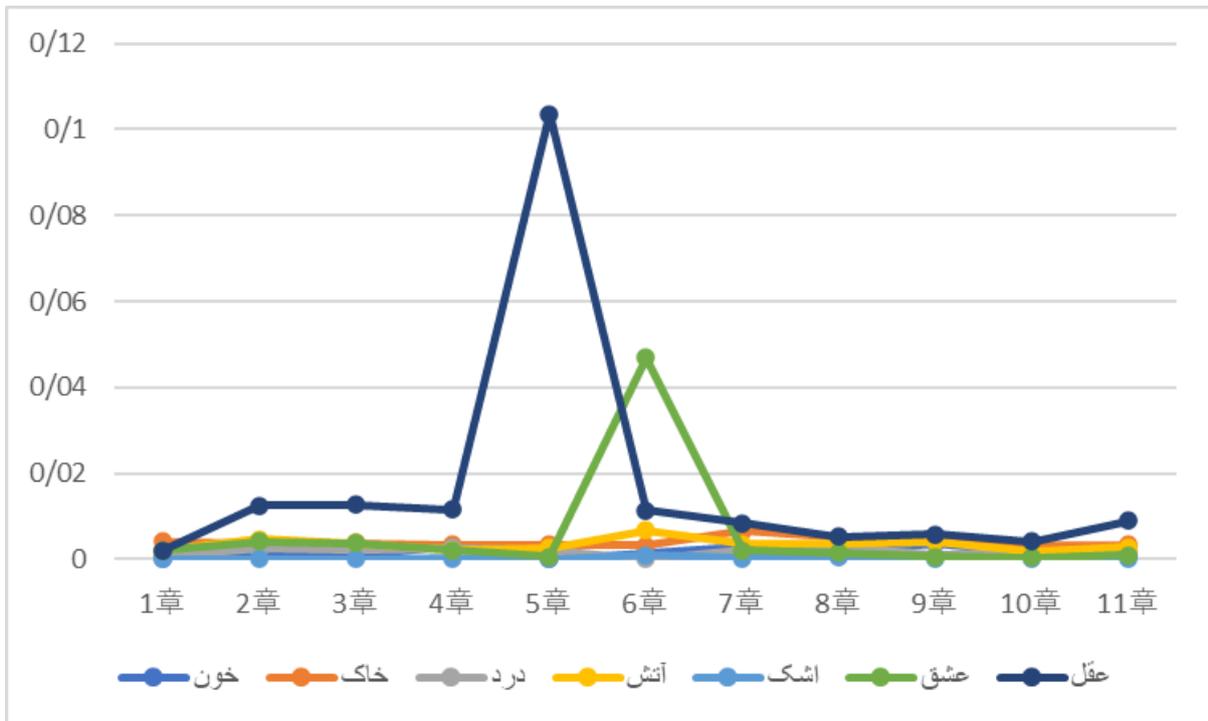


図 16.5 『真理の園』愛に関する単語の相対頻度

『真理の園』では「اشک (ashk)」のみ最頻出単語の 100 位以内に入っていない。前述の通り、全体の中で、「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」が相対頻度として、それぞれ 5 章と 6 章において突出して高い値を示している。

愛に関する特徴語の使用方法は前述の通りである。

(3) 共起ネットワーク分析

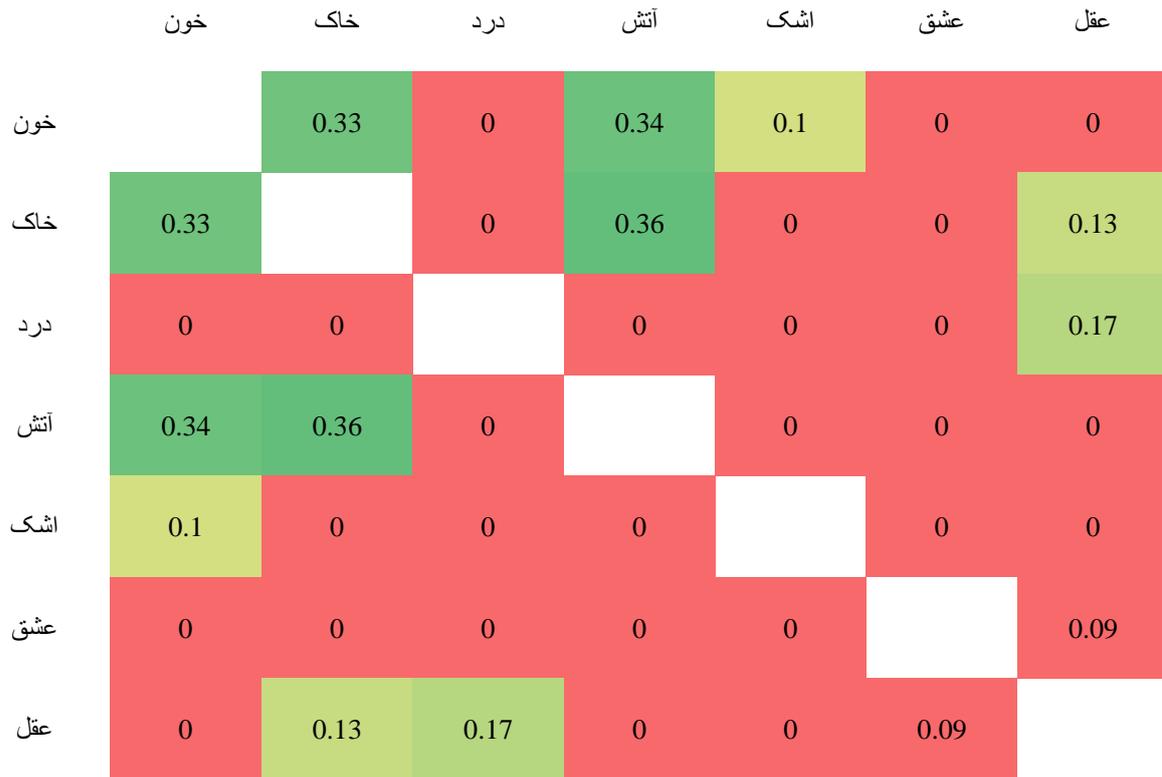
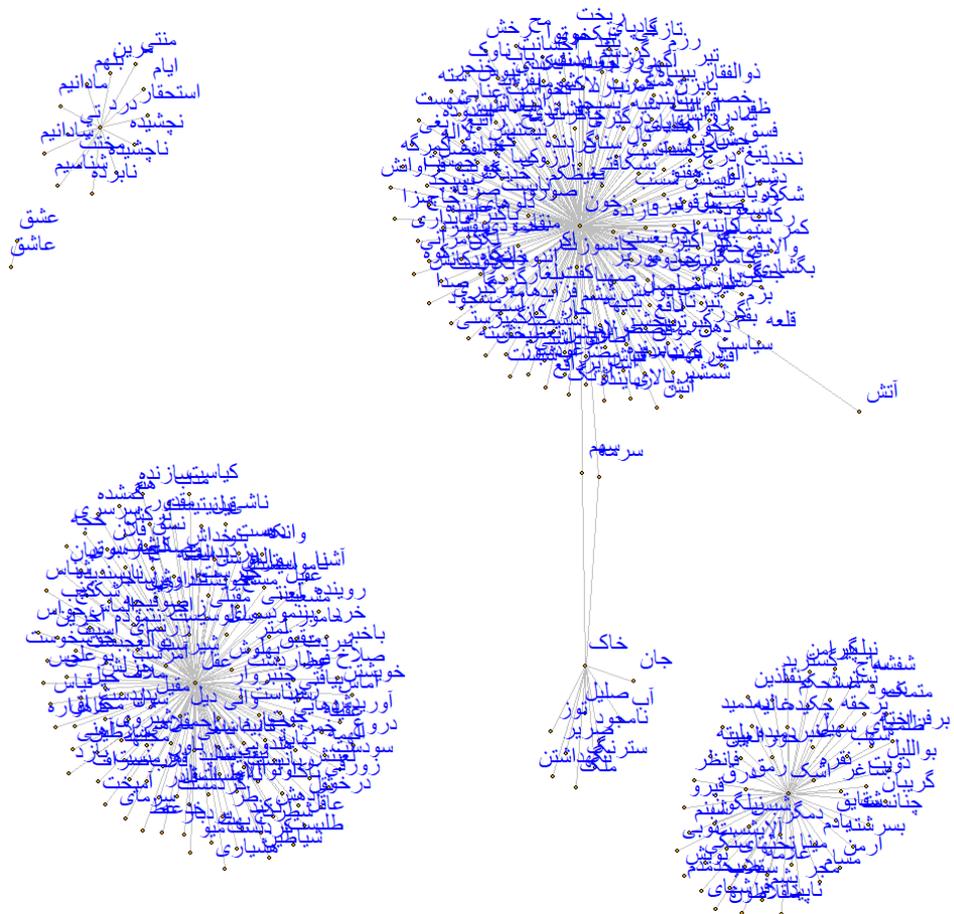


図 16.6 『真理の園』愛に関する単語同士の共起関係

共起ネットワークの分析から、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」、「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」、「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」の重みの値はそれぞれ高く、共起する頻度が高い。一方、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みは低く、共起する頻度は低い。これは、前述の図 16.5 から、「عقل (‘aql)」が登場する 5 章において「عشق (‘eshq)」はほとんど登場しない。すなわち、「عقل (‘aql)」の登場頻度が一番高い 5 章の箇所において、「عشق (‘eshq)」の数はほとんどない。反対に「عشق (‘eshq)」が登場する 6 章の箇所において「عقل (‘aql)」は登場するが、数は少ない。

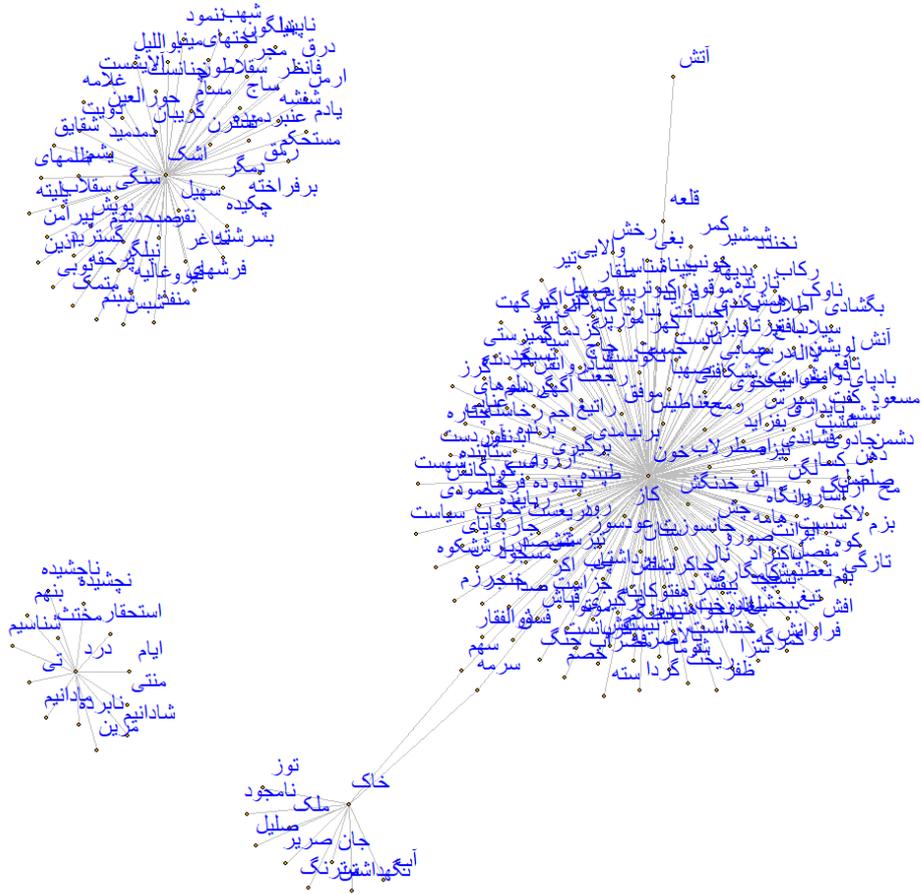
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | سنان | 0.73 |
| خاک | سهم | 0.57 |
| درد | استحقار | 0.58 |
| آتش | قلعه | 0.52 |
| اشک | سهیل | 0.76 |
| عشق | عاشق | 0.66 |
| عقل | أمرست | 0.87 |

図 16.7 『真理の園』愛に関する各単語と最も共起する単語



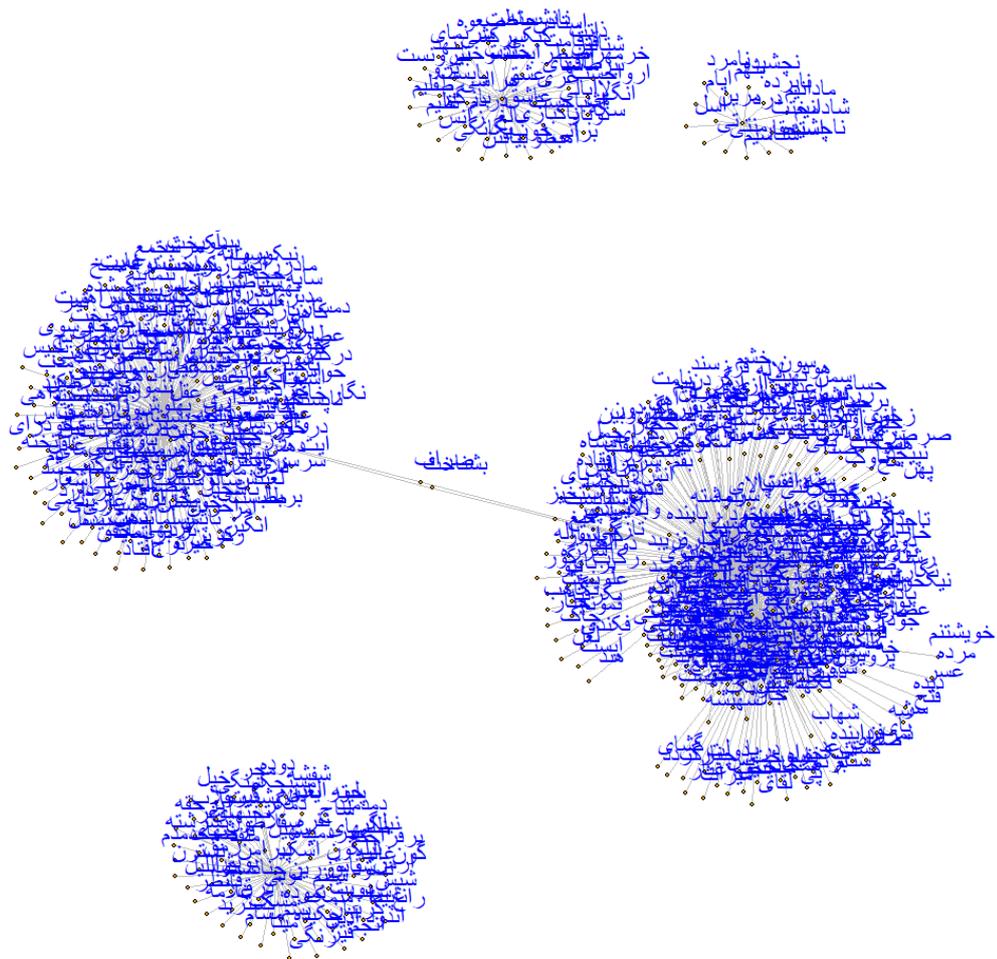
correlation Threshold: 0.5

図 16.8 『真理の園』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.5以上)



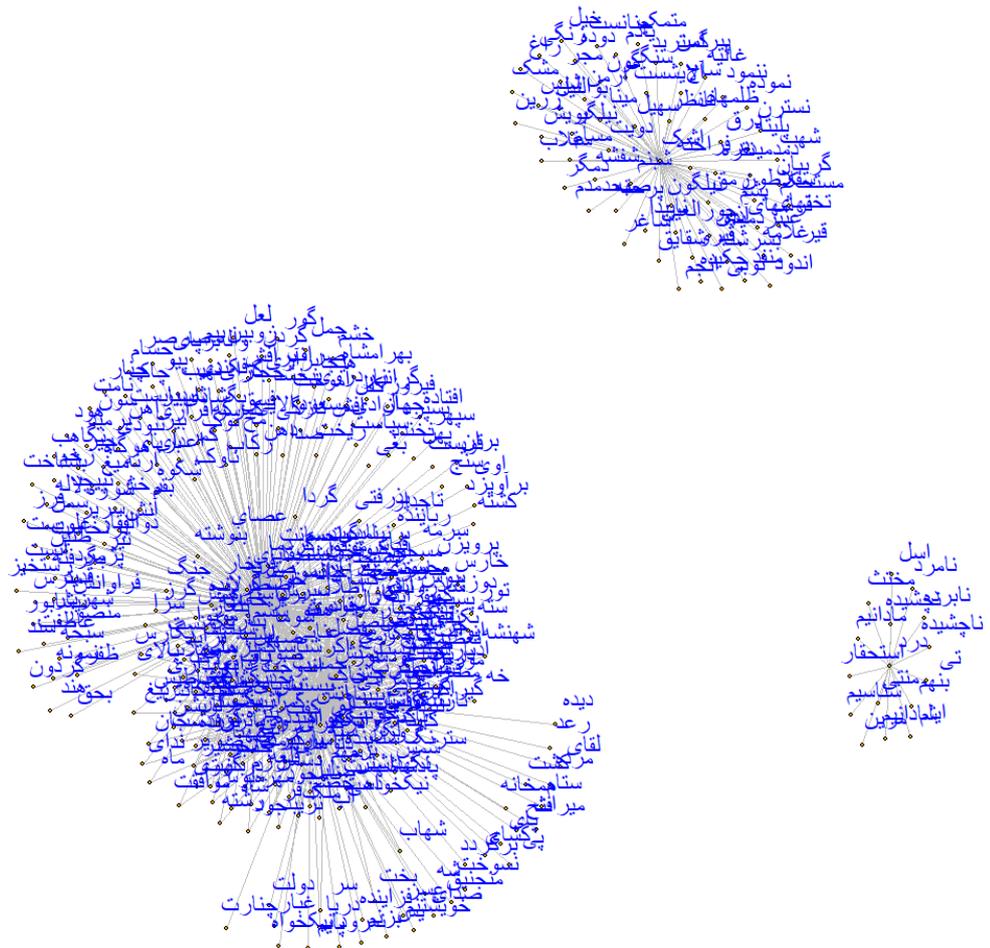
correlation Threshold: 0.5

図 16.9 『真理の園』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み = 0.5 以上)



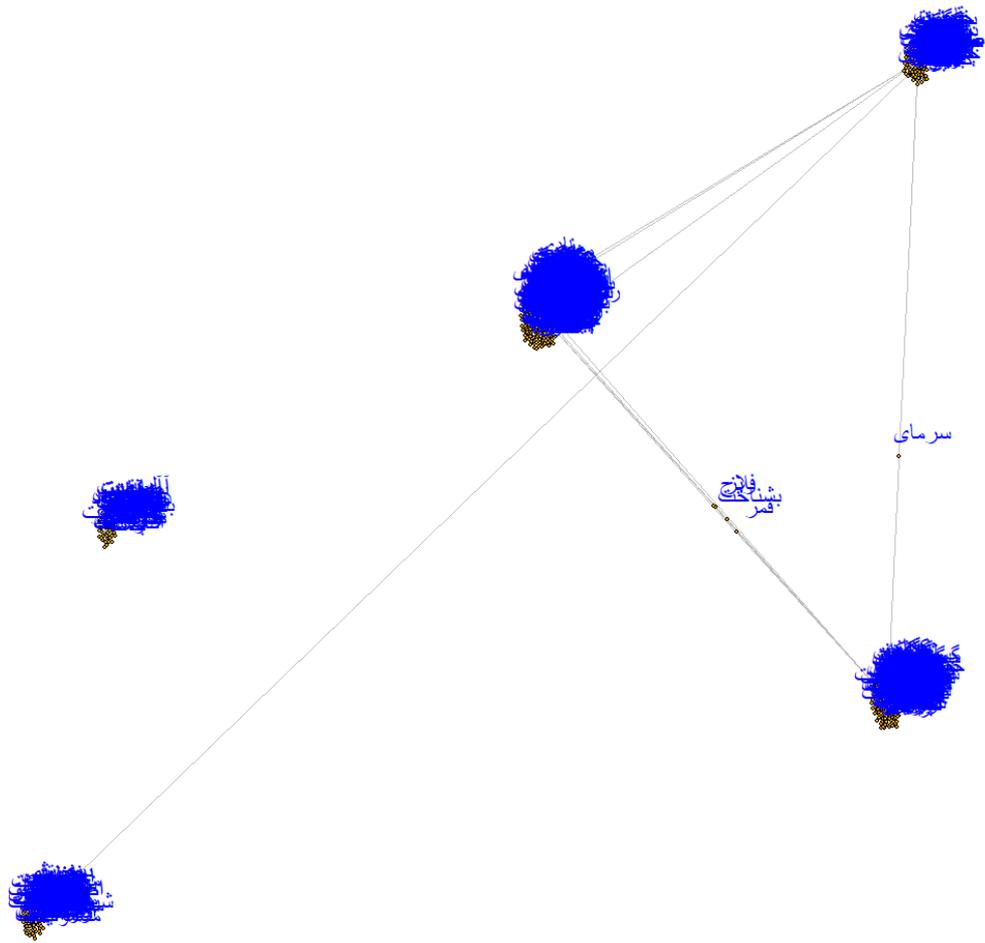
correlation Threshold: 0.4

図 16.10 『真理の園』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4 以上)



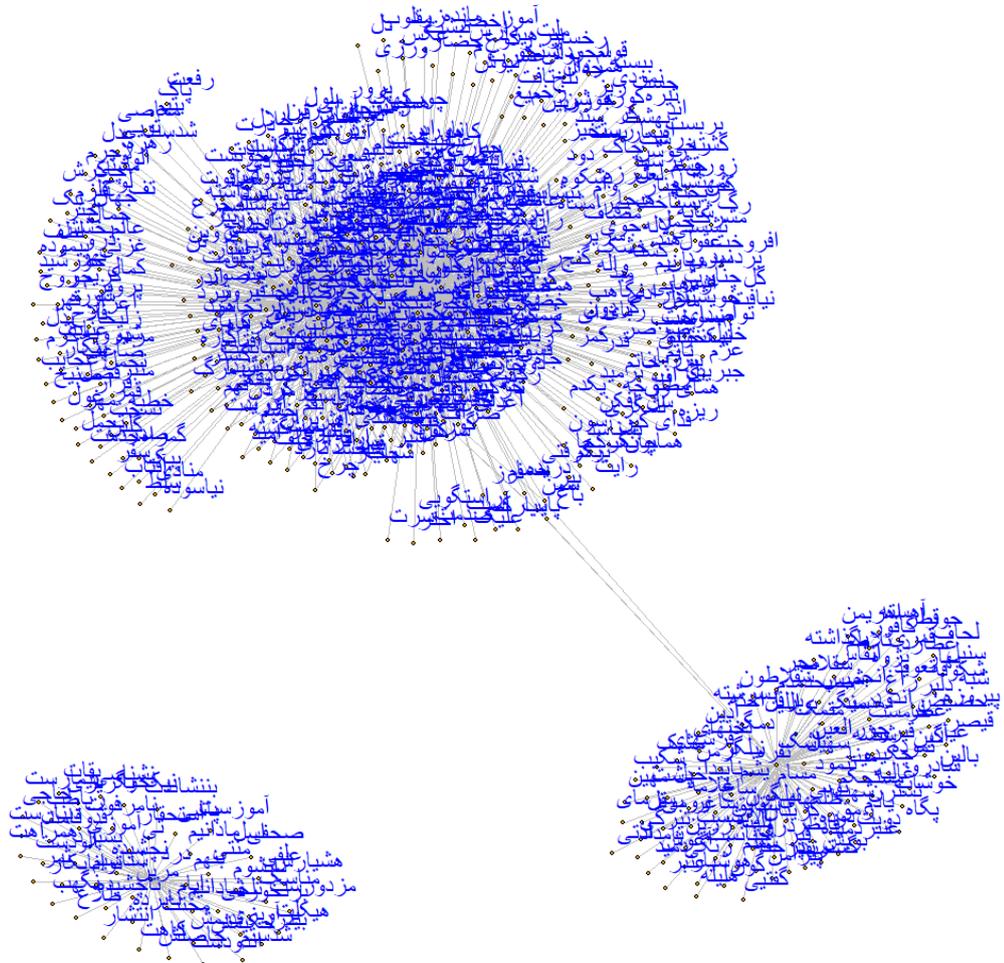
correlation Threshold: 0.4

図 16.11 『真理の園』 愛に関する単語の内、「عشق (eshq)」と「عقل (aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.4以上)



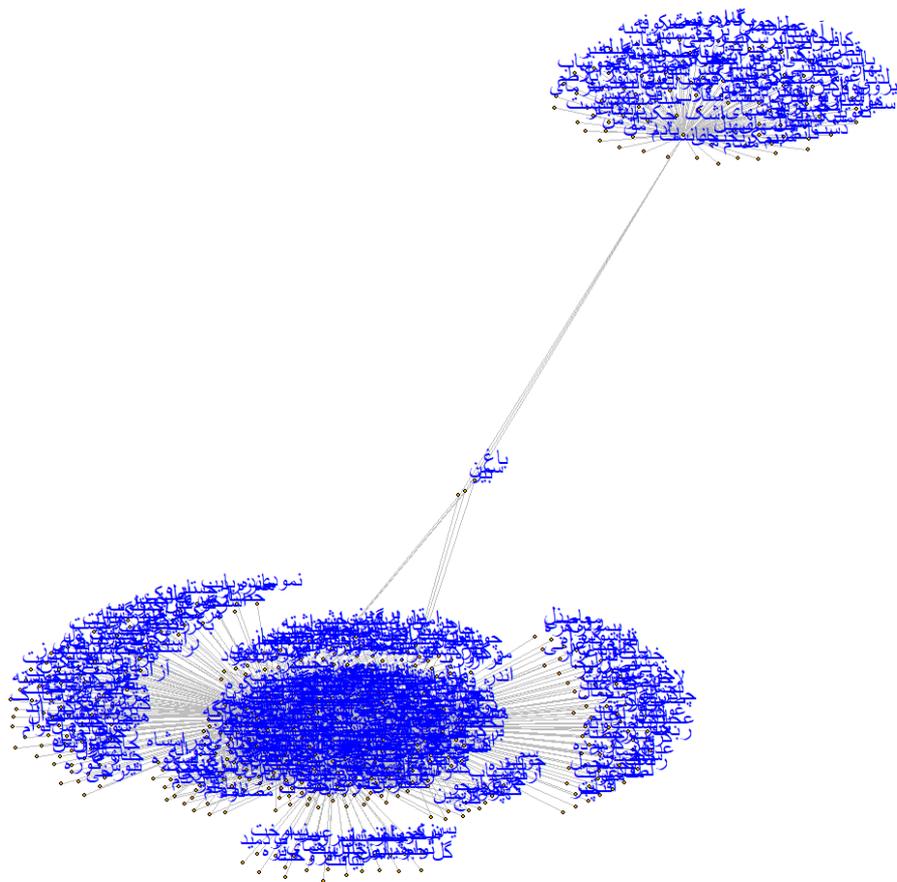
correlation Threshold: 0.3

図 16.12 『真理の園』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.3以上）



correlation Threshold: 0.3

図 16.13 『真理の園』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3以上)



correlation Threshold: 0.3

図 16.14 『真理の園』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と「درد (dard)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3以上)

重みが 0.5 の時、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は「سرمه (sorمه) 」と「سهم (sahm) 」と共起する。「خون (khūn) 」と「آتش (ātesh) 」は「قلعه (qal'e) 」と共起する。重みが 0.4 の時、「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」は「بشاخب (be-shākhāb) 」と「ضراف」 と共起する。重み 0.3 の時、「اشک (ashk) 」と「خون (khūn) 」は「باغ (bāgh) 」と共起する。

(4) 『真理の園』に関するまとめ

「عقل ('aql) 」について詳細に語られるテキストであり、サナーイーにおける理性の位置づけを示している。すなわち、「عقل ('aql) 」は真実の道へいざなうものとして重要なものであり、肯定的なものである。しかし、「神への愛」である「عشق ('eshq) 」が現れる時に、それは役に立たないものとなる。なぜなら、「神への愛」が「عقل ('aql) 」を超えていくからである。アッタールのテキストに関する先行研究や本論文の 4 章において指摘する、アッタールの「عقل ('aql) 」に対する扱いとは異なる。サナーイーのこのテキストにおいて、「عقل ('aql) 」は明確に肯定的な面を示している。さらに、「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」を大半の場合同時に使うアッタールと異なり、「عشق ('eshq) 」と関係なく「عقل ('aql) 」を章として設けるなどことから、サナーイーの『真理の園』は「عشق ('eshq) 」との対比として「عقل ('aql) 」を重視するわけではなく、「عقل ('aql) 」に一定の役割を持たせ、重視する。

2.2 『精神的マサヴィー』に対する主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析、共起ネットワーク分析

(1) 主成分分析、単語の相対頻度、階層的クラスター分析

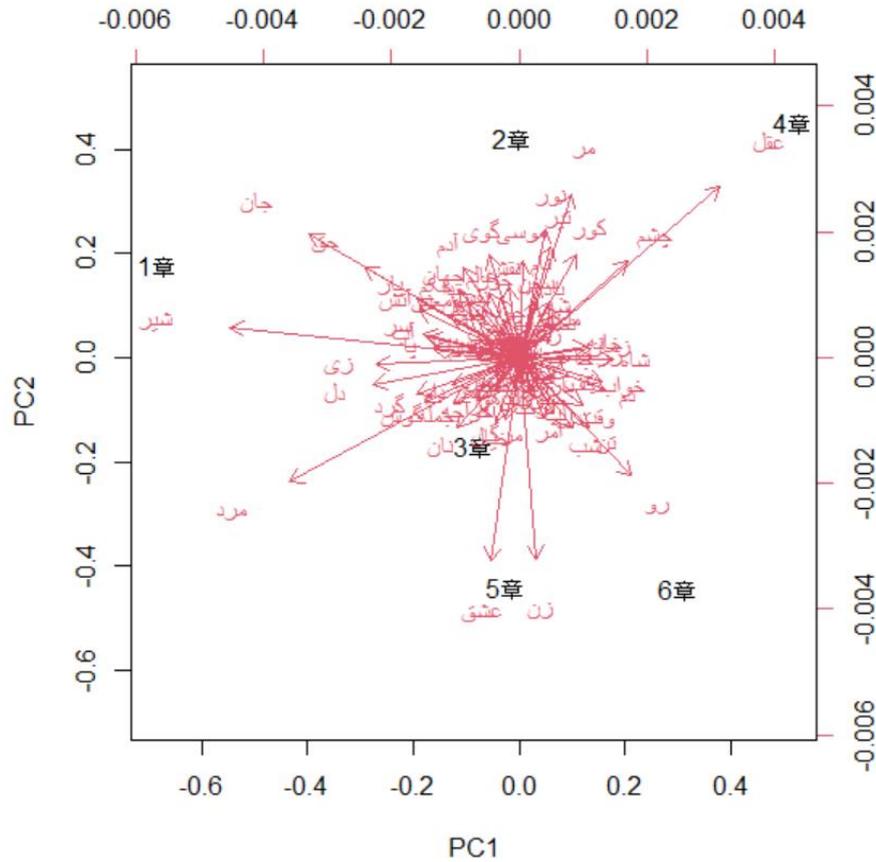


図 17.1 『精神的マサヴィー』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.314640、PC2=0.243930)

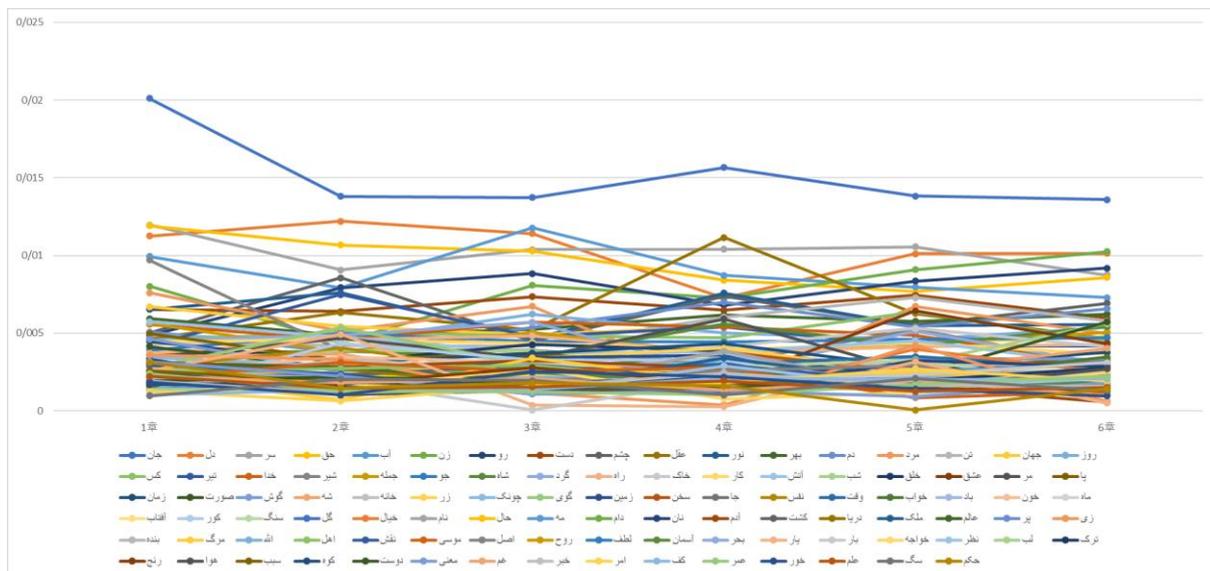


図 17.2 『精神的マサヴィー』最頻出名詞 100 の相対頻度

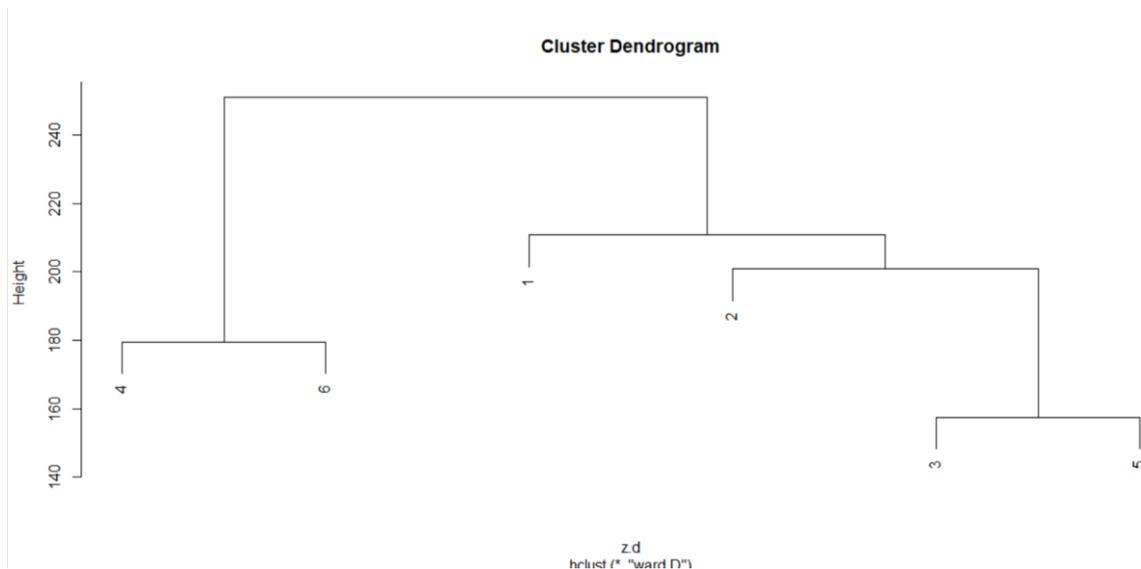


図 17.3 『精神的マスナヴィー』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析

主成分分析の結果、それぞれの章は、特徴において異なる。

1 章では、「شير (shīr)」と「مرد (mard)」と「جان (jān)」が特徴語として使用される。

2 章において、「مر (mor)」と「نور (nūr)」の相対頻度は高い。

3 章においては、突出した特徴語がない。

4 章では「عقل ('aql)」の相対頻度が他の章より高い。実際に、他の章に比べて、二倍近い数の「عقل ('aql)」が使用される。

5 章と 6 章において、「عشق ('eshq)」と「زن (zan)」の相対頻度は高い。

特徴語の使用方法

1 章においてライオンを表す「شير (shīr)」の逸話が二つ含まれ、一つは章内でも比較的長い。この逸話の内容は、以下の通りである。動物達に対して圧政を敷いていたライオンがいた。彼は、ウサギの作戦で、井戸の中の水面に移る自分自身の姿を、敵のライオンだと思い込む。ライオンは、敵に襲い掛かろうとして、井戸に転落して死ぬ。ここでのライオンは、圧政者のモチーフである。この逸話は、ライオンが、自身が持っていた圧政者としての悪性を井戸の水面に見たことを説明する³⁰²。

(1 章)

ライオンは自分の姿を熱い水に反映されるのを見た
そこに、ライオンの姿と、太ったウサギがいた
彼が水に自分の敵の姿を見たので
ウサギを放置して、井戸に飛び込んだ

(中略)

より圧政を行うものには、より恐ろしい井戸がある
公正さは、より悪いものに、より悪いことを命じる
威信のため圧政を行使するものよ
自身のために井戸を掘っていることを知れ

(中略)

ライオンは井戸に自分の姿を見、沸き立った怒りから
その瞬間、敵と自身を区別できなかった
彼は自分の姿を敵として見た

³⁰² 『精神的マスナヴィー』の韻律はラマル体 (— U — — / — U — — / — U —)

必然的に、自分に向かって剣を抜いた³⁰³

一方、他のライオンの逸話において、ライオンは動物の王、神の比喩として用いられる。そして、ライオンの前で己を示したオオカミは殺される。ライオンに従い、自己を律し自他の区別をなくすことが重要であると逸話は主張する。

(1章)

狩りのため、ライオン、オオカミ、キツネは
山岳地に向かった

(中略)

雄ライオンにとって、彼らは恥であったが
彼は寛大さを与え、同行者として [己] を示した
このような王にとって、軍隊は煩わしいが
同行者として、居ることは、群衆にとって慈悲である³⁰⁴

(1章)

ライオンは言った、オオカミよ、どのように、そなたは話すのか、言え
私がいる時、そなたは「私たち」と「そなた」と言うの
か？

オオカミ、自身は何たる犬か！そなたは己を見た
私のようなこの比類ないライオンが前にいて。私を見ずに
ライオンは言った、前に出よ、自分を買った痴れ者よ
オオカミがライオンの前に来た。ライオンは、彼を切り裂
いた³⁰⁵

(1章)

彼の元に、「私たち」と「私」を捧げよ
王国は彼の王国、彼に王国を与えよ³⁰⁶

最初の逸話において、ライオンは自制のない圧政を行う王であるのに対して、もう一つの逸話では、ライオンが神の比喩として用いられる。すなわち、反対の性質を持ったものとして語られる。

2章において、光を表す「نور (nūr)」には、「感覚の光」と「真理の光」の二種類あると語られる。「感覚の光」は「真理の光」の一部であり、人の目を地上の方に向けさせる役割がある。一方、「真理の光」は天に目に向けさせるものである。「感覚の光」の上に「真理の光」が照らされたとき、この世の法則を定める真理に導かれる。

(2章)

真理の光が、感覚の光に乗ると
その時、魂は真理の方を望む
騎手なしの馬は、道の手順をどう知るのか

³⁰³ Muḥammad al Balkhī al-Rūmī, *Masnavī Ma'navī*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh72> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁴ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh142> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁵ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh143> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁶ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh146> (accessed August 18, 2023).

王の道を知るには、王が必要である
その光が乗っている、一つの感覚に進め
感覚にとって、その光は良き主である
感覚の光は、真理の光によって飾られる
これが「光の上に光を沿える」の意味である
感覚の光は、地に引き寄せる
真理の光は、天に導く³⁰⁷

4章では、「عقل ('aql)」が肯定的な文脈で頻繁に登場する。また、「عقل ('aql)」は、全体的な理性又は完璧な理性、部分的な理性のように区別され用いられている。

(4章)

王は魂のようで、主は理性のようである
墮落した理性は靈魂を移住させる
理性の天使がハールートのようになった時、
二百の悪魔の魔術を学ぶ者となった
部分的な理性を自身のワズィールとするな
スルターンよ、普遍的な理性をワズィールとせよ
欲望を自身のワズィールとするな
さすれば、礼拝から、そなたの純粋な魂が現れる
この欲望は強欲で盲目で
理性は最後の審判の日について考えている³⁰⁸

(4章)

この部分的な理性は、あの全体の理性から来ている
その影の動きは、あのバラの枝から来ている
そこでは、最終的にその影が消えてしまう
そして、彼はその願望と探求の頂を知るだろう、求めよ³⁰⁹

5章では、アヤーズ、第6章では、ズライハとヨセフ、ヒンズー教徒の奴隷と王の娘など、ペルシア詩において愛するものと愛されるものを表すモチーフが使われる。すなわち、第5章と第6章において、題材は変わるが、「神への愛」に入っている状態が表現される。その時、美しい女性や愛の状態を表すために「عشق ('eshq)」と「زن (zan)」が使用される。

(5章)

アヤーズの愛の物語に戻る
それは、一つの神秘に満ちた宝石のよう
毎日、彼は、そのより優りの部屋に行く
革の服と靴がその部屋に見られまで
なぜなら、存在が酔いを強烈にするからである
恥で理性を心から連れ出す³¹⁰

(5章)

³⁰⁷ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar2/sh26> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁸ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar4/sh47> (accessed August 18, 2023).

³⁰⁹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar4/sh135> (accessed August 18, 2023).

³¹⁰ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar5/sh76> (accessed August 18, 2023).

ズライハは、芸香から沈香まで
全ての物にユースフの名を付けた
名前の中に彼の名を隠し
親密なものにそのことを教えた
(中略)
何十万の名前を一緒に呼ぶ時
その目的と願いはユースフであった³¹¹

(6章)

あるホージャに、ヒンドゥーの奴隷がいた
彼は、その奴隷を生き生きと育て上げた
(中略)
このホージャには器量の良い娘もいた
銀のような美しい体を持つ、美しい宝石のような娘であつた
(中略)
理性は、彼の苦しみが心から来るものであると言った
身体の薬は心の悲嘆には効果がなかった
自身の状態について語れないその奴隷は
彼に現れるものによって、胸を刺された状態のままである³¹²

階層的クラスタ分析の結果では、大きなクラスタ二つに分かれている
クラスタ1: 1章、2章、3章、5章
クラスタ2: 4章、6章
ここから、トップ 100 語の使い方として二つのパターンがあることが示されている。

³¹¹ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh115> (accessed August 18, 2023).

³¹² *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh5> (accessed August 18, 2023).

(2) 愛に関する単語について

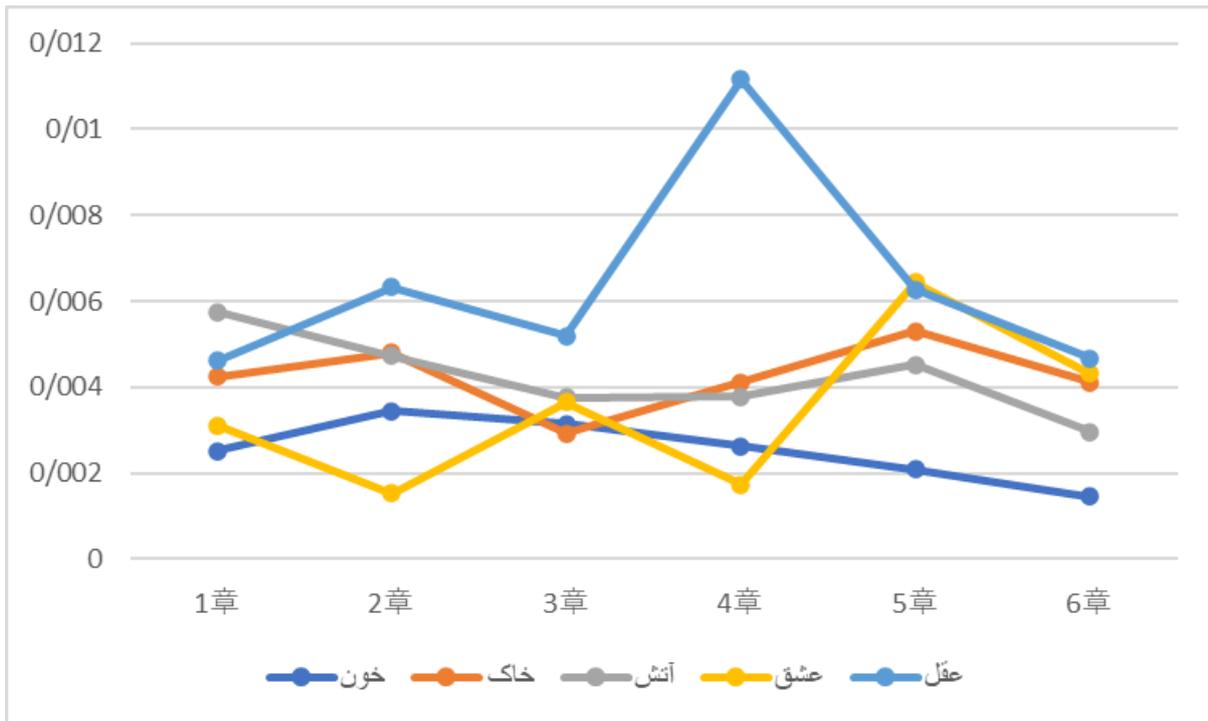


図 17.4 『精神的マスナヴィー』愛に関する単語の相対頻度（頻度 100 位以内）

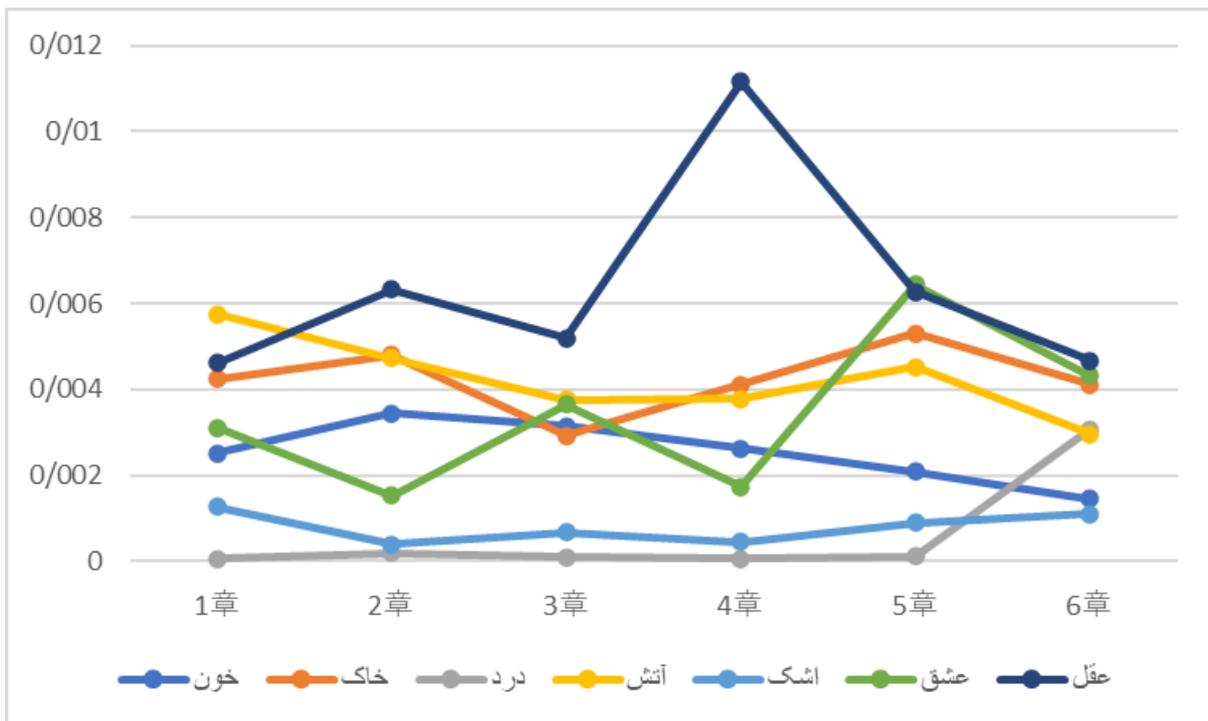


図 17.5 『精神的マスナヴィー』愛に関する単語の相対頻度

『精神的マスナヴィー』において、「اشک (ashk)」と「درد (dard)」は、頻出単語のトップ 100 位以内に入らない。

前述の主成分分析の結果と図 17.5 から、「عقل ('aql)」は 4 章における相対頻度が高く、「عشق ('eshq)」は 5 章と 6 章において相対頻度が高い。また第 6 章において、「درد (dard)」の相対頻度は他の章にくらべて一番高い。

愛に関する特徴語の使用法

4章と5章における「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」の使い方は前述の通りである。

6章において、浪費によって財産を失った男が、宝があるという夢に従って旅立った後、エジプトで夜警に捕縛される逸話が含まれている。その夜警と男の会話の中で「درد (dard)」が頻繁に登場する。そこで、探究における苦痛の効能について説明される。

(6章)

彼は、その夢と金の財宝について語った

そして、彼の誠実さのために、その人の心が開いた

(中略)

痛みは、古い薬を新しくする

痛みは、すべての疲労困憊の枝を慣らす

痛みを新しくする一つの錬金術がある

その疲労困憊がある所は、痛みが起こる方向

さて！そなたは、疲労困憊から冷たい息をするな

痛みを探せ、痛みを探せ、痛みの痛みを³¹³

³¹³ *Ibid.*, <https://ganjoor.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh122> (accessed August 18, 2023).

(3) 共起ネットワーク分析

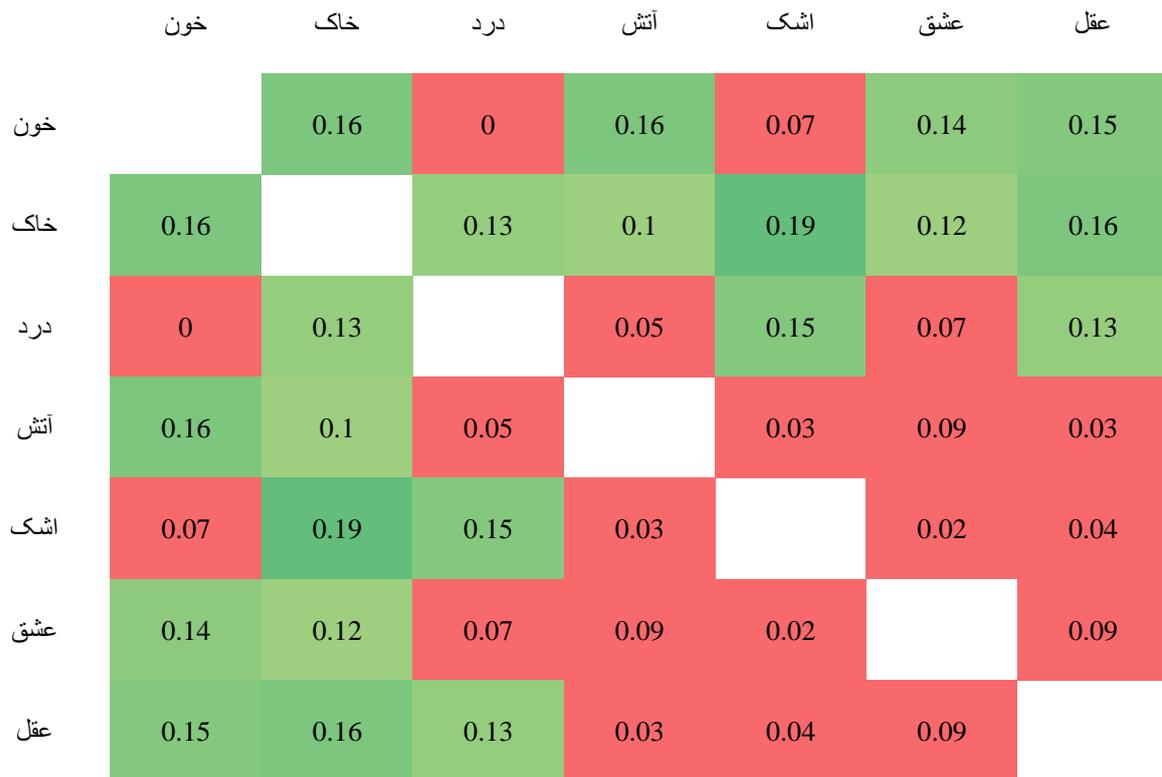


図 17.6 『精神的マスのナーヴィー』愛に関する単語同士の共起関係

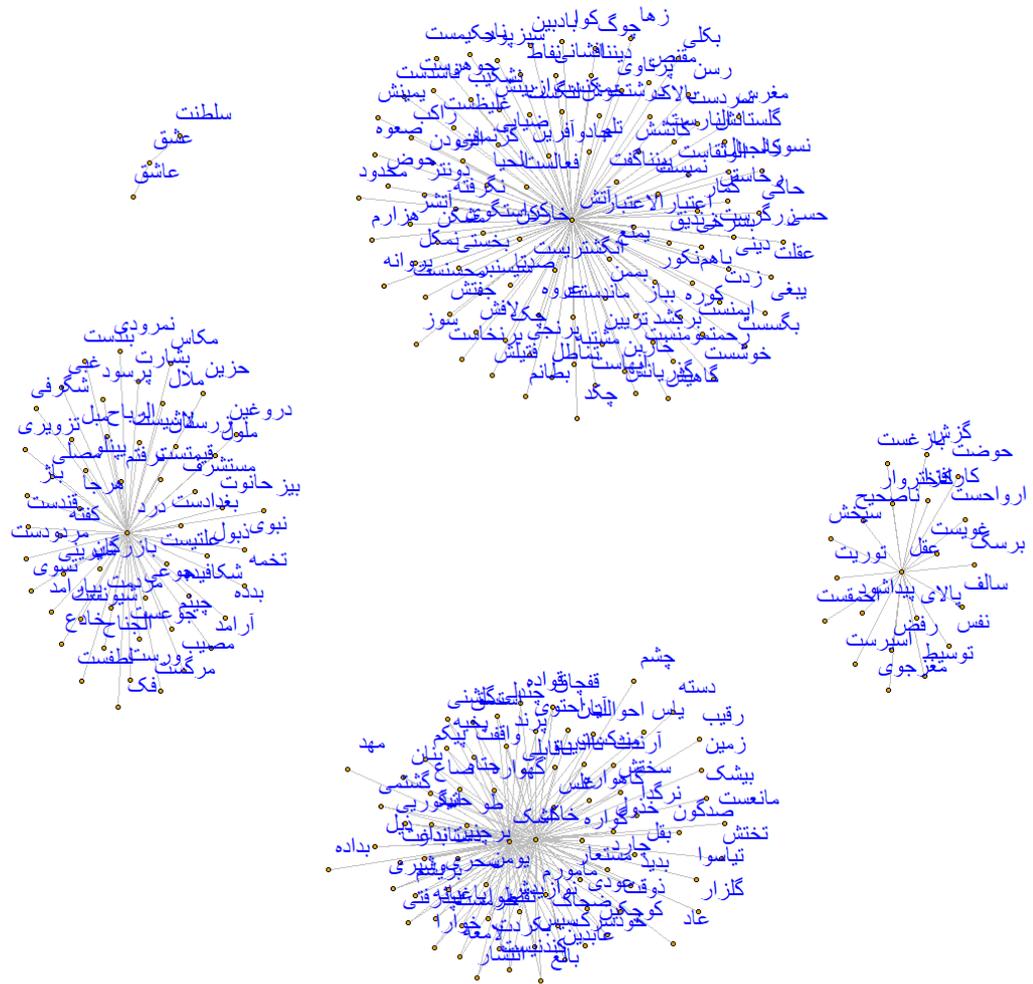
共起ネットワークの結果から、「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」の重みの値が最も高く、共起する割合が最も高い。

「خون (khūn)」と最も共起する単語の重みの最大値は 0.29 であり、他の単語の最大値と比べて低い。なので、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」、「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」、「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」、「خون (khūn)」と「عقل (‘aql)」も「خون (khūn)」と共起する単語として相対的に高い重みの値を持つ。

『真理の園』同様に、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みの値は低く、共起する頻度は多くない。この原因として、「عشق (‘eshq)」の頻度が高い箇所と、「عقل (‘aql)」の頻度が高い箇所が必ずしも一致しないことが挙げられる。

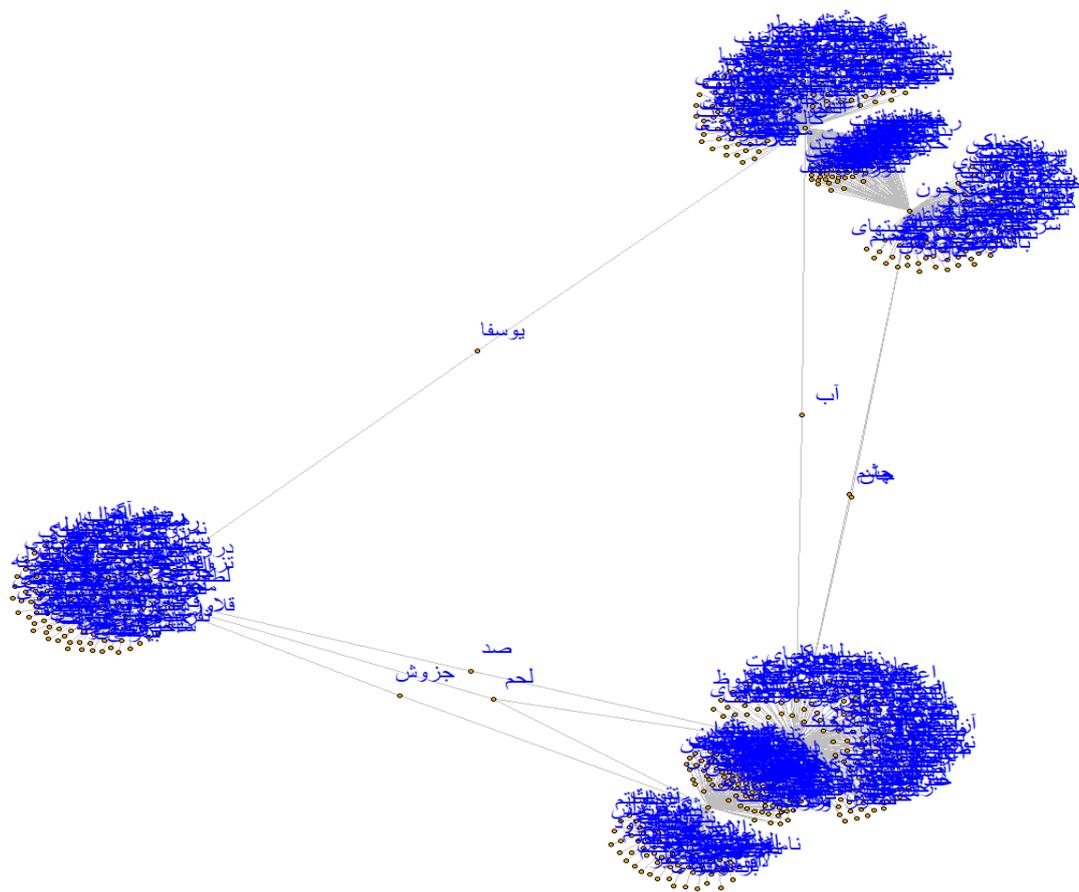
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | اعطا | 0.29 |
| خاک | آرندت | 0.39 |
| درد | الجناح | 0.57 |
| آتش | آبهاست | 0.46 |
| اشک | آرندت | 0.38 |
| عشق | عاشق | 0.42 |
| عقل | نفس | 0.34 |

図 17.7 『精神的マスのナーヴィー』愛に関する各単語と最も共起する単語



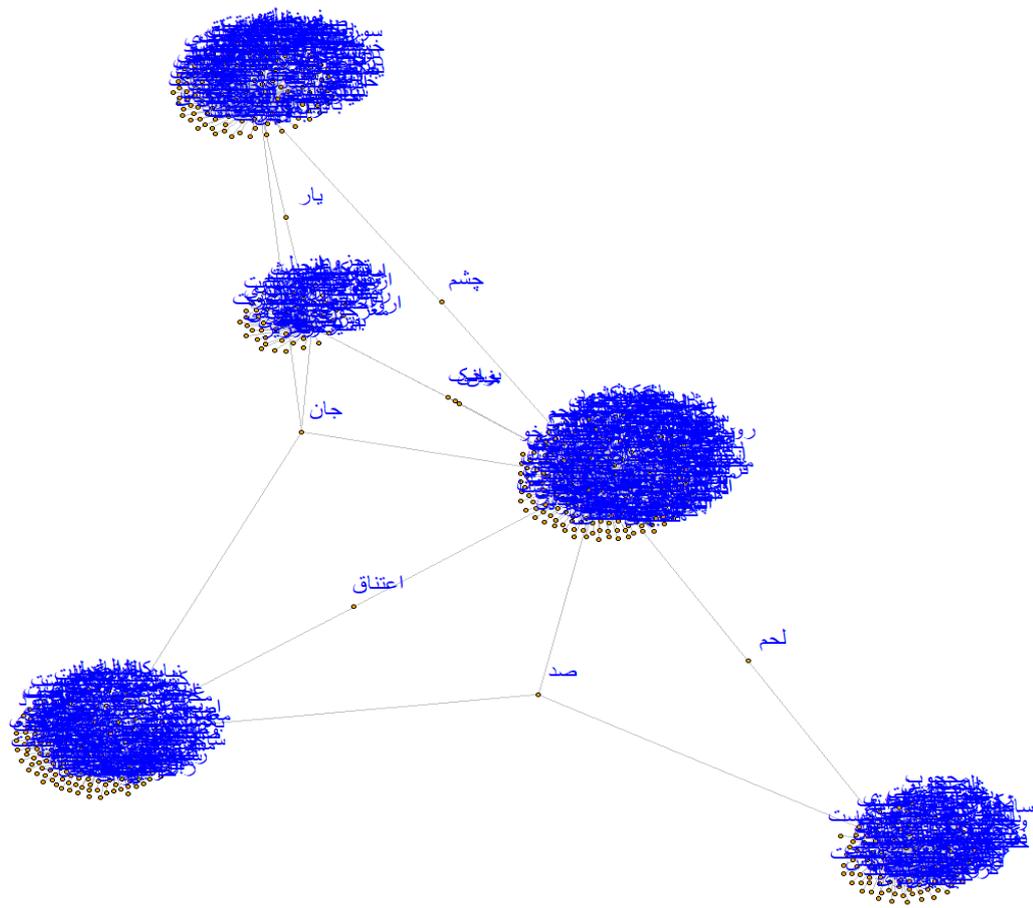
correlation Threshold: 0.3

図 17.8 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3 以上)



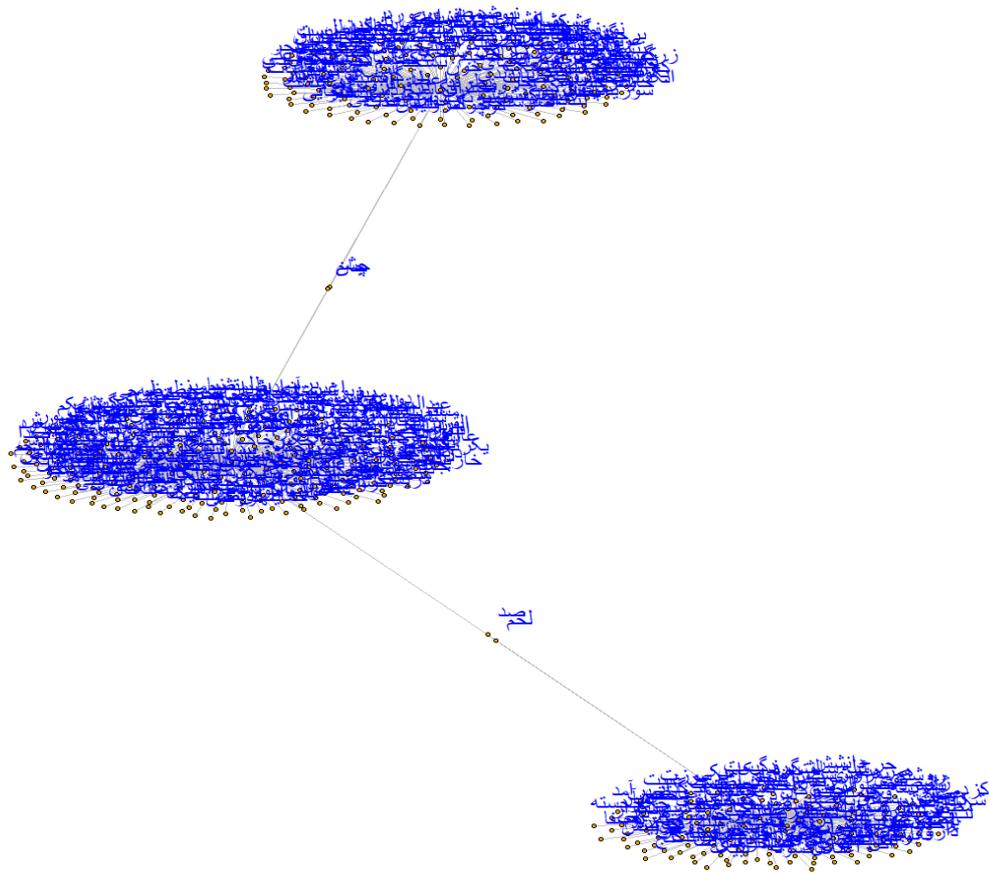
correlation Threshold: 0.2

図 17.9 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2以上)



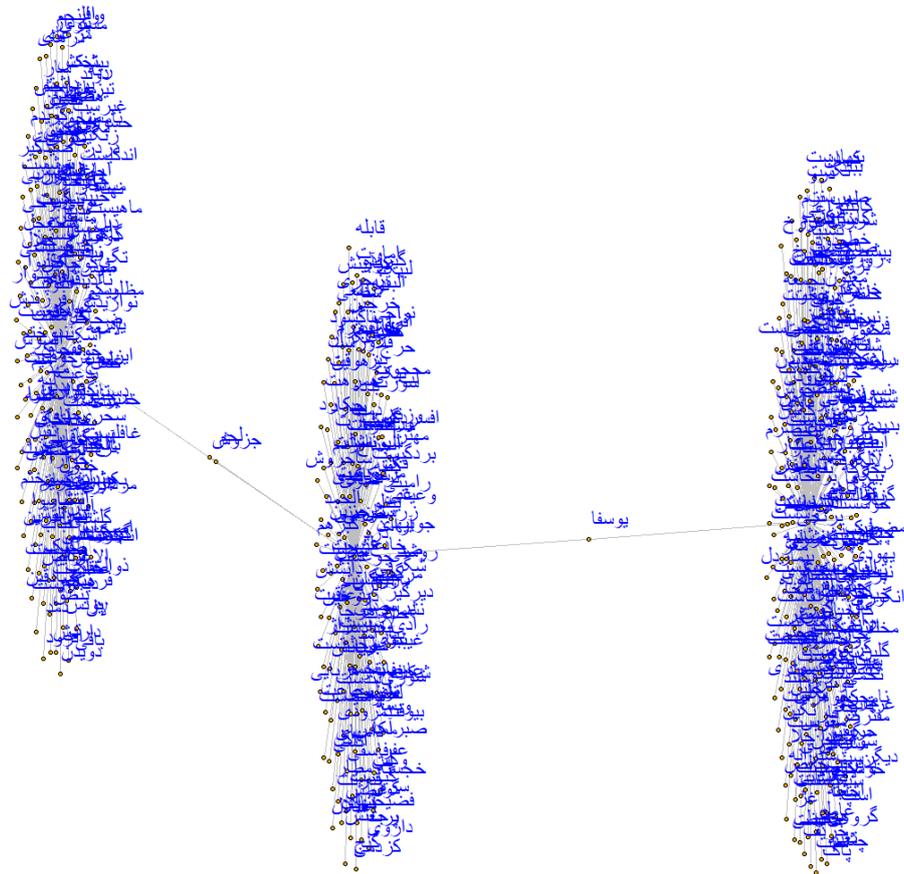
correlation Threshold: 0.2

図 17.10 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語の内、「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2以上)



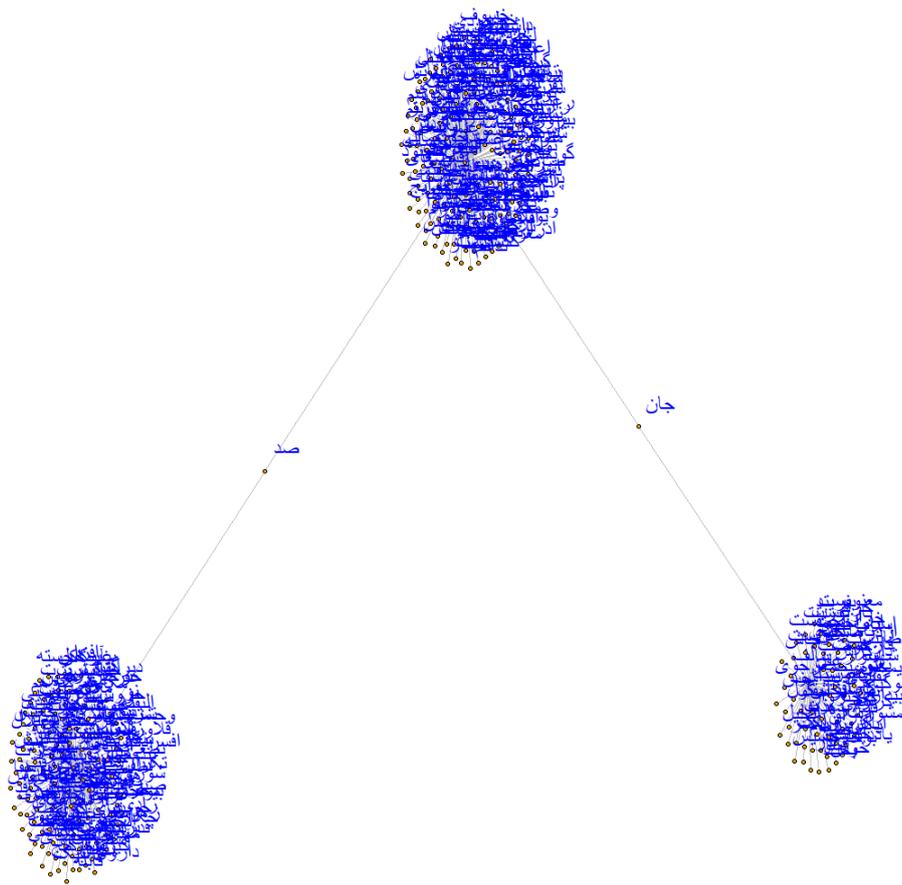
correlation Threshold: 0.2

図 17.11 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と「آتش (ātesh)」と「اشك (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2以上)



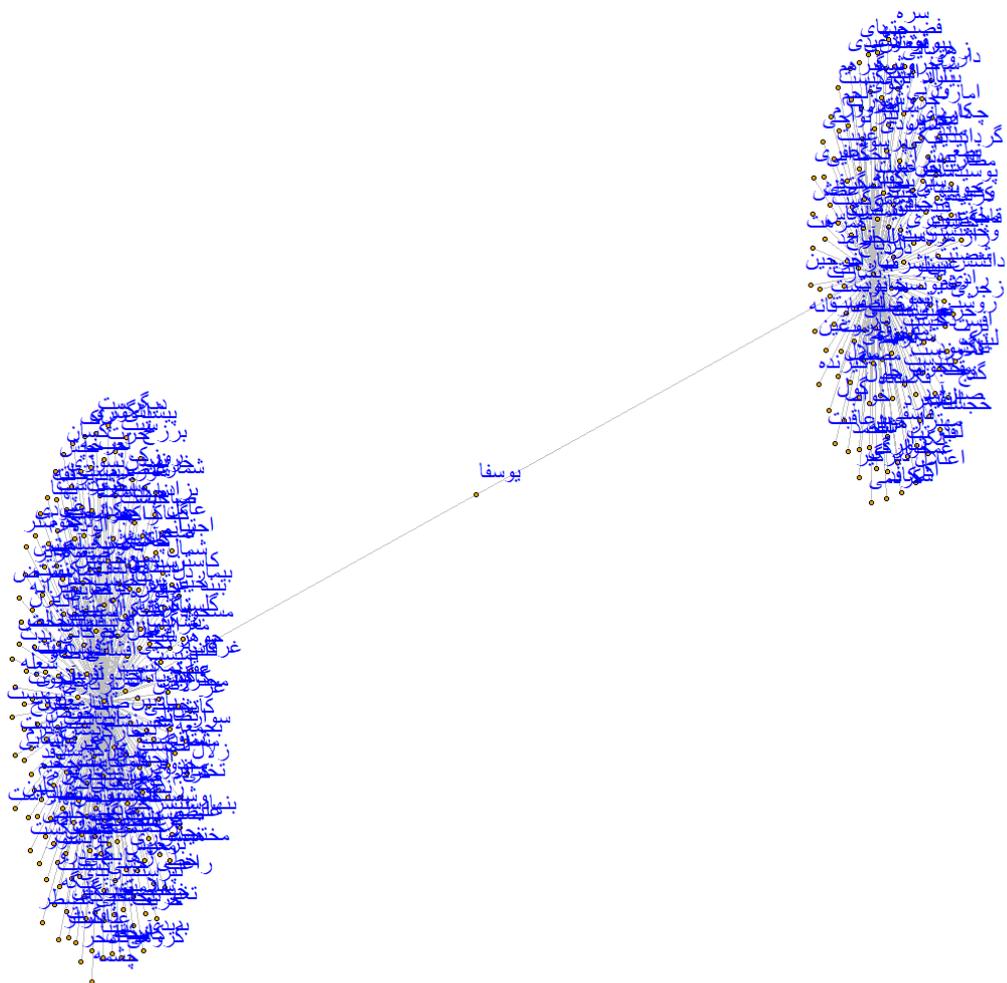
correlation Threshold: 0.2

図 17.12 『精神的マサナヴィー』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」と「آتش (ātesh) 」と「اشک (ashk) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2 以上)



correlation Threshold: 0.2

図 17.13 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語の内、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」と「اشک (ashk) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2 以上)



correlation Threshold: 0.2

図 17.14 『精神的マスナヴィー』 愛に関する単語の内「درد (dard)」と「آتش (ātesh)」の共起ネットワーク

重みの値が 0.3 の時、「خون (khūn)」以外の単語が登場する。また、図 17.8 から「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」は共起する単語がほとんど同一である。

重みの値が 0.2 の時、「درد (dard)」と「آتش (ātesh)」は「یوسف (yūsof)」と、「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」と「خاک (khāk)」と「درد (dard)」は「لحم (lahm)」と、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」は「آب (āb)」と、「عشق ('eshq)」と「عقل (aql)」は「جان (jān)」とそれぞれ共起する。

(4) 『精神的マスナヴィー』に関するまとめ

「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」は共起することもあるが、重みの値が低いことから、サナーイーの『真理の園』同様に、別々の箇所が登場することが多い。「عقل ('aql)」は第 4 章、「عشق ('eshq)」は 5 章と 6 章においてそれぞれ登場することから、同時に使用されることが多いアッタールのテキストと異なる。また、異なる種類の「عقل ('aql)」があり、明確に区別されて用いられ、それぞれの「عقل ('aql)」の役割は異なる。また、6 章からなるこのテキストの用語の使われ方や特徴は、主成分分析の結果から、それぞれの章が他の章とは明確に異なることが明らかである。

階層的クラスター分析の結果から、頻度トップ 100 の単語を精査すると、4 章と 6 章は近く、「عشق ('eshq)」の相対頻度が高い 5 章と 6 章同士は必ずしも近くない。また、共起ネットワークの結果から、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値が相対的に高いことが明らかであり、アッタールのマスナヴィーと類似する。

2-3. 『アンヴァリー詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

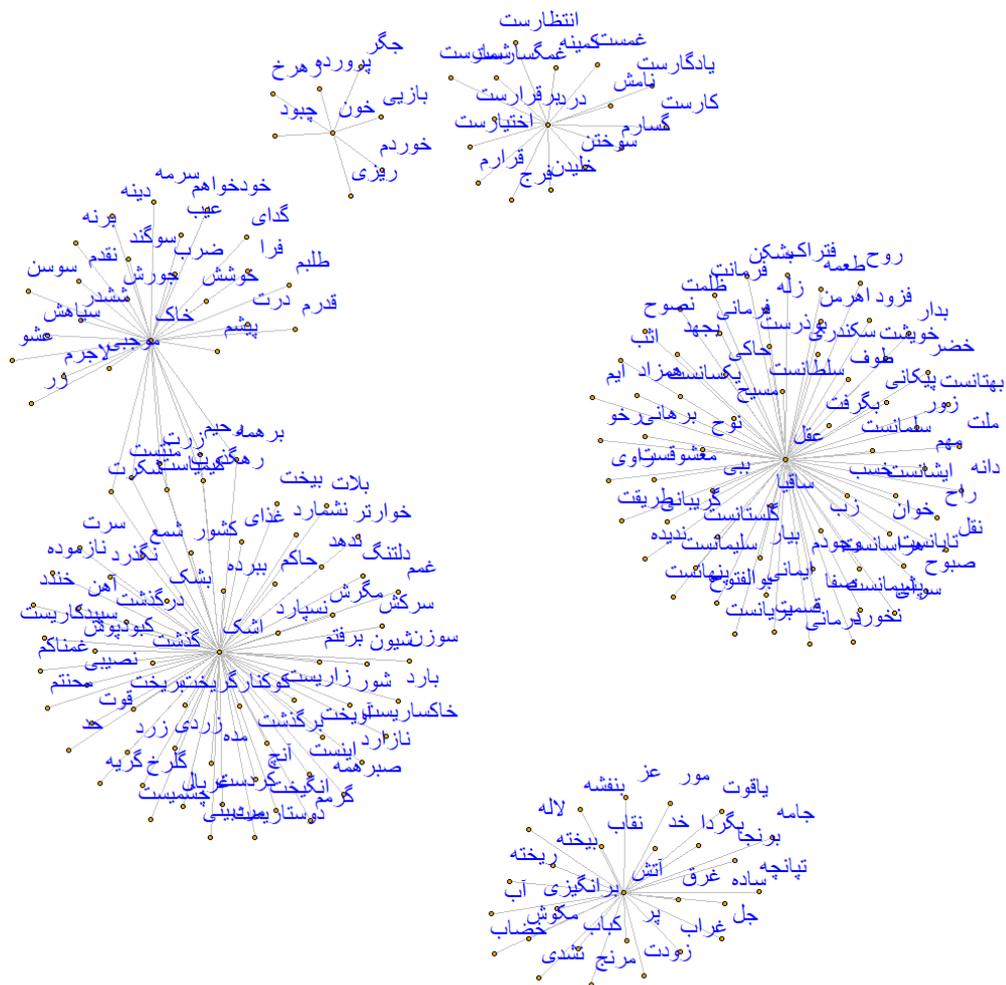


図 18.1 『アンヴァリー詩集—ガザル』愛に関する単語同士の共起関係

「**خون (khūn)**」において、「**خاک (khāk)**」の重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせより高く、共起する頻度が比較的高い。「**خاک (khāk)**」における、「**خون (khūn)**」と「**اشک (ashk)**」、「**درد (dard)**」における、「**عشق (‘eshq)**」も同様である。

| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | خوردم | 0.45 |
| خاک | جورش | 0.49 |
| درد | اختيارست | 0.45 |
| آتش | نقاب | 0.45 |
| اشک | گذشت | 0.37 |
| عشق | اشکی | 0.27 |
| عقل | ساقيا | 0.47 |

図 18.2 『アンヴァリー詩集—ガザル』愛に関する各単語と最も共起する単語



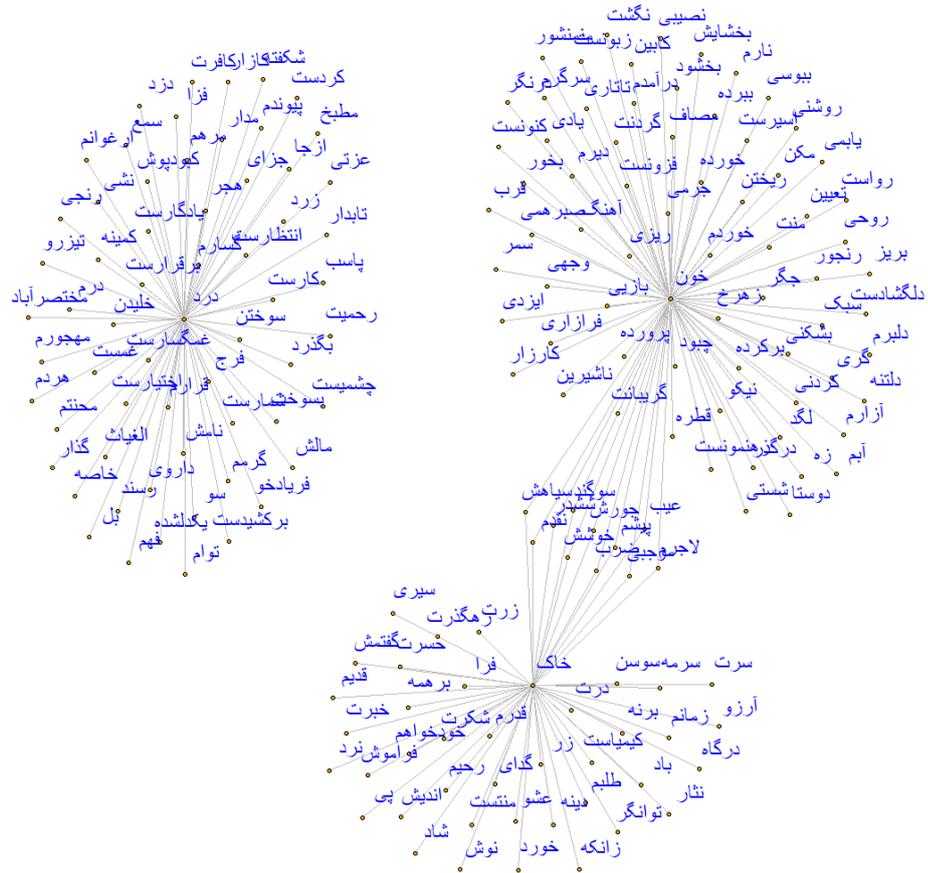
correlation Threshold: 0.3

図 18.3 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3 以上)



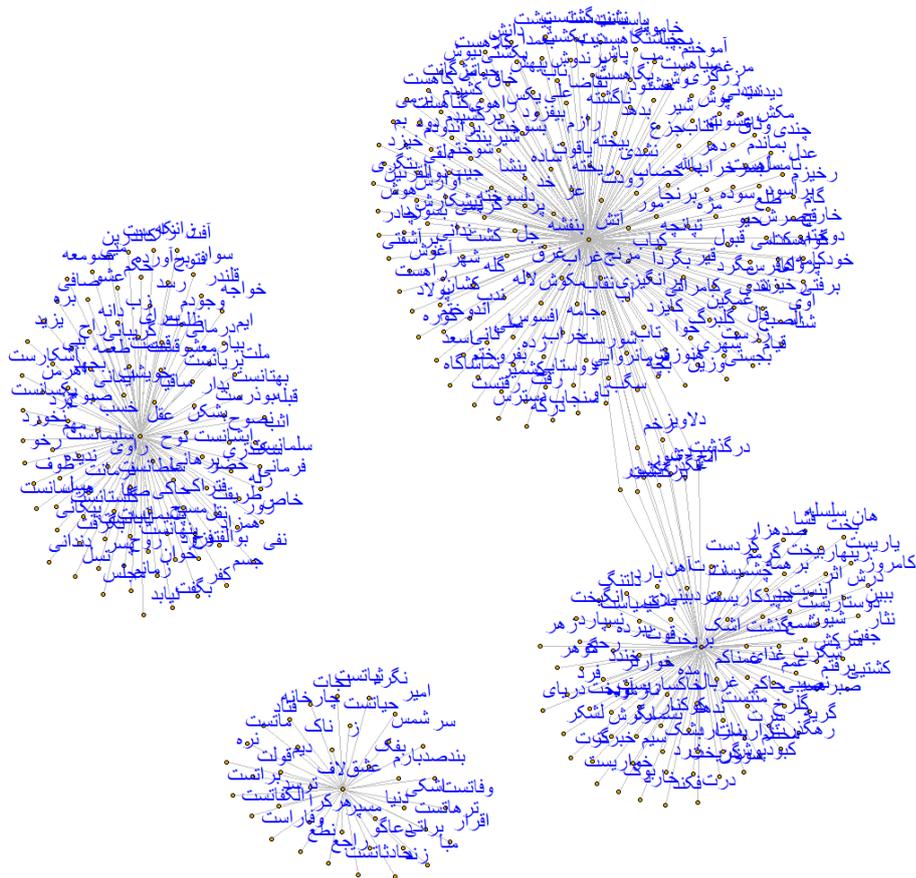
correlation Threshold: 0.2

図 18.4 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.2 以上)



correlation Threshold: 0.2

図 18.6 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」と「اتش (‘ātesh)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2以上)



correlation Threshold: 0.2

図 18.7 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「**خون** (khūn) 」と「**خاک** (khāk) 」と「**درد** (dard) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2 以上)

重みの値が 0.3 の時、「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」は「کیمیا (kīmiyā) 」と共起する。重みの値が 0.2 の時、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は「عیب (‘eib) 」や「سوغند (sougand) 」と、「اشک (ashk) 」と「آتش (ātesh) 」は「دل‌آویز (del-āvīz) 」と、「آتش (ātesh) 」と「درد (dard) 」は「بسوخت (be-sūkht) 」とそれぞれ共起する。「عشق (‘eshq) 」は、この重みにおいて、愛に関する他の単語と共通して、共起する別の単語を持たない。

(2) 『アンヴァリー詩集—ガザル』に関するまとめ

「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」の重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせと比較すると高い。その点は、アッタールのマスナヴィーと類似する。「عشق (‘eshq) 」は「درد (dard) 」と共起する。故に、『アンヴァリー詩集—ガザル』において、「عشق (‘eshq) 」は、痛みと関連するものとしても用いられる可能性が高い。また、「آتش (ātesh) 」と「درد (dard) 」は「بسوخت (be-skht) 」と共起することから、燃えることと痛みと関係する。

2-4. 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

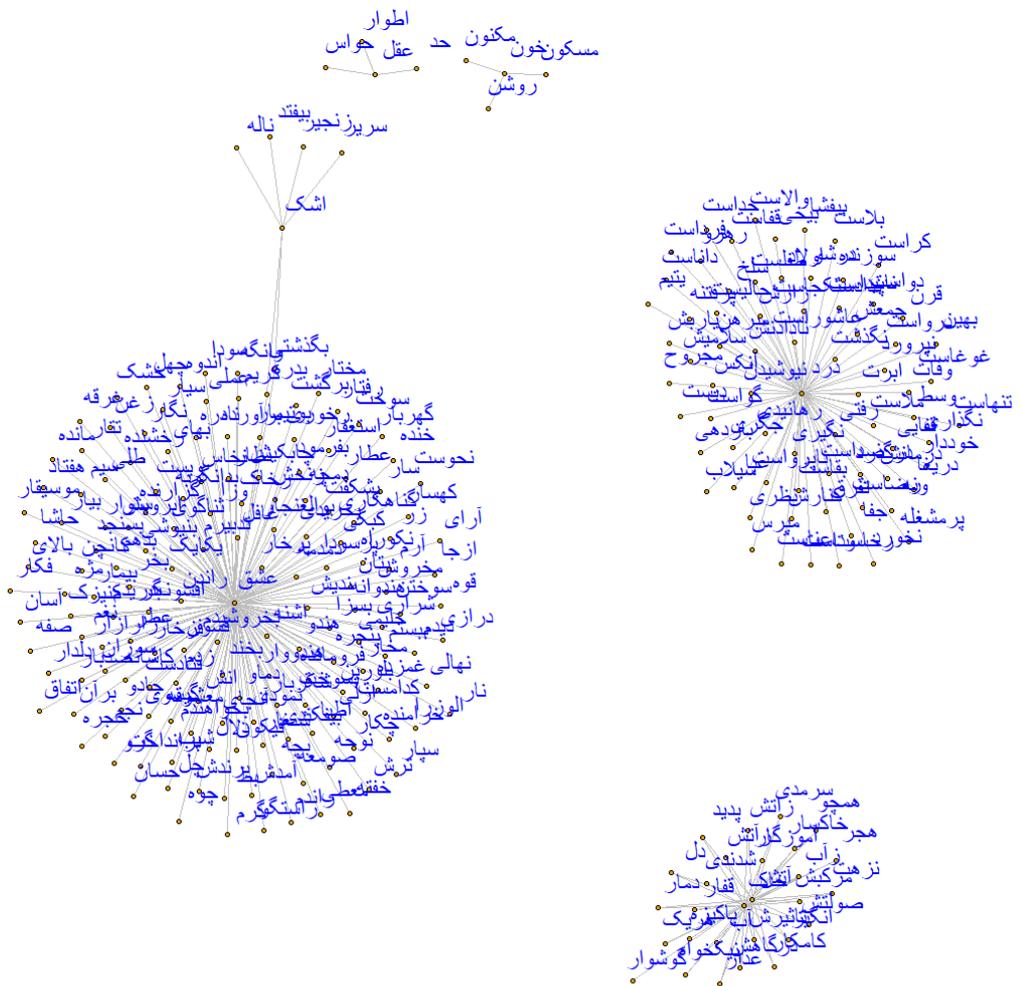
| | خون | خاک | درد | آتش | اشک | عشق | عقل |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|
| خون | | 0.07 | 0.17 | 0.11 | 0.19 | 0.04 | 0.01 |
| خاک | 0.07 | | 0.04 | 0.76 | 0 | 0.04 | 0.11 |
| درد | 0.17 | 0.04 | | 0 | 0.07 | 0.21 | 0.06 |
| آتش | 0.11 | 0.76 | 0 | | 0.04 | 0.05 | 0.02 |
| اشک | 0.19 | 0 | 0.07 | 0.04 | | 0.26 | 0 |
| عشق | 0.04 | 0.04 | 0.21 | 0.05 | 0.26 | | 0.09 |
| عقل | 0.01 | 0.11 | 0.06 | 0.02 | 0 | 0.09 | |

図 19.1 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」において、「اشک (ashk)」の重みの値は他の愛に関する単語と比べると高く、比較的共起する。「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」両方において、互いの重みの値は非常に高い。また、「اشک (ashk)」において、「عشق (‘eshq)」の重みの値は他の愛に関する単語と比べると高く、比較的共起する。

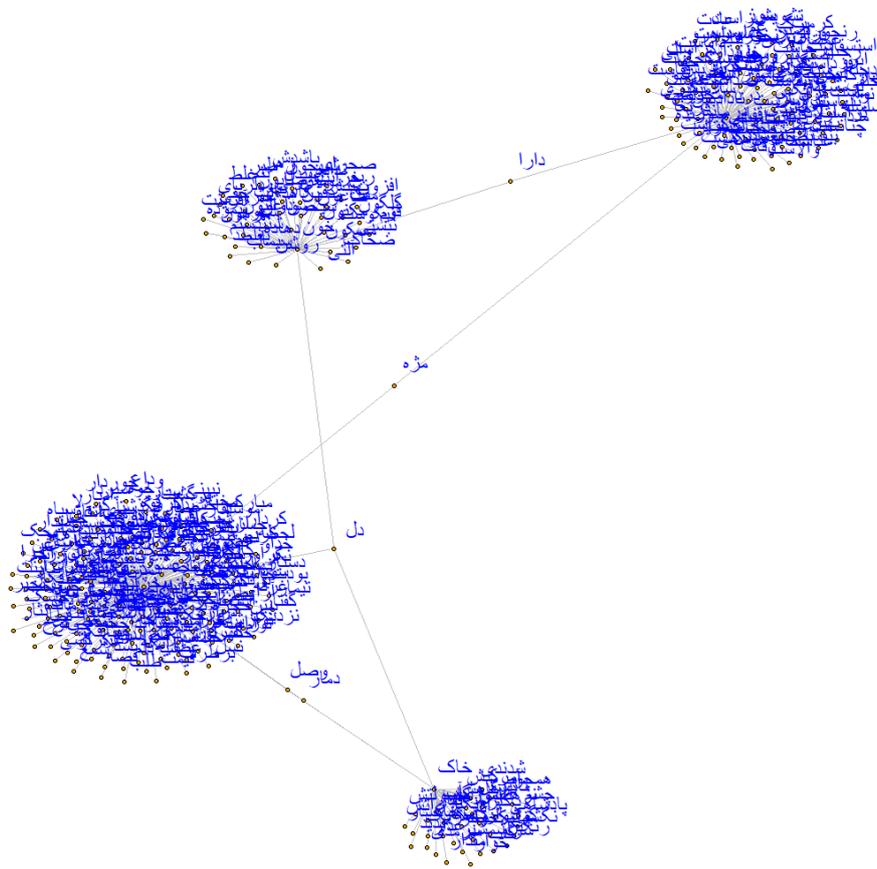
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | روشن | 0.45 |
| خاک | آموزگار | 0.79 |
| درد | دریغا | 0.64 |
| آتش | آموزگار | 0.83 |
| اشک | زنجیر | 0.49 |
| عشق | آرم | 0.8 |
| عقل | حواس | 0.46 |

図 19.2 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』愛に関する各単語と最も共起する単語



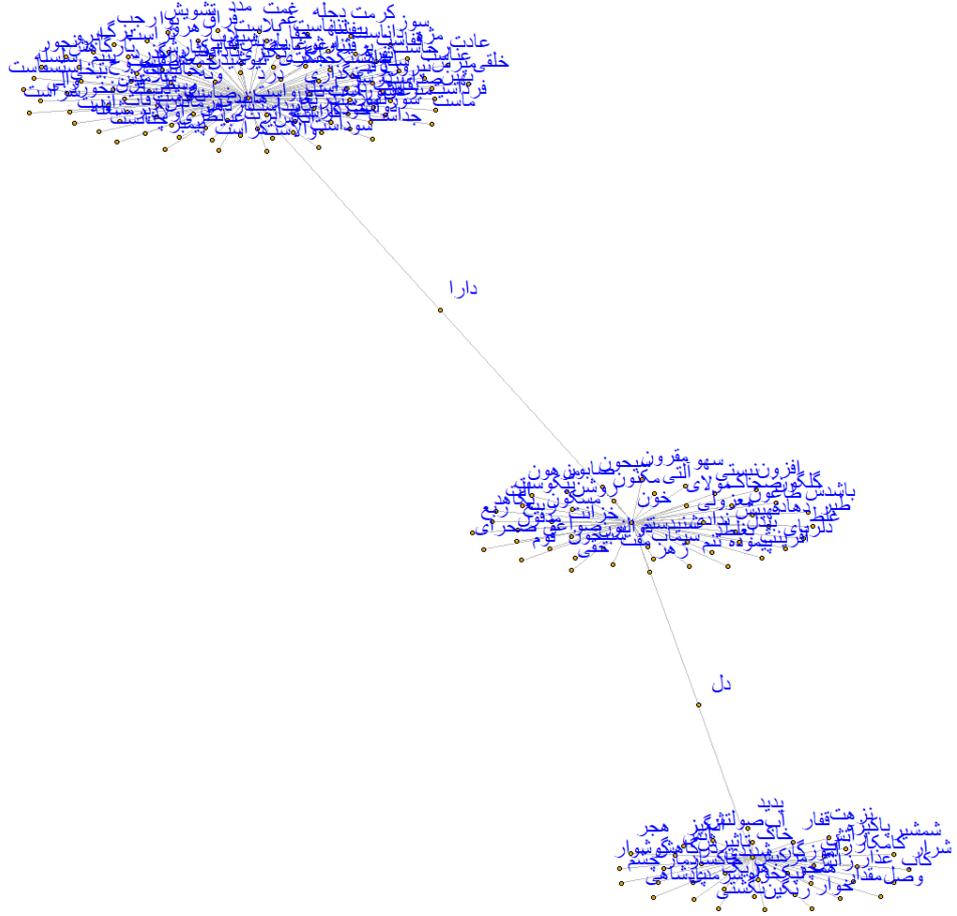
correlation Threshold: 0.4

図 19.3 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4以上)



correlation Threshold: 0.3

図 19.5 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「عقل ('aql)」と「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3以上)



correlation Threshold: 0.3

図 19.6 『アンヴァリー詩集—ガザル』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3以上)

重みの値が 0.4 の時、「عشق (‘eshq)」と「اشک (ashk)」は「کریم (karīm)」等とそれぞれ共起する。図 19.3 から、「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」は、共起する他の単語がほとんど同じである。

重みの値が 0.3 の時、「خون (khūn)」と「درد (dard)」は「دارا (dārā)」と、「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」は「خون (khūn)」とそれぞれ共起する。また、「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」は「دل (del)」と、「خاک (khāk)」と「عشق (‘eshq)」は「وصل (vaṣl)」とそれぞれ共起する。

(2) 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』に関するまとめ

「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」の重みの値が圧倒的に高く、共起する他の単語もほとんど同じである。また、『アンヴァリー詩集—ガザル』と異なり、「خاک (khāk)」と「خون (khūn)」は共起しない。さらに、『アンヴァリー詩集—ガザル』において、「عشق (‘eshq)」において、「درد (dard)」と共起する重みの値が高かったが、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』においては、「اشک (ashk)」と共起する重みの値も高い。

2-5. 『アンヴァリー詩集—マクタア』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

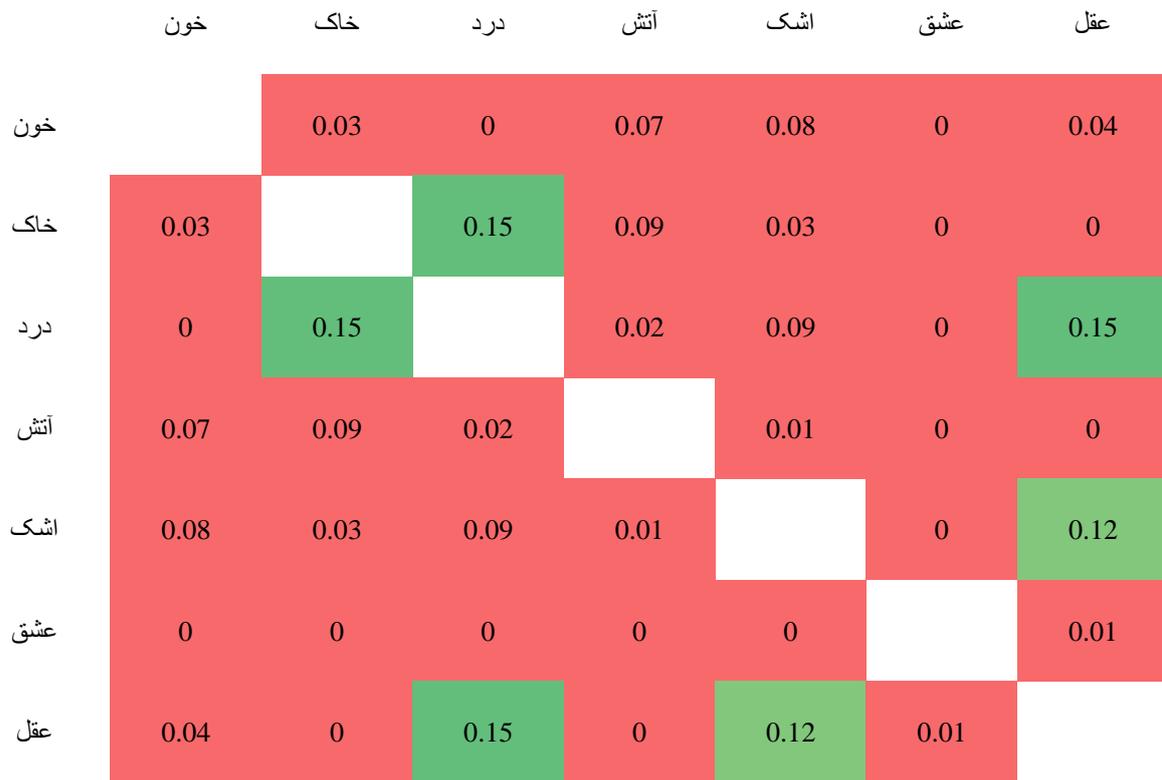
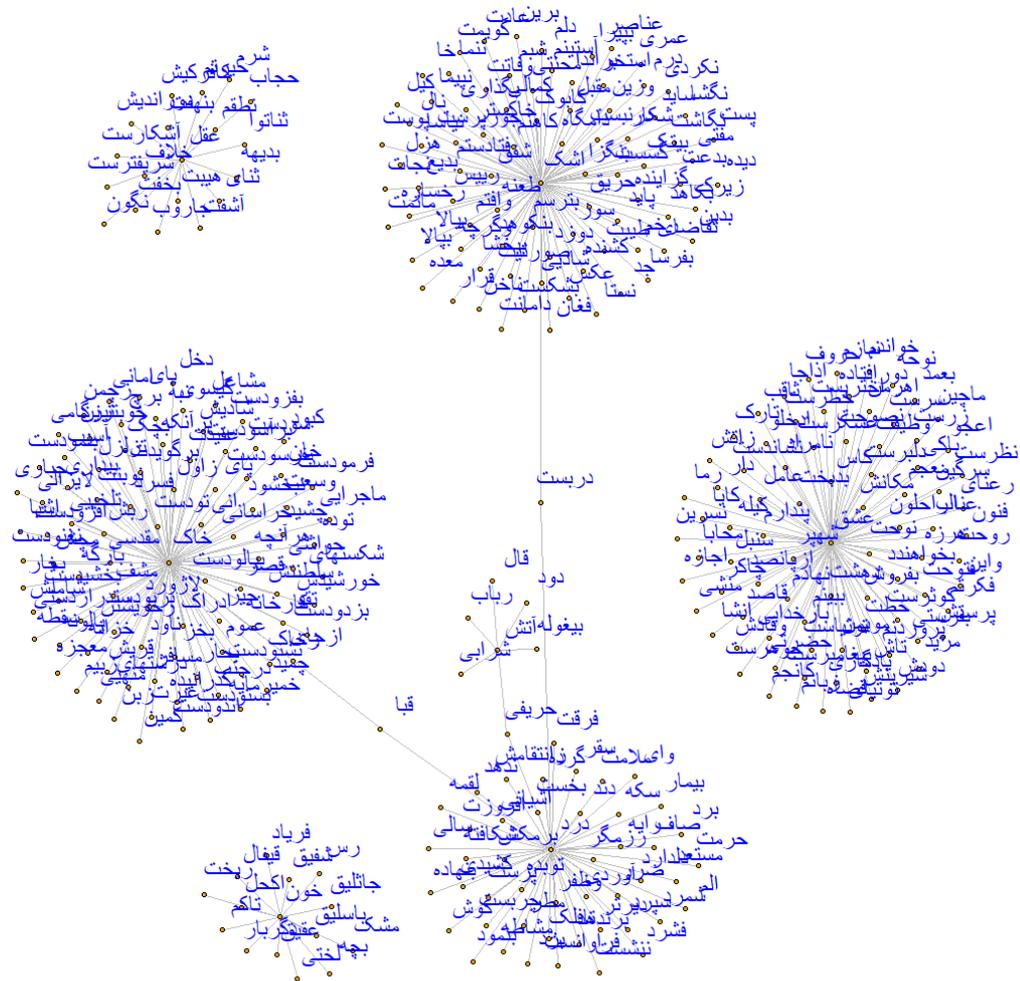


図 20.1 『アンヴァリー詩集—マクタア』愛に関する単語同士の共起関係

「**خون (khūn)**」において、愛に関する単語と共起する重みの値は低い。このテキストにおいて、「**خاک (khāk)**」と「**درد (dard)**」、「**درد (dard)**」と「**عقل ('aql)**」の重みの値が他の愛に関する単語の組み合わせより高い。

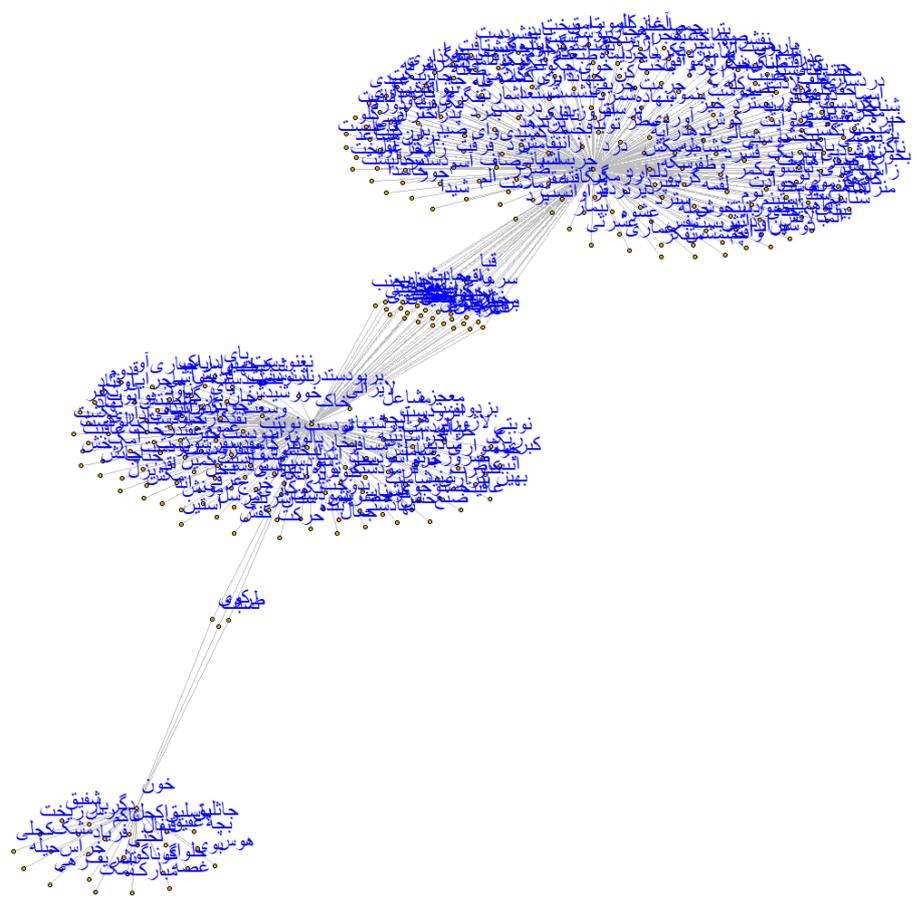
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | تاکم | 0.59 |
| خاک | ادراک | 0.35 |
| درد | قبا | 0.46 |
| آتش | شرابی | 0.43 |
| اشک | شفق | 0.55 |
| عشق | سرست | 0.38 |
| عقل | حواس | 0.46 |

図 20.2 『アンヴァリー詩集—マクタア』愛に関する各単語と最も共起する単語



correlation Threshold: 0.3

図 20.3 『アンヴァリー詩集—マクタア』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3以上)



correlation Threshold: 0.2

図 20.5 『アンヴァリー詩集—マクタア』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」と「آتش (ātesh) 」と「اشک (ashk) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2 以上)

重みの値が 0.3 の時、「درد (dard) 」と「اشک (ashk) 」は「دود (dūd) 」、「در بست (darbast) 」と「آتش (ātesh) 」は「خریف (kharīf) 」と、「درد (dard) 」と「خاک (khāk) 」は「قبا (qabā) 」とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.2 の時、「خون (khūn) 」と「خاک (khāk) 」は「کوی (kūy) 」と、「خاک (khāk) 」と「عشق (‘eshq) 」は「بالودست (bālū-dast) 」等とそれぞれ共起する。

(2) 『アンヴァリー詩集—マクタア』に関するまとめ

他の『アンヴァリー詩集』と異なり、「خون (khūn) 」において、愛に関する単語が共起する頻度は低い。また、「عشق (‘eshq) 」と他の愛に関する単語の共起の値も、他の『アンヴァリー詩集』に比べて低い。

2-6. 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

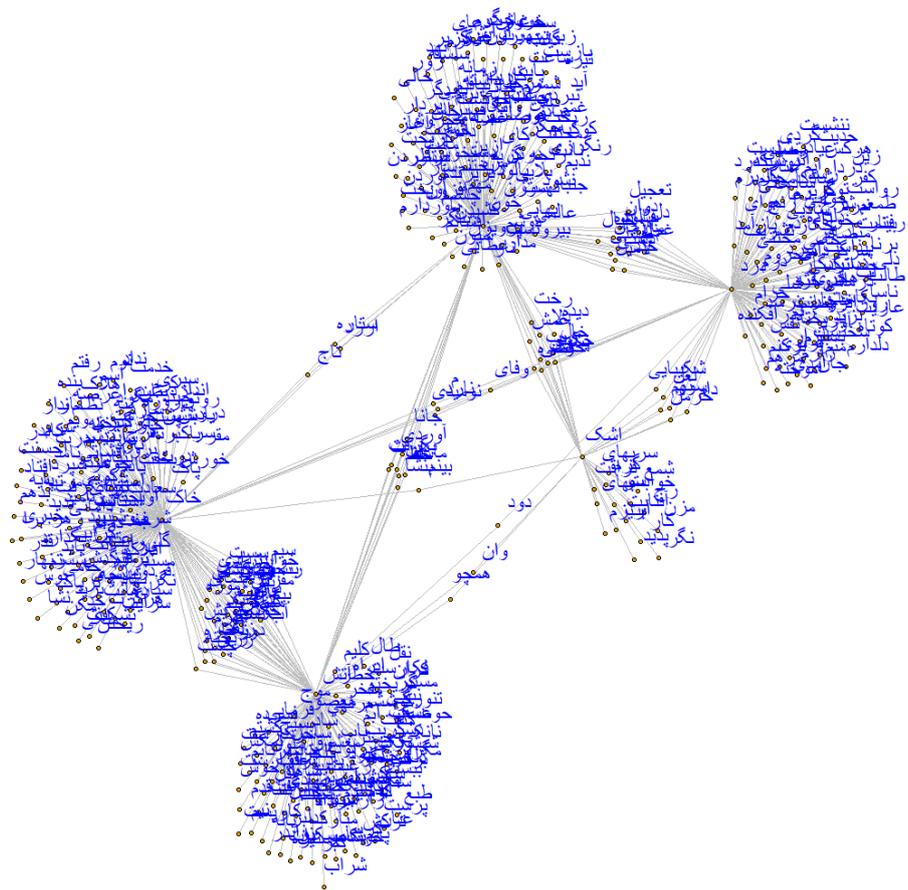


図 21.1 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』愛に関する単語同士の共起関係

「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」のみ、愛に関する単語同士の共起関係において、他の単語と相対的ではあるが、高い重みを持つ。

| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | افشانم | 0.32 |
| خاک | بردادی | 0.4 |
| درد | قبا | 0.46 |
| آتش | آب | 0.46 |
| اشک | سریهای | 0.83 |
| عشق | ایامم | 0.32 |
| عقل | البقره | 0.41 |

図 21.2 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』愛に関する各単語と最も共起する単語



correlation Threshold: 0.1

図 21.5 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.1以上)

重みの値が 0.2 の時、「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」は「آب (āb) 」と「تیز (tīz) 」、「خون (khūn) 」と「عشق (‘eshq) 」は「رنجه (ranje) 」とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.1 の時、「آتش (ātesh) 」と「عشق (‘eshq) 」と「خون (khn) 」は「جانا (jānā) 」と、「آتش (ātesh) 」と「عشق (‘eshq) 」は「شراب (sharāb) 」と、「اشک (ashk) 」と「عشق (‘eshq) 」は「دود (dūd) 」等とそれぞれ共起する。

(2) 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』に関するまとめ

「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」の重みの値のみ、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』同様比較的高い。一方、「خون (khūn) 」と「عشق (shq) 」は痛みを表す「رنجه (ranje) 」と、「آتش (ātesh) 」と「عشق (‘eshq) 」と「خون (khūn) 」は恋人を表す単語「جانا (jānā) 」とそれぞれ共起する。故に、このテキストにおいて、愛に関係する単語と痛みは結びついて
いる可能性が高い。

2-7. 『ハーカーニー詩集—ガザル』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

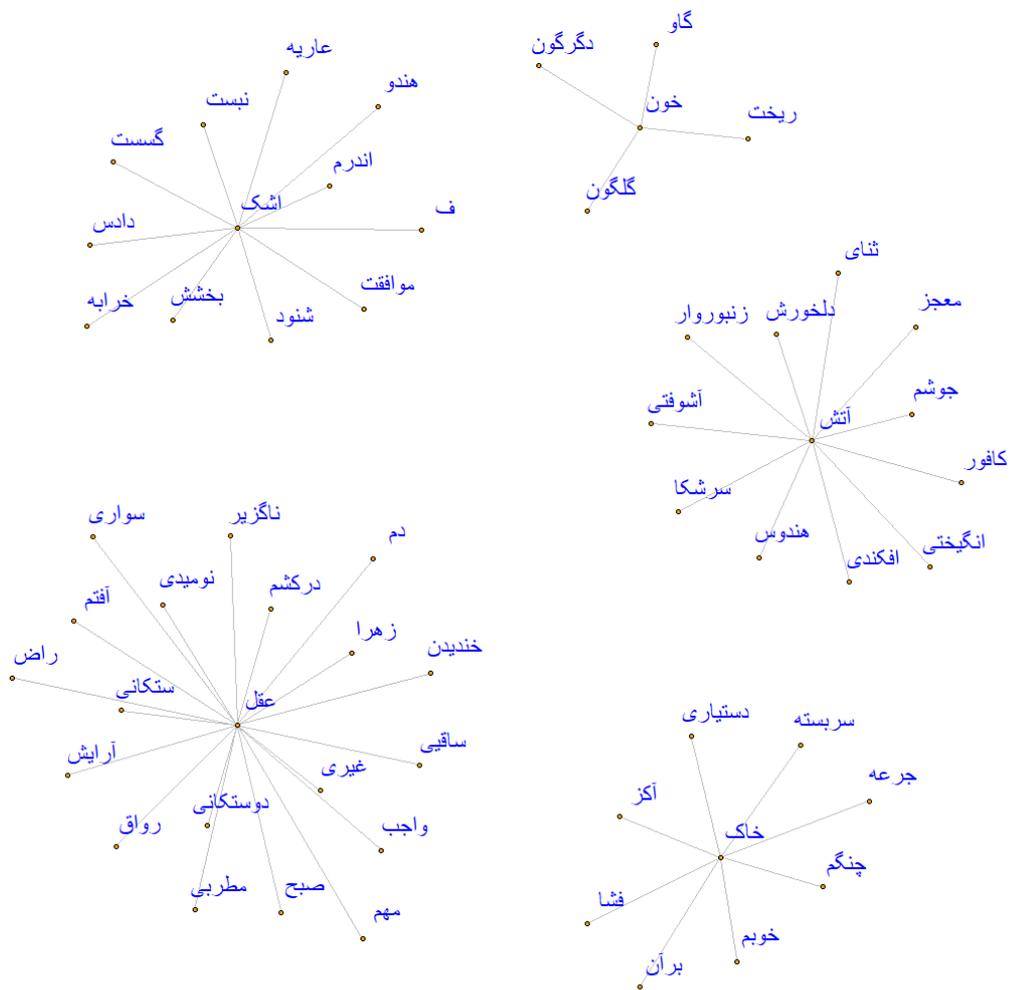


図 22.1 『ハーカーニー詩集—ガザル』愛に関する単語同士の共起関係

「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」において、互いの重みの値は、他の愛に関する単語と比較すると最も高い。これらの単語の組み合わせ以外では、「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」、「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」、「اشک (ashk)」と「عقل (‘aql)」が比較的、重みの値が高い。「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みの値が高いことは、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』と類似する特徴である。

| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | ریخت | 0.36 |
| خاک | آکز | 0.35 |
| درد | اندرم | 0.26 |
| آتش | جوشم | 0.38 |
| اشک | اندرم | 0.45 |
| عشق | ترازوی | 0.25 |
| عقل | آرایش | 0.44 |

図 22.2 『ハーカーニー詩集—ガザル』愛に関する各単語と最も共起する単語



correlation Threshold: 0.3

図 22.3 『ハーカーニー詩集—ガザル』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.3以上）

重みの値が 0.3 の時、「درد (dard)」と「عشق (‘eshq)」以外の愛に関する単語が登場する。重みの値が 0.2 の時「درد (dard)」と「عشق (‘eshq)」は「پاش (pāsh)」と、「درد (dard)」と「اشک (ashk)」は「عاریه (‘ārīye)」と、「اشک (ashk)」と「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」は「فشان (feshān)」、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は「هندو (hendū)」とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—ガザル』に関するまとめ

「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みの値が他の単語より高い点は『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』と類似する特徴である。また、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は、奴隷を表し愛する者の代名詞である「هندو (hendū)」と共起し、「اشک (ashk)」と「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」は捧げることである「فشان (feshān)」と共起することから、これらの単語が愛と関係する。

2-8. 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

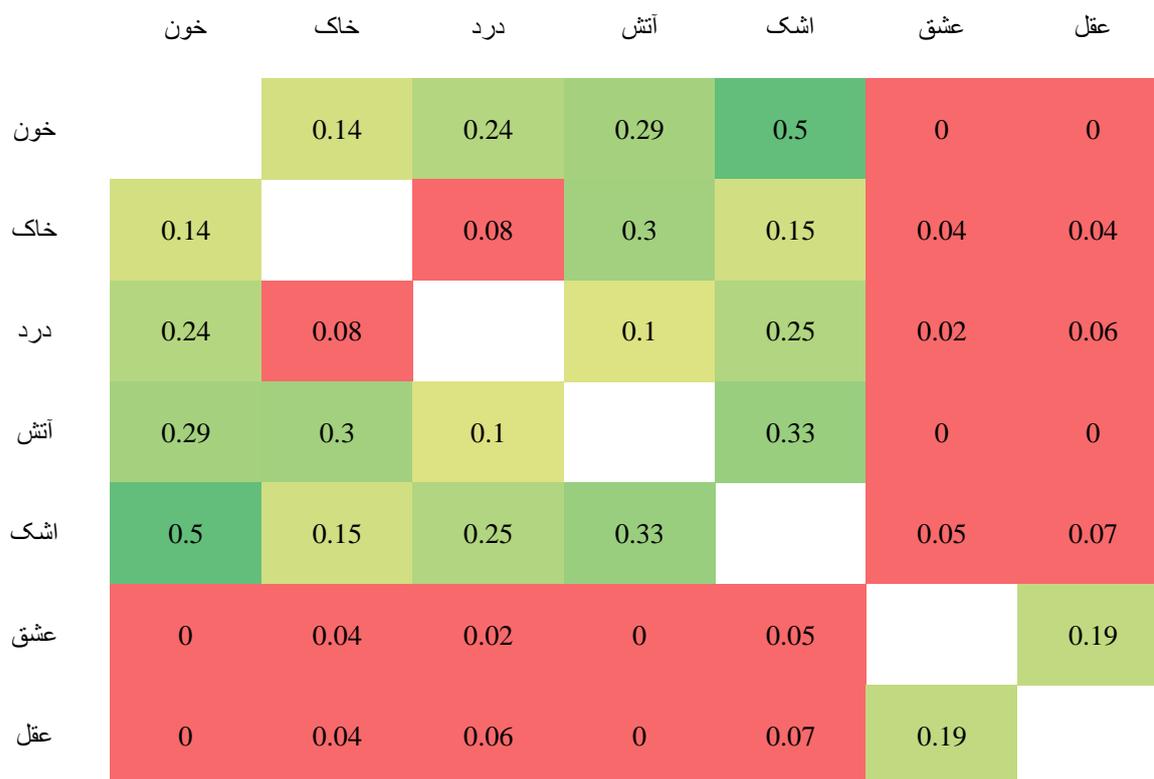
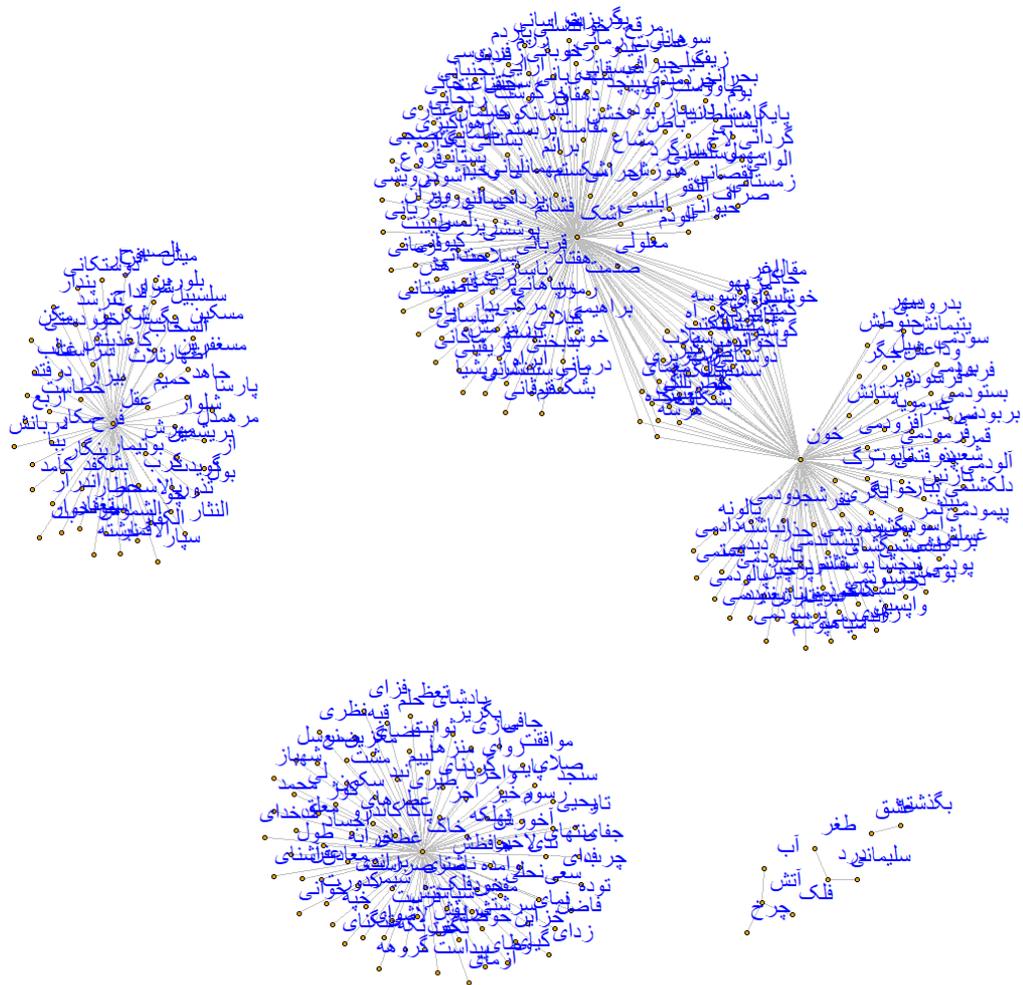


図 23.1 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」における互いの重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせと比較して、最も高い。「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」、「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」、「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」における重みの値も比較的高い。また、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は、互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との重みの値は低い。

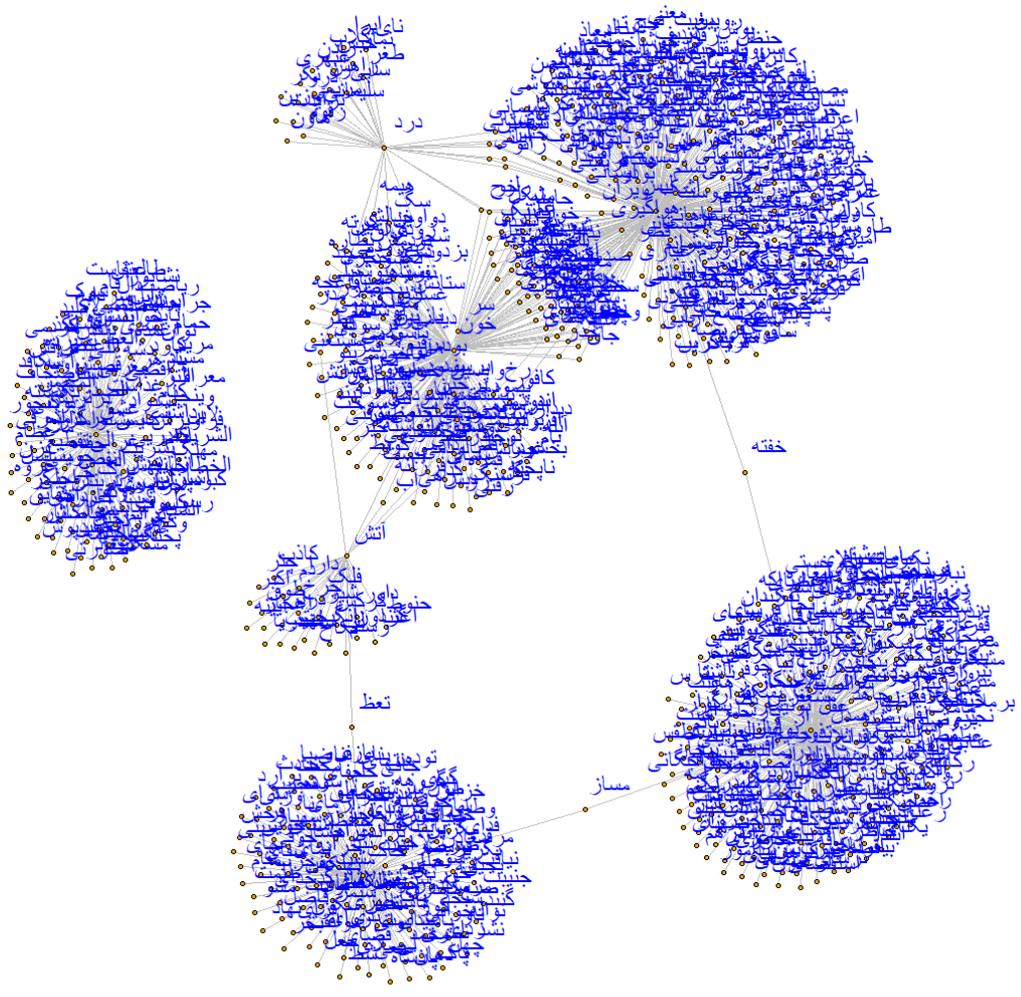
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | خوناب | 0.53 |
| خاک | آخورش | 0.85 |
| درد | سلیمانی | 0.43 |
| آتش | آب | 0.42 |
| اشک | احرامی | 0.56 |
| عشق | بگذشته | 0.46 |
| عقل | ار | 0.55 |

図 23.2 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』愛に関する各単語と最も共起する単語



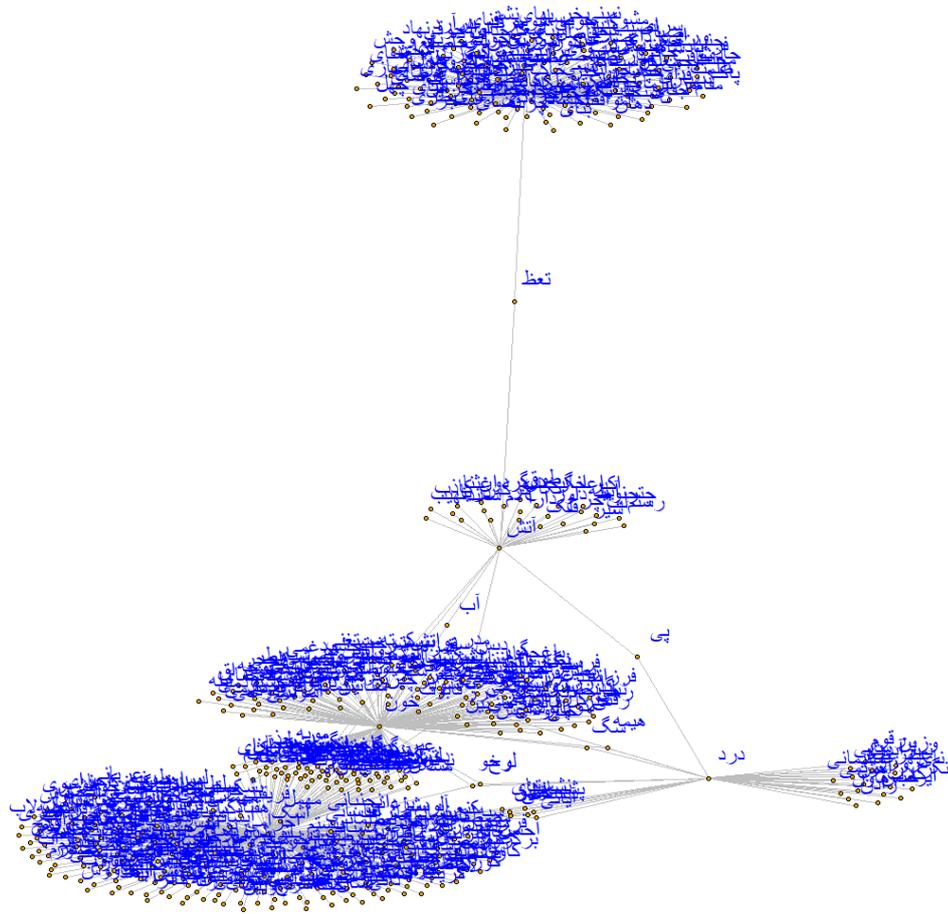
correlation Threshold: 0.4

図 23.3 『ハーカーニー詩集—カスイーデ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4以上)



correlation Threshold: 0.3

図 23.5 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3以上)



correlation Threshold: 0.3

図 23.6 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3 以上)

重みの値が 0.4 の時、「خون (khūn) 」と「اشک (ashk) 」は「آه (āh) 」や「سیلاب (seilāb) 」等とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.3 の時、「درد (dard) 」と「آتش (ātesh) 」は「بی (bī) 」と、「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」は「تعظ (ta'zīm) 」と、「آتش (ātesh) 」と「خون (khūn) 」は「آب (āb) 」とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』に関するまとめ

「خون (khūn) 」と「اشک (ashk) 」の重みの値が高い。これらの単語は、嘆息を表す「آه (āh) 」など、愛するものの状態を表す単語と共起する。一方、「عشق ('eshq) 」と「عقل ('aql) 」はお互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との共起の重みの値は低い。また、「عشق ('eshq) 」は、重みの値が 0.3 以上の箇所において、他の愛に関する単語と共起する単語を持たない。

2-9. 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

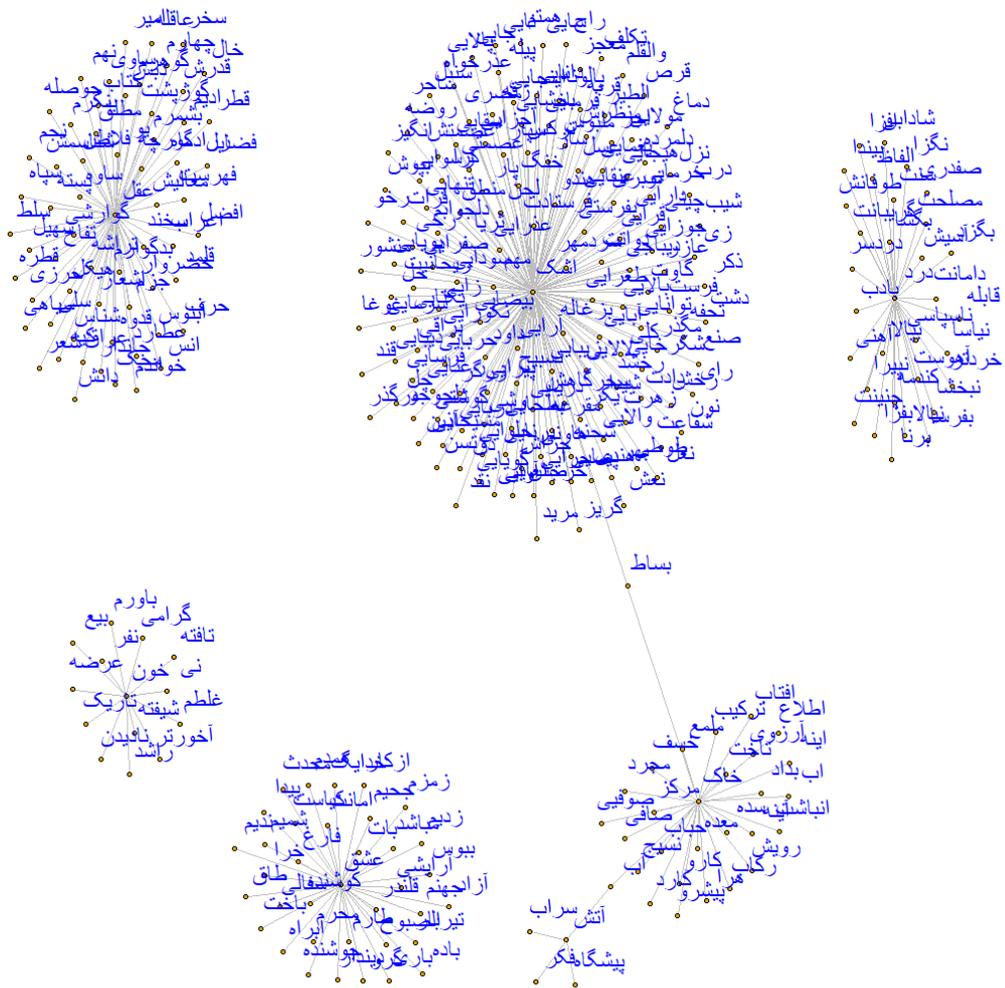
| | خون | خاک | درد | آتش | اشک | عشق | عقل |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|
| خون | | 0.27 | 0.35 | 0.13 | 0.26 | 0.11 | 0.05 |
| خاک | 0.27 | | 0.02 | 0.11 | 0.07 | 0.21 | 0.17 |
| درد | 0.35 | 0.02 | | 0.14 | 0.09 | 0.17 | 0 |
| آتش | 0.13 | 0.11 | 0.14 | | 0.09 | 0.08 | 0 |
| اشک | 0.26 | 0.07 | 0.09 | 0.09 | | 0.23 | 0.14 |
| عشق | 0.11 | 0.21 | 0.17 | 0.08 | 0.23 | | 0.28 |
| عقل | 0.05 | 0.17 | 0 | 0 | 0.14 | 0.28 | |

図 24.1 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「درد (dard)」における互いの重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせと比較して、最も高い。「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」における重みの値も比較的高い。

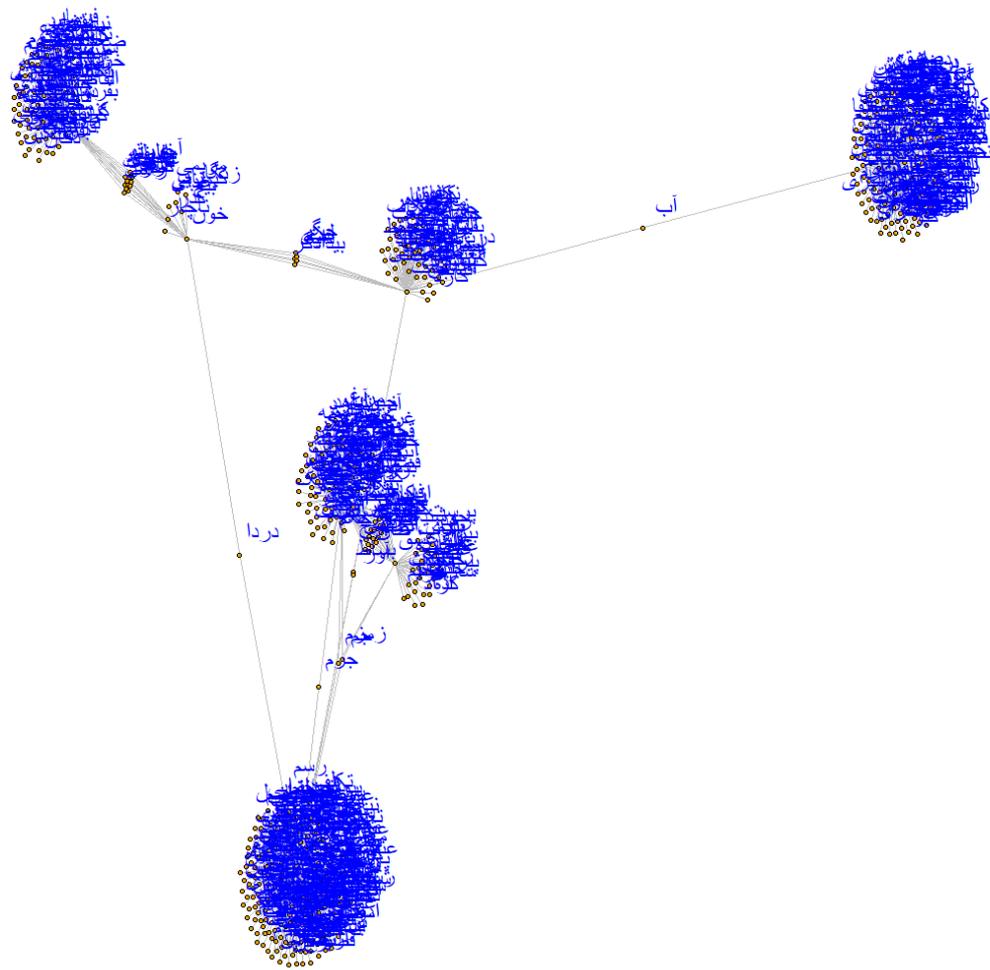
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | شيفته | 0.49 |
| خاک | آينه | 0.54 |
| درد | آسپش | 0.43 |
| آتش | پيشگاه | 0.44 |
| اشک | مهم | 0.72 |
| عشق | آرايشی | 0.52 |
| عقل | اعراب | 0.69 |

図 24.2 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』愛に関する各単語と最も共起する単語



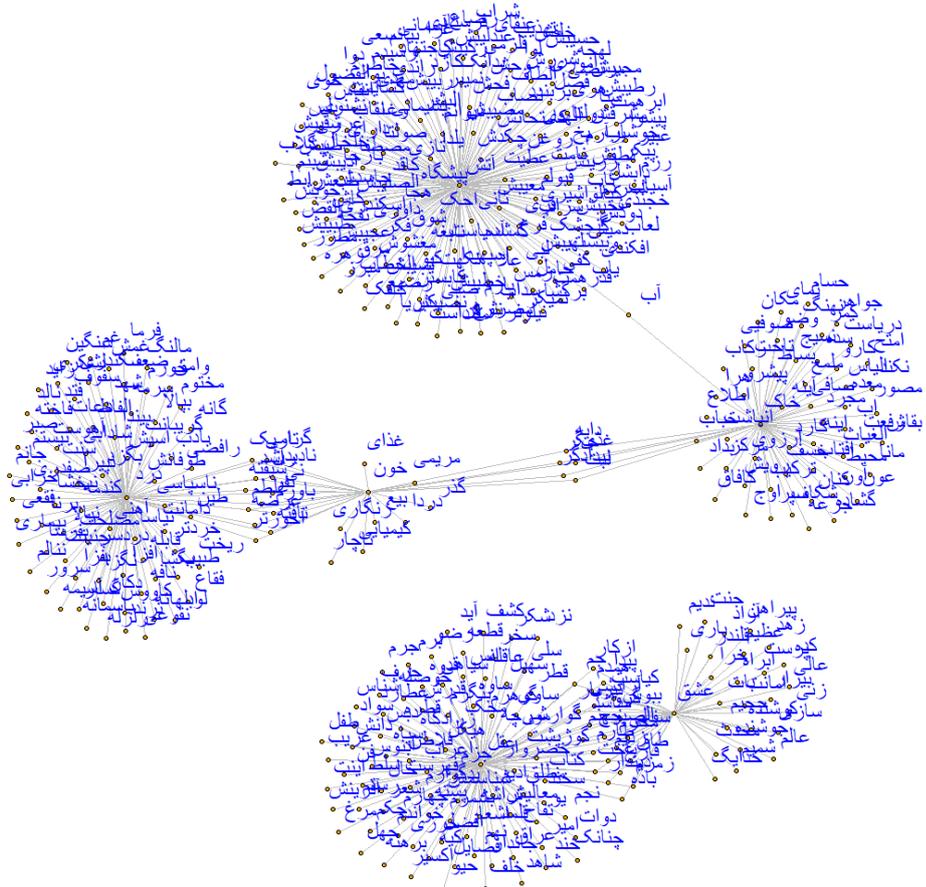
correlation Threshold: 0.4

図 24.3 『ハーカーニー詩集—ケトウエ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.4以上)



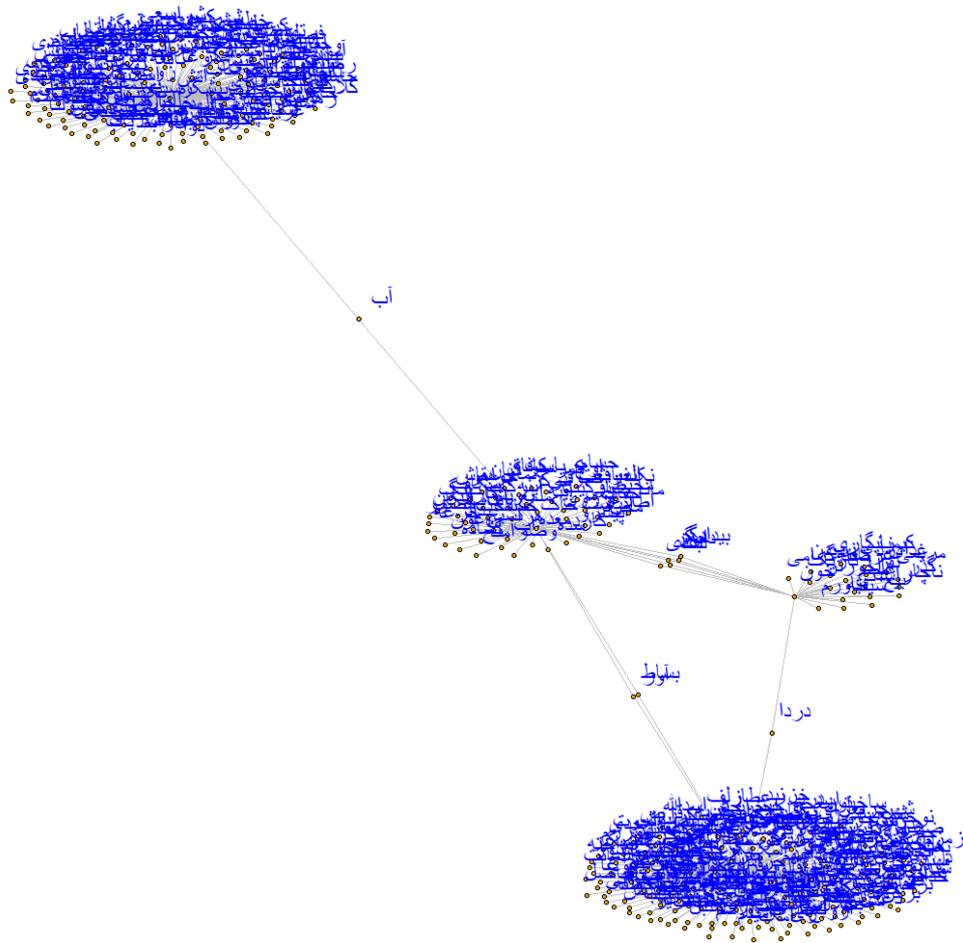
correlation Threshold: 0.3

図 24.4 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3 以上)



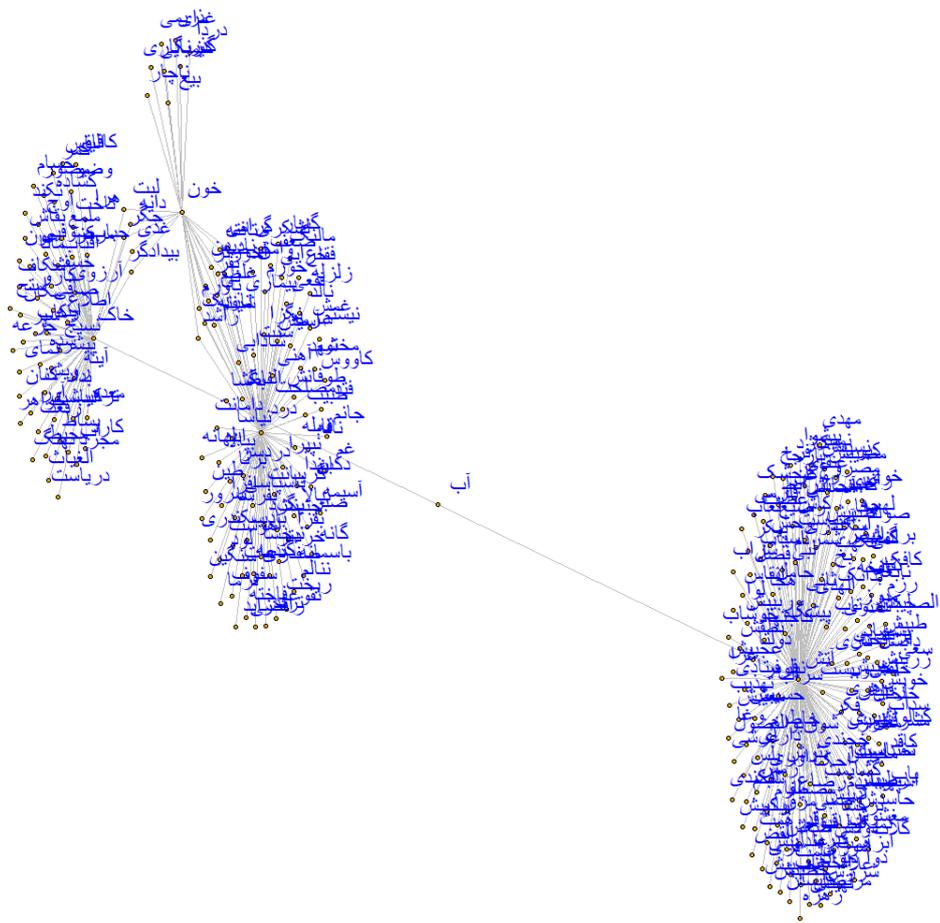
correlation Threshold: 0.3

図 24.5 『ハーカーニー詩集—ケトウエ』 愛に関する単語の内、「ashk (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3以上)



correlation Threshold: 0.3

図 24.6 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と「درد (dard)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3 以上)



correlation Threshold: 0.3

図 24.7 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』 愛に関する単語の内、「 عشق ('eshq) 」と「 عقل ('aql) 」と「 اشک (ashk) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.3 以上)

重みの値が 0.4 の時、「خاک (khāk) 」と「اشک (ashk) 」は「بساط (be-solt) 」と、「خاک (khāk) 」と「آتش (ātesh) 」は「آب (āb) 」とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.3 の時、「درد (dard) 」と「خون (khūn) 」は「باور (bāvar) 」等と、「خون (dard) 」と「خاک (khāk) 」は「دایه (dāye) 」や「لبت (labat) 」と、「خون (khūn) 」と「اشک (ashk) 」は「دردا (dardā) 」とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』に関するまとめ

「خون (khūn) 」と「درد (dard) 」における互いの重みの値は高い。故に、血と痛みが密接に関連する。また、「خاک (kāhk) 」と「آتش (ātesh) 」が「آب (āb) 」とそれぞれ共起することから、水とも関係する。「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」が比較的重みの値が高い点は、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』と類似する。

2-10. 『ハーカーニー詩集—タルキープ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク



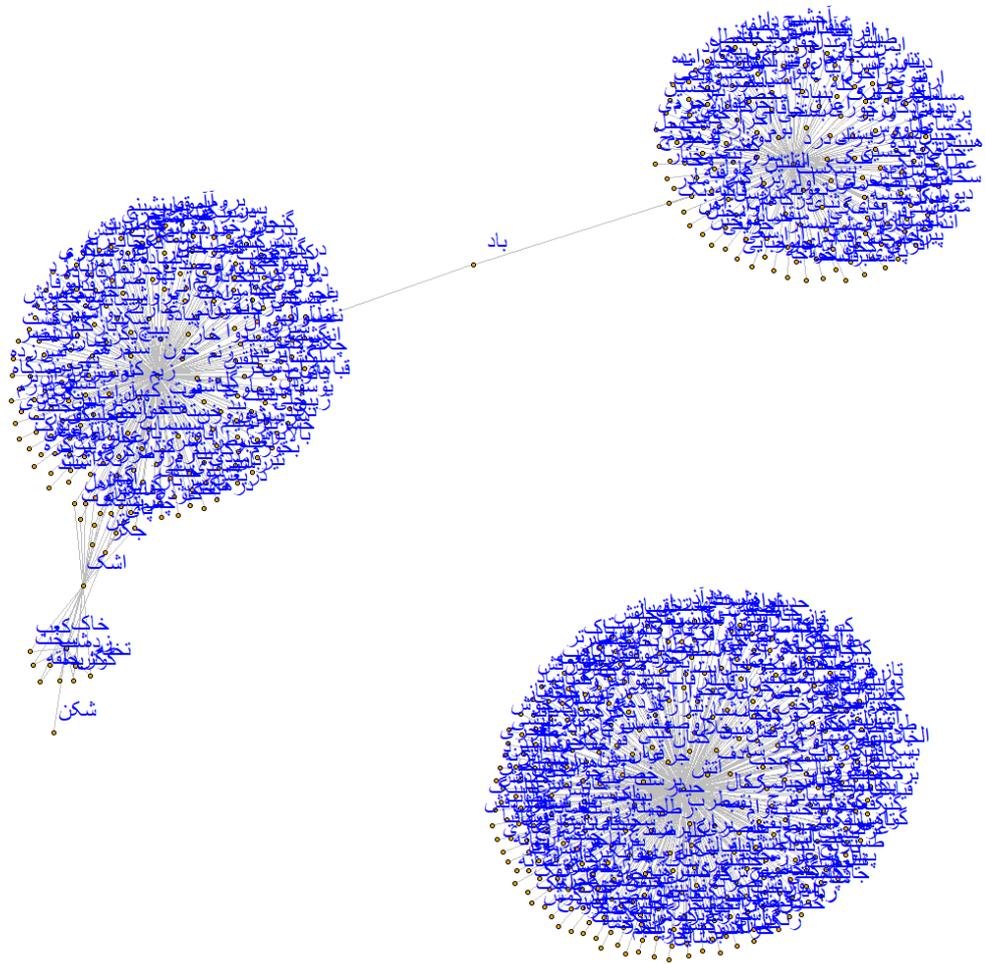
図 25.1 『ハーカーニー詩集—タルキープ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」における互いの重みの値は、このテキストの全単語同士の組み合わせと比較して、最も高い。「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」、「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」における重みの値も高い。

「عشق (eshq)」において、「آتش (ātesh)」は高い重みを持つ。さらに、「عشق (eshq)」と「عقل (aql)」は、互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との重みの値は低い。

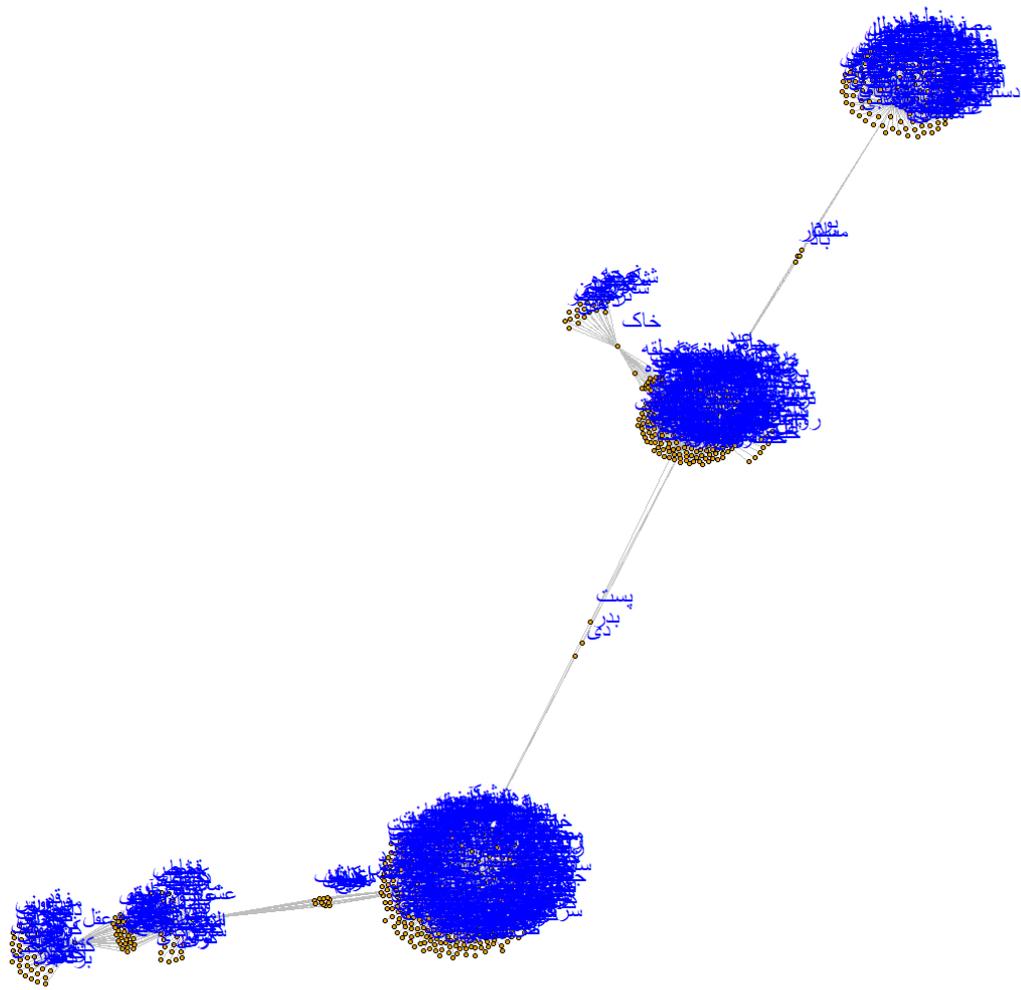
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | اشک | 0.93 |
| خاک | شب | 0.87 |
| درد | بشکست | 0.94 |
| آتش | نیز | 0.9 |
| اشک | خون | 0.93 |
| عشق | خطبه | 0.93 |
| عقل | دید | 0.83 |

図 25.2 『ハーカーニー詩集—タルキープ』愛に関する各単語と最も共起する単語



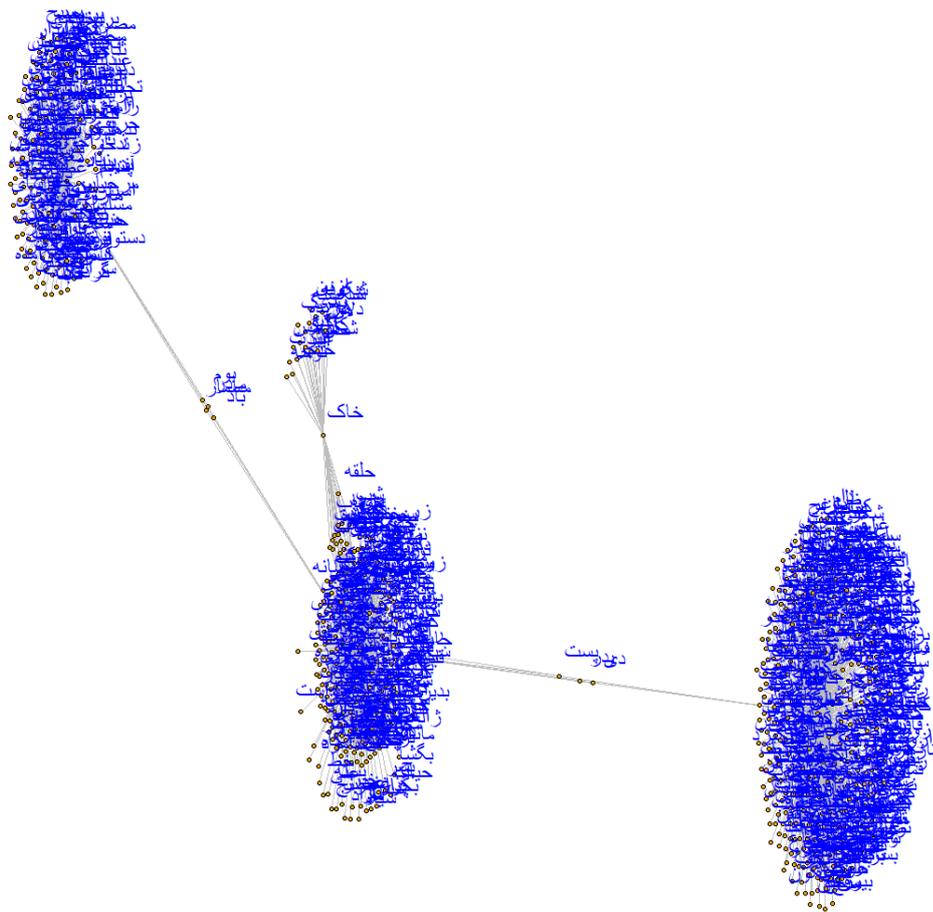
correlation Threshold: 0.7

図 25.4 『ハーカーニー詩集—タルキープ』愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.7以上)



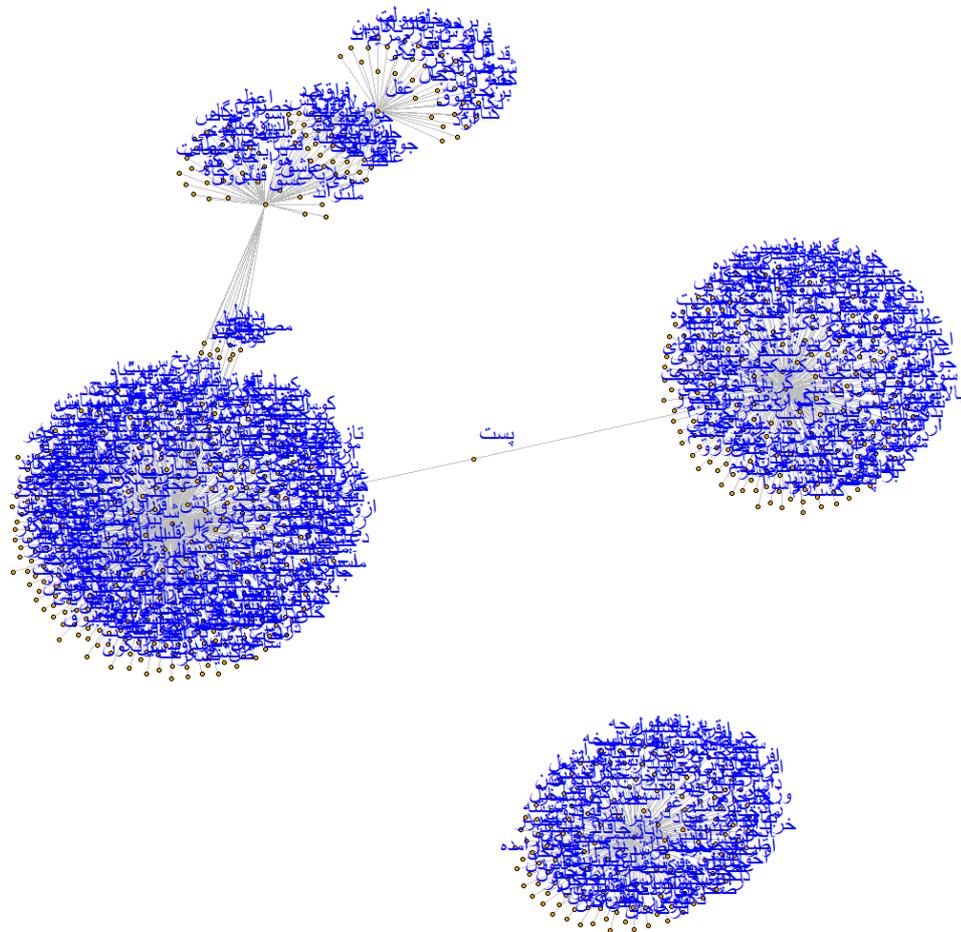
correlation Threshold: 0.6

図 25.5 『ハーカーニー詩集—タルキーブ』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.6以上）



correlation Threshold: 0.6

図 25.6 『ハーカーニー詩集—タルキーブ』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.6以上)



correlation Threshold: 0.6

図 25.7 『ハーカーニー詩集—タルキープ』 愛に関する単語の内、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.6以上)

重みの値が 0.7 の時、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は「وصل (vaşl)」や「کفر (kofr)」とそれぞれ共起する。「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」は近い位置にあり、それぞれ共起する単語も類似する。また、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」は「جگر (jegar)」とそれぞれ共起する。「درد (dard)」と「خون (khūn)」は「باد (bād)」とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.6 の時、「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」は「پست (past)」と、「آتش (ātesh)」と「عشق (‘eshq)」は「پیل (pīl)」とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—タルキーブ』に関するまとめ

「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」の重みの値が最も高く、他の単語より多く共起する。また、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』同様、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は、互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との重みの値は低い。

共起ネットワークの図から、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」が悲しみや肝臓を表す「جگر (jegar)」と結びつくことも明らかである。これらの単語が苦痛と関係する単語として用いられる。

2-11. 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

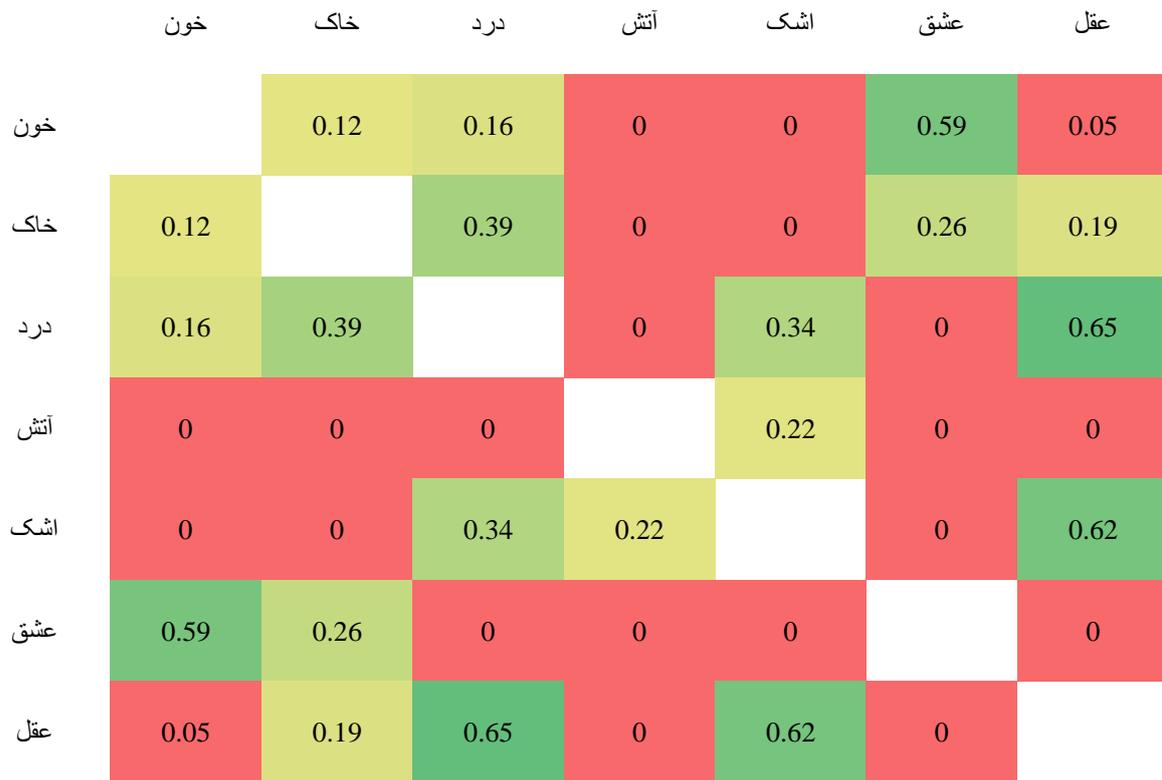
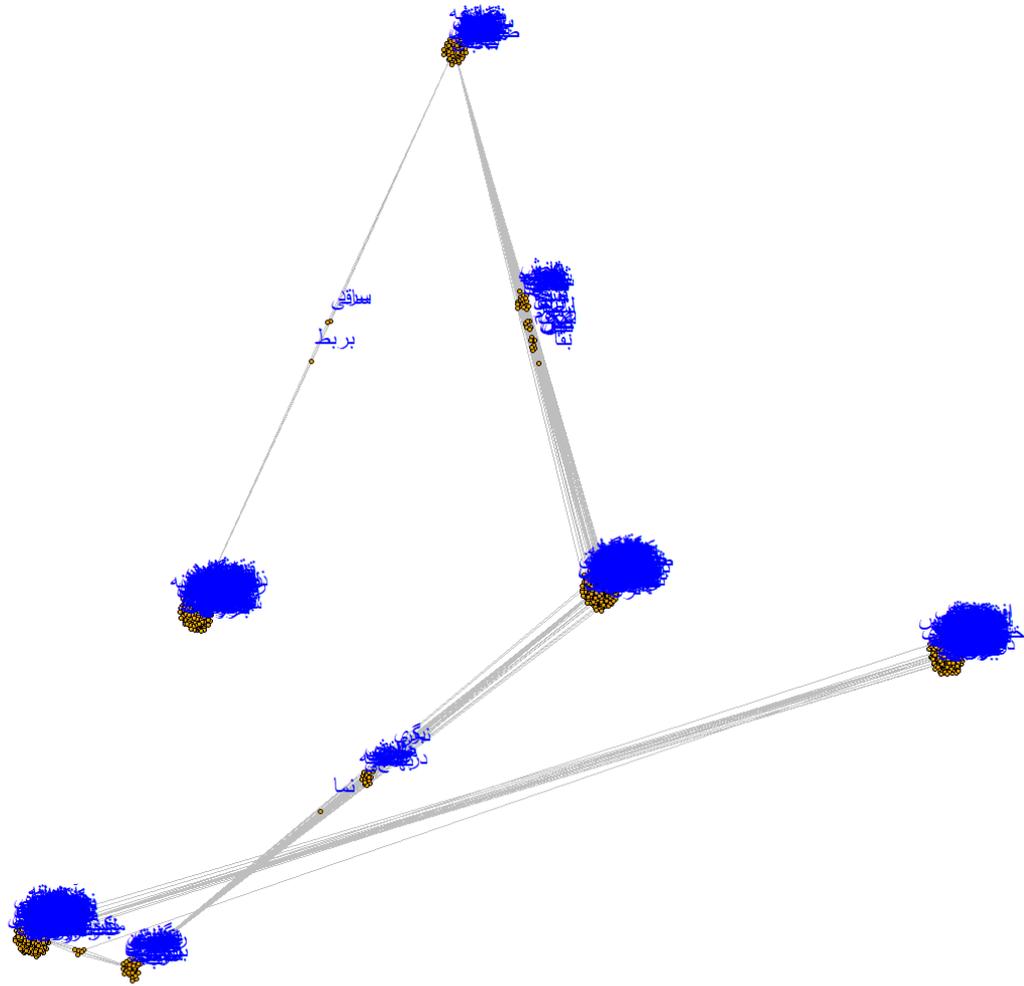


図 26.1 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」、「عقل (‘aql)」と「درد (dard)」、「عقل (‘aql)」と「اشک (ashk)」において、お互いの重みの値は高い。「عقل (‘aql)」と「اشک (ashk)」の、お互いの重みの値が高いことは他のテキストには見られない傾向である。

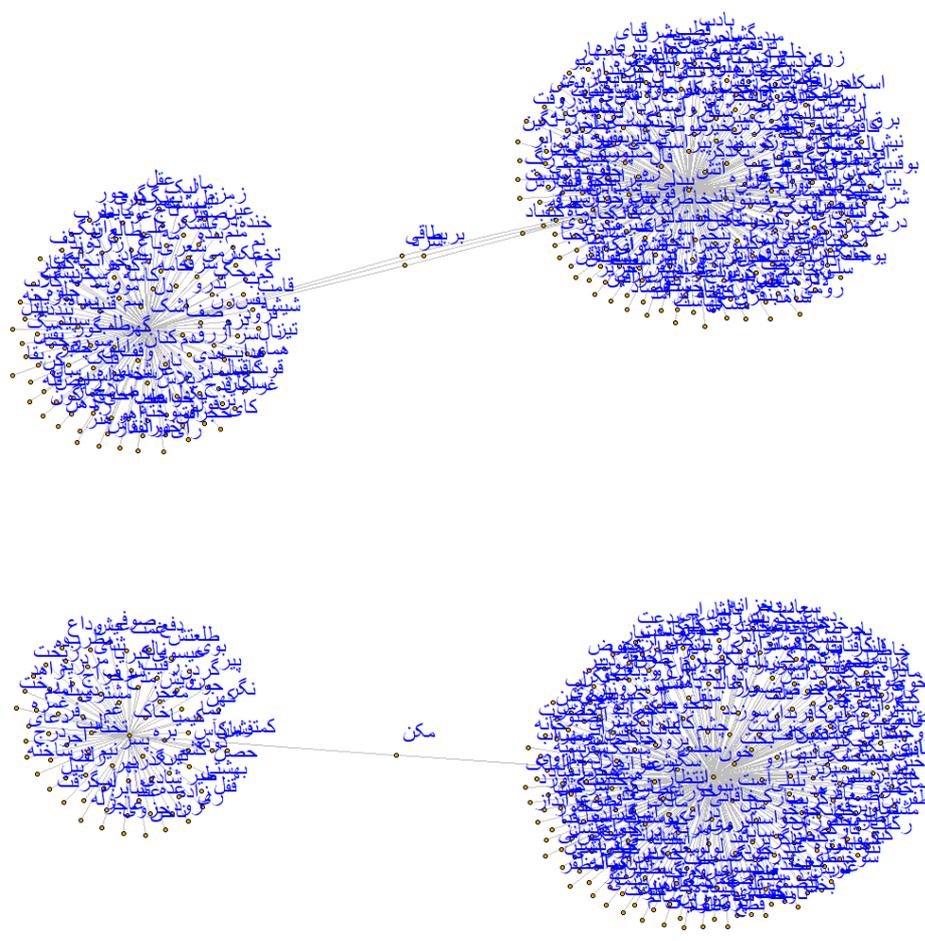
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | چشم | 0.95 |
| خاک | معجز | 0.94 |
| درد | سال | 0.87 |
| آتش | شفق | 0.95 |
| اشک | ازرق | 0.94 |
| عشق | عروس | 0.98 |
| عقل | جوی | 0.94 |

図 26.2 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』愛に関する各単語と最も共起する単語



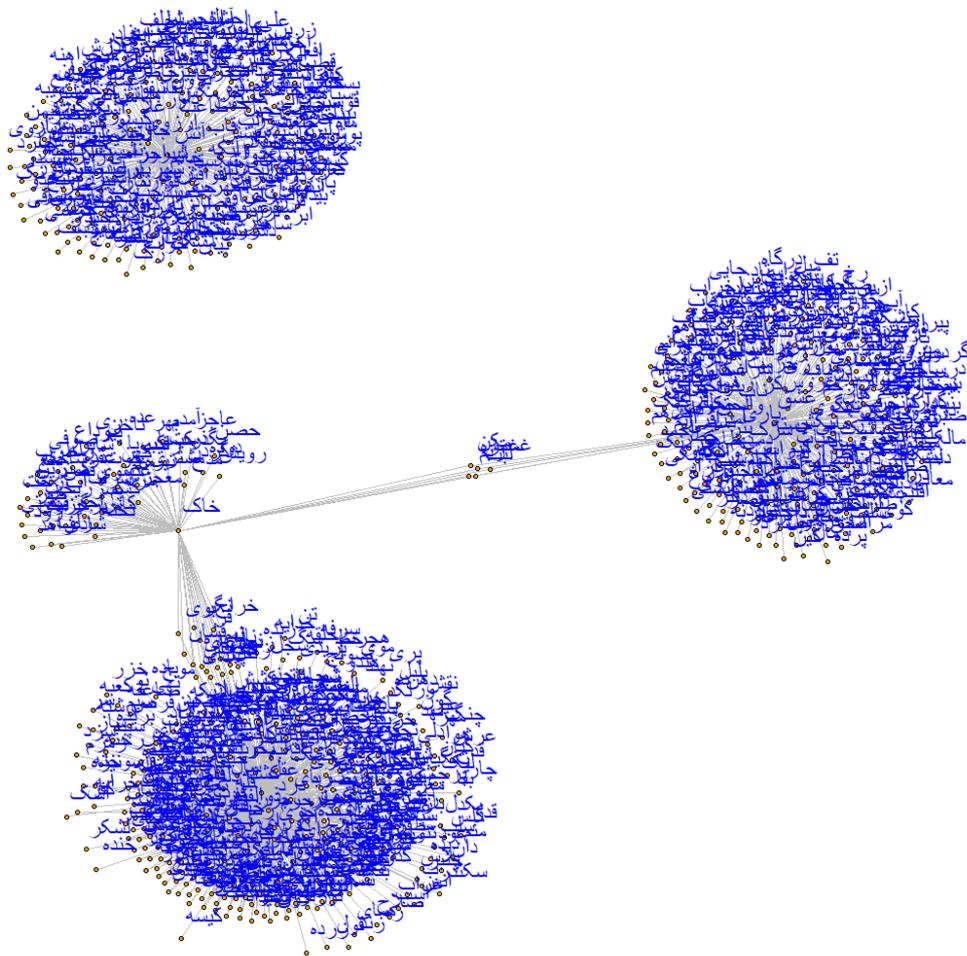
correlation Threshold: 0.6

図 26.4 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク（重み=0.6以上）



correlation Threshold: 0.6

図 26.5 『ハーカーニー詩集—タルジュー』 愛に関する単語の内、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と「درد ('dard)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.6以上)



correlation Threshold: 0.6

図 26.6 『ハーカーニー詩集—タルジウ』 愛に関する単語の内、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.6以上)

重みの値が 0.7 の時、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」は「سگ (sag)」等と、「عقل (‘aql)」と「خاک (khāk)」と「درد (dard)」は「نالہ (nāle)」と、「خاک (khāk)」と「عشق (‘eshq)」は「لبت (labat)」等と、「عشق (‘eshq)」と「خون (khūn)」は「میل (meil)」等とそれぞれ共起する。

重みの値が 0.6 の時、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は「ساقی (sāqī)」とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』に関するまとめ

「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」、 「درد (dard)」と「عقل (‘aql)」、「اشک (ashk)」と「عقل (‘aql)」において、お互いの重みの値は高い。特に、「اشک (ashk)」と「عقل (‘aql)」の重みの値が高いことは他のテキストには見られない傾向である。また、悲嘆の叫び声を表す「نالہ (nāle)」と「عقل (‘aql)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」が共起する。故に、これらの単語は苦痛に関係する可能性が高い。また、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は酌人である「ساقی (sāqī)」とかかわることで、これらの単語が愛における酔いの状態を表している可能性も高い。

2-12. 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』に対する共起ネットワーク分析

(1) 共起ネットワーク

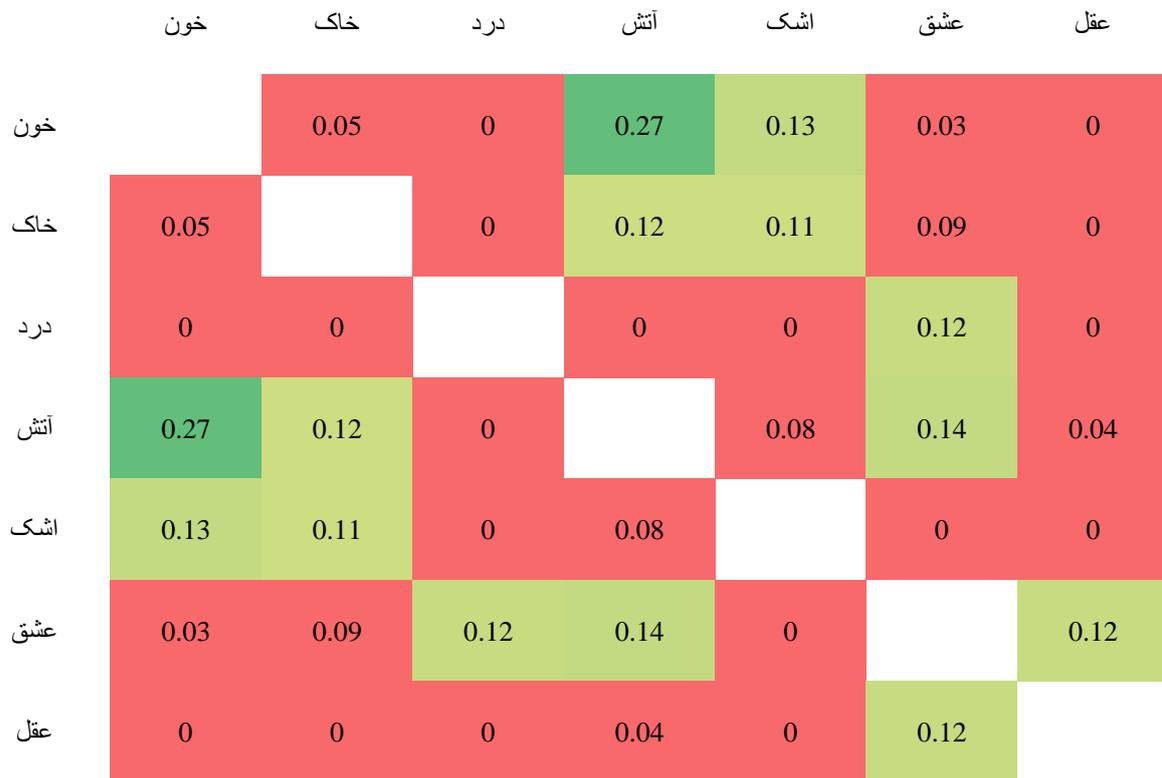
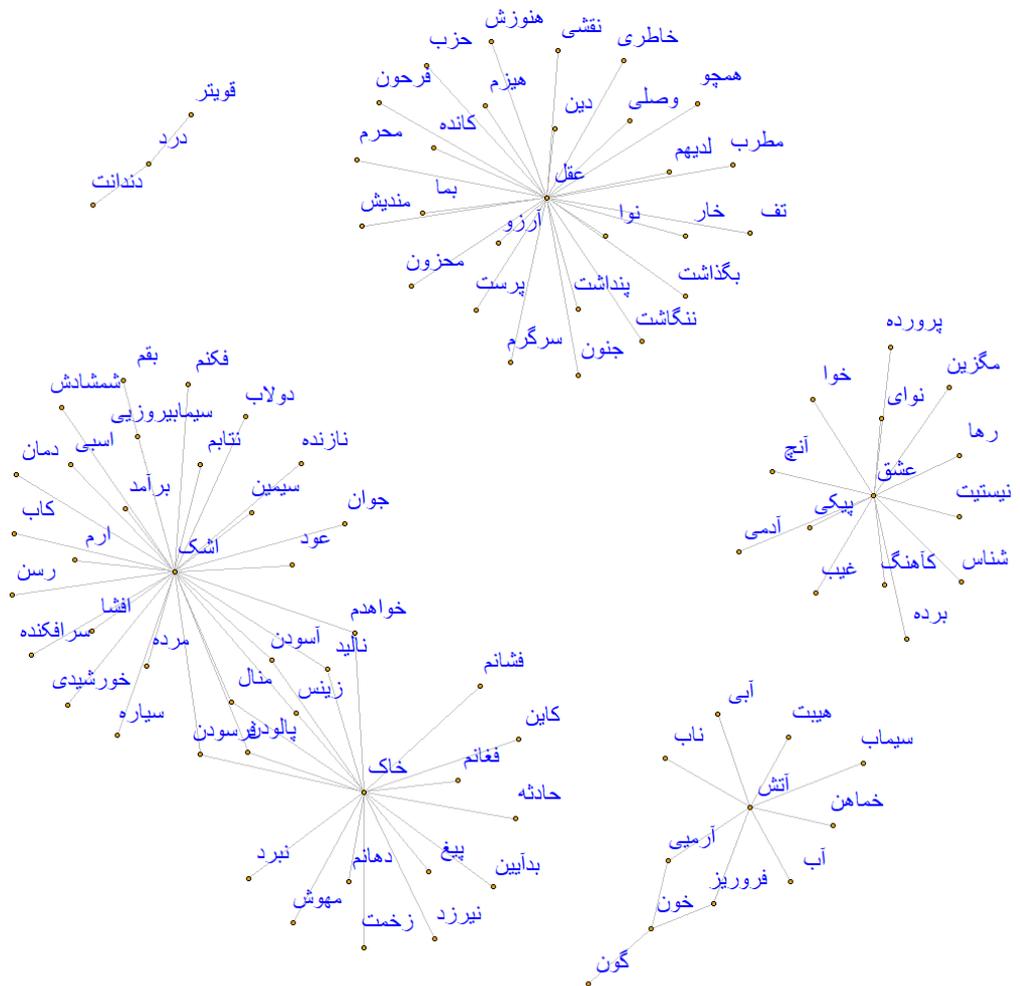


図 27.1 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』愛に関する単語同士の共起関係

「خون (khūn)」と「آتش (ātesh)」における互いの重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせと比較して、最も高い。「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」、「آتش (ātesh)」と「عشق (eshq)」、「عشق (eshq)」と「درد (dard)」、「خاک (khāk)」と「آتش (ātesh)」、「خاک (khāk)」と「اشک (ashk)」、「عشق (eshq)」と「عقل (aql)」はある程度の重みを持つ。そのうち、「عقل (aql)」は互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との重みの値は低い。

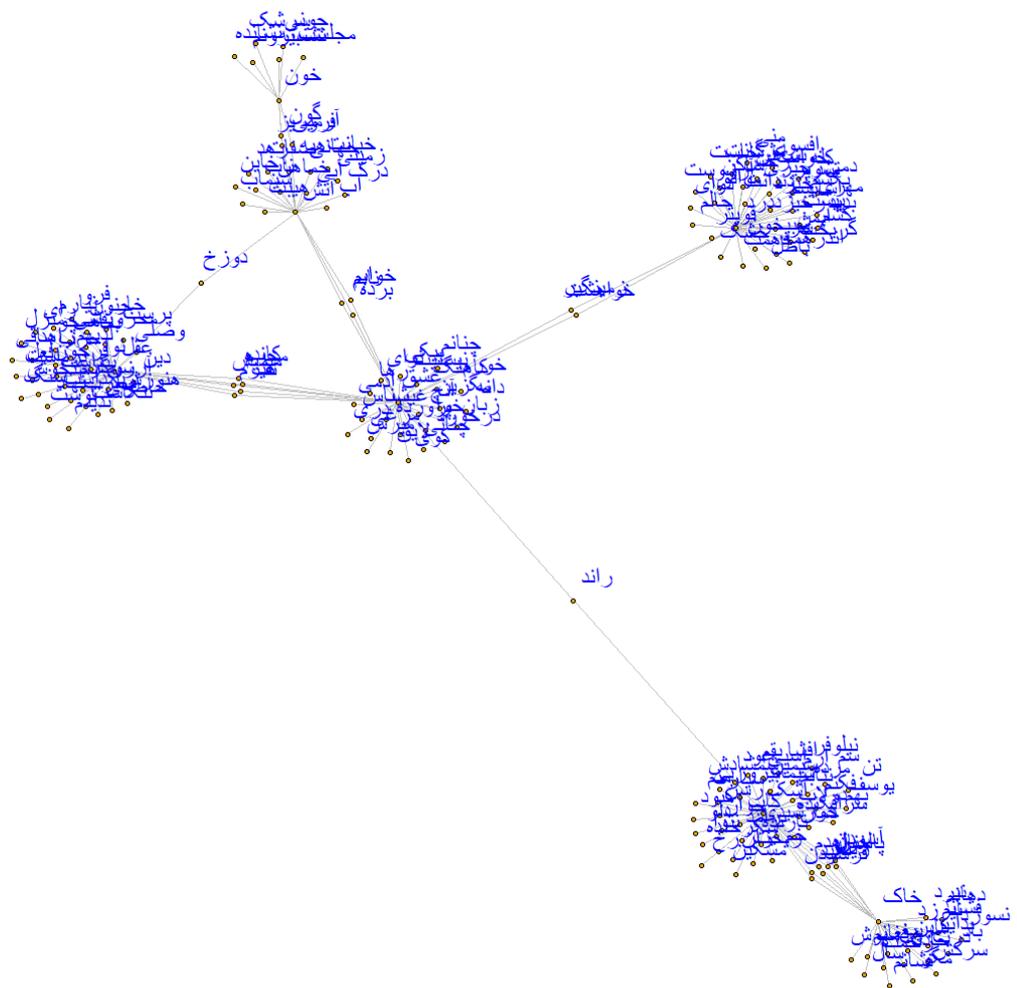
| 単語 | 最も共起する単語 | 重み |
|-----|----------|------|
| خون | آرمیی | 0.77 |
| خاک | آسودن | 0.34 |
| درد | قویتر | 0.41 |
| آتش | آبی | 0.48 |
| اشک | آسودن | 0.41 |
| عشق | آنچ | 0.5 |
| عقل | آرزو | 0.76 |

図 27.2 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』愛に関する単語同士の共起関係



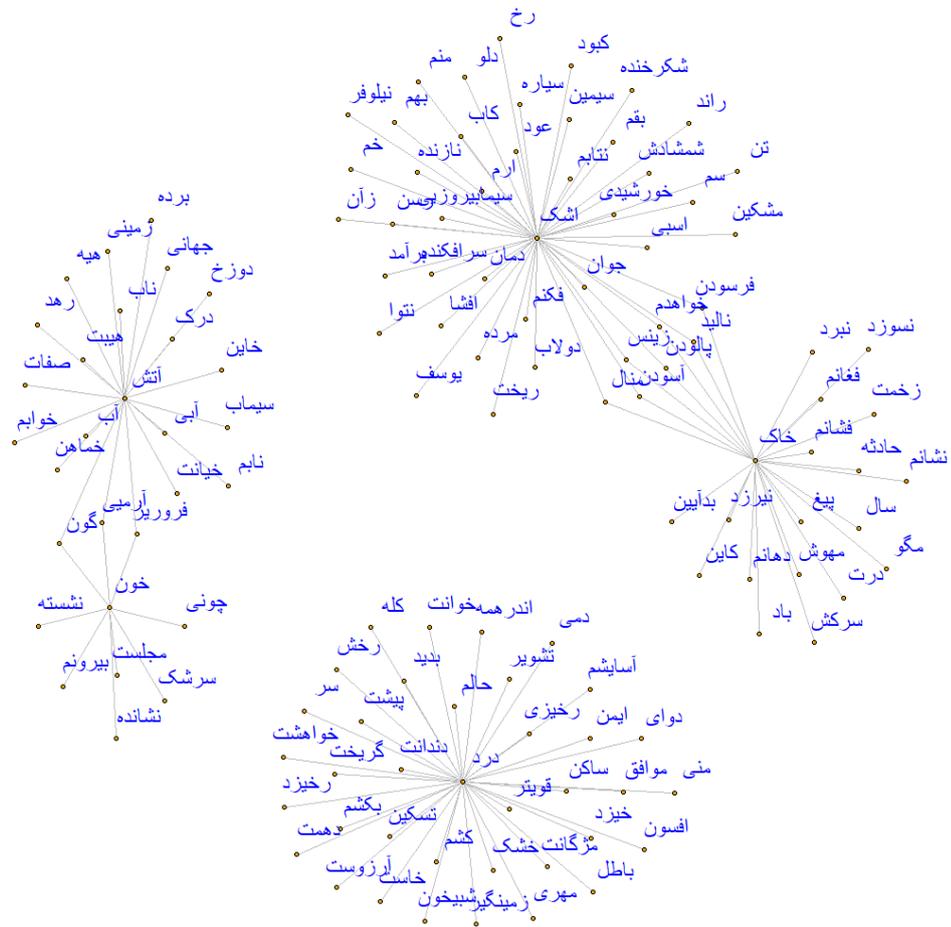
correlation Threshold: 0.3

図 27.3 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.3 以上)



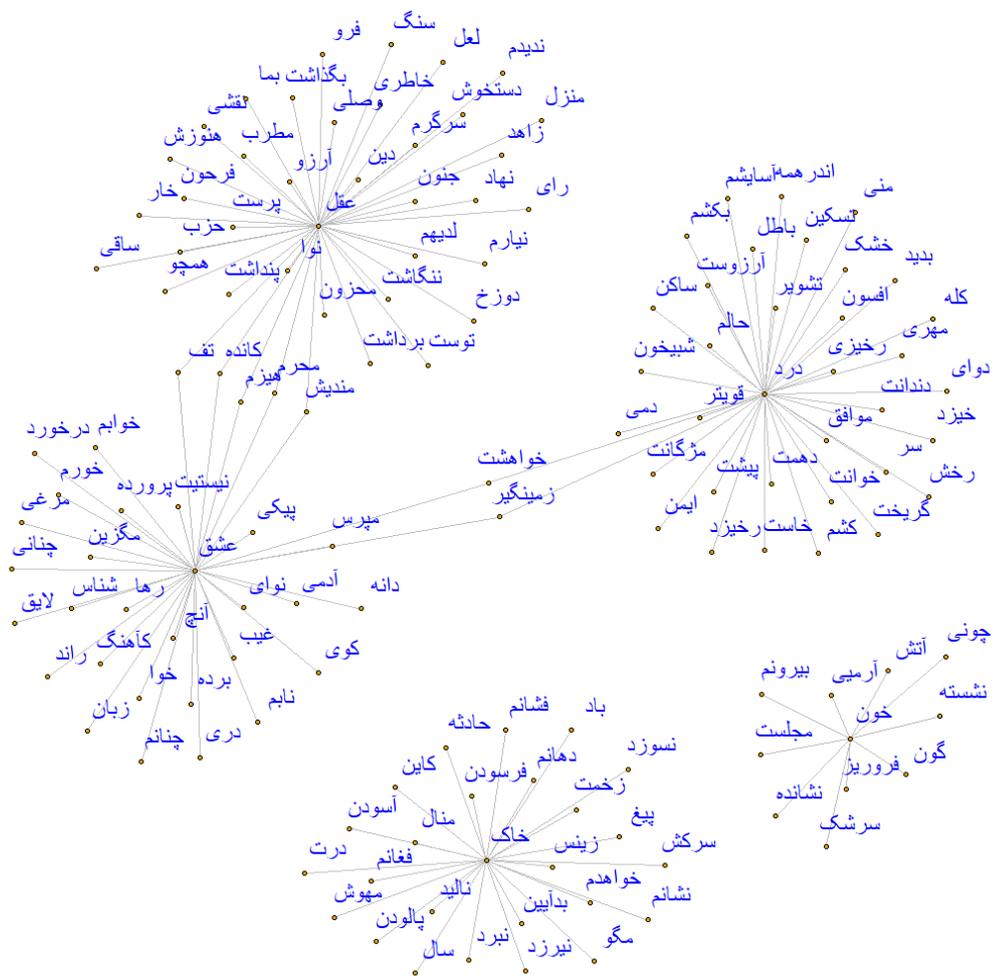
correlation Threshold: 0.2

図 27.4 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』 愛に関する単語全てを対象とした共起ネットワーク (重み=0.2以上)



correlation Threshold: 0.2

図 27.5 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』 愛に関する単語の内、「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」と「درد (dard) 」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2 以上)



correlation Threshold: 0.2

図 27.6 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』 愛に関する単語の内、「آتش (ātesh)」と「اشک (ashk)」を除いた共起ネットワーク (重み=0.2以上)

重みの値が 0.2 の時、「خون (khūn) 」と「آتش (ātesh) 」は「آرمی (āramī) 」等と、「خاک (khāk) 」と「اشک (ashk) 」は「نالیدن (nālīdan) 」等と、「عقل (‘aql) 」と「عشق (‘eshq) 」は「تف (taf) 」等と、「عشق (‘eshq) 」と「درد (dard) 」は「زمینگیر (zamīn-gīr) 」等とそれぞれ共起する。

(2) 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』に関するまとめ

「خون (khūn) 」と「آتش (ātesh) 」における互いの重みの値は、他の愛に関する単語同士の組み合わせと比較して、最も高い。「عشق (‘eshq) 」と「عقل (‘aql) 」は互いにある程度の重みを持ちつつ、他の愛に関する単語との重みの値は低い。悲嘆の叫び声を表す「نالیدن (nālīdan) 」は「اشک (ashk) 」と「خاک (khāk) 」と「درد (dard) 」と共起する。故に、これらの単語が苦痛に関係する可能性が高い。

2-13. 各テキストの分析結果のまとめ

「神への愛」の観点から、各テキストは以下の二点によってその特徴を分類できる。

1. 「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の使用方法
2. 愛に関する言葉の共起関係

1. 「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の使用方法

『真理の園』や『精神的マスナヴィー』において、アッターールのマスナヴィー同様に、「عقل ('aql)」を「عشق ('eshq)」を対比させて論じる箇所がある。一方で、スーフイズムにおける「عقل ('aql)」の役割を、「عشق ('eshq)」なしで論じている箇所がアッターールのテキストと比較すると圧倒的に多い。このことは、これらのテキストの愛に関する単語の相対頻度の表、共起ネットワークの分析結果からも明らかである。『真理の園』において、「عقل ('aql)」は独立した章で語られる。そこで、「عقل ('aql)」は肯定的に扱われる。『精神的マスナヴィー』において、「عقل ('aql)」は「部分的なもの」と、「全体的なもの」等に分類し肯定的にも論じられる。「عشق ('eshq)」との比較なしに論じること、「عقل ('aql)」を肯定的なものとして扱うこと、「عقل ('aql)」に詳細な種類を設けることはアッターールのマスナヴィーにない特徴である。

アンヴァリーとハーカーニーの「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」の使用方法にも差異がある。アンヴァリーのどの『アンヴァリー詩集』においても、「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」の共起関係の重みは高くないのに対し、『ハーカーニー詩集—タルジーウ』以外のハーカーニーの『ハーカーニー詩集』においては「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の共起関係の重さの値は高い。さらに、ハーカーニーのテキスト内でのみ比較しても、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」は他の単語との組み合わせよりも、重みが高く、高い共起関係を示す。

2. 愛に関する言葉の共起関係

『アンヴァリー詩集—ガザル』と『アンヴァリー詩集—ロバーイー』において、愛と苦痛は密接に結びつく。共起ネットワークの結果から、『アンヴァリー詩集—ガザル』において、「عشق ('eshq)」と「درد (dard)」の共起頻度は高い。『アンヴァリー詩集—ロバーイー』において、「آتش (ātesh)」と「عشق ('eshq)」と「خون (khūn)」は恋人を表す単語「جانا (jānā)」と共起する。これらのテキストにおいては愛と苦痛が結びついた表現が用いられる。一方、共起ネットワークの結果から、『アンヴァリー詩集—マクタア』のように愛とそれに伴う苦痛を表していると言い難いテキストもある。また、『アンヴァリー詩集—ガザル』において、アッターールのマスナヴィー同様「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値が高い。一方、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』においては重みの値が低く、ほとんど共起しない。ここから、『アンヴァリー詩集—ガザル』と『アンヴァリー詩集—ロバーイー』において、愛と苦痛が結びつく表現が用いられ、特に『アンヴァリー詩集—ガザル』がアッターールのマスナヴィーと一部類似する。

前述の通り、『ハーカーニー詩集—タルジーウ』以外のハーカーニーの『ハーカーニー詩集』において、『アッターール詩集—ガザル』と『アッターール詩集—カスィーデ』と同様に、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の共起関係の重みの値は高い。また、愛や苦痛を表す方法として、愛に関する単語を用いることが以下の単語との共起から明らかである。『ハーカーニー詩集—ガザル』において、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は、奴隷を表し愛する者の代名詞である「هندو (hendū)」と共起する。『ハーカーニー詩集—カスィーデ』において、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」の重みの値は高く、嘆息を表す「اه (āh)」と共起する。『ハーカーニー詩集—タルキーブ』において、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」とは悲しみや肝臓を表す「جگر (jegar)」と共起する。『ハーカーニー詩集—タルジーウ』において、「خاک (khāk)」と「درد (dard)」と「عقل ('aql)」は悲嘆の叫び声を表す「نالہ (nāle)」と共起する。『ハーカーニー詩集—ロバーイー』において、「خاک (khāk)」と

「درد (dard)」と「اشک (ashk)」は叫び声を表す「نالیدن (nālīdan)」と共起する。

アンヴァリーの『アンヴァリー詩集』において、『アンヴァリー詩集—ガザル』と『アンヴァリー詩集—ロバーイー』はアッタール同様に愛を苦痛で表現する。また、『アンヴァリー詩集—ガザル』は「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値が高い点において、アッタールのマスナヴィーと類似する。ハーカーニーの『ハーカーニー詩集』において、愛に関する単語が苦痛を表現していることはアンヴァリーの『アンヴァリー詩集』と共通の特徴である。『ハーカーニー詩集—タルキーブ』と『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値は『アンヴァリー詩集—ガザル』と同様に高い。一方、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の重みの値が高い点は、アンヴァリーのテキストではなく、アッタールのテキスト、特に『アッタール詩集—ガザル』及び『アッタール詩集—ガスィーデ』と類似する。アンヴァリーとハーカーニーのテキストは、以上述べたアッタールとの類似点をそれぞれ持つ。さらに、苦痛を表す比喻の表現はアッタール、アンヴァリー、ハーカーニーのテキストにおいて共通する。故に、ペルシア詩の中で、苦痛に関して、共通の表現が用いられている可能性は高い。また、愛を苦痛で表現する方法、愛と理性の論じ方もスーフイズムだけではなく、ペルシア詩全般に共通していた可能性は高い。

3. 全テキストに対する主成分分析、階層的クラスター分析、愛に関する単語の相対頻度

(1) 主成分分析と階層的クラスター分析

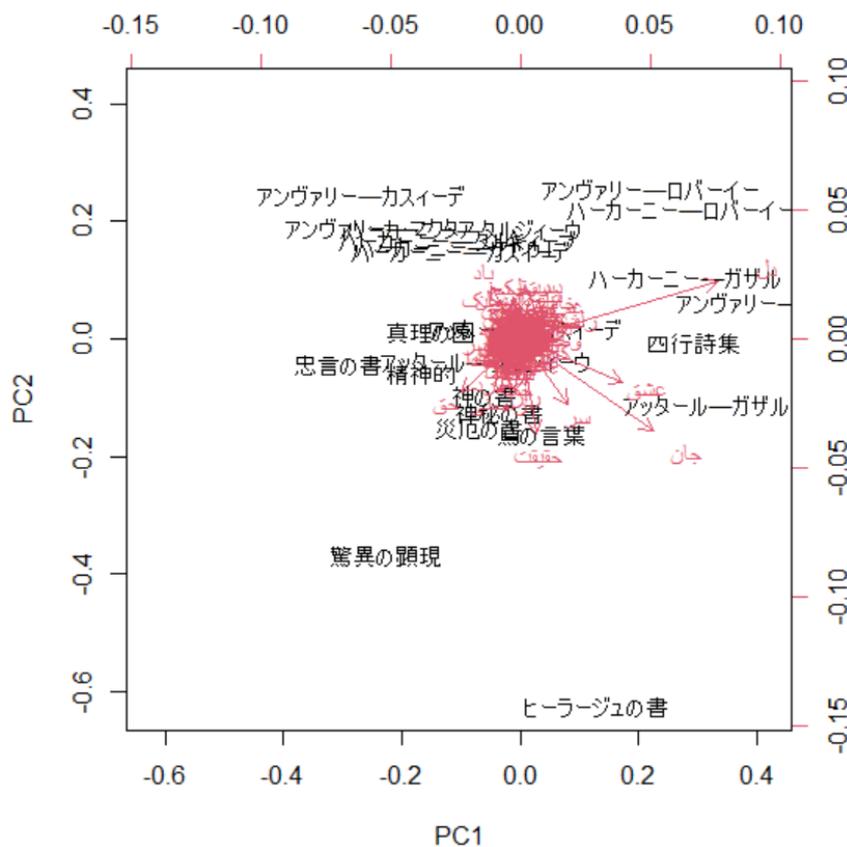


図 28.1 『神祕の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『アッタール詩集—ガザル』、『アッタール詩集—カスィーデ』、『アッタール詩集—タルジウ』、『四行詩集』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキーブ』、『ハーカーニー詩集—タルジウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』最頻出名詞 100 の主成分分析 (PC1=0.27253、PC2= 0.20513)

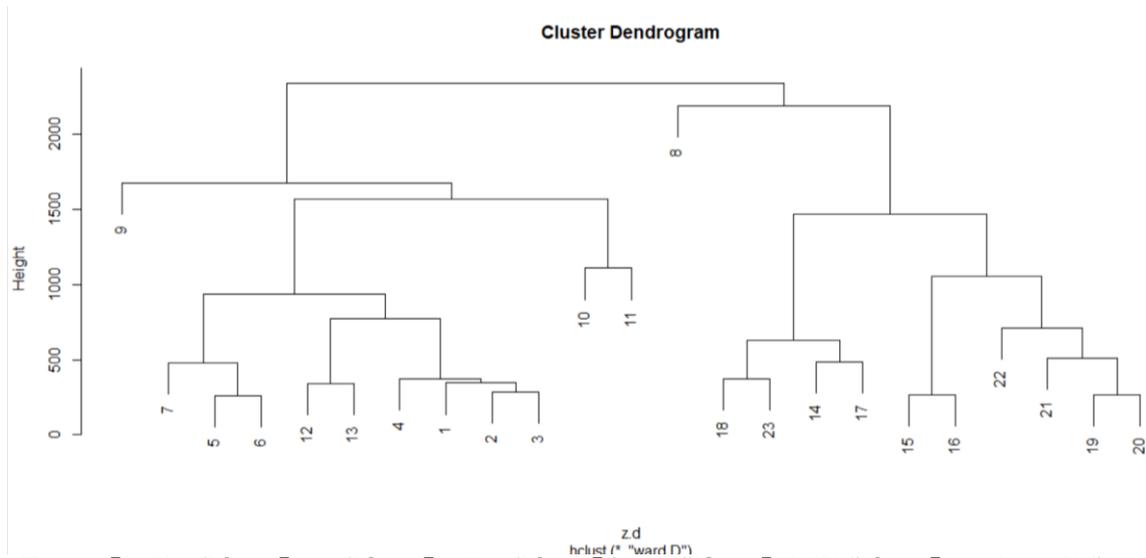


図 28.2 『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジーウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』最頻出名詞 100 の階層的クラスター分析³¹⁴

図 28.1、28.2 は、『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』、『四行詩集』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』、『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジーウ』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』をそれぞれ主成分分析と階層的クラスター分析に掛けたものである。

主成分分析の結果から、マスナヴィー体で書かれたアッターールのテキスト、すなわち、『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』は明らかに共通の特徴を有している。それは、図 28.1 の分析結果からも明らかである。また、これらのテキスト群の近くに『精神的マスナヴィー』、『真理の園』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジーウ』があり、特徴が近い。それらのテキスト群から、少し外れた場所に『忠言の書』がある。一方、この図の右側には、『四行詩集』と各ガザルがある。さらに、この図は、これらのテキストの特徴として「عشق (‘eshq)」の相対頻度が他のテキストより多いことを示している。次にこの図の上側を観察する。ガザル以外のアンヴァリーとハーカーニーの各テキスト同士の距離は離れている一方で、他の詩人のテキストと比較すると固まっている。故に、他のテキストとは異なる特徴を有している。

³¹⁴ 1=『神秘の書』、2=『神の書』、3=『災厄の書』、4=『鳥の言葉』、5=『四行詩集』、6=『アッターール詩集—ガザル』、7=『アッターール詩集—カスィーデ』、8=『アッターール詩集—タルジーウ』、9=『忠言の書』、10=『驚異の顕現』、11=『ヒーラージュの書』、12=『真理の園』、13=『精神的マスナヴィー』、14=『アンヴァリー詩集—ガザル』、15=『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、16=『アンヴァリー詩集—マクタア』、17=『アンヴァリー詩集—ロバーイー』、18=『ハーカーニー詩集—ガザル』、19=『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、20=『ハーカーニー詩集—ケトウエ』、21=『ハーカーニー詩集—タルキープ』、22=『ハーカーニー詩集—タルジーウ』、23=『ハーカーニー詩集—ロバーイー』

この図において、どのテキスト群とも大きく外れているのが『驚異の顕現』、『ヒーラー
ジュの書』であり、明らかに他のテキストとは異なる特徴を持つ。

以上の結果から、アッタールのマスナヴィー体のテキスト群は、他のどのテキストにもな
い共通の特徴を持つ。これらのテキスト群は、他のアッタールの真作であるアッタールの詩
集よりも、同じマスナヴィー体で書かれた『真理の園』、『精神的マスナヴィー』と相対的
に近い特徴を有す。また、各詩人のガザル同士は、それぞれの詩人の他の形式のテキストよ
り共通の特徴を持つ。

階層的クラスター分析において、アッタールのマスナヴィー体で書かれたテキスト、『神
秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』は一つのクラスターを形成する。この
クラスターは、『真理の園』と『精神的マスナヴィー』のクラスターと隣接する。さらに、
上記二つのクラスターをまとめたものは、『四行詩集』、『アッタール詩集—ガザル』、
『アッタール詩集—カスィーデ』のクラスターと隣接する。それら全てまとめたクラスター
は、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』と隣接し、その後、『忠言の書』と隣接する。

以上の結果から、階層的クラスター分析においてもアッタールのマスナヴィー体のテキス
ト群は、他のどのテキストにもない共通の特徴を持つ。これらのテキスト群は、他のアッタ
ールの真作であるアッタールの『アッタール詩集』よりも、同じマスナヴィー体で書かれた
『真理の園』、『精神的マスナヴィー』と相対的に近い特徴を有する。この点においても、
主成分分析と同様の結果を示す³¹⁵。

³¹⁵ 『アッタール詩集—タルジーウ』のみ外れた箇所にあることは、第4章と同様である。そして、
その理由も同様と推測できる。

(2) 愛に関する単語の相対頻度

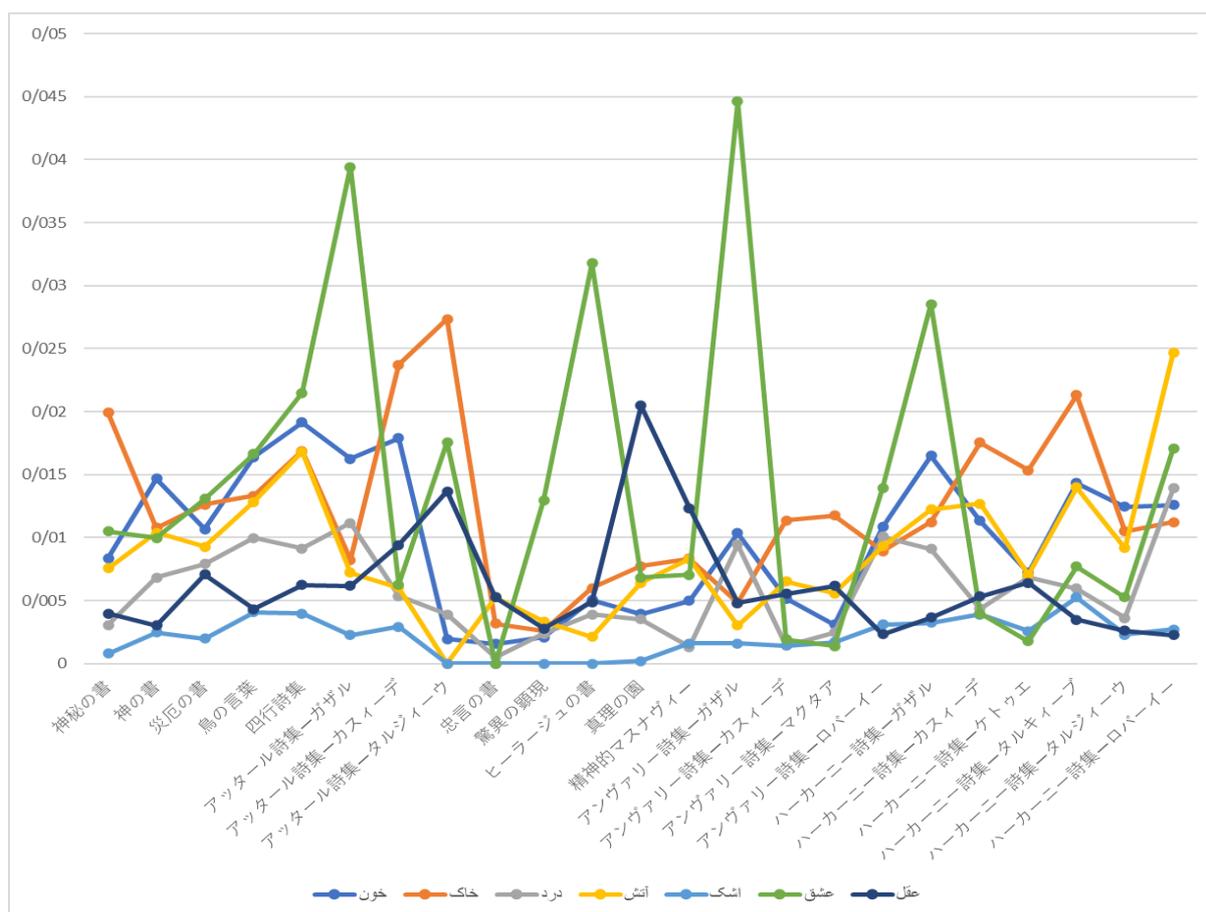


図 28.3 『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジュー』、『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラーージュの書』、『真理の園』、『精神的マスタヴィー』、『アンヴァアリー詩集—ガザル』、『アンヴァアリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァアリー詩集—マクタア』、『アンヴァアリー詩集—ロバーイー』、『ハーカーニー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』、『ハーカーニー詩集—タルジュー』、『ハーカーニー詩集—ロバーイー』の愛に関する単語の相対頻度

図 28.3 から、『ヒーラーージュの書』と各ガザルにおいて、「عشق (‘eshq)」の相対頻度は他のテキストより高いことが明らかである。故に、主題が愛であることを示している。

「عقل (‘aql)」は『真理の園』において、相対頻度が最も高く、このテキストにおいて重視される。

「آتش (ātesh)」は『ハーカーニー詩集—ロバーイー』において、他のテキストより多く用いられる。

「خون (khūn)」は『アッターール詩集—タルジュー』以外のアッターールの真作とされるテキスト、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』以外のハーカーニーの詩集の相対頻度が比較的高い。一方、共起ネットワークの分析結果から、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』において、相対頻度は少ないが、「خاک (khāk)」と頻繁に共起する。

「خاک (khāk)」は『神秘の書』、『アッターール詩集—カスィーデ』、『アッターール詩集—タルジュー』、『ハーカーニー詩集—カスィーデ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』、『ハーカーニー詩集—タルキープ』において、相対頻度が高い。

「اشک (ashk)」はどのテキストにおいても相対頻度が低い。

『忠言の書』はこれらの単語がほとんど登場しない。その点において、他のテキストと明らかに異なる。

第6章 分析結果のまとめと考察

第4章と第5章の分析結果から、以下のことが明らかになった。

1. 神秘主義詩人アッターールのテキストと、同じく神秘主義詩人の著作であるサナーイー『真理の園』、ルーミー『精神的マスナヴィー』の類似点と相違点
2. アッターールのテキストと、アンヴァリーの『アンヴァリー詩集』、ハーカーニーの『ハーカーニー詩集』との類似点と相違点
3. アッターールの真作と偽作の類似点と相違点
4. アッターールの真作における類似点と相違点

1. 神秘主義詩人アッターールのテキストと、同じく神秘主義詩人の著作であるサナーイー『真理の園』、ルーミー『精神的マスナヴィー』の類似点と相違点

各詩人のテキスト同士を比較した主成分分析の結果、アッターールのマスナヴィーと、ガザル以外の『アッターール詩集』、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』同士は、アッターールの他のテキストや偽作同士よりも、特徴が類似することが明らかになった。各詩人のテキスト同士を比較した階層的クラスター分析の結果においても、アッターールのマスナヴィーは『真理の園』、『精神的マスナヴィー』に類似している。なお、『アッターール詩集—ガザル』は、「**عشق** ('eshq)」の相対頻度が多い点において、アッターールのマスナヴィーと異なる特徴を有している。このことが、他の真作と類似しない結果をもたらしたと考えられる。

この類似の一方で、個別テキストの頻度分析と主成分分析の結果、アッターールのマスナヴィー、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』は「神への愛」という観点からは明確に異なる特徴を持つことが定量的に明らかとなった。その特徴は、「**عشق** ('eshq)」と「**عقل** ('aql)」の使用方法において顕著である。アッターールのテキストにおいて「**عشق** ('eshq)」と「**عقل** ('aql)」はセットで登場し、対比として同時に用いられる。一方、『真理の園』と『精神的マスナヴィー』において、「**عقل** ('aql)」と「**عشق** ('eshq)」はセットではなく、独立して論じられることが多い。

アッターールのマスナヴィーにおいては、「**عشق** ('eshq)」は肯定的に扱われる一方、「**عقل** ('aql)」は、ニュートラルもしくは否定的に扱われる場合が多い。偽作とされる『忠言の書』のみが「**عقل** ('aql)」を条件なしに肯定的に扱う。

一方、サナーイーの『真理の園』においては、「**عشق** ('eshq)」と関係なく「**عقل** ('aql)」を頻繁に用いる。『真理の園』の中の1章は「**عقل** ('aql)」のために設けられている。また、第5章の図 28.3 から、『真理の園』では「**عقل** ('aql)」の単語出現の相対頻度が、アッターールやルーミーのテキストより、圧倒的に高い。また、先行研究の指摘によれば、サナーイーのテキストにおける「**عقل** ('aql)」は真実の道へ導く役割を果たし、肯定的に扱われる³¹⁶。これらから、『真理の園』は「**عشق** ('eshq)」との対比のみでなく、「**عقل** ('aql)」自体にも一定の役割を持たせ、重視している可能性が高い。なお、「神への愛」を表す「**عشق** ('eshq)」が現れる時、「**عقل** ('aql)」は役に立たないものとなる。なぜなら、「神への愛」はサナーイーにおいて、「**عقل** ('aql)」を超えていくからである。このことは、『真理の園』第6章において説明される。

また、ルーミーの『精神的マスナヴィー』においては、サナーイーの『真理の園』同様に、「**عقل** ('aql)」と「**عشق** ('eshq)」は別々の箇所が登場することが多い。「**عقل** ('aql)」は第4章、「**عشق** ('eshq)」は第5章と第6章において頻繁に登場する。「**عشق** ('eshq)」との比較なしに論じること、「**عقل** ('aql)」を肯定的なものとして扱うこと、「**عقل** ('aql)」に詳細な種類（全体的な理性、部分的な理性等）を設けることはアッターール

³¹⁶ Ziyāyī Anvar, “Taqābol-e ‘aql va ‘eshq dar *Maṣnavī*-ye Moulānā va *Ḥadīq*e-ye Sanā’ī,” *Andīshe-hā-ye Adabī*, vol.2, no.42, 2011 or 2012, p. 137.

のマスナヴィーにない特徴である。

2. アッターールのテキストと、アンヴァリーの『アンヴァリー詩集』、ハーカーニーの『ハーカーニー詩集』との類似点と相違点

アンヴァリーとハーカーニーのテキストは、スーフイズムの要素を含んでいる詩人として先行研究において指摘される³¹⁷。一方、主題としてスーフイズムを論じた詩人とは見做されていない。各詩人のテキスト同士を比較した主成分分析の結果と階層的クラスタ分析の結果から、『四行詩集』、『アッターール詩集—ガザル』、『アンヴァリー詩集—ガザル』、『ハーカーニー詩集—ガザル』は、アッターールのマスナヴィー及び『真理の園』、『精神的マスナヴィー』と特徴が異なることが明らかとなった。この相違の一方で、個別テキストの共起ネットワーク分析の結果、アンヴァリー、ハーカーニーのテキストでは、アッターールと同様に、愛が痛みを伴うものとされることが定量的に明らかとなった。

アンヴァリー詩集の中では、特に『アンヴァリー詩集—ガザル』と『アンヴァリー詩集—ロバーイー』でこの傾向が顕著である。『アンヴァリー詩集—ガザル』では、「عشق (‘eshq)」と「درد (dard)」の共起頻度が高い。また、アッターールのマスナヴィー同様に「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値が高い。『アンヴァリー詩集—ロバーイー』では、「آتش (ātesh)」と「عشق (‘eshq)」と「خون (khūn)」は恋人を表す単語「جانا (jānā)」と共起する。すなわち、これらのテキストにおいて、愛と苦痛は密接に結びつく。なお、『アンヴァリー詩集—カスィーデ』、『アンヴァリー詩集—マクタア』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」における重みの値は低く、ほとんど共起しない。また、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」の共起の頻度はアッターールの『アッターール詩集』のように多いわけではない。故に、ペルシア詩の中で、苦痛に関して、共通の表現が用いられている可能性が高い。

ハーカーニーの各詩においても、愛に関する単語が苦痛を表現している。『ハーカーニー詩集—タルキーブ』、『ハーカーニー詩集—ケトゥエ』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」の重みの値はアッターールのマスナヴィーと同様に高い。また、『ハーカーニー詩集—タルキーブ』において、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」とは悲しみや肝臓を表す「جگر (jegar)」と共起する。『ハーカーニー詩集—ガザル』において、「اشک (ashk)」と「آتش (ātesh)」は奴隷を表し、愛する者の代名詞である「هندو (hendū)」と共起する。『ハーカーニー詩集—カスィーデ』において、「خون (khūn)」と「اشک (ashk)」の重みの値は高く、嘆息を表す「آه (āh)」と共起する。『ハーカーニー詩集—タルジウ』において、「خاک (khāk)」と「درد (dard)」と「عقل (‘aql)」は悲嘆の叫び声を表す「نالہ (nāle)」と共起する。『ハーカーニー詩集—ロバーイー』において、「خاک (khāk)」と「درد (dard)」と「اشک (ashk)」は叫び声を表す「نالیدن (nālīdan)」と共起する。以上の結果から、愛に関する単語が苦痛を表現していることが定量的に明らかになった。一方、『アンヴァリー詩集』と異なり、「عشق (‘eshq)」と「عقل (‘aql)」における重みの値が全体的に高い。この点は、アンヴァリーのテキストではなく、アッターールのテキスト、特に『アッターール詩集—ガザル』及び『アッターール詩集—カスィーデ』と類似する。故に、『ハーカーニー詩集』はアンヴァリーと同じく、ペルシア詩の中で、苦痛に関して、共通の表現が用いられている可能性を示唆している。さらに、愛と理性の論じ方もスーフイズムだけにではなく、ペルシア詩に共通してあった可能性をも示唆している。

小括

アンヴァリー、ハーカーニーらの愛の表現方法から、ペルシア詩において、愛を苦痛や悲しみで表す伝統がある。その表現をアッターールは神秘主義詩に用いた可能性が高い。それは、他の神秘主義詩人であるサナーイーやルーミーの詩においても見られる。

³¹⁷ Karamī Moḥammad Ḥosseīn and Dehqānī Nāhīd, “Rūy-kard-e Do-gūne-ye Anvarī be ‘Erfān va Taṣavvof,” *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāte- Fārsī*, no.37, 2015 or 2016, p. 51.

しかし、アッタールとサナーイーやルーミーの間で、理性の取り扱いには明確な違いがある。サナーイーやルーミーは愛を他の要素より重視しつつも、テキストの中で理性にも一定の役割を与える傾向にある。一方、アッタールは他の二者と比較して、愛とその苦痛のみを原理とする傾向が強い。アッタールのテキストでは、愛以外の要素は否定されるか矮小化される傾向がある。そして、彼のテキストでは愛とそれに伴う苦痛や他の要素の否定が全体に登場する傾向にある。

3. アッタールの真作と偽作の類似点と相違点

アッタールのテキスト全てを対象とした主成分分析と階層的クラスター分析の結果、真作とみなされるアッタールのテキストと偽作とされるアッタールのテキストとの間には高い蓋然性で差異があることが示された。すなわち、キャドキャニーが偽作として取り扱っていたテキストは、彼の主張の通り全て偽作である蓋然性が高いことが、本論文による客観的な定量により裏付けられた。本論文の定量により偽作とされるテキストには、ナフィースイーが真作と分類していた『忠言の書』も含まれる。

なお、アッタールのテキスト全てを対象とした階層的クラスター分析においては、『アッタール詩集—タルジーウ』が、偽作とされる『忠言の書』と比較的近い箇所にあった。しかし、それぞれが分類されるクラスターは異なる。また、これは、総単語数が両者とも少ないために起きたと考えられるため、真偽問題の議論には反映しない。

結論として、真作と偽作の差異はアッタールにおいて顕著である。本論文の分析結果によれば、ナフィースイーの主張のように『忠言の書』を真作に含める見解より、キャドキャニーの主張のように『忠言の書』をアッタール以外の人物が書いたとする見解の方が妥当である。まず、頻度分析の結果から、『忠言の書』で使用される名詞と、真作とされているテキストにおいて使用される名詞が異なる。『忠言の書』では、愛に関する単語の登場頻度も真作とされているテキストに比べて明らかに少ない。次に、共起ネットワークの分析結果からも、『忠言の書』では愛に関する単語同士が共起する頻度が低いことがわかる。さらに、「神への愛」を表す愛に関する単語の使用方法においても、真作とされるテキストと差異がある。アッタールのマスナヴィーにおいて、「神への愛」に関係する言葉は、「عقل ('aql)」以外は、肯定的に用いられる。それは、先行研究や『神の書』の記述からも明白である³¹⁸。一方、『忠言の書』において、愛に関する単語の一つである「آتش (ātesh)」は敵という単語とともに登場し否定的な意味で用いられる。『忠言の書』では、抑圧や悪の象徴として「آتش (ātesh)」が使われる。さらに、「عقل ('aql)」は、『忠言の書』では無条件に肯定的に用いられる。真作とされるマスナヴィーにおいて、この単語は否定的かニュートラルな意味として通常用いられる。以上の主成分分析、階層的クラスター分析、頻度分析の結果から、明らかに『忠言の書』は他のアッタールのテキストと異なることが高い蓋然性で示された。

『驚異の顕現』は『忠言の書』同様に、愛に関する単語の登場頻度が真作とされるテキストと比較して少ない。一方、『忠言の書』と異なり、「خون (khūn)」以外の痛みを表す単語と「神への愛」は結びついている。他方、他のアッタールの真作とされるテキストと異なり「خون (khūn)」と他の愛に関する単語が共起することが全くない。「神への愛」と関係する単語や登場人物も他のテキストと明らかに異なる。しかも、他のテキストにおいて重視されない「جوهر (jouhar)」という言葉が、愛と密接にかかわるものとして重要視される。頻度分析の結果から、この言葉は登場頻度がトップ 50に入っている。また、主成分分析の結果から、この言葉が 26章において重視されていることがわかる。この章においては、本質、すなわち「جوهر (jouhar)」と愛が主題として扱われている。このテキストにおいてはナースィル・フスローが登場するが、これは他のテキストにおいて観察できない点である。以上の結果から、このテキストは神への愛と苦痛というテーマは共通しながらも、以下の3

³¹⁸ Jalālī Shījānī Jamshīd, “‘Aql va ‘Eshq dar Nazar-e ‘Attār Nīshābūrī va Najm al-Dīn Rāzī,” *Khodāyī Nāme*, vol. 1, no.1, 2012, p.50.

点において、真作とされるテキストと異なる。(1) 「خون (khūn)」を愛の表現方法として用いない。(2) 「جوهر (jouhar)」を重要な単語として用いる。(3) 他テキストに登場しない思想家が登場する。

『ヒーラージュの書』は『忠言の書』と『驚異の顕現』とは異なり、使用されている単語の頻度からは真偽を判断できない。しかし、テキストで使用される登場人物や「انا الحق (anā al-ḥaq)」の登場頻度が明らかにアッタールの他テキストと異なる。『ヒーラージュの書』がヒーラージュと結びついている理由から、「انا الحق (anā al-ḥaq)」が多く用いられる。その傾向は34章において顕著である。さらに、この単語と「حقیقت (ḥaqīqat)」が結びついて使われるという点も他のテキストにない特徴である。これらの単語は頻度分析の結果で頻度トップ50に入ったが、他のアッタールのテキストにおいて、頻度は高くない。また、主成分分析の結果から、「گنج (ganj)」を13章において特に用いていることが明らかになった。13章では「گنج (ganj)」は肯定的に扱われている。しかし、「گنج (ganj)」を肯定的にあつかうことは、他のテキストにない特徴である。さらに、アッタールのテキスト全てを対象とした主成分分析の結果が示すように、このテキストの特徴は真作より偽作に近い。なお、階層的クラスタ分析の結果によれば、『ヒーラージュの書』は、同じ偽作の中では、『忠言の書』より『驚異の顕現』により近い特徴を持つ。

頻度分析の結果から、アッタールの偽作とされるテキストの共通の特徴として、「اشک (ashk)」という言葉は一切使わないということも明らかになった。この単語は、真作においても、他の愛に関する単語と比べ登場頻度が少ない。しかし、露骨に使用しないのは上述の三つのテキストのみである。それ故に、この単語を使用しないことは、分析した偽作群の特徴である。

以上の理由から、アッタールのテキストにおいて、真作と偽作の特徴はそれぞれ類似する。さらに、主成分分析、階層的クラスタ分析から、偽作においても『忠言の書』と『驚異の顕現』及び『ヒーラージュの書』の二つのテキスト群が分類される。さらに、頻度分析や共起ネットワークの結果から、それぞれのテキストが持っている異なる特徴も明らかになった。

4. アッタールのテキスト間における類似点と相違点

アッタールのテキストは、4章で明らかにしたように、四つの観点から特徴を分類できる。すなわち、①愛に関する単語同士の共起関係（特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係）、②愛に関する単語の相対頻度と用い方、③「神への愛」を表現する方法、④「神への愛」における「عقل ('aql)」の位置づけである。

①「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」が「神への愛」に伴う苦痛を表す方法として重視される『神秘の書』と『災厄の書』に対して、「خون (khūn)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」との組み合わせが重視される『神の書』、満遍なく他の愛に関する単語と共起する『鳥の言葉』がある。愛に関する単語同士の共起関係は、真作とされる各テキストにおいて異なる。

②愛に関係する単語は、真作とされるテキストにおいて、満遍なく高い頻度で登場する。前述したように、偽作とされる『忠言の書』や『驚異の顕現』では出現回数が少ない。さらに、これらのテキストでは、真作において肯定的な意味で使われていた単語が、否定的に使われ、否定的に使われていた単語が、反対に肯定的に使用されるなど異なる。一方、偽作とされる『ヒーラージュの書』では、肯定と否定において、真作とされているテキストと同じように愛に関する単語が用いられる。しかし、テキストで使われている単語や「اشک (ashk)」が一回も使われない点において、真作とは明らかに異なる特徴を持つ。

③「神への愛」を表現する方法は三種類ある。(1)「عشق ('eshq)」のみで語る方法、(2)「عشق ('eshq)」と他の愛に関する単語を組み合わせる愛を表現する方法、(3)「عشق ('eshq)」以外の愛に関する単語のみで愛を表現する方法である。『神秘の書』においては、5章は(1)を、20章は(2)を、22章は(3)の方法を主に取っている。『災厄の書』は31章のノアのエピソードを除けば、(2)と(3)の方法を主に取っている。『神の

書』では、「خاک (khāk)」と「عشق (‘eshq)」又は「خون (khūn)」と「عشق (‘eshq)」が同時に使われることが多く、(2)の方法を主に取っている。『鳥の言葉』も15章を除けば、『神の書』と同様に「عشق (‘eshq)」と他の愛に関する単語が共に使用されるため(2)の方法に近い。

④「عقل (‘aql)」はアッタールの多くのテキストにおいて否定的に扱われている。もしくは、イスラーム法に準拠している場合のみ、「عقل (‘aql)」をアッタールは肯定的に取り扱うとされてきた³¹⁹。しかし、分析した結果、「عقل (‘aql)」が『災厄の書』においては必ずしも否定的には扱われず、当該テキストにおいてはニュートラルな単語として頻繁に用いられる。

四種類の分類によって、「神への愛」と、それに伴う苦痛を表す単語の用い方を明らかにした。アッタールにおける重要な要素として、多くの先行研究で「神への愛」に伴う苦痛が取り上げられる。先行研究においては、苦痛の内容、苦痛の役割、苦痛の表現のいずれか、もしくは複数について論じられている。例えば、「アッタールの作品における苦痛の要素

(‘Onsor-e Dard dar Āsār-e ‘Attār (*Manteq al-Ṭayr*, *Muṣibat-nāme*, *Ilāhī-nāme*, *Asrār-nāme*, *Dīvān*))」は、苦痛とは天使にはない、人間のみが持っている特別なものであり、神と離別した魂がもといいた場所に戻ろうとして生じると説明する。さらに、苦痛は、神秘的な道と精神的な知識に基づいて行動する動機の基礎であると説明する³²⁰。また、「アッタール・ニーシャープーリーとナジュムッディーン・ラーズィーにおける理性と愛 (‘Aql va ‘Eshq dar *Nazar-e ‘Attār Nīshābūrī* va *Najm al-Dīn Rāzī*)」は、愛に伴う苦痛の重要性を論じつつ、愛の表現方法としての涙、火、血について論じる³²¹。さらに、「苦痛、アッタールの詩の香り

(*Dard*, ‘Aṭr-e She‘r-e ‘Attār (*Bar-rasī-ye Touṣīfī-ye Mafhūmī-ye Dard dar *Manteq al-Ṭayr*-e ‘Attār Nīshāpūrī*, *bā Erā‘e-ye Namūne-hāyī Chand az Sāyer-e Āsār-e Vey*))」においても、苦痛として血の匂いや燃えるものに着目する³²²。これらの先行研究から、「神への愛」とそれに伴う苦痛はアッタールのテキストの主題といても差し支えない。しかし、テキスト間における苦痛の表現の差異は明らかにされてこなかった。テキスト間の違いを定量的に示すことは、他の詩人と、テキスト単位での比較の道を開く点において重要である。上述の分析結果は、それらを明らかにしたという点において意義がある。

さらに、共起ネットワークの分析結果から、苦痛を表す単語同士のみでなく、それらの単語が他の愛や苦しみを表す単語と密接に関係することも明らかにした。『神秘の書』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は恋人を表す「جانا (jānā)」と共起し、愛との関係性が強調される。『神の書』において、「عشق (‘eshq)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」と「درد (dard)」は、チューリップを表し、血や、愛に関係する痛みも意味する「لاله (lāle)」と共起する。『災厄の書』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は愛に狂ったものである「معجون (ma‘jūn)」と共起する。『鳥の言葉』において、「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」は、苦しむことを表す「مالید (mālīd)」と共起する。以上の結果から、先行研究が示すことができなかった、テキストごとの特徴、苦痛を表す単語同士若しくは別の単語との関係を表すことに成功した。

³¹⁹ Jalālī Shījānī Jamshīd, *op.cit.*, pp. 46-47.

³²⁰ Ghafārī Solmāz, “‘Onsor-e Dard dar Āsār-e ‘Attār (*Manteq al-Ṭayr*, *Muṣibat-nāme*, *Ilāhī-nāme*, *Asrār-nāme*, *Dīvān*),” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 262-277.

³²¹ Jalālī Shījānī Jamshīd, *op.cit.*, pp. 41-61.

³²² Kār-āmūz Faṭhīye al-Sādāt, “‘Dard, ‘Aṭr-e She‘r-e ‘Attār (*Bar-rasī-ye Touṣīfī-ye Mafhūmī-ye Dard dar *Manteq al-Ṭayr*-e ‘Attār Nīshābūrī*, *bā Erā‘e-ye Namūne-hāyī Chand az Sāyer-e Āsār-e Vey*),” *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no. 47, 2019, pp. 249-270.

結論

本論文は、地域研究の一環として、ペルシア語文化圏を対象に、現代のイラン・イスラーム共和国にあたるホラーサーン地方で活躍した 12 世紀の詩人、ファリードウッディーン・アッターールのスーフイー詩を分析した。従来の定性的なテキスト分析に対して、本論文では、ソフトウェアを用いたテキストマイニングを行うことで、定量的な分析を行った。

第 1 章では、アッターールの先行研究について網羅的に取り上げ、分類し、それぞれの特徴をまとめた。初めに、アッターールの先行研究を以下の五つに分類した。

1. 思想に関する研究
2. テキストの構造に関する研究
3. 受容史に関する研究
4. 象徴に関する研究
5. 刊本や写本の真贋・信頼性に関する研究

これら五つの研究の種類について論じた後、特に 2. について、従来の文献学の手法とは異なる文学理論の手法がアッターールの先行研究においてどのように適用されてきたのかを分析した。ここでは、二項対立という構造主義の考え方がアッターールのテキストの分析において最も頻繁に用いられていること、イランにおけるアッターールのテキストの文学理論を用いた研究はスーフイズムという要素を前提にしていることを明らかにした。この章の最後では、従来の研究も文学理論を用いた研究も、数量的にその根拠を示さない質的な分析を基にする研究であること、量的な分析はアッターール研究において十分になされてこなかったことを明らかにした。さらに、定量的な手法を使った先行研究を取り上げ、それらの研究の定量的な分析が包括的ではなく不十分であることを示し、本論文では包括的な量的分析を行うことを説明した。

第 2 章では、アッターールが属していた文化圏であるペルシア語文化圏について詳しく論じつつ、この文化圏におけるアッターールの位置づけを明確にした。初めに、11 世紀後半までに文学、行政、学術語として完全に発展し、アラビア語の語彙を受け入れつつその形を作ったペルシア語が、もともと話していた地域の境界を越えて、インド亜大陸、アナトリア、中国、帝政ロシアにおいてどのように広まり文化圏を形成したかの概略を示した。さらに、この文化圏の発展に寄与したスーフイズムとペルシア詩を紹介した。ここでは、アッターールが、スーフイーが持っていた神秘主義思想を韻文詩によって表現するというペルシア神秘主義詩の伝統の中にいること、「神への愛」がアッターールのみならず、スーフイーにとって重要なテーマであることを明らかにした。さらに、彼が生きたホラーサーンはスーフイーにとってもペルシア詩の伝統においても文化の中心であり、重要な地点であったことを示した。そして、アッターールの詩には後期ホラーサーン・スタイルと初期のイラク・スタイルのようにアラビア語のハディースの引用や聖者や預言者の話が用いられていることを指摘した。

第 3 章では、本研究における分析対象のテキスト、解析の目的、本論文で使うテキストマイニング手法の概要を説明した。分析対象としては、アッターールの真作とされる『神秘の書』、『神の書』、『災厄の書』、『鳥の言葉』、『アッターール詩集』、『四行詩集』、偽作とされる『忠言の書』、『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』、サナーイーの『真理の園』、ルーミーの『精神的マスナヴィー』、アンヴァリーの『アンヴァリー詩集』、ハーカーニーの『ハーカーニー詩集』を選んだ。アッターールの真作と偽作の双方のテキストを解析することで、真作と偽作の特徴の差異を明らかにすることができる。サナーイーとルーミーのテキストは、ペルシア神秘主義詩としてアッターールのテキストと同ジャンルに属し、先行研究においても比較されてきたため、アッターールのテキストとの量的比較において意義深い。アンヴァリーに関してはアッターールと同じ地域で活躍しつつ取り扱うテーマが異なったため、テキストの類似点と差異を解析することで、ペルシア詩に共通する用語や特徴を明らかにす

ることができる。ハーカーニーに関しては、テキストマイニングに関する先行研究で取り上げられているスーフイズムの要素を持つ詩人であるため分析対象に含んだ。さらに、テキストマイニングの手法やイランや欧米における研究の傾向について踏まえた上で、特徴を端的に抽出できる主成分分析、主成分分析の欠点をカバーできる階層的クラスタ分析、単語同士が、文章や段落単位で同時に生じる傾向にあるかを可視化できる共起ネットワーク、頻度を可視化できる Word Cloud による頻度分析を本研究で採用することとした。また、具体的な分析手順（形態素分析に用いるために開発したソフトウェアの機能、頻度分析、各テキストの分析、テキスト間の分析と実行する三段階の分析の要約）を示した。

第4章では、アッタールのテキストを対象に、単語の頻度分析、特徴的な章や各章の単語の使用手法の分析、「神への愛」とそれに伴う苦痛に関する単語（「خون (khūn)」、「خاک (khāk)」、「درد (dard)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」、「عشق ('eshq)」、「عقل ('aql)」）の各テキストに対する分析とテキスト間比較分析、真作と偽作の分類についてのテキスト間分析を行った。頻度分析の結果から、『忠言の書』、『驚異の顕現』等は、真作とされているテキストと明らかに単語の使用頻度が異なることが明らかになった。同時に、『ヒーラージュの書』は単語の使用頻度から真偽を判断できないが、主成分分析と階層的クラスタ分析の結果に鑑みると偽作に近いことが示された。さらに、『忠言の書』と他の偽作の二つのテキストにも差があるので、前者と後者二つのテキストの作者は異なるか、一作者において大幅な思想的な転向があった可能性が高いことも明らかにした。この結果、本論文は、定性的にしか行われてこなかったアッタールの真作と偽作の判断を、定量的な分析によっても提供する可能性を示した。そして、真作同士でも、愛に関する単語同士の共起関係（特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係）、「神への愛」を表現する場合の愛に関する単語の用い方、「神への愛」における「عقل ('aql)」の位置づけが、テキストごとに異なる特徴をもつことも明らかになった。「خون (khūn)」と「خاک (khāk)」によって「神への愛」に伴う苦痛が表されがちである『神秘の書』と『災厄の書』に対して、『神の書』では「خون (khūn)」、「آتش (ātesh)」、「اشک (ashk)」の組み合わせが重視され、『鳥の言葉』では愛に関する単語が満遍なく使われる。「神への愛」を語る方法も、(1) 「عشق ('eshq)」のみで語る方法、(2) 「عشق ('eshq)」と他の愛に関する単語を組み合わせる方法、(3) 「عشق ('eshq)」以外の愛に関する単語のみで愛を表現する方法の三種類がある。『神秘の書』は、5章は(1)を、20章は(2)を、22章は(3)の方法を主に取っている。『災厄の書』は、31章のノアのエピソードを除けば、(2)と(3)の方法を主に取っている。『神の書』では、「خاک (khāk)」と「عشق ('eshq)」又は「خون (khūn)」と「عشق ('eshq)」が同時に使われることが多く、(2)の方法を主に取っている。『鳥の言葉』は、15章を除けば、『神の書』と同様に「عشق ('eshq)」と他の愛に関する単語が共に使用されることから(2)の方法に近い。先行研究によって、アッタールのテーマとして「愛」と「苦痛」が主題として最も扱われてきたことが知られてきたが、各テキストにおける「神への愛」の表現方法は明らかにされてこなかった。しかし、本論文により「神への愛」の表現方法はテキストによってバリエーションが持たされていることが明らかになった。さらに、アッタールにおいて「عقل ('aql)」が否定的に使われているという主張は『災厄の書』においては当てはまらないことも明らかにした。

第5章では、アッタール以外の詩人のテキストを対象に第4章と同様の手法で分析を行った。その結果、「神への愛」の観点から、各テキストは「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の使用手法、愛に関する言葉の共起関係から分類できることが明らかになった。サナーイー『真理の園』やルーミー『精神的マスマヴィー』においては、アッタールのマスマヴィー同様に、「عقل ('aql)」を「عشق ('eshq)」と対比させて論じる箇所がある。一方で、これら二つのテキストでは、スーフイズムにおける「عقل ('aql)」の役割を「عشق ('eshq)」なしで論じている箇所がアッタールのテキストと比較すると圧倒的に多い。また、これらの二テキストにおいて、アッタールのテキストと比較して、「عقل ('aql)」が肯定的に扱われる頻

度が高いことも明らかになった。一方、『アンヴァリー詩集』では、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」と共起することが少なく、『ハーカーニー詩集』では比較的多いことから、「عشق ('eshq)」と「عقل ('aql)」の用い方において、『アンヴァリー詩集』より『ハーカーニー詩集』の方がアッタールの表現方法と類似することも明らかになった。さらに、愛に関する単語の共起関係の分析から、苦痛を表す比喩の表現においてアッタール、アンヴァリー、ハーカーニーのテキストは共通しており、ペルシア詩の中で苦痛に関して共通の表現が用いられている可能性が高いことも明らかになった。そして、主成分分析と階層的クラスタ分析の結果から、アッタールのマスナヴィーで書かれたテキストは、アッタールの『アッタール詩集』よりも、同じマスナヴィー体で書かれた『真理の園』、『精神的マスナヴィー』と相対的に近い特徴を有することも明らかになった。まとめると、アッタールのマスナヴィーと『真理の園』、『精神的マスナヴィー』が単語の使用方法において類似していること、一方で、これらのテキストは「عقل ('aql)」の用い方において差異があること、『アンヴァリー詩集』と『ハーカーニー詩集』が苦痛を表す比喩の表現において類似していることが明らかになった。この結果から、アッタールとサナーイーとルーミーのテキストは共通の伝統に属しつつ、思想上において「عقل ('aql)」の役割について異なる役割を与えていることが示唆される。一方で、アッタールとサナーイーとルーミーと連なる伝統に属さないアンヴァリーとハーカーニーにおいても、愛を苦痛で表現する方法自体は類似しており、愛と苦痛の関係についての表現はペルシア詩全般に共通してあったことを示唆している。

第6章では、第4章と第5章の分析結果から、本論文の分析で明確にしたことを四点でまとめ考察した。すなわち、1. アッタールのテキストと、『真理の園』、『精神的マスナヴィー』の類似点と相違点、2. アッタールのテキストと、アンヴァリーの『アンヴァリー詩集』、ハーカーニーの『ハーカーニー詩集』との類似点と相違点、3. アッタールの真作と偽作の類似点と相違点、4. アッタールのテキスト間における類似点と相違点である。1.は、テキスト全体の特徴において、『真理の園』と『精神的マスナヴィー』はアッタールのマスナヴィーと近いが、詩中における「عقل ('aql)」の与えられた役割が異なる点を指摘した。アッタールのテキストと異なり、『真理の園』は「عقل ('aql)」を「عشق ('eshq)」と一緒に登場させるだけでなく、独立して登場させ、「عقل ('aql)」自体に一定の肯定的な役割を与えていること、『精神的マスナヴィー』においては、サナーイーの『真理の園』同様に、「عقل ('aql)」と「عشق ('eshq)」は別々の箇所が登場し「عقل ('aql)」に詳細な種類(全体的な理性、部分的な理性)を設けることが異なることを示した。2.は、『アンヴァリー詩集』、『ハーカーニー詩集』はアッタールのマスナヴィーのテキストと特徴を異にしつつ、『アッタールの詩集』により近い単語の用い方の特徴を持っている点を指摘した。また、『アンヴァリー詩集』の分析からペルシア詩の中で、苦痛に関して、共通の表現が用いられている可能性が高く、『ハーカーニー詩集』から愛と理性の論じ方もスーフイズムだけではなく、ペルシア詩に共通してあった可能性があることも示唆した。3.は、アッタールのテキストにおいて、真作と偽作は明確にキャドキャニーが指摘した形で分類できることを指摘した。さらに、主成分分析の結果から、偽作においても『忠言の書』と『驚異の顕現』、『ヒーラージュの書』の二つのテキスト群が分類されることも示した。「اشک (ashk)」を偽作では、単語として用いられないのも真作にない点であり、『ヒーラージュの書』以外では、愛に関する単語の用いられ方も異なることも示した。4.は、①愛に関する単語同士の共起関係(特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係)、②愛に関する単語の相対頻度と用い方、③「神への愛」を表現する方法、④「神への愛」における「عقل ('aql)」の位置づけからテキストごとに真作においても異なることを指摘した。この分析結果によって、先行研究では不明瞭であった、テキストごとの「神への愛」に伴う苦痛を表す単語の用い方を明らかにした。さらに、苦痛を表す単語同士のみでなく、それらの単語が他の愛や苦しみを表す単語と密接に関係することも明らかにした。

本論文の意義

本論文で設定した学術的問いは以下の2点であった。

1. 量的な分析は、定説にどこまで根拠を与えることができるか。
2. 量的な分析は、従来の方法では解明できないことを、明らかにすることができるか。

1.に関して、アッターールの真作と偽作の問題に対して、本論文では定量的な分析によって、明確に根拠を与えた。特に、長らく真作として扱われてきて、シャーフィーイー・キヤドキャニーによって偽作と分類された『忠言の書』に対して、定量的に偽作と判断できる根拠を与えることに成功した。主成分分析、階層的クラスター分析、頻度分析、愛に関する単語の共起ネットワークのどの分析の結果から、明らかに『忠言の書』は他のアッターールのテキストと異なる。

さらに、この『忠言の書』が、本論文で取り扱った他の偽作、『驚異の顕現』と『ヒーラージュの書』と明らかに異なる特徴を有すること、これらの作者と別の作者によって書かれた可能性が高いことも同様の分析によって示した。

2.に関しては、「神への愛」とそれに関する苦痛を表す単語がアッターールのテキストの中において、どのような類似点と差異があるかを明らかにすることで答えた。「神への愛」と苦痛に関する単語は先行研究においてもアッターールにおいて重要であることは指摘されていた。そして、「神への愛」とそれに伴う苦痛もアッターールの研究において論じられてきた主要なテーマである。しかし、どの「神への愛」や苦痛に関する単語が各テキストにおいてどのように用いられてきて、テキスト毎にどのような特徴の差異があるのか明らかにはされてこなかった。従来の定性的な分析によっては、具体的にどの単語がどの単語と共起するか、特定の単語の割合や頻度を全体と章ごとに把握するのは、計算機を使わない人間の力だけでは困難だからである。本論文では、テキストマイニングの技術を応用したソフトウェアを使うことによって、章と全体の単語の頻度、共起する単語を明らかにした。その結果、「愛に関する単語同士の共起関係（特に、「خون (khūn)」と他の愛に関する単語との共起関係）、②愛に関する単語の相対頻度、③「神への愛」を表現する場合の愛に関する単語の使い方、④「神への愛」における「عقل ('aql)」の位置づけによって、各アッターールのテキストの特徴を分類できることも示した。

本論文は、上述したようにテキストマイニングを用いた定量的な分析によって、真作と偽作の研究に対して、有力な判断材料を提供した。また、「神への愛」とそれに伴う苦痛の表現方法において、単語の用いられ方や組み合わせを明らかにすることによって、アッターールのテキスト間の差異も明らかにした。さらに、ペルシア語文化圏における他の詩人との比較を通じて、アッターールと同じペルシア神秘主義詩人であるサナーイーやルーミーとの差異、反対に、アンヴァリーとハーカーニーとの共通点も明らかにした。以上の結果から、本論文は12～13世紀のペルシア詩研究において有効な結果を残したと考える。さらに、本論文の意義として、ペルシア語の形態素解析ツールの開発がある。このツールは将来的にオープンソースで公開することで、誰でもすぐ導入ができ、研究の目的に合わせてツール自体を改良できるようにする。ペルシア語の詩の言語コーパスがないため、ツール自体が現在発展途上であり、詩で使われる言葉に完全に合致するものは存在しない。故に、改良の余地はあるが、テキストマイニングを誰でも気軽に使えるようにすることで、ペルシア語を用いた研究全体の発展に寄与できるという点において意義あるものであると考える。

参考文献表

外国語文献

- Abd-ollāh, Ṭolū'ī Āzar, Kūshesh Raḥīm and Šamadī 'Alī. "Rīkht-shenāsī-ye Tamsīl-hā-ye 'Erfānī bā Takye bar Ash'ār-e Sanā'ī, 'Aṭṭār va Moulavī." *Zabān va Adab-e Fārsī (Nashriye-ye Dānesh-kade-ye Adabiyāt va 'Olūm-e Ensānī-ye Dāneshgāh-e Tabriz)*, vol.69, no. 233, 2016, pp. 55-69.
- Abdolreżā, Ḥayātī, Możaffārī 'Alī-reżā and Ṭolū'ī Āzar Abd-ollāh. "Revāyat-shenāsī-ye Chand Tamsīl-e Moshtarak dar Āsār-e Sanāyī va 'Aṭṭār va Moulānā bar Pāye-ye Nazariye-ye Zherār Zhenet." *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e 'Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.13, no.1, 2019, pp. 1-38.
- Aḥmad, Reżā and Baṭlāb Akbar-ābādī Moḥsen. "*Manteq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār va Manteq Gofṭgūyī.*" *Matn-e Pazhūhī-ye Adabī (Zabān va Adab-e Fārsī)*, vol.14, no.46, 2010, pp. 19-46.
- Aḥmad, Reżāyī. "Taḥlīl-e Dīdgāh-hā-ye 'Aṭṭār-e darbāre-ye She'r va Moqāyese-ye Ānhā bā Ārāy-e Montaqedān-e Adabī." *Majalle-ye Takhaşşoşī-ye Zabān va Adabiyāt-e Dānesh-kade-ye Adabiyāt va 'Olūm-e Ensānī-ye Mashhad (Dānesh-kade-ye Adabiyāt va 'Olūm-e Ensānī (Mashhad))*, vol. 40, no. 3, 2007, pp. 57-76.
- Akalın, Berrin Uyar. "The Poets Who Wrote and Translated *Mantiku't Ṭayr* in Turkish Literature." *International Journal of Central Asian Studies*, vol.10, no.1, 2005, pp. 167-179.
- 'Alī, 'Askarī. "Ta'bīrāt va eştelāḥāt-e Moulānā az 'aql dar *Maşnavī Ma'navī.*" *Peik-e nūr: 'olūm-e ensān*, vol.3, no.5, 2007 or 2008, pp. 33-45.
- 'Alī-reżā, Możaffariyān. "Vizhegī-hā-ye Bonyādī-ye Sabk-hā-ye She'r-e Fārsī." *Tārīkh-e Adabiyāt (Pazhūhesh-nāme-ye 'Olūm-e Ensānī)*, no.71/3, 2012, pp. 265-292.
- Allāh, 'Alī Pūr Ne'mat, "Dard-e Ārefāne dar Āsār-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī." *'Erfānīyāt dar Adab-e Fārsī (Adab va 'Erfān (Adabestān))*, vol.52, no.2, 2010, pp. 62-79.
- al-Sādāt, Ghafūrī 'Effat, Pīrūz Gholām-reżā, Ḥaq-jū Siyābash and Hāshemī Sohīlā. "Naqsh-e 'Onsor-e Gofṭ va Gū dar Rābeṭe-ye Morīd va Morād bar Mabnāy-e Nazariye-ye Sāzande-gerā'ī dar *Manteq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār.*" *Adabiyāt-e 'Erfānī va Oşṭüre-shenākhtī (Zabān va Adabiyāt-e Fārsī)*, vol.12, no.45, 2016, pp. 155-187.
- al-Sādāt, Kār-āmūz Faṭḥīye. "Dard, 'Aṭṭār-e She'r-e 'Aṭṭār (Bar-rasī-ye Touşīfī-ye Mafhūmī-ye Dard dar *Manteq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī*, bā Erā'e-ye Namūne-hāyī Chand az Sāyer-e Āsār-e Vey)." *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no. 47, 2019, pp. 249-270.
- Anvar, Zīyāyī. "Taḳābol-e 'aql va 'eshq dar *Maşnavī-ye Moulānā va Ḥadīqe-ye Sanā'ī.*" *Andīshe-hā-ye Adabī*, vol.2, no.42, 2011 or 2012, pp. 119-140.
- 'Arūzī, Nīzāmī. *Kollīyāt-e Chahār-maqāleh*. Edited by Moḥammad Qazvīnī: Tehrān: Enteshārāt-e Eshrāqī, 1948 or 1949.
- Aslānī, Akram and Esmā'īlī Mahdī. "Finding Frequent Patterns in *Holy Quran* Using Text Mining." *Signal and Data Processing*, vol.15, no.3, 2018, pp.89-100.
- 'Aṭṭīye, Mosherī Fard, Ghobādī Ḥossein-'alī, Ḥosseinī Maryam and Nīkūyī 'Alī Reżā. "Kār-kard-e Tażād va Taḳābol dar Zībāyī-shenāsī Taşāvīr *Ghazaliyāt-e 'Aṭṭār*, bar Asās-e Ārā'-e Jorjānī." *Pazhūhesh-e Zabān va Adabiyāt-e Fārsī*, no.41, 2016, pp. 51-81.
- 'Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Manteq al-Ṭayr*. Edited by Shāfī'ī Kadkanī. Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014 or 2015.
- . *Manteq al-Ṭayr*. Edited by Şādeq Gouharīn. Tehrān: Sherkat-e Enteshārāt-e 'Elmī va Farhangī, 2015.
- 'Aufī, Muḥammad. *Lobāb al-Albāb*. Edited by E.G. Browne. 2vols. London: E. J. Brill, 1903.
- Āzāde, Aqrānī Argī and Mashhūr Parvīn Dakht. "Ānimāy-e Ma'shūq dar Ghazal-hāy-e 'Aṭṭār bar Pāyah-ye Naqd-e Kohan-e Olgūy-e Yūnq." *Pazhūhesh-nāme-ye Adab-e Ghanāyī (Zabān va Adabiyāt-e Fārsī)*, vol.16, no.30, 2018, pp. 9-30.
- Āzar, Amīr Ismā'īl. *Ilāhī-nāme-ye 'Aṭṭār: Dar Nazariye-ye Neshāne-ye Ma'nā-shenāsī-ye Ālzhīr Goremas va Shakl-shenāsī-ye Zherār Zhenet*. Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2014.
- Bakhtin, Mikhail. *Problems of Dostoevsky's Poetics*. Edited and translated by Carl Emerson. Minnesota: Minnesota Press, 1984.
- Bartes, Roland. *S/Z : Essai*. Paris: Seuil, 1970.

- Be-'llāh, Abū Moḥammad 'Arīf. "Persian." *Banglapedia*.
<https://en.banglapedia.org/index.php?title=Persian> (accessed December 1, 2021).
- Booth, Wayne C.. *The Rhetoric of Fiction*, Chicago: Chicago Press, 1983.
- Boyle, John Andrew. "Popular Literature and Folklore in 'Aṭṭār's Mathnavīs." *Colloquio italo-iraniano sul poeta mistico Fariduddin 'Aṭṭār*, 1978, pp. 57–70.
- Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1947.
- Brujin, J.T.P De. "The Preaching Poet: Three Homiletic Poem by Farīd al-Dīn 'Aṭṭār." *Edeviyât*, vol. 9, 1998, pp. 85-100.
- Bustanov, Alfrid. "Speaking 'Bukharan': The Circulation of Persian Texts in Imperial Russia." In Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*. Oakland: University of California Press, 2019, pp. 193-206.
- Casari, Mario. "India xiv. Persian Literature." *Encyclopaedia Iranica*.
<https://iranicaonline.org/articles/india-xiv-persian-literature-in-india> (accessed December 1, 2021).
- Chenderoff, Leili Anva. "Without Us, from Us We're Safe: Self and Selflessness in the *Dīvān* of 'Aṭṭār." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 241-254.
- Chopra, P.N.. "The Impact of Islam in India." In K.K. Kusuman (ed.), *A Panorama of Indian Culture*. New Delhi: K. M. Mittal, 1990, pp. 81-93.
- Dabāshī, Ḥamīd. "Persian Sufism during the Seljuk Period." In Leonard Lewisohn (ed.), *The Heritage of Sufism*. Vol.1, *Classical Persian Sufism from Its Origins to Rumi (700-1300)*. Oxford: Oneworld, 1999, pp. 137-174.
- Davis, Dick. "The Journey as Paradigm: Literal and Metaphorical Travel in 'Aṭṭār's *Manṭiq al-Ṭayr*." *Edeviyât*, vol.NS4, 1993, pp. 173-183.
- Dekhodā, 'Alī-akbar. "Ahl-e Del." *Loghat-nāme-ye Dekhodā*. Edited by Moḥammad Mo'īn and Ja'far Shahīdī, Tehrān: Mo'assese-ye Enteshārāt-e va Chāp-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1998 or 1999, p. 3667.
- . "Hīlāj." *Loghat-nāme-ye Dekhodā*. Edited by Moḥammad Mo'īn and Ja'far Shahīdī, Tehrān: Mo'assese-ye Enteshārāt-e va Chāp-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1998 or 1999, p. 23609.
- Devlin, Jacob, Ming-Wei Changand, Kenton Lee and Kristina Toutanov. "BERT: Pre-training of Deep Bidirectional Transformers for Language Understanding." *Proceedings of the 2019 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies*, vol.1, Association for Computational Linguistics, 2019, pp. 4171-4186.
- D'Hubert, Thibaut. "Persian at the Court or in the Village? The Elusive Presence of Persian in Bengal." In Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*. Oakland: University of California Press, 2019, pp. 93-112.
- Dokht, Mashhūr Parvīn. "Māh va Khorshīd dar She'r-e Khāqānī," *Adabīyāt Fārsī ('Olūm-e Ensānī al-Zahrā)*, vol.21, no.5, 2009 or 2010, pp. 93-112.
- Eaton, Richard M., N. H. 'Onsorī and S. H. Qāsemī. "Bengal." *Encyclopaedia Iranica*.
<https://iranicaonline.org/articles/bengal> (accessed December 1, 2021).
- EIr. "Chinese-Iranian Relations viii. Persian Language and Literature in China." *Encyclopaedia Iranica*,
<https://iranicaonline.org/articles/chinese-iranian-viii> (accessed December 1, 2021).
- Ernst, Carl W.. "Tasawwuf (Sufism)". In Richard C. Martin, Said Amir Arjomand, Marcia Hermansen, Abdulkader Tayob, Rochelle Davis and John Obert Voll (ed.), *Encyclopedia of Islam and the Muslim World*. 2 vols. New York: Macmillan Reference USA, 2004.
- Esmā'īl, Āzer, 'Abāsī 'Alī and Āzād Vīdā. "Bar-rasī-ye Kār-kard-e Ravāyī-ye Do Ḥekāyat az *Ilāhī-nāme-ye 'Aṭṭār* bar Asās-e Naẓariye-ye Goremas va Zhenet." *Jostār-hā-ye Zabānī*, vol.5, no.4, 2014, pp. 17-43.
- Faridah, Nor and Abdul Manaf. "The Influence of Farīd al-Dīn 'Aṭṭār's *Manṭiq al-Ṭayr* (*The Conference of the Birds*) on Western Writers: From Chaucer to Peter Brook." *Islamic Quarterly: A Review of Islamic Culture*, vol.46, no.iii, 2002, pp. 247-258.
- Fāteme, Majīdī and Fāteme, Abvīsānī, "Eshkāl-e Taqābol-hā-ye 'Erfānī dar Ghazaliyāt-e 'Aṭṭār." *Pazhūhesh-nāme-ye 'Erfān*, vol. 11 Number 21, 2019, pp. 169-186.
- Fāteme, Moḥsenī Gardgūhī. "Taqābol-hā-ye Do-gāne dar Ghazaliyāt-e 'Aṭṭār." *Sabk-shenāsī-ye Nazm*

- va *Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.10, no.2, 2017, pp. 249-267.
- Feuillebois-Pierunbek, Eve. "Mystical Quest and Oneness in the *Mukhtār-nāme* Attributed to Farīd al-Dīn 'Aṭṭār." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackleton (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 309-329.
- Ford, Graeme. "The Uses of Persian in Imperial China: The Translation Practices of the Great Ming." In Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*. Oakland: University of California Press, 2019, pp. 113-130.
- Forūzānfar, Badī' al-Zamān. *Sharḥ-e Aḥvāl va Naqd va Tahlīl-e Āṣār-e Sheikh Farīd al-Dīn 'Aṭṭār Nīshāpūrī*. Tehrān: Enteshārāt-e Anjoman-e Āṣār va Mofākher-e Farhang, 2018.
- Green, Nile. "Introduction." In Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*. Oakland: University of California Press, 2019, pp. 1-72.
- Hambly, Gavin R. G. and Catherine B. Asher. "Delhi Sultanate." *Encyclopaedia Iranica*. <https://iranicaonline.org/articles/delhi-sultanate> (accessed December 1, 2021).
- Ḥamīd, Javāheriyān and Āzar-peivand Ḥosein. "Gerye dar motūn-e naẓm-e 'erfān (Sanā'ī, 'Aṭṭār, va Moulānā)." *Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.3, no.14, 2021 or 2022, pp. 1-17.
- Hodgson, Marshall G.S.. "The Bloom of Persian Literature Culture and Its Time." In *The Venture of Islam. Vol.2, The Expansion of Islam in the Middle Period*. Chicago: The University of Chicago Press, 1974, pp. 293-315.
- Homāyī, Jalāl al-Dīn. *Fonūn-e Balāghat va Ṣanā'at-e Adabī*. Tehrān: Ahūrā, 2010.
- Ḥosseīn, Karamī Moḥammad and Dehqānī Nāhīd. "Rūy-kard-e Do-gūne-ye Anvarī be 'Erfān va Taṣavvof." *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāt-e Fārsī*, no.37, 2015 or 2016, pp. 27-53.
- Ibrāhīm, Salīmī Kūchī and Qāsemī Eṣfahānī Nīkū. "Bar-rasī-ye Bīnāmtanī-ye Haft Vādī-ye Eshq-e *Manteq al-Ṭayr*-e 'Aṭṭār dar 'Mard Nīm-tanah va Mosāferash' az Āndre Shadīd." *Pazhūhesh-e Adabīyāt-e Mo'āṣer-e Jahān (Pazhūhesh-e Zabān-hā-ye Khārejī)*, vol.24, no.2, 2019, pp. 411-431.
- Imān, Zakariyāyī Kermānī. "Jost va Jūy-e Haft Vādī-ye 'Eshq-e 'Aṭṭār dar Banāy-e Khāne-hā-ye Khodā." *Pazhūhesh-e Zabān va Adabīyāt-e Fārsī*, no.7, 2006, pp. 1-20.
- Inan, Murat Umut. "Imperial Ambitions, Mystical Aspirations: Persian Learning in the Ottoman World." In Nile Green (ed.), *The Persianate World: The Frontiers of a Eurasian Lingua Franca*. Oakland: University of California Press, 2019, pp. 75-92.
- Jahānbaksh, Jouyā. "Textual Correction Norm of *Manteqhotteyr*." Translated by Esmā'īl Salāmī, *An Anthology of Iranian Studies*, vol.6, 2007, pp. 66-102.
- Jalīlī Taqviyān Moṣṭafā. "'Zabān-e 'Elm' va 'Zabān-e Ma' refat' dar Naẓar-gāh-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī (Naqd-e Yek Khānesh)." *Naqd-e Adabī*, vol.6, no.23, 2013, pp. 171-190.
- Jāmī, Nūr-al-dīn. *Nafahāt al-Ons men Ḥazrat al-Qods*. Tehrān, 1958 or 1959.
- Jamshīd, Jalālī Shījānī. "'Aql va 'Eshq dar Naẓar-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī va Najm al-Dīn Rāzī." *Khodāyī Nāme*, vol. 1, no.1, 2012, pp. 41-61.
- Johanson, Lars. "Historical, Cultural and Linguistic Aspects of Turkish-Iranian Contiguity." In Lars Johanson and Christiane Bulut (ed.), *Turkic-Iranian Contact Areas: Historical and Linguistic Aspects*. Harrassowitz Verlag, 2006, pp. 1-13.
- Kadkanī, Shafī'ī. "Persian Literature (Belles-Letters) from the Time of Jāmī to the Present Day." In G. Morrison (ed.), *History of Persian Literature from the Beginning of the Islamic Period to the Present Day*. Leiden: E. J. Brill, 1981, pp. 133-206.
- . *Mūsīqī-ye She'r*. Tehrān: Nashr-e Āge, 2010.
- . *Qalandariye dar Tārīkh: Degar-dīsīhā-ye Yek Īde'olozhī*. Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2007.
- . *Zabān-e She'r dar Naṣr-e Sūfiye*. Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2013.
- Kamada, Yumiko. "A Taste for Intricacy: An Illustrated Manuscript of *Manteq al-Ṭayr* in the Metropolitan Museum of Art." *Orient: Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, vol.45, 2010, pp. 129-175.
- Kāvūs, Ḥasanlī and Mojarrad Sānā. "Sabk-shenāsī-ye Neshāne-hā dar Panj Ḥekāyat az *Mušibat-nāme-ye 'Aṭṭār Nīshāpūrī*," *She'r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: 'Olūm-e Ejtemā'ī va Ensānī)*, vol.4, no.2, 2012, pp. 49-76.
- Keshāvarz, Fāteme. "Flight of the Birds: The Poetic Animating the Spiritual in 'Aṭṭār's *Manteq al-Ṭayr*." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackleton (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The*

- Art of Spiritual Flight*. London : The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 112-134.
- Klíma, Otakar. "Avesta. Ancient Persian Inscriptions. Middle Persian Literature." In Karl Jan (ed.), *History of Iranian Literature*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1968, pp. 1-68.
- Kürs, Karīm Pasandī. "Mahfūm-e Dard az Dīdgāh-e 'Aṭṭār." *'Erfān-e Eslāmī (Adabīyāt va 'Erfān)*, vol.10, no.37, 2013, pp. 81-94.
- Landolt, Herman. "'Aṭṭār, Sufism and Ismailism." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 3-26.
- Lazard, G.. "Abu'l-Mo'ayyad BalḲī." *Encyclopaedia Iranica*. <https://iranicaonline.org/articles/abulmoayyad-balki> (accessed December 1, 2021).
- Leilā, 'Adl-parvar, Safar 'Alīzāde Mojtābī and Pūrrastam Roqayye. "Neshāne-shenāsī-ye *Khosrou-nāme*-ye 'Aṭṭār Nīshāpūrī." *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 172-186.
- Lewis, Franklin. "Sexual Occidentation: The Politics of Conversion, Christian-love and Boy-love in 'Aṭṭār." *Iranian Studies*, vol.42, no.5, 2009, pp. 693-723.
- Lewisohn, Leonard. "Sufi Symbolism in the Persian Hermeneutic Tradition: Reconstructing the Pagoda of Esoteric Poetics." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 255-308.
- Losensky, Paul E.. "Šā'eb' Tabrizi." *Encyclopaedia Iranica*. <https://iranicaonline.org/articles/saeb-tabrizi> (accessed December 1, 2021).
- Lubis, H.M. Bukhari. "Farid Al-Din 'Attar and Scholarly/Literary Works in Malaysia: Brief Remarks." *The Gombak Review*, vol.1, no.2, 1996, pp. 133-142.
- Lucian, Stone. "Blessed Perplexity: The Topos of Ḥayrat in 'Aṭṭār's *Manṭeq al-Ṭayr*." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *'Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 95-111.
- Mahmūdī, Moḥammad Rezā and 'Abāsārī-zāde 'Alī. "How Statistics and Text Mining can be applied to Literary Studies?." *Digital Scholarship in the Humanities*, vol.34, 2019, pp. 536-541.
- Majīd, 'Ābedī. "Dard-e 'Aṭṭār (Negāhī be Dar va Chashm-andāz-hā-ye Lafzī va Ma'navī Ān dar Āsār-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī)." *Adabīyāt-e Fārsī*, vol.5, no.24, 2009, pp. 36-51.
- Marek, Jan. "Persian literature in India." *History of Iranian Literature*. In Karl Jan (ed.), *History of Iranian Literature*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1968, pp. 711-734.
- Maryam, Rūzātiyān Seyyed and Madanī Fāṭeme al-Sādā. "Bar-rasī-ye Beinā-matnī-ye Ḥekāyat-e Moshtarak-e *Tazkere al-Ouliyā'* va *Manṭeq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī*." *Adab-e Fārsī (Dānesh-kade-ye Adabīyāt va 'Olūm-e Ensānī, Dāneshgā-ye Tehrān)*, vol. 7, no. 1, 2017, pp. 95-112.
- . "Bar-rasī va Muqāyese-ye Janbe-hā-ye Ta'limī Do Mahfūm-e Ensāf va 'Eshq dar *Tazkere al-Ouliyā'* va *Manṭeq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār*." *Pazhūhesh-e Adabīyāt-e Nāme-ye Adabīyāt-e Ta'limī*, vol.9, no.33, 2017, pp. 61-90.
- Masrūr, Mokhtārī. "'Ābeshkhor-hā-ye Fekrī Shāh Dā'ī Shīrāzī dar Sorūdān-e Masnavī *Chahār Chaman* (Radd-e Pāy-e Haft Shahr-e 'Eshq-e 'Aṭṭār dar *Chahār Chaman*)." *'Erfān-e Eslāmī (Adiyān va 'Erfān)*, vol.14, no.53, 2017, pp. 57-81.
- Mas'ūd, Rouḥānī and 'Enāyatī Qādīklāyī Moḥammad. "Taḳābol-hā-ye Do-gānah dar Ghazaliyāt-e 'Aṭṭār Nīshāpūrī." *Zabān va Adabīyāt-e Fārsī (Majalle-ye Dāneshkade-ye Adabīyāt va 'Olūm-e Ensānī Dāneshgāh-e Khārazmī)*, vol.24, no.81, 2016, pp. 201-221.
- Mas'ūd, Rouḥānī and Shūbkalāyī 'Alī Akbar. "Taḥlīl-e Dāstān-e 'Sheyṭh Ṣan'ān' *Manṭeq al-Ṭayr-e 'Aṭṭār* bar Asās-e Nazariye-ye Koneshī Goremās." *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e 'Erfānī (Gouhar-e Gūyā)*, vol.6, no.2, 2012, pp. 89-112.
- Ma'sūme, Rūḥānī Fard, Māḥouzī Mahdī and Oujāq 'Alīzāde Shahīn. "Taḥlīl-e Maqām-e Toubē dar Ḥekāyat-e Pīr-zan va Malekshāh-e *Muṣibat-nāme*-ye 'Aṭṭār' bar Asās-e Kohan-e Olgūy-e 'Bāz-gasht-e Qahramān' Jouzef Kampbel." *'Erfāne- Eslāmī (Adiyān va 'Erfān)*, vol.14, no.53, 2017, pp. 201-230.
- Meier, Fritz. "Der Geistmensch bei dem Persischen Dichter 'Aṭṭār." *Eranos Jahrbuch*, vol.13, 1945, 283-353.
- Moḥsen, Batlāb Akbar-ābādī and Razī Aḥmad. "Kār-kard-e Ravā'ī Neshāne-hā dar Ḥekāyat-e Rābe'e az *Ilāhī-nāme*-ye 'Aṭṭār." *Matn-shenāsī-ye Adab-e Fārsī (Majalle-ye Dānesh-kade-ye Adabīyāt va 'Olūm-e Ensānī-ye Esfahān)*, vol.49, no.1, 2013, pp. 13-27.

- Mohsen, Mohammadī Feshārākī and Khodā-dādī Faẓl Allāh. “Maqāyese-ye Sākhtār-e Dāstān dar Do Athar-e ‘Atṭār bā Takyah bar Do Olgūy-e Jadīd-e Sākhtār-gerā’ī Dāstān-nevīsī.” *Jostār-hā-ye Zabānī*, vol.4, no.3, 2013, pp. 179-202.
- Nafīsī, Sa’īd. *Joste-jū dar Ahvār va Āsār-e Farīd al-Dīn ‘Atṭār Nīshāpūrī*. Tehrān: Ketān-forūshī va Chāp-khāne-ye Aqbāl, 1942.
- Nāṣer, ‘Alī Zāde Khayyāt and Salīmīyān Sūnā. “Kānūn-e Revāyat dar *Ilāhī-nāme-ye ‘Atṭār* bar Asās-e Nazārīye-ye Zherār Zhenet.” *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar-e Gūyā)*, vol. 6, no. 2, 2012, pp. 113-140.
- Naṣr, Seyyed Ḥosseīn. “Some Observations on the Place of ‘Atṭār within the Sufī Tradition.” *Colloquio italo-iraniano sul poeta mistico Farīduddīn ‘Atṭār*, 1978, pp. 5-20.
- Neale, Harry S.. “The Zoroastrian in ‘Atṭār’s *Tazkere al-Ouliya’*.” *Middle Eastern Literature*, vol. 12, no.2, 2009, pp.137-156.
- Parvīn, Golīzāde and Gobānchī Nasrīn. “Vā-kāvī Moqāyese-ye Kohan-e Olgūy-e Pīr-dānā dar Se Manzūme-ye *Manṭeq al-Ṭayr*, *Muṣibat-nāme* va *Ilāhī-nāme-ye ‘Atṭār* (bā Bayān-e Taqābol Pīr-dānā bā Mahfūm-e Ensān Kāmel dar ‘Erfān va Falsafah.” *She’r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: ‘Olūm-e Ejtemā’ī va Ensānī)*, vol.11, no.3, 2019, pp. 105-128.
- Paul, Ludwig. “Persian Language i. Early New Persian.” *Encyclopaedia Iranica*. <https://iranicaonline.org/articles/persian-language-1-early-new-persian> (accessed December 1, 2021).
- Pūrnāmdāriyān, Taqī. *Dīdār bā Sīmorgh: She’r va ‘Erfān va Andīshe-hā-ye ‘Atṭār*. Tehrān: Pazhūheshgāh-e ‘olūm-e ensānī va moṭālā’āt-e farhangī, 2011.
- . “Structural Study of ‘Atṭār’s Tales.” *An Anthology of Iranian Studies/Majmū’e-ye Maqālāt-e Moṭā’āt-e Īrānī*, vol.1, 1991, pp. 1-31.
- Ra’īs, Eḥsān. “How Accurate is the Ascription of *Khan al-Ekhwan* to Naser Khosrow Qubadiani?.” *Persian Literature (Faculty of Literature and Humanities)*, vol.8, no.22, 2019, pp. 121-139.
- Ra’īs, Eḥsān and Ḥasan Maḥbūb Farīmānī. “Authorship Attribution in Historical and Literary Texts by a Deep Learning Classifier.” *Journal of Applied Intelligent Systems & Information*, vol. 1, 2020, pp. 118-127.
- Rezā, Enzābī Nezhād and Hejāzī Behjat al-Sādāt. “Aṣl-e Senkhīyat-e dar ‘Erfān va Hamānand-sāzī dar Ravān-shenāsī (bā Gozharī dar Andīshah-hāy ‘Atṭār va Moulavī).” *Nahrīye-ye Dāneshkade-ye Adabīyāt va ‘Olūm-e Ensānī (Tabrīz)*, vol.48, no.197, 2005, pp. 35-54.
- Rezā, Rasūlī Moḥammad and Kīvmarsī Parīsā. “Bar-rasī-ye Mafhūm-e ‘Eshq az Dīdgāh-e Robert Sternberg dar Ḥekāyat-e Sheykh Ṣan’ān ‘Atṭār va Namāyesh-name-ye Fāntazī Sheykh Ṣan’ān Moḥammad Ḥoseīn Meymandī Nezhād.” *Adabīyāt-e ‘Erfānī va Oṣṭūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e Fārsī)*, vol.15, no. 54, 2019, pp. 109-133.
- Rezāyī, Sohrāb and Nasīm Kāshānīyān. “A Stylometric Analysis of Iranian Poets.” *Theory and Practice in Language Studies*, vol. 7, no.1, 2017, pp. 55-64.
- Ritter, Hellmut. *Das Meer der Seele: Mensch, Welt und Gott in den Geschichten des Farīd al-Dīn ‘Atṭār*. Leiden: E. J. Brill, 1955.
- . “Philologika, X. Farīd al-Dīn ‘Atṭār III.” *Der Islam* 25, vol.25, no.2, 1938, pp. 134-173.
- . “Philologika, XV. Farīd al-Dīn ‘Atṭār III.” *Oriens*, vol.12, no.1/2, 1959, pp. 1-88.
- Rūstā, Jamshīd. “Bar-rasī-ye Zamīne-hā-ye Tārīkhī-ye Vorūd-e Zabān va Adab-e Fārsī be Qalam-rou-ye Selājeqe-ye Rūm.” *Adab va Zabān*, vol.18, no. 34, 2015, pp. 103-126.
- Rypka, Jan. “History of Persian Literature up to the Beginning of the 20th Century.” In Karl Jan (ed.), *History of Iranian Literature*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1968, pp. 69-351.
- . “Persian Literature of the 20th Century.” In Karl Jan (ed.), *History of Iranian Literature*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1968, pp. 353-418.
- Sabīke, Esfāndīyār, Ḥasan Ābādī Maḥmūd and Sha’bān Zāde Maryam. “Etteḥād-e Taqābol-hā-ye Do-gāne Dar Sāyah-e ‘Tabaddol’ va ‘Tasāvī’ dar Maṣnavī *Ilāhī-nāme-ye ‘Atṭār*.” *Adabīyāt-e ‘Erfānī va Oṣṭūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e Fārsī)*, vol.14, no.53, 2019, pp. 83-119.
- . “Estefāde-ye Vīzhe-ye ‘Atṭār az Taqābol-hā-ye Do-gāne va Tafāvot-e Ān bā Mafhūm-e Shenākhte shode-ye Taqābol-hā-ye Do-gāne dar Olgūy Gharbī va Balāghat-e Sonnatī.” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.11, no.4, 2018, pp. 43-64.
- Sabīke, Esfāndīyār. “‘Onsor-e Ghāleb-e ‘Dard’ dar *Muṣibat-nāme*, Yekī az Mokhtaṣṣāt-e Sabkī ‘Erfān-e ‘Atṭār.” *Sabk-shenāsī-ye Naẓm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.3, no.4, 2010, pp. 207-228.

- Sa'īd, Qashqāyī. "Bar-rasī Kohan-e Olgūy-e Sāye va Entebāq-e Ān bā Nafs dar Masnavī-hāy-e 'Atṭār." *Adabīyāt-e 'Erfānī va Oštūre-shenākhtī (Zabān va Adabīyāt-e Fārsī)*, vol.7, no.25, 2011, 143-166.
- Sakīne, Rasmī and Hāshimī 'Alī 'Arqatū Seyyed. "Pīvand-e 'Eshq va Zībāyī dar Āsār-e 'Atṭār Nīshāpūrī." *Sabk-shenāsī-ye Nazm va Naṣr-e Fārsī (Bahār-e Adab)*, vol.12, no.1, 2019, pp. 85-102.
- Samāne, Sangchūlī. "Darmān bī Dardān: 'Dard' Yekī az Nou-āvarī-hā-ye 'Atṭār." *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 214-226.
- Samarqandī, Doulatshāh. *Tazkere al-Sho'arā*. Tehrān: Chāp-khāne-ye Khāvar, 1959 or 1960.
- Samīrā, Bāmskhī and Shamsī Pārsā. "Māyegān-shenāsī-ye Taṭbīqī dar Partovī-ye Bāznamāyī-ye Adabī-ye Shakhshīyat-hā-ye Aslī dar Dāstān-hā-ye Shakhshīyat-e Mehvar-e Tā'īs az Ānātūr Forāns va Sheykh Ṣan'ān az 'Atṭār." *Naqd-e Zabān va Adabīyāt-e Khārejī (Pazhūhesh-nāme-ye 'Olūm-e Ensānī)*, vol.14, no.18, 2017, pp. 29-57.
- Sārā, Zabīhī and Razī Aḥmad. "Tahlīl-e Ertebāt-e Torā-matnī 'Hamyāyesh-e Parandegī' Nūshthe-ye Pītar Sīs bā *Manteq al-Ṭayr*-e 'Atṭār." *Adabīyāt-e Fārsī ('Olūm-e Ensānī al-Zahrā)*, vol.12, no.22, 2020, pp. 85-115.
- Sayīde, Sākī Entezāmī, Farahzād Malek Moḥammad, and Ḥoseinī Kāzerūnī Seyyed-aḥmad. "Ārkey Tāyep va Mahfūm-e 'Erfānī-ye Pol dar *Muṣibat-nāme*-ye 'Atṭār." *'Erfān-e Eslāmī (Adyān va Erfān)*, vol.15, no.60, 2019, pp. 254-273.
- Shackle, Christopher. "Representation of 'Atṭār in the West and in the East: Translation of the *Manteq al-Ṭayr* and the Tale of Shaykh Ṣan'ān." In Leonard Lewisohn and Christopher Shackle (ed.), *'Atṭār and the Persian Sufi Tradition: The Art of Spiritual Flight*. London: The Institute of Ismaili Studies, 2006, pp. 168-175.
- Shād-ārām, 'Alī-rezā. "Bar-rasī-ye Seyr-e Zabān va Adabiyāt-e Fārsī dar Bālkān az Gozashte tā Konūn." *Tārīkh-e Adabīyāt-e Pāyīz va Zemestān*, vol.9, no.2, 2016, pp. 69-90.
- Shahīn, Qāsemī. "Bar-rasī-ye Jāyegāh-e Revāyat-shenav-hā va Angīze-ye Rāvī dar *Ilāhī-nāme*-ye 'Atṭār Nīshāpūrī (Bā Takyah bar Nazariyah-ye Ertebātī Rūman Yākobson)." *She'r-e Pazhūhesh (Būstān-e Adab: 'Olūm-e Ejtemā'ī va Ensānī)*, vol.11, no.3, 2019, pp. 89-104.
- Sharma, Sunil. "The Sufi-Poet-Lover as Martyr: 'Atṭār and Ḥāfīz in Persian Poetic Traditions." *Vision of Death and Meaningful Suffering in Europe and the Middle East from Antiquity to Modernity*, 2004, pp. 237-243.
- Shimmel, Annemarie. *Mystical Dimensions of Islam*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1975.
- Shīrżād, Ṭeifī and Sheykh Al-Eslāmī Moḥammad. "Naqd-e Neshāne: Ma'nā-shenākhtī-ye Dāstān-e Sheykh Ṣan'ān dar *Manteq al-Ṭayr* (Bā Takye bar Neẓām-hāt Goftmānī)." *Pazhūhesh-nāme-ye Naqd-e Adabī va Balāghat*, vol.6, no.1, 2017, pp. 33-50.
- Skalmowski, Wojciech. "Five Ghazals of 'Atṭār." *Orientalia Lovaniensia Periodica* 29, 1998, pp. 127-144.
- . "The 'Seven Valleys' of 'Atṭār." *Orientalia Lovaniensia Periodica*, vol. 23, 1992, pp. 281-302.
- Skjærvø, Prods Oktor. "Iran vi. Iranian Languages and Scripts (2) Documentation." *Encyclopaedia Iranica*. <https://iranicaonline.org/articles/iran-vi2-documentation> (accessed December 1, 2021).
- Zahrā, 'Abbāsī. "Este'āre-ye Mafhūmī 'Eshq va Khūshe-hā-ye Ma'nāyī-ye Mortabet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliyā*'-e 'Atṭār." *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e 'Erfānī (Gouhar Gūyā)*, vol.12, no.2, 2018, pp. 117-146.
- Solmāz, Ghafārī. "'Onsor-e Dard dar Āsār-e 'Atṭār (*Manteq al-Ṭayr, Muṣibat-nāme, Ilāhī-nāme, Asrār-nāme, Dīvān*)." *Pazhūhesh-e Ūrmozd*, no.52, 2020, pp. 262-277.
- Spuler, Bertold. "Persian Historiography Outside of Iran." In M. Ismail Marcinkowski (trans.), *Persian Historiography and Geography: Bertold Spuler on Major Works Produced in Iran, the Caucasus, Central Asia, India, and Early Ottoman Turkey*. Singapore: Pustaka Nasional Pte Ltd, 2003, pp. 59-69.
- Ṭāher, Khoshhāl Dast-jerdī and 'Arab Ja'farī Moḥammad-ābādī Mahdī. "Bar-rasī-ye Mashrab-e 'Erfānī-ye 'Atṭār bā Kār-baste-ye Taqābol-hā-ye Do-gāne." *Pazhūhesh-e Nāme-ye 'Erfān*, vol.11 no.21, 2019, pp. 15-33.
- Ṭarābī, Seyyed and Seyyed Ḥasan. "Kār-kard-e 'Erfān-e Namād-e Rang dar Masnavī-hā-ye 'Atṭār

- Nīshāpūrī”. *‘Erfān-e Eslāmī (Adiyān va ‘Erfān)*, vol. 15, no, 58, 2018, pp. 231-253.
- Trimingham, J Spencer. *The Sufi Order in Islam*. New York: Oxford University Press, 1971.
- Victor, Erlich. *Russian Formalism: History-Doctrine*. The Hague: Mouton Publisher, 1955.
- William L. Hanaway, Jr.. “Bāzgasht-e Adabī.” *Encyclopaedia Iranica*,
<https://iranicaonline.org/articles/bazgast-e-adabi> (accessed December 1, 2021).
- Yin, Míng-Míng and Moḥammad Reżā Maḥmūdī and ‘Abāsārī-zāde ‘Alī, “Analysis of Mystical Concepts in Khaghani's *Divan*.” *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 35, no.2, 2019, pp. 485–491.
- Yūsuf, Nīk Rūz. “Bar-rasī-ye Mafhūm-e ‘Erfānī dar She‘r-e ‘Aṭṭār.” *Kāvesh-nāme-ye Zābān va Adabīyāt-e Fārsī (Kāvesh-nāme)*, vol.9, no.17, 2008, pp. 209-247.
- Zāde, Ḥamīd Qāzī, Farāmarz Seheilī and ‘Alī Akbar Khāṣe. “Mapping Knowledge Structure of *Quran* and *Hadith* Studies in Iran: A Co-Word Analysis.” *Scientometrics Research Journal*, vol.4, no.8, 2018, pp. 101-122.
- Zahrā, ‘Abbāsī. “Este‘ārah-e Maḥfūmī ‘Eshq va Khūshah-hāy Ma‘nāyī Morṭabet bā Ān dar *Tazkere al-Ouliyā*’-e ‘Aṭṭār”, *Pazhūhesh-hā-ye Adab-e ‘Erfānī (Gouhar-e Gūyā)*, vol. 12 no. 2, 2018, pp. 117-146.
- Zarrīnkūb, Abd al-Ḥusayn. *Ṣadā-ye Bāl-e Sīmorgh: Darbāre-ye Zendeḡī va Andīshe-ye ‘Aṭṭar*. Tehrān: Enteshārāt-e Sokhan, 2007.

日本語文献

- 浅沼圭司「作者,その生と死: ロラン・バルトの所説をめぐって」『美學美術史論集』4 輯 1 号, 1984, pp. 3-38.
- イーザー, ヴォルフガング (轡田收訳) 『行為としての読書』, 岩波書店, 2005.
- 諫早庸一「ペルシア語文化圏における十二支の年始変容について--ティムール朝十二支考」『史林』9 卷 3 号 (史学研究会), 2008, pp. 496-527.
- 石川喜堂「アッターールにおける先行文献サーベイと今後の研究の展望」『イスラーム世界研究』9 卷 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター), 2016.
- 井谷鋼造「トルコ民族の活動と西アジアのモンゴル支配時代」, 永田雄三編『西アジア史 II』, 2020, pp. 99-179.
- 上阪彩香「アンサンブル学習モデルを用いた西鶴遺稿集の著者に関する検討」『行動計量学』45 卷 2 号 (日本行動計量学会), 2018, pp. 135-151.
- 上阪彩香・土山玄・孫昊・劉雪琴・李広微・入江さやか (金明哲・中村靖子編) 『文学と言語コーパスのマイニング』 (テキストアナリティクス 7) 岩波書店, 2021.
- 大形里美「現代インドネシアの詩と詩人~その 2—アブドゥル・ハディ氏 (Abdul Hadi W.M.) の詩とイスラム神秘主義文学におけるシンボリズム (アッターールの鳥の諷諭の伝播)—」『社会文化研究所紀要』74 号 (八幡大学社会文化研究所), 2014, pp. 33-67.
- 小方考『ポスト・ナラトロジーの諸相: 人工知能の時代のナラトロジーに向けて 1』新曜社, 2021.
- 川崎寿彦『ニュー・クリティシズム概論』, 研究社, 1964.
- 金明哲『テキストアナリティクスの基礎と実践』 (テキストアナリティクス 1) 岩波書店, 2021.
- グレマス, アルジルタス・ジュリアン (赤羽研三訳) 『意味について』水声社, 1992.
- 近藤信彰「ペルシア語文化圏の形成過程—ウタスの議論によせて—」近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011, pp. 1-11.
- 佐々木あや乃「ペルシア神秘主義説話文学にみる『狂人』—アッターール著『神の書 (Ilāhī-nāme)』の場合」『総合文化研究』18 号 (東京外国語大学総合文化研究所), 2015, pp. 66-81.
- 「ペルシア文学における自然描写の発生とその展開—いわゆるサブケ・ホラサーニー派の詩人を中心に」『オリエント』35 卷 2 号 (日本オリエント学会), 1992, pp.

56-71.

- ジュネット, ジェラール (花輪光・和泉涼一訳) 『物語のディスクール：方法論の試み』 書肆風の薔薇, 1985.
- 土山玄「『源氏物語』及びその補作における特徴語句抽出の試み」『情報処理学会研究報告』, 2020-CH-122 巻3号 (情報処理学会), pp. 2020, 1-5.
- 東長靖『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳—』名古屋大学出版会, 2013.
- 中俣尚己「主成分分析を用いた副詞の文体分析」『計量国語学』32巻7号 (計量国語学会), 2020, pp. 419-435.
- ハーフィズ (黒柳恒夫訳) 『ハーフィズ詩集』平凡社, 2008.
- バルト, ロラン (花輪光訳) 「作者の死」『物語の構造分析』みすず書房, 1979, pp. 79-89.
- 真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史—』北海道大学出版会, 2009, pp. 205-231.
- マン, ポール・ド (土田知則訳) 『読むことのアレゴリー：ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』岩波書店, 2012.
- 森本一夫「はじめに」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史—』北海道大学出版会, 2009, pp. i-iii.
- ヤウス, ハンス・ロベルト (轡田収訳) 「挑発としての文学史」, 『挑発としての文学史』, 岩波書店, 1999, pp. 2-76.
- 矢島洋一「非アラビア文字表記新ペルシア語」近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011, pp. 13-30.
- 山内長承『Pythonによるテキストマイニング入門』オーム社, 2018.
- 李広微・金明哲「統計分析からみた水村美苗著『続明暗』の文体模倣」『計量国語学』32巻1号 (計量国語学会), 2019, pp. 19-32.

テキストの電子データ

Ganjoor.net のデスクトップアプリケーションソフトウェアを使用した。2022年9月13日にインストールし、バージョンは2.95である。以下のリンクに、バージョン毎の修正点が詳しく明記されている。<https://dg.ganjoor.net/>

2023年3月20日現在、ブラウザ版の電子データへのリンクは以下の通りである。本論で引用した該当箇所も、別に示す。

アッタールのテキストデータ：

- 『神秘の書』 <https://ganjoor.net/attar/asrarname>
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh2/sh1> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh5/sh1> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh6/sh5> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh8/sh1> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh9/sh2> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh16/sh3> (accessed August 14, 2023).
- ‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh18/sh1> (accessed August 14, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh20/sh3> (accessed August 14, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Asrār-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/asrarname/abkhsh22/sh6> (accessed August 14, 2023).

『神の書』 <https://ganjoor.net/attar/elahiname>

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh1/sh3> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh2/sh5> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh15/sh2> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh4> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh8> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh11> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh9/sh12> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh11/sh8> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh11/sh15> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh14/sh10> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh14/sh11> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh5> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh16/sh6> (accessed August 16, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Ilāhī-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/elahiname/ebkhsh21/sh3> (accessed August 16, 2023).

『災厄の書』 <https://ganjoor.net/attar/mosibatname>

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh4/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh18/sh5> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh19/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh28/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh28/sh4> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh30/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh32/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh38/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Aṭṭār, Farīd al-Dīn. *Muṣibat-nāme*. <https://ganjoor.net/attar/mosibatname/mbkhsh39/sh1> (accessed August 15, 2023).

『鳥の言葉』 <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr>

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/bat/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/bolbol/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/bootimar/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/bootimar/sh2> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/kabk/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/koof/sh1> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/naat/sh2> (accessed August 15, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*, <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/ozr-morghan/sh16> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Manṭeq al-Ṭayr*. <https://ganjoo.net/attar/manteghotteyr/vadi-eshgh/sh1> (accessed August 15, 2023).

『アッタル詩集—ガザル』 <https://ganjoo.net/attar/divana/ghazal-attar>.

『アッタル詩集—カスィーデ』 <https://ganjoo.net/attar/divana/ghasidea>.

『アッタル詩集—タルジューウ』 <https://ganjoo.net/attar/divana/tarjeeat-attar>.

『四行詩集』 <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname>

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb24/sh17> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb25/sh23> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb26/sh22> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb33/sh3> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb33/sh38> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb42/sh1> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb43/sh8> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb47/sh12> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb48/sh26> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mokhtār-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/mokhtarname/bb49/sh1> (accessed August 18, 2023).

『忠言の書』 <https://ganjoo.net/attar/pandname>

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh10> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh22> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh25> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh26> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh28> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjoo.net/attar/pandname/sh31> (accessed August 18, 2023).

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh39> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh43> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh59> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh60> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh63> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh72> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh76> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Pand-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/pandname/sh79> (accessed August 18, 2023).

『驚異の顯現』 <https://ganjooor.net/attar/ma>

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh2> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh20> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh26> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh27> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh31> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh51> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh53> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh62> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh73> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Mazhar al-‘Ajāyeb*. <https://ganjooor.net/attar/ma/sh76> (accessed August 18, 2023).

『ヒーローの書』 <https://ganjooor.net/attar/hylajname>

‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh7> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh8> (accessed August 15, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh12> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh13> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh21> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh22> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh34> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh37> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh62> (accessed August 18, 2023).
‘Atṭār, Farīd al-Dīn. *Hilāj-nāme*. <https://ganjooor.net/attar/hylajname/sh68> (accessed August 18, 2023).

サナーイーのテキストデータ

『真理の園』 <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe>

Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh04/sh2> (accessed August 18, 2023).
Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh04/sh4> (accessed August 18, 2023).
Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh1> (accessed August 18, 2023).
Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh9> (accessed August 18, 2023).
Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh10> (accessed August 18, 2023).
Sanā’ī, Majdūd ibn Ādam. *Ḥadīqeh al-Ḥaqīq*. <https://ganjooor.net/sanaee/hadighe/hdgh05/sh11> (accessed August 18, 2023).

ルーミーのテキストデータ

『精神的マスナヴィー』 <https://ganjooor.net/moulavi/masnavi>

Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma’navī*. <https://ganjooor.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh72> (accessed August 18, 2023).

- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*.
<https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh142> (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*.
<https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh143> (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*.
<https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar1/sh146> (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*. <https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar2/sh26>
 (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*. <https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar4/sh47>
 (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*. <https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar4/sh135>
 (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*. <https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar5/sh76>
 (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*. <https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh5>
 (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*.
<https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh115> (accessed August 18, 2023).
- Al-Rūmī, Muḥammad al Balkhī. *Maṣnavī Ma'navī*.
<https://ganjoo.net/moulavi/masnavi/daftar6/sh122> (accessed August 18, 2023).

アンヴァリーのテキストデータ

- 『アンヴァリー詩集—ガザル』 <https://ganjoo.net/anvari/divan-anvari/ghazala>
- 『アンヴァリー詩集—カスィーデ』 <https://ganjoo.net/anvari/divan-anvari/ghaside-anvari>
- 『アンヴァリー詩集—マクタア』 <https://ganjoo.net/anvari/divan-anvari/ghetea>
- 『アンヴァリー詩集—ロバーイー』 <https://ganjoo.net/anvari/divan-anvari/robaeea>

ハーカーニーのテキストデータ

- 『ハーカーニー詩集—ガザル』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/ghazalkh>
- 『ハーカーニー詩集—カスィーデ』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/ghasidekh>
- 『ハーカーニー詩集—ケトウエ』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/ghetekh>
- 『ハーカーニー詩集—タルキーブ』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/tarkibatkh>
- 『ハーカーニー詩集—タルジーウ』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/tarjeeatkh>
- 『ハーカーニー詩集—ロバーイー』 <https://ganjoo.net/khaghani/divankh/robaeekh>

謝辞

本論文が完成するまでに様々な人にお世話になりました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

入学時、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科に在籍していた期間、博士課程研究指導認定退学後も指導していただいた東長靖先生に真っ先にお礼を申し上げます。筆者の至らぬ箇所も多くあり、多大な時間をチュートリアル、論文執筆の指導に費やしていただいたことに申し訳なくもありつつ、心から感謝しております。博士論文提出に至ることができたこと、東長先生のおかげです。副指導教員としてゼミを通じて助言をくださった、稲葉穰先生、帯谷知可先生、小杉泰先生にも合わせて感謝を申し上げます。

また、同志社大学の「一神教世界」への論文提出を誘って下さった、先輩でもある山本直輝先生、推薦を書いてくださり、助言をくださった中田考先生へもお礼を申し上げたいです。

入学直後から今まで、ペルシア語百科全書研究会の皆様には、読書会を通じてペルシア語をご教示していただきました。過去から現在まで、色々迷惑をおかけすることも多かったと思いますが、ペルシア語で書かれたアッタールのテキストを曲がりなりにも扱えるのは皆様のおかげです。特に、この研究会に誘って下さった、小倉智史先生、今日まで色々ご教示くださっている、杉山雅樹先生と塩野崎信也先生にはお礼を申し上げます。

井谷鋼造先生と久保一之先生には授業を通して、お世話になりました。背景知識や、単語一つ一つのペルシア語の当時持っていた意味についてご解説してくださり、ペルシア語に対する解像度を上げることができました。ペルシア語に親しみを持ちつつ、今まで、楽しく研究を続けることができたのも両氏のおかげです。

モジュタバール・ザルヴァーニー先生はイラン滞在時にお世話になりました。研究のご助言のみではなく、精神的に辛い時、ご飯をご馳走して下さったり、楽しいお話をしてくださったりして、イランでの生活が楽になりました。

この論文を執筆するにあたり、意見交換やソフトウェアの共同開発を行った、ハサン・ホスラヴィー先生にも感謝申し上げます。普段、ガズヴィーンで教鞭を取っているにも関わらず、筆者がテヘラーンに赴いた際、訪ねてきてくださり、食事をご馳走して下さりありがとうございました。勿論、この研究で使っているソフトウェアが無事完成したことに対しても多大なお礼を申し上げます。

本人の希望により匿名としますが、京都大学大学院所属のある研究者の方には、論文の方向性を定める助言や進路に関して多くの援助をいただきました。改めて、お礼を申し上げます。また、研究とプライベート問わず、お世話になりました院生室の皆様にも感謝いたします。

最後に、筆者が大学生の時に、研究の道に進むきっかけを作ってくくださった飯島昇藏先生、博士論文執筆に関してご理解を示してくださった株式会社 RUTILEA の皆様にもお礼を申し上げます。